

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

# 平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 平沢 I 遺跡発掘調査報告書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

# 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000カ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に残していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の基に開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の平沢Ⅰ遺跡は、久慈市街地南東の海岸段丘に立地し、発掘調査に伴って貝類や琥珀等の多様な遺物とともに縄文時代の住居跡や落とし穴、奈良・平安時代の住居跡等が発見されました。当地方における集落跡の貴重な資料であります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査および報告書作成にご援助・ご協力を賜りました久慈市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表わします。

昭和63年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中 村 直

# 例 言

1. 本報告書は、勤労者屋外体育施設建設に伴う平沢 I 遺跡の緊急発掘調査の結果を収録したものである。
2. 遺跡は、岩手県久慈市長内町28-105-1 に所在する。
3. 調査は、久慈市と岩手県教育委員会事務局文化課との協議に基づいて、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが調査1・2区を担当した。その後、久慈市教育委員会が調査3区を調査している。
4. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はJ G 30-0282、遺跡略号はH S Iである。
5. 野外調査の期間と調査面積・担当者は次のとおりである。

(調査1・2区)

期 間：昭和62年4月15日～7月31日

調査面積：3,272㎡

担 当 者：三浦謙一・平井 進・佐藤嘉広

(調査3区)

期 間：昭和62年12月18日～昭和63年1月18日

調査面積：4,200㎡

担 当 者：久慈市教育委員会

6. 室内整理の期間と担当者は次のとおりである。

期 間：昭和62年10月1日～昭和63年3月31日

担 当 者：三浦謙一・佐藤嘉広

7. 下記の項目の分析・鑑定は次の個人・機関に委託した（敬称略）。

(1)火山灰……………三辻 利一（奈良教育大学）

(2)貝 類……………佐藤 正彦（陸前高田市立博物館）  
熊谷 賢（東北学院大学学生）

(3)石材鑑定……………佐藤 二郎（地質コンサルタント）

(4)樹種鑑定……………早坂松次郎（(社)岩手県木炭協会）

8. 野外調査や整理・報告書の作成には次の機関や個人に協力・指導・助言をいただいた（敬称略）。

久慈市民生部市民課・久慈市教育委員会・久慈市開発公社・面代民義・千葉啓蔵（ともに久慈市教育委員会）・斉藤邦雄（久慈湊小学校）・高橋信雄（岩手県立博物館）・高橋亜貴子（滝沢村教育委員会）・調査に従事いただいた坂下千松氏をはじめとする久慈市の方々。

9. 本書の担当は次のとおりである。

〈執筆〉 昆野 靖 (I)・三浦謙一 (II～IV・V-5・6・VI～VIII)・佐藤嘉広 (V-1～4)

〈編集・校正〉 三浦謙一・佐藤嘉広

〈作図〉 吉田律子・晴山なるみ・瀬川幸子・浅沼幸子・小山田幸子・川原幸子・川村順子・  
佐藤由美子・三上幸子・浅沼育子

〈遺物撮影〉 岩渕希士

10. 調査成果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

11. 調査の記録や遺物は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

12. 挿図凡例はII-3 (9ページ) に記載している。

# 本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 調査方法	
1. 野外調査	4
2. 室内の整理	6
3. 凡例	8
III. 遺跡の位置と地形・地質	
1. 位置	10
2. 地形	12
3. 地質	13
IV. 検出遺構と遺構内の出土遺物	
1. 竪穴住居跡	14
2. 住居状遺構	76
3. ピット	76
4. 落とし穴	94
5. 焼土遺構	94
6. 炭窯	114
V. 遺構内外の出土遺物とまとめ(1)	
1. 縄文土器	115
2. 弥生土器	117
3. 剥片石器	129
4. 石斧・礫石器	146
5. 土製品	178
6. 石製品	180
VI. まとめ(2)—遺構—	

1. 住居跡	181
(1) 縄文時代	181
(2) 古代	182
2. 住居状遺構	189
3. ピット	189
4. 落とし穴	191
VII. まとめ(3)—遺物—	
1. 古代の土器	193
(1) 土師器甕	193
(2) 土師器坏	197
(3) その他の土師器	198
(4) 須恵器	198
(5) 分類群の帰属と時期	198
2. 琥珀	200
3. 金属製品	200
4. 自然遺物	202
(1) 貝類	202
(2) 植物遺体	203
VIII. まとめ(4)—遺跡—	
1. 周辺の遺跡	203
2. 遺跡のまとめ	206
付篇	
平沢 I 遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 三辻利一	212
平沢 I 遺跡出土貝類の鑑定 佐藤正彦・熊谷 賢	215

# 挿図・表目次

第 1 図 遺跡位置図	1
第 2 図 調査区範囲とグリッド配置図	5

第 3 図 挿図凡例	9
第 4 図 地形図	11

第5図	地形断面図	12
第6図	遺構配置図	15
第7図	遺構配置略図と遺構名	17
第8図	C III-1 住居跡実測図・出土遺物	18
第9図	C III-2 住居跡実測図	19
第10図	C III-2 住居跡出土遺物	20
第11図	D III-1 住居跡実測図・出土遺物(1)	21
第12図	D III-1 住居跡出土遺物(2)	22
第13図	D III-2 住居跡実測図	23
第14図	D III-2 住居跡出土遺物	24
第15図	D III-3 住居跡実測図(1)	25
第16図	D III-3 住居跡実測図(2)	26
第17図	D III-3 住居跡実測図(3)	27
第18図	D III-3 住居跡出土遺物(1)	28
第19図	D III-3 住居跡出土遺物(2)	29
第20図	D III-4 住居跡実測図(1)	30
第21図	D III-4 住居跡実測図(2)	31
第22図	D III-4 住居跡出土遺物	31
第23図	D III-5 住居跡実測図	32
第24図	D III-5 住居跡出土遺物	33
第25図	D III-6 住居跡実測図(1)	34
第26図	D III-6 住居跡実測図(2)	35
第27図	D III-6 住居跡出土遺物	35
第28図	E III-1 住居跡実測図・出土遺物	36
第29図	F III-1 住居跡実測図・出土遺物	37
第30図	F III-2 住居跡実測図	39
第31図	F III-2 住居跡出土遺物	40
第32図	F III-3 住居跡実測図	42
第33図	F III-3 住居跡出土遺物	43
第34図	F III-4 住居跡実測図	45
第35図	F III-4 住居跡出土遺物	46
第36図	G II-1 住居跡実測図(1)	48
第37図	G II-1 住居跡実測図(2)	49
第38図	G II-1 住居跡実測図(3)	50
第39図	G II-1 住居跡出土遺物(1)	51
第40図	G II-1 住居跡出土遺物(2)	52
第41図	G II-1 住居跡出土遺物(3)	53
第42図	G II-2 住居跡実測図	54
第43図	G II-3 住居跡実測図	55
第44図	G II-3 住居跡出土遺物	56
第45図	G III-1 ~ G III-3 住居跡実測図	59

第46図	G III-1 住居跡出土遺物	60
第47図	G III-2 住居跡出土遺物(1)	61
第48図	G III-2 住居跡出土遺物(2)	62
第49図	G III-2 住居跡出土遺物(3)	63
第50図	G III-2 住居跡出土遺物(4)	64
第51図	G III-2 住居跡出土遺物(5)	65
第52図	G III-4 住居跡実測図	67
第53図	G III-4 住居跡出土遺物	68
第54図	H I-1 住居跡実測図・出土遺物	69
第55図	H II-1 住居跡実測図	71
第56図	H II-1 住居跡出土遺物	72
第57図	H VII-1 住居跡実測図(1)	73
第58図	H VII-1 住居跡実測図(2)	74
第59図	H II-2 住居状遺構実測図	76
第60図~第64図	ピット実測図(1)~(5)	85
第65図~第69図	ピット出土遺物(1)~(5)	90
第70図~第78図	落とし穴(1)~(9)	101
第79図	落とし穴(10)	111
第80図	落とし穴出土遺物(1)	112
第81図	落とし穴出土遺物(2)	113
第82図	焼土遺構実測図	114
第83図	焼土遺構出土遺物	115
第84図	G II-151炭窯実測図	116
第85図~第94図	縄文土器(1)~(10)	118
第95図	縄文土器(11)・弥生土器	128
第96図~第99図	剝片石器(1)~(4)	131
第100図	剝片石器(5)・礫石器(1)	135
第101図	剝片石器(6)・礫石器(2)	136
第102~第110図	剝片石器(7)~(15)	137
第111図~第138図	礫石器(3)~(30)	150
第139図	土製品	179
第140図	石製品	180

図1	遺構・遺物の整理	7
図2	石器器種別別石材百分比	178
図3	住居跡床面積別布図	182
図4	古代住居跡床面積別分布の概念図	184
図5	古代住居跡主軸方向分布図	185
図6	カマド位置概念図	187
図7	落とし穴概念図	191
図8	落とし穴長軸長分布図	192

図9	土師器壺口径・器高分布図	194
図10	土師器集成図(1)	195
図11	土師器集成図(2)	196
図12	土師器坏I群口径・器高分布図	198
図13	土師器集成図(3)	199
図14	縄文時代遺構分布図	208
図15	古代遺構分布図	209

表1	遺構種類別分類番号	4
表2	検出遺構数	8
表3	石材・産地一覧表	149
表4	縄文時代住居跡一覧表	181
表5	古代住居跡一覧表	183
表6	所属時期別ピット一覧表	189
表7	琥珀出土遺構一覧表	201
表8	周辺の遺跡一覧表	204

## 図版目次

図版1	空中写真(1)	223
図版2	空中写真(2)	224
図版3	C III-1・C III-2 住居跡	225
図版4	C III-1・C III-2・D III-1 住居跡	226
図版5	D III-1・D III-2 住居跡	227
図版6	D III-2・D III-3 住居跡	228
図版7	D III-3 住居跡	229
図版8	D III-3・D III-4 住居跡	230
図版9	D III-4 住居跡	231
図版10	D III-5 住居跡	232
図版11	D III-6 住居跡	233
図版12	D III-6・E III-1・F III-1 住居跡	234
図版13	F III-1・F III-2 住居跡	235
図版14	F III-2・F III-3 住居跡	236
図版15	F III-3 住居跡	237
図版16	F III-4・G II-1 住居跡	238
図版17	G II-1 住居跡	239
図版18	G II-1 住居跡	240
図版19	G II-2・G II-3 住居跡	241
図版20	G II-3・G III-1～G III-3 住居跡	242
図版21	G III-4・H I-1 住居跡	243
図版22	H I-1・H II-1 住居跡	244
図版23	H II-1 住居跡	245
図版24	H VII-1 住居跡	246
図版25	H II-2 住居状遺構・ピット(1)	247
図版26～図版33	ピット(2)～(9)	248

図版34	ピット(10)・落とし穴(1)	256
図版35～図版42	落とし穴(2)～(9)	257
図版43	落とし穴(10)・焼土遺構	265
図版44	G II-151炭窯	266
図版45	遺構分布状況	267
図版46	遺構内出土縄文土器(1)	268
図版47	遺構内出土縄文土器(2)	269
図版48	遺構内出土剥片石器(1)	270
図版49	遺構内出土剥片石器(2)・礫石器(1)	271
図版50～図版52	遺構内出土礫石器(2)～(4)	272
図版53	遺構内出土礫石器(5)・遺構内外出土製品(1)	275
図版54	遺構内外出土土製品(2)・石製品(1)	276
図版55～図版59	遺構内出土土師器(1)～(5)	277
図版60	遺構内出土土師器(6)・遺構内外出土製品(3)・石製品(2)	282
図版61	遺構内出土琥珀	283
図版62	遺構内出土鉄製品	284
図版63	遺構内出土貝類	285
図版64～図版67	遺構外出土縄文土器(1)～(4)	286
図版68	遺構外出土縄文土器(5)・弥生土器	290
図版69	遺構外出土剥片石器(1)	291
図版70	遺構外出土剥片石器(2)	292
図版71	遺構外出土剥片石器(3)・礫石器(1)	293
図版72～図版77	遺構外出土剥片石器(4)～(9)	294
図版78～図版89	遺構外出土礫石器(2)～(13)	300





〔 5万分の1地形図は、久慈・陸中野田・陸中大野・陸中関  
 を使用。星印が本遺跡。1～17の遺跡名は204ページを参照。 〕

第1図 遺跡位置図

## I 調査に至る経過

久慈市勤労者屋外体育施設建設事業は、雇用促進事業団が勤労者の福祉増進をはかる目的で第3種公認グラウンドとなる多目的グラウンド・テニスコート・管理棟・芝広場等の施設を建設し、さらに久慈市が関連施設を建設する事業である。建設予定地は平沢工業団地の一部75,758㎡であり、昭和61年に事業計画され、昭和64年に完成の予定である。

平沢工業団地内における埋蔵文化財については、すでに平沢工業団地造成計画が立案された昭和55年から久慈市教育委員会が現地確認調査を行って関係機関と協議を重ね、さらに平沢遺跡として範囲確認調査を実施している。調査の概要は以下のとおりである。

遺跡の所在地 久慈市長内町28-105、35-114、35-123

調査対象面積 市道東側 59,000㎡、西側70,000㎡、計129,000㎡

試掘調査面積 市道東側 14,931㎡、西側17,742㎡、計 32,673㎡

発掘調査期間 昭和57年2月15日～5月31日

調査の結果、市道の東側からは縄文時代および奈良・平安時代の土器・石器等が尾根上に集中して出土し、南側の尾根付近に遺構が存在することが推定された。また、市道西側の調査ではほぼ全域に縄文時代から平安時代の遺物が大量に出土したほか、住居跡と思われる十数カ所の凹地が検出されるなど、複合する大規模な集落が存在することが明らかになった。

昭和61年に至って、久慈市は建設予定地内の遺跡の取り扱いについて県教育委員会文化課の指導を得て、やむをえず破壊される多目的グラウンドのメインスタンド予定地部分に限って発掘調査を実施することとした。発掘調査については、昭和61年1月14日付け「市民第960号」により久慈市長から県教育長あての発掘調査の依頼があり、これをうけて県教育委員会文化課は昭和62年1月19・20日に現地確認調査を実施し、昭和62年1月27日付け「教文第538号」により県教育長から久慈市長あてに発掘調査の承諾について回答した。

これにより、県教育委員会文化課は平沢I遺跡の発掘調査を昭和62年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に編入し、久慈地区土地開発公社の委託を受けた埋蔵文化財センターが昭和62年4月1日付け契約により着手することとなった。

なお、室内整理および報告書作成については、久慈市の依頼により久慈市教育委員会が発掘調査を実施したテニスコートおよび駐車場予定地内の調査結果を含めることとし、久慈地区土地開発公社および久慈市の委託を受け、昭和63年2月1日付け契約によって報告書を刊行することになったものである。

## II 調査方法

### 1. 野外調査

#### (1) 座標と区画

おおよその調査範囲は、幅が東西15m、南北180mである。測量座標の原点は久慈市が測量会社に依頼して設定した国土座標を使用した。調査範囲をカバーする30×30mの大区画を設定し、それぞれの大区画は3×3mの小区画(グリッド)100個を小単位としている。グリッドは粗掘りや遺物取り上げのときの最小単位に使用している。

区画の呼称は次のようになる。大区画は北から南へAからのアルファベット、西から東へIからのローマ数字をつけ、A I区・A II区のように組み合わせて呼ぶ。小区画は、北から南へa～jのアルファベット小文字、西から東へ0～9のアラビア数字をつけ、大区画と組み合わせて、A I a 0、A II b 1ほかのようになる。I区の西へVIII区・IX区を設定したのは久慈市教育委員会が調査した分も含めて報告することになったためである。

測量のための座標は、南へはS 1・S 2・・・、東へはE 1・E 2・・・のように基準線を離れるにしたがって1m単位の数字が増えていく。なお、座標軸線は真北に対して12°30′東へ偏している。

#### (2) 粗掘りと遺構検出

久慈市教育委員会が以前にほぼ全域におよぶ試掘調査を実施し、遺構分布図を作成している。区画の設定のあと、その際のトレンチで遺構の再確認を行った。その結果、トイレ用地である北の狭い区画をのぞいては調査区全体に古代の住居跡をはじめとする遺構の広がりが予想できた。

そこで、まず全体の表土を除去するためにユンボを使用し、その後人力によって検出面までの掘り下げを行っている。

#### (3) 遺構の名称

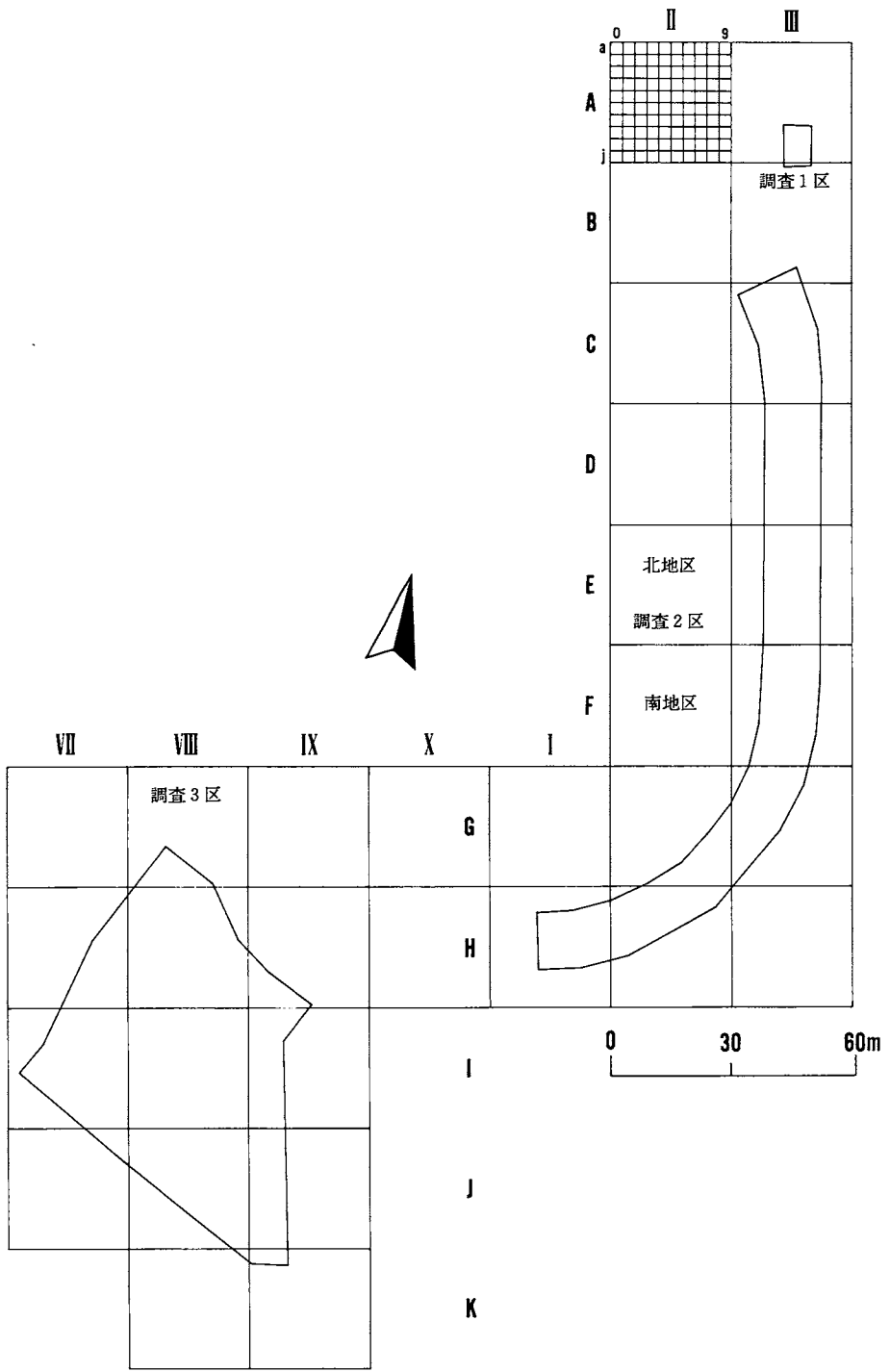
検出した遺構の名称は、大区画名の次に遺構種類別の分類番号・種類名を併用している(表1)。遺構名の具体例は、C III-1住居跡・D III-51ピット・E III-101落とし穴などようになる。遺構が2つ以上の区画にかかるときは北端が含まれる大区画名をつけたが、厳密なものではない。

遺構の種類	分類番号
竪穴住居跡 住居状遺構	1～50
ピット	51～100
落とし穴	101～150
炭窯	151～200
焼土遺構	201～250

表1 遺構種類別分類番号

#### (4) 精査

精査は、調査員の指示のもとに女性作業員を中心にして進めた。住居跡・住居状遺構は4分



第2図 調査区範囲とグリッド配置図

法、ピット・落とし穴・焼土遺構は2分法を採用している。ここでは平安時代の住居跡を例にあげ、その手順を簡単に説明する。

まず、四分と土層観察のためのベルトを設定する。各分割区は北西を起点にQ1～Q4と時計と逆回りに呼び、遺物取り上げの際の単位にしている。各区ごとに埋土を掘り下げて床面まで検出し、次に土層断面図を作成する。写真撮影用に一本のベルトを残し、撮影後はそれも掘りあげる。次いで、壁溝や柱穴・貯蔵穴・カマドほかの細部を精査する。そして、平面実測や全景写真など必要な記録を終えたあとは、カマドの断ち割り・貼り床の除去・掘り方面まで掘り下げるなどの二次的な細部調査を記録を取りながら進め、終了とした。遺物は各区ごとに、埋土上部・中部・下部、埋土・床面直上・床面・掘り方埋土で取り上げ、付属施設からのものはその部分名と住居埋土と同様の出土層位を記入して取り上げた。

#### (5) 実測と写真

実測：実測経験をもつ女性協力員が4名いたため、2人一組とし、2組を編成した。簡易の遣り方法を採用し、各遺構とも1/20の縮尺を原則に、一部は小縮尺を使っている。

写真：住居跡を例にあげると、土層断面・第1次全景・細部写真・カマドや炉の断ち割りほか第2次の細部写真、掘り方の土層断面と全景（第2次全景）など、情報の質と量に応じて、できるかぎり写真による記録をしてきた。フィルムとカメラは、モノクロームが35mm判と6cm×7cm判各1台、カラースライドが35mm1台を使用した。調査の最後には空中写真も撮影している。

#### (6) 文章による記録

図面と写真による記録とともに、当センターで作成しているField Cardを使用した文章による記録を重視した。これは、調査時に観察した事実を記載し、図面や写真からだけでは得ることのできない情報を記録するためである。変形B4判の大ききで、1項目1カード方式をとり、事実記載の多くはその記録をもとにしている。作業の具体的な内容については業務日誌へ人数とともに毎日記録している。

#### (7) 広報活動

調査が一定程度進み、遺跡のもつ内容が具体的に明らかになった段階で、現地における説明会を開催した。調査の成果をできるかぎり広く公開し、啓蒙活動の一環としておこなうものである。遺跡の所在する市町村の住民への広報活動はもちろん、関係各機関や報道機関へ連絡し、参加を呼びかけている。7月17日に約70名の参加を得、遺構と遺物の公開・展示を行った。

## 2. 室内の整理

### (1) 作業内容

野外の調査時はもちろん、室内での仕事も調査員と臨時職員との1つのチームの上に成り立っている。おおよそ次のように分担している。

調査員：全体的計画の立案・作業の指示・判断・遺物観察・原稿執筆など

臨時職員：実測・トレース・拓影・割り付け・写真撮影・作図・作表など

(2) 遺構と遺物はおおよそ図1に示したような手順で整理している。

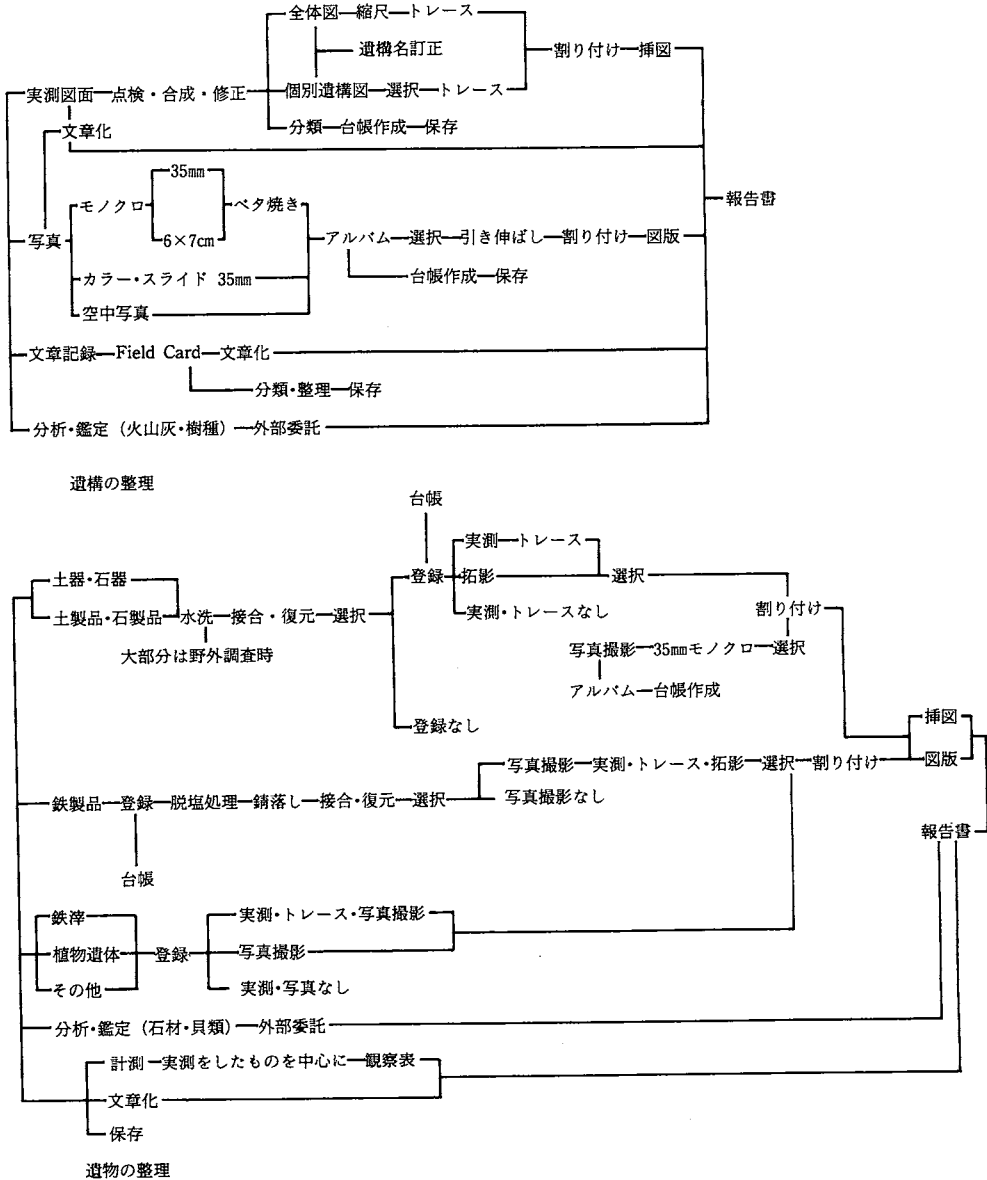


図1 遺構・遺物の整理

### 3. 凡例

#### (1) 全体的なこと

a. 本書は表2に掲載した遺構とそれからの出土遺物、遺構外からの出土遺物を収録している。

b. 遺構は、本文・挿図・図版とも種類別に北から順に掲載している。

c. 掲載遺物は、遺構内外や種類に関係なく、掲載順に1からの通し番号をつけている。遺物図版に掲載した遺物番号はそれに対応する。

#### (2) 遺構・遺物に関すること

##### a. 住居跡の記載

1棟にみえる住居跡でも、カマドや柱穴配置・ピット・貼り床ほかの状態や在り方から重複関係にある2棟が含まれていることを知る場合がある。時間的な先後関係が認められる場合、新期をHⅧ-1 a住居跡、HⅧ-1 b住居跡のようにアルファベット小文字によって区別し、集計上は2棟に数えている。

##### b. 掘り方埋土=床(底)構築土について

古代の住居跡や大型ピットの床や底を観察すると、いわゆる地山そのものではなく、いったん遺構の底を掘り下げたあとに別な土を入れて埋め戻し、床や底を作っていることを知ることができる。本書は、その土を掘り方埋土=床(底)構築土と記載している。性状は、Ⅲ層火山灰の大小塊をマトリックスにし、黒褐色や黒色土ほかの大小塊を混入している。

c. 上記の床(底)は広義には貼り床(底)である。しかし、貼り床といった場合、ある床面の上に別な床面を構築することをさす狭義の意味もある。本書が貼り床と使う場合は後者の意味においてである。

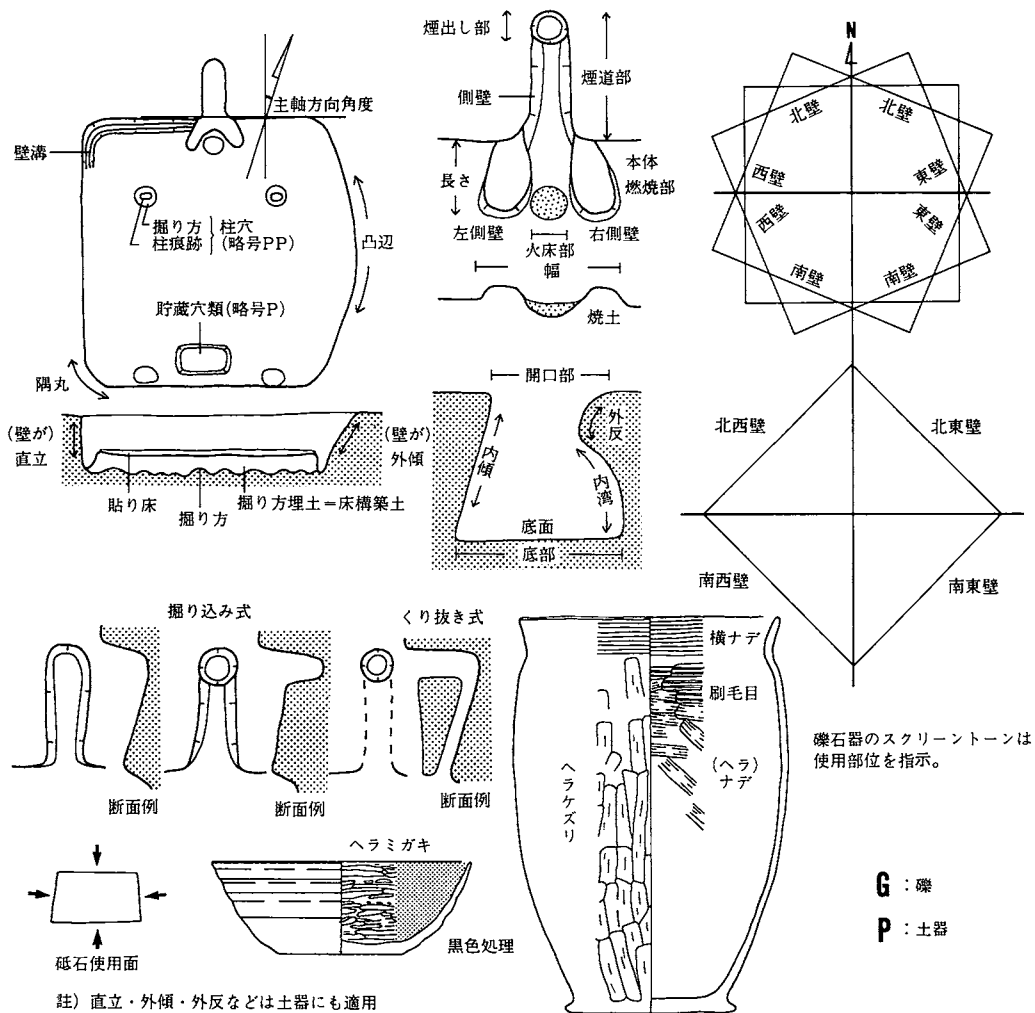
d. 住居跡主軸方向は、カマドが設置された辺に直行する線が北あるいは南から偏する角度を東西へ90°の範囲内で示している。使用方位は真北である。複数のカマドが設置され時間的な前後関係がある場合は、それにあう主軸方向をもつことになる。住居跡主軸方向とは言うものの、カマドの向く方向を強く意識したもので、ほぼカマド方向といってもよい。なお、住居跡の平面形の歪が著しい場合はある程度修正を加えて計測している。

e. 本文や土層注記表に記載した火山灰・汚れ火山灰は、断りがながざりはⅢ層起源である。Ⅲ層は地山である。

##### f. 遺物の掲載の仕方

遺構の種類	時代など	検出数	合計
竪穴住居跡	縄文	8	24棟
	古墳～奈良	1	
	奈良	1	
	平安	14	
住居状遺構	平安	1	1棟
ピット	縄文	25	40基
	古代	10	
	不明	5	
落とし穴	縄文	38	38基
炭 窯	現代	1	1基
焼土遺構	不明	12	12基
合計			116

表2 検出遺構数



第3図 挿図凡例

古代の遺構とともに縄文時代の各種遺構があり、縄文時代の遺物は広範囲にわたって出土している。古代の住居跡から出土した縄文時代や弥生時代の遺物（推定も含める）は個別の遺構出土遺物には含めず、遺構外出土遺物と一緒に掲載しているが、住居跡でも縄文時代のもの・ピット・落とし穴ほかの遺構から出土した場合は個別の出土遺物として掲載している。

g. 遺構のうち、落とし穴は表形式で記載するとともに、形状を記号化している（「まとめ」の項参照）。

h. 土層注記表と住居跡一覧表には、十和田a火山灰をTo-a、白頭山-苫小牧火山灰を



B-Tmと略号で記載している。

i. 遺物の記載のなかで剥片類としたものは、剥片を主とし、碎片や石核を少数含む。

j. 土色や遺物の色調は、『新版 標準土色帳』農林水産技術事務局監修による。

(3) 挿図に関すること

a. 縮尺

遺構：1/40と1/60を主に、一部が任意縮尺。挿図右下またはスケールで表示。

遺物：2/3と1/2・1/3・任意縮尺。挿図右下またはスケールで表示。

b. 遺物観察表中の石材の産地は表3に一括して掲載している。

c. 遺構の部位名称や表記方法の一部を第3図に示している。

(4) 図版に関すること

a. 縮尺

遺構：すべて任意縮尺。

遺物：2/3・1/2・1/3・1/4を主に、一部が原寸大と2倍。図版右下に表示。

b. 遺物図版は種類・器種を優先し、個別の遺構とは無関係に組んでいる。

### III 遺跡の位置と地形・地質

#### 1. 位置

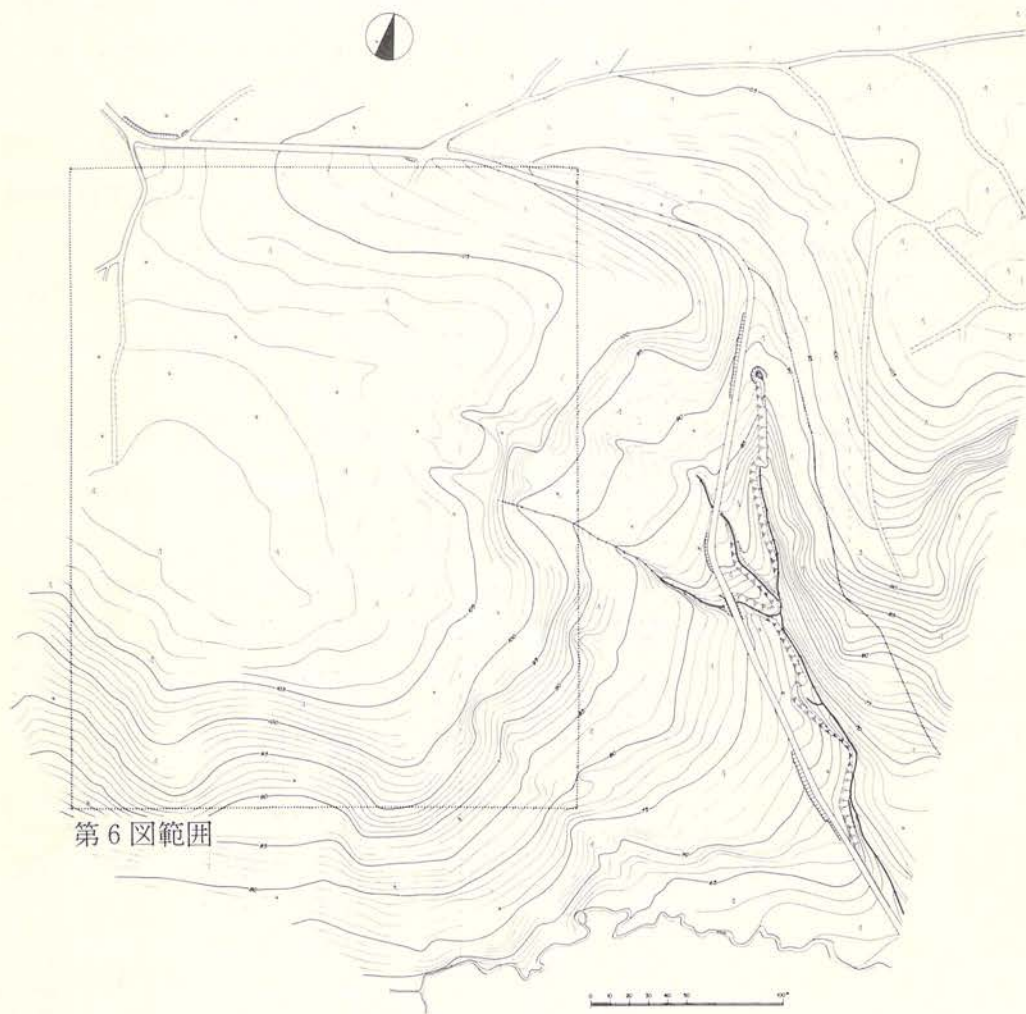
遺跡の所在する岩手県久慈市は北上山地北東縁に位置し、東が太平洋に面する三陸海岸北部の市で、面積が325.66km<sup>2</sup>、人口が約39,000人である。

県北部にありながら、沿岸という立地条件のために同緯度の岩手県内陸部に比べるとやや温暖な気候であり、1月の平均気温は-1.1°C、8月の平均気温は22.4°C、11月から3月の降水量は70mmである。夏は海から湿った風が吹き、ヤマセとしてしばしば冷害をもたらしている。

三陸海岸はリアス式海岸として知られ、陸中海岸国立公園として指定されている。久慈市はその北玄関である。昭和59年には三陸鉄道が開通し、沿岸部は一本の鉄道で結ばれている。産業面では、久慈港が県内一の水揚げ量を誇り、最近是国家石油地下備蓄基地としての開発が久慈湾北側の半崎地区で始まっているほか、久慈湾総合開発計画にも着手し、沿岸北部の拠点都市として発展しつつある。特産品には古くから知られた琥珀や小久慈焼などがある。

平沢I遺跡への道順は次のようになる。JR久慈線あるいは三陸鉄道の久慈駅で降りて市街地へ向かうと、中央部を走る国道45号に出る。そこを左折し、長内川にかかる長内橋をわたって久慈港の方へ向かう。高台がすぐ右手に現われ、しばらく行くと「東北電力長内中継所」という標識を見ることができる。それを右折し、林の木立のなかの急傾斜の細い坂道を上がって

いくと平坦な面が広がり、小さな集落が現われる。市街地の形成される低地が標高 5 m であるから、100m ほど上ることになる。その先に広がる原野が平沢 I 遺跡である。もともとは山林であったところであり、昭和59年の大火で一面が焼けたために原野になっている。開析谷を挟んだ遺跡の東側にも同じような面が広がり、平沢 II 遺跡としていられていたが、工業団地として



第4図 地形図

開発されている。遺跡は北緯40°10'37"、東経141°47'40" に位置し、20万分の1地勢図は「八戸」、5万分の1地形図は「久慈」に含まれている。

## 2. 地形

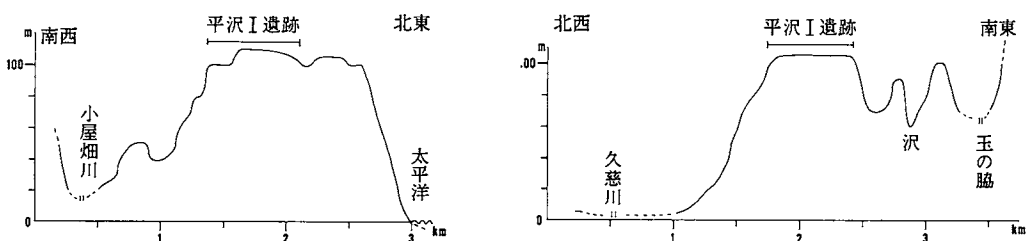
代表的なリアス式海岸として有名な三陸海岸は岩手県沿岸のほぼ中間に位置する宮古市を境にし、北と南とはその様相を異にする。南が沈降性であるのに対し、北は隆起性であり、海岸線の入り組み方はきわめて対象的である。それは沈降あるいは隆起の量の違いとともに形成年代の違いや海岸段丘の発達度の違いである。海岸段丘が発達しているのは北側である。

久慈市周辺の海岸段丘の研究は石田ほか(1969)、照井(1982)などがある。また貝塚(1985)は「宮古・久慈間は、リアスよりも、海食によってできた高さ100mをこえる海食崖」が続き、「段の数は5段以上」としている。

石田ほか(1969)は、高位から順に九戸・白前・種市・玉川の4段に分類している。九戸段丘は80~280m以上で、北上山地北縁部とその東麓にそって分布する。白前段丘は九戸段丘の外縁部に発達し、海岸方向へ傾斜している。いくつかの小規模な段丘の集合と考えられているが、全域的な細分は困難であるとされている。種市段丘は主に久慈の北方の海岸線にそって帯状に発達する15~40m前後のものである。玉川段丘は主に久慈以南に分布し、10~70m程度の谷中扇状地状に似たやや急傾斜の平坦面をもつ。

照井(1982)は、水無段丘(220~280m)、九戸段丘(150~220m)、蒼前平段丘(130~150m)、麦生段丘(90~110m)、有家段丘(60~90m)、八木礫層(50m)、種市段丘(15~40m)、平内段丘(10m)、宿戸段丘(3m)の9段に分類している。

久慈付近は久慈川・長内川が久慈湾に注ぎ、段丘を開析している。本遺跡が立地する面は、中川ほかの白前段丘、照井の麦生段丘に相当する海成段丘である。同じような面は久慈湾沿いの模式地である麦生や半崎に主に見られるほか、二子・小袖に小規模に認められる(第1図)。第5図は2.5万分の1地形図をもとに作成した地形断面図である。



第5図 地形断面図

遺跡の標高は100～108mであり、今回、当センターが調査した区域は標高が105～107m、遺構が検出されなかった調査1区を除いた調査2区は東西幅14m、南北長170mで、遺跡の主体部の一部を調査している。ほぼ中間のE区とF区の間には浅い開析谷が東西に走るが、記述の便宜上、北側を北地区、南を南地区とよぶことがある。久慈市教育委員会が調査した区域は標高78～107mである。そこは調査3区とする。

### 3. 地質

層位は次のようになる。

I層：暗褐色・黒褐色土（10Y R3/3）。表土。層厚15～30cm。

II層：褐色～黄褐色土（10Y R4/6～5/6）。下位のIII層の風化帯。層厚20～40cm。

III層：明黄褐色土（10Y R6/6）。八戸火山灰上部に相当すると考えられる層。層厚未確認。

以上の層は調査区全域に広がる。I・II層は遺物包含層でもある。とくにII層は縄文時代前期と後期の包含層で、古代の遺物は原則的には包含しない。遺構との切り合いは、縄文時代前期前葉に分類できるE III-1住居跡や平安時代のD III-5住居跡ほかに切られていることが観察できる。この層は、上部（黄褐色～褐色）と下部（黄褐色卓越）とに分けることができるが、分布を全域で追求することができないため、一部地域の遺物の取り上げに使っているだけである。

久慈市の北西80kmにある十和田火山起源の火山灰のうち、八戸火山灰・南部浮石・中振浮石・十和田a火山灰が久慈地方で存在を確認されている。本遺跡で観察できる火山灰について次に記載する。

地山になる八戸火山灰は12,700±260 B.P.の放射性炭素年代測定結果がある（大池,1964）。南部浮石と中振浮石は存在を確認できない。ただ中振浮石に該当する可能性がある資料を採取し、奈良教育大学三辻利一氏に鑑定を依頼したところ、十和田系火山灰という結果がでている（付篇）。この火山灰はD III-51ピットの最上部とE III区のII層中に限定した分布を示すものである。

古代の遺構の埋土中に見られる火山灰には色調と性状の異なる2種類がある。ひとつは色調が灰白色（N8/1・7.5Y R8/1～7/2周辺）で極細粒から粗粒まで認められる浮石質のものである。他のひとつは黄褐色（2.5Y 5/3周辺）の極細粒の火山灰である。調査時は、目による識別であることを考慮し、色調と性状を記録するとともにできるだけ多くの資料を採取してきた。調査終了後、分析を依頼した結果、観察と分析の結果が矛盾しないことを確かめることができ、本書では前者を十和田a火山灰、後者を白頭山一苦小牧火山灰として記載する。

町田ほか（1984）は十和田a火山灰を東北地方のほぼ全域に分布する広域火山灰としてとらえ、秋田県にみられる大湯浮石と同一のものであるとしている。岩手県北部だけでなく、青森・

秋田の各県の古代の遺構との関連が強い。先の町田ほかは「おそらくA.D915年。考古学的資料からはA.D870年よりも新しく、934年よりも古い」としているが、考古学プロパーの年代観をさらに追求する必要がある。白頭山—苦小牧火山灰は十和田a火山灰の上位に位置するもので、中国と北朝鮮の国境にある白頭山を起源とするものである。年代については十和田a火山灰と同様のことがいえるが、泥炭層の観察から十和田a火山灰との時間的間隔をせいぜい100年とする見解がある(町田ほか, 1984)。本遺跡における両者の火山灰の個別の遺構における在り方については後述する。

## IV. 検出遺構と遺構内出土の遺物

### 1. 竪穴住居跡

#### C III区

#### C III—1 住居跡

遺構 (第8図. 図版3・4)

検出状況・重複関係 C III—58ピット(縄文時代)の埋土上部に認められる貼り床と埋甕・一部に残る壁から存在を知ることができる。西側と北側が調査区域外へ出ているため、一部が調査できたにすぎない。

平面形 わずかに残る東壁からは円形基調と推定できる以外は不明である。 規模・床面積 不明

埋土 貼り床の上位に認められる暗褐色土や黒褐色土が埋土の一部になる。

壁の状態 低い。東壁がわずかに確認できる。 壁高 2cm 壁溝 調査できた範囲には検出されていない。

床面 最大層厚7cmの貼り床である。

柱穴・炉 調査できた範囲には検出されていない。

その他 埋甕が推定される南壁に寄った位置に存在する。深鉢の胴部下部～底部を直立させている。

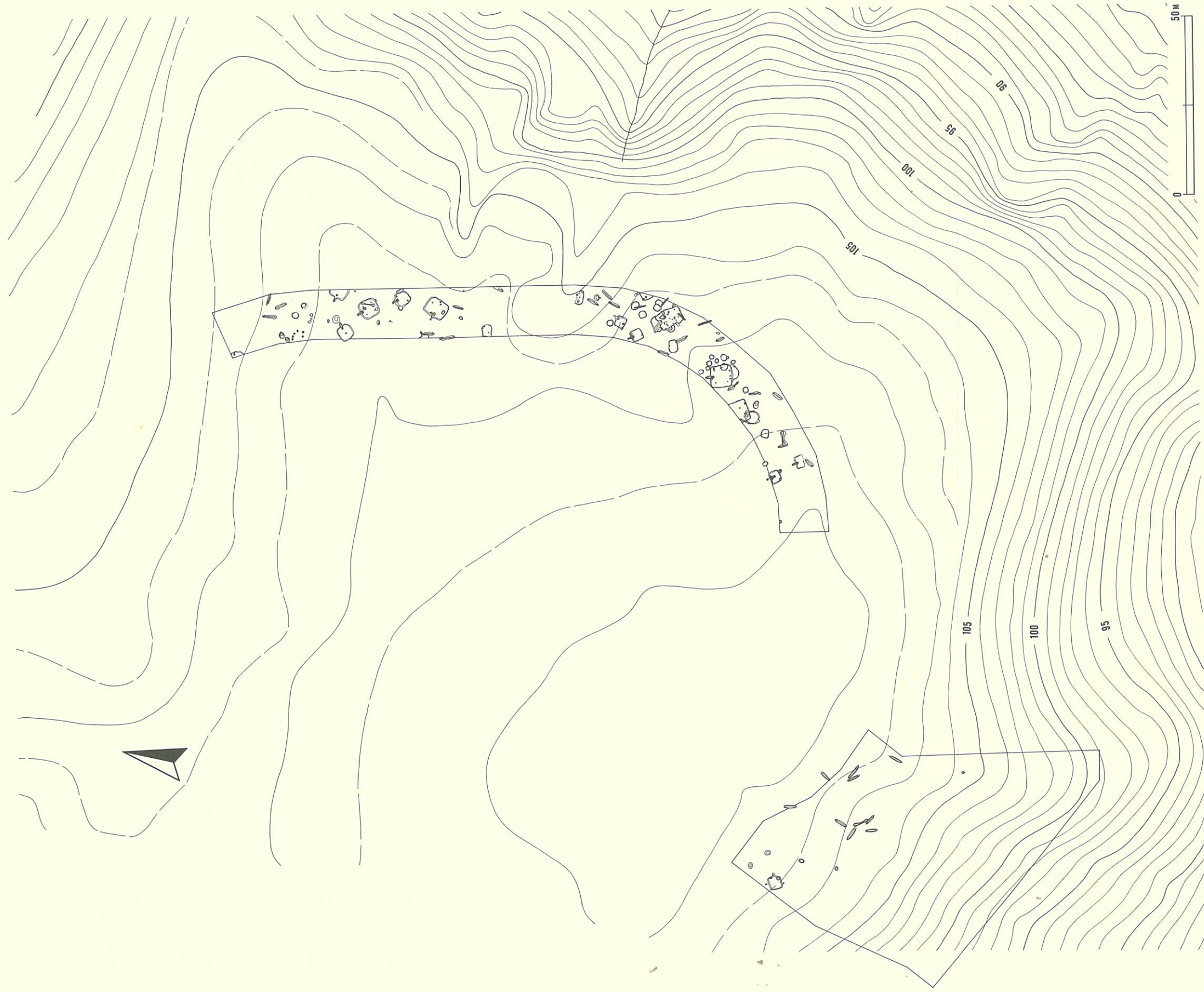
遺物 (第8図. 図版47)

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と剝片類が埋土から出土している。

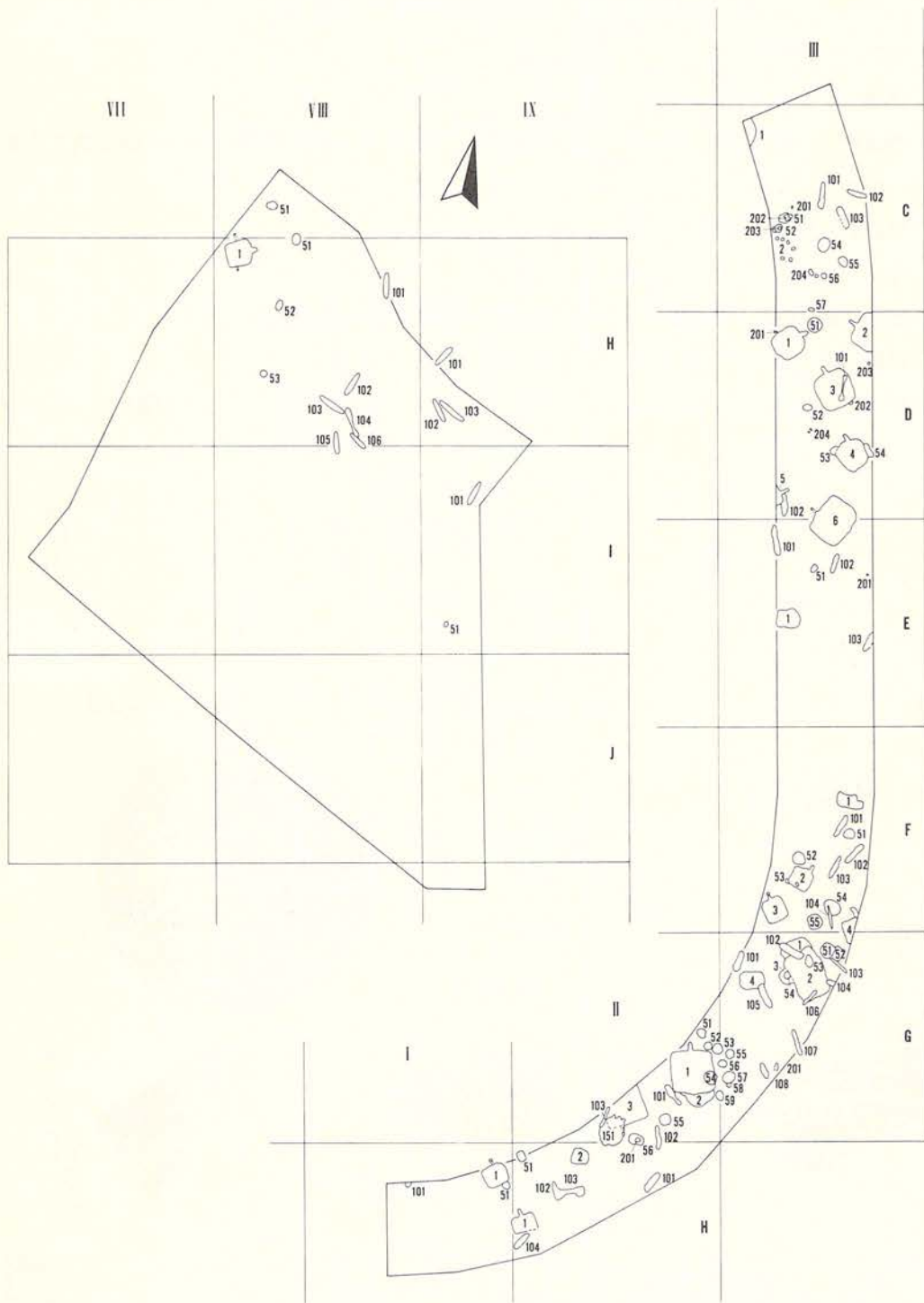
土器 1は埋甕である。2～4をはじめ、すべてII群に分類できる。

剝片類 4点出土している。

まとめ・遺構の時期



第 6 図 遺構配置図



第7図 遺構配置略図と遺構名

出土遺物から、縄文時代後期前葉（縄文土器Ⅱ群期）に分類できる。

### CⅢ-2 住居跡

遺構（第9図、図版3・4）

検出状況・重複関係 壁を欠くが、炉と柱穴・床面から住居跡と判断した。西側は調査区域外へ伸びている。

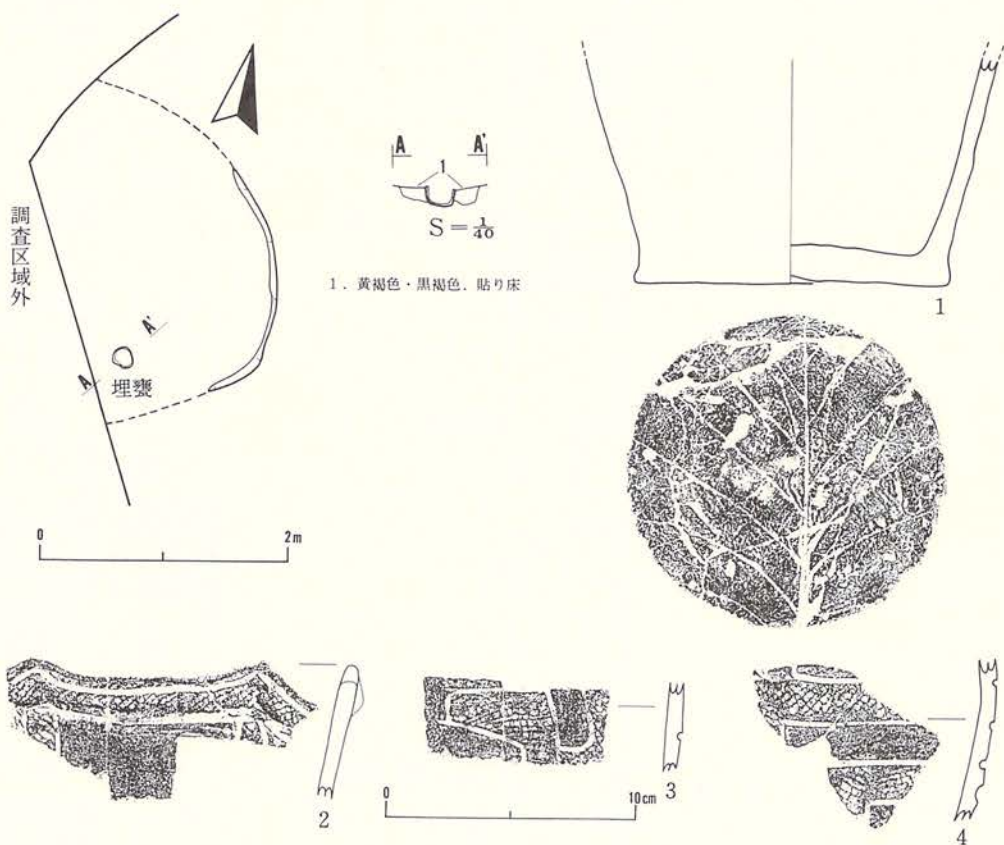
平面形・規模・床面積 不明

埋土 Ⅱ層である褐色土に覆われている。

壁の状態・壁高 壁は検出されていない。壁溝 調査できた範囲には存在しない。

床面 硬い面が柱穴や柱穴状ピットの内側に広がっている。

柱穴 いくつかある柱穴状ピットのなかで、pp 1～pp 3が形態や深度・位置から、柱穴と



No	地点・層位	器種	部位	器形/外面	内面	胎土	分類	備考	図版
1	埋土	深鉢	底部	ミガキ。木葉底	ミガキ		Ⅱ-3		
2	埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部肥厚Lr・沈線	ミガキ		Ⅱ-1-(1)		47
3	埋土	深鉢	胴部	Lr・沈線	ミガキ		Ⅱ-2-(2)		47
4	埋土	深鉢	胴部	Lr・沈線	ミガキ		Ⅱ-2-(2)		47

第8図 CⅢ-1 住居跡実測図・出土遺物



して適切であると考えられる。他は形態や深度などからみて柱穴とは考えられない。

炉 pp 3の北に存在する。細礫混じりの粘土質シルトと細砂礫で作られ、中央が浅くくぼんでいる。焼土の厚さは6cm。

遺物 (第10図. 図版46)

出土状況 床面直上・床面・埋土から、土器と剥片類が出土している。

土器 5～7は本遺構に共伴する。他もすべてII群に分類できる縄文土器である。

剥片類 5点出土している。

まとめ・遺構の時期

出土遺物から、縄文時代後期前葉(縄文土器II群期)に分類できる。

D III区

D III-1 住居跡

遺構 (第11図. 図版4・5)

検出状況・重複関係 重複する遺構はない。

平面形 隅丸凸辺正方形 規模 4.2m×4.3m 床面積 12.9㎡ 主軸方向 N-47°-E

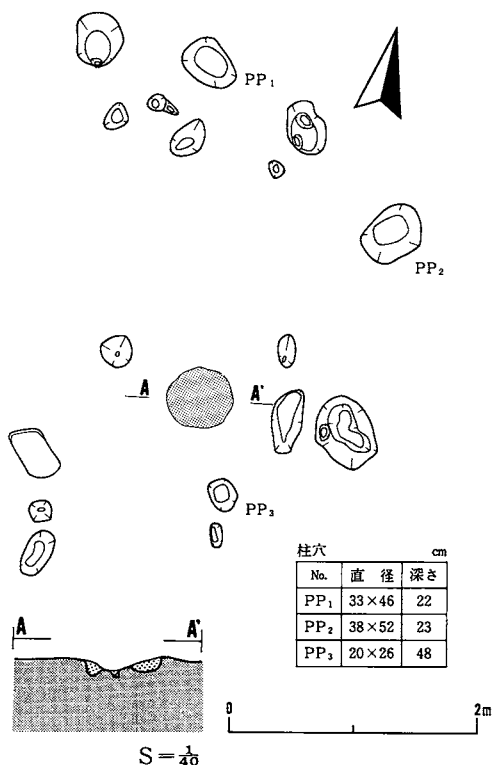
埋土 木根による攪乱が多くみられる。壁際や埋土下部は褐色土～暗褐色土、中部はクロボク、最上部は黒褐色土が占める。北東壁や南東壁寄りの埋土下部は十和田a火山灰の小塊が散在するが、少量である。

壁の状態 直立して立ち上がり、上半はいちじるしく外傾。壁高 37～51cm 壁溝 北西壁際の中央部と南西壁際のわずかに南東壁寄りの部分に存在するが、短い。

床面 全体に軟らかい。掘り方 南西壁寄りのをぞいては三壁からある程度の幅をもって伴うが、中央部には達していない。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北東壁中央 本体 残存状態は不良である。地山を削り出して作った両側壁の一部が壁から連続して認められるほかは崩壊・転落した小型のシルト岩・礫岩・安山岩が火山灰起源の薄い土とともに火床部の上を覆っている。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。構築材である最大粒径43cmの安山岩・シルト岩5個が落ち込んで



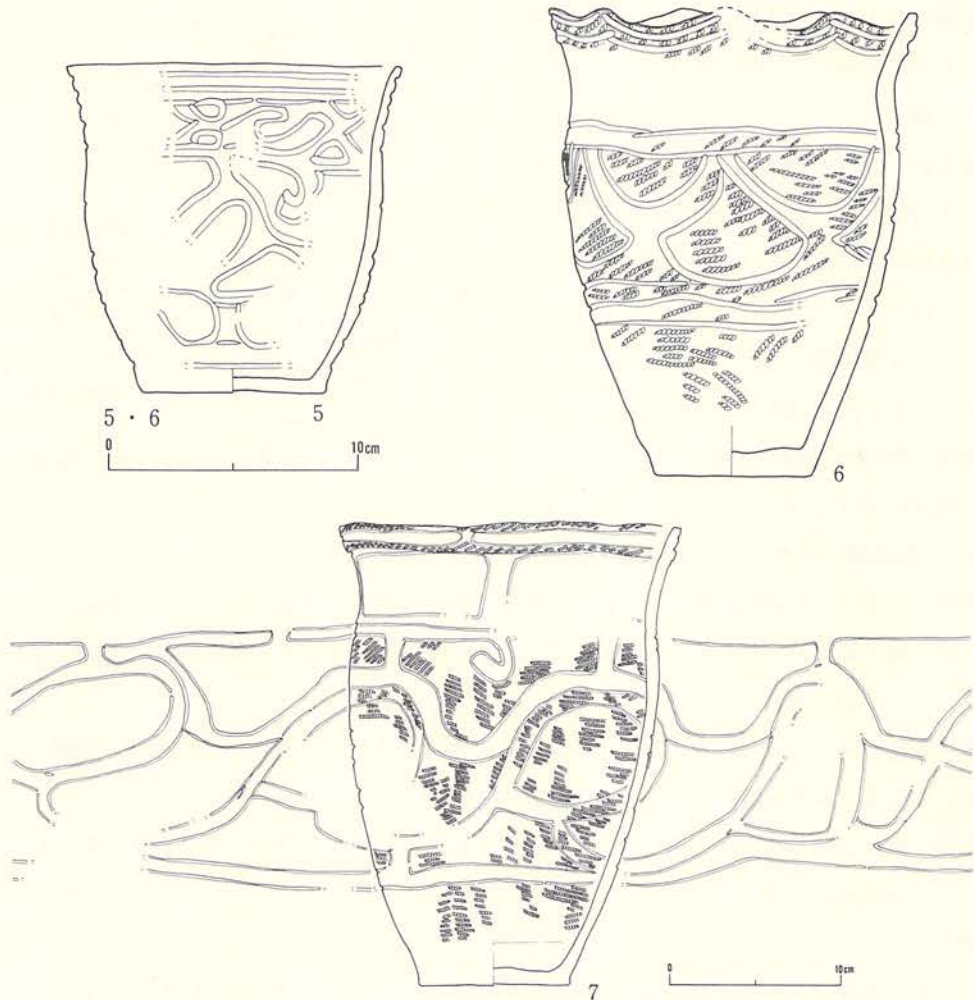
第9図 C III-2 住居跡実測図

いる。底面はいくぶん急傾斜で上がって先端部に達し、煙出し部は施設を伴わない。

**付属施設** P1が南隅をめぐり込むように存在する。平面形は楕円形気味で、焼土の小塊や焼土粒が多量に混じった褐色の汚れ火灰が埋土である。P2はカマドの左脇にある。平面形が不整形の小ピットで、埋土である汚れ火山灰の上部には焼土を多く含む。

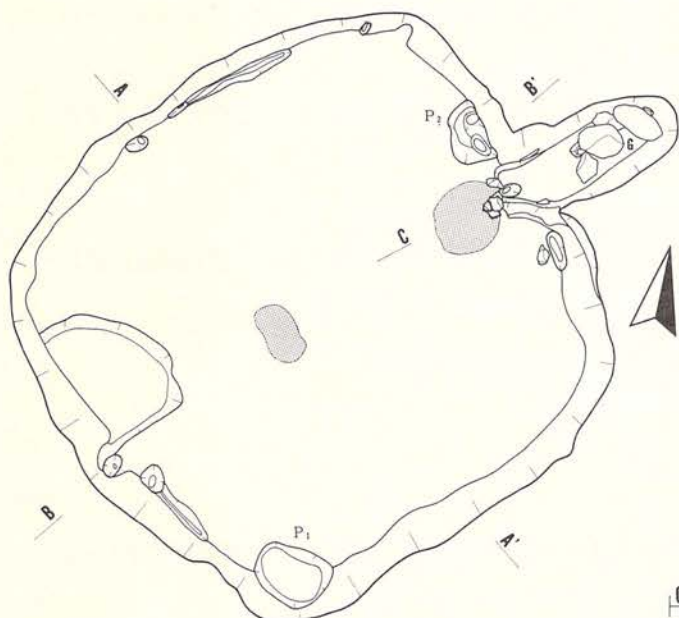
住居中央からわずかに南西壁に寄った床面の27×50cmの範囲が焼けている。炉に類する機能をもつものであろう。

**遺物** (第11図・第12図・図版56)



No	地点・層位	器種	部位	器形/外面	内面	胎土	分類	備考	図版
5	床面直上	深鉢	口～底	ミガキ・沈線文。欠損部分多く、文様単位等不明	ミガキ		II群		46
6	床面直上	深鉢	口～底	口縁部8波状。LR→沈線→一部磨消。5単位	ミガキ		II群		46
7	床面	深鉢	口～底	LR→沈線→磨消。口縁部文様5単位	ミガキ		II群		46

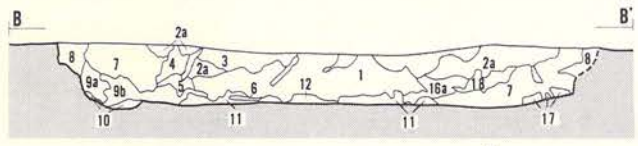
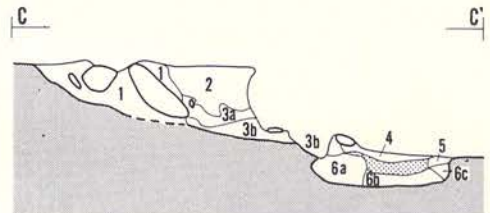
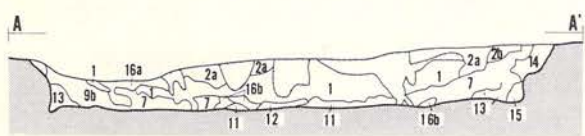
第10図 CⅢ-2 住居跡出土遺物



壁高		cm			
壁		北西	南西	南東	北東
高さ		40	51	43	37

カマド						cm	
本 体 (部)	長さ	—	煙 道 部	長さ	139		
	幅	—		幅	68		
	焼 径	52×53	深さ	35			
	土 厚さ	6					

1. 黒色、クロボク
- 2・3. 黒褐色。
4. 暗褐色。
5. 黒褐色。T<sub>e</sub>-aを少量含む。
6. にぶい黄褐色。T<sub>e</sub>-aをやや多く含む。
- 7・8. 暗褐色・褐色。T<sub>e</sub>-aが点在。
- 9a. にぶい黄褐色・褐色。
- 9b. 褐色・暗褐色。
10. にぶい黄褐色。汚れ火山灰、焼土と炭化物を少量含む。
11. にぶい黄褐色。
12. 黒褐色。
13. 褐色。T<sub>e</sub>-aの小塊を含む。
14. 暗褐色。
15. 黄褐色。
16. 褐色・黒色。
17. 褐色。カマド起源の焼土が多く混入。
18. 暗褐色。



- 1・2. 暗褐色。
- 3a. 黄褐色。汚れ火山灰
- 3b. 褐色。汚れ火山灰
4. 黄褐色～褐色。火山灰起源、焼土を含む。
5. 黄褐色。
- 6a～6c. 黄褐色。住居掘り方の一部

S = 1/46

ピット			
No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	cm
開口部径	47×60	30×50	
深さ	21	11	



8



9

0 10cm

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
8	カマド	土師器甕	ナデ	ナデ	木葉底	ナデ	ナデ	ナデ	11.2	11.6	8.4	S 2	56
9	埋土上部	土師器甕	—	ヘラナデ	木葉底	—	ヘラナデ	ナデ	—	(10.5)	6.7		

第11図 DⅢ-1住居跡実測図・出土遺物(1)

**出土状況** 埋土中・下部を中心に、埋土・カマド本体・煙道部・掘り方埋土から出土している。土器と石器・土製品・琥珀・剥片類がある。

**土器** II群に分類できる縄文土器が破片数で土師器を上回っている。土師器甕8はS2である。坏は出土していない。

**琥珀** 破片3点2.22gが床面と煙道部から出土している。

**その他** 剥片石器は石鏃、ピエス・エスキュー、使用痕のある剥片がある。礫石器は打製石斧がある。土製品は円盤状土製品が2点である。剥片類は49点と多い。

### まとめ・遺構の時期

出土遺物と住居形式から、平安時代に分類できる。

### DIII-2 住居跡

### 遺構 (第13図. 図版5・6)

**検出状況・重複関係** 多くの部分が調査区域外にあり、全体の約1/3が調査できたにすぎない。

重複する遺構はない。

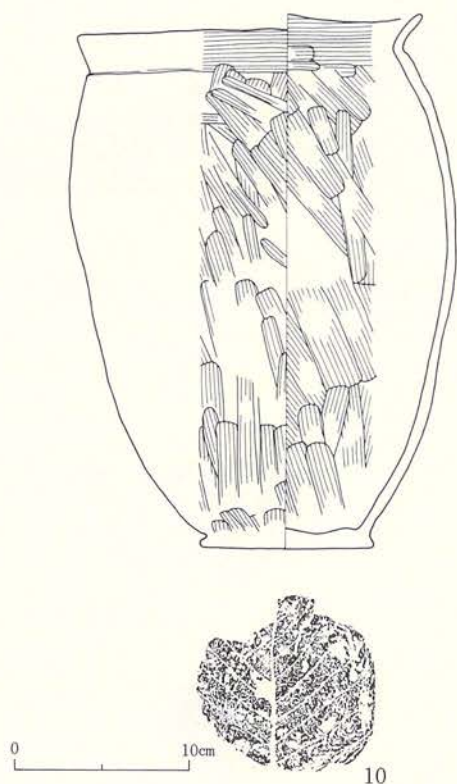
**平面形** 隅丸方形と推定 **規模** 西壁で4.7mを測る。 **床面積** 不明 **主軸方向** N-73°-W

**埋土** 黒色土が卓越するが、壁寄りや下部は褐色土や暗褐色土が占める。2種類の火山灰が認められ、白頭山-苦小牧火山灰は最大粒径120mmの大塊ほか黒色土中に含まれ、十和田a火山灰は大塊としてその下位の褐色土~暗褐色土に多く含まれる。

**壁の状態** 外傾 **壁高** 59・69cm **壁溝** 調査できた範囲では、カマド部分を除いてほぼ存在し、内部には円形の小ピットを数多く伴う。

**床面** 全体に硬く締っている。掘り方壁寄りの狭い範囲に伴う。

**柱穴** 調査できた範囲には検出されなかつ



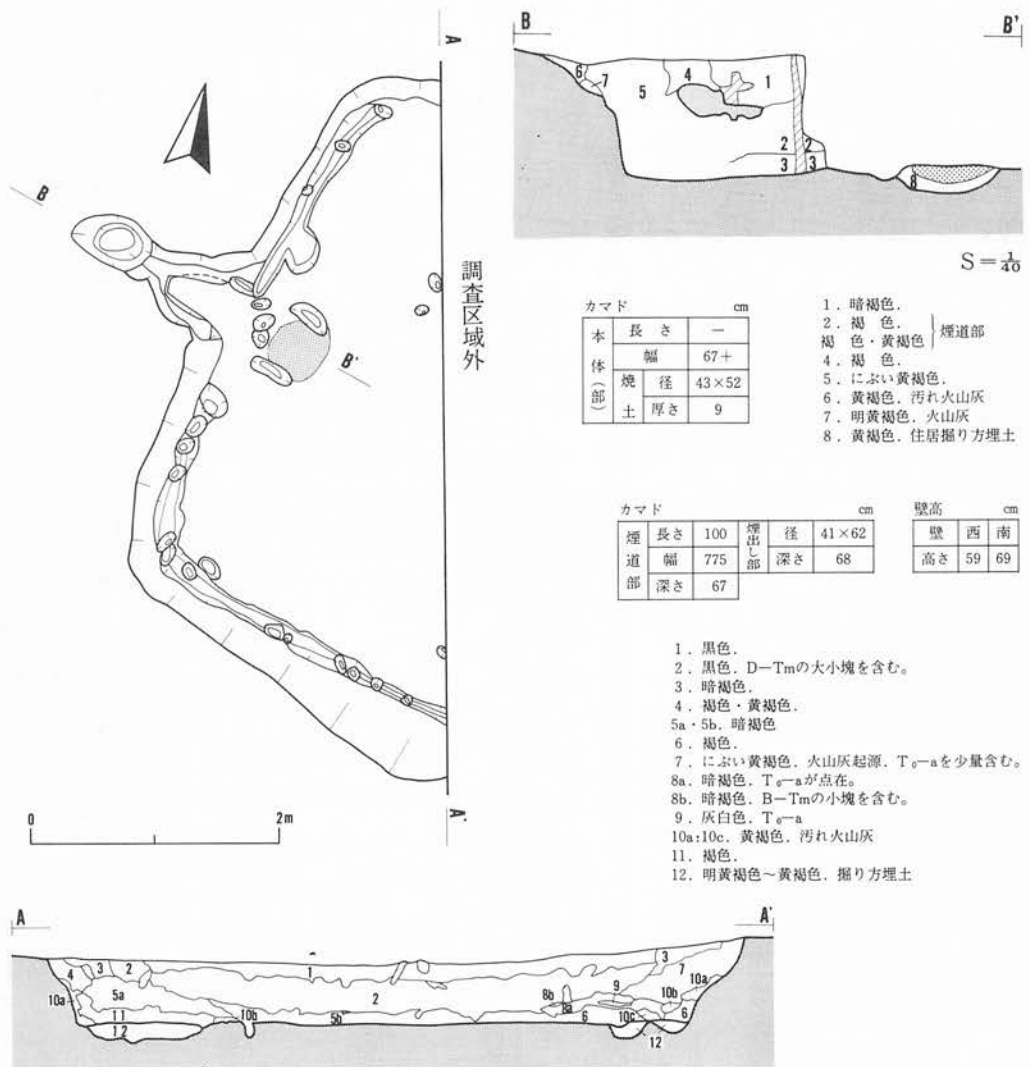
No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
10	カマド	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉底	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ	20.7	30.8	10.0	L2b	56

第12図 DIII-1 住居跡出土遺物(2)

た。

カマド：位置 西壁中央 本体 残存状態はよくない。火床部と側壁の一部を構成する礫の抜き取り痕が火床部を挟んだ両側に1個ずつ残るだけである。火灰部はよく焼けている。 煙道部・煙出し部 煙道部と煙出し部との境はくりぬき式になる。煙道部全体がくりぬき式であった痕跡は埋土には認められず、FⅢ-3住居跡同様、くりぬき式と掘り込み式との中間形と考えておく。底面はほぼ水平で、煙出し部は円形のピットになっている。

遺物 (第14図. 図版56)



第13図 DⅢ-2住居跡実測図

出土状況 埋土を中心に、カマド・煙道部から出土しているが少量である。土器・琥珀・土製品・剥片類がある。

土器 土師器甕とII群に分類できる縄文土器が出土している。

琥珀 1点0.05gの破片が床面から出土している。

その他 土製品は耳栓である。剥片類は2点である。

#### まとめ・遺構の時期

出土遺物は少ないが、平安時代に分類できる。

#### D III-3 住居跡

遺構 (第15図～第17図, 図版6～8)

検出状況・重複関係 重複するD III-101落とし穴を切っている。

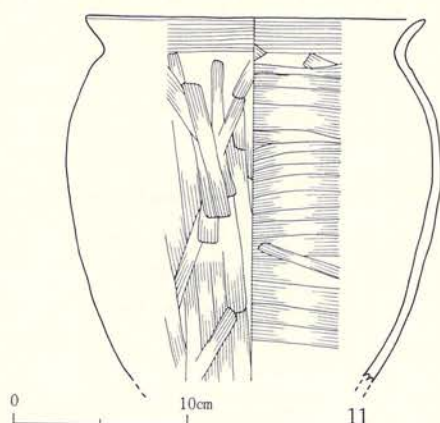
平面形 隅丸正方形 規模 5.3×5.4m 床面積 20.9㎡ 主軸方向 N-41°-W

埋土 にぶい黄褐色土～暗褐色土は壁寄りや埋土中部・床面直上、黒褐色土は埋土上部や下部を主に占める。十和田a火山灰は埋土中部に層状に含まれるが、断続的である。最大層厚は40mmである。

壁の状態 外傾 壁高 52～59cm 壁溝 浅い壁溝が、カマドが設置された北西壁の大部分や南隅付近、北東壁の一部をのぞいて存在し、円形の小ピットを内部のところどころに伴う。幅は9～30cm、深さは2～7cmである。

床面 全体に軟らかい。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 pp 1～pp 4の4個である。四隅から1.2m前後内側へ寄った位置に存在する。掘り方の平面形は凸辺隅丸長方形である。



カマド：位置 北西壁中央 本体 残存状態は比較的良好である。地山を削り出した両側壁と側壁や天井部を構成する礫の一部が残存する。天井部を作る礫は粒径が48・75cmと長大な亜円礫である。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はかなり急傾斜で上がってゆき、煙出し部近くで水平になる。焼けた粘土が煙道部の一部に小規模に認められる。掘り方とは明確

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
11	カマド	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	19.6	(20.8)	—	L 2 a	56

第14図 D III-2 住居跡出土遺物

に識別できるもので、右側壁を作っていたものであろう。

**焼失** 大量の炭化材が一部に焼土を伴いながら床面直上から床面にかけて分布する。材は中央部からおおむね放射状にみられ、壁際にあるものは下位に褐色土を伴って高い位置にある。材は径が7～12cm前後のものが主体である。焼土は中央部付近に小規模に広がるだけである。草本類はみられない。

**付属施設** P1が南隅に寄った位置にある。平面形は楕円形で、深度は小さい。

**遺物** (第18図・第19図、図版55・56・60)

**出土状況** 埋土上部～下部を中心に、カマド・床面・床面直上・煙道部・柱穴から出土している。土器と石器・琥珀・石製品・鉄製品・剥片類がある。

**土器** 土師器は甕と坏が出土している。12～17の坏はI群B類である。甕はL1b、甕は口縁部の小破片1点がある。縄文土器はII群とともに少量のI群が出土している。

**琥珀** 破片4点1.71gが埋土から出土している。

**鉄製品** 23は断面形が円形の棒状のもので、両端は欠けている。器種は明らかでない。

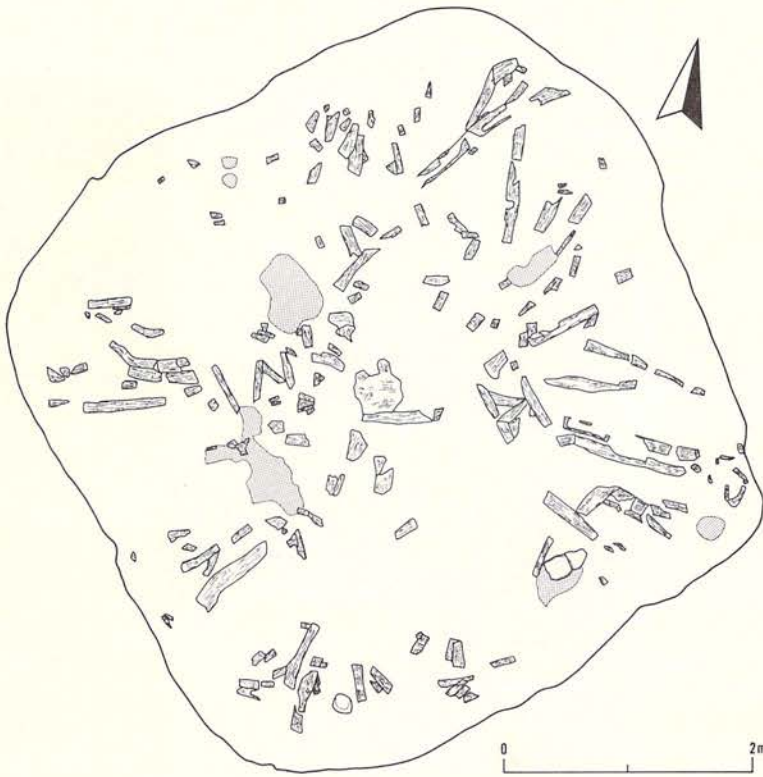
**その他** 19は砥石である。剥片石器は石鏃と不定形石器があり、剥片類は27点である。

**まとめと遺構の時期**

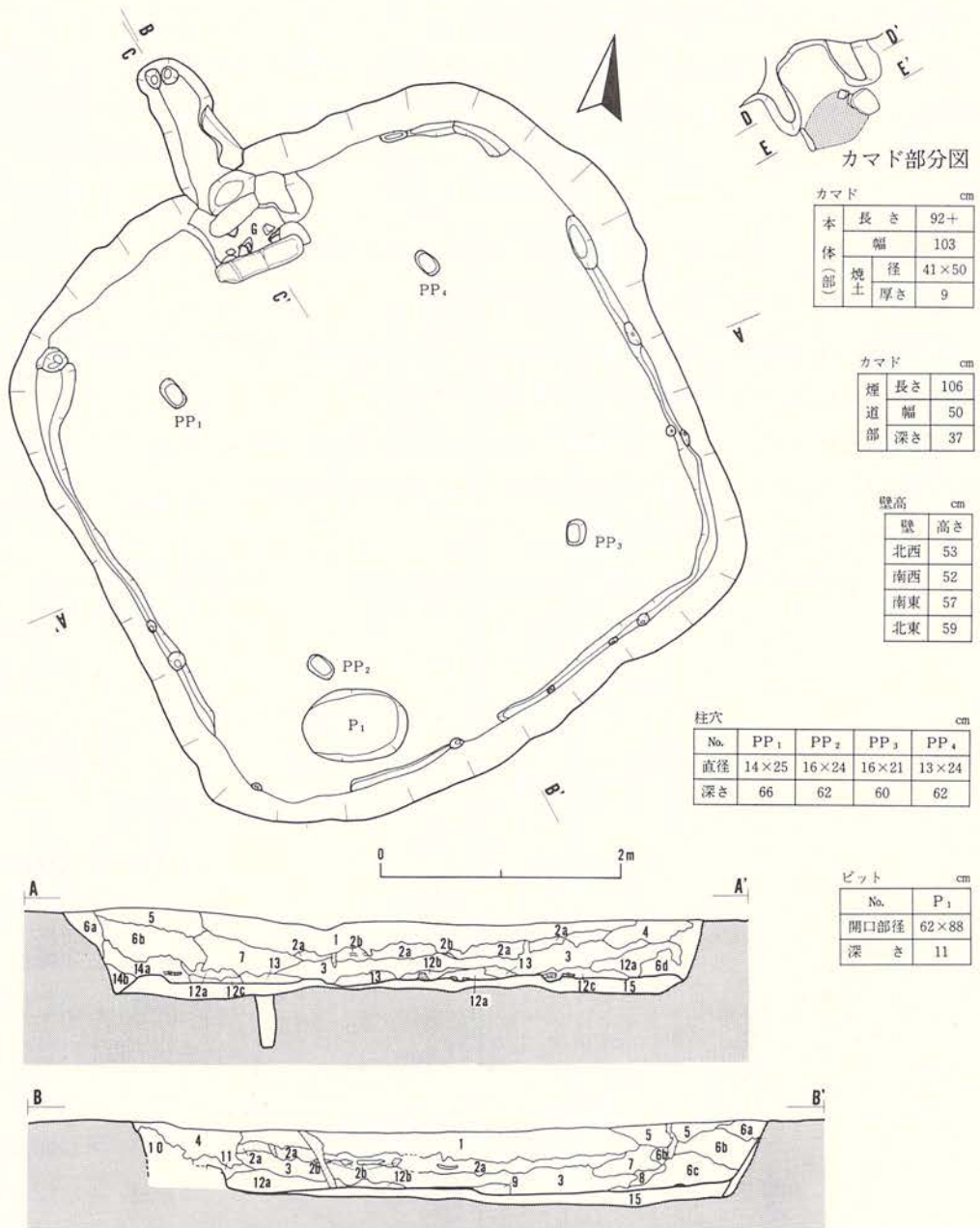
図示した土師器の坏や甕、住居形式から、奈良時代に分類できる。

**D III-4 住居跡遺構** (第20図・第21図、図版9)

**検出状況・重複関係** 重複するD III-53・54ピット(ともに時期不明)を切っている。



第15図 D III-3 住居跡実測図(1)



カマド cm

本 体 (部)	長さ	92+
	幅	103
	径	41×50
	厚さ	9

カマド cm

煙 道 部	長さ	106
	幅	50
	深さ	37

壁高 cm

壁	高さ
北西	53
南西	52
南東	57
北東	59

柱穴 cm

No.	PP <sub>1</sub>	PP <sub>2</sub>	PP <sub>3</sub>	PP <sub>4</sub>
直径	14×25	16×24	16×21	13×24
深さ	66	62	60	62

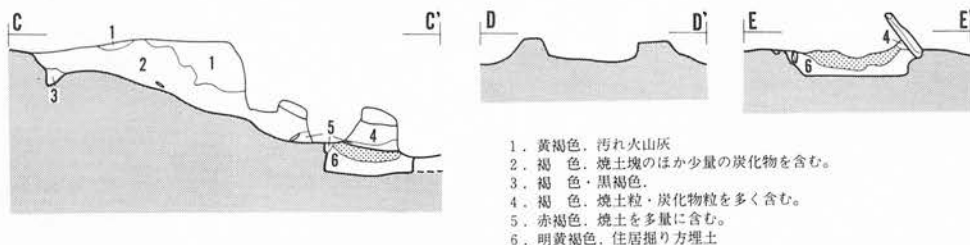
ピット cm

No.	P <sub>1</sub>
開口部径	62×88
深さ	11

- 1. 黒褐色
- 2a. 暗褐色。To-aの大小灰を全体に含む。
- 2b. 灰白色。To-aが層を形成。
- 3. 黒褐色。To-aの小塊を少量含む。
- 4. 黒褐色
- 5・7. 暗褐色
- 6a. 褐色
- 6b-6d. におい黄褐色・褐色。汚れ火山灰
- 8・9. 黒褐色
- 10. 褐色。炭化物を少量含む。
- 11. 暗褐色
- 12a. 明黄褐色・黄褐色。火山灰、焼土・炭化物を一部に多く含む。
- 12b. 褐色。汚れ火山灰。炭化物が多い。
- 12c. におい黄褐色。焼土を多く含む。
- 13. 暗褐色
- 14a・14b. におい黄褐色・褐色。汚れ火山灰。炭化物がやや多い。
- 15. 明黄褐色～黄褐色。掘り方埋土

第16図 DⅢ-3 住居跡実測図(2)





S=1/40

第17図 DⅢ-3住居跡実測図(3)

**平面形** 凸辺隅丸の台形状。南西壁と南東壁の上半の一部がはっきりしない。 **規模** 3.1～3.7×3.8～4.3m **床面積** 10.6㎡ **主軸方向** N-41°-W

**埋土** 黒色土や黒褐色土が上半、暗褐色土～黒褐色土が下半を主に占めるほか、壁寄りの部分は火山灰起源のにぶい黄褐色土や褐色土が主に堆積する。十和田a火山灰は中部に断続的ながら最大層厚5cm土の層状に観察できるほか、下部の4層に小塊として散在する。白頭山一苦小牧火山灰の大塊は1a層に含まれるが、量は少なく、分布も限定される。

**壁の状態** 下部は直立気味に立ち上がるが、その上位は外傾がいちじるしい。とくに北西壁は上半が外方へ大きく張り出し、テラス状になる。内部に分布する炭化材が少量ではあるがその部分に分布することから、本来の形状を保つものと推定できる。しかし南西壁や南東壁の一部の張り出しについては不明な点が多く、崩壊等の理由によることも考えられる。 **壁高** 上述のような理由のためはっきりしない点があるが、検出面からは35～52cm。 **壁溝** カマドが設置された北西壁をのぞいて存在するが、断続的である。

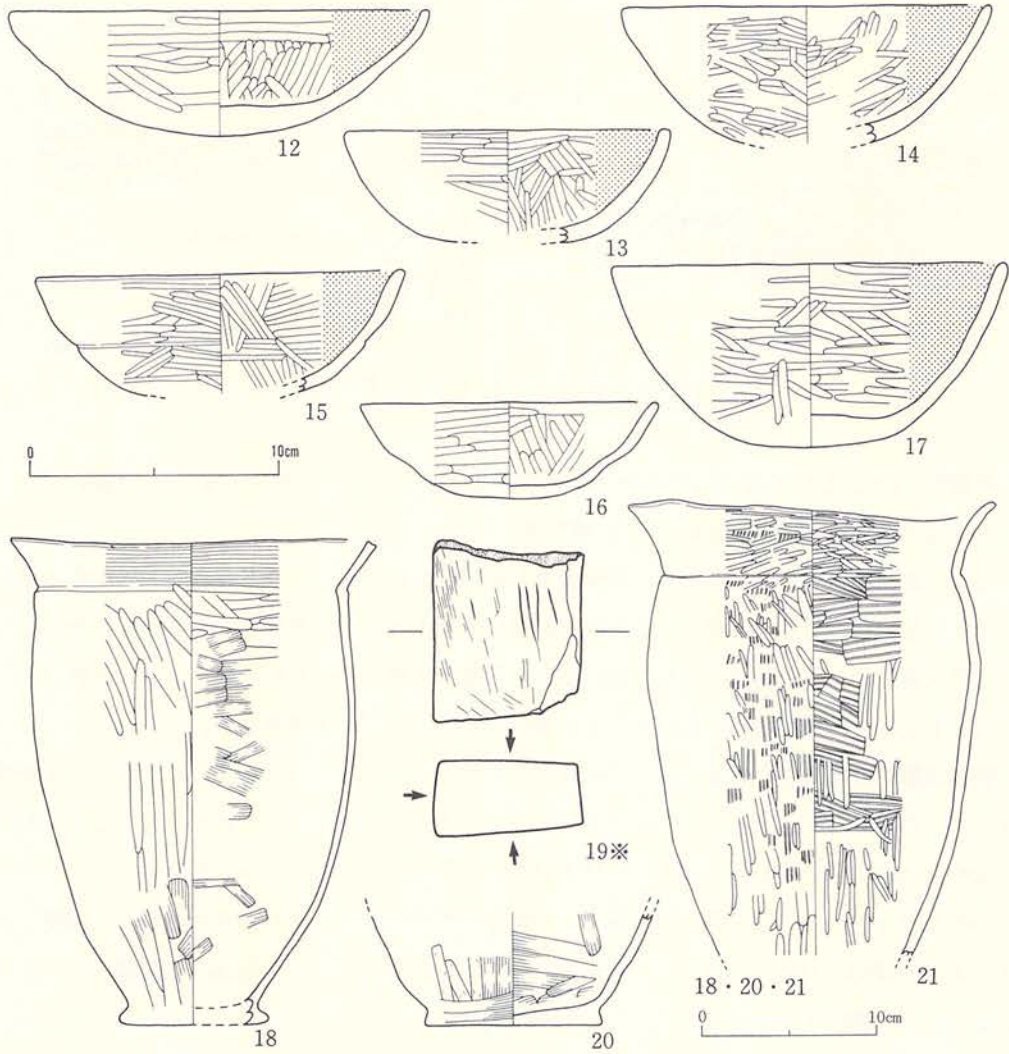
**床面** 全体に硬い。 **掘り方** 全体規模の掘り方を下位に伴う。

**柱穴** 伴わない。

**カマド：位置** 北西壁中央からわずかに北東壁寄り。 **本体** 礫を芯材にし、粘土で被覆している。しかし残存状態は良くなく、両側壁の5個が原位置にあるにすぎない。火床部に載る粒径38cmの長大な礫は天井部を構成するものの一部である。側壁を構成する礫は粒径25cmほかの垂角礫・垂円礫で、地上部の高さは25cmである。火床部は良く焼けている。 **煙道部・煙出し部** 掘り込み式である。底面はわずかに傾斜して下がるが、半ば付近からは逆にゆるやかに上がってゆく。煙出し部には施設を伴わない。

**焼失** 少量の炭化材が中央部から南隅にかけての範囲に分布する。南隅付近では小規模な焼土を伴う。壁際のものが高い位置にあり、中央部のものが床面直上にあるという検出状況は焼失住居に一般にみられるもので、材の量は少ないものの、焼失に伴うものと推定しておく。

**遺物** (第22図. 図版60)



No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口底	黒色処理	口径	器高	底径			
12	カマド内部	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	17.0	5.0	—	I群B類	55	
13	カマド側壁	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	13.2	(4.5)	—	I類B類		
14	煙道部埋土	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	○	14.8	(5.5)	—	I群B類	55	
15	煙道部埋土	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	○	14.8	(4.8)	—	I群B類	55	
16	カマド側壁	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガシ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	12.0	3.9	—	I群B類	55	
17	埋土下部～床面	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目・ヘラミガキ	○	16.0	7.3	—	I群B類	55	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
18	埋土上部	土師器甕	ヨコナデ	ヘラミガキ	木葉底	ヨコナデ	ヘラミガキ・ヘラナデ	—	20.9	27.9	8.5	L1b	56
20	埋土上部	土師器甕	—	ヘラナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	ナデ	—	(6.4)	10.2		
21	カマド	埋師器甕	ヘラミガキ	刷毛目・ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	刷毛目・ヘラミガキ	—	(20.6)	(25.8)	—	L1a	

No	地点・層位	器 種	計測値:mm			重量:g	石 材 名	特 徴・備 考	図 版
			長さ	幅	厚さ				
19	床面	砥石	45	39	22	62	玻璃質流紋岩	3面使用	60

S = 1/2 (※)

第18図 DⅢ-3住居跡出土遺物(1)

出土状況 埋土を中心に、煙道部・カマド・掘り方埋土から出土している。土器と石器・琥珀・鉄製品・石製品・土製品・剥片類がある。

土器 II群を主体とする縄文土器が破片数で土師器を若干上回っている。土師器はほとんどが甕の破片で、坏の破片は8点があるにすぎない。はS1である。

琥珀 破片3点2.85gが埋土中部から出土している。

鉄製品・土製品 焼けた柄を残した刀子がカマド前面の床面直上から出土したが、破損がいちじるしく、図示していない。土製品は小破片のため、鞆の羽口か土製支脚か識別できない。

その他 石器は石錐やピエス・エスキーユ・打製石斧ほかがあり、剥片類は7点である。石錐は両端に抉りを伴う。そのほか縄文土器片を素材にした円盤状土製品や円盤状石製品がある。

### まとめ・遺構の時期

出土遺物や住居形式から、平安時代に分類する。

### D III-5 住居跡

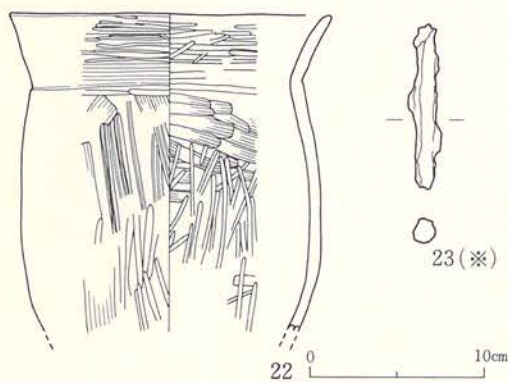
遺構 (第23図、図版10)

検出状況・重複関係 北東壁を含む一部を調査できたが、大部分は調査区域外に出ている。

D III-102落とし穴と重複し、それを切っている。

平面形 隅丸方形であるが、詳細は不明。規模 北西～南東方向が3.0m。床面積 不明  
主軸方向 N-57°-E

埋土 黒褐色土や黒色土・暗褐色土・褐色土が埋土を構成する。白頭山一苦小牧火山灰は少量の小塊が3層に点在する。粒径は10mm±である。南東壁際上部から床面中央方向へ傾斜して下がっている貝層は最大層厚が20cmで、北側約二分の一はほぼ床面に接している。



壁の状態 外傾 壁高 II層を切って構築されていることが断面で観覧できる。その部分での壁高は60cmを測る 壁溝 北隅から北西壁、また南東壁の一部に認められるものの、詳細は不明である。

No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
22	埋土下部	土師器甕	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ	—	18.6	(18.4)	—	L1b	56

No.	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
23	埋土	不明	44	5	7	3.1	両端欠失。断面円形の棒状。	

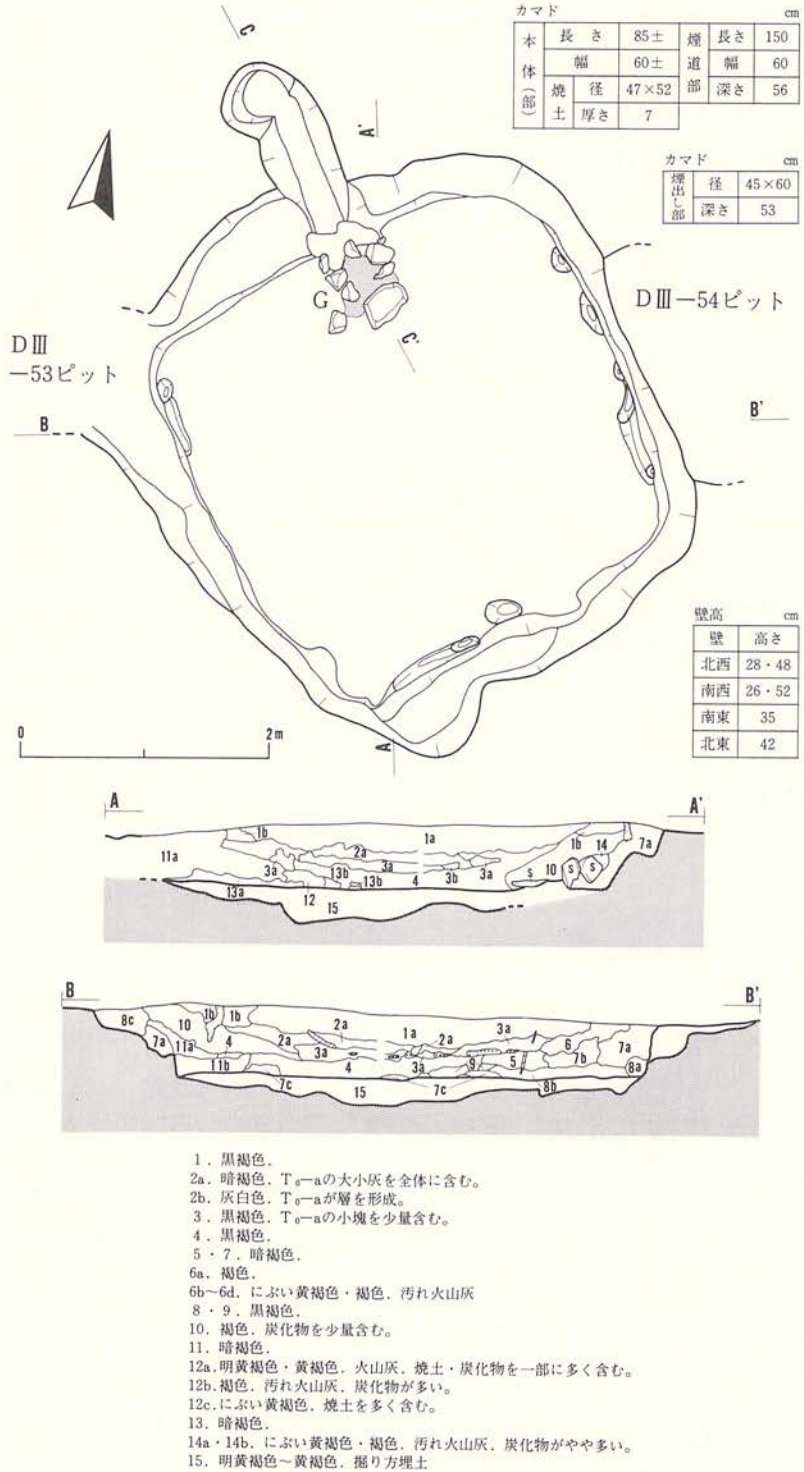
第19図 D III-3 住居跡出土遺物(2)

S=1/2(\*)

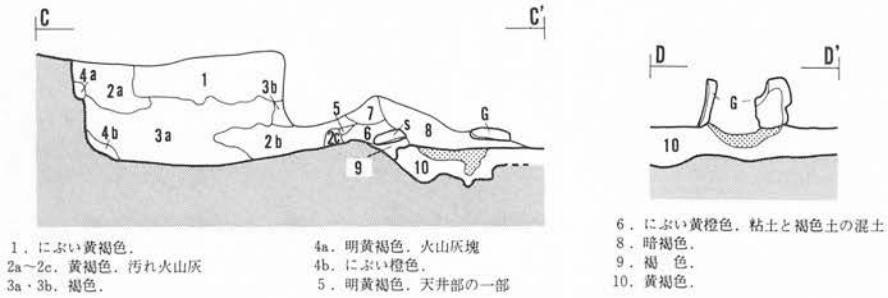
床面 やや硬い。掘り方北西壁寄りに一部認められるが、詳細は不明である。

柱穴 調査できた範囲には検出されていない。

カマド：位置北東壁ほぼ中央  
 本体 シルト岩を芯材にし、粘土質シルトで被覆している。煙道部寄りでは礫の一部が原位置を保っているが、粒径25cm土ほかの扁平な亜角礫や亜円礫を直立させて埋設して側壁とし、そのうえに礫を渡して天井部を構築している。天井部に用いられる礫は粒径35cm土・28cm土の巨礫のほか、補強用のための小礫が多い。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面は緩やかに傾斜して



第20図 D III-4 住居跡実測図(1)



第21図 DⅢ-4住居跡実測図(2)

S =  $\frac{1}{10}$

下がってゆく。煙出し部には施設を伴わない。

**付属施設** カマドの左脇にP1が存在する。平面形が円形の小型のピットで、深度は小さい。埋土は褐色～黒褐色の土で、カマドの構築材である礫3個を含んでいる。

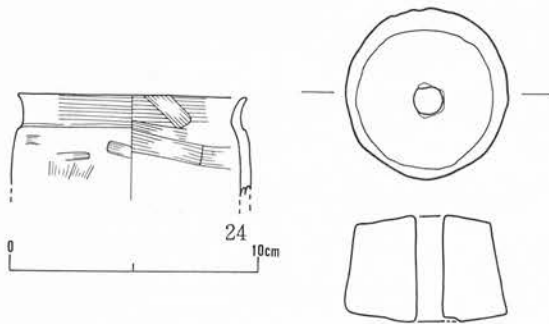
**遺物** (第24図、図版63)

**出土状況** 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と琥珀・自然遺物・剥片類がある。

**土器** 土師器甕とII群を主体とする縄文土器があるが、すべて破片である。破片数は後者が上回る。

**琥珀** 破片8点17.76gが床面と床面直上・埋土・P1から出土した。

**貝類** ムラサキインコガイが全体の約87%を占め、次いでイガイ・エゾイガイなどがあり、種数は27を数える(付篇参照)。



25(※) 類する。

**その他** 石器は石匙やピエス・エスキューほかがあり、剥片類は14点である。

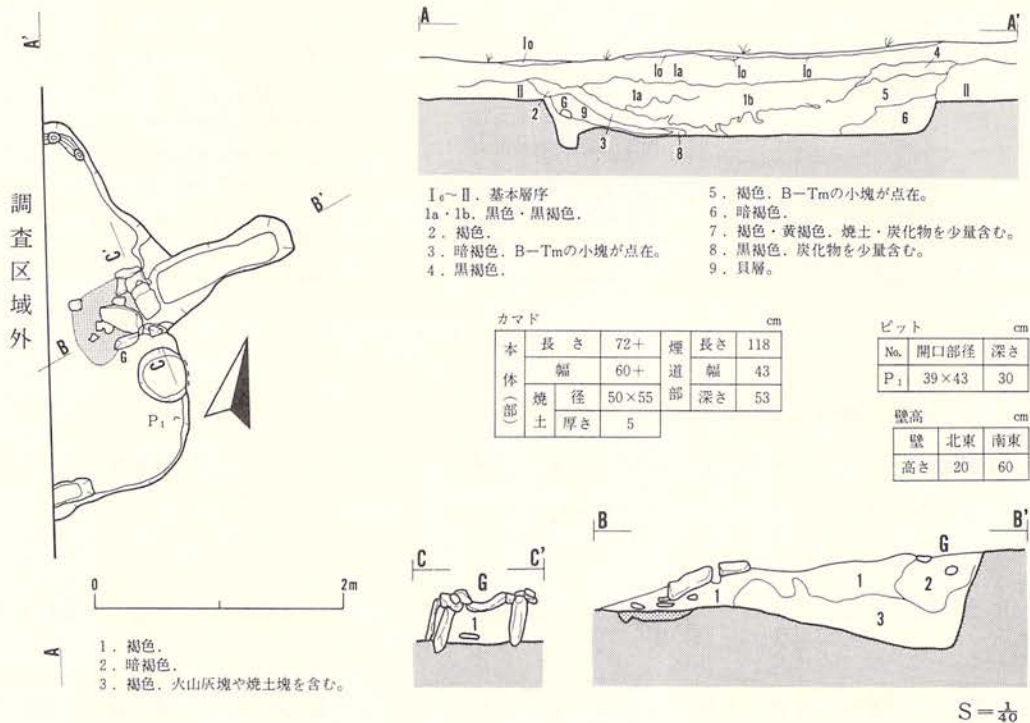
**まとめ・遺構の時期**

貝層は食用に供されたものが廃棄された結果形成されたものであろう。出土土器や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
24	煙道部上部	土師器甕	ヨコナデ	ナデ	—	ヨコナデ	ナデ	—	9.2	(4.0)	—	S1	
No	地点・層位	器 種	計測値: mm			重量: g	特 徴・備 考	図 版					
			上面径	下面径	厚 さ								
25	床面直上	土製紡鐘車	36	45	27	53.7	ていねいなミガキ	60					

第22図 DⅢ-4住居跡出土遺物

S =  $\frac{1}{2}$ (※)



第23図 D III-5 住居跡実測図

### D III-6 住居跡

遺構 (第25図・第26図, 図版11・12)

検出状況・重複関係 久慈市教育委員会による試掘調査の際に埋土中央部が掘り下げられている。重複する遺構はない。

平面形 隅丸長方形 規模 5.2×6.3m 床面積 24.4m<sup>2</sup> 主軸方向 N-65°-W

埋土 黒色土(クロボク)が中央部付近の広い範囲に分布し、一部は床面を直接覆っている。そのほか褐色土や暗褐色土が埋土を構成する。2種類の火山灰を含む。白頭山一苦小牧火山灰は南壁寄りの部分に分布が限定される。一部は塊状に集合した状態で見られるものの、8 b層や9層はマトリクスであるにぶい黄色土や褐色土に塊状に含まれる。塊の最大粒径は110mmと大きい。十和田a火山灰は東壁寄りの埋土最下部や床面直上・北壁際の壁溝中に認められる。20mm±の小塊が主で、量は少ない。なお南壁際に厚く堆積する3 b層褐色土には少量の貝類が投棄されていた。

壁の状態 外傾。東西壁は上半がとくに緩やかな外傾を示す。壁高 48~57cm 壁溝 カマド部分を除いて存在するが、東壁の南側約二分の一の範囲でとぎれる部分が多い。内部に見

られる円形の小ピットは断続的である。

**床面** 南壁中央の壁際が非常に硬く締まっているほかは全体に軟らかい。 **掘り方** 北壁を除いた三方の壁寄りに伴うが、最大幅が140cm±と狭い。

**柱穴** 柱穴状のピットが東隅付近から東壁半ば付近にかけて多く存在する。位置や形態・大きさ・深度の点から、共伴する柱穴とは考えられない。

**カマド**：位置 西壁中央からわずかに南壁寄り **本体** 残存状態は良くない。黄褐色土が火床部の上に薄く堆積していたほか右側壁の下底部が残存している。側壁は地山の火山灰を構築材にしている。左脇に散在するシルト岩も構築材の一部であろう。火床部はよく焼けている。**煙道部・煙出し部** くりぬき式である。本体寄りの一部が掘り込まれ、壁外に出ているのは崩壊によるものであろう。底面は緩やかに傾斜して下がり、煙出し部である円形ピットに移行する。

**付属施設** P1は西壁中央寄りの部分に存在する。平面形が楕円形あるいは凸辺隅丸方形のピットであり、貯蔵穴と推定される。埋土中部からは少量の貝類が出土している。P2はカマドの右脇に隣接して存在する。浅い円形のピットで、底面は凹凸がある。

**遺物** (第27図、図版62・63)

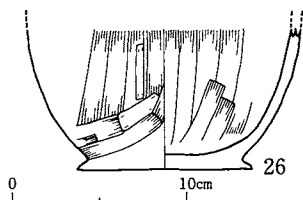
**出土状況** 埋土・床面・煙道部・掘り方埋土から出土しているが、量は少ない。土器と石器・琥珀・自然遺物・鉄製品・剥片類がある。

**土器** 破片数ではほぼ同数になる土師器甕とII群を主体とする縄文土器がある。土師器坏は出土していない。

**琥珀** 破片10点5.92gが床面や埋土・カマド・煙道部ほかから出土している。

**鉄製品** 27は埋土下部から出土した。下部を欠失しているため茎の有無は不明であるが、形態は34・133に類似する。鍬ではなく銚の一種と考えた。他に小破片1点が床面直上から出土しているが、器種は不明である。

**自然遺物** 貝類が埋土下部とP1の埋土中の2カ所から出土しているが、量的にはあまり多くない。ムラサキインコガイが大部分を占め、P1では全体の約90%を占める。種数は14種である(付篇参照)。そのほかクルミ1点が埋土下部から出土している。



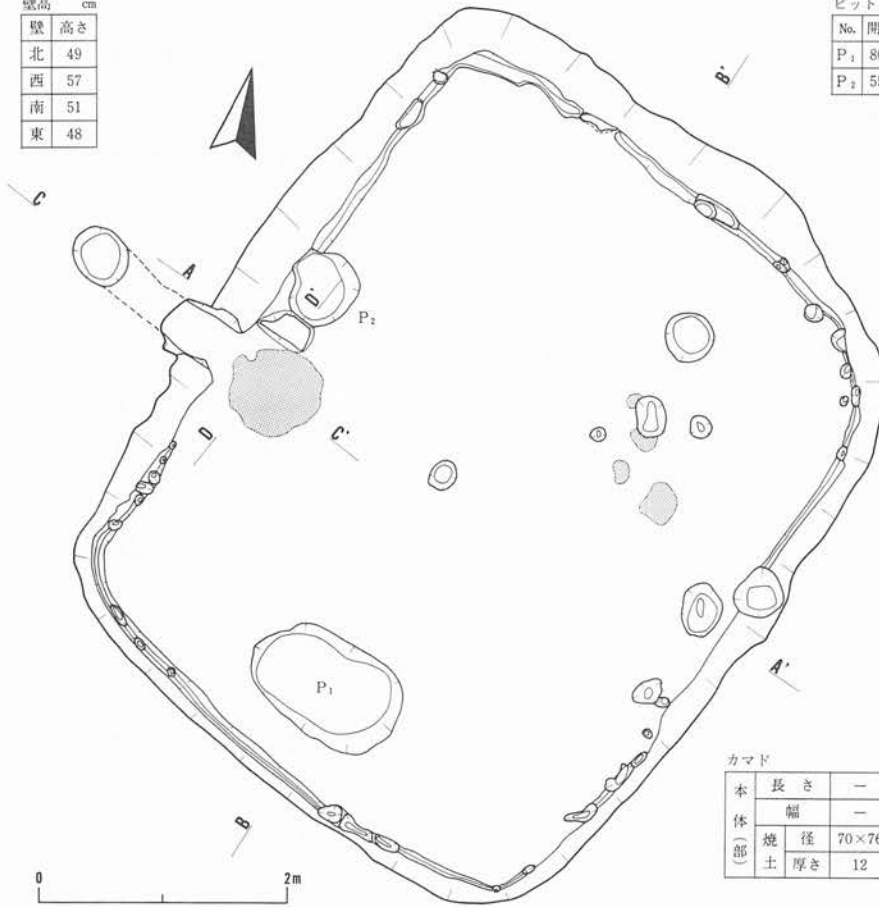
**その他** 剥片石器は不定形石器やピース・エスキューがあり、剥片類は41点である。

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値：cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
26	埋土下部	土師器甕	—	ヘラナデ	木葉底	—	ヘラナデ	ナデ	—	(8.0)	10.0		

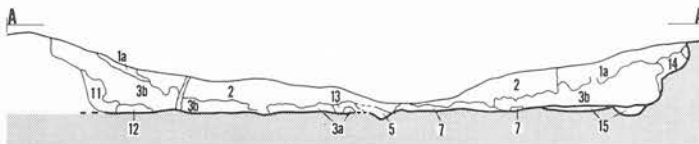
第24図 DⅢ—5住居跡出土遺物

壁高	高さ	cm
北	49	
西	57	
南	51	
東	48	

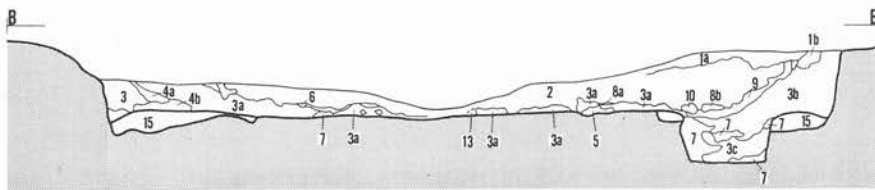
ピット			cm	
No.	開口部径	深さ		
P <sub>1</sub>	80×130	40		
P <sub>2</sub>	55×60	18		



カマド					cm	
本 体 (部)	長さ	—	煙 道 部	長さ	150	
	幅	—		内径	32×46	
	焼 土	径	70×76			
	厚さ	12				



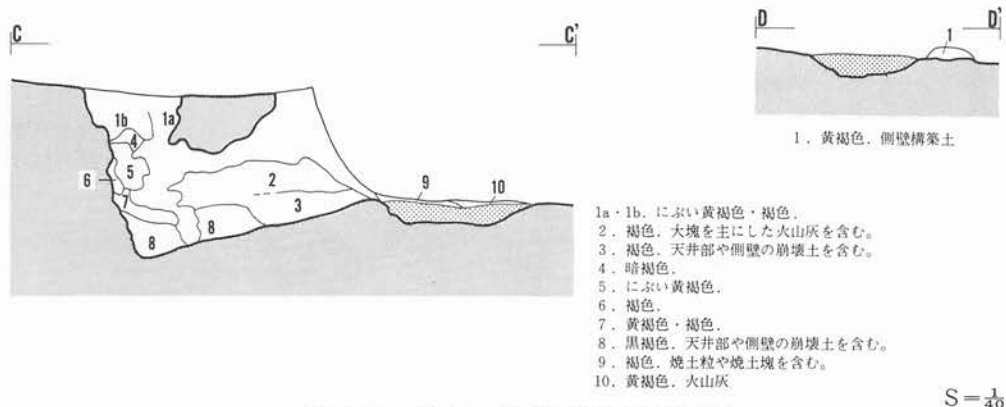
カマド			cm	
煙 出 し 部	径	40×50		
深さ	90			



- 1a・1b. 暗褐色.
- 2. 黒色. クロボク
- 3a-3c. 褐色. 汚れ火山灰. 焼土や炭化物を少量含む.
- 4a・4b. 褐色. 4aは焼土を多く含む.
- 5. 褐色. 汚れ火山灰
- 6. 暗褐色.
- 7. 明黄褐色. 火山灰
- 8a. 黄褐色. B-Tm
- 8b. 黄褐色・黒色. 黒色土にB-Tmを含む.
- 9. 褐色. B-Tmを含む.
- 10. 黒色.
- 11. 褐色. 火山灰塊を多量に含む.
- 12. 褐色. カマド起源の焼土を多量に含む.
- 13. 黒褐色.
- 14. 褐色.
- 15. 黄褐色. 掘り方埋土

第25図 DⅢ-6 住居跡実測図(1)





第26図 DⅢ-6 住居跡実測図(2)

S=1/40

まとめ・遺構の時期

貝類は食用に供されたものが廃棄されたものであろう。出土遺物や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

EⅢ区

EⅢ-1 住居跡

遺構 (第28図、図版12)

検出状況・重複関係 西壁は調査区域外にあり、II層を切っていることが観察できる。重複する遺構はない。

平面形 隅丸の長方形気味であるが、形は崩れている。規模 2.4~2.8m×3.1~3.4m 床面積 7.4m<sup>2</sup>

埋土 褐色土が卓越し、壁際や東壁寄りに汚れ火山灰が堆積する。埋土は全体に硬く締まっている。

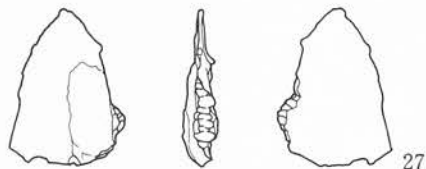
壁の状態 検出が困難であったため、西壁をのぞいては壁の下部が残存する。その部分では直立~外傾。壁高 7~35cm 壁溝 伴わない。

床面 全体が硬く締まっている。

柱穴・炉 伴わない。

遺物 (第28図、図版49)

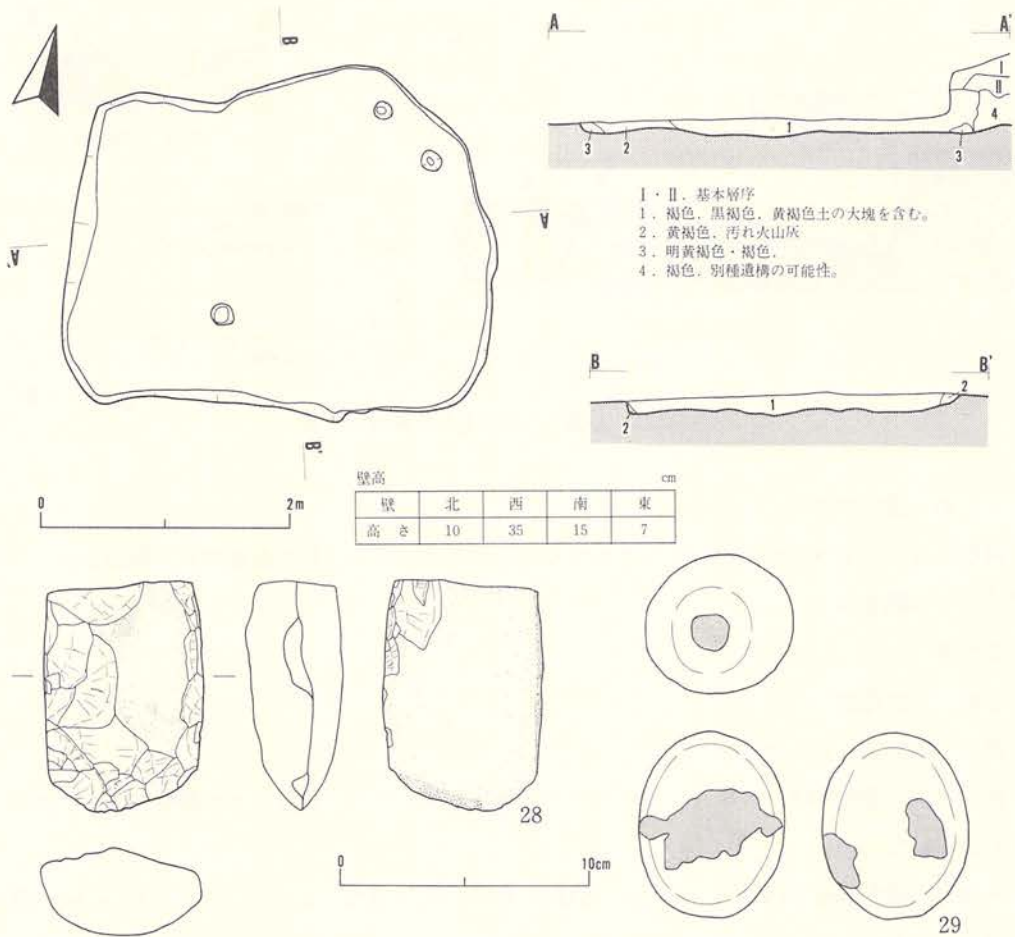
出土状況 埋土から出土しているが、量は少ない。



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
27	埋土下部	金箔形鉄製品	41	27	4	4.7	基部を欠く。右側縁が銹のために肥厚。	62

第27図 DⅢ-6 住居跡出土遺物

S=1/2



No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
28	埋土	打製石斧	90	64	37	350	硬砂岩 刃部残存、裏面は自然面	49	
29	床面	敲石	75	59	54	335	礫石安山岩 敲打痕は両面と上面		

第28図 EⅢ-1住居跡実測図・出土遺物

土器と石器・剥片類がある。

**土器** I群に分類した縄文土器片が7点あるだけである。

**石器類** 打製石斧と敲石が出土している(28・29)。剥片類は3点である。

**まとめ・遺構の時期**

出土遺物と住居形式から、縄文時代前期前葉(縄文土器I群期)に分類する。

FⅢ区

FⅢ-1住居跡

遺構 (第29図. 図版13)

**検出状況・重複関係** 調査区中央に存在する浅い開析谷の北斜面に構築されている。そのため斜面下方の北壁は推定線でしか把握できなかった。

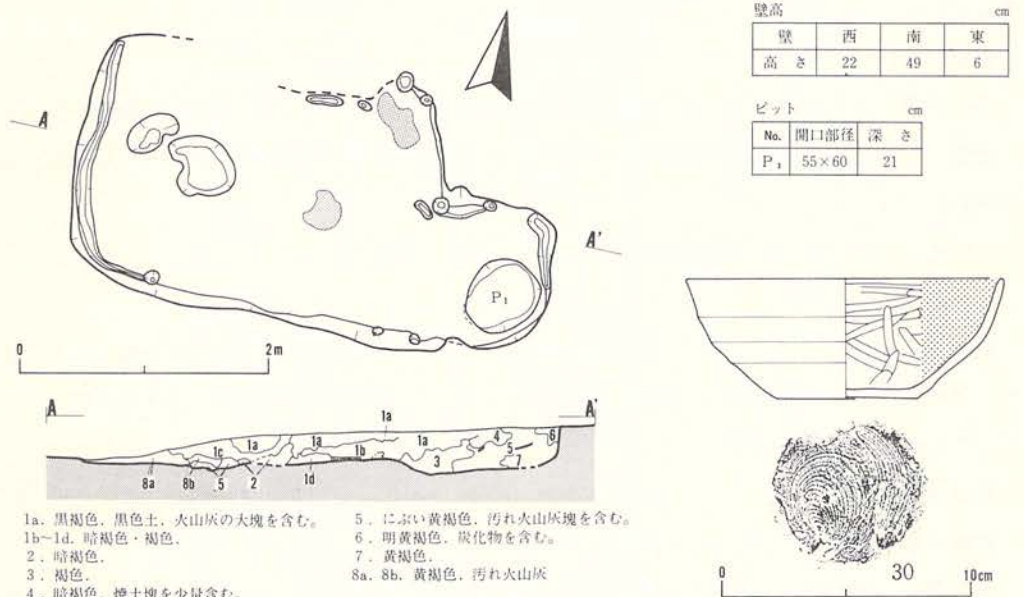
**平面形** 東西に長いややいびつな隅丸長方形の東側に隅丸の張り出し部を伴う。規模 2.1×3.1m (ともに推定) 0.8×1.2m (張り出し部)。最大長3.9m 床面積 5.9m<sup>2</sup> (張り出し部を含む)

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が卓越する。壁寄りや床面直上の一部は明黄褐色～暗褐色の火山灰や汚れ火山灰・火山灰起源の土が構成する。白頭山一苦小牧火山灰は埋土下部の2層に小塊としてごく少量含まれているだけである。

**壁の状態** 残存状態の良好な西壁や南壁はほぼ直立。張り出し部を含む東壁は検出が困難なこともあって低い。北壁は消失しているが、北西隅と北東隅が把握でき、推定が可能である。

**壁高** 6～49cm **壁溝** 部分的に存在する。西壁から南西隅を経た南壁の一部、張り出し部の東壁、張り出し部が本体部と接する北壁にも一部確認できる。南西隅を中心にした部分が深いものの、一般には浅い。

**床面** 炉付近から張り出し部へ移行する部分までの床面は非常に硬く締まっているが、範囲



No	地点・層位	種類	外面			内面		計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口一底	黒色処理	口径	器高	底径		
30	埋土上部	土師器坏	口縁部	胴部	底部	口一底	黒色処理	12.7	4.8	5.8	II群	55

第29図 FⅢ-1 住居跡実測図・出土遺物

は狭い。なお、図には表現されていないが、本体部と張り出し部との境は若干の段差を伴っている。掘り方 伴わない。

**柱穴** 北壁から東回りに行つて北東隅までの壁際に、柱穴状の円形小ピットが7個存在する。直径は7～15cm、深さは6～9cmである。その一部が柱穴を構成する可能性もあるが、規則的な在り方は示さず、確実な点は不明である。

**炉・焼土** 張り出し部まで含めたほぼ中央の床面が焼け、円形になっている。直径28×30cm、厚さ2cmである。形状や位置からは炉の機能をもつことが考えられ、地床炉と推定した。また北東隅に寄つた位置の20×48cmの範囲の床面が所どころ焼けている。3カ所が確認できるが、それぞれは小規模である。

**付属施設** P1が張り出し部に存在する。平面形が円形の浅いピットで、壁や底面は凹凸が著しい。住居跡と埋土が似ていること、後述する炭化材が埋土上に載っていること、土師器が出土していることから、共伴するピットと考えられる。

**その他** 炭化材が埋土中部から下部の層準に散在している。一般に壁際にあるものは床面からより高い位置にあり、中央に近くなると床面直上に分布する。南壁際から炉上に分布する材（長さ75cm・幅24cm・厚さ11cm）はその上に接するように少量の焼土をともなっている。材の形状や共伴する焼土の状態からは本遺構が焼失したことに起源を求めるのは難しく、廃棄物と考えておく。

#### 遺物（第29図、図版55）

**出土状況** 埋土を中心に、床面から出土しているが、量は少ない。土器と石斧・剝片類がある。

**土器** II群の坏30をのぞいてはすべて破片で、土師器甕と坏・II群が主体を占める縄文土器がある。

**その他** 磨製石斧の小破片がある。剝片類は3点である。

#### まとめ・遺構の時期

張り出し部をもつこととカマドが設置されていないことが古代の他の住居跡と異なる点である。時期を決定する資料に乏しいが、出土遺物からは中世まで時期が下ることは考え難く、平安時代の遺構として分類しておく。

#### F III—2 住居跡

##### 遺構（第30図・第31図、図版13・14）

**検出状況・重複関係** 重複するF III—53ピット（時期不明）を切っている。またF III—201焼土（時期不明）は南西壁寄りの埋土上部に形成されていた。

**平面形** 隅丸正方形。煙道部がある北東壁の上端が張り出す。 **規模** 3.1×2.9～3.2m **主軸方向** N—18°—E

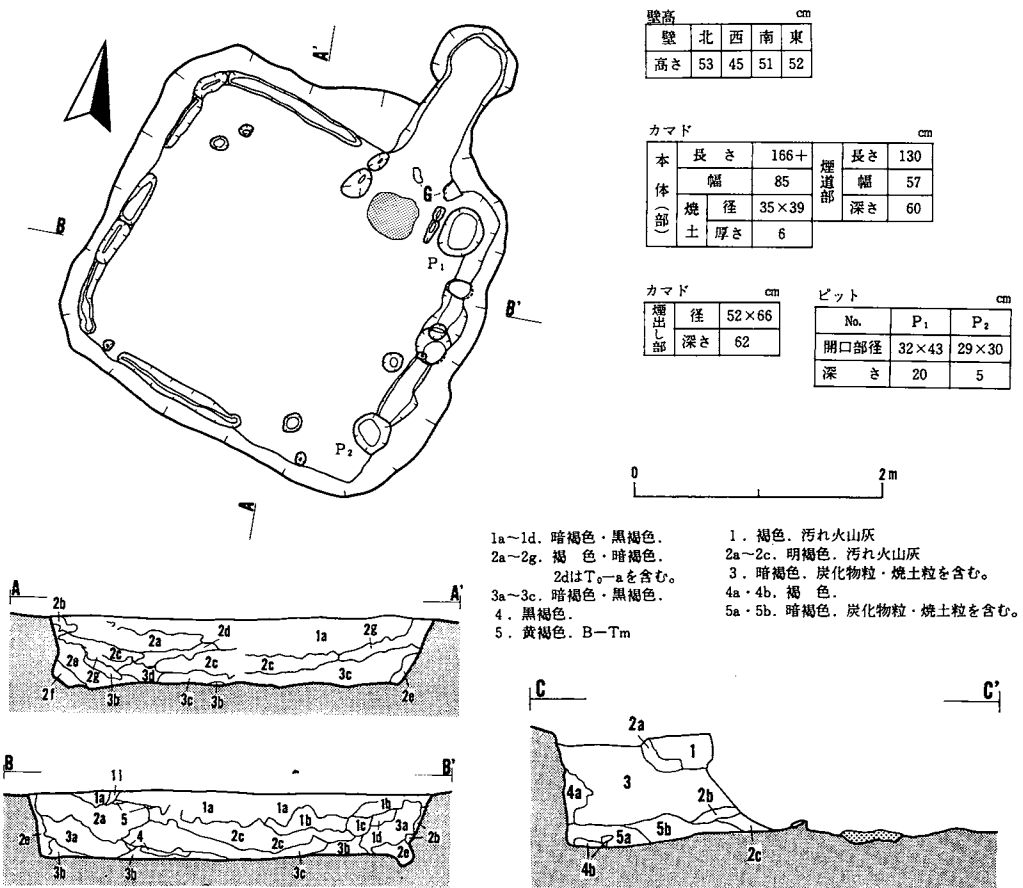
埋土 黒褐色土が上部、褐色土や暗褐色土が中・下部や壁際を主に構成する。粒径10～50mmの十和田a火山灰の大小塊は主に埋土中・下部に含まれ、白頭山-苦小牧火山灰は1a層の一部に粒状に観察できるにすぎない。

壁の状態 外傾 壁高 45～53cm 壁溝 南東隅付近と北東隅付近では伴わない。東壁に沿うところでは不整形な小ピットを多数伴う。

床面 全体に硬く締まっている。とくにカマド本体と西壁との中間から東側の部分は北壁と南壁寄りの一部を除いては非常に硬く締まっている。掘り方 伴わない。

柱穴 東壁際の南東隅に寄った位置にあるP2は深度が小さいとともに対になるものがなく、柱穴の一部とは考え難い。

カマド：位置 北壁中央と北東隅の中間 本体 ほぼ完全に崩壊している。側壁は礫を芯材にしているが、1個が右側壁の付け根に原位置を保っているほか、右側壁に2個、左側壁に1

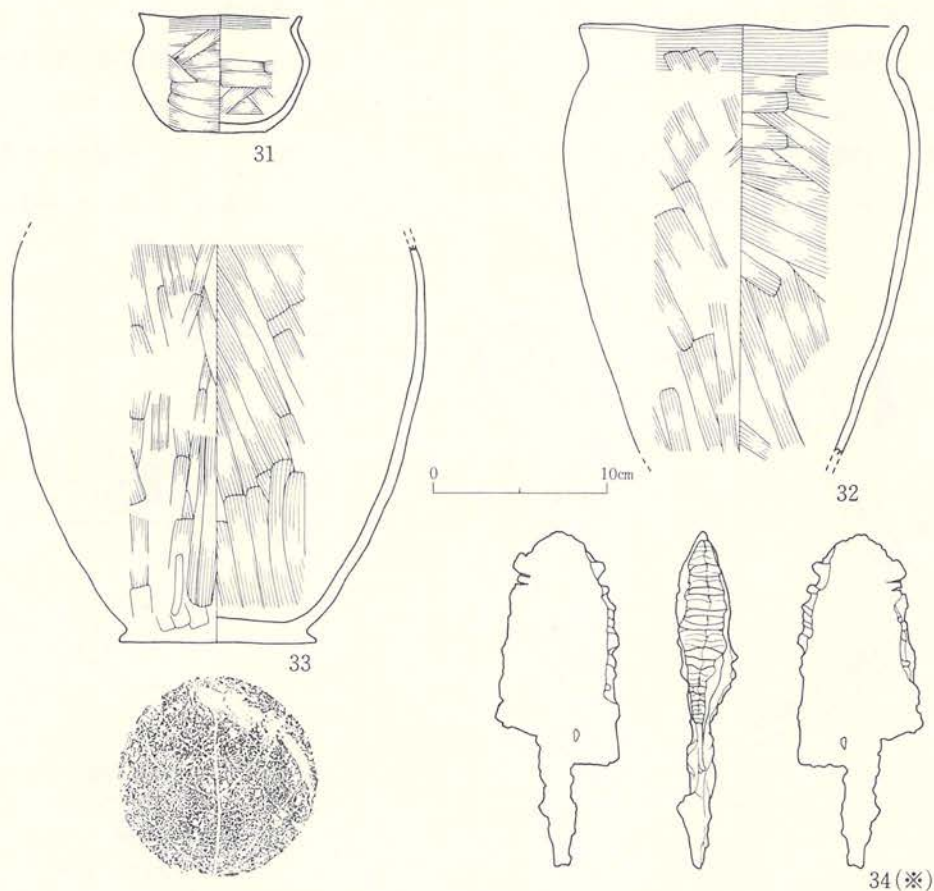


- 1a～1d. 暗褐色・黒褐色。
- 2a～2g. 褐色・暗褐色。
- 2dはT<sub>0</sub>-aを含む。
- 3a～3c. 暗褐色・黒褐色。
- 4. 黒褐色。
- 5. 黄褐色。B-Tm
- 1. 褐色、汚れ火山灰
- 2a～2c. 明褐色、汚れ火山灰
- 3. 暗褐色、炭化物粒・焼土粒を含む。
- 4a・4b. 褐色。
- 5a・5b. 暗褐色、炭化物粒・焼土粒を含む。

第30図 FⅢ-2 住居跡実測図

S = 1/40

個の抜き取り痕があり、構成礫の一部である2個が火床部上とその近くに散在している。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 くりぬき式と判断して精査を進めていったところ、天井部と推定した火山灰が埋土の一部であることが判明し、掘り込み式であることを確認している。底面はゆるやかに傾斜して下がっている。煙出し部は煙道部に比べるとやや幅広く、ピット状になっている。



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
31	埋土下部	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ	9.3	6.7	5.2	S 1	56
32	埋土下部	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	——	ヨコナデ	ヘラナデ	——	18.9	(24.7)	—	L 2 a	
32	埋土下部	土師器甕	——	ヘラナデ・ヘラナズリ	木葉底	——	ヘラナデ	ナデ	—	(23.0)	11.3	L	

No	地点・層位	器 種	計測値:mm			重量:g	特 徴・備 考	図 版
			長 寸	幅	厚 寸			
34	埋土	鉄鍔形鉄製品	90	30	13	16.9	茎部欠失。両側縁肥厚、とくに右側縁。小孔1個。	62

第31図 FⅢ-2住居跡出土遺物

S=1/2(※)

**付属施設** ピットP1がカマドの右脇、北東隅に存在する。平面形が楕円形の浅いピットである。埋土からは灰白色粘土塊が少量出土している。位置と上述のP2の位置関係からは柱穴であるよりも貯蔵穴に類するものであることが考えられる。

**遺物** (第31図、図版56・62)

**出土状況** 埋土上部～下部を中心に、床面・煙道部から出土している。土器と石器・鉄製品・鉄滓・琥珀・剥片類があるが、量的には少ない。

**土器** 土師器甕と坏・縄文土器がある。土師器甕はS1・L2aがある。坏はII群の破片が1点あるだけである。縄文土器片はII群が主体を占める。

**琥珀** 破片1点0.29gが埋土中部から出土している。

**鉄製品・鉄滓** 34は有茎の鏃形をした鉄製品である。形態は27や133に類似する。両側縁は銹のため著しく肥厚している。また基部近くには1.5×3.0mmの楕円形の小孔があく。鏃ではなく銛の一種と考えておく。鉄滓は10点235.52gが床面や埋土中・下部から出土している。個別の重量は7.1～100gとバラツキがある。

**その他** 石器は石鏃やピエス・エスキーユ・打製石斧ほかがあり、剥片類は15点である。

**まとめ・遺構の時期**

31～33ほかの出土土器や住居形式から、平安時代に分類する。

**F III-3 住居跡**

**遺構** (第32図、図版14・15)

**検出状況・重複関係** 重複する遺構はない。

**平面形** 隅丸正方形 **規模** 3.2×3.3m **床面積** 8.7m<sup>2</sup> **主軸方向** N-38°-W

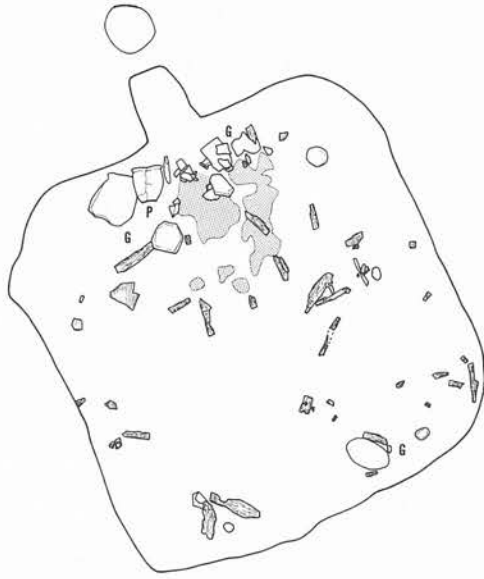
**埋土** 埋土上・中部は黒色土と黒褐色土が壁寄りの範囲をのぞいて主体を占める。それ以外は褐色土や暗褐色土が卓越する。2種類の火山灰が観察でき、白頭山-苦小牧火山灰はQ3埋土最上部、十和田a火山灰は埋土下部に塊状に含まれる。前者は少量の上に分布は限定され、後者は広範囲に認められる

**壁の状態** 直立～いくぶん外傾 **壁高** 39～59cm **壁溝** 北西壁の西半分をのぞいた部分に存在する。

**床面** 全体に硬く、壁際をのぞいた部分などくに硬く締っている。 **掘り方** 伴わない。

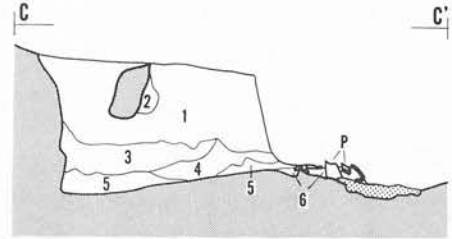
**柱穴** 伴わない。柱穴状ピット pp1・pp2は該当しない。

**カマド：位置** 北西壁中央 **本体** 側壁は礫を芯材にしてシルトで被覆する。全体に崩壊がいちじるしく、数個が原位置を保つほかは周辺に散乱している。礫はシルト岩で、厚さ1～3cmの薄い板状の垂角礫と角礫の側面を上下にして埋設している。火床部はよく焼け、北端には土製支脚を埋設している。 **煙道部・煙出し部** 煙道部と煙出し部との境はくりぬき式である。



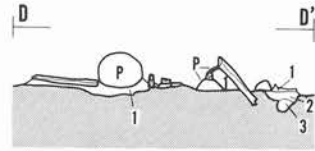
カマド

本 体 (部)	長さ	70+	煙 道 部	長さ	131	煙し 出 部	径	38×40
	幅	55		幅	46		深さ	74
	焼土 径	43×50	深さ	66				
	厚さ	8						



S = 1/40

1. 黄褐色. 汚れの少ない火山灰
2. 明褐色. 焼け落ちた崩壊土
3. 明赤褐色. 天井部崩壊土
4. 黄褐色. 側壁や天井部崩壊土の一部を含む。
5. 黄褐色・極暗赤褐色・黒色・橙色. 多量の崩壊焼土が混じる。
6. 褐色. 焼土・炭化物を含む。

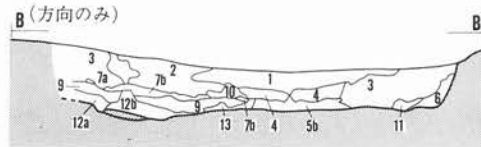
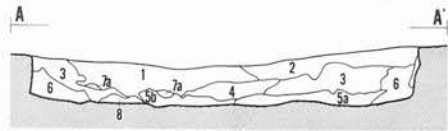
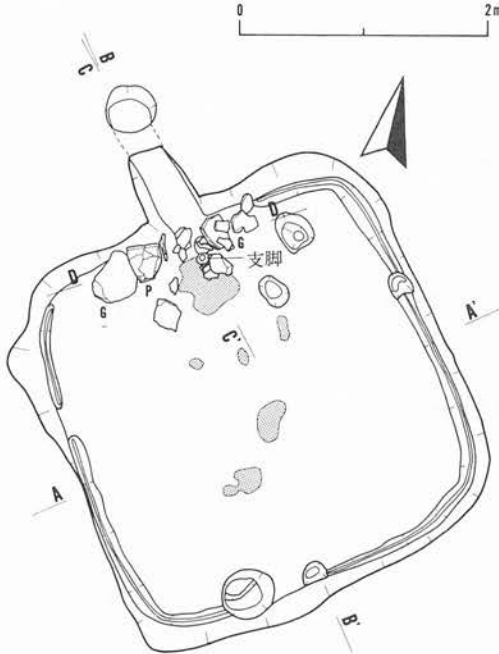


S = 1/40

1. 褐色. 焼土・炭化物を含む。
2. 暗褐色。
3. 褐色・暗褐色. 炭化物と焼土粒を含む。

壁高

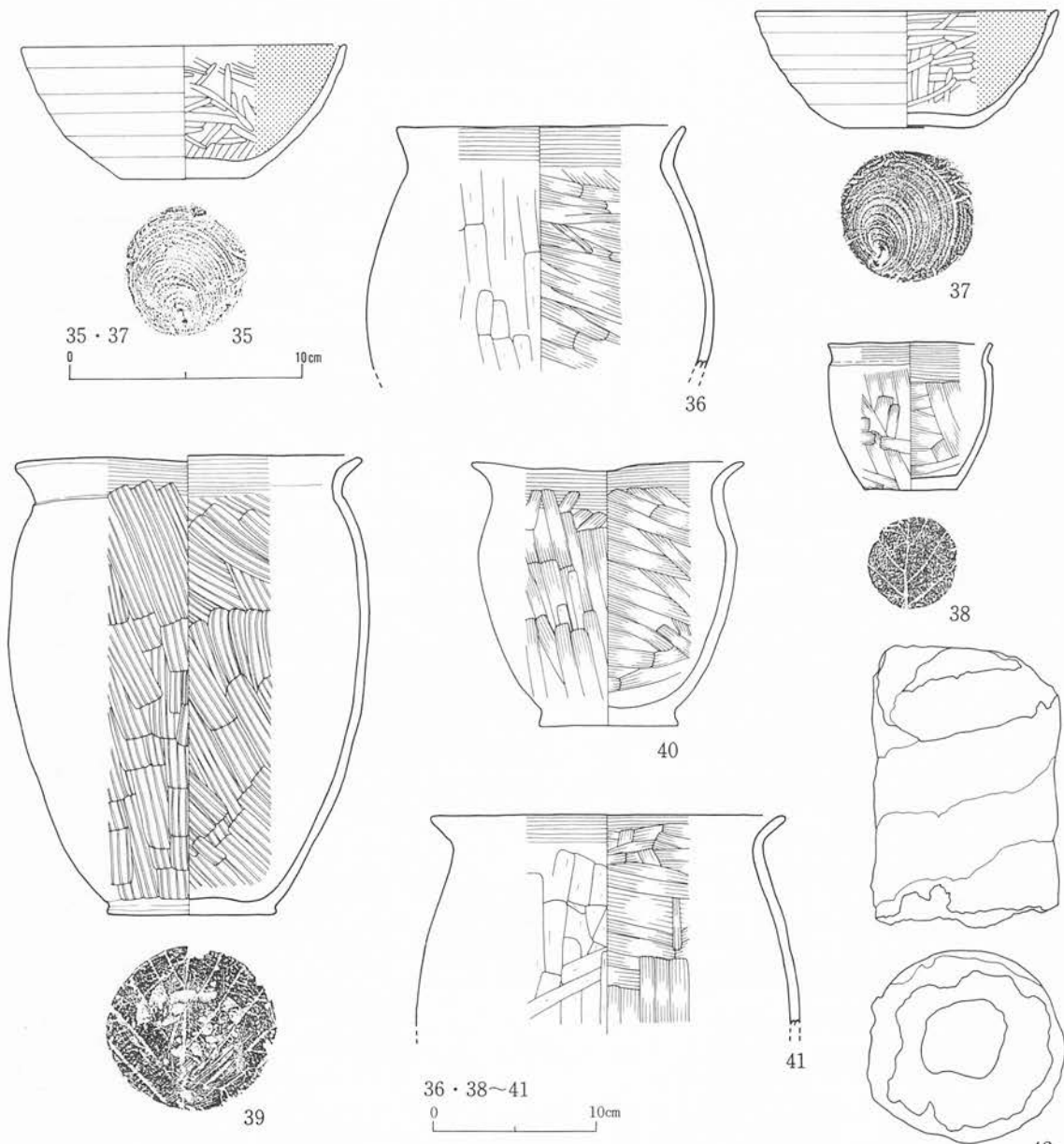
壁	北西	南西	南東	北東
高さ	59	39	44	50



1. 黒色. クロボク
2. 黒色。
3. 褐色。
4. 暗褐色・黒褐色。
- 5a・5b. 褐色・暗褐色. 火山灰起源. 焼土を多く含む. To-a塊を含む。
6. 黄褐色. 汚れ火山灰
- 7a. 黄褐色. B-Tm
- 7b. 褐色. B-Tmを多く含む。
8. 暗褐色・橙色. 焼土卓越
9. 褐色。
10. 黒褐色。
11. 暗褐色。
- 12a・12b. 暗褐色. 12aは火山灰塊や焼土塊・炭化物を含むが少量. 12bは焼土の大塊を含む。
13. 不明。

第32図 FⅢ-3住居跡実測図





No	地点・層位	種類	外面			内面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
35	カマド	土師器坏	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ヘラミガキ	○	14.0	5.7	5.4	II群	55	
37	埋土上部	土師器坏	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ヘラミガキ	○	13.0	5.0	5.6	II群		

No	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
36	埋土	土師器甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	17.7	(15.0)	—	L 2 a	
38	埋土	土師器甕	ヨコナデ	ナデ	木葉底	ヨコナデ	ナデ	ナデ	10.0	9.1	5.4	S 1	56
39	No 1	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目	木葉底・刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	21.2	28.3	10.4	L 2 b	57
40	埋土下部	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ	16.5	16.1	8.5	M 1	57
41	埋土	土師器甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	21.6	12.7	—	L 2 a	

No	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
42	カマド	土製支脚	119	80	24	510	両端破損。巻上げ痕明瞭。中空	60

第33図 FⅢ-3 住居跡出土遺物

しかし、煙道部全体がくりぬき式であったことは埋土から推測できず、くりぬき式と掘り込み式との中間形と考えておく。底面はゆるやかに傾斜して下がり、煙出し部は円形のピットになっている。

**焼失** 炭化材が床面あるいは床面直上の層準に分布している。住居内のほぼ全域に分布するが、量はそれほど多いものではない。材は6 cm±の太さのものが主で、板材は含まれていない。焼土はカマドの右脇から前面にかけて小規模に分布する。また草本類は南西壁寄りに少量が存在する。壁面は全体が加熱を受けて赤色に変化していたが、床面の数カ所も同様の変化を示している。

**遺物** (第33図. 図版55～57・60)

**出土状況** 埋土下部を中心に、埋土上部・床面・床面直上・煙道部・カマドから出土している。土器と石器・琥珀・鉄製品・鉄滓・土製品がある。

**土器** やや多い量の土師器が出土している。坏35・37はII群である。甕はS 1・M 1・L 2 a・L 2 bがある。38・39は木葉底である。縄文土器片はI群とII群が出土しているが、少量である。

**琥珀** 破片1点0.1gが埋土上部から出土している。

**鉄製品・鉄滓** 小破片のため器種不明の鉄製品1点が埋土から出土している。鉄滓は1点360gが埋土下部から出土している。

**土製品** 42はカマドの土製の支脚である。両端を失っている。巻き上げ痕が明瞭にみられ、非常に粗雑な作りである。鞆の羽口の転用ではなく、本来的に支脚として作られたものであろう。

**その他** 石器は敲石や礫器I類があり、剝片類は25点である。

**まとめ・遺構の時期**

35～41の土師器甕や坏ほかの出土遺物や住居形式から、平安時代に分類する。

**F III-4 住居跡**

**遺構** (第34図. 図版16)

**検出状況・重複関係** 大部分が調査区域外にあり、北西隅を含む一部と煙道部が調査できたにすぎない。しかし、全形を検出しており、規模や床面積・カマドの位置などは知ることができる。

**平面形** 隅丸正方形 **規模** 3.7×4.0m **床面積** 12.8㎡(推定される下端での計測) **主軸方向** N-37°-W

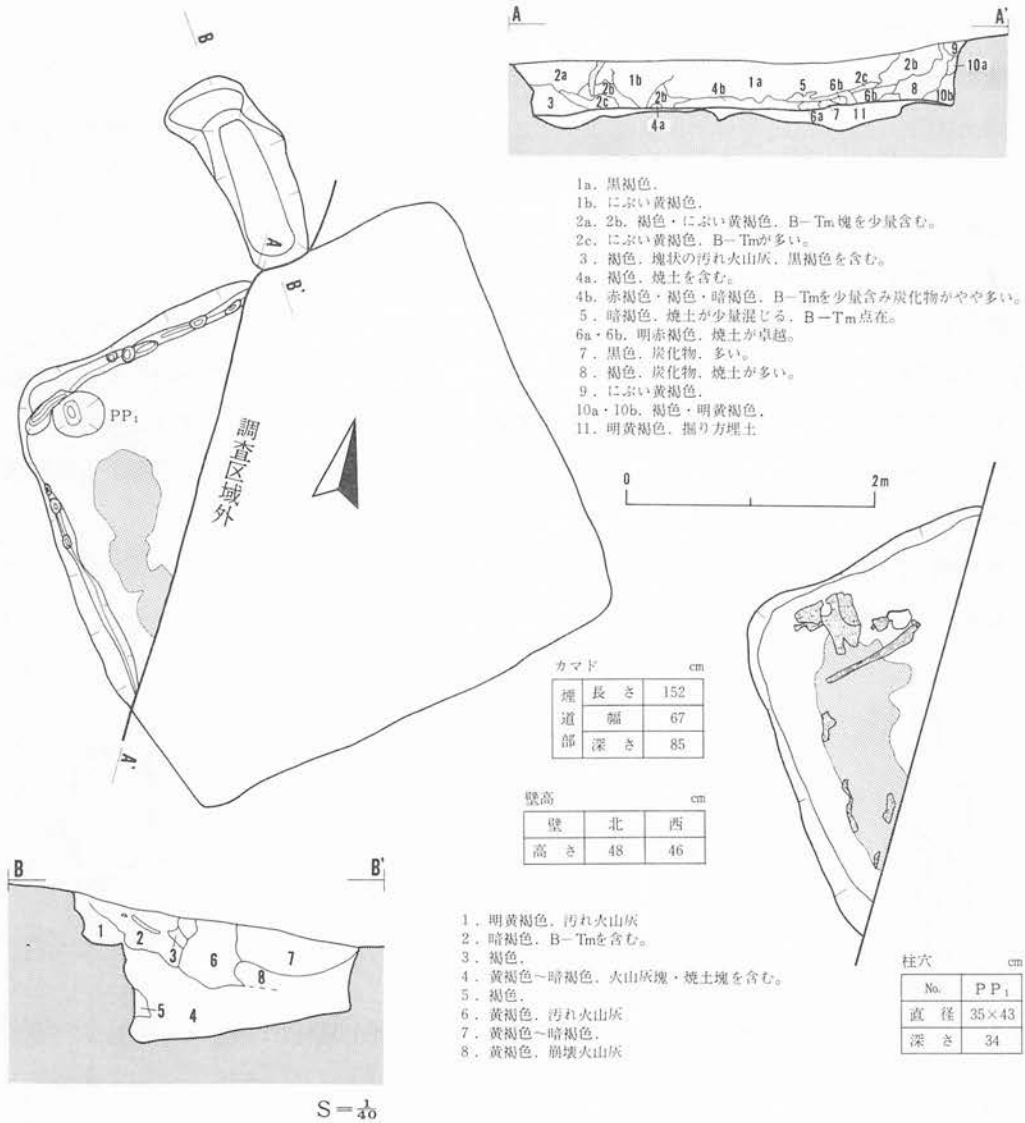
**埋土** にぶい黄褐色土や黄褐色土が壁寄りの部分、黒褐色土が中央部を中心にした範囲で卓越する。焼土が卓越する明赤褐色土ほか床面直上に堆積する。壁際2 b・2 c、埋土下部の

5、床面直上の4の各層は白頭山-苦小牧火山灰を含むが、2c層を除いては量が少ない。いずれも塊状で、粒径10mm±のものが主体である。

床面 調査できた部分は硬く締っている。掘り方 調査できた部分には伴う。

柱穴 北西隅にpp 1を伴うが、柱穴になるかどうかは明らかではない。

カマド：位置 北西壁中央からわずかに北東壁寄り 本体 調査できた部分には検出されて



第34図 F III-4 住居跡実測図

いない。 煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はゆるやかに傾斜して下がってゆく。煙出し部には施設はみられない。

焼失 明赤褐色焼土が壁際をのぞいた床面直上の層準に検出された。焼土は壁寄りでは汚れ火山灰の上で載り、傾斜して中央方向へ急激に下がっている。2～4cmの塊が集合して層状になる例が主であり、最大層厚は5cmである。炭化材は焼土の下位に検出されるとともに一部は焼土上に載るが、量は多くない。幅25cm±の板材と推定されるものが北西隅近くにみられ、少量の草本類も出土している。それらを取りのぞくと、西壁寄りの部分の床面が焼けているのがみられ、調査区域外へ伸びてゆく。

#### 遺物 (第35図. 図版62)

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と石器・琥珀・鉄製品がある。

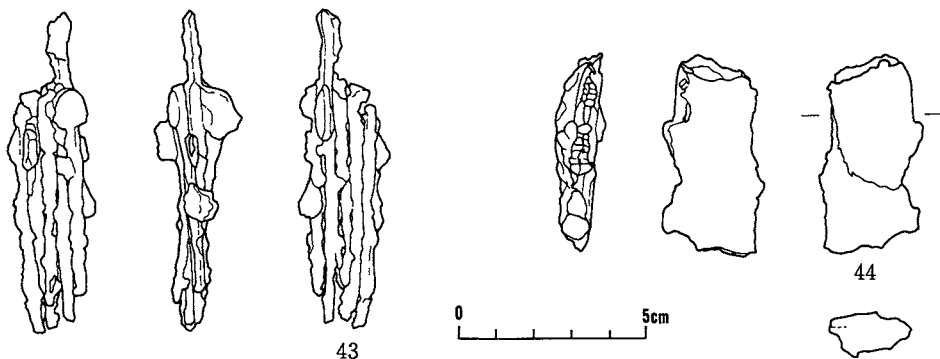
土器 すべて破片である。土師器甕34点・坏II群1点・縄文土器17点である。

琥珀 破片1点0.12gが床面から出土している。

鉄製品 43と44がある。43は断面形が正方形である棒状のもの5本が錆のため互にくっついている。径は3×3mm、5本ともほぼ完形品とみられ、現存長61～80mmである。一端が細くなるようにも見受けられ、刺突具の一種と推定した。44は基部を欠く。刃部は断面がかまぼこ形になる。刃先から33mmのところを裏側に折れ曲がっているが、現存長は86mmになる。両刃である可能性があるが、錆のためにはっきりせず、器種は不明である。

その他 石器はピエス・エスキーユと磨石I類がある。

#### まとめ・遺構の時期



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
43	床面	不明	86	17	18	10.7		62
44	埋土	不明	53	22	8	10.4		62

第35図 FⅢ-4 住居跡出土遺物

S=1/2

出土遺物や住居形式・埋土などから、平安時代に分類できる。

## G II 区

### G II-1 住居跡

遺構 (第36図～第38図, 図版17・18)

検出状況・重複関係 完全には埋まりきらず、凹レンズ状にくぼんでいる。重複するG II-2 住居跡(縄文時代)を切っている。またG II-54ピット(縄文時代)も切って大部分に貼り床を施し、同ピットの埋土をそのまま壁面にしている。

平面形 隅丸正方形 規模 6.4×6.4m 床面積 33.8㎡ 主軸方向 N-16°-W

埋土 暗褐色土や黒褐色土が卓越する。中部を占める2層は暗褐色土をマトリックスにして十和田a火山灰を多く含む。同火山灰は塊状のもので、集合して層状になる。塊は最大粒径が40mmで、10～20mmが主体を占める。北半をのぞいた壁際は褐色の汚れ火山灰が埋土上部から床面にかけての広い範囲に分布し、南西隅を含む西壁と南壁とくに顕著である。

壁の状態 直立～いくぶん外傾 壁高 35～53cm 壁溝 カマド部分を除くと一周し、一部は円形の小ピットを伴う。

床面 全体に硬く締っている。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 pp.1～pp.4の4本柱である。四隅から1.5m±中央へ寄った位置にある。掘り方の平面形は楕円形で、柱痕跡は確認できなかった。深度は65～75cmと大きい。柱穴状ピット pp.5～pp.7の3個は南壁際に存在する。先の4個と比べると直径が大きい、pp.6以外は深度が小さい。pp.5は白色粘土を含む黄褐色土が卓越し、同じ土はpp.7に単層として認められる。3個の位置づけは不明である。

カマド：位置 北壁中央 本体 残存状態は良好である。多数の礫を構築材にし、シルトで被覆する。側壁は扁平な亜角礫の側面を上下にして平行に埋設し、1側壁に3個以上の礫が使用されている。天井部は最大粒径65cmほかの長大な礫を使用している。そのほかには補強用として、土師器甕のいくぶん大型の破片多数や粒径の小さな礫が用いられている。燃焼部の下位には円形の浅い掘り込みを伴う。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はほぼ水平に伸び、煙出し部になる円形のピットを先端に伴う。

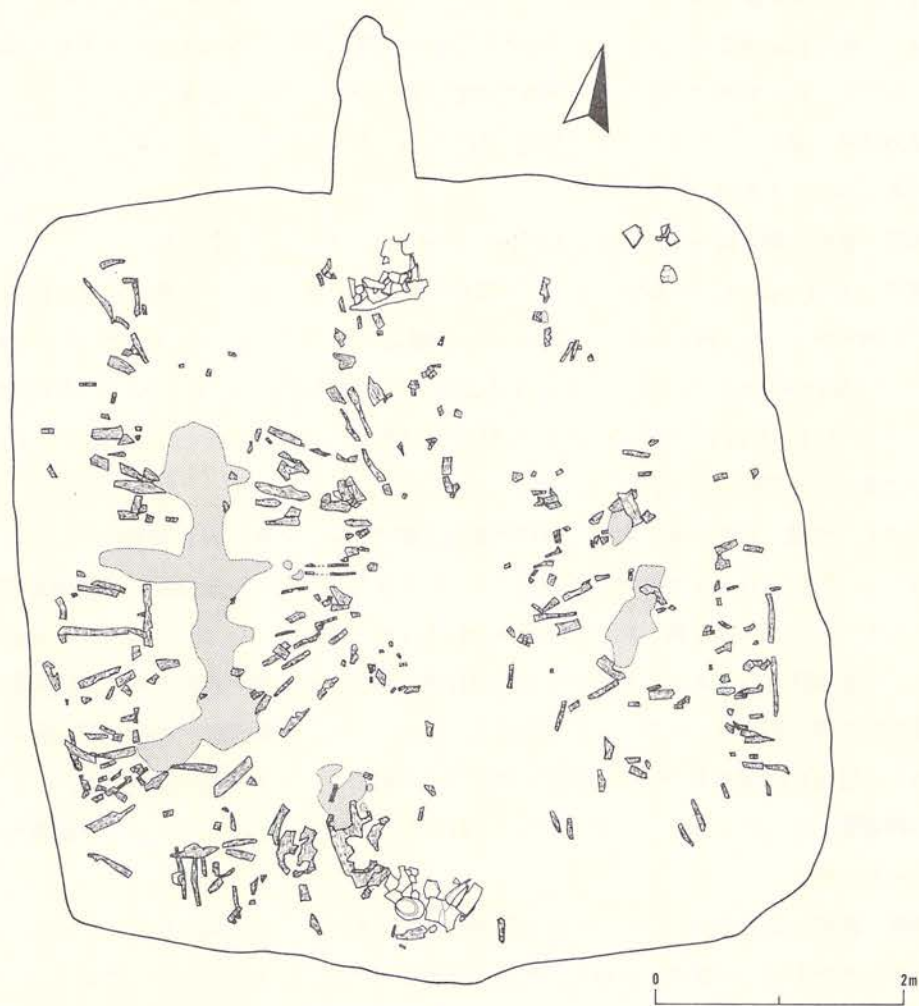
付属施設 P1がカマドの左脇にある。平面形が円形の浅いピットで、カマド崩壊土がその上の一部を覆う。

焼失 粗密はあるものの、多量の炭化材が全体に分布し、一部は焼土を伴っている。材は埋土下部から床面直上の層準に分布し、床面に密着して存在する例は少ない。壁際ではより上位にあり、床面に対して斜めに傾くという焼失住居に一般的にみられる在り方を示している。西半では中央からおおむね放射状に分布する状態がよく観察できる。材は最大径10cmの丸材ある

いは角材と推定できるものが大部分であるが、南壁際の床面直上に分布するものの一部は幅が25cmと13cmの板材と考えられる。焼土は、西壁からやや内側に入った位置にあつて壁面に平行するように幅広くみられるほか、東壁寄りの位置に小規模に分布する。いずれの場合も、焼土塊や焼土粒が集合した状態で層を形成している。検出される層準は埋土下部から床面直上である。なお草本類は検出されていない。また壁面は焼けて赤色に変化しているが、著しいものではない。

遺物 (第39図～第41図、図版55・57～60)

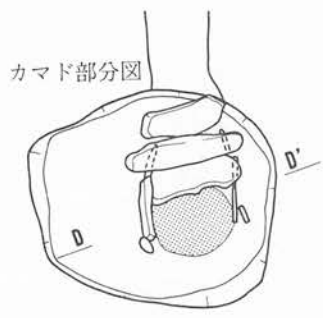
出土状況 埋土下部～床面を中心に、埋土上・中部、カマド・煙道部から多くの遺物が出土



第36図 G II - 1 住居跡実測図(1)

柱穴			柱穴		
No.	直径	深さ	No.	直径	深さ
PP <sub>1</sub>	20×22	73	PP <sub>5</sub>	36×36	29
PP <sub>2</sub>	12×18	75	PP <sub>6</sub>	37×38	75
PP <sub>3</sub>	16×23	65	PP <sub>7</sub>	28×30	8
PP <sub>4</sub>	18×19	71			

ピット	
No.	P <sub>1</sub>
開口部径	39×46
深さ	21



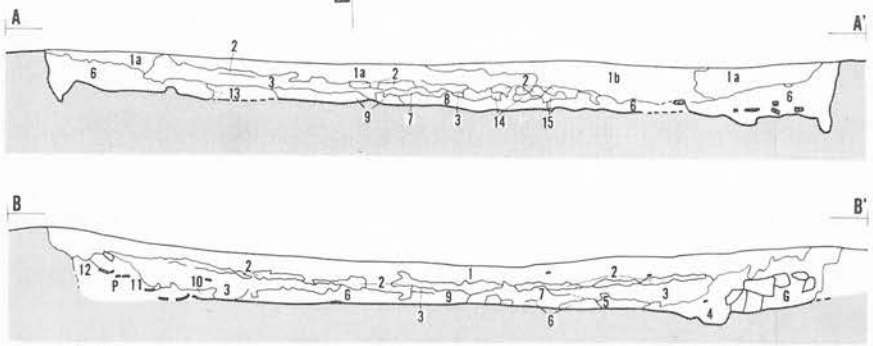
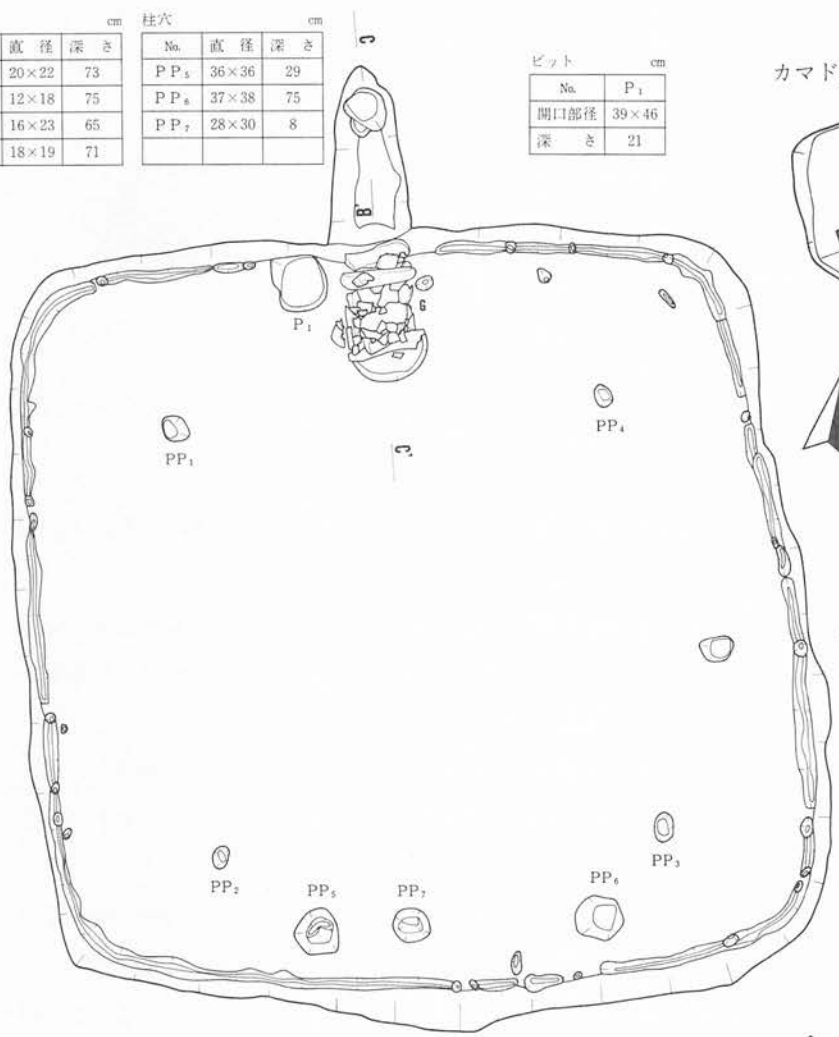
$$S = \frac{1}{40}$$

カマド		
本	長さ	110
体	幅	75
(部)	焼	径 40×43
部	土	厚さ 7

カマド		
挿	長さ	145
道	幅	65
部	深さ	38

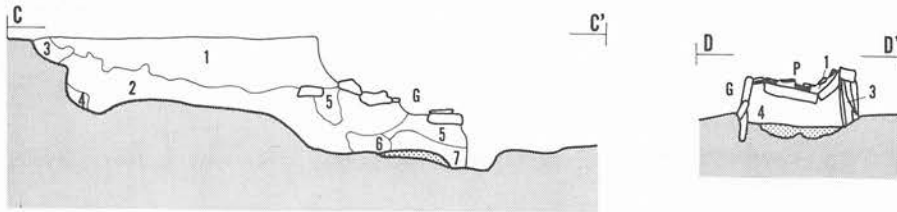
カマド		
挿	径	33×37
出	深さ	38
部		

壁高	
壁	高さ
北	50
西	35
南	53
東	47



- 1a. 暗褐色。
- 1b. 黒褐色。To-aの小塊が点在する。
- 2. 暗褐色。To-aの大小塊が層状になる。
- 3. 黒褐色・暗褐色。To-aの小塊が点在する。
- 4. 褐色。カマド起源の焼土塊が多い。
- 5. 褐色。炭化物を少量含む。
- 6. 褐色。汚れ火山灰塊・火山灰塊・炭化物を少量含む。
- 7. 黒褐色。
- 8. 黒褐色。火山灰・焼土・炭化物が全体に多い。To-aが点在する。
- 9. 黄褐色。汚れ火山灰
- 10・11. 褐色。
- 12. 黒褐色。To-aの小塊が点在する。
- 13. 褐色。焼土が多い。
- 14. 黒褐色。To-aが全体に多い。
- 15. 褐色。

第37図 GII-1 住居跡実測図(2)



- |                         |                    |
|-------------------------|--------------------|
| 1. 暗褐色、塊状の焼土・火山灰が全体に散在。 | 5. 褐色、焼土・炭化物がやや多い。 |
| 2. 黒褐色、塊状の焼土・火山灰が全体に多い。 | 6. 赤褐色、焼土卓越。       |
| 3. 明黄褐色、火山灰             | 7. 褐色、焼土を多量に含む。    |
| 4. 黄褐色、汚れ火山灰            |                    |

S=1/40

第38図 G II - 1 住居跡実測図(3)

している。出土量は古代の住居跡中では最大である。土器と石器・琥珀・鉄滓・土製品・石製品・自然遺物がある。

**土器** 土師器は甕・坏 I 群 B 類・壺・甔・鉢がある。甕は M 2・L 1 a・L 2 a がある。52 は S に分類できるが、口唇部なのかどうか不明の点があるため細分はしていない。鉢は 53 がある。甔 59 と甕 57・58・60 は南壁中央部付近の壁際の底面直上～床面の層準に一括して出土したもので、廃棄されたものと推定される。坏 47 と壺 55 は北東隅付近の壁際の埋土下部の層準から出土している。坏 46・甕 50・51 はカマド、小型の鉢 53 は南東隅付近の床面からの出土である。縄文土器片は 81 点で、I 群が主体を占める。

**土製品** 土製紡錘車は 5 点が出土し、完形の 4 点を図示した (61～64)。61・62 はカマド左脇前面、63 は南東隅に寄った南壁際、64 は東壁中央部壁際のいずれも埋土下部から出土している。

**琥珀** 破片 18 点 24.48g が埋土上部を中心に、埋土中・下部、床面直上から出土している。個別の重量は最小 0.02g から最大 13.5g である。

**鉄滓・鞆の羽口** 鉄滓は 6 点 99.55g が埋土上部と下部から出土している。鞆の羽口の破片 1 点は埋土下部からの出土である。

**石製品** 65 は自然礫の 2 面を使用。磨るあるいは敲くといった機能が考えられる。

**自然遺物** クルミ 1 個が埋土上部から出ている。

**その他** 石器は石鏃・ピエス・エスキューユ・不定形石器・凹石ほかがあり、剥片類は 72 点である。

#### まとめ・遺構の時期

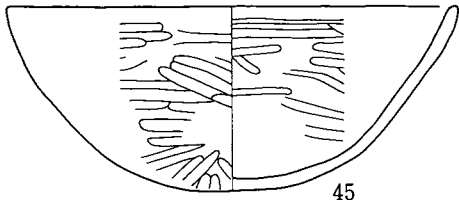
豊富な出土土器や住居形式・埋土から、古墳時代～奈良時代にかけての住居跡と考えられる。

#### G II - 2 住居跡

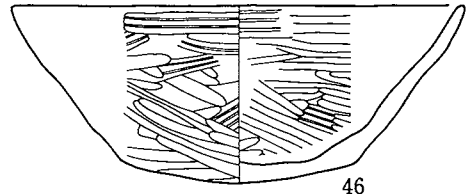
遺構 (第 42 図、図版 19)

検出状況・重複関係 北側は G II - 1 住居跡 (古墳～奈良時代) に切られ、全体の 2 分の 1

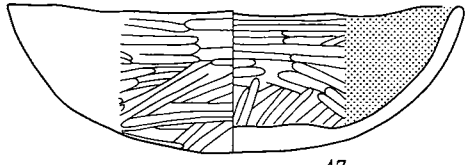




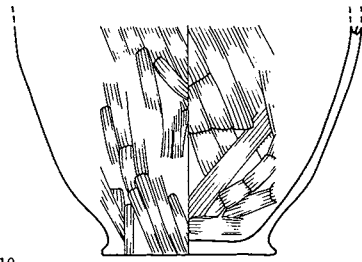
45



46



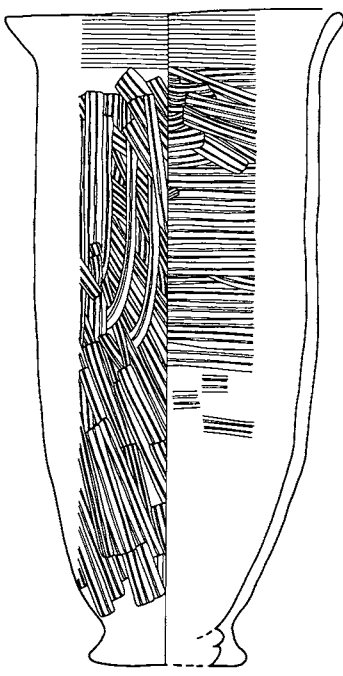
47



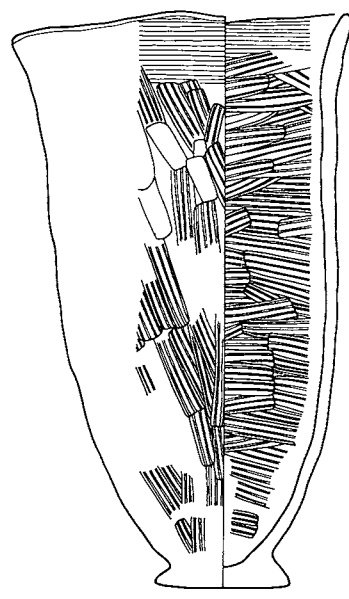
48

45~47  
0 10cm

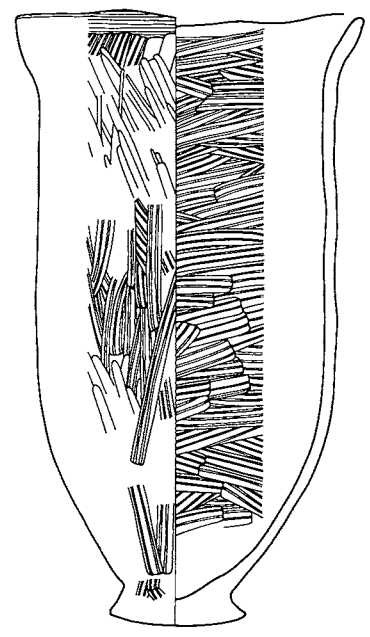
48~51  
0 10cm



49



50

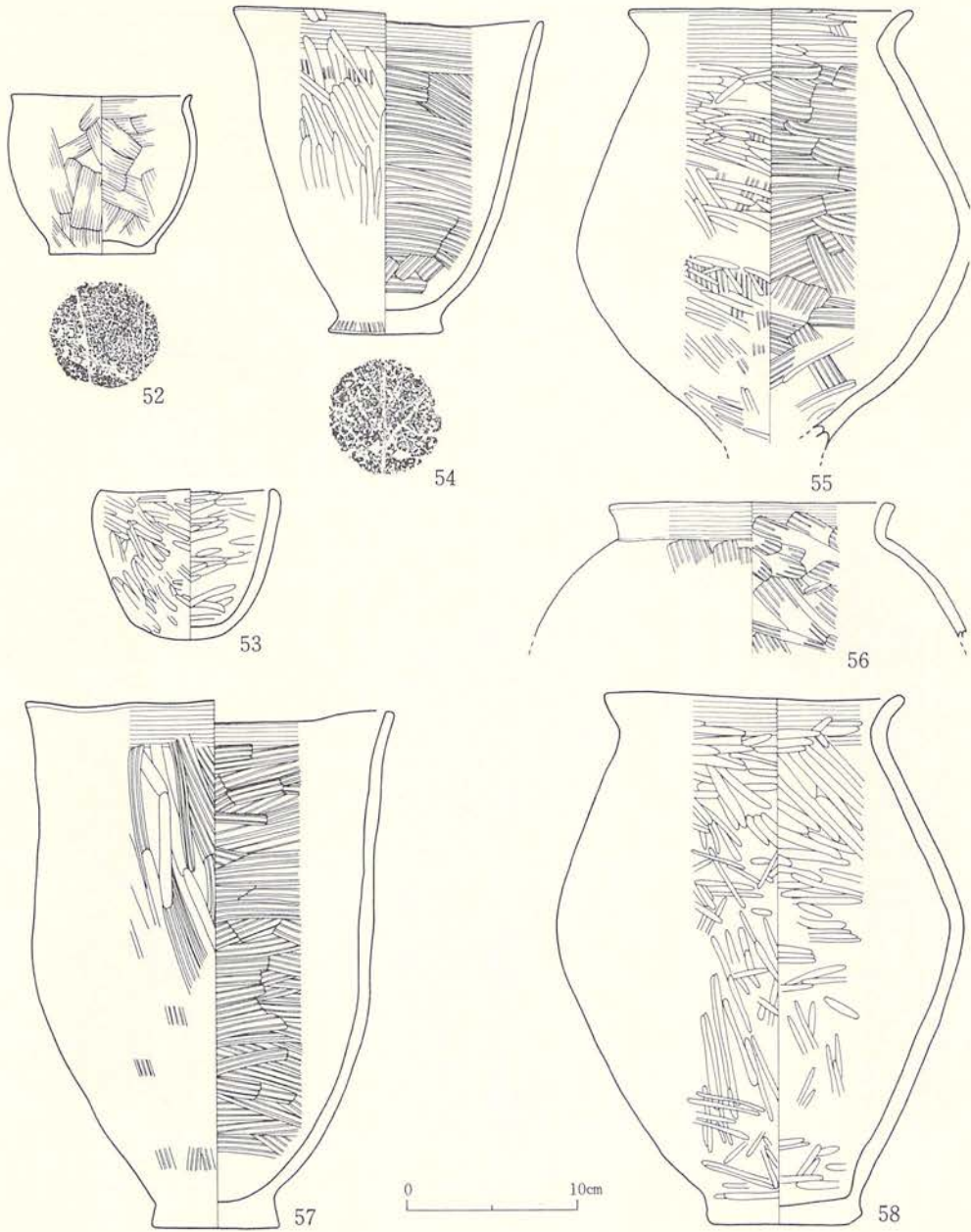


51

No	地点・層位	種類	外面			内面		計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口一底	黒色処理	口径	器高	底径		
45	埋土下部	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	×	18.2	7.4	—	I群A類	55
46	カマド	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	×	18.4	7.1	—	I群A類	55
47	No.5	土師器坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	18.3	5.9	—	I群A類	55

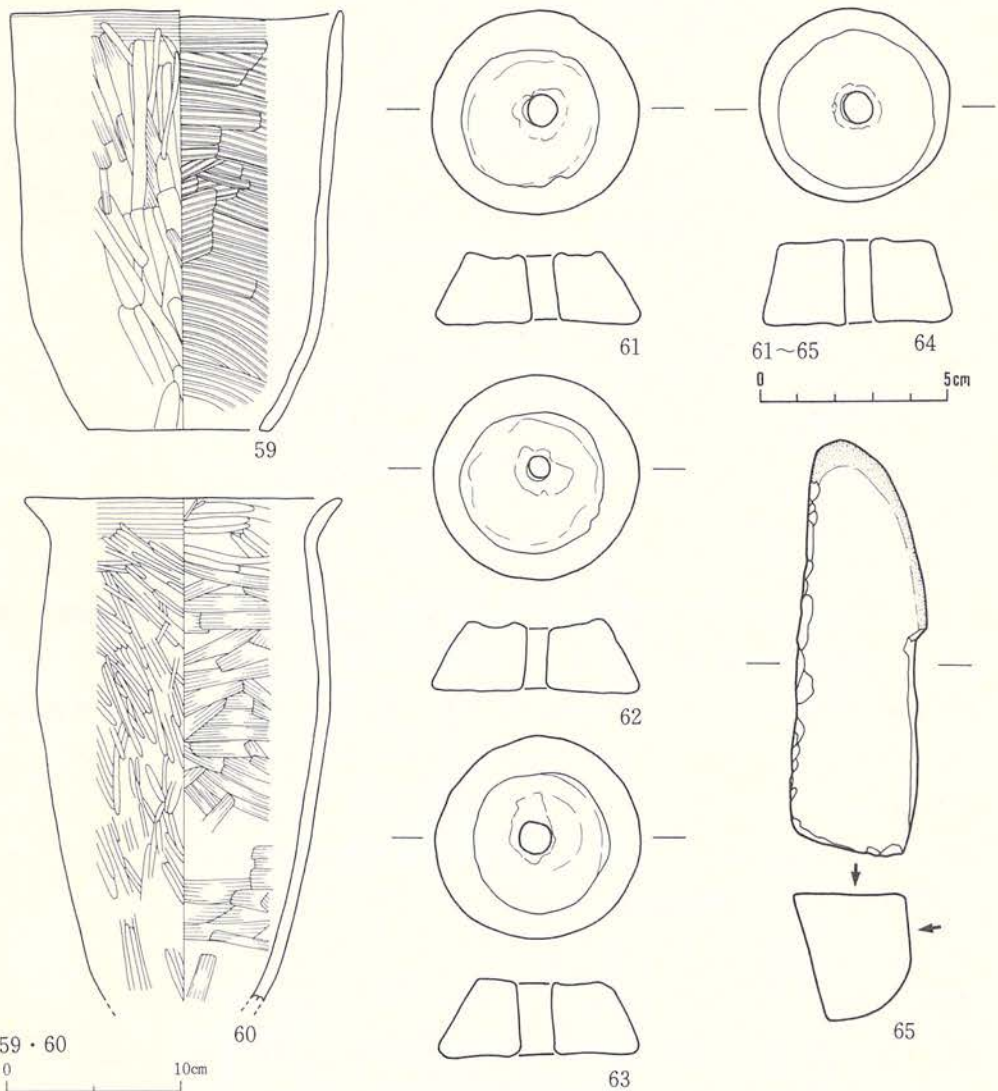
No	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
48	埋土上部	土師器甕	—	ヘラナデ・ヘラミガキ	木葉底	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	(13.0)	10.0		
49	埋土下部	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目・ヘラミガキ	木葉底	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	19.2	37.5	8.8	L1a	57
50	カマド	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目・ヘラミガキ	小凹凸	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	19.6	33.0	7.8	L1a	57
51	カマド	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目・ヘラミガキ		刷毛目	刷毛目	ナデ	19.8	35.0	7.8	L1a	58

第39図 GII-1 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	器 高	底 径		
52	埋土上部	土師器甕	(ナデ)	ナデ	木葉底	(ナデ)	ナデ	ナデ	(10.6)	( 9.3)	6.2	S	
53	床面	土師器鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10.2	8.6	—		57
54	床面	土師器壺	ヨコナデ	ヘラミガキ・刷毛目	木葉底	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	17.9	19.0	6.6	M 2	58
55	No. 4	土師器壺	ヨコナデ	ヘラミガキ・刷毛目	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	16.8	(26.0)	—		58
56	埋土中部	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目	—	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	16.7	( 8.3)	—		
57	床面	土師器甕	ヨコナデ	刷毛目・ヘラミガキ	木葉底	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	21.7	30.8	7.5	L 1 a	58
58	床面	土師器甕	ヨコナデ	ヘラミガキ	ナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.6	31.3	8.0	L 2 a	59

第40図 GⅡ-1住居跡出土遺物(2)

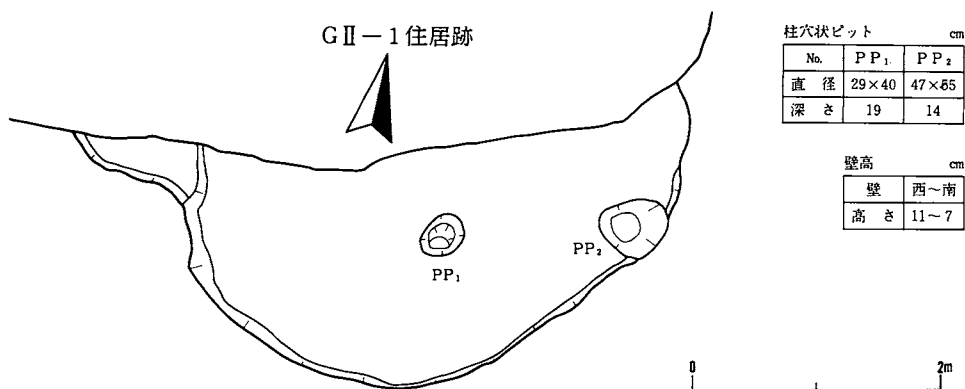


No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値:cm			分 類	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口縁部	胴 部	底 部	口径	器高	底径		
59	床面直上	土師器壺	ヨコナデ	ヘラナデ・ヘラミガキ	無庄	ヨコナデ	刷毛目	—	19.2	24.2	—		59
60	床面	土師器甕	ヨコナデ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ミガキに近いヘラナデ	—	18.2	(29.0)	—	L 1 a	

No	地点・層位	器 種	計 測 値:mm			重量:g	特 徴・備 考	図版
			上面径	下面径	厚 さ			
61	堀土上部	土製紡錘車	37	55	19	54.0	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
62	埋土上部	土製紡錘車	38	55	20	54.6	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
63	埋土上部	土製紡錘車	37	55	20	53.9	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
64	埋土下部	土製紡錘車	41	51	23	58.4	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60

No	地点・層位	器 種	計 測 値:mm			重量:g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長 さ	幅	原 さ				
65	埋土下部	不明	110	31	34	190	チャート	2面を磨りあるいは敲きに使用。	60

第41図 G II - 1 住居跡出土遺物(3)



第42図 G II-2 住居跡実測図

以上を失っている。

**平面形** 残存部からは円形基調と推定できる。 **規模** 東西は4.1mが残存 **床面積** 不明  
**埋土** 火山灰起源の褐色土が卓越し、汚れ火山灰が一部を占める。

**壁の状態** 外傾。東壁のG II-1住居跡寄りの部分は消滅。 **壁高** 7～11cm **壁溝** 残存部には認められない。

**床面** 軟らかい。

**柱穴** 柱穴状ピットは pp 1 と pp 2 がある。本遺構が部分的にしか残っていないこともあり、本遺構との具体的な関係は不明である。

**炉** 残存部には検出されていない。

#### 遺物

**出土状況** 上述のような検出状況であり、出土量は少ない。土器と剝片類がある。

**土器** I群に分類できる縄文土器の胴部破片9点が埋土から出土しているだけである。

**剝片類** 1点だけである。

#### まとめ・遺構の時期

出土遺物が少なく、時期は推定になるが、周辺に分布する縄文時代の遺構や縄文土器の在り方からは縄文時代前期前葉（縄文土器 I 群期）に分類できる。

#### G II-3 住居跡

**遺構** (第43図、図版19・20)

**検出状況・重複関係** 北側約3分の1は調査区域外にある。重複するG II-103落とし穴は掘り方面に検出された。G II-151炭窯は本遺構の埋土に載る状態で構築されている。

**平面形** 隅丸方形 **規模** 6.0m×不明 **床面積** 精査部分は20.4m<sup>2</sup> **主軸方向** S-31°-

カマド

本体(部)	長さ	—	煙道部	長さ	154	煙出し部	径	36×40
	幅	—		内径	20		深さ	80
	焼土厚さ	55×75						
		7						

壁高		cm
西	高さ	44
南		47
東		49

ピット

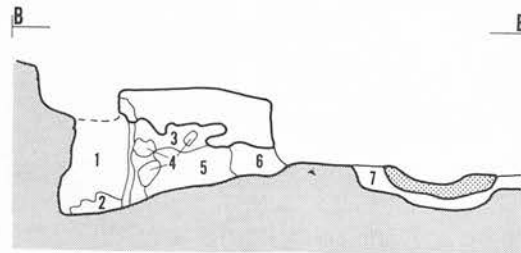
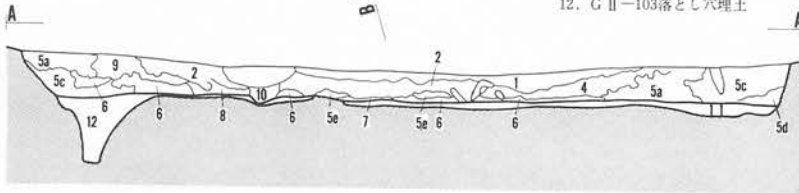
No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>
開口部径	42×48	45×65	30×30
深さ	15	23	10



柱穴

No.	PP <sub>1</sub>	PP <sub>2</sub>
直径	35×38	21×35
深さ	41	58
備考	柱痕跡 14×27	

1. 黒褐色。
2. 黒色。塊状の火山灰・暗褐色土を部分的に含む。
3. 5b. 欠番
4. 暗褐色。塊状の褐色土・火山灰を少量含む。
- 5a. にふい黄褐色。
- 5c. にふい黄褐色。汚れ火山灰
- 5d. 褐色。炭化物が散在。
- 5e. 暗褐色。炭化物やや多く、焼土の小塊を一部に含む。
6. 黄褐色。
7. 明赤褐色。焼土
8. 9. 黄褐色・黒褐色。
10. 黒色。
11. 黄褐色。掘り方埋土
12. G II-103落とし穴埋土



1. 褐色。
2. 黒褐色。炭化物粒を少量含む。
3. 褐色。
4. 黄褐色。火山灰塊。
5. 褐色。焼土粒を含む。
6. 黄褐色。炭化物・焼土粒を含む。
7. 黄褐色。住居掘り方埋土



S = 1/40

第43図 G II-3 住居跡実測図

E

**埋土** 暗褐色～黒色の土が卓越し、壁際や最下部は汚れ火山灰が主に占める。2層は白頭山一苦小牧火山灰の大小塊を少量含む。

**壁の状態** 外傾 壁高 44～49cm 壁溝 明瞭な壁溝は認められない。ただ、主に東壁と西壁の壁際には深度の小さな小ピットが多数存在し、壁溝と同様の役割を果たすものであろう。

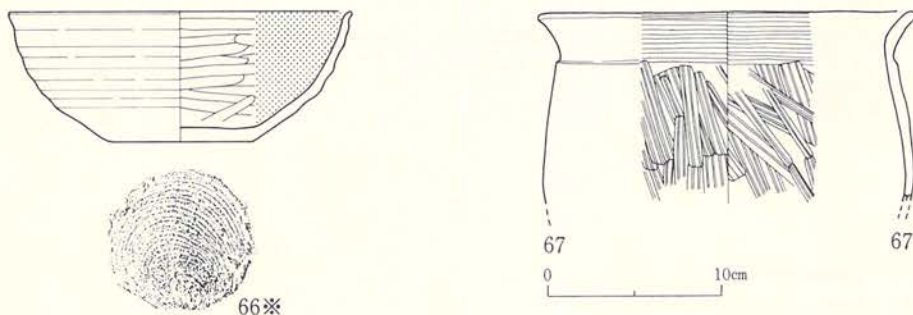
**床面** 硬く締まっているが、壁寄りの部分はやや軟らかい。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

**柱穴** 二つの隅からいくぶん入った位置に、pp 1 と pp 2 が検出された。pp 1 は柱痕跡と掘り方が識別でき、柱痕跡の平面形は楕円形である。pp 2 は長方形の掘り方である。対になる2個は調査区域外に存在することが予想される。

**カマド：位置** 南壁中央と南西隅の中間 **本体** 崩壊し、粘土質シルトの薄層が火床部の上を覆うにすぎない。火床部はよく焼けている。 **煙道部・煙出し部** くりぬき式である。底面は緩やかに傾斜して下がり、煙出し部に移行する。側壁や天井部は焼けて赤褐色に変化している。

**付属施設** P 1 がカマド火床部の右隣りに存在する。平面形が円形の浅いピットで、埋土は炭化物粒や焼土粒を多く含む暗褐色土である。P 2 は南壁中央からわずかに東側に寄った位置にある。平面形は楕円形で、深度は小さい。P 3 は床面中央からわずかに東壁に寄った位置にある。深度は小さいが、ロート状になる。壁面は良く焼け、下底部は還元状態になって青黒色に変化している。

以上の3基のピットのうち、P 2・P 3は共伴する。しかし、P 1 は床面を除去する際に検



No	地点・層位	種類	外 面			内 面		計測値：cm			分類	図版	
			口縁部	胴部	底部	口ー底	黒色処理	口径	器高	底径			
66	埋土	土師器坏	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り痕	ヘラミガキ	○	13.8	5.2	5.8	II群		
No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面		計測値：cm			分類	図版	
67	P 2埋土	土師器壺	ヨコナデ	刷毛目？ ヘラミガキ？	—	ヨコナデ	刷毛目？ ヘラミガキ？	—	22.0	(11.0)			—

第44図 G II - 3 住居跡出土遺物

S = 1/3 (※)

出されたことと位置的には右側壁の下位に存在したことが考えられ、本遺構の廃絶時の共伴は考え難い。P 3 はなんらかの工作用の施設であることが推定される。

**その他** 炭化材と焼土が埋土下部から床面直上の層準に分布する。分布密度が濃いのはカマド火床部上から西壁の間の狭い範囲で、その北側の調査区域と接する部分やP 2の周辺にも分布するが少量である。材は5～7cm角の角材と推定されるものなどを含む。焼土は炭化材の下位に主に認められ、層厚は3～4cmである。壁際では床面よりも高い位置にあり、床面中央に向かうにつれて床面直上あるいは床面に密着する在り方は焼失住居跡によくみられるものである。材と焼土の絶対量が少ない点に疑問も残るが、焼失に起源するものと推定される。

#### 遺物 (第44図)

**出土状況** 埋土上～下部を中心に、掘り方埋土・P 2埋土から出土している。土器と石器・鉄滓・土製品がある。

**土器** 土師器はほとんどが破片で、甕I b 67と坏II群66を図示できたにすぎない。坏は66以外に破片で1点である。縄文土器片はI群とII群が14点である。

**鉄滓・土製品** 鉄滓は11点133.24gが出土している。土製品は小破片のため鞆の羽口か土製支脚か識別できない。

**その他** 石器は石鏃やピエス・エスキュー・磨石I類、剥片類は5点がある。

#### まとめ・遺構の時期

66・67ほかの出土土器や住居形式・埋土から、平安時代に分類できる。

#### G III区

##### G III-1 住居跡

#### 遺構 (第45図、図版20)

**検出状況・重複関係** 東壁を含む部分をG III-2住居跡(縄文時代)に切られているほか、G III-102落とし穴にも大きく切られている。

**平面形** 北東隅も残存することから、隅丸凸辺長方形を推定できる。南西壁が歪むのは一部を掘りすぎているためかもしれない。 **規模** 2.8(推定)×4.4m **床面積** 8.7m<sup>2</sup>(推定)

**埋土** わずかに汚れ、微量の炭化物を含む火山灰の単層である。

**壁の状態** **外傾** **壁高** 8～19cm **壁溝** 残存部には認められない。

**床面** 硬く締まっている。

**柱穴・炉** 残存部には認められない。

#### 遺物 (第46図、図版47・49)

**出土状況** 埋土から出土しているが、量は少ない。土器と石器・剥片類がある。

**土器** 縄文土器があるが、すべて破片である。全部I群に分類でき、図示例68～72以外は11

点である。

**石器類** 礫石器は磨石 I 類73・74、凹石と礫器 I 類の複合76、凹石と敲石の複合75がある。剥片類は7点である。

#### まとめ・遺構の時期

出土土器や占地・住居形式・重複関係から、縄文時代前期前葉（縄文土器 I 群期）に分類できる。

#### G III-2 住居跡

##### 遺構（第45図、図版20）

**検出状況・重複関係** 多くの遺構と重複している。G III-1・G III-3の住居跡（ともに縄文時代）を切っている。G III-102・104・106の3基の落とし穴には埋土上面から切られている。またG III-55ピット（平安時代）は本遺構の埋土を掘り込んで作られている。

**平面形** 隅丸長方形。北西壁がG III-102落とし穴を挟んでズレているが、壁の把握が難しかったため、掘り足りないことが考えられる。 **規模** 4.9×7.2m **床面積** 29.4m<sup>2</sup>

**埋土** 暗褐色土が大部分を占めるほかは、黒褐色土や褐色土・黄褐色土が上位や壁際の一部を構成する。全体に非常に硬く締まっている。

**壁の状態** 外傾 **壁高** 24～29cm **壁溝** 伴わない。

**床面** 壁寄りの周辺部を除いては硬く締まっている。

**柱穴** 数多くの柱穴状ピットが検出されている。しかし図に示した pp 1～pp 7 以外は深度が20cm以下の小さいもの、形態的に不適当なものである。また pp 1～pp 7 のなかでも、pp 3 や pp 6 を除いては配置の面では適切であることも考えられるが、全体としての配置が明らかではないため、個々の位置づけは不明である。

**炉** 一部が落とし穴に切られているものの、伴わないものと推定される。

##### 遺物（第47図～第51図、図版47～51）

**出土状況** 埋土を中心に、床面・床面直上・柱穴状ピットから出土している。土器と石器・剥片類があり、石器と剥片類の多いことが特徴である。

**土器** I 群に分類できる縄文土器が出土しているが、すべて破片である。図示例77～85以外には67点である。85は胴部下部の破片である。図示していないなかに、丸底になるものとみられる破片が1点ある。

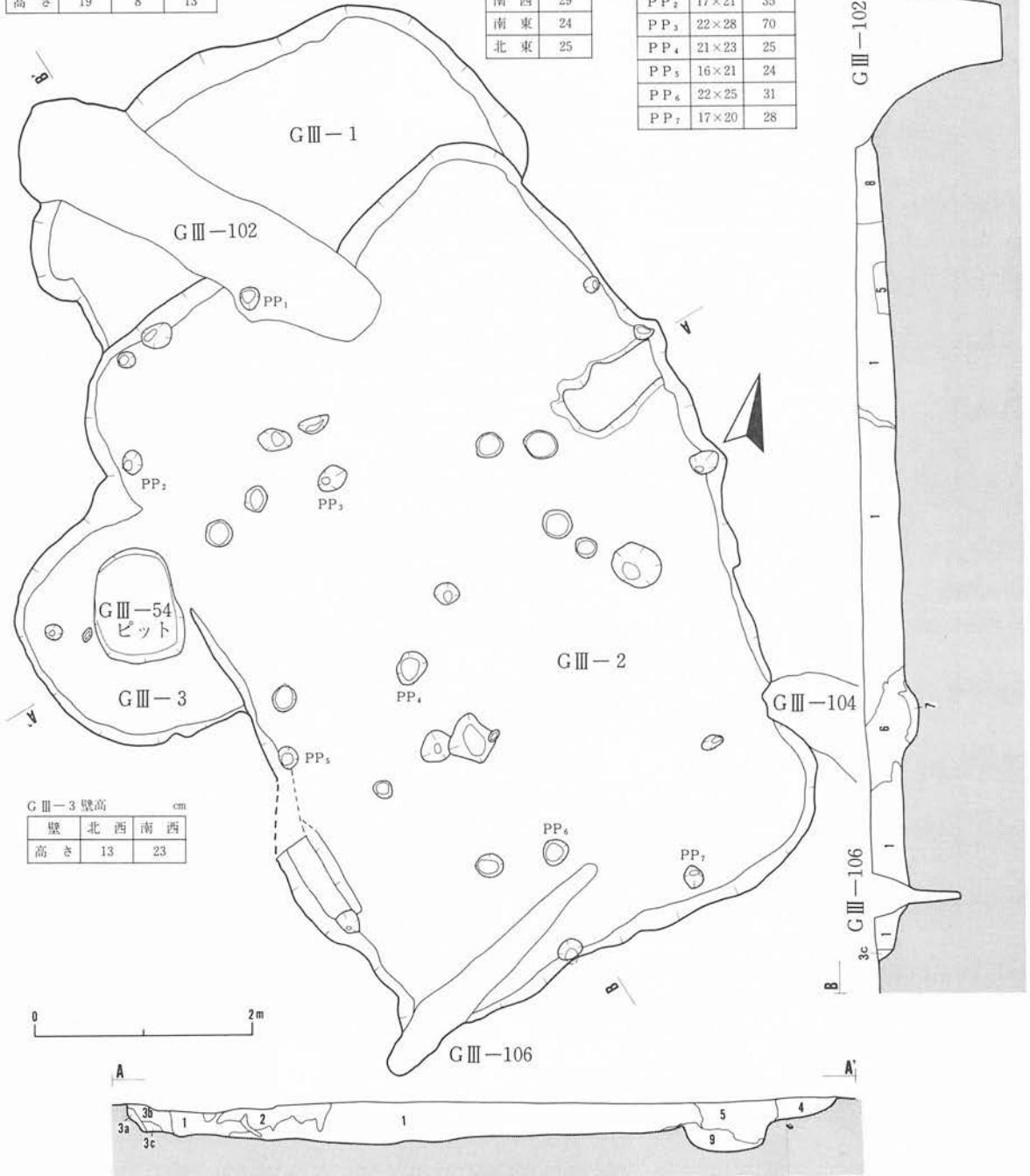
**石器類** 剥片石器はピエス・エスキューが13点と最も多いほか、不定形石器が4点、使用痕のある剥片が3点、石鏃が2点ある。石鏃は無茎平基と無茎円基で、長さが17mmと21mmと小型である。礫石器は礫器 I 類が6点と多いほか、凹石が5点、磨石 I 類が4点、凹石と敲石の複合石器が2点、円盤状打製石器と礫器 II 類が各1点である。磨石 I 類の1点は凹石と複合



壁	北西	南西	北東
高さ	19	8	13

壁	高さ
北西 (11)	
南西	29
南東	24
北東	25

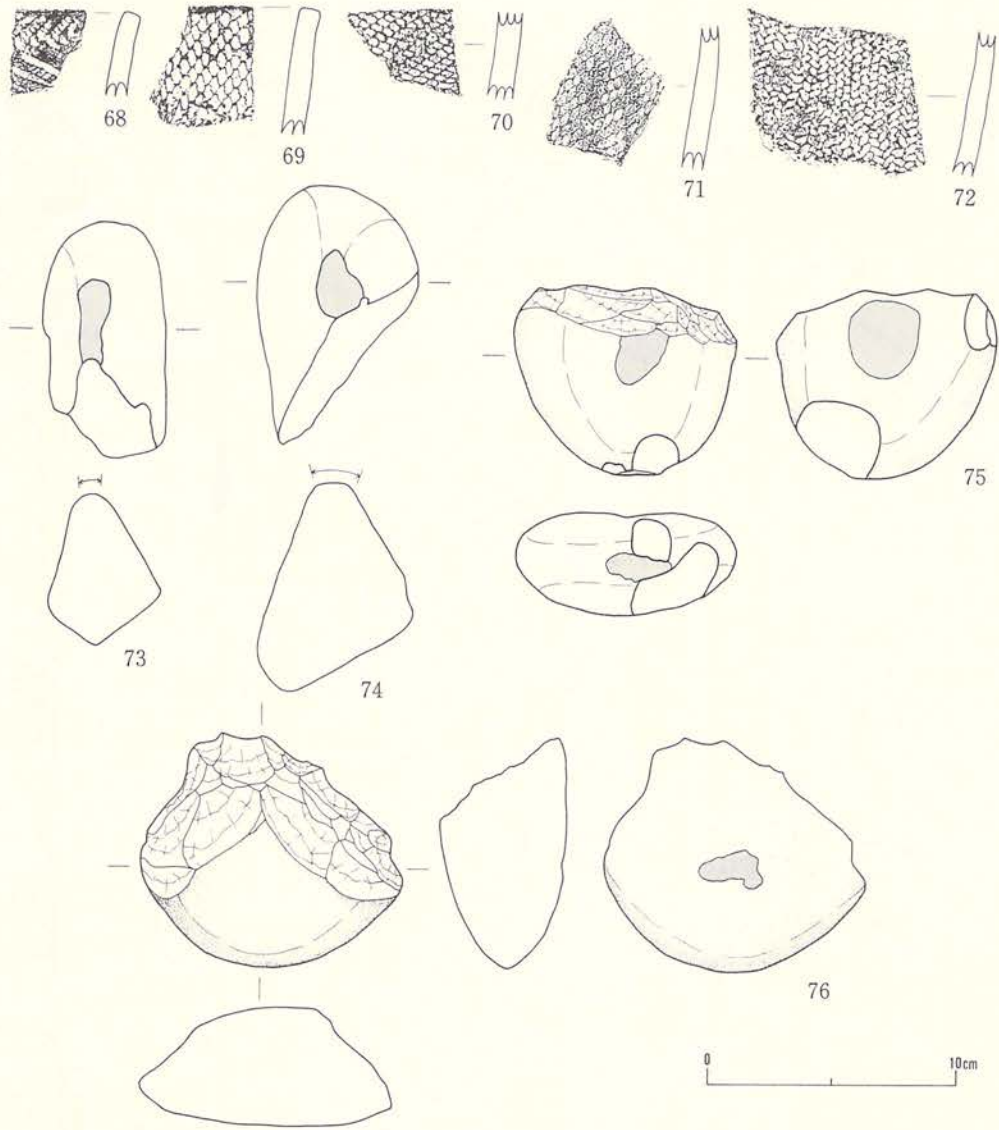
No.	直径	深さ
PP <sub>1</sub>	19×20	36
PP <sub>2</sub>	17×21	35
PP <sub>3</sub>	22×28	70
PP <sub>4</sub>	21×23	25
PP <sub>5</sub>	16×21	24
PP <sub>6</sub>	22×25	31
PP <sub>7</sub>	17×20	28



壁	北西	南西
高さ	13	23

1. 暗褐色。火山灰の大塊を全体に、炭化物を少量含む。
2. 褐色。
- 3a-3c. 黄褐色。火山灰。3aは炭化物をわずかに含む。
4. 黄褐色。汚れ火山灰・炭化物を少量含む。
5. 褐色。G III-54ピット埋土。
6. 黒褐色。火山灰塊をわずかに含む。
7. 黒褐色。暗黒色。
8. 黄褐色。褐色。汚れ火山灰。
9. 黄褐色。汚れ火山灰。G III-54ピット埋土。

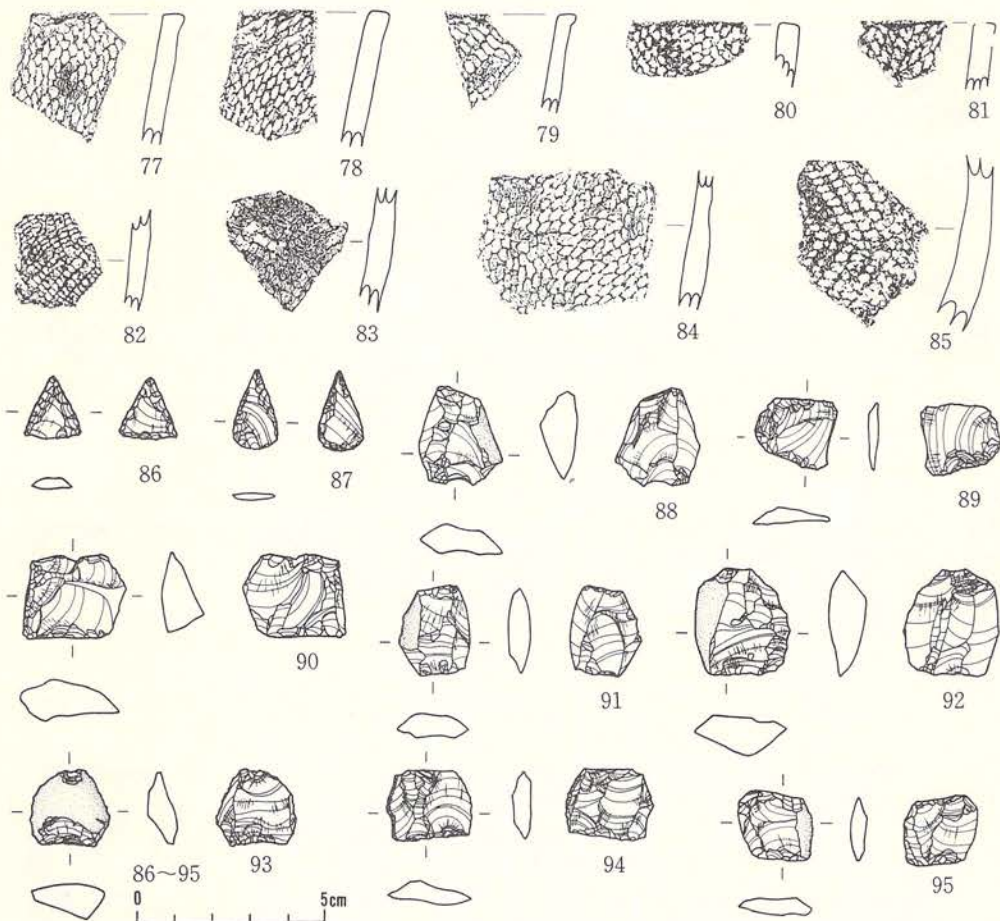
第45図 G III-1 ~ G III-3 住居跡実測図(1)



No	地点・層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	分類	備考	図版
68	埋土	深鉢	口縁部	非結束羽状縄文。口唇部角張る		繊維多	I-1-(1)		
69	埋土中部	深鉢	口縁部	複節。最終段撚り戻し。口唇部角張る	ナデ	繊維多	I-1-(1)		47
70	埋土中部	深鉢	胴部	LRL		繊維多	I-2-(1)		
71	埋土中部	深鉢	胴部	複節。最終段撚り戻し	ミガキ	繊維多	I-2-(1)		
72	埋土中部	深鉢	胴部	組紐		繊維多	I-2		47

No	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
73	床面	磨石I類	93	48	60	320	アルコース砂岩	折損。機能面幅13mm	
74	床面直上	磨石I類	98	65	78	455	硬砂岩	折損。機能面幅17mm	
75	床面	凹石+敲石	75	90	42	400	流紋岩	凹石-1。凹は両面。敲きは下面	49
76	埋土	礫器I群+凹石	92	103	47	490	長石珪岩	礫器I-1。凹は浅い	49

第46図 GⅢ-1 住居跡出土遺物

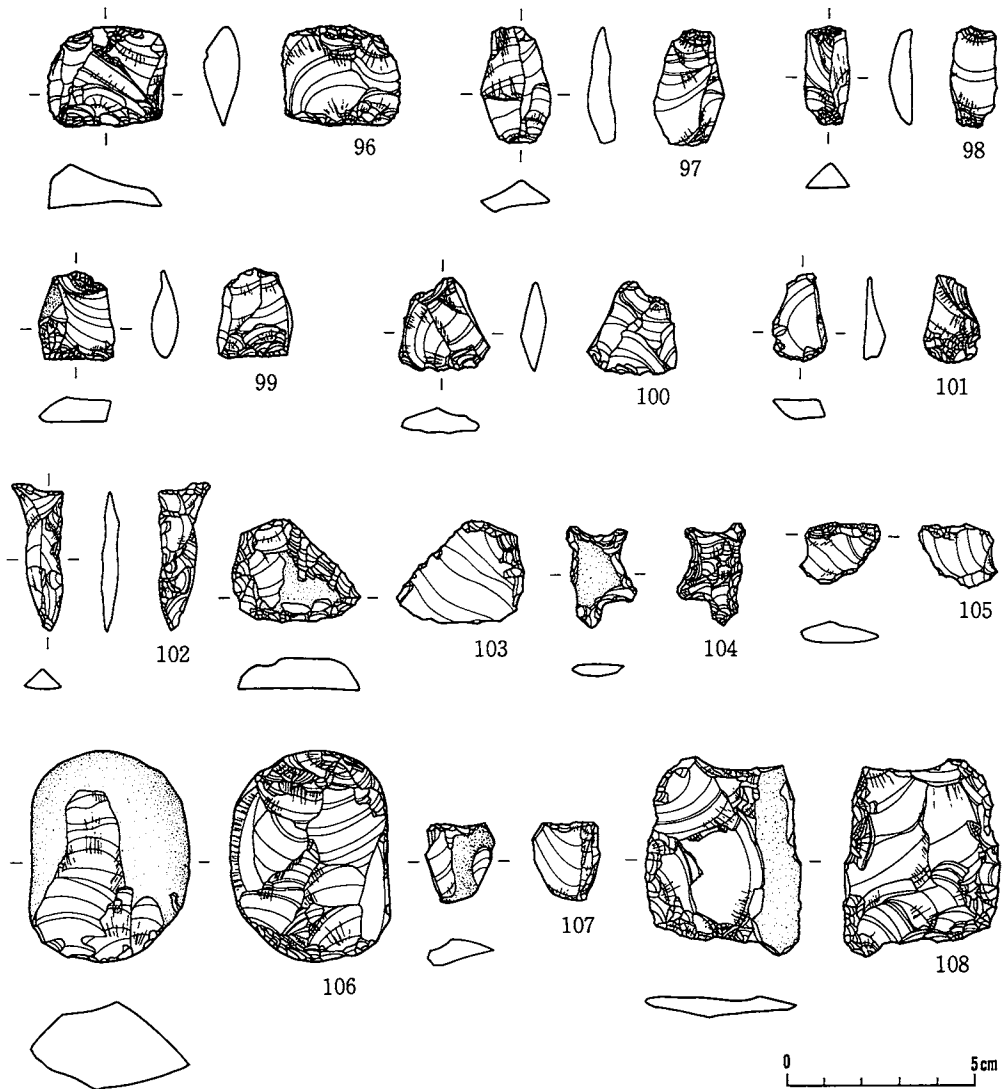


No	地点・層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	分類	備考	図版
77	埋土	深鉢	口縁部	組紐。口唇部角張る	ナデ	繊維多	I-1		47
78	埋土	深鉢	口縁部	複節。最終段捲り戻し。口唇部角ばる	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
79	埋土	深鉢	口縁部	LR。口唇部肥厚	平滑	繊維多	I-1-(1)		
80	埋土	深鉢	口縁部	原体不明。口唇部角張る	繊維痕	繊維多	I-1		
81	埋土	深鉢	口縁部	複節。最終段捲り戻し。口唇部角張る	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		
82	埋土	深鉢	口縁部	非結束羽状縄文	繊維痕	繊維多	I-2-(1)		
83	埋土	深鉢	口縁部	LR・RL	繊維痕	繊維多	I-2-(1)		
84	埋土	深鉢	胴部	原体不明	繊維痕	繊維多	I-2		47
85	埋土	深鉢	胴部	複節	繊維痕	繊維多	I-2-(1)	図右が上	

No	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
86	埋土	石鏃	17	15	2	0.6	珪質凝灰岩	平基無茎式	48
87	柱穴	石鏃	21	12	2	0.5	珪質凝灰岩	円基無茎式	48
88	埋土上部	ピエス・エスキュー	25	22	11	4.5	チャート質粘板岩	自然面。刃部2個1対	48
89	埋土	ピエス・エスキュー	18	20	4	1.5	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
90	埋土	ピエス・エスキュー	22	27	11	5.9	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
91	埋土	ピエス・エスキュー	23	19	7	3.0	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
92	検出時	ピエス・エスキュー	28	25	10	7.3	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
93	埋土上部	ピエス・エスキュー	20	21	9	3.5	凝灰質珪質泥岩	自然面。刃部2個1対	48
94	埋土上部	ピエス・エスキュー	19	23	5	2.4	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
95	埋土	ピエス・エスキュー	17	20	4	1.9	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48

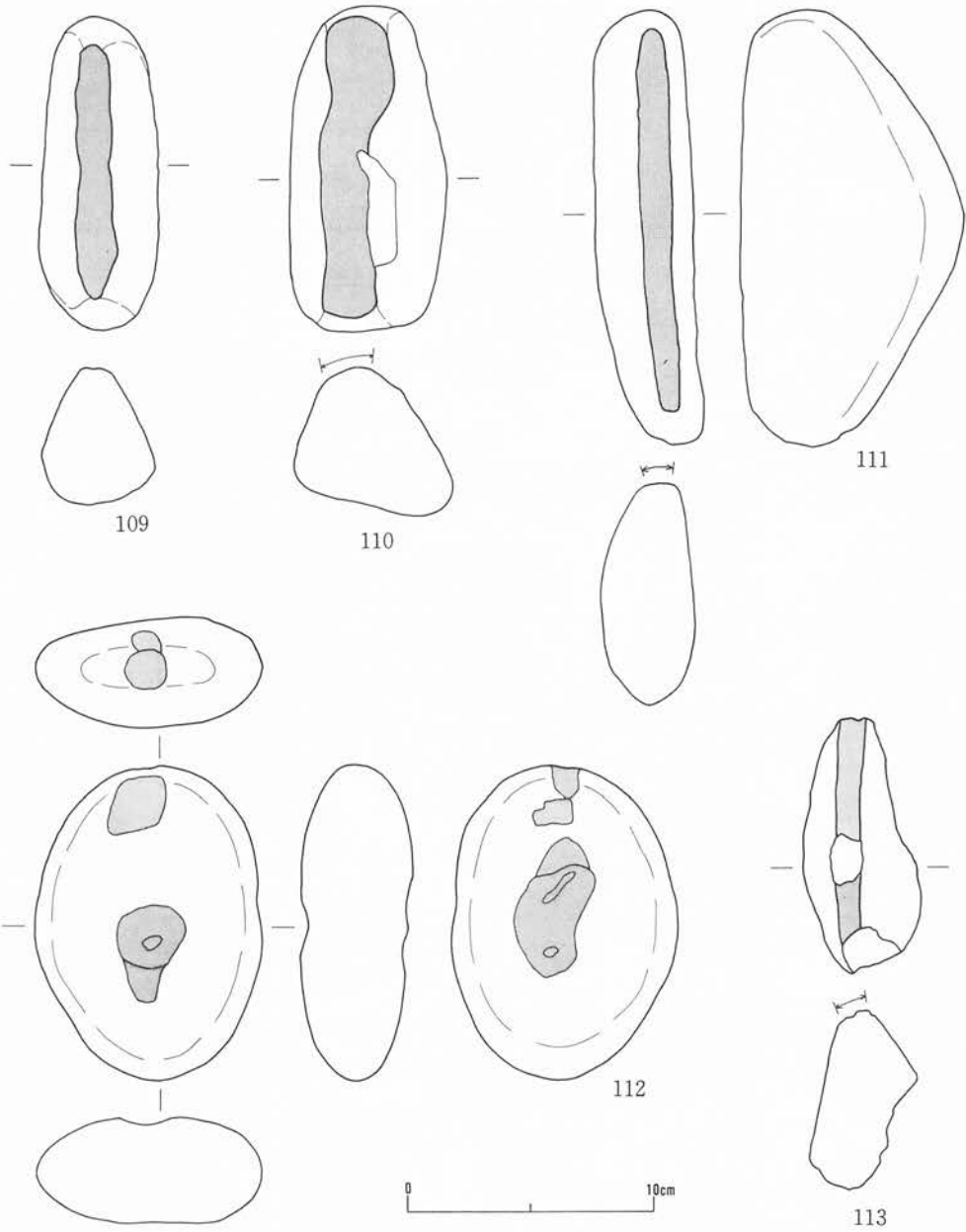
第47図 GⅢ-2住居跡出土遺物(1)

S=1/3



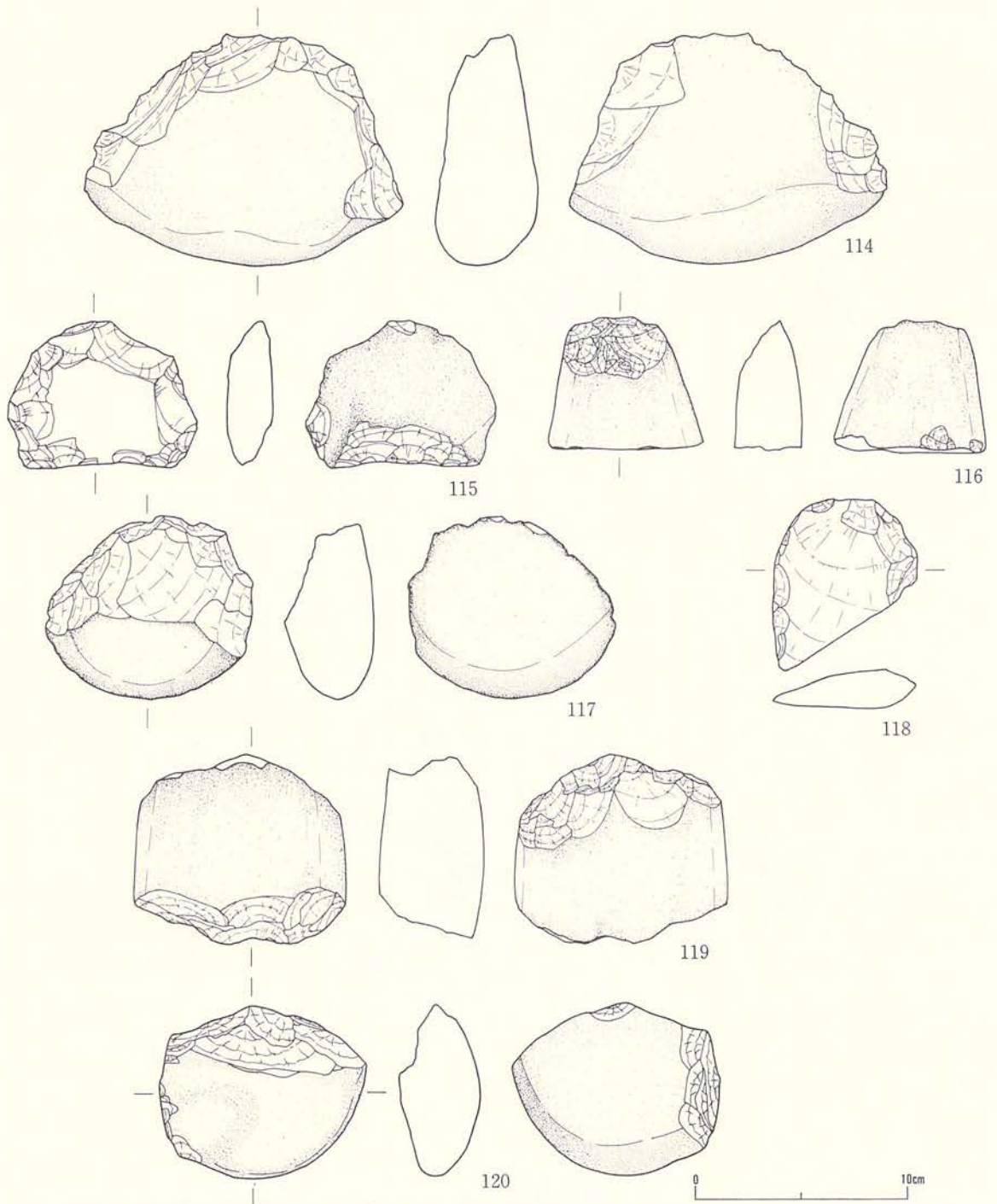
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
96	埋土	ピエス・エスキュー	26	31	11	8.9	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
97	埋土～床面	ピエス・エスキュー	31	18	7	3.2	凝灰質珪質泥岩	刃部2個1対	48
98	埋土	ピエス・エスキュー	26	12	7	1.8	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
99	埋土	ピエス・エスキュー	23	19	6	3.5	凝灰質珪質泥岩	自然面。刃部2個1対	48
100	埋土	ピエス・エスキュー	24	23	6	3.1	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
101	埋土	削片	22	15	5	1.3	珪質凝灰岩	下辺に小剝離痕	48
102	床面直上	不定形石器	37	13	6	1.9	凝灰質珪質泥岩	破片。右辺は両面から細部調整	48
103	埋土	不定形石器	27	33	9	9.1	珪質凝灰岩	折損。折れ面以外細部調整	48
104	埋土	不定形石器	27	18	3	1.6	凝灰質珪質泥岩	自然面。3個の挿入部	48
105	埋土	不定形石器	16	20	6	1.2	珪質凝灰岩	右辺に小剝離痕連続	
106	床面	ピエス・エスキュー	56	42	23	52.9	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対。	48
107	埋土	ピエス・エスキュー	21	18	6	2.4	輝緑凝灰岩	自然面。上下辺に小剝離痕	48
108	埋土	ピエス・エスキュー	51	42	5	14.7	輝緑凝灰岩	自然面。刃部は左右2辺	48

第48図 GⅢ-2住居跡出土遺物(2)



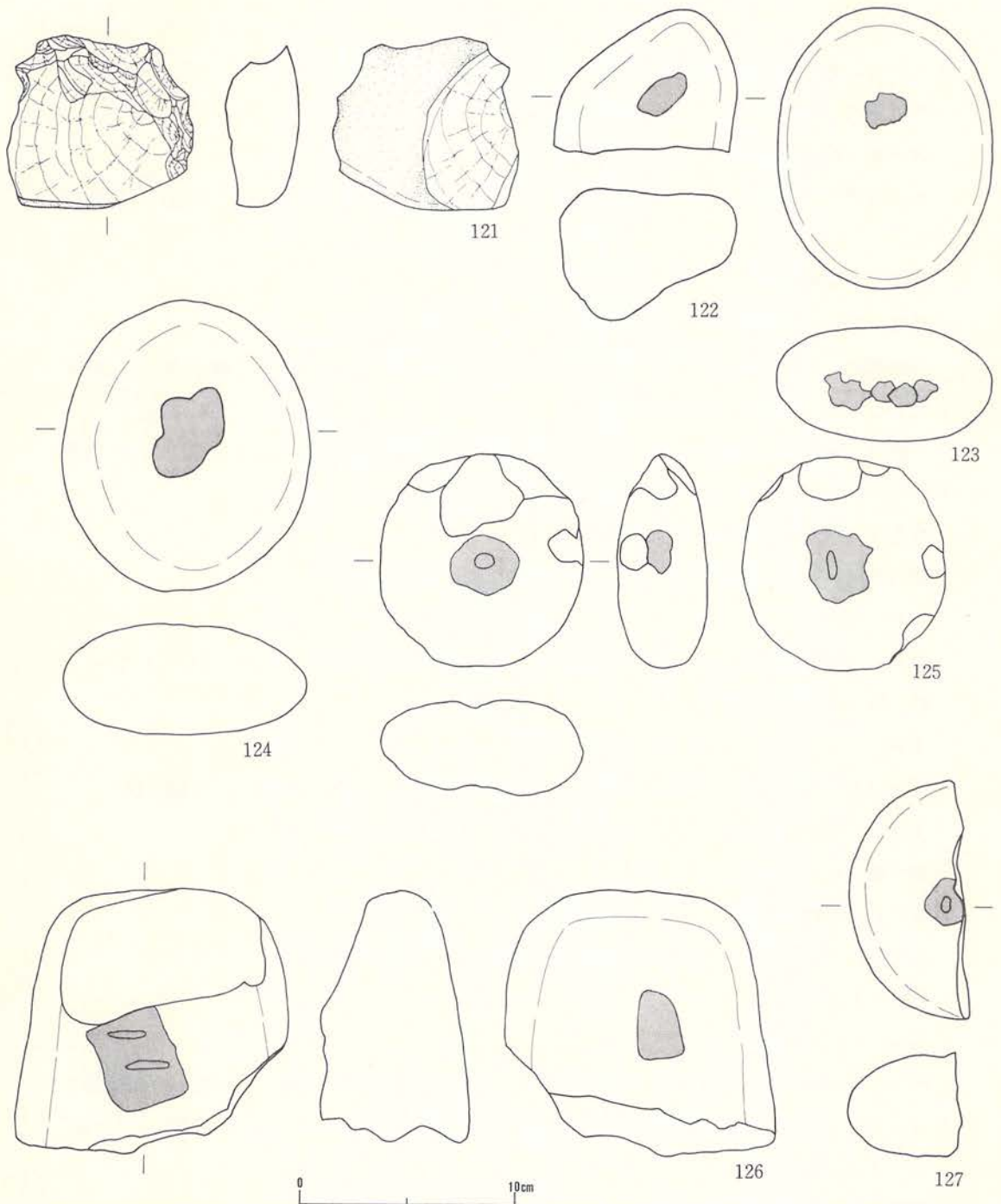
No	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
109	床面	磨石I類	108	48	57	528	花崗閃緑岩 機能面幅15mm	49	
110	埋土中部	磨石I類+凹石	81	88	35	395	長石砂岩 磨石I-1。凹は側面と裏面	49	
111	埋土	磨石I類+凹石	176	90	46	820	硬砂岩 磨石I-1。凹は側面。機能面幅13mm	49	
112	埋土	凹石+敲石	126	92	45	770	硬砂岩 凹石-1。凹は両面	49	
113	埋土	磨石I類	102	46	40	395	花崗閃緑岩 折損。小型。機能面幅10mm		

第49図 GⅢ-2住居跡出土遺物(3)



No.	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
114	床面	礫器Ⅱ類	147	108	46	1010	硬砂岩		50
115	埋土上部	礫器Ⅱ類	89	67	20	165	ホルンフェルス	縁辺部全体に剥離	50
116	埋土	礫器Ⅰ類	62	73	32	255	硬砂岩	礫器Ⅰ-0	
117	埋土	礫器Ⅰ類	85	96	42	450	長石珩岩	礫器Ⅰ-0	50
118	埋土	礫器	68	70	17	120	硬砂岩	折損	50
119	埋土上部	礫器Ⅲ類	87	101	47	650	硬砂岩	礫器Ⅲ-0	50
120	埋土	礫器Ⅰ類	81	96	39	430	輝石珩岩	礫器Ⅰ-0	50

第50図 GⅢ-2住居跡出土遺物(4)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
121	埋土上部	礫器Ⅰ類	86	76	34	280	輝石安山岩	礫器Ⅰ-0	51
122	埋土	凹石	65	82	62	440	花崗閃緑岩	凹石-0	
123	床面直上	凹石+敲石	130	99	52	1390	花崗閃緑岩	凹石-1。敲打痕は下端	50
124	床面	凹石	134	116	51	1130	アルコース砂岩	凹石-0	50
125	埋土上部	凹石+敲石	99	95	41	598	花崗閃緑岩	凹石-1。敲打痕は両側縁	51
126	埋土	凹石	122	120	71	1550	硬砂岩	凹石-0。凹は両面	51
127		凹石	110	53	49	420	輝石安山岩	折損。凹は深い	

第51図 GⅢ-2住居跡出土遺物(5)

している。剝片類は451点と多い。剝片石器から得られるものが228点、礫石器から得られたものが223点とほぼ半々である。総重量は約2.5kgになる。

#### まとめ・遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地・重複関係から、縄文時代前期前葉（縄文土器Ⅰ群期）に分類できる。

#### GⅢ-3 住居跡

遺構（第45図、図版20）

検出状況・重複関係 重複するGⅢ-2住居跡・GⅢ-54ピット（ともに縄文時代）に切られているため、詳細が不明な点が多い。

平面形 残存部からは円形あるいは楕円形などの円形基調であることが考えられる。規模東西長2.3mが確認できる。床面積 不明

埋土 褐色土が残存しているものの詳細は不明である。

壁の状態 外傾 壁高 13～23cm 壁溝 残存部には認められない。

床面 軟弱である。

柱穴 南壁際にあるpp 1（径14×15cm・深さ6cm）以外に柱穴状ピットは認められない。

炉 残存部には伴わない。

#### 遺物

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は非常に少ない。土器と剝片類がある。

土器 Ⅰ群に分類できる縄文土器片が3点出土しているにすぎない。

剝片類 14点が出土している。

#### まとめ・遺構の時期

出土遺物や重複関係・占地から、縄文時代前期前葉（縄文土器Ⅰ群期）に分類できる。

#### GⅢ-4 住居跡

遺構（第52図、図版21）

検出状況・重複関係 重複するGⅢ-105落とし穴との新旧関係は把握していない。ただ落とし穴を検出して精査を進めた段階では住居跡の存在を把握できなかった点からは落とし穴が新しい可能性が強い。

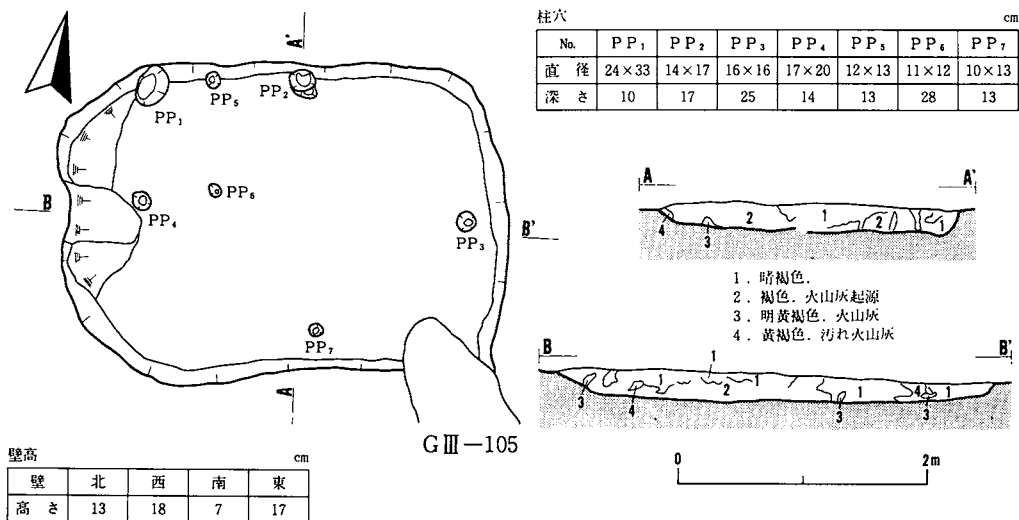
平面形 凸辺隅丸長方形 規模 2.5×3.6m 床面積 7.1m<sup>2</sup>

埋土 暗褐色土や褐色土が卓越し、火山灰起源の明黄褐色土・黄褐色土が塊状に含まれる。全体に硬く締まっている。

壁の状態 外傾 壁高 7～18cm 壁溝 伴わない。

床面 全体に硬く締まっている。





第52図 GⅢ-4 住居跡実測図

**柱穴** 柱穴状ピットは pp 1～pp 7 の 7 個が検出されている。pp 5～pp 7 は直径が小さく、深度は10～28cmと小さい。位置的には pp 1～pp 4・pp 7 が柱穴である可能性が強いものの、それらだけで柱穴の全部とは考えられず、全体の配置については不明である。

**炉** 伴わない。

**その他** 西壁は一般に緩やかに傾斜している。とくに中央部は床面中央にむかって傾斜面が張り出すとともに非常に硬く締まり、色調は黒色に変化している。「出入口」に類する施設と推定できる。

**遺物** (第53図、図版48・51)

**出土状況** 埋土から出土しているが、少量である。土器と石器・剥片類がある。

**土器** I群に分類できる縄文土器の胴部破片が30点あるにすぎない。

**石器類** 剥片石器は石鏃、礫石器は磨石I類と磨石II類がある。剥片類は10点である。

**まとめ・遺構の時期**

出土遺物や住居形式・占地から、縄文時代前期前葉(縄文土器I群期)に分類できる。

**H I 区**

**H I - 1 住居跡**

**遺構** (第54図、図版22)

**検出状況・重複関係** H I - 51ピット(平安時代)と重複し、切っている。

**平面形** 隅丸凸辺長方形 規模 3.1×3.6m 床面積 7.7m<sup>2</sup> 主軸方向 N-40°-W

**埋土** 上半は黒褐色土、下半は褐色土や暗褐色土が占める。黒褐色土は白頭山-苦小牧火山

灰の大塊、下半で卓越する 3 b 層は十和田 a 火山灰の小塊を少量含む。

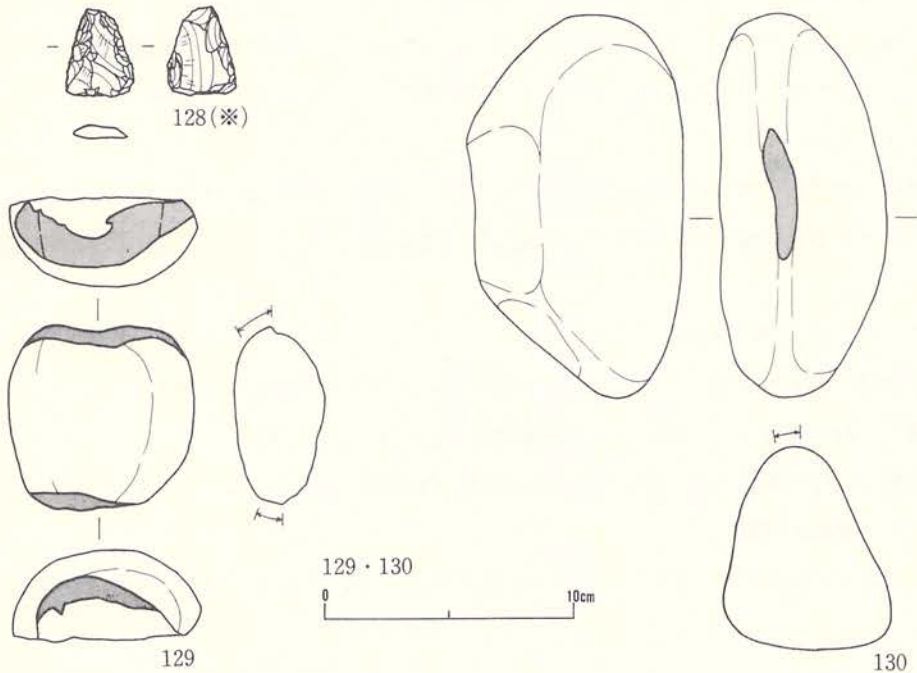
壁の状態 外傾 壁高 32~46cm 壁溝 伴わない。

床面 中央を中心にした範囲が硬く締まっている。 掘り方 東側約 2 分の 1 に伴い、南壁際が深い。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北西壁中央からわずかに北東壁寄り 本体 残存状態は良くないが、シルトで構築された右側壁が一部確認できる。火床部のうえや本体周辺部には亜円や亜角の巨礫が散在するが、本体の構築礫が崩壊・移動したことが考えられる。火床部はよく焼けている。 煙道部・煙出し部 くりぬき式である。煙道部底面は緩やかに傾斜して下がってゆき、煙出し部に続く。天井部や煙出し部の側壁はよく焼け、橙色や赤褐色に変化している。

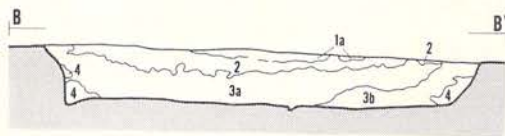
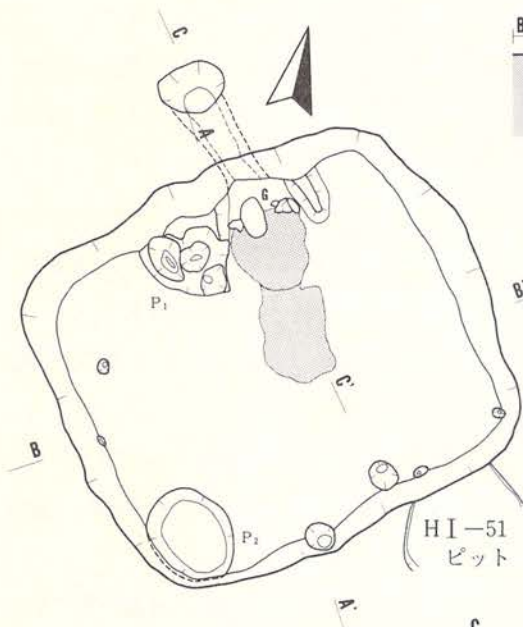
付属施設 P 1 がカマドの左脇に存在する。平面形が不整円形の小型のピットである。南西



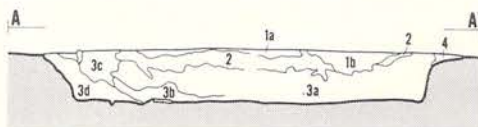
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
128	埋土	石鏃	23	18	3	1.4	輝緑凝灰岩	身部折損。平基無茎式	48
129	床面直上	敲石	73	74	35	365.0	粘板岩	敲打痕は両端	51
130	床面	磨石 I 類+凹石	153	87	67	1145.0	花崗閃緑岩	磨石 I-1。凹は左側面	51

S=1/2(※)

第53図 GⅢ-4 住居跡出土遺物



- 1a・1b. 黒褐色。
- 2. 黒褐色。火山灰の大塊が散在する。
- 3a. 褐色。T<sub>a</sub>-aの小塊が点在。炭化物が散在する。
- 3b・3c. 暗褐色。炭化物が散在する。
- 3d. 褐色。炭化物をわずかに含む。
- 4. 褐色。汚れ火山灰。炭化物をわずかに含む。

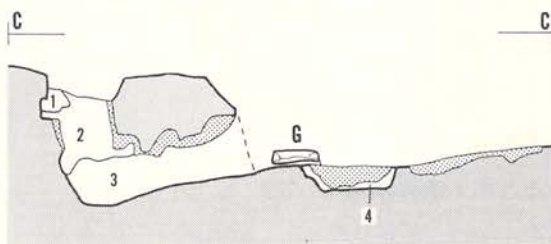


カマド		cm						
本体	長さ	97+	標準部	長さ	100	埋出し部	径	40×52
	幅	97+	内径	20	深さ		70	
部	焼	径	57×65					
土	厚さ	10						

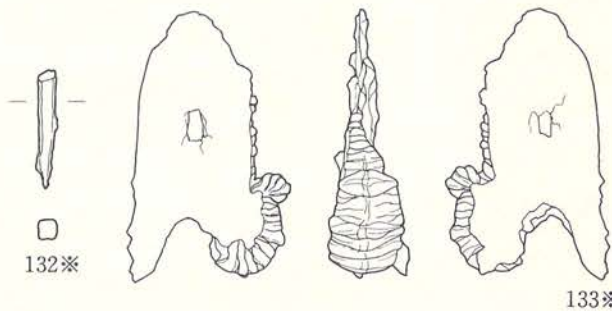
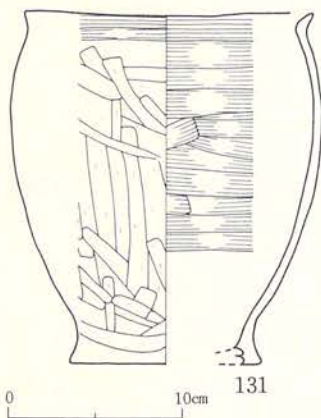
壁高		cm	
壁	高さ		
北西	39		
南西	46		
南東	32		
北東	35		

ピット			cm	
No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>		
開口口径	55×70	62×78		
深さ	23	26		



S = 1/40



No.	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
131	カマド上部	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	不明	ヨコナデ	ヘラナデ	—	16.5	20.0	11.0	M1	59

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
132	カマド	不明	31	5	5	1.1	一端欠失。断面は方形で、一端が細く尖る。釘か。	
133	埋土	鉄形鉄製品	71	31	20	16.3	無茎。右側縁肥厚。中央部の目釘は両面で折り返し。	62

S = 1/2 (※)

第54図 HI-1 住居跡実測図・出土遺物

隅にあるP 2は平面形が楕円形で、深度はやや小さい。ともに共伴するピットである。

**その他** カマド前面の床面が焼け、北側は火床部と接している。径50×74cmの不整楕円形で、層厚は小さい。また埋土下部～床面の層準には炭化材が散在していたが、少量である。それらは住居の焼失に関連したものではない。前者については炉のような機能が考えられる。

**遺物** (第54図、図版59・62)

**出土状況** 埋土を中心に、カマド・床面直上・床面・煙道部から出土しているが、量は多くない。土器と石器・琥珀・鉄製品・剝片類があり、琥珀が62点と多いのが特徴である。

**土器** 土師器は図示した甕M I 131以外はすべて破片である。坏は認められない。縄文土器はII群の破片が1点である。

**琥珀** 破片62点38.98gが埋土中・下部を中心に、埋土上部・P 1埋土・床面から出土している。個別の重量は最小0.01gから最大3.48gとバラツキがあるが、約73%が1g以下の極小細片である。

**鉄製品** 132は一端を失っている。一端が細く尖り、釘かもしれない。133は無茎の鏃に形状が似ている。右側縁の基部側約 $\frac{1}{2}$ が20mmほど錆のため肥厚する。中央部に目釘がみられ、両面に折り返されている。類例は27・34にもあり、銚の類と推定しておいた。

**その他** 石器は打製石斧の破片があり、剝片類は1点である。

**まとめ・遺構の時期**

出土遺物と住居形式から、平安時代に分類する。

**H II区**

**H II-1 住居跡**

**遺構** (第55図、図版23)

**検出状況・重複関係** 南東隅を含む南壁の東側約2分の1は縄文時代前期前葉の不整形落ち込みを埋土から掘り込んで壁にしていたために把握できなかった。

**平面形** 隅丸方形 **規模** 2.5×3.5m **床面積** 6.8m<sup>2</sup> **主軸方向** N-31°-W

**埋土** 褐色土が壁際から床面の大部分、黒色土がその上位を占める。褐色土は白頭山一苦小牧火山灰の大小塊を含み、一部では量が多い。また同火山灰は薄層として断続的に観察できる部分がある。

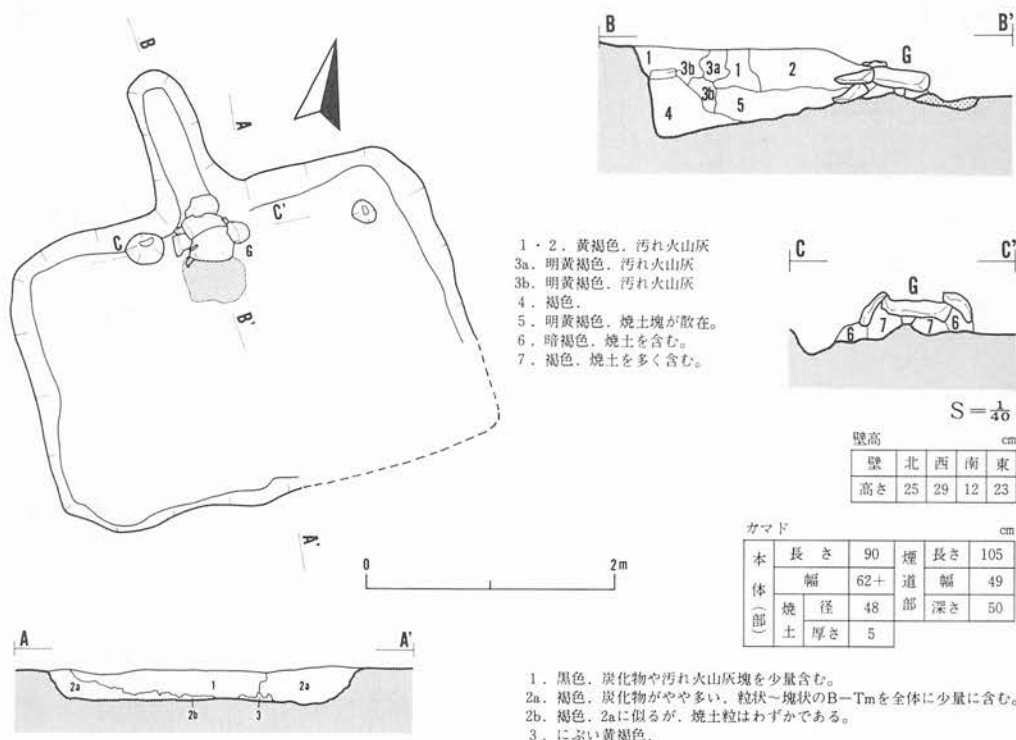
**壁の状態** 直立～外傾 **壁高** 12～29cm **壁溝** 伴わない。

**柱穴** 伴わない。

**床面** 全体に軟らかい。 **掘り方** 南半約2分の1に伴い、壁際が深くなる。

**柱穴** 伴わない。

**カマド：位置** 北壁中央 **本体** 煙道部寄り天井部と側壁を構成する礫の残存状態が良好



第55図 HⅡ-1 住居跡実測図

である。粒径18cmの亜円礫を側壁として立て、最大粒径37cmの亜円礫を渡して天井部を作る。石材は砂岩である。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面は緩やかに傾斜して下がっている。煙出し部には施設を伴わない。

遺物 (第56図, 図版60)

出土状況 カマドと埋土・掘り方埋土から出土しているが、少量である。土器と石器・琥珀・鉄製品がある。

土器 土師器はすべて甕であり、図示例134 (L 2 b) 以外は破片である。縄文土器片はⅡ群が2点である。

琥珀 破片6点4.88gが埋土上部から出土している。

鉄製品 破片1点が埋土中部から出土しているが、残存状態が悪く、器種は不明である。

その他 剥片石器は不定形石器1点がある。

HⅧ区

HⅧ-1 住居跡

遺構 (第57・58図, 図版24)

検出状況・重複関係 カマドが3基あることや共伴するピットからみて、少なくとも2棟が重複していることを推定できる。新期を1 a 住居跡、古期を1 b 住居跡として記載し、ピットとカマドについては後述する。他の遺構との重複はない。

#### HⅧ-1 a 住居跡

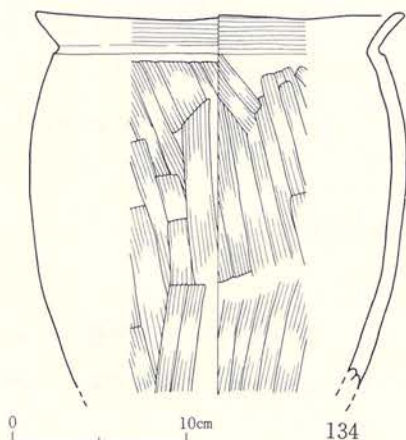
平面形 ややいびつな隅丸方形 規模 3.6×4.0m 床面積 10.0㎡ 主軸方向 1号カマド：N-62°-E 2号カマド：N-31°-W

埋土 黒色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土で構成され、下部を占める2 b層は多量の白頭山一苦小牧火山灰を含む。

壁の状態 外傾 壁高 40~65cm 壁溝 伴わない。

床面 不明 掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 柱穴状ピット pp 1とpp 2が検出されているが、位置や数からは柱穴とは考えられない。



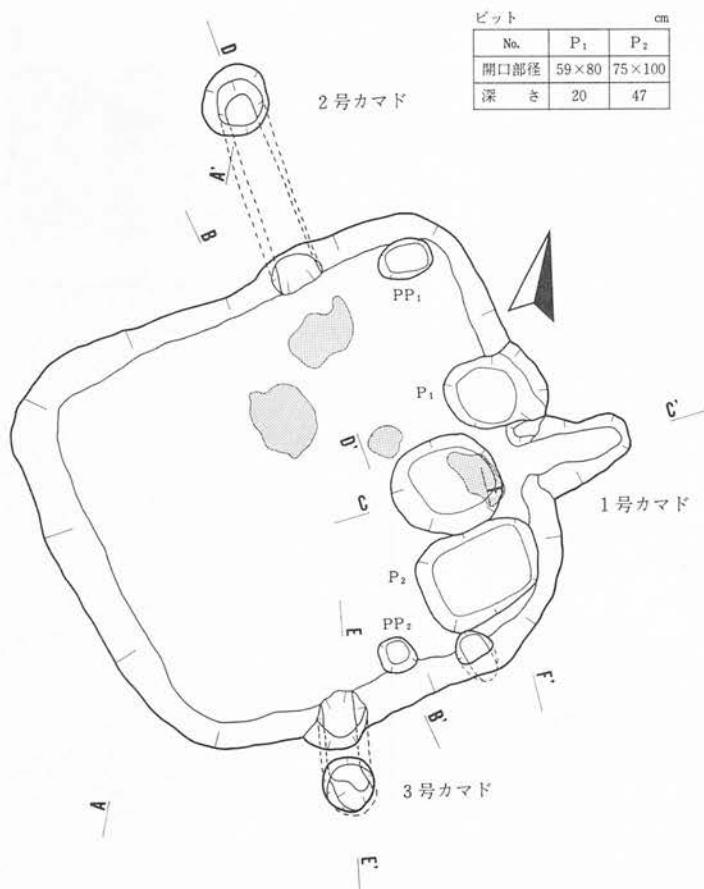
#### HⅧ-1 b 住居跡

煙道部だけを残す3号カマドを共伴する住居跡と推定した。カマド主軸方向がS-17°-Eであることを知ることができるものの、平面形をはじめとする属性の具体的なことは不明である。

付属施設 床面の2カ所が焼け、明赤褐色に変化している。1カ所は1号カマドの西に形成され、26×29cm、他の1カ所は2号カマドの南に形成され、47×60cmを測る。

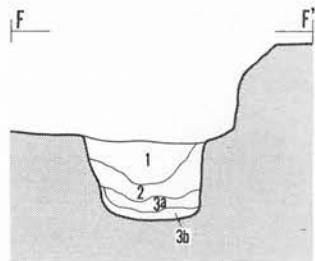
No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	器 高	底 径		
134	カマド	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	21.0	(21.3)	—	L2b	60

第56図 HⅡ-1 住居跡出土遺物



ピット cm

No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>
開口部径	59×80	75×100
深さ	20	47



1・2. 褐色. 炭化物をわずかに含む。  
3a・3b. 褐色。

壁高 cm

壁	高さ
北西	40
南西	65
南東	44
北東	40

1号カマド cm

本体(部)	長さ	—	煙道部	長さ	78
	幅	—		幅	60
	焼土厚さ	26×55		深さ	38
	厚さ	9			

3号カマド cm

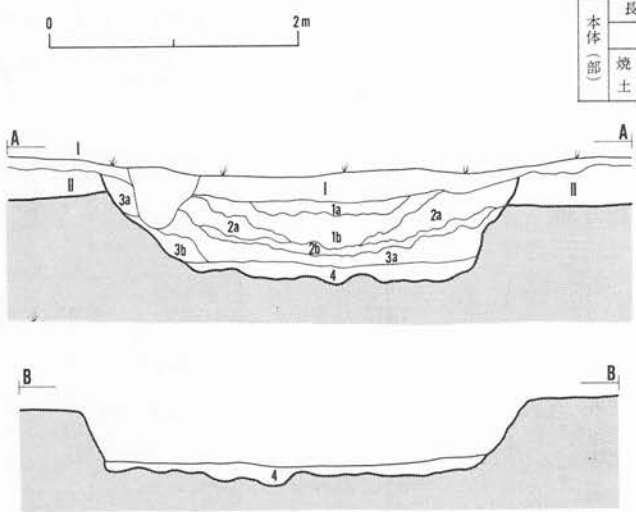
煙道部	長さ	95	煙出し部	径	40×45
	内法	25×40		深さ	66

2号カマド cm

本体(部)	長さ	—	煙道部	長さ	178	煙出し部	径	54×57
	幅	—		内法	31×40		深さ	87
	焼土厚さ	37×58						
	厚さ	6						

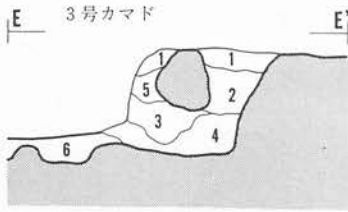
柱穴 cm

No.	PP <sub>1</sub>	PP <sub>2</sub>
直径	32×45	27×27
深さ	14	15

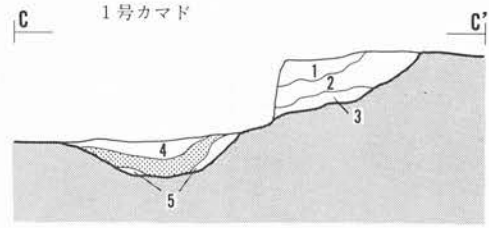


I・II. 基本層位。  
1a・1b. 黒色. 炭化物をわずかに含む。  
2a. 暗褐色。  
2b. 暗褐色. B-Tmを多量に含む。  
3a. におい黄褐色. 炭化物・焼土粒を少量含む。  
3b. におい黄褐色. 壁崩壊土。  
4. におい黄褐色. 黄色. 掘り方埋土。

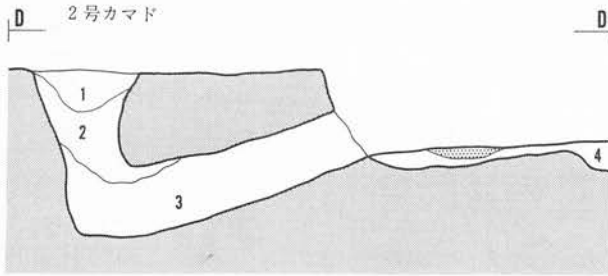
第57図 HⅧ-1 住居跡実測図(1)



1. 褐色、火山灰塊が多い。
2. 褐色、炭化物をわずかに含む。
- 3・4. 暗褐色、炭化物をわずかに含む。
5. 褐色、天井部崩壊土。
6. 黄褐色、住居掘り方埋土。



1. 褐色。
2. 暗褐色、粒状～塊状の焼土を多く含むほか、炭化物を少量含む。
3. 褐色、炭化物をわずかに含む。
5. 黄褐色。



1. 暗褐色、炭化物をわずかに含む。
2. 暗褐色。
3. 褐色。
4. 黄褐色、住居掘り方埋土。

$$S = \frac{1}{40}$$

第58図 HⅧ-1 住居跡実測図(2)

次に3基のカマドについて記載する。

**1号カマド：**位置 東壁中央からわずかに南壁寄り 本体 崩壊がいちじるしい。燃烧部には78×88cmの円形のピットが掘り込まれ、火床部の焼土はその北東端に形成されている。また焼土が火床部の全面的広い範囲に広がっている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はやや急傾斜で上ってゆく。煙出し部には施設はみられない。

**2号カマド：**位置 北壁中央からわずかに東壁寄り 本体 よく焼けた火床部が床面上に検出されただけである。煙道部・煙出し部 くりぬき式である。底面は急傾斜で下がり、煙出し部には円形のピットが掘り込まれている。

**3号カマド：**位置 南壁中央からわずかに西壁寄り 本体 残存していない。煙道部・煙出し部 煙道部と煙出し部の境はくりぬき式になっている。底面はいくぶん傾斜して下がり、煙出し部には円形のピットが掘り込まれている。煙道部が非常に短かいが、帰属すると考えられる1b住居跡の平面形と規模が不明のため、本来の形状なのか削剝によるものかは不明である。

**3基のカマドの帰属：**残存状態から推定して、1号カマドは1a住居跡に帰属する。3号カマドは1b住居跡に帰属する。2号カマドは1a住居跡の床面に火床部を残しており、1a住



居跡に帰属して1号カマドよりも古期のものと考えられる。ただその場合、後述するピットP2との関係を明らかにする必要がある。

ついで2基のピットについて記載する。

P1：1号カマドの左脇にあり、一部は壁を掘り込んでいる。平面形は円形で、深度はやや小さい。

P2：北隅に存在する。平面形は隅丸長方形で、深度は大きい。南西半は貼り床に覆われている。

2基のピットの帰属：P1は、位置的にみて、1号カマドとの共伴が考えられ、1a住居跡に帰属するものと推定する。P2は、貼り床されていることと位置を考慮に入れると、1号カマドに共伴する可能性は小さい。しかし、2号カマドとの関係はある程度は推測できるものの、3号カマドとの関係はまったく不明である。

#### 遺物

出土状況 床面直上や埋土・P1・2号カマド煙道部から土器が出土しているが、少量である。

土器 すべて土師器甕の破片であり、坏はみられない。一部接合ができた床面直上出土のものは口縁部が非常に短く、胴部外面がヘラケズリを施されており、分類ではL2aになる。

#### まとめ・遺構の時期

少なくとも2棟の住居跡の重複と推定した。1a住居跡は1号カマドとP1を共伴する新期のものである。1b住居跡は3号カマドを共伴する古期のものと推定した。しかし、3号カマドの主軸方向は1a住居跡の北東壁とは直交せず、しかも煙道部が本来の形状を保っているかどうかは明らかではなく、平面形や規模を推定することができない。2号カマドは1号カマドに時間的に先行し、カマドの作り替えがあった可能性もあるが、確実ではない。P2は1号カマドとは共伴しない。北隅という位置からは1a住居跡の平面形にもとづいて作られた可能性が強く、貼り床されていることを考慮に入れると、2号カマドとの共伴を推測することができるのかもしれない。その場合、1a住居跡は、平面形・規模・壁・床面をほぼ共有し、カマドとピットを作り替える2棟に細分できるであろうが、1a住居跡内の動きと推測しておく。

図示はしていないが土師器甕の形態や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

## 2. 住居状遺構

### H II - 2 住居跡

遺構 (第59図, 図版25)

検出状況・重複関係 重複する遺構はない。

平面形 隅丸凸辺台形 規模 1.8~2.3×2.4m 床面積 3.6m<sup>2</sup>

埋土 褐色・暗褐色系の土が卓越する。上半を占める2層は微量の十和田a火山灰を含む。

壁の状態 外傾 壁高 14~24cm 壁溝 伴わない。

床面 全体に軟らかい。掘り方 全体規

模の掘り方を下位に伴う。

遺物 (図版62)

出土状況 埋土から出土している。量の多い鉄滓のほかは石器と剥片類がわずかにあるにすぎない。

土器 土師器甕の破片10点と縄文土器片1点だけである。

鉄滓 76点3,547gが埋土上部から一括して出土している。個別には最小1.15gから最大420gとバラツキがある。

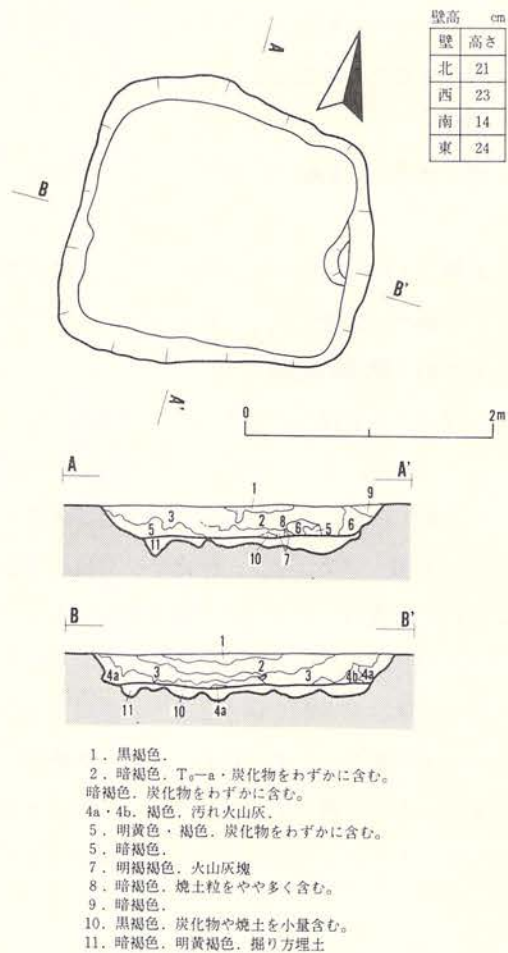
その他 剥片石器は石鏃があり、剥片類は1点である。

まとめ・遺構の時期

カマドを伴わないことから住居跡とは区別をして住居状遺構とした。量は少ないものの出土土器と遺構の形態から、平安時代に分類する。

## 3. ピット

表中に、→補足とあるものは次に一括して説明を加えている。重複する遺構との関係は、新→旧→不明→のように、当該ピットを基準にして表わしている。



1. 黒褐色。
2. 暗褐色。T<sub>0</sub>-a・炭化物をわずかに含む。
- 暗褐色。炭化物をわずかに含む。
- 4a・4b. 褐色。汚れ火山灰。
5. 明黄色・褐色。炭化物をわずかに含む。
5. 暗褐色。
7. 明褐褐色。火山灰塊
8. 暗褐色。焼土粒をやや多く含む。
9. 暗褐色。
10. 黒褐色。炭化物や焼土を少量含む。
11. 暗褐色。明黄褐色。掘り方埋土

第59図 H II - 2 住居跡状遺構実測図

## 埋土

D III—51ピット：浮石の分析を依頼したところ、十和田系火山灰という結果がでている（付篇参照）。同種の浮石を含む遺構はほかにはない。なお、遺構外ではII層中に観察できるものの、E III区の限定された範囲に分布するにすぎない。

## 所属時期

D III—51ピット：出土遺物を欠くが、埋土の層相が縄文時代前期前葉の他のピットに類似することから推定した。

G II—51ピットほか：G II—51～G II—54・G III—52・G III—54～G III—59の11基のピットは調査2区南地区のG II区・G III区に集中して分布する。形態や規模はバラツキがあるものの、検出層位や埋土の層相・出土遺物に類似性が認められる。G III—56ピットのように出土遺物を欠く場合でも、それらの点から時期を推定した。

G VIII—51ピットほか：調査3区に検出されたG VIII—51ピット・H VIII—51・H VIII—52の3基のうち、出土遺物があるのはH VIII—52ピットであり、平安時代に分類した。他の2基は、埋土の層相がH VIII—52ピットに類似することから時期を推定した。

H VIII—53ピットほか：調査3区に検出されたH VIII—53・I IX—51の2基は出土遺物を欠く。埋土の層相は周辺に検出された落とし穴に類似することから縄文時代と推定しておいた。

## 備考

C III—53ピット：出土遺物があることからピットとして分類したが、人工のものとは必ずしもいえないかもしれない。

C III—58ピット：規模や深度が異なる複数のピットが重複しているようにもみられる。人工のものかどうかははっきりしない。ただ風倒木である可能性は小さい。

D III—51ピット：埋土の層相は縄文時代前期前葉に分類できるピットに類似するが、形態や出土遺物をまったく伴わない点が異なる。形態が円筒形の落とし穴とされているものに似るが、単独の検出でもあり、単にピットとしておく。

D III—53ピット：D III—4住居跡（平安時代）の西隅と重複して検出された。形態が不安定であること、D III—4住居跡の北西壁上部の張り出しと連続することなど、単独のピットとしてよいか疑問が残る。

D III—54ピット：D III—4住居跡（平安時代）の北東壁と重複して検出された。同住居跡の北西壁上部にみられる張り出しとは異なるものであることは埋土断面に観察できる新旧関係からも明らかである。D III—53ピットと同様、単独のピットとしてよいかどうか疑問が残る。

遺構名	C III-51 ピット	C III-52 ピット	C III-53 ピット
挿 図	遺構：第60図 a 遺物：第65図	遺構：第60図 b 遺物：第65図	遺構：第60図 g 遺物：第65図
図 版	遺構：25cd 遺物：47・51・53	遺構：26ab 遺物：46	遺物：48
検出状況 重複関係	旧-C III-202焼土遺構	旧-C III-203焼土	不明→C III-103落とし穴
平面形	不整形	若干ゆがんだ楕円形	不整形
開口部径	140×205cm	111×115～152cm	51×73cm
深 さ	22cm	10～58cm	36cm
埋 土	暗褐色土や褐色土が構成。	褐色土や黄褐色土が卓越。	火山灰の大塊を含む黒褐色土の単層。
壁	ゆるやかな外傾	外傾～一部内湾気味	外形
底 面	凹凸がいちじるしい。	わずかに湾曲	緩やかに波打つ。
出土遺物	出土遺物多い。図示例136・137・139・141のほか、縄文土器II群の破片37点と琥珀1点0.6g。	図示例142のほか、縄文土器II群の破片6点と剝片2点。142は切断蓋付土器。	図示例140のほか、縄文土器II群の破片8点と剝片3点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代後期
備 考		西壁上部が張り出す。その部分を含んだ計測値。	形態的な安定感を欠く。 -補足

遺構名	C III-54 ピット	C III-55 ピット	C III-56 ピット
挿 図	遺構：第60図 d 遺物：第65・66図	遺構：第60図 f 遺物：第67図	遺構：第60図 c 遺物：第67図
図 版	遺構：26cd 遺物：46・47・51・53	遺構：26ef 遺物：46・47・52・53	遺構：26gh 遺物：47
検出状況 重複関係			
平面形	円形	円形	ほぼ円形
開口部径	172×187cm	115×145cm。一部掘りすぎ。	72×80cm
深 さ	207cm	156cm	56cm
埋 土	上半の壁際は火山灰が卓越。下半を占める黒褐色土は多量の木炭粒を含む。	褐色～黒褐色の土が卓越。火山灰は下部と壁際に多く含まれる。	褐色土と暗褐色土で構成。炭化物は上部に多い。
壁	円筒形であるが、半ばがやや膨れる。	フラスコ形。上半は直立～わずかに外傾。	直立～内傾
底 面	水平	水平	水平
出土遺物	出土遺物多い。図示例のほか、磨製石斧破片1点、剝片類18点。	図示例のほか、縄文土器II群の破片30点と琥珀1点0.21gが埋土下部から出土。	図示例169のほか、縄文土器II群の破片3点と剝片2点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代後期
備 考	火山灰が最上部を閉塞（層厚30cm）。	フラスコ形ピット。	

遺構名	C III-57 ピット	C III-58 ピット	D III-51 ピット
挿 図	遺構：第60図 e	遺構：第61図 a 遺物：第65図	遺構：第61図 b
図 版	遺構：27ab	遺構：27cd 遺物：47・51	遺構：27ef
検出状況 重複関係		旧-C III-1 住居跡。西側は調査区域外。	
平面形	不整楕円形	不整形	不整円形
開口部径	51×94cm	最長部分で3.3m	208×208cm
深 さ	19cm	最深部134cm	123cm
埋 土	褐色土が卓越するほか、汚れ火山灰が認められる。	多くの層がみられるが、褐色土や黄褐色土が卓越。	褐色土や暗褐色土・黒褐色土などが構成。壁際や下部は汚れ火山灰が卓越。最上部の中央に黄色の浮石の薄層を伴う。 →補足
壁	外傾	外傾	下部を除いては外傾がいちじるしい。
底 面	ほぼ水平	湾曲	東側へ緩やかに傾斜して下がっている。
出土遺物	縄文土器の破片 I 群 1 点と II 群 15 点。	図示例135・138のほか、縄文土器 II 群の破片30点。	なし
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代前期 →補足
備 考		形態的な安定感を欠く。 →補足	おとし穴の可能性 →補足

遺構名	D III-52 ピット	D III-53 ピット	D III-54 ピット
挿 図	遺構：第61図 d	遺物：第67・68図	
図 版	遺構：27gh	遺構：28a 遺物：48	
検出状況 重複関係		不明→D III-4 住居跡	旧-D III-4 住居跡
平面形	不整楕円形	不整形	不整形
開口部径	93×130cm	110×130cm	76×220cm
深 さ	31m	22cm	4～27cm
埋 土	明黄褐色の汚れ火山灰～暗褐色土。	暗褐色土のほぼ単層。	暗褐色土や黄褐色土で構成。黄褐色土には多くの焼土が混入。
壁	外傾。とくに東壁がいちじるしい。	外傾	外傾
底 面	緩やかに波打つ。	凹凸がある。	凹凸がある。
出土遺物	縄文土器 II 群の破片 3 点。	図示例のほか、縄文土器 II 群の破片21点と打製石斧・剝片 2 点。	縄文土器 II 群の破片 3 点。
所属時期	縄文時代後期	不明	不明
備 考		南西隅に凸辺方形の小ピット（径47×52cm・深さ11cm） →補足	北西端に円形の小ピット（径40×47cm） →補足

遺構名	E III-51 ビット	F III-51 ビット	F III-52 ビット
挿 図	遺構：第61図 c	遺構：第61図 e 遺物：第68図	遺構：第61図 f
図 版	遺構：28b	遺構：28cd 遺物：52	遺構：28e
検出状況 重複関係			
平面形	不整形	いびつな円形	不整形
開口部径	80×113cm	155×167cm	170×174cm
深 さ	37cm	63cm	55cm
埋 土	褐色土と黒褐色土が混じり合った土と汚れ火山灰が構成。	黄褐色系の土が卓越。褐色土や黒褐色土の塊を含む。	火山灰がほぼ全体を占める。
壁	外傾がいちじるしい。	外傾	内湾して立ち上がる。
底 面	ゆるやかな凹凸	湾曲気味	緩やかな凹凸
出土遺物	縄文土器 I 群の破片 4 点。	図示例173は磨石と敲石の複合。	土師器甕の破片 1 点。
所属時期	縄文時代前期	不明	不明
備 考	形態が不安定。	形態が不安定。	埋土の状況からは人工のものでない可能性が強い。

遺構名	F III-53 ビット	F III-54 ビット	F III-55 ビット
挿 図	遺構：第62図 c	遺構：第62図 a	遺構：第62図 b
図 版	遺構：28f	遺構28gh	遺構：29ab
検出状況 重複関係	旧→F III-2 住居跡	新→F III-104 落とし穴	
平面形	不整な楕円形	わずかにいびつな円形	隅丸正方形。一部凸辺。
開口部径	43×74cm	232×250cm	200×206cm
深 さ	7 cm	70cm	40cm
埋 土	褐色土の単層。	褐色土や暗褐色土・黒褐色土などで構成される。壁際の 3 a 層は十和田 a 火山灰、3 b 層は白頭山火山灰を少量含む。	褐色土と暗褐色土が卓越。白頭山火山灰が上部に認められ、断面では非連続的な薄層として観察できる（3層）。
壁	ほぼ直立	直立～わずかに外傾	わずかに外傾
底 面	水平	ほぼ水平	ほぼ水平
出土遺物	なし	土師器甕破片 4 点。縄文土器は I 群・II 群の破片 18 点。	土師器甕破片 29 点。縄文土器は I 群・II 群の破片 6 点。
所属時期	不明	平安時代	平安時代
備 考	底面の 33×35cm の範囲が円形に焼けている。層厚 5 cm。焼土ビット		

遺構名	G II-51 ピット	G II-52 ピット	G II-53 ピット
挿 図	遺構：第62図 e	遺構：第63図 a	遺構：第63図 a
図 版	遺構：29cd	遺構：29ef	遺構：29gh
検出状況 重複関係			
平面形	ほぼ円形（一部掘りすぎ）	円形	円形
開口部径	120×124cm	110×116cm	151×160cm
深 さ	34cm	34cm	43cm
埋 土	黒褐色土や黄褐色土の大塊を含む 暗褐色土が卓越。壁際や下部は汚 れ火山灰が占める。	暗褐色土が卓越し、壁際は汚れ火 山灰が堆積する。	黒褐色土が卓越し、壁際は汚れ火 山灰が堆積する。
壁	直立～わずかに外傾	わずかに外傾	わずかに外傾
底 面	水平	緩やかに波打つぽか凹凸。	ほぼ水平
出土遺物	縄文土器 I 群の破片 4 点と剝片 1 点。	縄文土器 I 群の破片 2 点。	なし
所 属 時	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補
備 考			

遺構名	G II-54 ピット	G II-55 ピット	G II-56 ピット
挿 図	遺構：第62図 d	遺構：第62図 f	遺構：第63図 b 遺物：第68図
図 版	遺構：30ab	遺構：30cd	遺構：30e～g 遺物：60
検出状況 重複関係	大部分がG II-1 住居跡（古墳～ 奈良時代）の床面下に検出。		
平面形	円形	凸辺隅丸正方形	わずかにいびつな楕円形
開口部径	190×200cm	152×168cm	140×232cm
深 さ	（検出面から77cm）	33cm	36cm
埋 土	暗褐色土や黒褐色土・黄褐色土な どが観察できる。重複する部分は G II-1 住居跡の掘り方埋土が上 半を占める。	黄褐色土や褐色・暗褐色土が構成。 十和田 a 火山灰は 3 a・3 b 層に 含まれる。粒径10mmの小塊であり、 量も少ない。	暗褐色土や黒褐色土・黒色土ほか が構成。十和田 a 火山灰は埋土上 部に大小塊として認められるが量 は多くない。
壁	残存状態の良い部分では内湾。	外傾。とくに西壁～南西壁が外傾。	外傾
底 面	ほぼ水平	凹凸があり、緩やかに波打っている。	ほぼ水平
出土遺物	縄文時代 I 群の破片 3 点と剝片 1 点。	なし	図示例174の土師器甕のほか、鉄滓 1 点。
所 属 遺 物	縄文時代前期 一補足	平安時代	奈良時代
備 考	フラスコ形ピットと推定。		

遺構名	G III-51 ピット	G III-52 ピット	G III-53 ピット
挿 図	遺構：第63図 c 遺物：第68図	遺構：第63図 c 遺物：第68図	遺構：第63図 d
図 版	遺構：31ab 遺物：48・52	遺構：30h 遺物：48	遺構：31cd
検出状況 重複関係	新→G III-52ピット	旧→G III-51ピット・G III-103落 とし穴	新→G III-2 住居跡。埋土を掘り 込んで構築。
平面形	隅丸台形（一部が凸辺）	長方形状と推定	洋梨形
開口部径	154～204×195cm	145×210±cm	110×174cm
深 さ	50cm	24cm	16cm
埋 土	壁際や下部を汚れ火山灰が占める ほかは黒褐色土～暗褐色土が構 成。	火山灰起源の褐色土の単層。	褐色土と暗褐色土が構成。4層は 粒径10mm±の十和田 a 火山灰の 小塊が点在する。
壁	外傾。植生による凹凸がある。	外傾	5 cm±の立ち上がり
底 面	いくぶん波打つ。	いくぶん波打つ。	凹凸があり波打つ。
出土遺物	図示例175～177の石器のほか、縄 文土器 II 群の破片・剝片類12点。	図示例179の石器のほか、縄文土器 I 群の破片 4 点、剝片類92点。	土師器壺の破片 2 点のほか、クル ミ 1 点・剝片類 6 点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代前期 一補足	平安時代
備 考			南壁寄りの底面が円形に焼けてい る。径55×57cm・層厚 7 cm。焼土 ピット

遺構名	G III-54 ピット	G III-55 ピット	G III-56 ピット
挿 図	遺構：第45図 遺物：第68図	遺構：第63図 f	遺構：第63図 e
図 版	遺構：31ef 遺物：48	遺構：31gh	遺構：32ab
検出状況 重複関係	新→G III-3 住居跡	II層下位に検出	
平面形	凸辺隅丸長方形	ややいびつな円形	不整円形
開口部径	82×106cm	132×136cm	105×130cm
深 さ	29cm（G III-3 住居跡床面から）	34cm	19cm
埋 土	上半は黒褐色土、下半は汚れ火山 灰が構成。	褐色～黒褐色系の土が構成。	汚れ火山灰が卓越するほか、暗褐 色土・黒褐色土が構成する。
壁	直立～外傾	直立～わずかに外傾	外傾
底 面	やるやかな湾曲	ほぼ水平	凹凸がある。
出土遺物	図示例180の石器のほか、剝片類 129点。	なし	なし
所属時期	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補足
備 考			

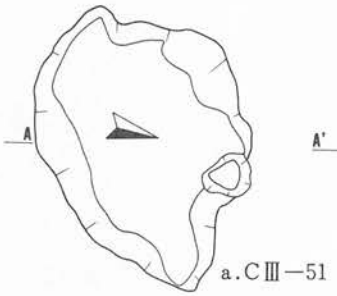


遺構名	G III-57 ピット	G III-58 ピット	G III-59 ピット
挿 図	遺構：第64図 a 遺物：第68図	遺構：第64図 a 遺物：第69図	遺構：第64図 b 遺物：第69図
図 版	遺構：32bc 遺物：48	遺構：32bc 遺物：47	遺構：32de 遺物：47
検出状況 重複関係	不明→G III-58ピット	不明→G III-57ピット	
平面形	円形	円形	不整楕円形
開口部径	170×180cm	74cm×不明（重複のため）	107×145cm
深 さ	77cm	17cm	27cm
埋 土	黄褐色～暗褐色の土が卓越。下半は汚れ火山灰が優占的。上半は粒径10mm±の火山灰塊が霜降状に含まれる。	G III-57ピットから連続する暗褐色土と汚れ火山灰が構成。	壁際や下部は火山灰や汚れた火山灰が堆積。他は暗褐色土と黒褐色土が占める。
壁	ほぼ直立	わずかに外傾	外傾がいちじるしい。
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	緩やかに波打つ。
出土遺物	図示例178・181の石器のほか、縄文土器 I 群の破片 1 点。	図示例182は縄文土器 I 群。	図示例183・185の土器片のほか、縄文土器 I 群の破片・剥片類 2 点。
所属時期	縄文時代前期 →補足	縄文時代前期	縄文時代前期 →補足
備 考			

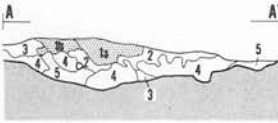
遺構名	H I-51 ピット	H II-51 ピット	G VII-51 ピット
挿 図	遺構：第64図 c	遺構：第64図 d 遺物：第69図	遺構：第64図 e
図 版	遺構：32fg	遺構：33ab	遺構：34a
検出状況 重複関係	不明→H I-1 住居跡(平安時代)		
平面形	不整な楕円形	隅丸長方形	不整形
開口部径	105×(116) cm	105×150cm	130×150cm
深 さ	5 cm	35cm	26cm
埋 土	褐色土の単層。	暗褐色土と黄褐色土が構成。十和田 a 火山灰は 1 層に少量が点在する。粒径は10mm±。	黒褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土で構成。
壁	直立	わずかに外傾	ゆるやかな外傾
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	若干湾曲
出土遺物	土師器甕の破片 3 点と琥珀 1 点 0.5 g。	土師器甕の破片 2 点と琥珀 1 点 0.05 g。図示例184。	なし
所属時期	平安時代	平安時代	平安時代 →補足
備 考	底面が不整円形に焼けている。径 52×72cm・層厚 6 cm。焼土ピット		

遺構名	HⅧ-51 ピット	CⅧ-52 ピット	HⅧ-53 ピット
挿 図	遺構：第64図 f	遺構：第64図 g	遺構：第64図 h
図 版	遺構：33cd	遺構：33ef	遺構：33gh
検出状況 重複関係			
平面形	ほぼ円形	凸辺長方形	隅丸方形
開口部径	122×142cm	94×150cm	85×97cm
深 さ	28cm	20cm	48cm
埋 土	暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成。	埋土中部に焼土層を挟む。焼土の層厚は10cm。	暗褐色土と黄褐色土で構成。
壁	ゆるやかな外傾	外傾	外傾
底 面	若干傾斜があり、南へ下がる。	わずかに波打つ。	ほぼ水平
出土遺物	なし	土師器甕	なし
所属時期	平安時代 →補足	平安時代 →補足	縄文時代 →補足
備 考			

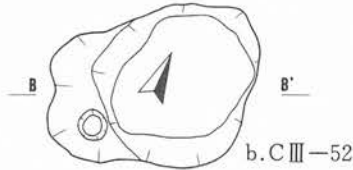
遺構名	HIX-51ピット
挿 図	遺構：第64図 i
図 版	遺構：34b
検出状況 重複関係	
平面形	円形
開口部径	64×71cm
深 さ	22cm
埋 土	褐色土の単層
壁	外傾
底 面	若干傾斜し、南へ下がっている。
出土遺物	なし
所属時期	縄文時代 →補足
備 考	



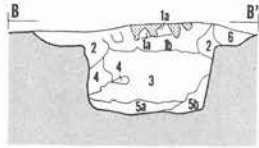
a. C III-51



- 1a・1b. 赤褐色。C III-151 焼土遺構。  
 2. 暗赤褐色。焼土卓越。  
 3. 褐色。  
 4. 暗褐色。炭化物を多く含む。  
 5. 暗褐色。炭化物を少量含む。



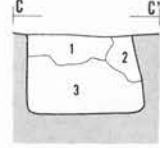
b. C III-52



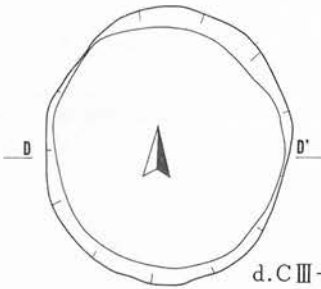
- 1a. 褐色。焼土を少量含む（焼土はC III-152）  
 1b. 褐色。炭化物をわずかに含む。  
 2. 褐色。炭化物をわずかに含む。  
 3. 暗褐色。  
 4. にぶい黄褐色。  
 5a・5b. 暗黄褐色。汚れ火山灰。5aは炭化物が点在。  
 6. 褐色。



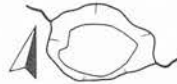
c. C III-56



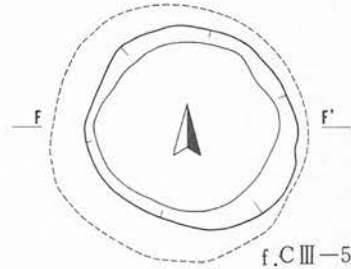
1. 暗褐色。炭化物が散在。  
 2. 褐色。  
 3. 暗褐色。



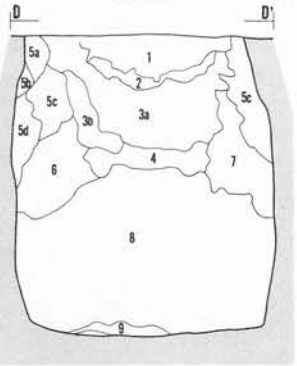
d. C III-54



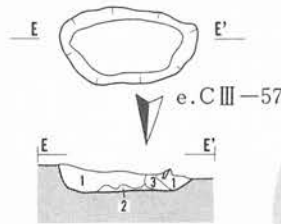
g. C III-53



f. C III-55

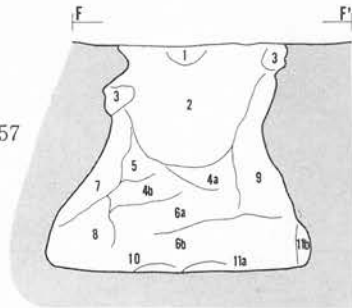


1. 明黄褐色。閉塞火山灰  
 2. 黒褐色。火山灰の大塊が散在する。  
 3a. 暗褐色。炭化物が全体に散在する。  
 3b. 暗褐色。炭化物が全体に散在する。火山灰混入。  
 4. 明黄褐色～褐色。火山灰卓越。焼土が一部に含まれる。  
 5a～5d. 黄褐色・暗黄褐色。火山灰  
 6. 黄褐色・褐色。炭化物が散在する。  
 7. 暗褐色。火山灰を含む。炭化物が点在する。  
 8. 黒褐色。炭化物を多量に含む。薄層みられるが細分不能。  
 9. 褐色。汚れ火山灰



e. C III-57

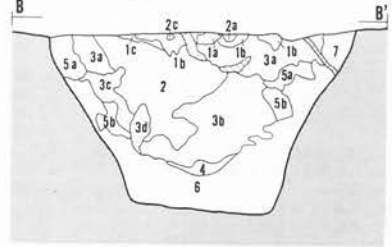
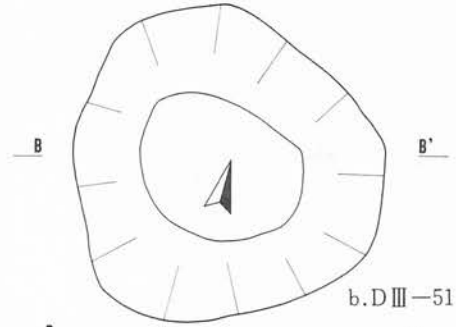
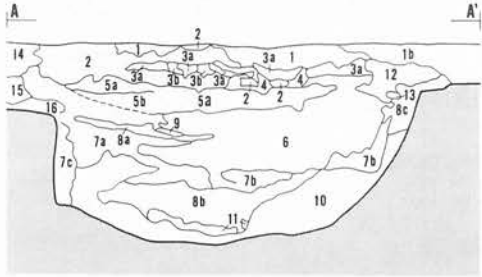
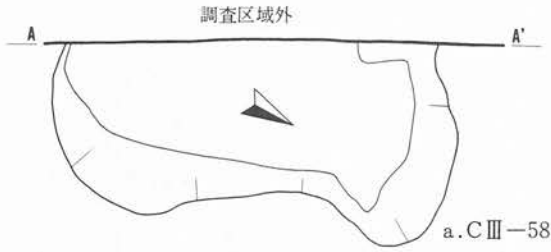
1. 褐色。にぶい黄褐色。炭化物を少量含む。  
 2. 黄褐色。汚れ火山灰。  
 3. 褐色・黄褐色。



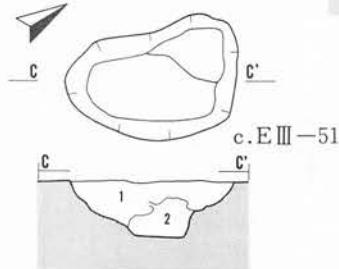
1. 黒褐色。炭化物が散在。  
 2. 褐色・暗褐色。炭化物が多い。  
 3. 黄褐色。汚れ火山灰  
 4a・4b. 黒褐色。炭化物多い。  
 5. 暗褐色。炭化物点在  
 6a. 黒褐色。  
 6b. 黒褐色。火山灰が多く混入。  
 7. 黄褐色・暗褐色。  
 8. 黒褐色。火山灰塊を全体に含み炭化物が散在する。  
 9. 黒褐色。  
 10. 黄褐色・暗褐色・黒褐色。  
 11a. 黄褐色。  
 11b. 黄褐色・褐色。

0 1m

第60図 ピット実測図(1)

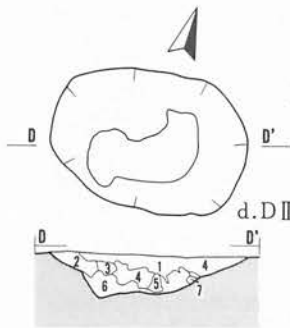


- 1a・1b. 暗褐色・褐色。
- 2. 黒褐色。炭化物点在。
- 3a. 明黄褐色。C III-1 住居跡貼り床
- 3b. 褐色。
- 4. 褐色。
- 5a・5b. 黄褐色。
- 6. 褐色・暗褐色・黒褐色。
- 7a~7c. 褐色・暗褐色。
- 8a~8c. 黄褐色。汚れ火山灰
- 9. 褐色。
- 10. 明黄褐色。火山灰
- 11. 黒褐色・褐色。
- 12. 褐色。
- 13. 暗褐色。
- 14. 褐色。
- 15. 褐色。炭化物を少量含む。
- 16. 黄褐色。

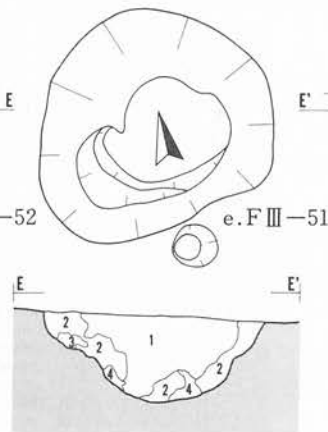


- 1. 褐色。黒褐色土の大塊が混入。
- 2. 黄褐色。汚れ火山灰。

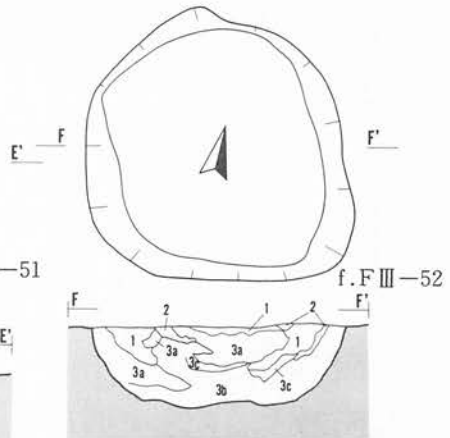
- 1a. 黄色・明黄褐色。細粒浮石
- 1b・1c. にぶい黄褐色。1aの浮石の小塊を含む。
- 2. 黒褐色。
- 3a~3d. 暗褐色・黒褐色・褐色。
- 4. 黄褐色。黒褐色が混じる。
- 5a・5b. 褐色。火山灰・汚れ火山灰が混じる。
- 6. 黄褐色。汚れ火山灰
- 7. 黄褐色・火山灰。



- 1. 暗褐色。
- 2. 褐色。
- 3・4. 黄褐色。
- 5. 褐色。
- 6. 明黄褐色。汚れ火山灰
- 7. 暗褐色。



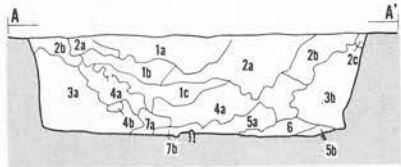
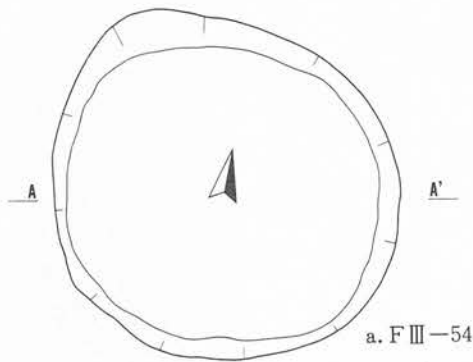
- 1. にぶい黄褐色。
- 2. 黄褐色・褐色。
- 3・4. 明黄褐色・火山灰



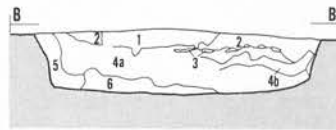
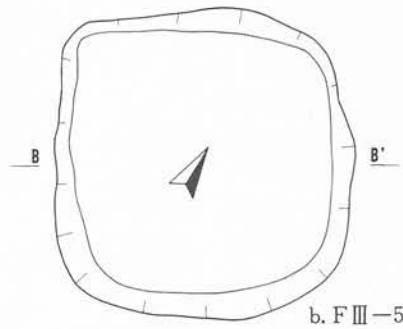
- 1. にぶい黄褐色。
- 2. 黒褐色。
- 3a~3c. 明黄褐色・黄褐色。ルース

0 1m

第61図 ピット実測図(2)



- 1a. 黒色。
- 1b. 黒褐色。T<sub>0</sub>-aを少量含む。
- 1c. 黒褐色。炭化物を少量含む。
- 2a・2b. 暗褐色。
- 2c. 褐色。
- 3a. 褐色。T<sub>0</sub>-aをわずかに含む。
- 3b. 褐色。
- 4a・4b. 暗褐色。炭化物を少量含む。4aは焼土を全体に含む。
- 5a. 黒褐色。
- 5b. 褐色。
6. 褐色。
- 7a・7b. 暗褐色。炭化物を含む。



F III-4 住居跡



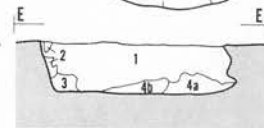
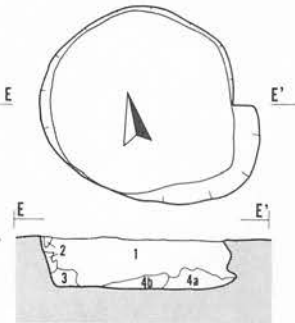
c. F III-53

1. 黒褐色。炭化物を少量含む。
2. 褐色。B-Tmを少量含む。
3. 黄褐色。B-Tm
- 4a・4b. 暗褐色。炭化物をわずかに含む。
5. 褐色・黄褐色。
6. 暗褐色。

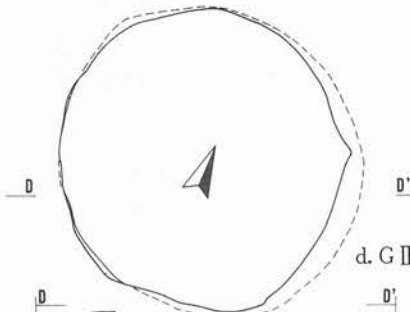
1. 明赤褐色。焼土。
2. 褐色。

e. G II-51

1. 暗褐色。塊状の黒褐色土・黄褐色土や炭化物を全体に含む。
2. 黄褐色。汚れ火山灰
3. 明黄褐色。火山灰
- 4a. 褐色。
- 4b. におい黄褐色。汚れ火山灰



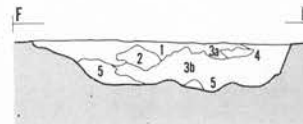
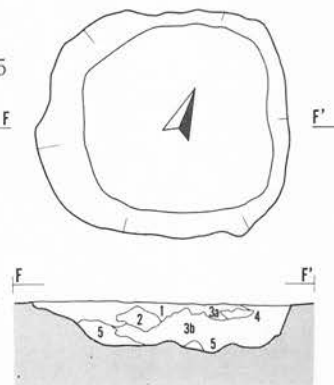
d. G II-54



- 1a. 暗褐色。
- 1b. 暗褐色。塊状の火山灰・黒褐色土を含む
2. 黄褐色・褐色。
3. 明黄褐色。汚れ火山灰
4. 褐色。
5. 褐色。大小の火山灰塊を含む。
6. 黄褐色。火山灰卓越。炭化物を少量含む。
7. 暗褐色。
8. 黒褐色。
- 9・10. 明黄褐色。火山灰。10は褐色土が混入。

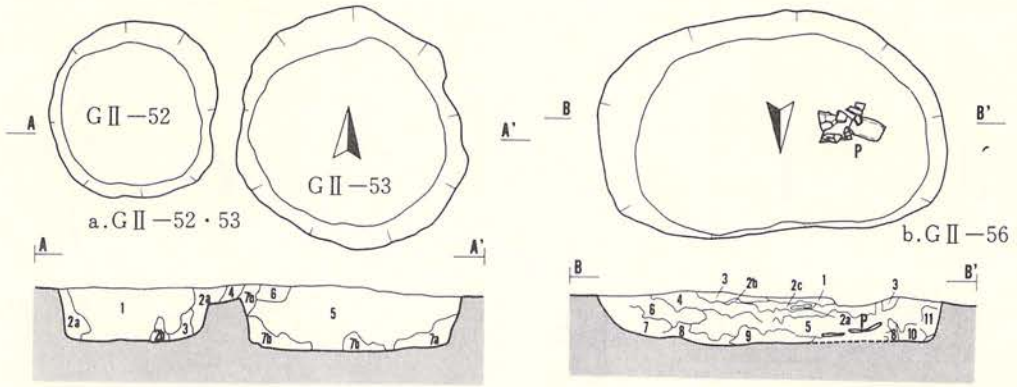
f. G II-55

1. 暗褐色。炭化物散在
2. 褐色・黄褐色。炭化物点在
- 3a. 暗褐色。T<sub>0</sub>-aをわずかに含む。
- 3b. 褐色。火山灰塊と炭化物が点在。
4. 黄褐色・褐色。
5. 黄褐色・汚れ火山灰



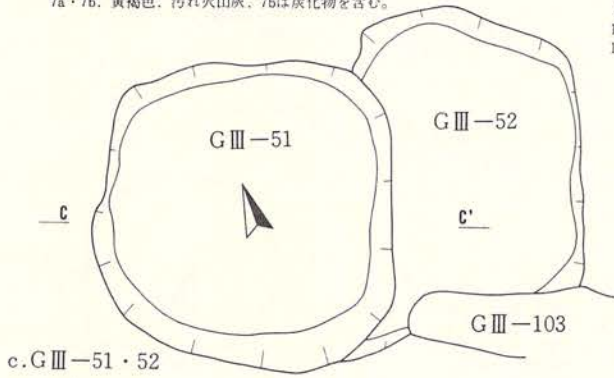
0 1m

第62図 ピット実測図(3)

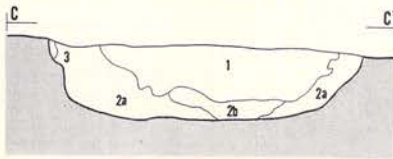


1. 暗褐色。火山灰の大小塊や炭化物が散在。
- 2a. 黄褐色。汚れ火山灰。炭化物を少量含む。
- 2b. 黄褐色。汚れ火山灰。火山灰塊を含む。
3. 褐色。
4. 褐色。炭化物をわずかに含む。
5. 黒褐色。炭化物を多く含む。
6. 暗褐色。炭化物を少量含む。
- 7a・7b. 黄褐色。汚れ火山灰。7bは炭化物を含む。

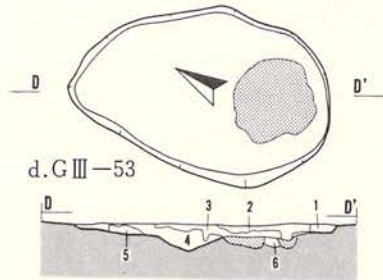
1. 黄褐色。焼土粒が多い。
- 2a. 灰白色。T<sub>0</sub>-a。
- 2b・2c. 暗褐色。T<sub>0</sub>-aを含む。2bに多い。
3. 黒褐色。
4. 黒色。T<sub>0</sub>-aを少量含む。
5. 黒褐色。
- 6・7. 暗褐色。7は炭化物を少量含む。
8. 明黄褐色。火山灰卓越
9. 暗褐色。
10. 明黄褐色。火山灰塊
11. 黄褐色。汚れ火山灰。炭化物をわずかに含む。



c. G III-51・52



1. 黒褐色-暗褐色。炭化物を少量含む。
- 2a・2b. 黄褐色。汚れ火山灰
3. 明黄褐色。火山灰

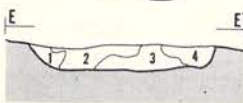


d. G III-53

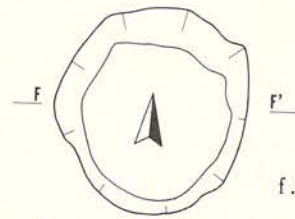
1. 褐色。焼土の少塊を少量含む。
2. 暗褐色。炭化物を少量含む。
3. 暗褐色。焼土が混入。
4. 暗褐色。少量のT<sub>0</sub>-a少塊を含む。
5. 褐色。汚れ火山灰
6. 暗褐色。炭化物を少量含む。



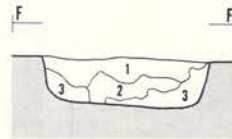
e. G III-56



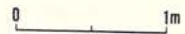
1. 暗褐色。
2. 黒褐色。
- 3・4. 黄褐色。汚れ火山灰



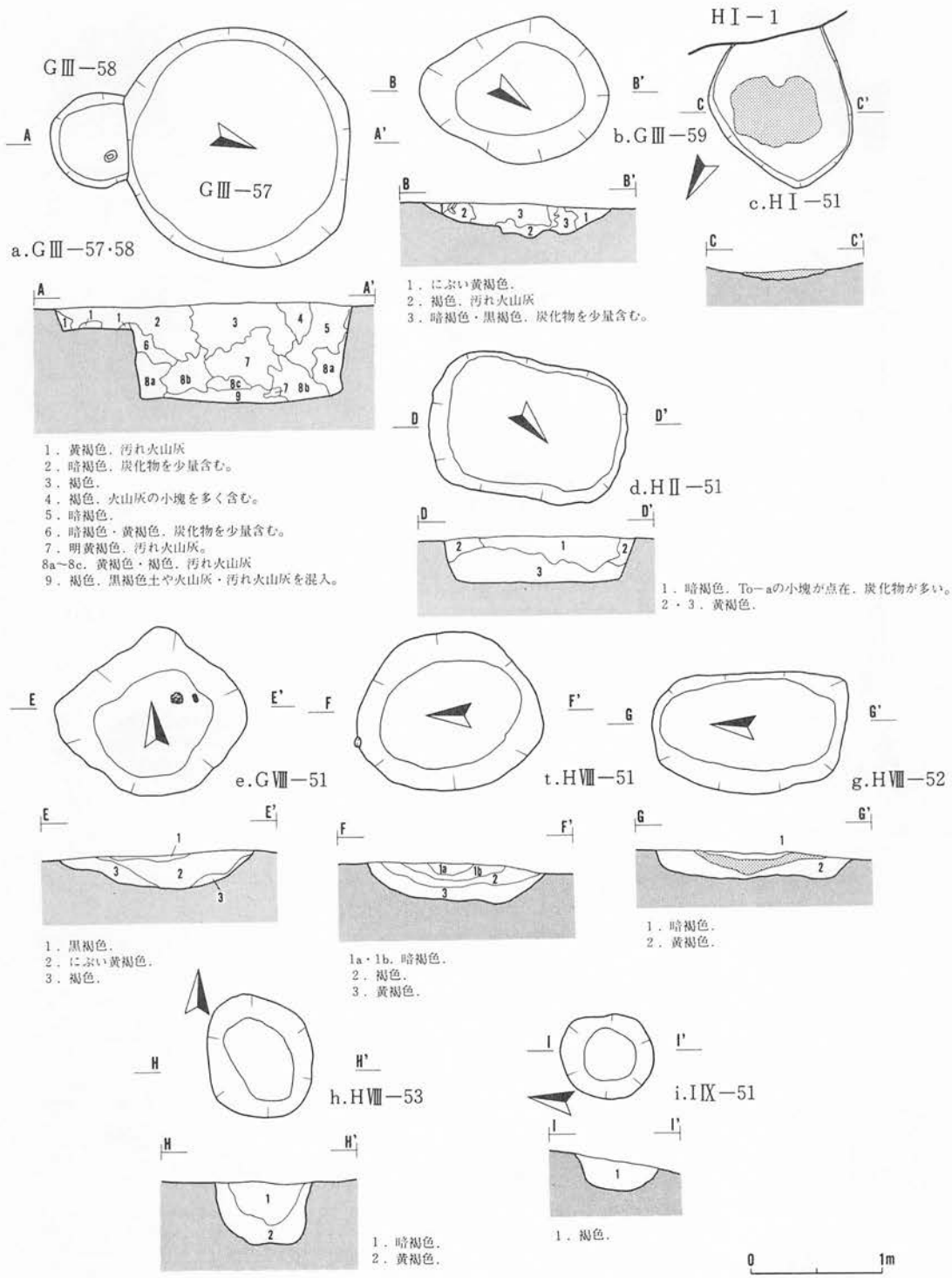
f. G III-55



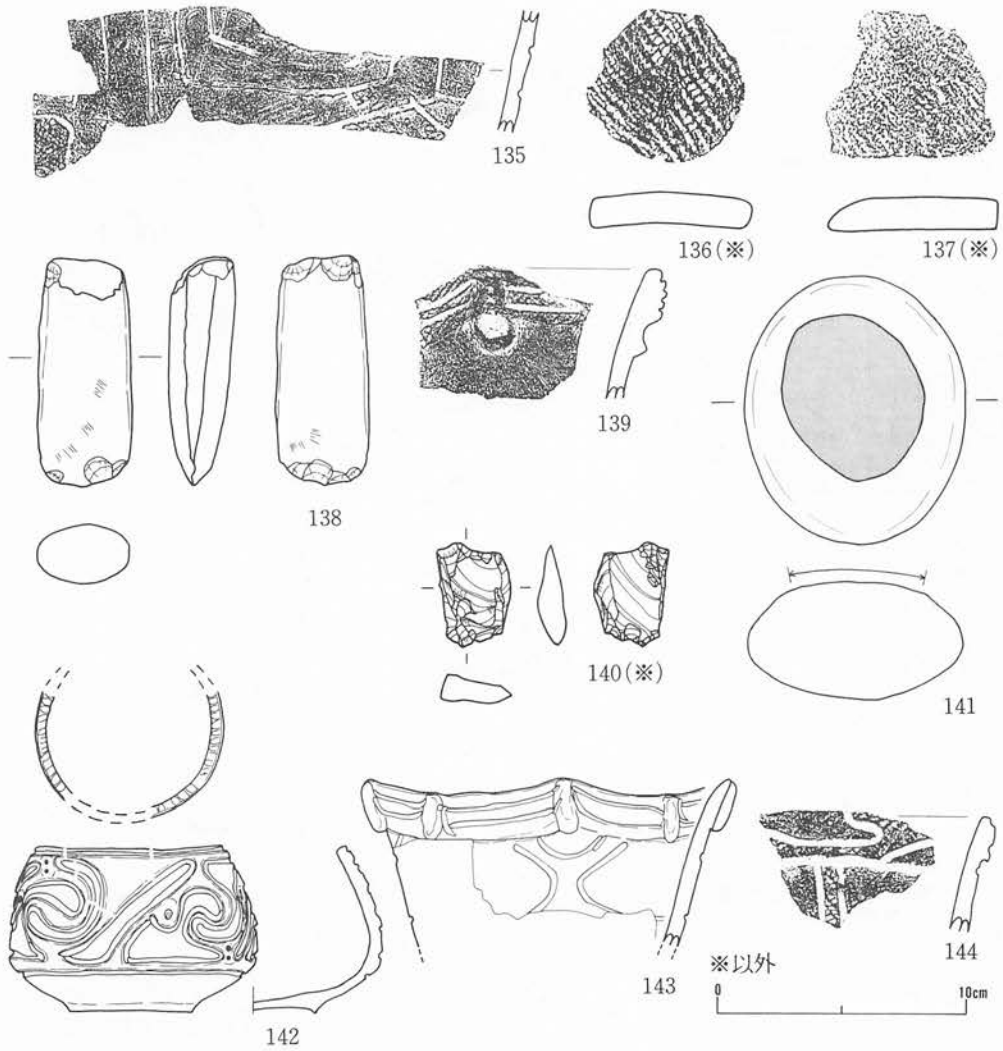
1. 黒褐色。
- 2・3. 黄褐色。汚れ火山灰



第63図 ピット実測図(4)



第64図 ピット実測図(5)



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
135	C III-58 埋土	深鉢	胴部	沈線・Lr	ミガキ		II-2-(2)-①		47
139	C III-51 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。凹みと刺突文もつ貼付文	ミガキ		II-1-(1)		47
142	C III-52 埋土	切斷蓋付土器	口～底	口唇部刻目。文様単位4。隆沈線	ミガキ			外面未塗り	46
143	C III-54 埋土	深鉢	口～胴	波状口縁。貼付文・沈線	ミガキ		II-1-(1)		46
144	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	沈線・LR	ミガキ		II-1-(1)		47

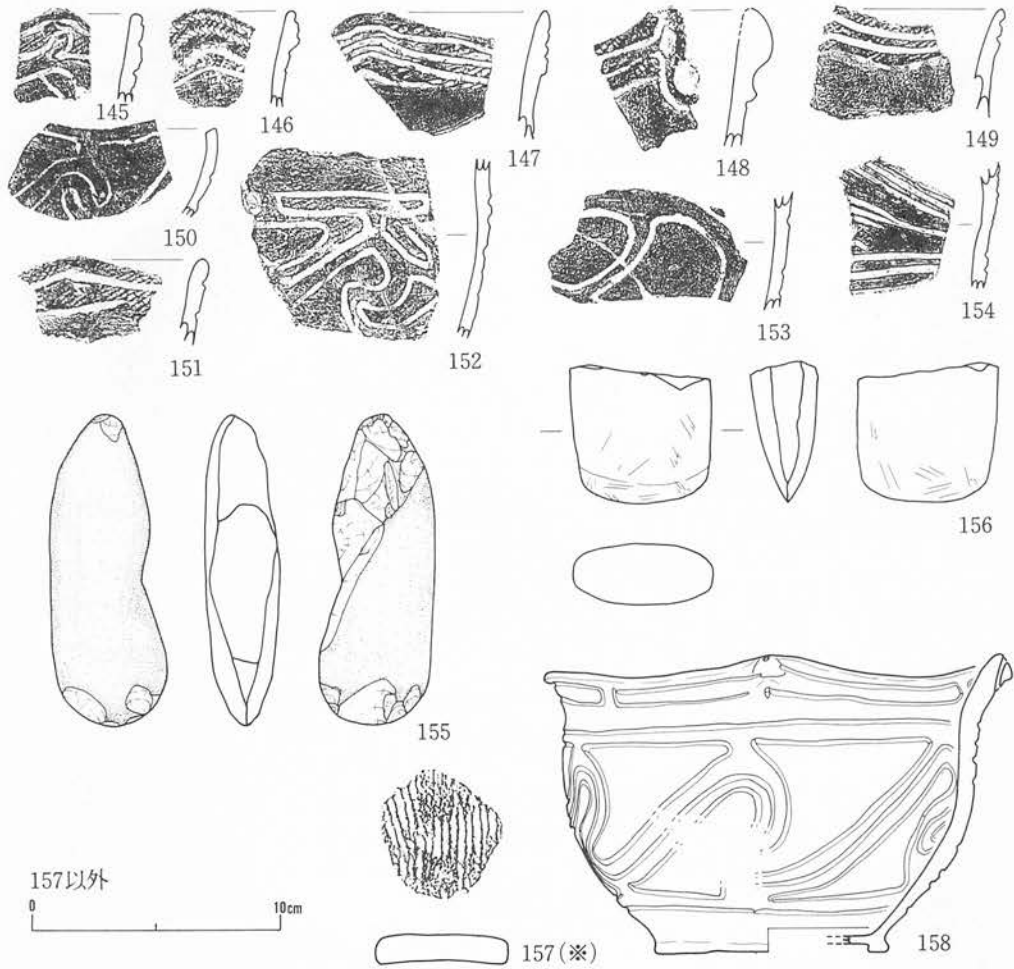
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
138	C III-58 埋土	磨製石斧	92	37	24	150.0	硬砂岩	基部折損。刃部両面から剝離	51
140	C III-53 埋土	ピエス・エスキーユ	27	19	7	3.8	凝灰質珪質泥岩	刃部2個1対	48
141	C III-51 埋土	磨石Ⅱ類	108	89	48	815.0	花崗閃緑岩	一面を使用	51

No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
136	C III-51 埋土	円盤状土製品	42	43	8	19.7	II群土器素材。縁辺打欠き→研磨	53
137	C III-51 埋土状部	円盤状土製品	(39)	43	8	23.1	破片。II群土器素材。縁辺を打欠く	53

S=1/2

第65図 ピット出土遺物(1)





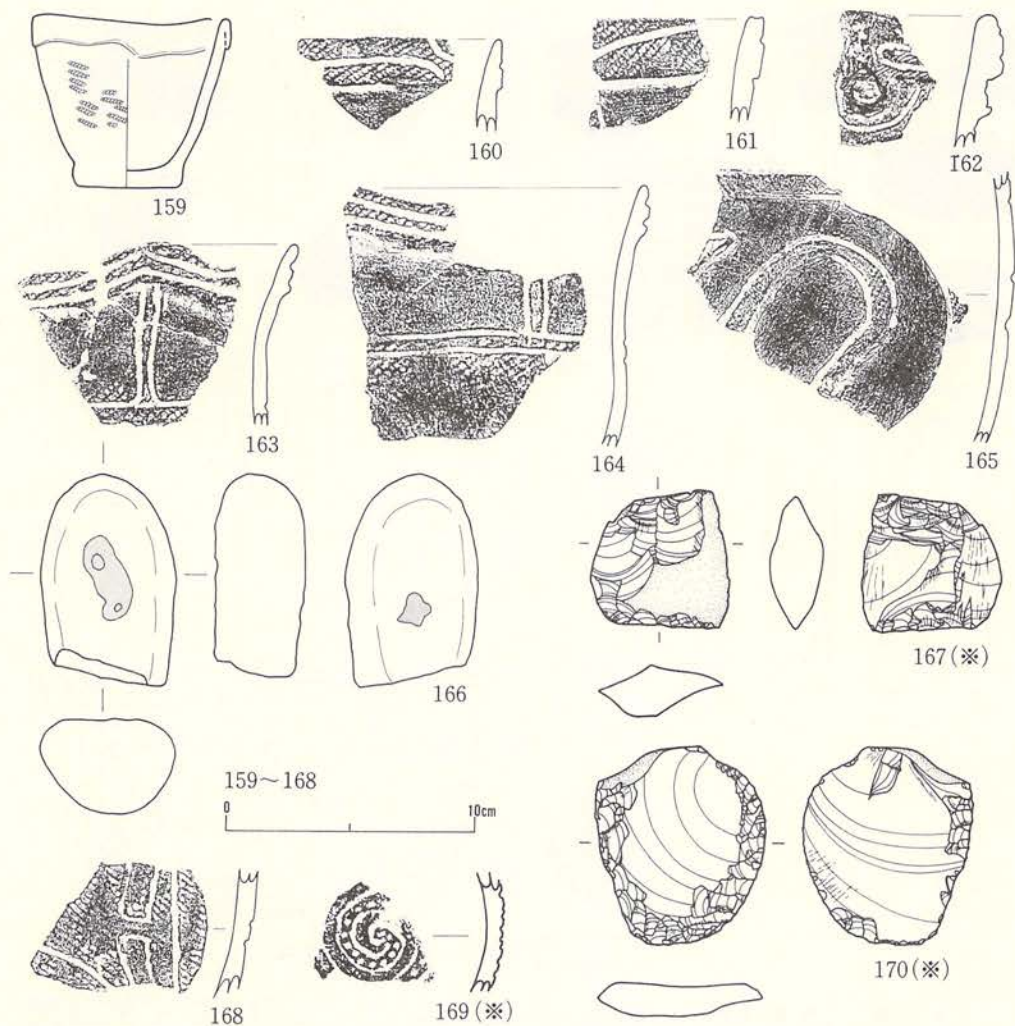
No.	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
145	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線文・Lr	ミガキ		II-1-(1)		47
146	C III-54 埋土下部	深鉢	口縁部	波状口縁。縄文原体側面圧痕・沈線文	ミガキ		II-1-(1)		47
147	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線文・Lr	ミガキ		II-1-(1)		47
148	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。凹のある貼付文	ミガキ		II-1-(1)		47
149	C III-54 埋土下部	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線文・LR	ミガキ		II-1-(1)		47
150	C III-54 埋土	壺	口縁部	無文・沈線文・外面朱塗り	ミガキ		II-I	断面傾き	47
151	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線文・Lr	ミガキ		II-1-(1)		47
152	C III-54 埋土	壺	胴部	LR→沈線→磨消	ミガキ		II-2-(2)-①		47
153	C III-54 埋土下部	壺	胴部	無文・沈線文・外面朱塗り	ミガキ		II-2-(1)		47
154	C III-54 埋土	深鉢	胴部	沈線文・LR	ミガキ		II-2-(2)		47
158	C III-55 埋土	深鉢	口～底	波状口縁。文様単位5。低い高台	ミガキ		II		46

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
155	C III-54 埋土	打製石斧	125	45	31	240	硬砂岩	刃部と基部に剥離	51
156	C III-54 埋土下部	磨製石斧	52	57	24	135	輝石安山岩	刃部残存。両凸刃円刃	51

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
157	C III-54 埋土下部	円盤土製品	35	32	7	10.3	II 群土器素材。縁辺を打欠く	53

S = 1/2 (※)

第66図 ピット出土遺物(2)



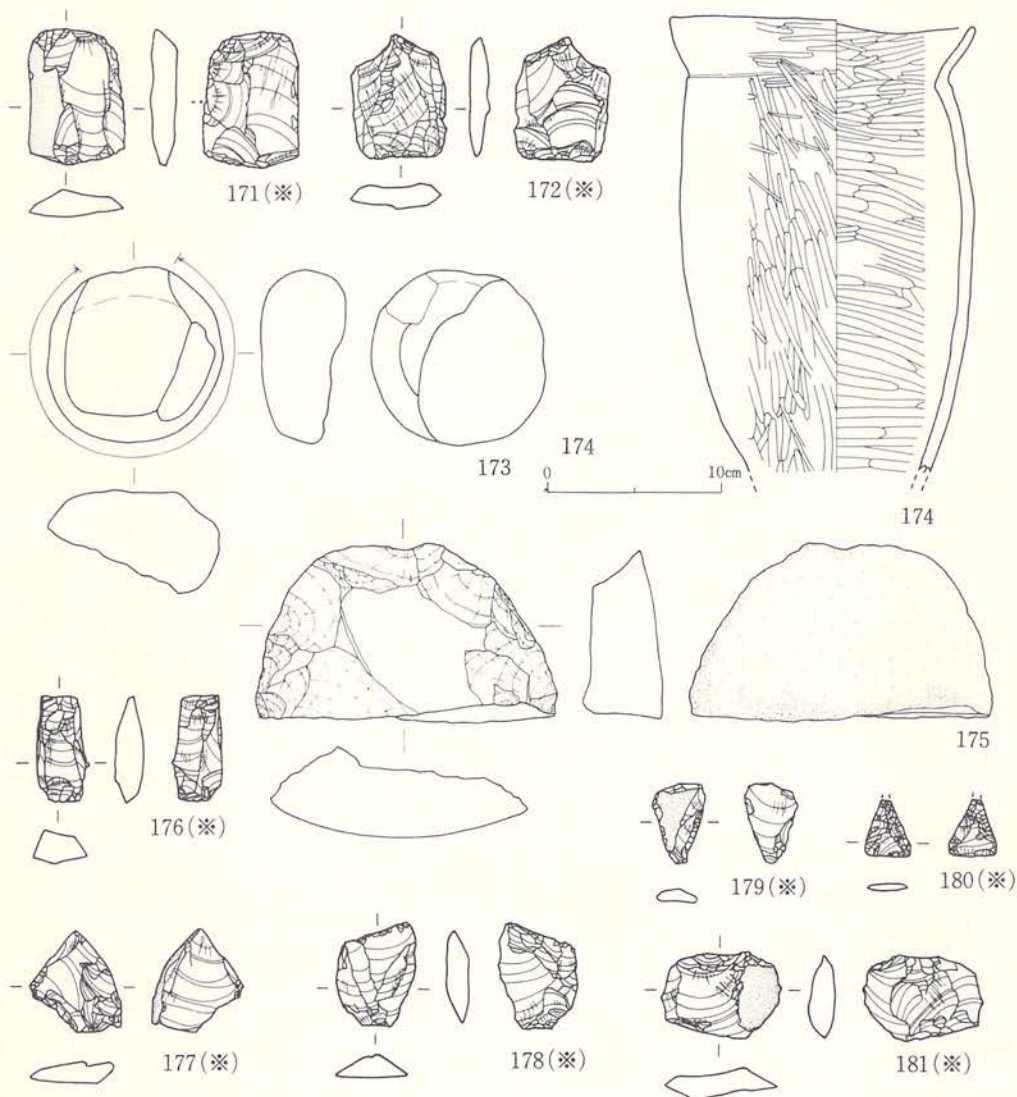
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
159	C III-55 埋土	小型深鉢	口～底	折り返し口縁。LR・ケズリ	ミガキ		II		46
160	C III-55 埋土中・下部	深鉢	口縁部	口縁部肥厚。LR・沈線文	ミガキ		II-1-(1)		47
161	C III-55 埋土中・下部	深鉢	口縁部	口縁部肥厚。LR・沈線文	ミガキ		II-1-(1)		47
162	C III-55 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。刺突文と円形の凹の貼付文	ミガキ		II-1-(1)		47
163	C III-55 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。LR・沈線文	ミガキ		II-1-(1)	同一個体	47
164	C III-55 埋土	深鉢	口～胴	波状口縁。LR・沈線文	ミガキ		II-1-(1)		47
165	C III-55 埋土	深鉢	胴部	沈線文・LR・ミガキ	ミガキ		II-2-(2)		47
168	C III-56 埋土	深鉢	胴部	沈線文・LR・ミガキ	ミガキ		II-2-(2)		47

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
166	C III-55 埋土	凹石	83	54	37	260.0	硬砂岩	折損。両面に凹	52
167	C III-55 埋土	ピエス・エスキーユ	37	37	15	16.9	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
170	D III-53 埋土	不定形石器	53	45	9	26.5	珪質凝灰岩	打面除いた縁辺を細部調整	

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			上面径	下面径	厚さ			
169	C III-55	鐔形土製品	—	—	5	—	破片。沈線文・円形刺突文	53

S = 1/2 (※)

第67図 ピット出土遺物(3)

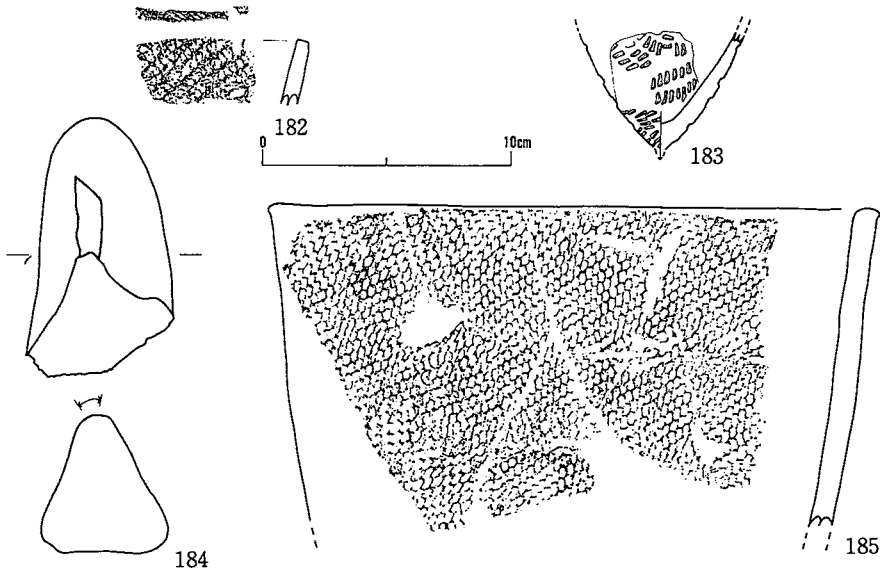


No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版	
			口縁部	胴 部	底 部	口縁部	胴 部	底 部	口 径	器 高	底 径			
174	G II-56	埋土下部	土師器甕	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	17.3	(26.0)	—	L1b	60

No	地点・層位	器 種	計 測 値 : mm			重量 : g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図版	
			長 さ	幅	厚 さ					
171	D III-53	埋土	ピエス・エスキュー	36	26	7	7.4	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
172	D III-53	埋土	ピエス・エスキュー	32	25	7	6.0	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
173	F III-51	埋土最上部	磨石+敲石	70	70	30	300.0	ホルンフェルス	欠損。縁辺に敲打痕。	52
175	G III-51	埋土上部	礫器I類	72	122	36	340.0	石英安山岩		52
176	G III-51	埋土上部	ピエス・エスキュー	28	14	8	3.4	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
177	G III-51	埋土上部	不定形石器	27	23	5	3.3	珪質凝灰岩	自然面。刃部数2	48
178	G III-57	埋土	ピエス・エスキュー	27	20	6	3.3	凝灰質珪質泥岩	刃部2個1対	48
179	G III-52	埋土上部	不定形石器	21	14	3	0.8	珪質凝灰岩	自然面。右辺に細部調整	48
180	G III-54	埋土	石鏃	15	12	3	0.3	珪質凝灰岩	身部折損。平基無差式	48
181	G III-57	埋土	ピエス・エスキュー	23	31	6	5.7	チャート質粘板岩	自然面。刃部2個1対	48

S = 1/2 (※) · 1/3

第68図 ピット出土遺物(4)



Na	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
182	G III-58 埋土	深鉢	口縁部	LR。口端部にも施文	平滑	繊維多	I-1 (1)		47
183	G III-59 埋土中部	深鉢	底部	尖底。放射状の劣裁竹管文	平滑	繊維多	I-3		
185	G III-59 埋土上部	深鉢	口~胴	RL	平滑	繊維多	I-1 (1)		47

Na	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
184	H II-51 埋土上部	厚石 I 類	103	56	54	330	硬砂岩	折損。機能面幅 9mm	

第69図 ピット出土遺物(5)

#### 4. 落とし穴

落とし穴は形状を記号化している。溝状の開口部の平面形を I 型と II 型、縦断面形を A~D、横断面形を 1~3 に模式的に分類し、その組み合わせから溝 I A I のように表わしたものである（「まとめ」の項を参照）。重複する遺構との関係は、新→・旧←・不明↔のように、当該遺構を基準にして表わしている。

#### 5. 焼土遺構

下位に諸施設を伴わず、II層やIII層・遺構の埋土中に単独で形成された焼土12基を分類した。したがって明確な掘り込みを伴う3基は焼土ピットとして分類している（F III-53・G III-55・H I-51の各ピット）。

分布は調査2区北地区に9基と多く、なかでも8基（67%）がC III区・D III区に集中する。平面形は、不整形がもっとも多いほか、楕円形や不整形円形がある。規模は、最小が27×38cm、最大が95×110cmである。焼土の厚さは2~17cmである。

遺構名	C III-101 落とし穴	C III-102 落とし穴	C III-103 落とし穴
挿 図	遺構：第70図 a 遺物：第80図	遺構：第70図 b 遺物：第80図	遺構：第70図 c 遺物：第80図
図 版	遺構：34c・f 遺物：47	遺構：34d・g 遺物：47	遺構：34e・h 遺物：47
検出状況 重複関係			不明→C III-53ピット
形 状	溝 I A 1	溝 I A 1	溝 I A 2
規 模	開口部 52～77×390cm 底部 11～19×375cm	34～69×306cm 10×357cm	66～97×343cm 21～35×330cm
深 さ	111cm	128cm	140cm
埋 土	上半は暗褐色土と黄褐色土、下半は汚れ火山灰が構成。	上部は黒色土と暗褐色土、中・下部は汚れ火山灰、最下部は黒褐色土が構成。	汚れ火山灰や火山灰が卓越。
底 面	北端から南端へ向って傾斜して上がっている。	両端が高く、湾曲。	北西端から南東端へ向って、緩やかに傾斜して上がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例188・192のほか、縄文土器 I 群と II 群の破片19点。	図示例194・196・199・200のほか、縄文土器 I 群・II 群の破片46点。	図示例198のほか、縄文土器 II 群の破片12点と剝片 1 点。
分 類	L	L	M
備 考			

遺構名	D III-101 落とし穴	D III-102 落とし穴	E III-101 落とし穴
挿 図	遺構：第70図 d	遺構：第71図 a 遺物：第80・81図	遺構：第71図 b 遺物：第81図
図 版	遺構：35a	遺構：35bc 図版：47・48・52	遺構：35de 遺物：53
検出状況 重複関係	旧→D III-3 住居跡(奈良時代)。床構築土に覆われている。	旧→D III-5 住居跡(平安時代)	
形 状	溝 II。残存部では長軸は B。	溝 I D 2。北端は内湾気味に立ち上がる。	溝 I D 1。北端上部の崩壊著しい。
規 模	開口部 9～25×374cm。両端幅：64～74cm 底部 11～24×374cm。両端幅：50～55cm	83×(推定) 323cm 19～22×292cm	67～86×402cm 7～10×356cm
深 さ	(地山面から) 125cm	112cm	130cm
埋 土	下部の埋土が観察できる。汚れ火山灰と暗褐色土が構成。	上半は黒褐色土や黄褐色土、下半は汚れ火山灰と黒褐色土が構成。	上部は褐色土と暗褐色土、壁際と中部・最下部は汚れ火山灰、下部は黒褐色土が構成。
底 面	南半は北半に比べるとわずかに低い。	両端がわずかに高いほかはほぼ水平。	中央部付近から両端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	図示例190・193・202・205のほか、縄文土器 I 群・II 群の破片11点と剝片類23点。	図示例209のほか、縄文土器 I 群と II 群の破片 5 点・剝片 3 点。
分 類	L	M	L
備 考			

遺構名	E III-102 落とし穴	E III-103 落とし穴	F III-101 落とし穴
挿 図	遺構：第71図 c	遺構：第71図 d 遺物：第80図	遺構：第72図 a
図 版	遺構：35fg	遺構：35h・36a 遺物：47	遺構：36bc
検出状況 重複関係		調査できたのは南西側約1/2で、残りの部分は調査区域外。	
形 状	溝 I A 1	溝 I 2	溝 I A 1
規 模			
開口部	53~69×284cm	幅：83cm。長さ：275cmまで確認	56~82×357cm
底 部	13~21×320cm	幅：15~21cm。長さ：225cmまで確認	8~15×362cm
深 さ	135cm	164cm	115cm
埋 土	上半は褐色土と暗褐色土、下半は汚れ火山灰が卓越する。	上半は主に暗褐色土と黒色土、下半は汚れ火山灰が卓越。	上半は暗褐色土と明黄褐色土、下半は汚れ火山灰と黒褐色土が構成。
底 面	両端が高く、湾曲。	南西端から中央へ向い傾斜して下がっている。	両端がわずかに高くなる。ゆるやかに波打つ。
副 穴	なし	調査できた範囲にはない。	なし
出土遺物	剥片1点。	縄文土器 I 群の破片1点。	縄文土器 I 群の破片1点と剥片3点。
分 類	M	—	L
備 考		II層に覆われている。	

遺構名	F III-102 落とし穴	F III-103 落とし穴	F III-104 落とし穴
挿 図	遺構：第72図 b 遺物：第80・81図	遺構：第72図 c 遺物：第81図	遺構：第72図 d
図 版	遺構：36de 遺物：48・52	遺構：36fg 遺物：52・53	遺構：36h・37a
検出状況 重複関係			旧-F III-54ピット。貼り床を施されている。
形 状	溝 I C 1	溝 I B 2	溝 I B 1
規 模			
開口部	67~80×364cm	45~75×352cm	27~46×341cm
底 部	7~15×318cm	7~12×329cm	10~15×339cm
深 さ	135cm	119cm	103cm
埋 土	上部は暗褐色と汚れ火山灰、中部は火山灰、下部は褐色土が構成。	上部は暗褐色土と褐色土、中・下部は明黄褐色土、最下部は褐色土が構成。	最上部と最下部を黒褐色土が占めるほかは汚れ火山灰が構成。
底 面	北東端から南西端へ向いわずかに傾斜して上がっている。	ほぼ水平	わずかに波打っている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例204縦形石匙と207礫器 I 類。	図示例211打製石斧と208礫器 I 類。	縄文土器 I 群の破片4点。
分 類	M	M	M
備 考			

遺構名	G II-101 落とし穴	G II-102 落とし穴	G II-103 落とし穴
挿 図	遺構：第73図 a	遺構：第73図 b 遺物：第80図	遺構：第73図 c
図 版	遺構：37b	遺構：37c・e 遺物：47	遺構：37f
検出状況 重複関係	旧→G II-1 住居跡(古墳～奈良時代)。壁の一端が重複する。		旧→G II-3 住居跡(平安時代)・G II-151炭窯
形 状	溝 I A 1。北西側約 1/2 の開口部の幅が広い。長軸は緩やかに湾曲。	溝 I B 1	溝 I B 1
規 模	開口部	32～100×365cm	45×328cm
	底部	13～18×412cm	7～17×290cm
深 さ	106cm	142cm	114cm
埋 土	下半しか観察できなかったが、火山灰に黒褐色土が混じっている。	上部は黒褐色土と汚れ火山灰、中・下部は褐色土が構成。	固有の埋土は下半にだけ残存。汚れ火山灰や火山灰が構成。
底 面	北西端から南東端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	ほぼ水平に移行し、南側約4/1がわずかに低い。	南端から北端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群の破片 4 点。	図示例195縄文土器 II 群の破片 1 点。	なし
分 類	L	M	M
備 考			

遺構名	G III-101 落とし穴	G III-102 落とし穴	G III-103 落とし穴
挿 図	遺構：第73図 d 遺物：第80図	遺構：第74図 a 遺物：第80・81図	遺構：第74図 b
図 版	遺構：37d・g 遺物：47・48	遺構：38a・c 遺物：51・53	遺構：38b・d
検出状況 重複関係		新→G III-1・2 の各住居跡(縄文時代)。埋土から切っている。	新→G III-52ピット
形 状	溝 I A 1	溝 I A 1	溝 I A 1
規 模	開口部	80～103×301cm	100～112×369cm
	底部	12～21×342cm	20～30×384cm
深 さ	137cm	150cm	93cm
埋 土	上部は黒褐色土、壁際や中・下部は褐色土や暗褐色土が構成。	上半の壁際は汚れ火山灰や火山灰が占める。	暗褐色土が最上部を占めるほかは3層の褐色土が構成。
底 面	南端から北端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	北西端から南東端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	中央部に比べると両端がわずかに高い。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例191・203のほか、縄文土器 I 群破片 3 点と剝片 2 点。	図示例197・210のほか、縄文土器 I 群破片 6 点と剝片 10 点。	縄文土器 I 群の破片 5 点と剝片 32 点。
分 類	M	L	M
備 考			

遺構名	G III-104 落とし穴	G III-105 落とし穴	G III-106 落とし穴
挿 図	遺構：第74図 c	遺構：第74図 d 遺物：第80・81図	遺構：第75図 a
図 版	遺構：38e・g	遺構：38f・h 遺物：52	遺構：39a・c
検出状況 重複関係	1/2以上は調査区域外。新→G III-2 住居跡(縄文時代)。埋土から切っている。	新→G III-4 住居跡(縄文時代)。埋土から切っているものと推定。	新→G III-2 住居跡(縄文時代)。埋土から切っている。
形 状	溝 I 1。西端の壁はほぼ直立。	溝 I A 1	溝 I A 1
規 模	開口部 幅84cm。現存長138cm 底部 幅6～10cm。現存長135cm	80～100×366cm 12～25×396cm	28～39×283cm 6～9×262cm
深 さ	145cm	147cm	80cm
埋 土	上部と最下部は主に黒褐色土、壁際と中・下部は褐色土が占める。	黒褐色土が最上部を占める以外は黄褐色ほかの汚れ火山灰が構成。	暗褐色土と褐色土が構成。
底 面	わずかに波打つ。	両端がわずかに高く、弧状。	南西端寄り約1/4の部分がわずかに傾斜しているほかはほぼ水平。
副 穴	調査できた部分にはない。	なし	なし
出土遺物	剝片 1点	図示例201・206のほか、縄文土器 I 群の破片 1点	なし
分 類	—	L	S 2
備 考			

遺構名	G III-107 落とし穴	G III-108 落とし穴	H I-101 落とし穴
挿 図	遺構：第75図 b 遺物：第80図	遺構：第75図 c 遺物：第80図	遺構：第75図 d
図 版	遺構：39b・d	遺物：47	遺構：39g
検出状況 重複関係			南端の一部が調査できただけで他は区域外。II層を切っている。
形 状	溝 I D 1	溝 I C 1	溝 I 1。南端の壁はほぼ直立
規 模	開口部 50～57×385cm 底部 10～20×381cm	62～85×248cm 10～12×198cm	幅95cm 幅8～20cm
深 さ	103cm	149cm	132cm
埋 土	上部と最下部が黒褐色土、中・下部は火山灰が構成。	最上部を黒褐色土が占めるほかは暗褐色土が構成。	上半は暗褐色土と褐色土、下半は汚れの少ない火山灰が構成。
底 面	中央から北端へ向ってわずかに下がっている。	南東端へ向ってわずかに上がっている。	不明
副 穴	なし	なし	不明
出土遺物	図示例189のほか、縄文土器 I 群の破片 4点と剝片 1点。	図示例187のほか、縄文土器 I 群の破片 1点と剝片 2点。	なし
分 類	L	S 1	—
備 考		小凹凸が壁面に顕著	

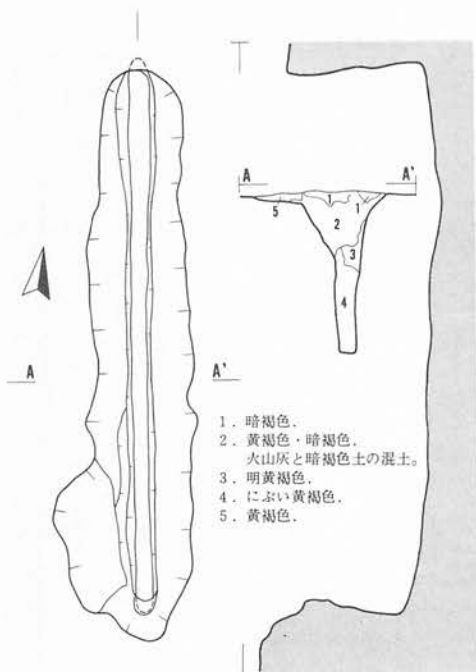


遺構名	H II-101 落とし穴	H II-102 落とし穴	H II-103 落とし穴
挿 図	遺構：第76図 a	遺構：第76図 c	遺構：第76図 c
図 版	遺構：39e・h	遺構：39f・40cd	遺構：40a・c・e
検出状況 重複関係		新→H II-103落とし穴	旧→H II-102落とし穴
形 状	溝 I B 1。両端の壁がやや波打ち、南西端の上部は崩壊。	溝 I B 1	溝 II 1。両端の上部は崩壊が著しい。
規 模	開口部 85～96×325cm 底 部 12～15×294cm	62×285cm 10～16×255cm	60～68×415cm。両端幅130～146cm 9～13×422cm。両端幅48～60cm
深 さ	133cm	137cm	95cm
埋 土	上部は暗褐色土、中・下部は明黄褐色～褐色の汚れ火山灰。	暗褐色土が構成。4層に細分できる。	褐色土・暗褐色土・黒褐色土が構成。
底 面	わずかに波打ち、南西側約1/4がいくぶん高くなる。	ごくわずかに南側へ下がる。	ほぼ水平
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群・II 群の破片各 1 点	剝片 1 点	なし
分 類	M	S 2	L
備 考			

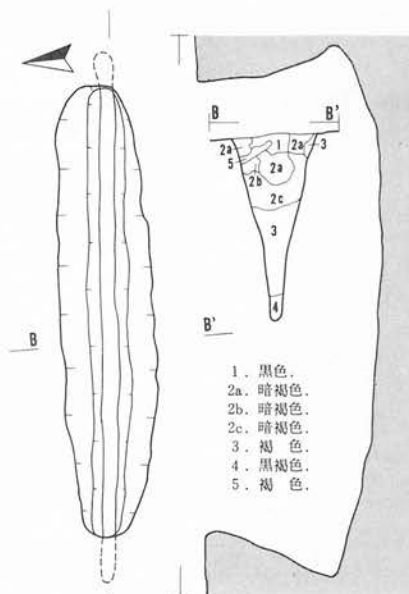
遺構名	H II-104 落とし穴	H VIII-101 落とし穴	H VIII-102 落とし穴
挿 図	遺構：第76図 b	遺構：第77図 a	遺構：第78図 a
図 版	遺構：40b・f	遺構：40g・41a	遺構：41bc
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I B 1	溝 I A 1	溝 I D 1
規 模	開口部 70～88×304cm 底 部 15～20×280cm	48～62×356cm 13～20×382cm	59～77×350cm 11～15×333cm
深 さ	123cm	133cm	116cm
埋 土	上部は暗褐色土、中部は汚れ火山灰、下部は褐色土が主に構成。	にぶい黄褐色土が上・中、褐色土が下部を占める。	暗褐色土が卓越。
底 面	ほぼ水平	北側がわずかに高くなる。	北へ向い漸次高くなる。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群の破片 2 点。	なし	なし
分 類	M	L	M
備 考			

遺構名	HVIII-103 落とし穴	HVIII-104 落とし穴	HVIII-105 落とし穴
挿 図	遺構：第78図 b	遺構：第78図 c	遺構：第78図 d
図 版	遺構：41de	遺構：41f~h	遺構：42a・c
検 出 状 況 重 複 関 係			
形 状	溝 I A 1	溝 II D 2	溝 I C 2
規 模			
開 口 部	50~72×395cm	17~24×407cm。両端幅62~85cm	34~50×413cm
底 部	10~20×405cm	10×412cm。両端幅35~42cm	6~25×384cm
深 さ	80cm	70cm	57cm
埋 土	にぶい黄褐色土・黄褐色土・褐色土で構成。	黒褐色土が卓越。	褐色土と黄褐色土で構成。
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	ほぼ水平
副 穴	なし	なし	なし
出 土 遺 物	なし	なし	なし
分 類	L	L	L
備 考			

遺構名	HVIII-106 落とし穴	HIX-101 落とし穴	HIX-102 落とし穴
挿 図		遺構：第77図 b	遺構：第77図 c
図 版	遺構：42b・d	遺構：42e・g	遺構：42f・h・43c
検 出 状 況 重 複 関 係			
形 状	溝 I A 2	溝 I D 1	溝 I A 2
規 模			
開 口 部	48~57×325cm	55~65×300cm	26~43×326cm
底 部	15~28×355cm	12~24×292cm	10×335cm
深 さ	75cm	92cm	55cm
埋 土	褐色土が卓越。	黒褐色土・にぶい黄褐色土が上半、暗褐色土が下半を占める。	3層の褐色土で構成。
底 面	中央部付近が若干高い。	中央部から北半が若干高くなる。	ほぼ水平
副 穴	なし	なし	なし
出 土 遺 物	なし	なし	なし
分 類	L	M	M
備 考			

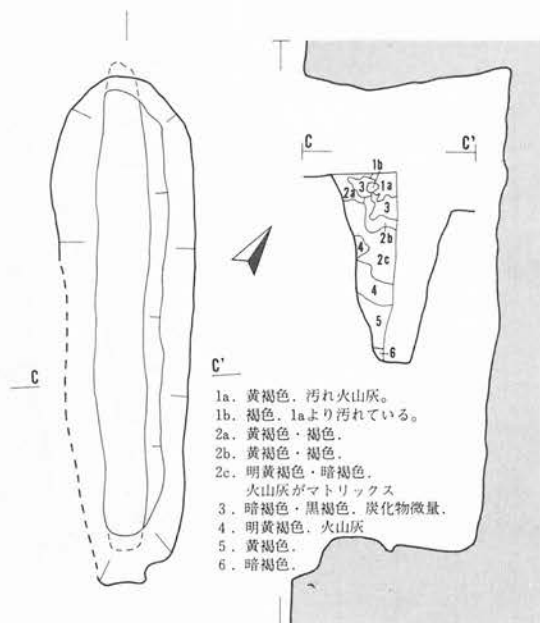


a. C III-101

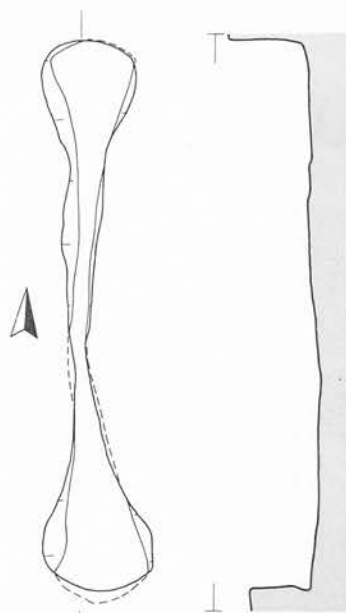


b. C III-102

0 1m



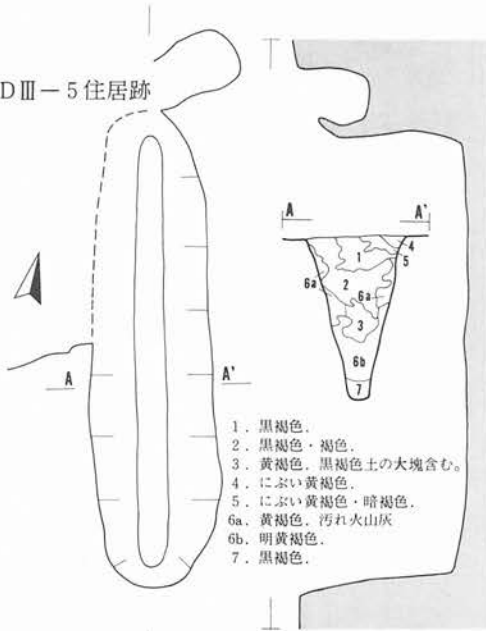
c. C III-103



d. D III-101

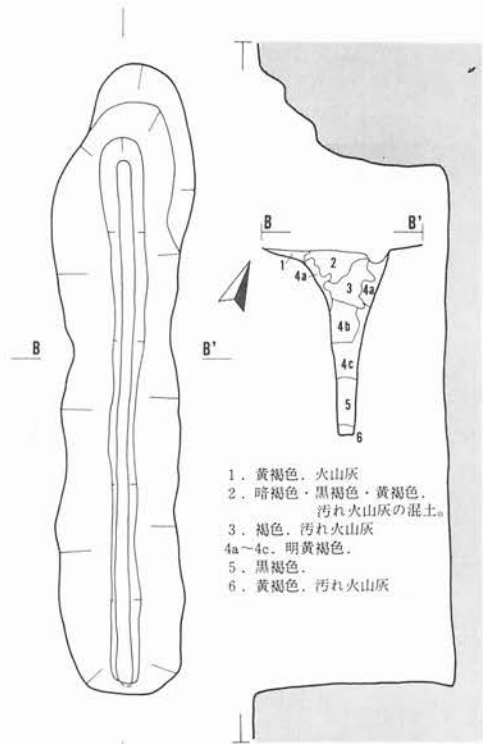
第70図 落とし穴実測図(1)

DⅢ-5 住居跡

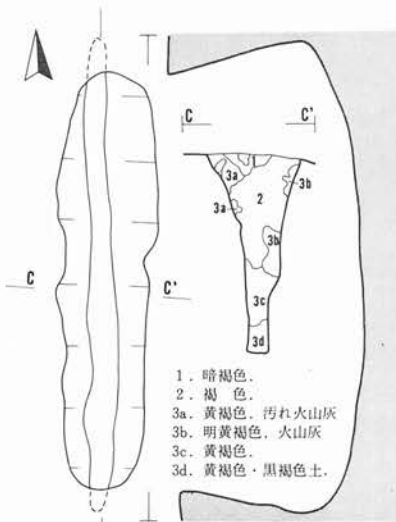


a. DⅢ-102

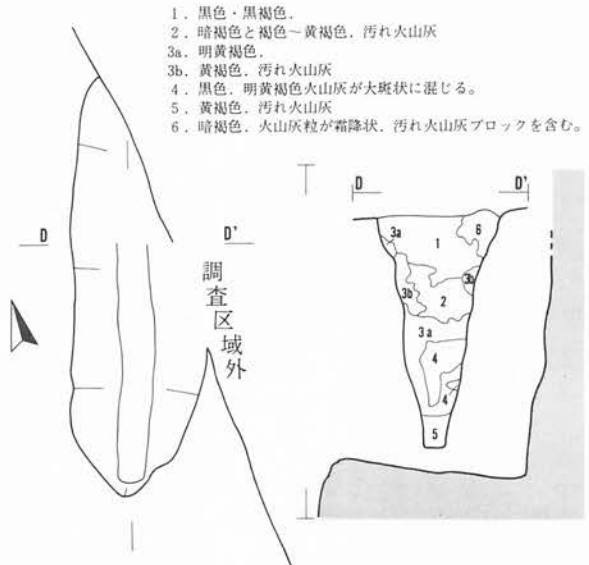
0 1m



b. EⅢ-101

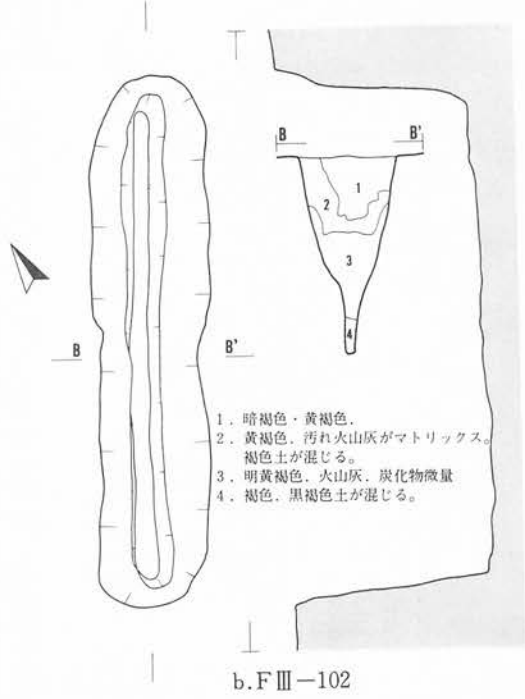
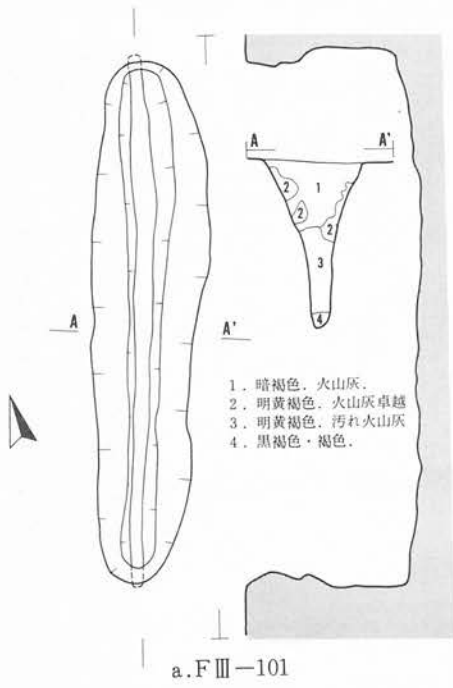


c. EⅢ-102

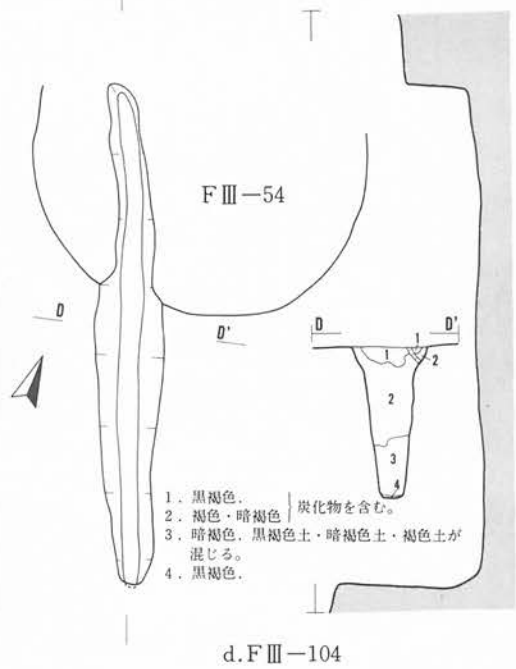
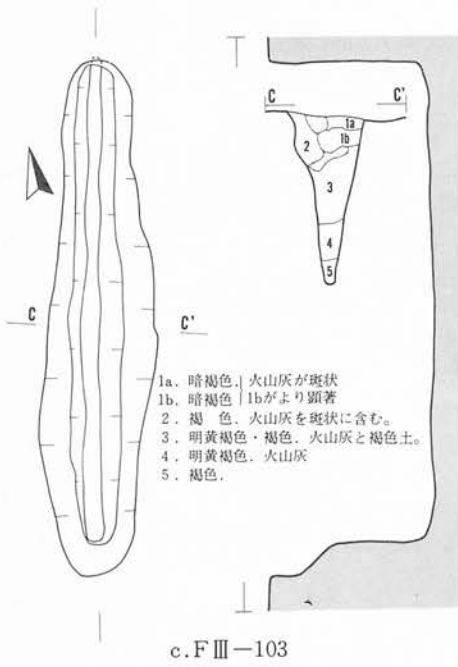


d. EⅢ-103

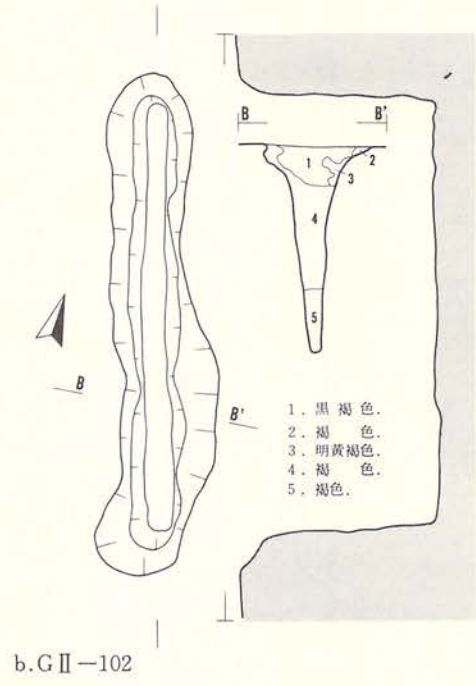
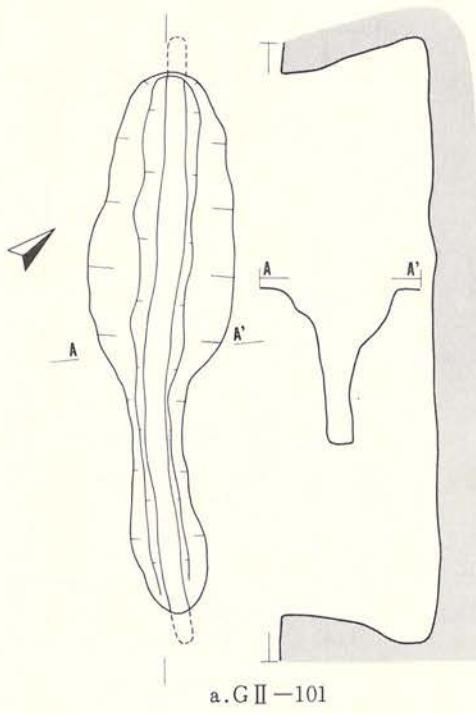
第71図 落とし穴実測図(2)



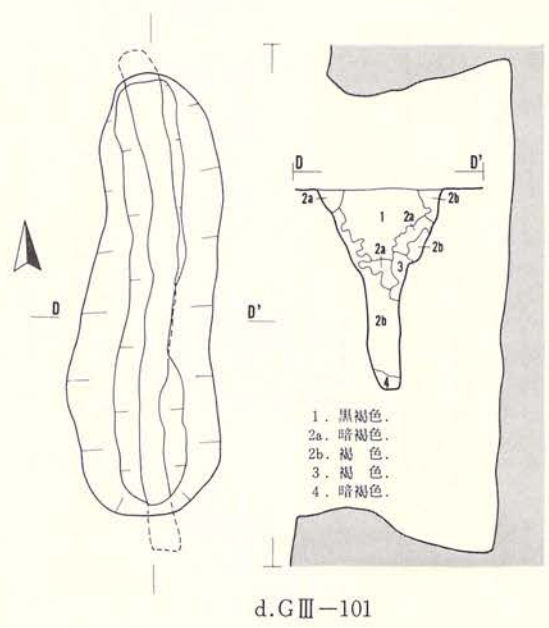
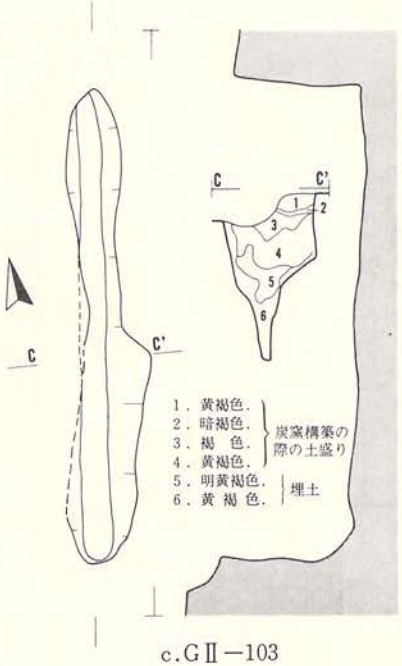
0 1m



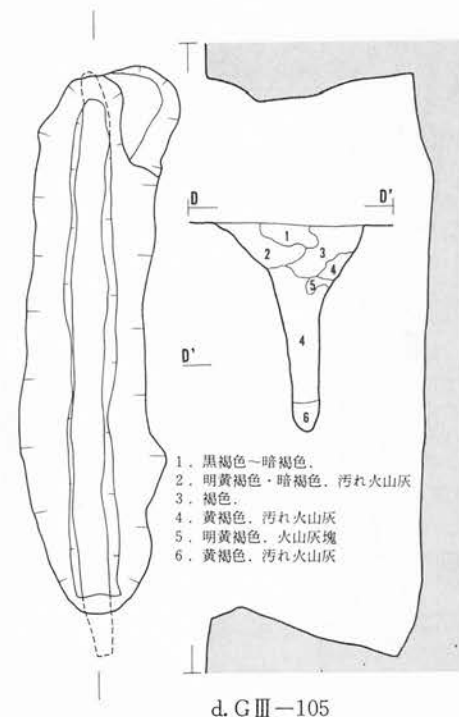
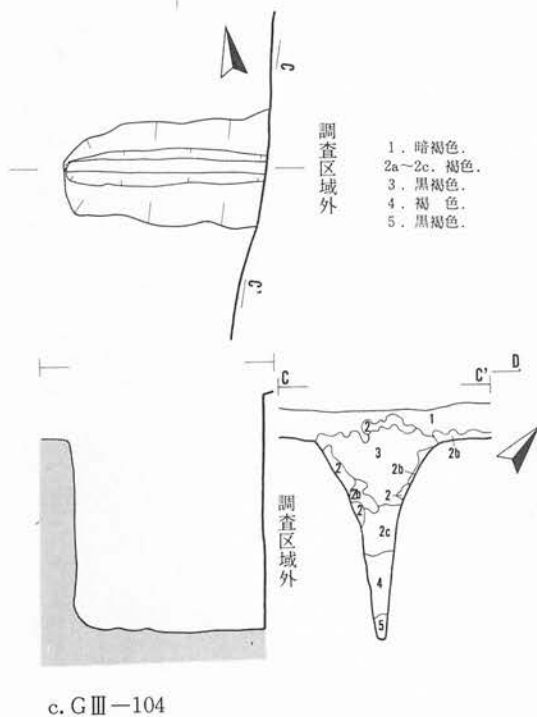
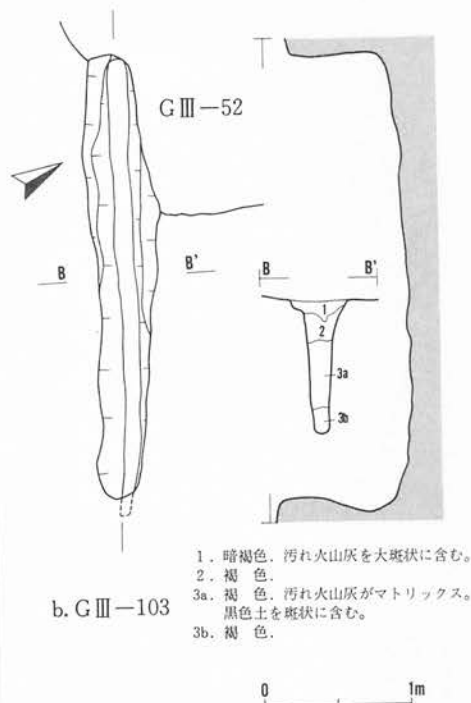
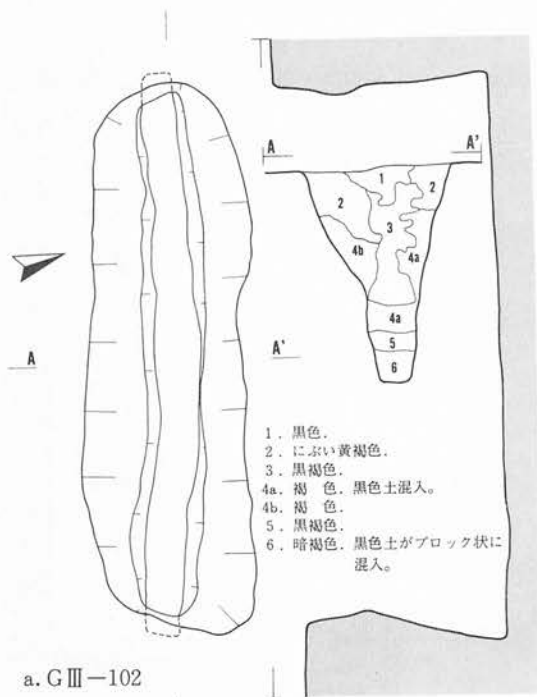
第72図 落とし穴実測図(3)



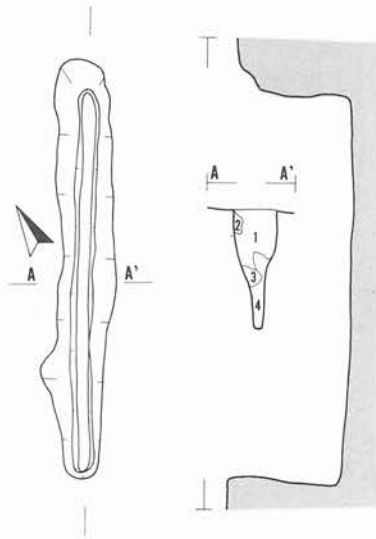
0 1m



第73図 落とし穴実測図(4)

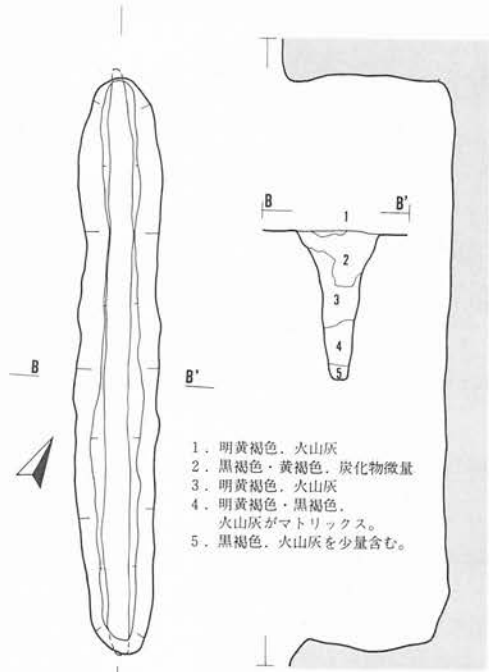


第74図 落とし穴実測図(5)



a. G III-106

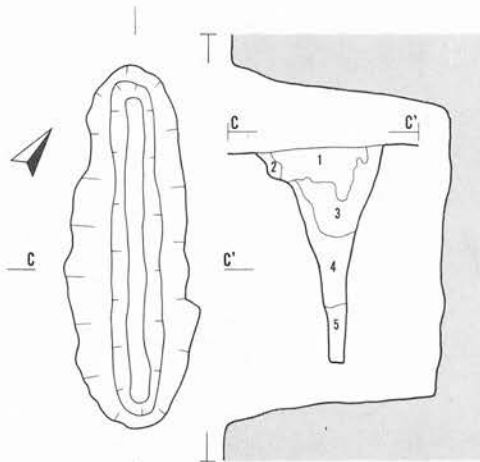
1. 暗褐色。黒褐色が斑状に。火山灰が霜降状に含まれる。
2. 褐色。
3. 褐色。火山灰塊を霜降状に含む。
4. 褐色・黒褐色。



b. G III-107

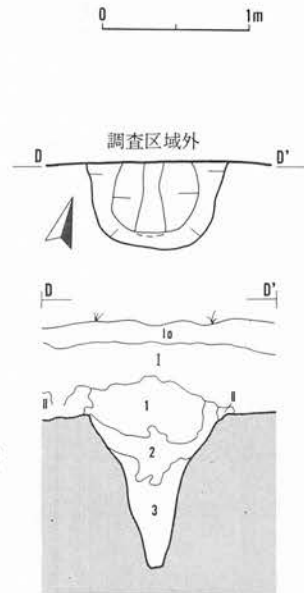
1. 明黄褐色。火山灰
2. 黒褐色・黄褐色。炭化物微量
3. 明黄褐色。火山灰
4. 明黄褐色・黒褐色。火山灰がマトリックス。
5. 黒褐色。火山灰を少量含む。

1. 黒褐色。火山灰が少量。
2. 黄褐色。汚れ火山灰の大塊がマトリックス。
3. 暗褐色。粒状～小塊の火山灰を含む。
4. 暗褐色。火山灰塊を全体に含む。
5. 暗褐色。火山灰塊を少量含む。



c. G III-108

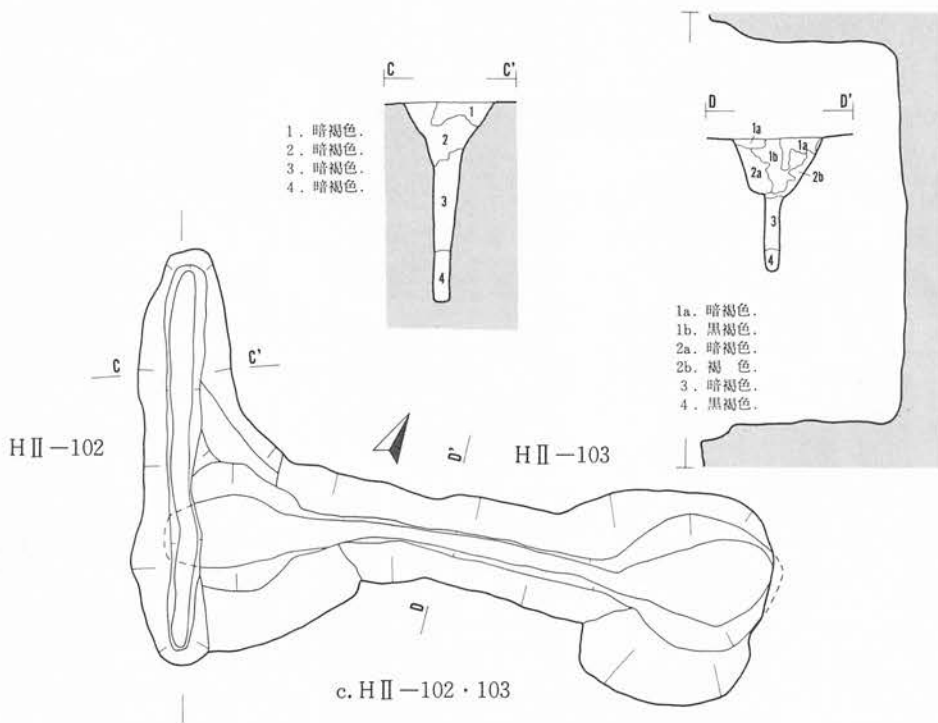
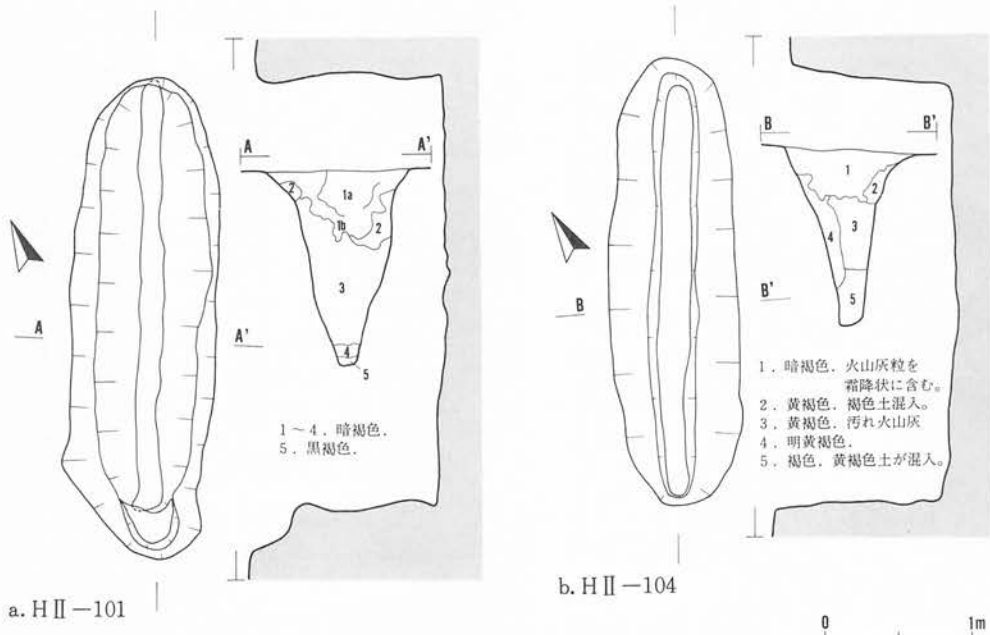
- I. 盛り土
- I・II. 基本層位
1. 暗褐色。
2. 褐色・黄褐色。黒褐色。塊状に混じる。
3. 明黄褐色。火山灰



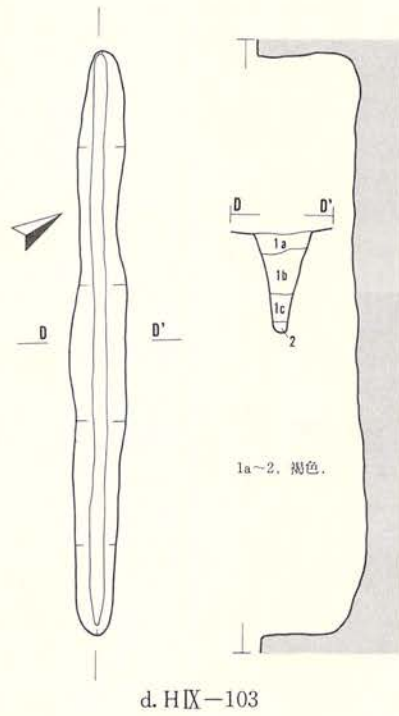
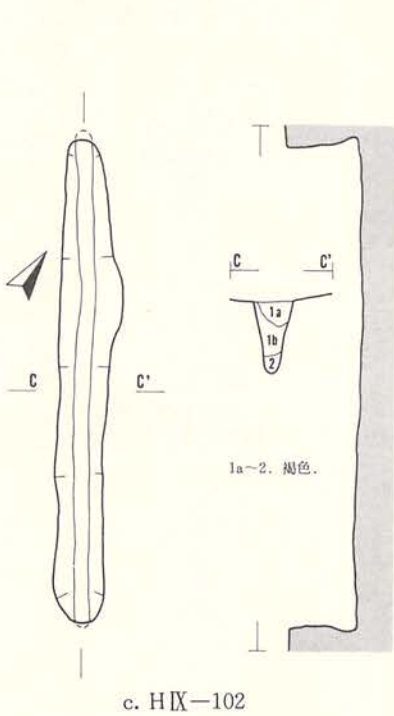
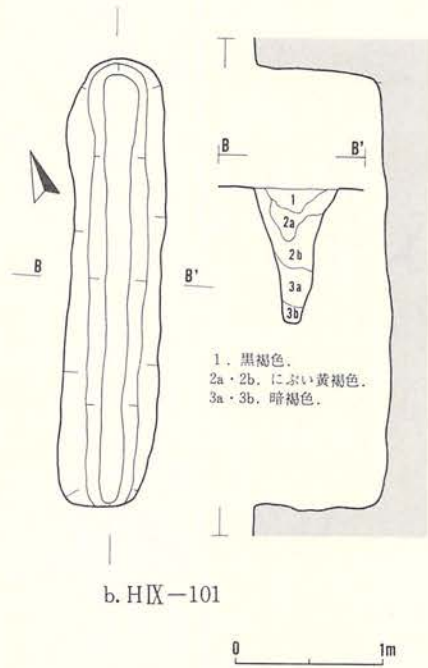
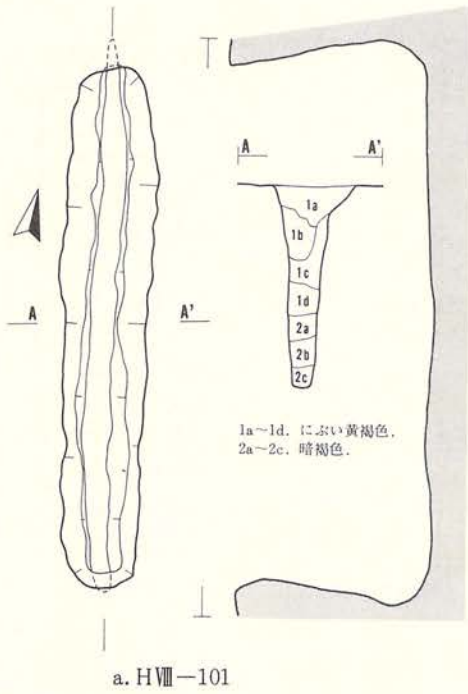
d. H I-101

第75図 落とし穴実測図(6)

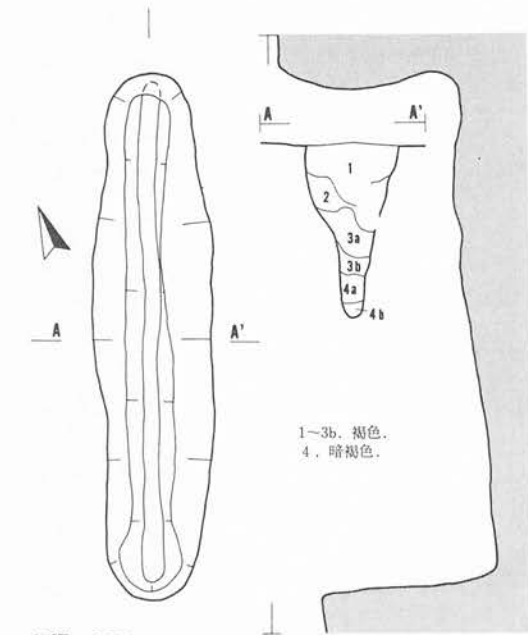




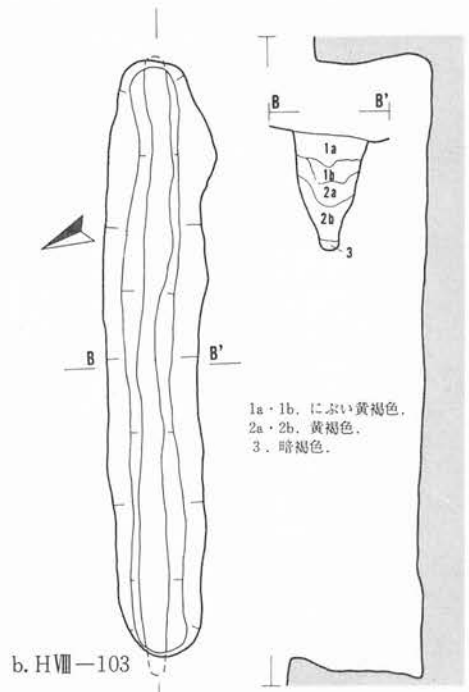
第76図 落とし穴実測図(7)



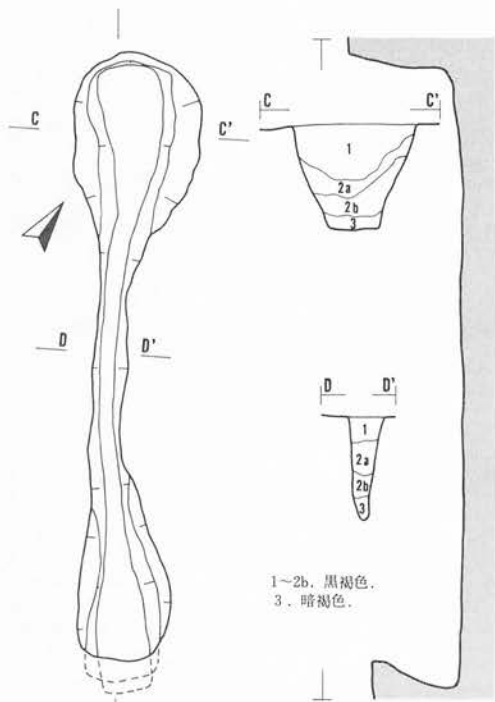
第77図 落とし穴実測図(8)



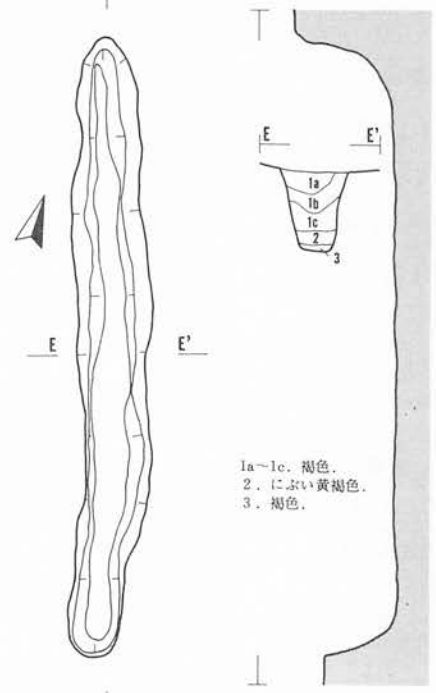
a. H VIII-102



b. H VIII-103



c. H VIII-104



d. H VIII-105

第78図 落とし穴実測図(9)

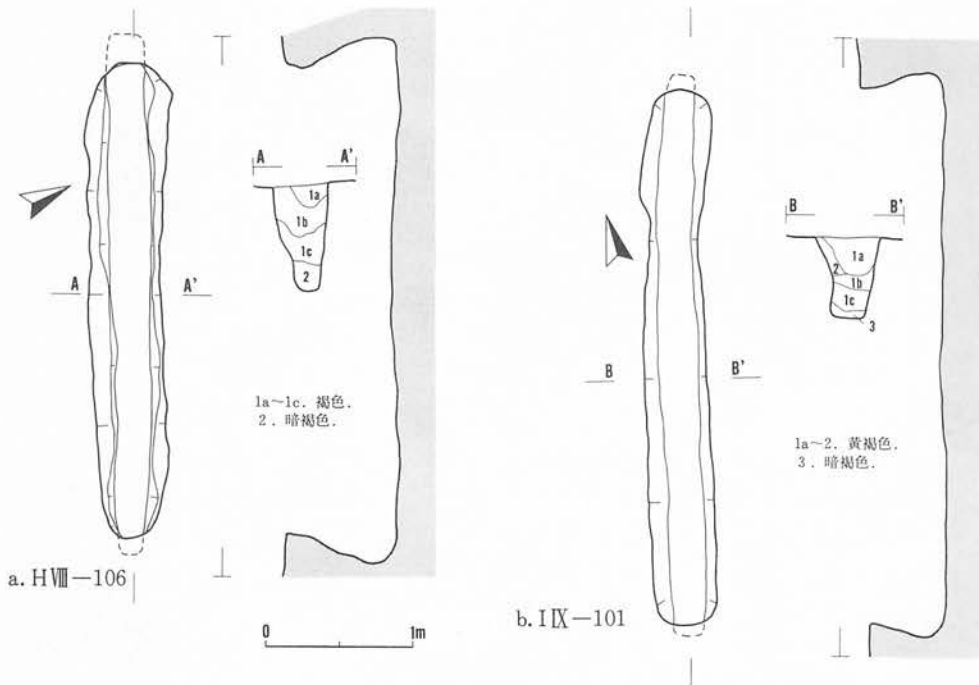
遺構名	HIX-103 落とし穴	IX-101 落とし穴
挿図	遺構：第77図d	遺構：第125図b
図版	遺構：43a・c・d	遺構：43b・e
検出状況 重複関係		
形状	溝 I D 2	溝 I A 1
規 開口部	25～39×398cm	43×365cm
模 底部	9×387cm	28×370cm
深 さ	74cm	54cm
埋 土	4層の褐色土で構成。	黄褐色土が卓越。
底 面	ゆるやかに波打つ。	ほぼ水平
副 穴	なし	なし
出土遺物	なし	なし
分 類	L	L
備 考		

所属時期を決定する資料を欠く例が大部分である。III層＝地山が焼けているD III-201やE III-201は上を覆うII層の形成年代から縄文時代に属することが推定できる。また、II層中に形成されているC III-201ほか2基も古代以前と推定できる。平安時代のF III-2住居跡の埋土上部に形成されたF III-201はそれ以降の時期のものであることがわかる。なおD III-203は縄文時代の住居跡の炉の可能性をもつものである。

以下、表形式で記載する。遺構の図と写真は第82図・図版43に、出土遺物は第83図・図版49・53に一部を掲載した。個別の位置は遺構配置図に示している。

No	遺構名	グリッド	層 位	平面形	規模cm	厚さcm	備 考
1	C III-201	C III e 3	II層下部	不整形	27×38	5	
2	C III-202	C III f 3	C III-51 P埋土上	不整形	95×110	17	
3	C III-203	C III f 2・3	C III-52 P埋土上	不整形円形	52×55	9	
4	C III-204	C III g h 4	II層下部	不整形円形	60×90 39×41	16 不明	2基が北西-南東方向に並ぶ。
5	D III-201	D III a 2・3	III層	不整形	22×40 35×67	不明 6	2基がほぼ接して存在。石鏝(212)はほぼ焼土上から出土しているが、共伴関係は不明。

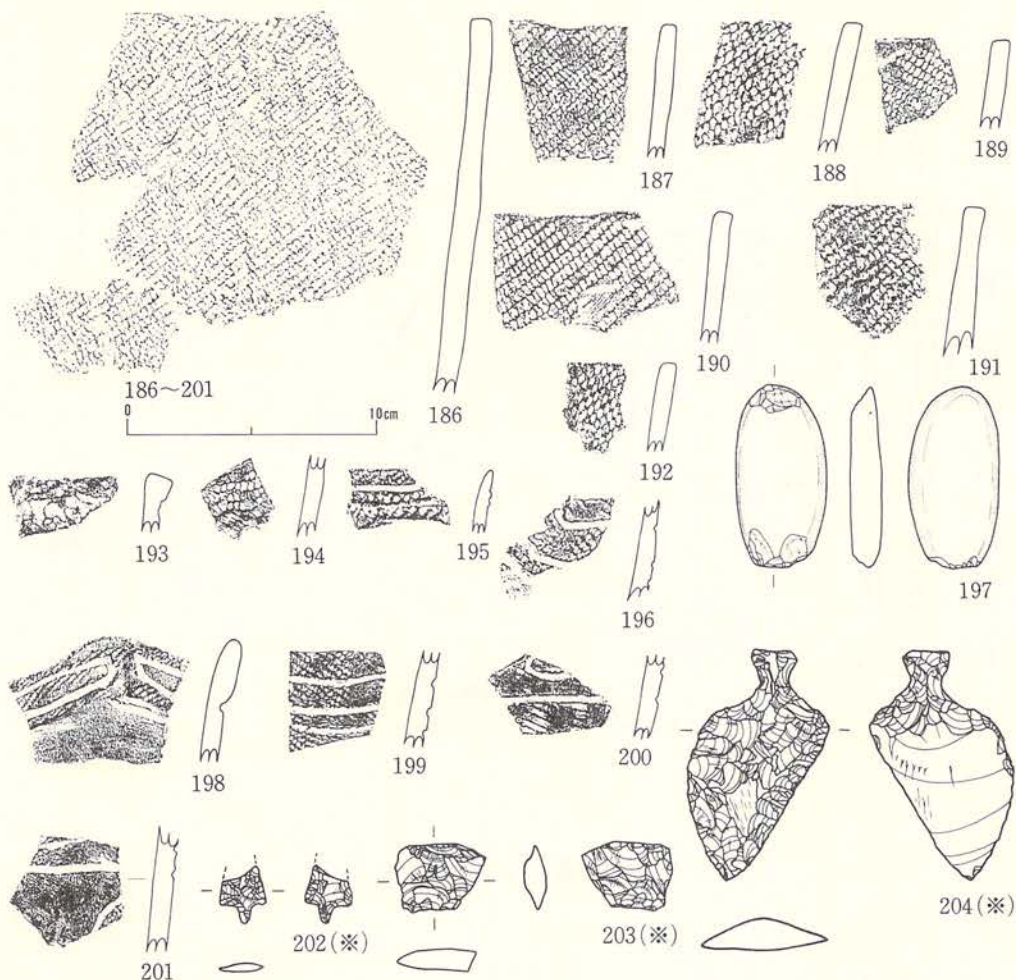
※続きは次ページ



第79図 落とし穴実測図(10)

※前ページからの続き

6	D III-202	D III c 7	柱穴状ビット上部	不整形	43×45	6	埋土が焼土混じりの黄褐色土を主にする柱穴状ビット(径41cm、深さ64cm)の上部に検出。ビットとの関係は不明。また不定形石器(214)はビットから出土したもので、共伴関係は不明。
7	D III-203	D III e 6	II層	不整形円形	38×50	2	亜角～円の小礫が多く混じった黄褐色粘土を敷いた面が残っている。周辺には床面と推定される硬い面が一部にみられる。住居跡の炉の可能性が強いが、平面形や柱穴が把握できず、ここに含めた。石皿(213)はほぼ接して出土しているが、共伴関係は不明。
8	D III-204	D III f 4	風倒木上	不整形	25×45	10	大型の木炭が南西に分布。その下位から土師器甕の破片が出土。
9	E III-201	E III c 7	III層	不整形円形	30×37	6	
10	F III-201	F III h 3	F III-2 住居跡南壁際埋土上部	不整形円形	62×68	5	
11	G III-201	G III g 2	I層直下	楕円形	55×123	10	
12	H II-201	G II j 6 H II a 6	G II-56P上位	不整形円形	55×75	9	

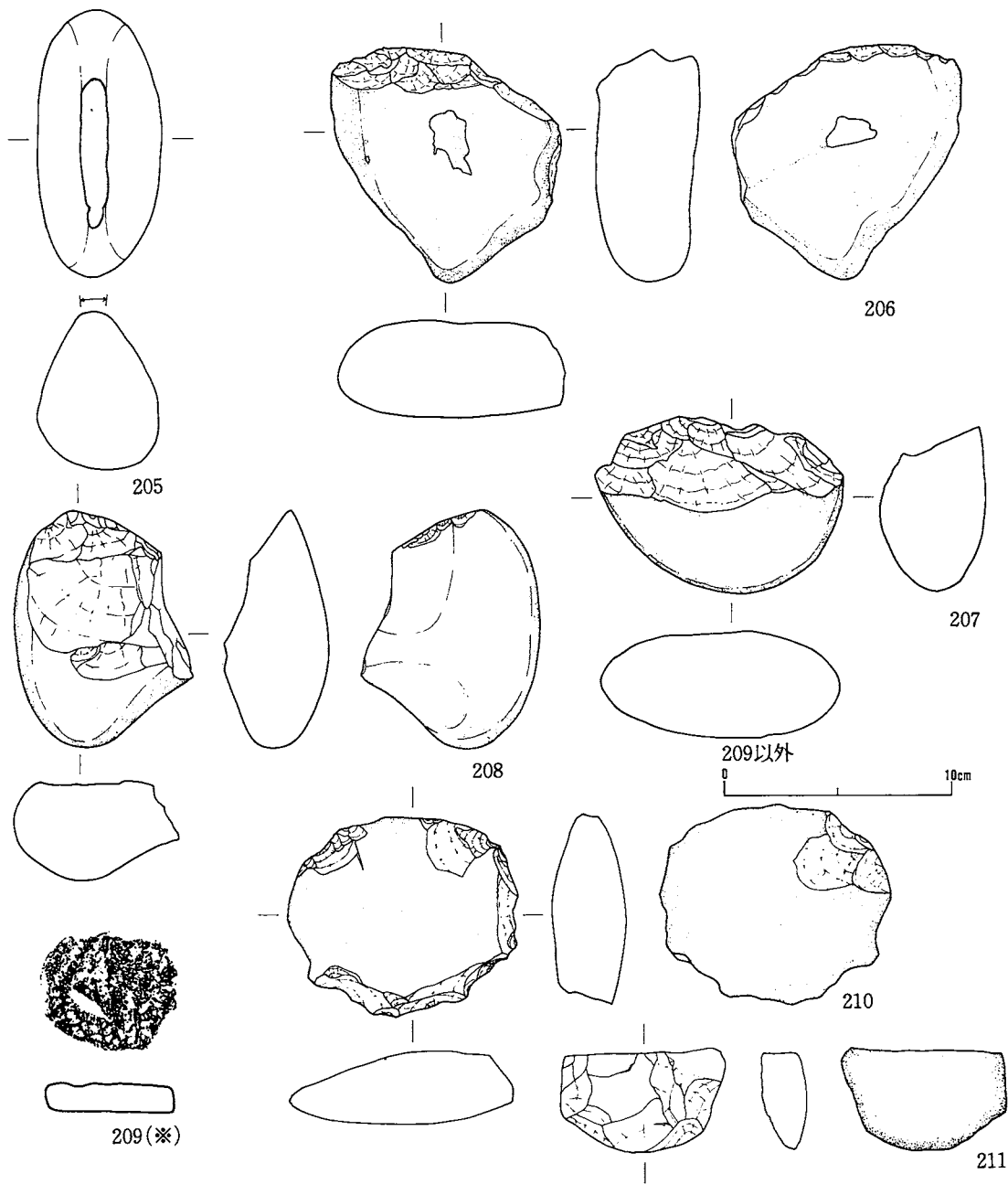


№	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
186	E III-103	深鉢	口へ削	口唇部角ばる。LR	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
187	G III-108	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。LR	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
188	C III-101	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。LR	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
189	G III-107	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。RL	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
190	D III-102	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。LR	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
191	G III-101	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。LR	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
192	C III-101	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。複節摺り戻しか	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
193	D III-102	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。LRループ文	繊維痕	繊維多	I-1-(1)		47
194	C III-102	深鉢	口縁部	LR	繊維痕	繊維多	I-2		
195	G II-102	深鉢	口縁部	口唇部肥厚し、刺突文と沈線・縄文	ミガキ		II-1-(1)		47
196	C III-102	深鉢	胴部	沈線・RL	ミガキ		II-2-(2)		47
198	C III-103	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線・Lr・ミガキ	ミガキ		II-1-(1)		47
199	C III-102	深鉢	胴部	沈線・Rl・ミガキ	ミガキ		II-2-(2)		47
200	C III-102	深鉢	胴部	沈線・Lr・ミガキ	ミガキ		II-2-(2)		47
201	G III-105	深鉢	胴部	無文・沈線	ミガキ		II-2-(1)		

№	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
197	G III-102	礫石斧	73	36	12	57.5	硬砂岩	小型。上下辺に刻雕	51
202	D III-102	埋土	13	12	2	0.3	チャート	身部折損。平基有茎式	48
203	G III-101	埋土上部	18	23	5	2.7	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
204	F III-102	埋土上部	62	34	9	15.4	凝灰質珪質泥岩	横形石匙。図訂正	48

S=1/2(\*)

第80図 落とし穴出土遺物(1)

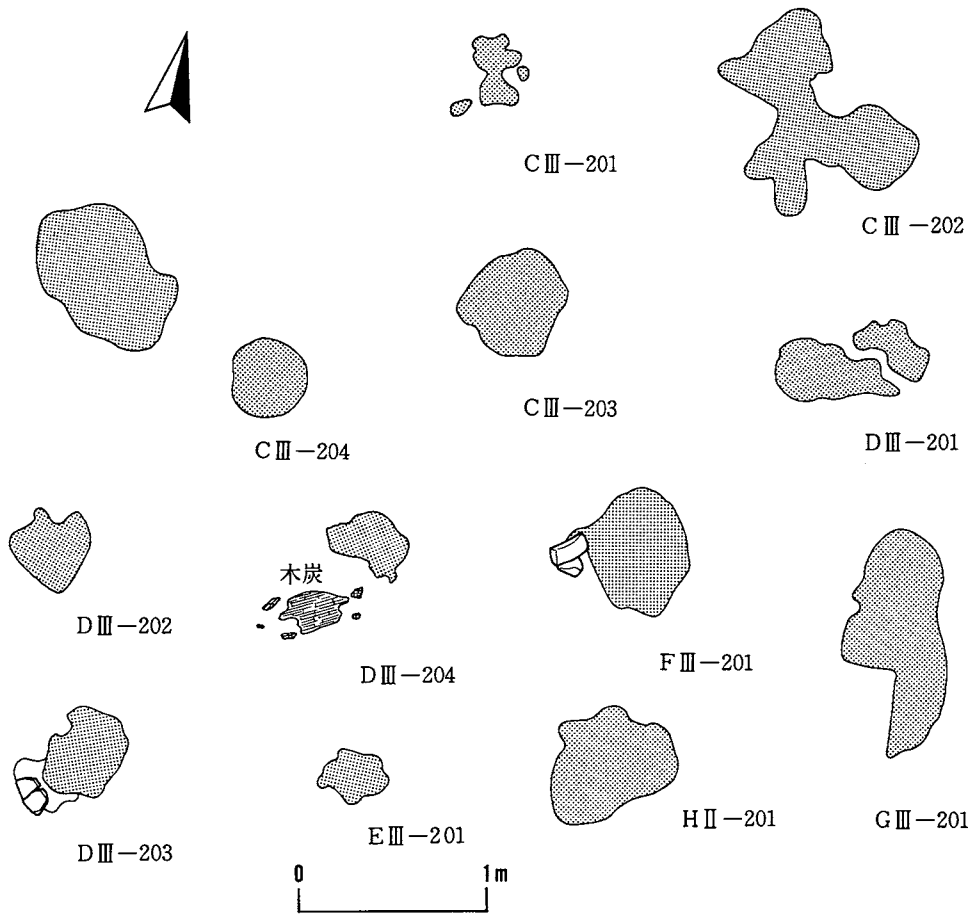


No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
205	D III-102 埋土上部	磨石 I 類	118	54	70	635	硬砂岩	機能面幅12mm	52
206	G III-105 埋土最上部	礫器 I 類+凹石	101	98	43	730	硬砂岩	磨石 I-1。両面に凹	52
207	F III-102 埋土上部	礫器 I 類	72	109	46	465	アルコース砂岩		52
208	F III-103 埋土上部	礫器 I 類	104	79	47	400	硬砂岩		52
210	G III-102 埋土上部	礫器 I 類	92	103	31	380	輝石粉岩		53
211	F III-103 埋土上部	打製石斧	43	74	20	90	硬砂岩	刃部破片。裏面は自然面	53

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
209	E III-101 埋土	円盤状土製品	36	40	8	9.6	I 群土器使用。周縁を打欠き	53

S = 1/2 (※)

第81図 落とし穴出土遺物(2)



第82図 焼土遺構実測図

## 6. 炭窯

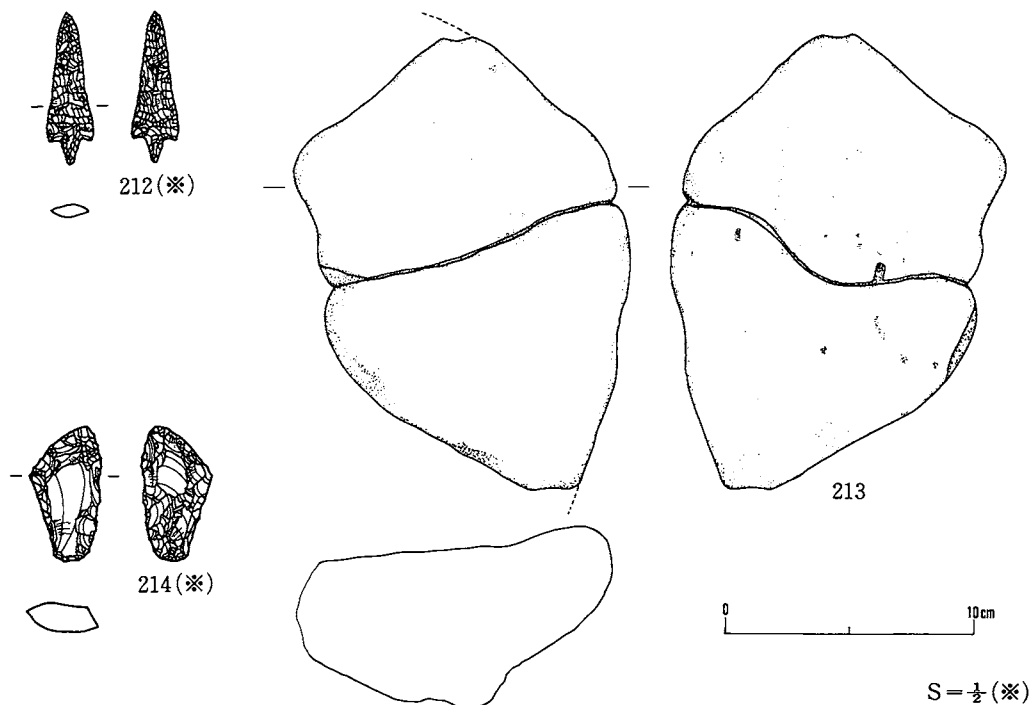
G II-151炭窯 (第84図、図版44)

G II-3 住居跡 (平安時代) と G II-103 落とし穴と重複し、それらを切っている。現代の炭窯であることが出土品から明らかである。挿図と写真で示し、個別の記載は省略する。

## V 遺構内外の出土遺物とまとめ (1)

この章で取り上げるのは、1. 古代の住居跡と住居状遺構から出土した該期以外の遺物、2. 遺構外から出土した遺物、である。図示や記載は1と2を区別しないで種類別・器種別におこ





No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
212	D III-201	石鏃	40	13	3	1.2	珪質凝灰岩	平基有基式	49
213	D III-203	石皿	167	128	65	1520.0	アルコウス砂岩	破片。円形の脚1個	53
214	D III-202	不定形石器	35	18	8	5.4	輝緑凝灰岩	3辺に細部調整	49

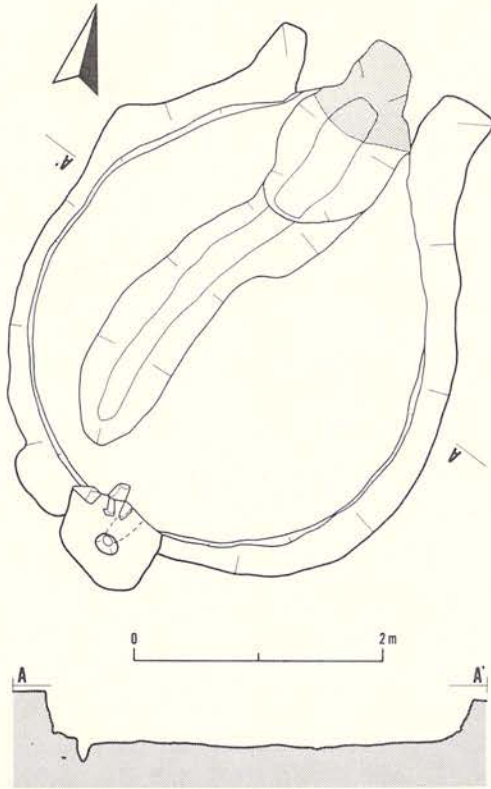
第83図 焼土遺構出土遺物

なう。縄文土器・弥生土器・剥片石器・石斧・礫石器・土製品・石製品があるが、土製品・石製品については、古代のものもまとめて扱う。

## 1. 縄文土器

遺構内外出土縄文土器のうち、完形またはそれに近い形で復元されるものはほとんどない。大部分は破片資料であり、しかも同一個体の同定は容易ではない。したがって土器個体の全体的把握が困難であることから、破片は部位別に分け、部位毎の施文特徴を観察する。

分類は、次ページのようにおこなう。



第84図 G II - 151炭窯実測図

I群：縄文時代前期の土器（第85図・第86図・図版64）

〈分布など〉 調査2区のC III区からH II区にかけて広く分布する。特に、D III区・E III区・G III区に多い。I層・II層・遺構内のいずれからも出土する。分布域による土器の諸特徴に差異は認められずこれらを一括して分類・記述する。

〈器種・器形〉 すべて深鉢である。口縁はすべて平縁であり、しかも口唇に刺突・押圧等の加えられるものもない。口唇形状は、著しく内傾または外傾せず、ほぼ水平となるものが多い。口唇上端はおもにナデ調整される。体部は連続的に彎曲し、中途に屈曲等は認められない。底部は尖底か、丸底状でわずかに乳房状の突起がつく。

〈施文〉 口縁部・体部・底部とも縄文を基調とする。地文となる縄文原体は、L<sub>1</sub>、R<sub>1</sub>、R<sub>1</sub>、L<sub>1</sub>、L<sub>1</sub>、L<sub>1</sub>、右巻L左巻

L組紐、最終段Lの複節である。L<sub>1</sub>とR<sub>1</sub>によって、非結束の羽状縄文が描かれる。L<sub>1</sub>、R<sub>1</sub>、R<sub>1</sub>、L<sub>1</sub>には、原体の末端にループの付されたものがある。ループは、外面最上段の原体にのみ付される場合と以下の段にも及ぶ場合がある。しかし、概して口縁部に多用される傾向にある。口縁部外面にR<sub>1</sub>の撚糸圧痕をもつ例があるほかは、すべて原体の回転によって施文される。なお、口唇に沿って3mm～5mmの幅で縄文をナデ消しているものが数例ある。



縄文土器の分類

〈色調・胎土など〉 暗褐色・暗黄褐色を呈し、胎土には必ず植物繊維を含んでいるが、その量には多寡がある。内面はナデもしくはミガキが加えられるものが多い。

〈相当する型式名〉 現在、以上の特徴をもつ土器群に対する型式名は与えられていない。底部形状は、早稲田6類に近い。全体の様相は二戸市沢内B遺跡I群B類とほぼ一致する。口唇の形状、器内外面の調整、地文の変異は、桂島式ないし大木1式と類似する。

II群：縄文時代後期の土器（第87図～第95図、図版64～68）

〈分布など〉 調査2区のCIII区からHII区にかけて広く分布する。その大半はCIII区からEIII区に集中している。I層・II層に偏りなく包含されている。DIII-1住居跡埋土からの出土も多い。これらを1括して分類・記述する。

〈器種・器形〉 深鉢が多い。口縁が波状をなすものが多い。突起状を呈するものもある。頸部でゆるやかに内彎する器形が見られる。底部は平底となる。ほかに、壺・浅鉢等が少数存在している。脚状の台を有するものがある。詳細は不明の点が多い。

〈施文〉 口縁部・体部・底部とも縄文と沈線による文様描出が主である。縄文か沈線かいずれか一方のみで文様が施文される場合もある。口縁部は、波状口縁に従って連弧状のモチーフが描かれるものが多い。しばしば、縦に棒状あるいは楕円状の隆帯が付され、細く鋭い工具によって刺突が加えられる。体部に縄文と沈線が施文されるものは、沈線のみ施文されるものに比して一般に厚手で、器表面のミガキが不十分である。縄文と沈線の施文の前後は、概して縄文→沈線であるが、稀に沈線→縄文のものが認められる。最終的に磨消縄文効果を出しているものが多い。沈線のみで文様が描かれるものは、稀に朱彩される。

〈色調・胎土など〉 黄褐色・暗黄褐色を呈するものが多い。胎土には径3～4mm程度の砂粒が混じる。器内面はミガキ調整される。外面は一部ミガキが加えられるものがあり、壺・浅鉢に多い。

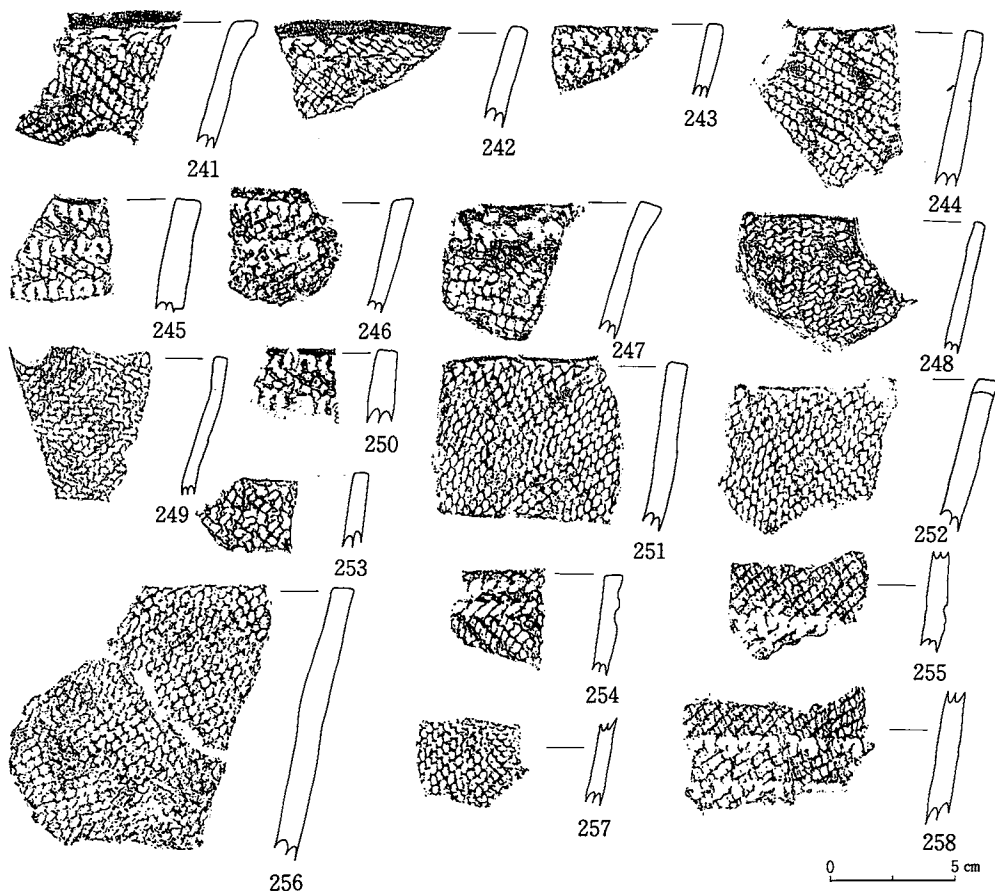
〈相当する型式名〉 以上の特徴をもつ土器群に対して十腰内I式が与えられている。十腰内I式は細分が試みられているが、成田（1981）の説明に従えば前十腰内I式・十腰内Ia式・十腰内Ib式に相当する。

## 2. 弥生土器

弥生土器は、すべて小破片であり全形を知りえない。出土量もごく少量である（第95図、図版68）。

〈分布など〉 DIII区・IIII区に限定される。II層中に多い。

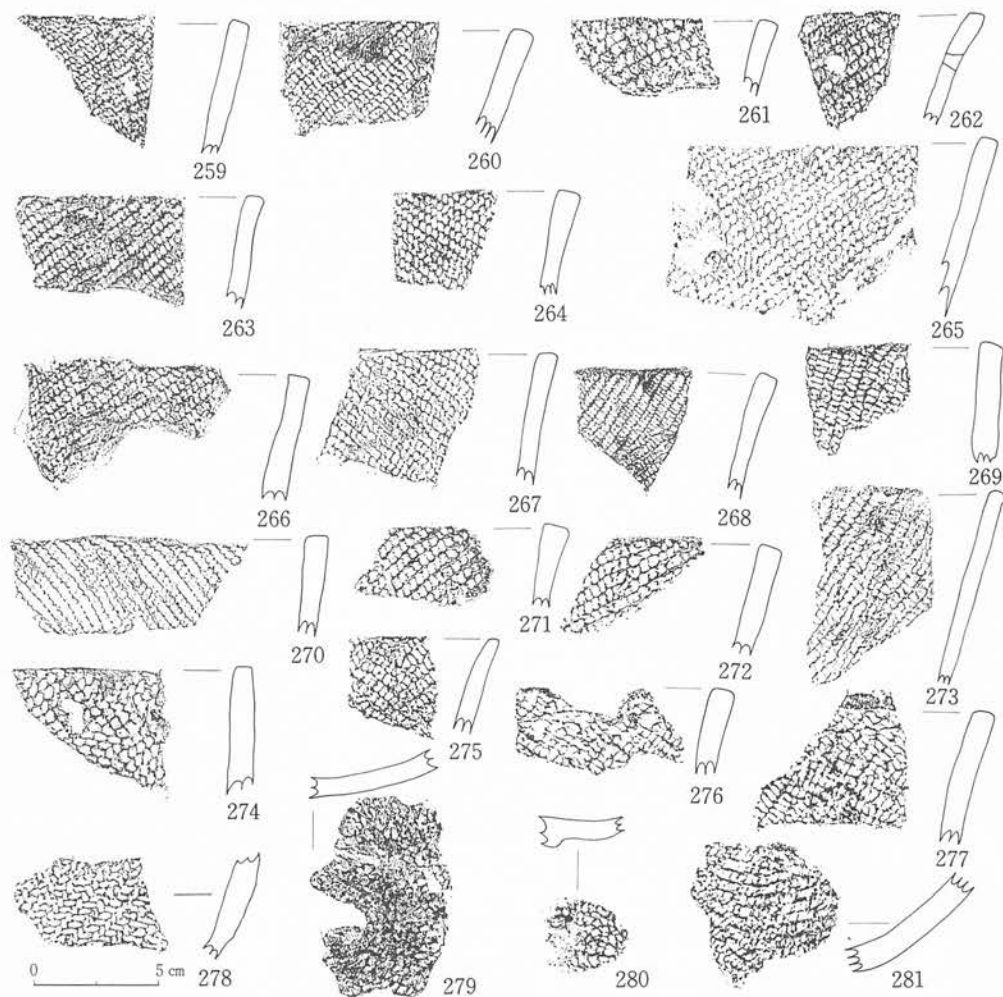
〈器種・器形〉 平坦口縁の甕以外は、明確に識別できない。口縁はほとんど肥厚しない。頸部がやや内彎する。やや長胴となろうか。底部は不明である。



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
241	D III i <sub>3</sub> ・I層	深鉢	口縁部	縄文(RLRループ。口縁ナデ)	ナデ	繊維(少)	I-1-(1)	口縁肥厚	64
242	D III i <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃(LR・RL。口縁ミガキ)	ミガキ	〃	〃	〃	〃
243	D III e・f <sub>3,4</sub> ・I層	〃	〃	〃(RLループ。口唇ナデ)	〃	〃	〃	〃	〃
244	D III h <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃(RLR。口唇ナデ)	ナデ	繊維	〃	〃	64
245	G III c <sub>0</sub> ・II層	〃	〃	〃(RLRループ。口唇ナデ)	〃	〃(少)	〃	〃	〃
246	D III h <sub>3,4</sub> ・I層	〃	〃	〃(LRRループ。口縁ミガキ)	ミガキ	〃	〃	〃	〃
247	E III a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃(LRループ。口縁ナデ)	ナデ・ミガキ	繊維	〃	〃	〃
248	G II-1 住 煙道部	〃	〃	〃(右巻L・左巻L)	ナデ	〃	〃	〃	〃
249	G II f <sub>0</sub> ・II層	〃	〃	〃(組紐?)	〃	〃	〃	〃	〃
250	F III-2 住床面	〃	〃	〃(?。口縁ナデ)	〃	〃	〃	〃	〃
251	E III b <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	〃(組紐)	ナデ	繊維	〃	〃	64
252	D III j <sub>3,4</sub> ・I層	〃	〃	〃(〃)	ミガキ	〃	〃	〃	〃
253	D III d <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃(RLループ)	〃	〃	〃	〃	〃
254	H III区・II層	〃	〃	〃(RL。圧痕。口唇ナデ)	ナデ	繊維	I-1-(2)	〃	64
255	C III c <sub>3</sub> ・II層	〃	胴部	〃(LRRループ)	ミガキ	〃(少)	I-2-(1)	〃	〃
256	D III j <sub>3</sub> ・II層	〃	口縁部	〃(最終段Lの複節)	ナデ	〃	I-1-(1)	〃	〃
257	D III f <sub>3</sub> ・II層	〃	胴部	〃(最終段L)	〃	〃(少)	I-2-(1)	〃	〃
258	E III a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃(LRRループ)	ミガキ	〃	〃	〃	64

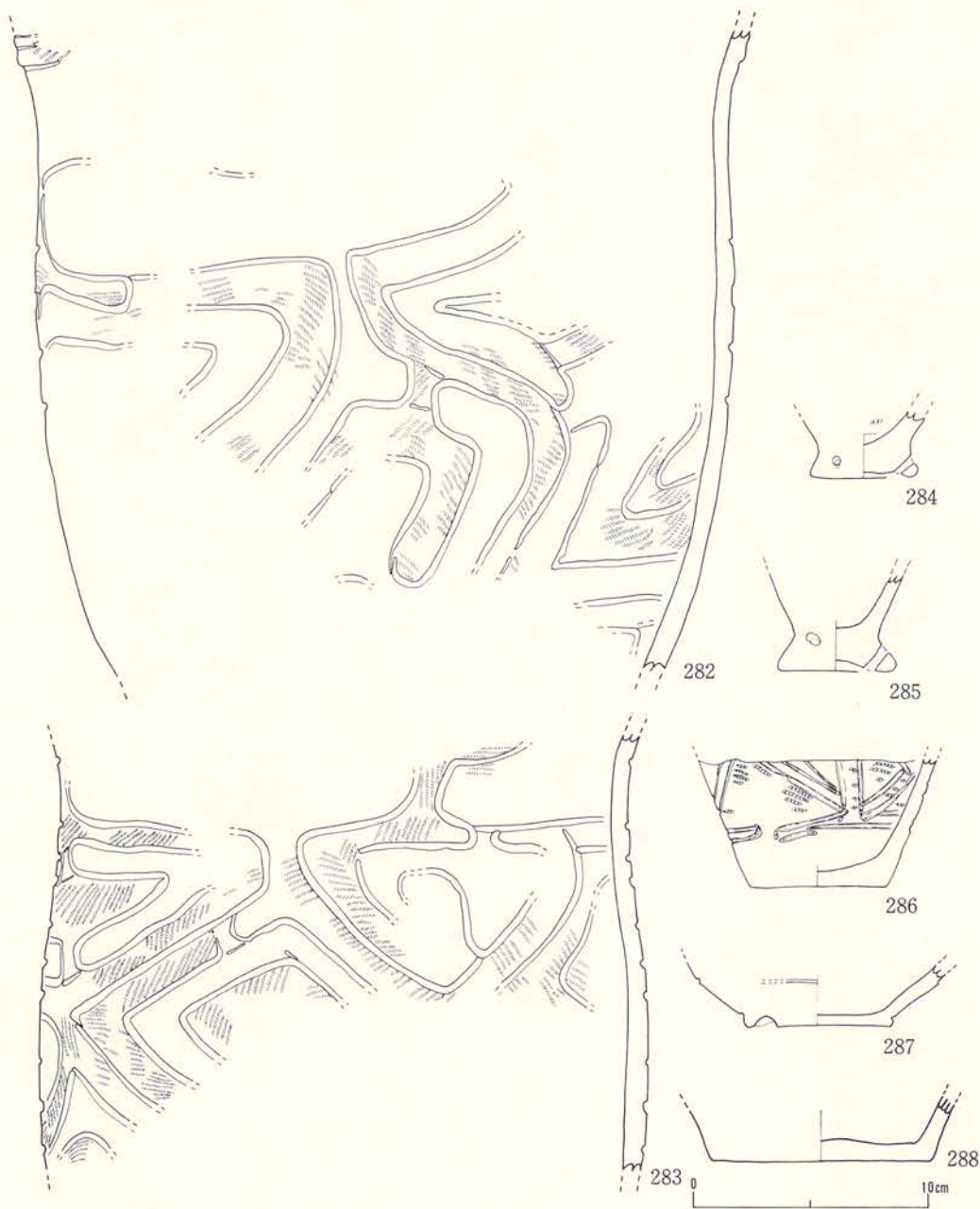
※215～240は第139図・第140図

第85図 縄文土器(1)



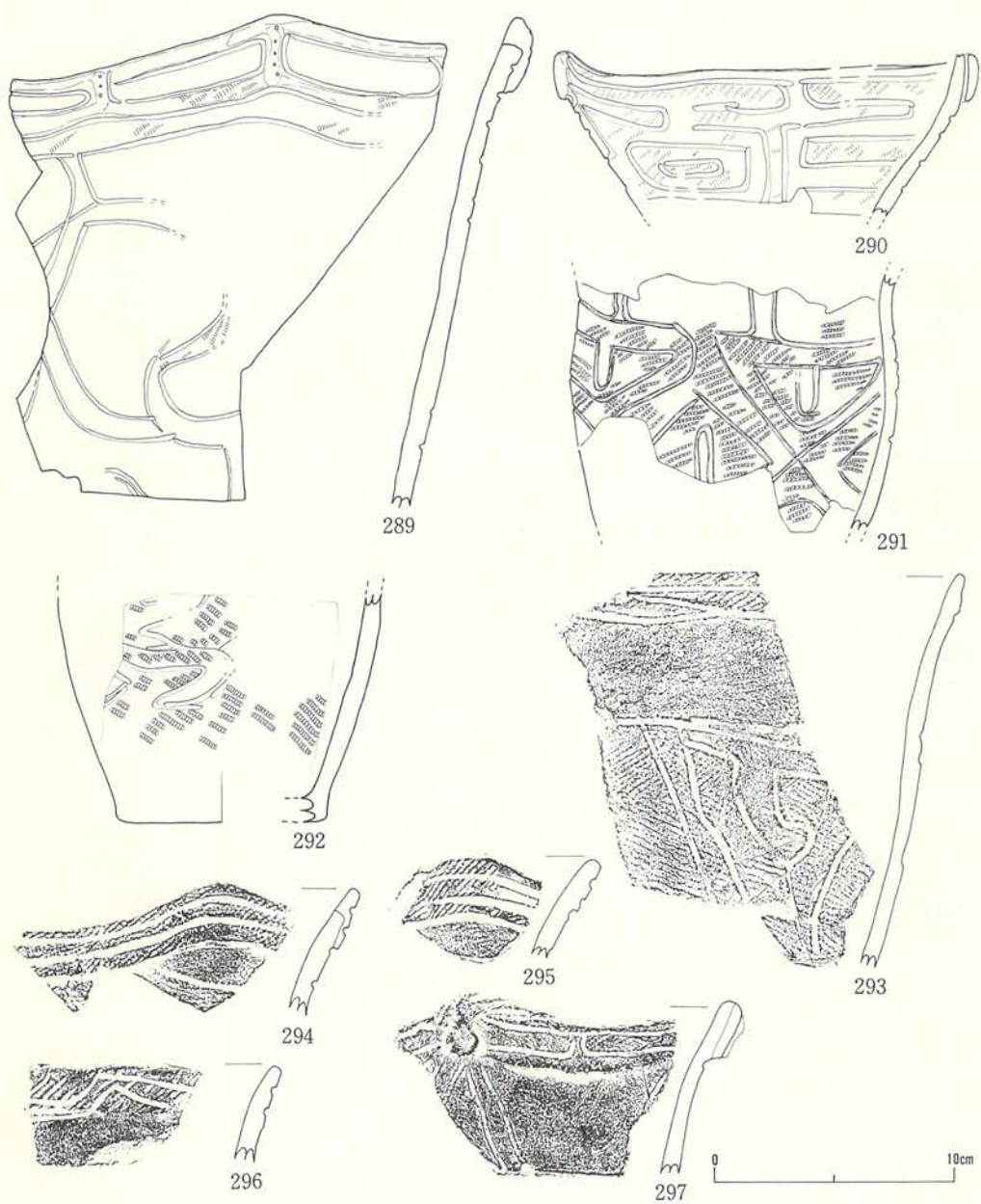
No	地点・層位	器種 部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
259	DIII j <sub>4</sub> ・II層	深鉢 口縁部	縄文(R L。口唇ナデ)	ナデ	繊維	I-1-(1)		
260	FIII i <sub>5</sub> ・I層	〃	〃 (L R L。口唇ナデ)	ナデ	ミガキ	〃		
261	CIII d <sub>4</sub> ・I層	〃	〃 (最終段Lの複筋)	ナデ		〃		64
262	DIII h <sub>5</sub> ・II層	〃	〃 (L R。口唇ナデ)	〃	繊維(少)	〃		〃
263	CIII i <sub>3</sub> ・II層	〃	〃 (L R。口唇ナデ)	〃	繊維	〃		〃
264	DIII g <sub>2,4</sub> ・I層	〃	〃 (R L。口唇ナデ)	〃	〃	〃		〃
265	EIII a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃 (最終段Lの複筋)	ミガキ→ナデ	〃	〃		〃
266	GII f <sub>9</sub> ・II層	〃	〃 (L R L)		〃	〃		〃
267	DIII-6 住埋土	〃	〃 (R L。口唇ナデ)	ナデ	〃	〃		〃
268	EIII c <sub>7</sub> ・I層	〃	〃 (L R。口唇ナデ)	〃	〃	〃		〃
269	GII h <sub>7</sub> ・II層	〃	〃 (R L)		〃	〃		〃
270	EIII a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃 (R L R)	ミガキ	〃	〃		〃
271	DIII h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃 (L R L。口唇ナデ)	ナデ	繊維	〃		〃
272	DIII h <sub>3,4</sub> ・II層	〃	〃 (L R L。口唇ナデ)	〃	〃	〃		〃
273	DIII i <sub>4</sub> ・I層	〃	〃 (L R R)	〃	〃	〃		口縁肥厚
274	GIII a <sub>4</sub> ・I層	〃	〃 (?)	〃	〃	〃		〃
275	DIII j <sub>4</sub> ・II層	〃	〃 (L R・R L。口唇ナデ)			〃		〃
276	DIII i <sub>3</sub> ・II層	〃	〃 (L R・R L。口唇ナデ)			〃		〃
277	DIII j <sub>4</sub> ・II層	〃	〃 (L R)	ナデ	繊維	〃		64
278	HII b <sub>7</sub> ・II層	胴部	〃 (右巻L・左巻L)		〃	I-2-(1)		〃
279	DIII-3 住Q <sub>1</sub> 床面	底部	〃 (?)		〃 (少)	I-3-(1)		〃
280	GII i <sub>8</sub> ・II層	〃	〃 (R L)		〃	I-3-(1)		〃
281	EIII a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃 (L R)		〃	I-3-(1)		〃

第86図 縄文土器(2)



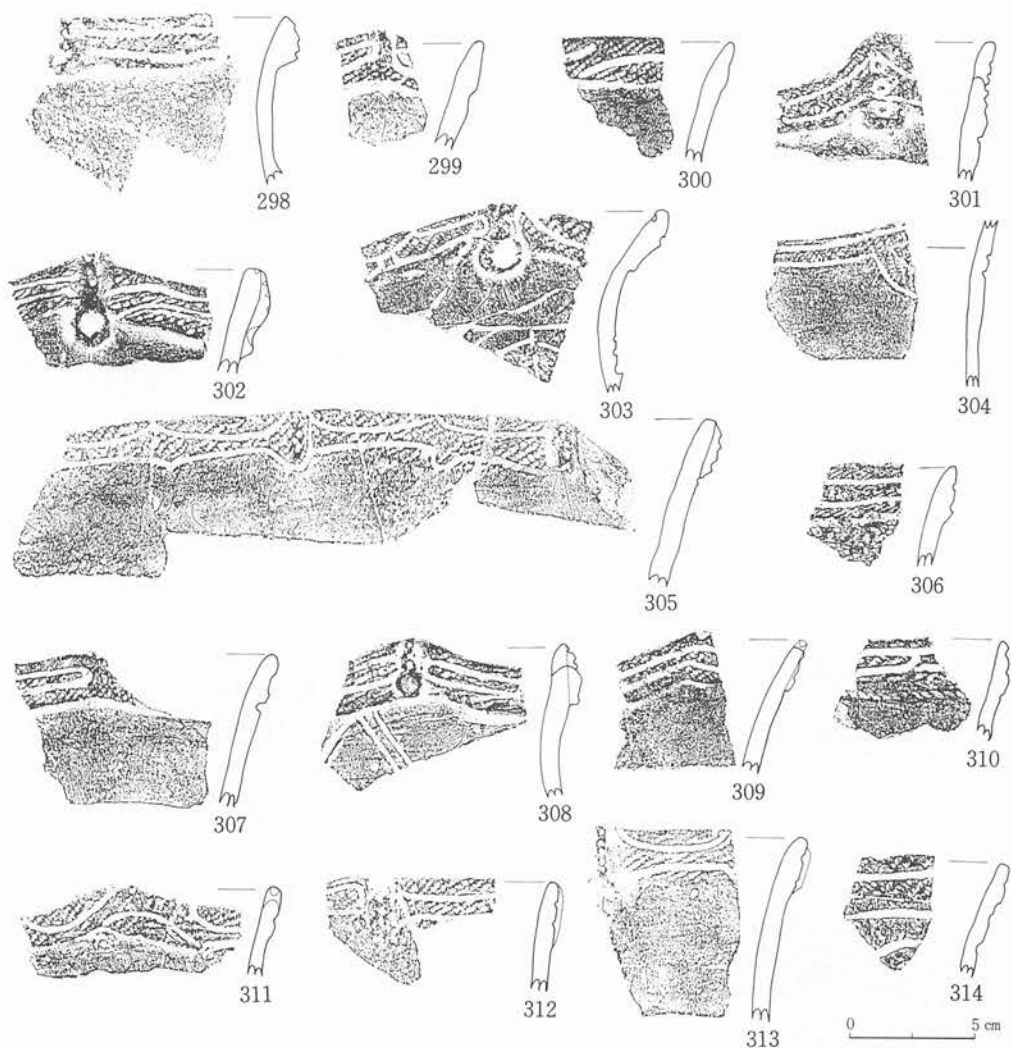
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
282	D III-1 住埋土	深鉢	胴部	沈線→縄文(L r)→ナデ	ナデ→ミガキ		II-2-(2)-②		65
283	D III-1 住埋土	"	"	沈線→縄文(L r)	ミガキ		"		"
284	D III-1 住Q <sub>2</sub> 埋土	鉢	底部	コップ状, 縄文?			II-3		
285	D III f <sub>4</sub> ・II層	"	"	コップ状	ミガキ		II-2-(2)-②		
286	C III h <sub>1</sub> ・I層	深鉢	"	縄文(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ		II-3		64
287	E III a <sub>6</sub> ・I層	浅鉢	"	沈線			"		
288	C III d <sub>4</sub> ・II層	深鉢	"	網代底			"		64

第87図 縄文土器(3)



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
289	C III b <sub>1</sub> ・I・II層	深鉢	口縁部	波状口縁。縄文(L r)→沈線	ミガキ		II		65
290	F III d <sub>1</sub>	浅鉢	〃	縄文(L r)→沈線	〃		II		64
291	C III h <sub>1</sub> ・I層	深鉢	胴部	〃(L R)→沈線	〃		II-2-(2)-①		65
292	C III h <sub>1</sub> ・I層	〃	底部	〃(R L)→沈線	〃		II-3		
293	D III-1住Q <sub>1</sub> 埋土	〃	口縁部	波状口縁。縄文(L R)→沈線→ミガキ	ナデ→ミガキ		II-1-(1)		65
294	D III-1住Q <sub>1</sub> 埋土	〃	〃	〃。〃(L R)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
295	D III-1住Q <sub>1</sub> 埋土	〃	〃	〃。〃(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
296	D III-1住Q <sub>1</sub> 埋土	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
297	D III-6住Q <sub>1</sub> 掘り方	〃	〃	波状口縁。沈線→ナデ	ミガキ→ナデ		〃		〃

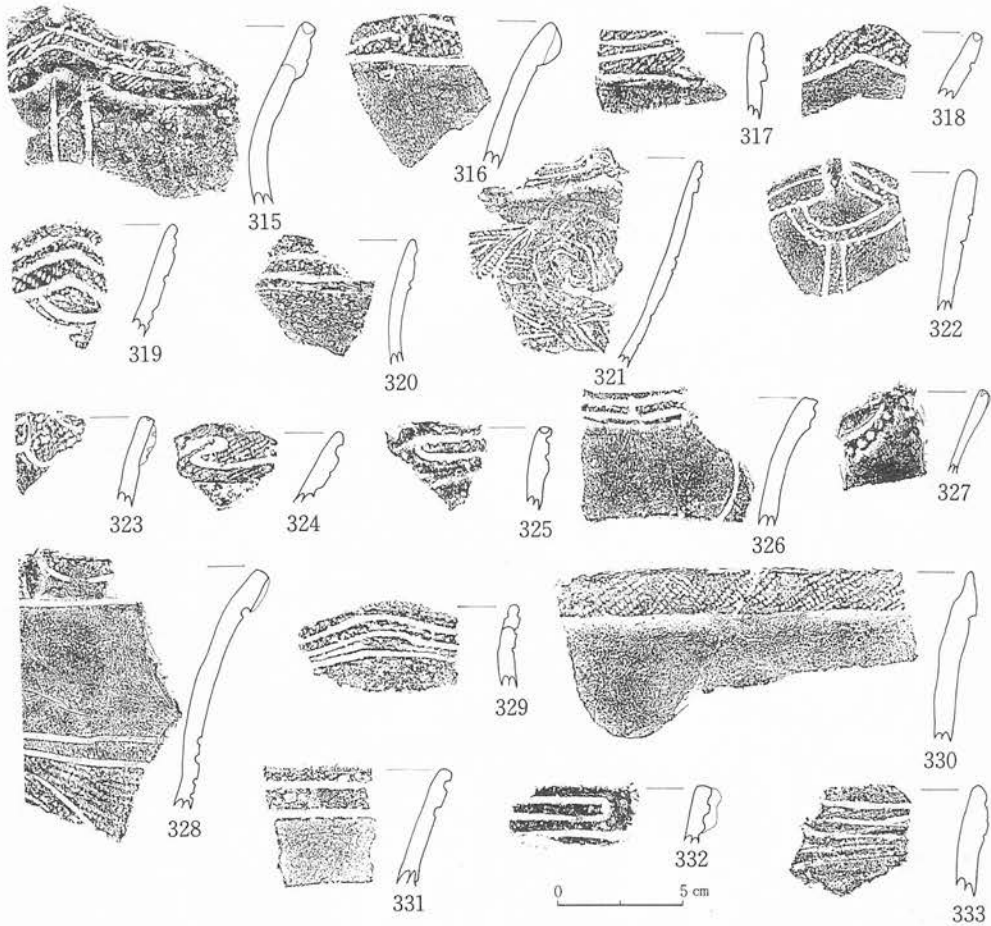
第88図 縄文土器(4)



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
298	D III e <sub>3.4</sub> ・II層	深鉢	口縁部	縄文(LR?)→沈線→ミガキ	ミガキ		II-1-(1)		65
299	C III g <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	〃(LR)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		66
300	C III g <sub>h2</sub> ・II層	〃	〃	〃(LR)→沈線→ナデ	ミガキ→ナデ		〃		66
301	H II d <sub>o</sub> ・I層	〃	〃	波状口縁。縄文(LR)→沈線→ナデ			〃		〃
302	C III h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	〃〃(LR)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		〃
303	C III g <sub>h2</sub> ・II層	〃	〃	〃〃(LR)→沈線→ナデ	ミガキ→ナデ		〃		66
304	F III h <sub>6</sub> ・I層	〃	〃	〃〃(LR)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
305	C III g <sub>h2</sub> ・II層	〃	〃	縄文(LR)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
306	C III f <sub>5</sub> ・I層	〃	〃	〃(LR)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
307	E III c <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	波状口縁。縄文(LR)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
308	D III e <sub>6</sub> ・II層	〃	〃	〃〃(LR)→沈線→ナデ	ナデ→ミガキ		〃		66
309	E III d <sub>7</sub> ・I層	〃	〃	〃〃(LR)→沈線→ナデ	ミガキ→ナデ		〃		〃
310	E III b <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	縄文(LR。圧痕)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		〃
311	C III h <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	波状口縁。縄文(LR)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
312	C III j <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	縄文(LR)→沈線	〃		〃		〃
313	C III j <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	〃(LR)→沈線→ミガキ	〃		〃		66
314	D III c <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃(LR)→沈線	〃		〃		〃

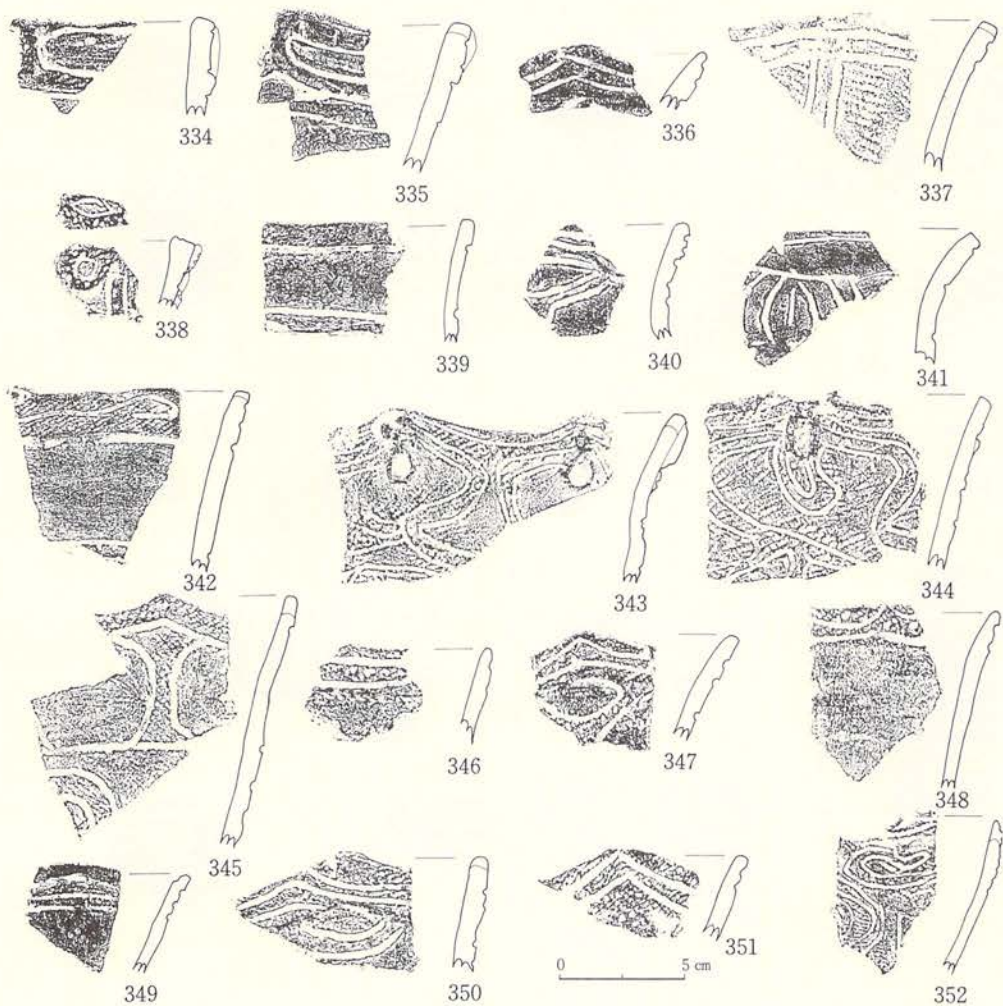
第89図 縄文土器(5)





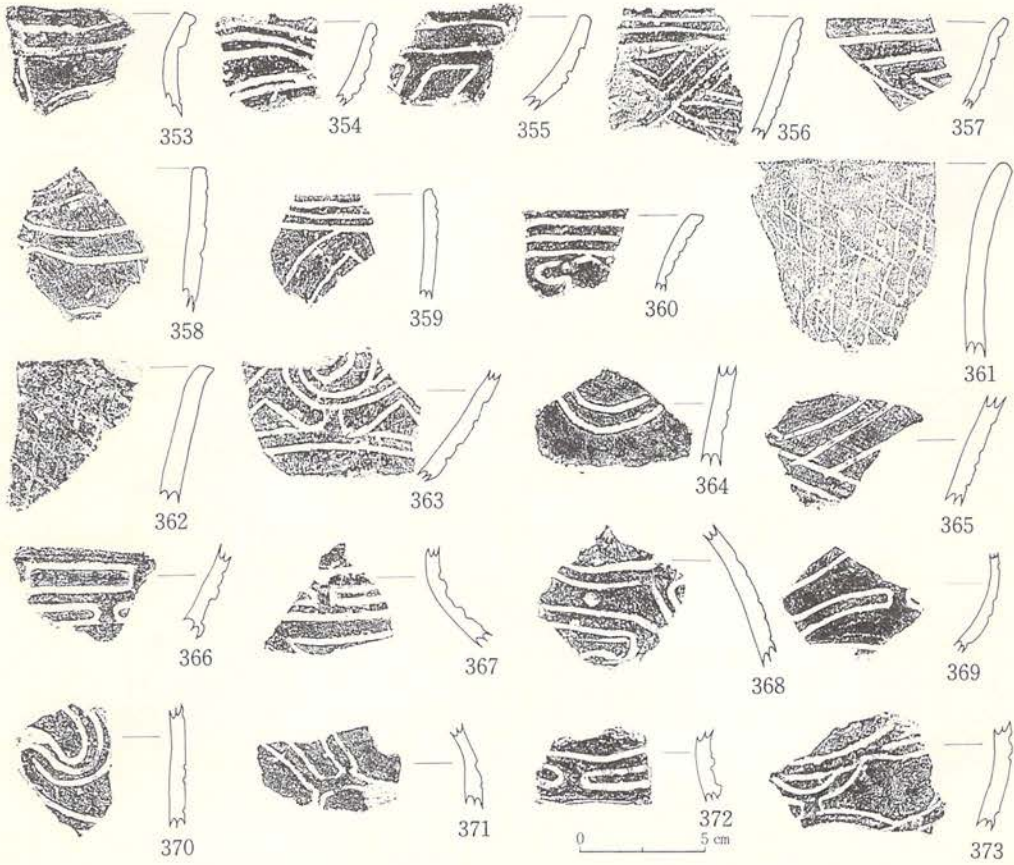
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
315	C III d <sub>4</sub> ・II層	深鉢	口縁部	波状口縁。縄文(R L)→沈線→ミガキ	ミガキ		II-1-(1)		66
316	C III f <sub>5</sub> ・I層	〃	〃	縄文(L R?)→沈線→ミガキ	〃				
317	C III e <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃(L R)→沈線→ミガキ	〃				66
318	C III f <sub>1</sub> ・I層	〃	〃	波状口縁。縄文(L R)→沈線→ミガキ	〃				
319	D III f <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃。〃(R L)→沈線	〃				66
320	D III f <sub>5</sub> ・II層	〃	〃	縄文(?)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
321	E III d <sub>7</sub> ・I層	〃	〃	波状口縁。縄文(L r)→沈線	ミガキ				66
322	F III h <sub>6</sub> ・I層	〃	〃	縄文(R L)→沈線	〃				
323	C III g <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃(L R)→沈線	〃				
324	C III f <sub>6</sub> ・II層	〃	〃	波状口縁。縄文(L R)→沈線	〃				66
325	D III e <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃。〃(?)→沈線→ミガキ	〃				
326	D III a b <sub>5</sub> ・I <sub>0</sub> 層	〃	〃	縄文	〃				
327	D III-1 住埋土	〃	〃	沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
328	D III-1 住Q <sub>2</sub> 埋土	〃	〃	波状口縁。縄文(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ				
329	D III h <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃。〃(?)→沈線→ナデ	ナデ				
330	C III g h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L R)→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
331	C III i j <sub>3</sub> ・I <sub>0</sub> 層	〃	〃	〃(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ				
332	C III h <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	沈線→ミガキ	〃				
333	C III c <sub>1</sub> ・II層	〃	〃	〃→ナデ	ナデ→ミガキ				

第90図 縄文土器(6)



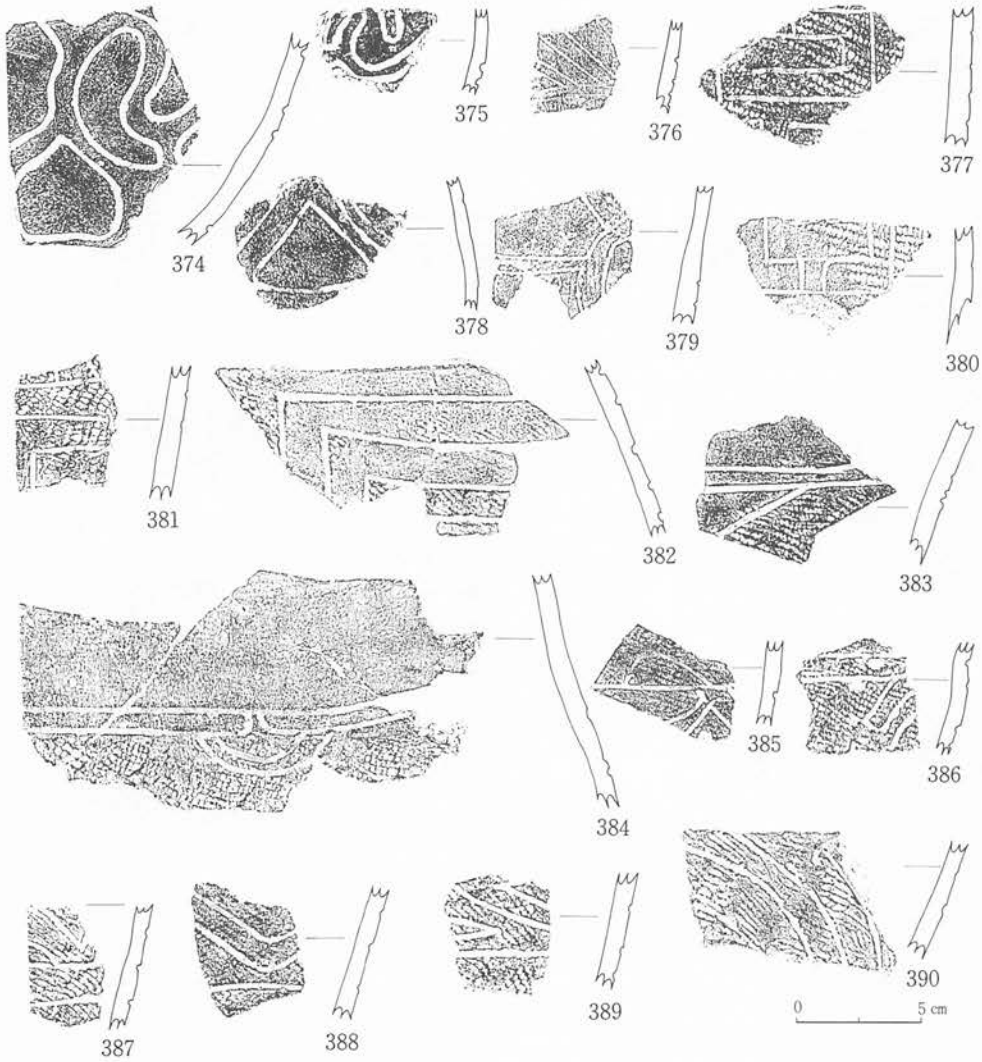
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
334	C III b <sub>3</sub>	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ→ミガキ		II-1-(1)		66
335	C III d <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
336	C III d <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	波状口縁。沈線→ミガキ	〃		〃		〃
337	C III f <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃。細文(L R)→沈線	〃		〃		66
338	D III-4 住埋煙部	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ミガキ	〃		〃		〃
339	C III j <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	沈線→ミガキ	〃		〃		〃
340	C III j <sub>4</sub> ・I層	〃	〃	〃	ナデ		〃		〃
341	F III i <sub>6</sub> ・I層	〃	〃	沈線	ナデ→ミガキ		〃		〃
342	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	細文(L R)→沈線→ナデ	ミガキ・ナデ		II-1-(2)-①		〃
343	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	波状口縁。細文(L R?)→沈線	ミガキ		II-1-(2)		〃
344	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃。〃(L R)→沈線	〃		〃		〃
345	E III d <sub>7</sub> ・I層	〃	〃	〃。〃(L R)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
346	D III f <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		〃
347	D III-1 住Q <sub>2</sub> 埋土	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		66
348	C III d <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		〃
349	D III-1 住Q <sub>2</sub> 埋土	〃	〃	沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
350	C III d <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	波状口縁。細文(?)→沈線	〃		〃		66
351	D III c <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	〃。〃(L R)→沈線	ミガキ		〃		〃
352	E III d <sub>7</sub> ・I層	〃	〃	〃。〃(R 1?)→沈線	〃		II-2-(2)-①		67

第91図 縄文土器(7)



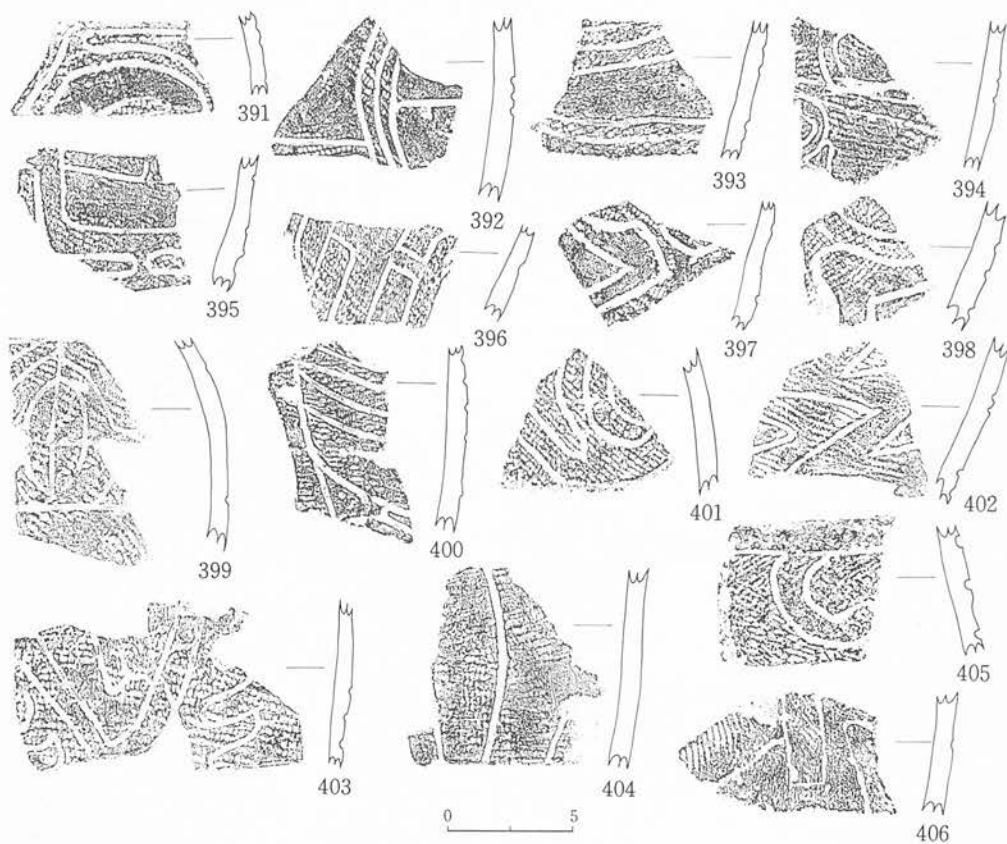
Na	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
353	C III e <sub>3</sub> ・I層	深鉢	口縁部	沈線→ミガキ			II-1-(2)		
354	C III i <sub>3</sub> ・I層	浅鉢	〃	〃	ミガキ				67
355	D III-1 佳Q <sub>3</sub> 埋土	〃	〃	〃	〃		〃	朱彩	〃
356	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
357	D III e <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃	朱彩	〃
358	D III f <sub>4</sub> ・II層	深鉢	〃	沈線	〃		〃		
359	D III f <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		67
360	C III g <sub>2</sub> ・II層	浅鉢	〃	沈線→ミガキ	〃		〃		
361	E III b <sub>4</sub> ・I層	深鉢	〃	摺余文→ナデ	〃		〃		
362	E III a <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	〃	〃		〃		
363	G II 区・I層	浅鉢	胴部	沈線	ナデ		II-2-(1)		67
364	C III e <sub>3</sub> ・I層	深鉢	〃	沈線→ミガキ	〃		〃		
365	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃	ミガキ		〃		67
366	C III c <sub>3</sub> ・II層	壺	〃	〃	〃		〃		〃
367	D III-4 佳埋土	〃	〃	〃	〃		〃		〃
368	E III c <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
369	C III h <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃	朱彩	〃
370	E III c <sub>7</sub> ・I層	深鉢	〃	沈線→ナデ→ミガキ	〃		〃		〃
371	C III c <sub>3</sub> ・II層	壺	〃	沈線→ミガキ	〃		〃		〃
372	C III h <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃	朱彩	〃
373	D III f <sub>4</sub> ・II層	深鉢	〃	〃	ナデ・ミガキ		〃		67

第91図 縄文土器(8)



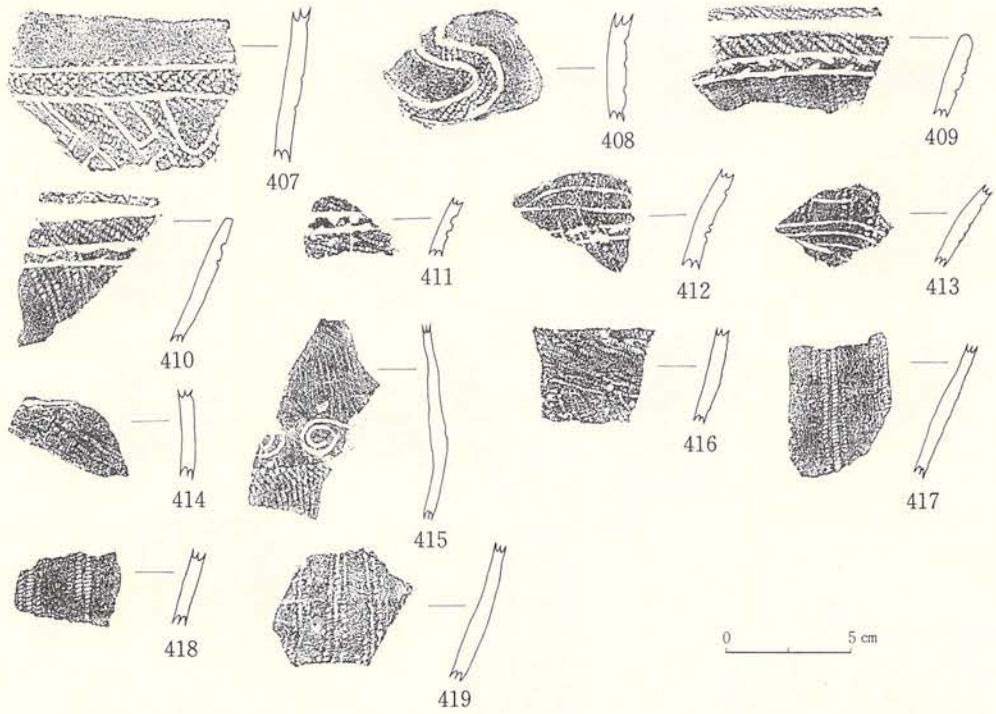
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
374	DIII-1住Q,埋土	壺	胴部	沈線→ミガキ	ミガキ		II-2-(1)	朱彩	67
375	CIIIh <sub>1</sub> ・I層	深鉢	〃	〃	〃		〃		67
376	CIIIi <sub>1</sub> ・II層	浅鉢	〃	〃	〃		〃		67
377	CIII d <sub>1</sub> ・II層	深鉢	〃	縄文(L R)→沈線	〃		II-2-(2)-①		〃
378	CIII h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
379	CIII d <sub>1</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		II-2-(1)		〃
380	CIII h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L R)→沈線	〃		II-2-(2)-①		〃
381	CIII h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
382	CIII h <sub>2</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L R)→沈線→ナデ	ミガキ		〃		67
383	CIII f <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	縄文(R L)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃
384	CIII j <sub>1</sub> ・I層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
385	DIII-4住埋土	〃	〃	縄文(R L)→沈線→ナデ	ナデ・ミガキ		〃		〃
386	DIII d <sub>2</sub> ・I <sub>0</sub> 層	〃	〃	縄文(L R)→沈線	ミガキ		〃		〃
387	CIII e <sub>1</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
388	CIII f <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	〃	ミガキ		〃		〃
389	CIII d <sub>1</sub> ・I層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
390	DIII h <sub>1</sub> ・II層	〃	〃	沈線→縄文(L r)	〃		〃		67

第93図 縄文土器(9)



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
391	D III f <sub>3</sub> ・II層	深鉢	胸部	縄文(L R)→沈線→ミガキ	ミガキ		II-2-(2)-①		67
392	D III h <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	縄文(R L)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
393	E III b <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L r)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		〃
394	E III c <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	縄文(R L)→沈線			〃		〃
395	D III h <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	〃	ミガキ		〃		〃
396	E III d <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
397	D III f <sub>3</sub> ・I <sub>a</sub> 層	〃	〃	縄文(R L)→沈線→ミガキ	ミガキ		〃		〃
398	E III d <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(L R)→沈線	〃		〃		〃
399	C III h <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(R L)→沈線	〃		〃		67
400	E III a <sub>3</sub> ・II層	〃	〃	縄文(L r)→沈線	〃		〃		〃
401	E III d <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	〃	〃		〃		〃
402	C III d <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(R L)→沈線→ナデ	〃		〃		67
403	C III j <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(R L)→沈線	〃		〃		〃
404	C II j <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(L r)→沈線→ナデ	〃		〃		68
405	C III h <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(L r)→沈線	〃		〃		〃
406	C III i <sub>3</sub> ・I層	〃	〃	縄文(L r)→沈線→ミガキ	〃		〃		〃

第94図 縄文土器(10)



No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
407	E III c <sub>7</sub> ・I層	深鉢	胴部	沈線→縄文(L R)→ミガキ	ミガキ		II-2-(2)-②		68
408	D III f <sub>3</sub> ・I <sub>a</sub> 層	〃	〃	沈線→縄文(R L)→ミガキ	ナデ→ミガキ		〃		68
409	I III i <sub>5</sub> ・I層	壺	口縁部	沈線→縄文(R R L)→刺突			弥生土器		68
410	I III i <sub>5</sub> ・I層	〃	〃	〃	ナデ		〃		〃
411	I III i <sub>7</sub> ・II層	〃	胴部	〃			〃		〃
412	I III i <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	沈線→縄文(?)→刺突	ミガキ		〃		〃
413	I III h <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	沈線→縄文(R R L?)			〃		〃
414	D III c <sub>6</sub> ・I層	〃	〃	沈線→縄文(R R L)	ナデ		〃		〃
415	I III h <sub>4</sub> ・II層	〃	〃	〃	〃		〃		68
416	D III a <sub>6</sub> ・II層	〃	〃	縄文(附加縄?)	〃		〃		〃
417	I III h <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	縄文(R R L)	ナデ・ミガキ		〃		〃
418	D III-4 住埋土	〃	〃	〃			〃		〃
419	I III h <sub>7</sub> ・II層	〃	〃	〃	ナデ		〃		68

第95図 縄文土器(11)・弥生土器

〈施文〉口縁部では横位回転、頸部から体部下半では斜位回転の縄文を地文とする。体部では縦縞状を呈する。口縁部と頸部は、浅い沈線2本を平行にひいた後、向かって右斜め上・下方向から交互に刺突し区画される。縄文施文はその後である。体部に渦状のモチーフの描かれるものがある。口唇にも縄文が施文される。

〈色調・胎土など〉明黄褐色を呈する。胎土に特に特徴的な混入物は認められない。内面調整はほとんどが不明瞭なナデである。

〈相当する型式名〉以上の特徴をもつ土器群は広義の天王山式に相当する。天王山式は岩手県内では常盤式・赤穴式に細分されている。交互刺突の手法、縄文の施文方法は後者の特徴により近似する。

### 3. 剥片石器

剥片を素材とした石器を一括する。従来の定義・名称どおり、石鏃・石錐・石匙・石筥・スクレイパーに分類する。また、使用痕のある剥片とピース=エスキューについてもこの項で述べる。なお、打製石斧の中で剥片素材のものがある可能性もあるが、ここではそれを含まない。

#### (1) 石鏃 (第96図～第98図, 図版69)

34点出土している。分布はDⅢ区・EⅢ区・GⅡ区・GⅢ区に集中する。

有茎・無茎とも存在する。第97図第448・449、第98図453といった比較的大形の石器もこの項に含めている。

ほとんどが剥片を素材としていられる。片面にやや広い剥離面を残すものが多く見られるが、主要剥離面であるかどうか判断することが困難である。従って、素材となった剥片の形状は不明である。稀に小礫を素材としている。

34点中、先端の欠損するもの11点、基部の欠損するもの5点で、前者は後者の2倍強である。一部に加熱の痕跡を有するものがあるが、アスファルト等の付着が認められるものは存在しない。

#### (2) 石錐 (第98図, 図版69)

6点出土している。調査1区・調査2区北地区からの出土である。

素材は剥片であると考えられる。一部に自然面を有している第98図455・457・458は、小礫をバイポーラーテクニックによって作出したピース=エスキューを素材としていられる。

刃部は、表裏から2次調整が行われた場合その断面形は四辺形となり、一方の面からのみもしくは裏面からの調整が浅い場合、断面形は三角形を呈している。

3点は刃部先端が欠失しているが、使用によるものであるか、廃棄後の自然作用によるもの

であるか判断できない。いずれも欠失後の再調整は認められない。

### (3) 石匙 (第98図・第99図, 図版70)

16点出土している。DⅢ区6点、EⅢ区3点、FⅢ区3点、GⅢ区2点、HⅠ区2点の出土である。

縦形、横形ともに出土している。つまみ部の作出について、明瞭なノッチの入れられるものと、不明瞭なものが存在する。大部分が縁辺の1辺以上に2次調整が施され刃部が形成されるが、それが顕著でないものも存在している(第98図462、第99図469)。素材は剥片が用いられるものが多く、2次調整は剥片背面を中心に行われ、主要剥離面が広く残される場合が多い。稀に扁平な礫、ピエス・エスキューを素材とするものも存在する。つまみ部を中心に、熱作用による変化が見られるものがある。

欠損しているものは、この項に含めた第99図479の1点のみである。刃部のみの残存の場合、スクレイパーに分類した石器との識別が困難になる。

### (4) 石筥 (第100図, 図版71)

3点出土している。DⅢ区・EⅢ区・FⅢ区に1点ずつ見られる。

扁平な礫を素材としているもの(第100図476)が1点見られるほかは、素材について不明である。ほかに、片面に自然面を有しているものがある。刃部は剥離によって形成され、研磨等は施されない。第100図478は、表裏とも長軸に沿って連続的な加撃が加えられ、素材の形態をとどめていない。

大きさの点から打製石斧とは区別されると考えられるが、両者の中間的なものについて技術形態学的観点から区別することは困難である。

### (5) 石槍 (第100図, 図版71)

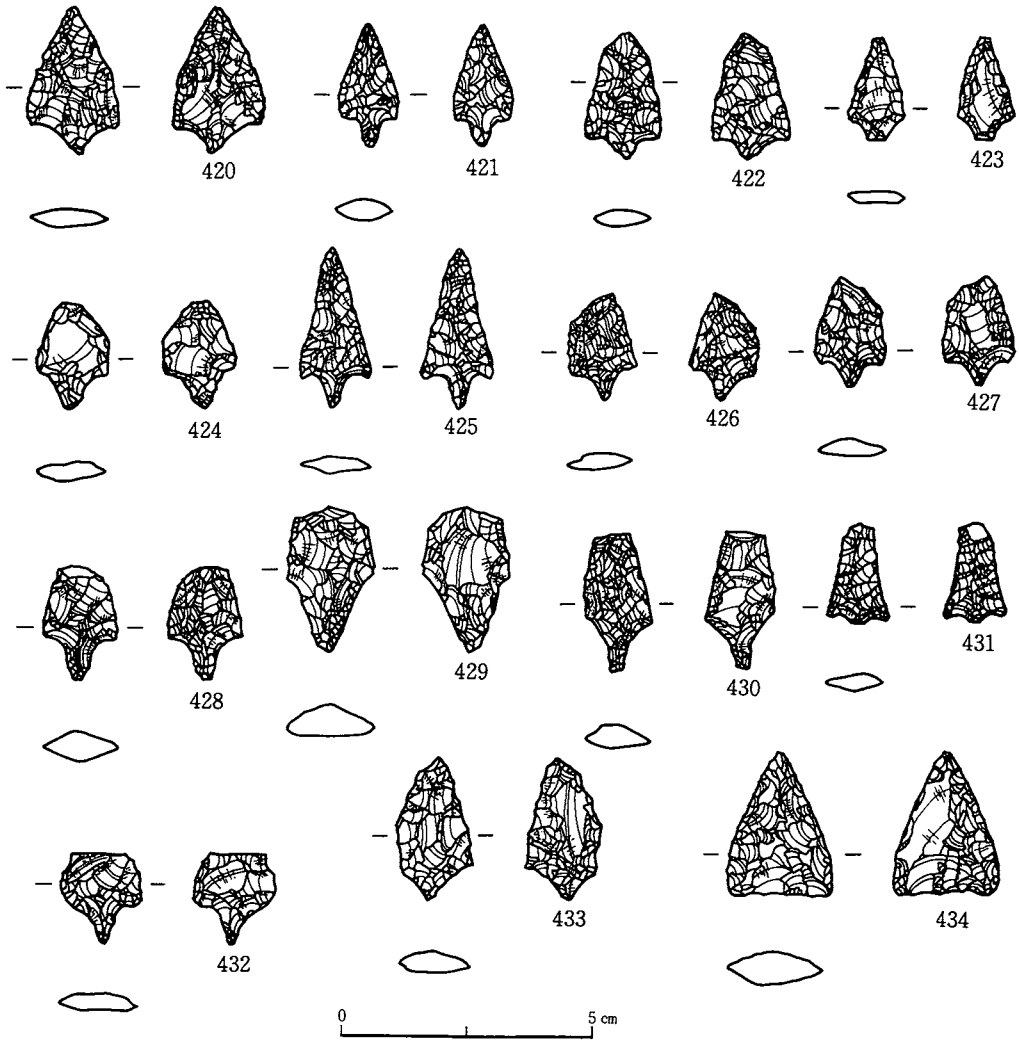
DⅢ区から1点出土している。剥片を素材とし、先端部が両面から加工されるほかは、裏面に広い剥離面を残している。重量が10gを超えるため、石鏃から区別し石槍として分類した。先端部がわずかに欠失する。

### (6) スクレイパー (第100図～第105図, 図版71～74)

剥片を素材とし、スクレイパーエッジを有している石器を一括した。大形の礫を打割した剥片を素材としたもののうち、片面に自然面を広く有しているものは、後述すると礫器Ⅰ類と刃部形態が類似するが、刃部作出の加撃がより連続的に加えられている。分布はCⅢ区・DⅢ区に集中する傾向が見られる。43点出土している。

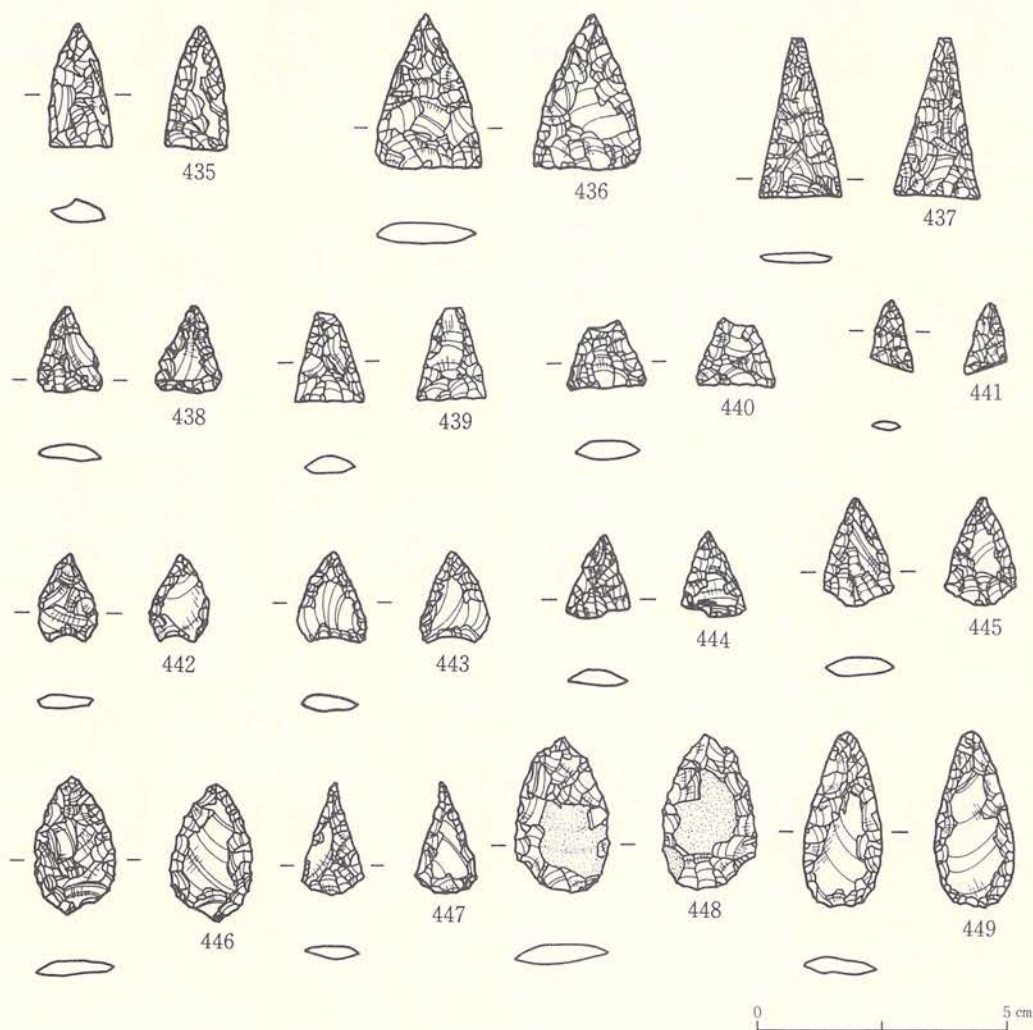
素材の剥片のうち、ピエス・エスキューを用いているものが多く認められる。しかし、その場合でも表面もしくは裏面に自然面を有しているものは少ない。多くの場合2次加工は縁辺部の刃部形成に限られ、素材が大きく変形されることはない。一部折損しているものも多いが、





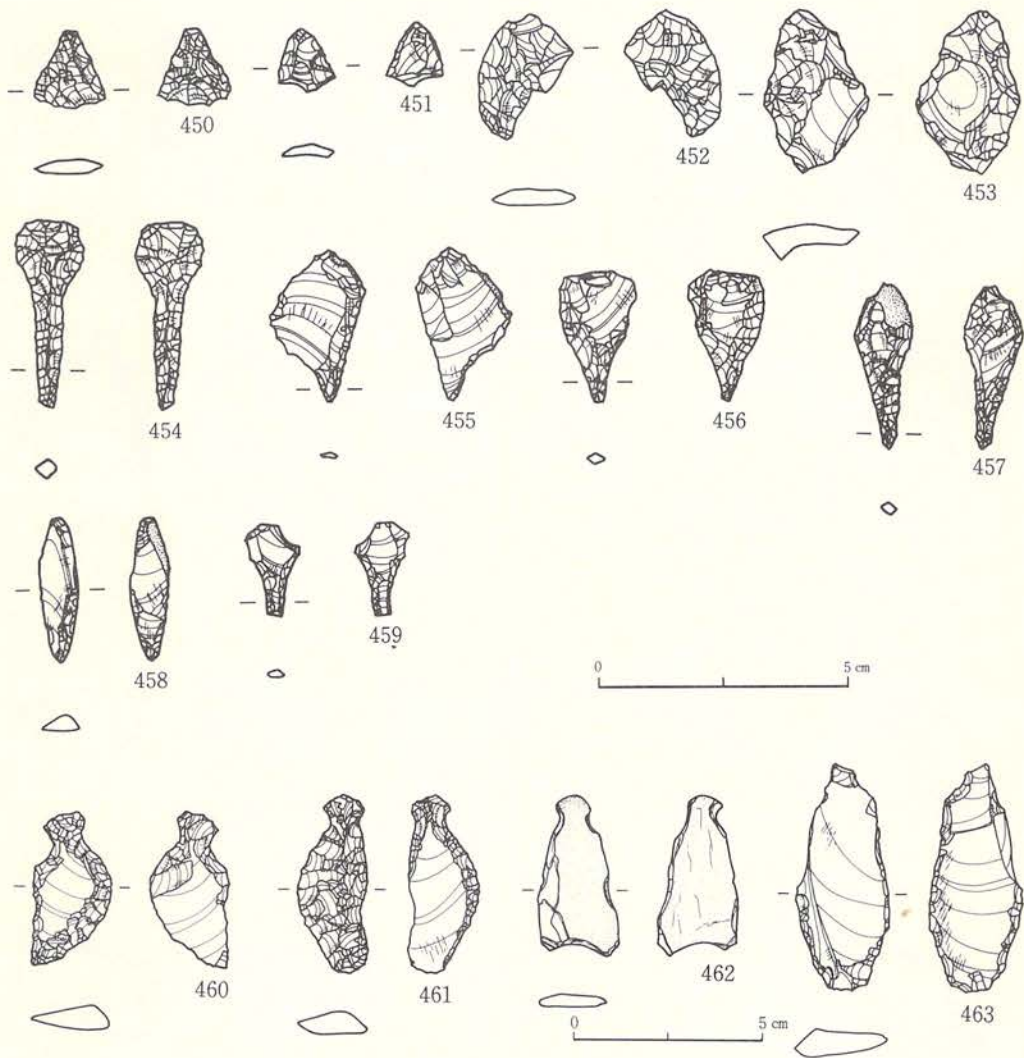
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
420	DIII-1 住 埋土	石 鏃	29	18	5.0	1.75	凝灰質珪質泥岩		69
421	DIII e. 1層	〃	24	12	3.5	0.72	チャート		〃
422	EIII a. 1層	〃	25	15	4.0	1.2	輝緑凝灰岩		〃
423	EIII d. 1層	〃	20	11	2.5	0.6	珪質粘板岩		〃
424	EIII d. 1層	〃	21	15	4.0	1.06	チャート		〃
425	DIII e. 1層	〃	32	14	4.0	1.0	〃		〃
426	DIII f. II層	〃	21	14	3.0	0.83	チャート質淡緑色凝灰岩		〃
427	DIII e. 1層	〃	22	14	5.0	1.23	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
428	EIII d. II層	〃	23	15	6.0	1.5	粘板岩		〃
429	EIII d. 1層	〃	29	17	6.0	2.8	チャート		〃
430	DIII f. II層	〃	27	14	5.0	1.67	チャート質淡緑色凝灰岩		〃
431	DIII f. II層	〃	19.5	13	3.5	0.57	珪質粘板岩		〃
432	EIII a. 1層	〃	13	16	4.0	0.9	〃		〃
433	DIII c. II層	〃	28	14	5.0	1.72	チャート		〃
434	GIII a. II層	〃	28	21	6.5	2.97	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃

第96図 剥片石器(1)



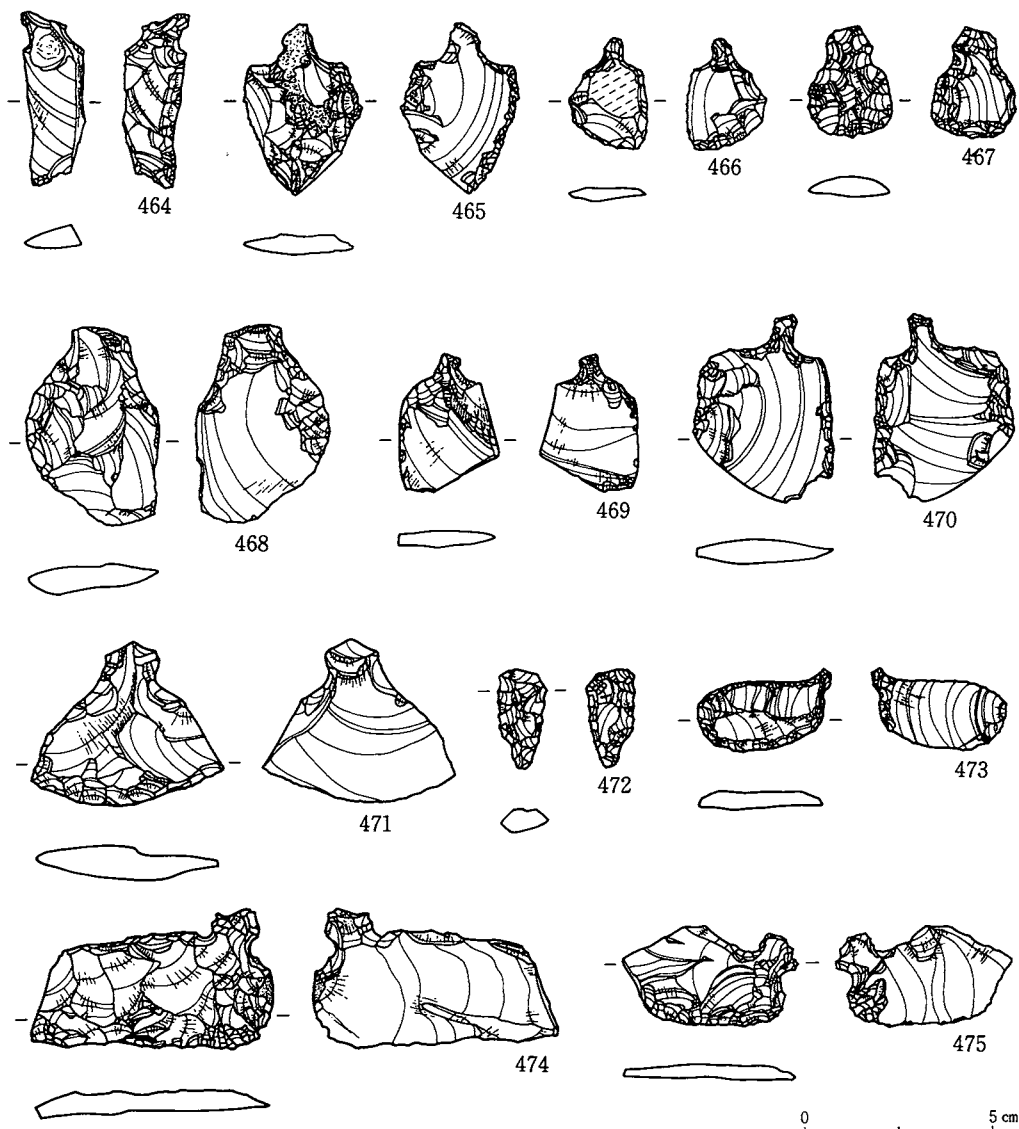
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
435	I III g <sub>5</sub> II層	石 鉄	25	13	4.5	1.66	流紋岩質極細粒凝灰岩	69	
436	C III i <sub>4</sub> II層	〃	31	21	4.0	2.55	チャート	〃	
437	G II - 3 住 埋土	〃	32	17	4.0	1.28	玻璃質流紋岩	〃	
438	D III i <sub>4</sub> II層	〃	17	13	3.0	0.7	珪質粘板岩	〃	
439	G II - 1 住 埋土	〃	18	14	4.0	0.7	チャート質粘板岩	〃	
440	G II j <sub>5</sub> II層	〃	13	16	4.0	0.65	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	
441	D III c <sub>2</sub> I層	〃	13	9	2.5	0.24	〃	〃	
442	E III c <sub>3</sub> II層	〃	17	12	3.0	0.57	輝緑凝灰岩	〃	
443	H II - 2 住 埋土下部	〃	17	14	3.0	0.65	チャート質粘板岩	〃	
444	D III i <sub>3</sub> II層	〃	16	12	3.0	0.58	珪質凝灰岩	〃	
445	E III g <sub>7</sub> II層下部	〃	22	13	3.5	0.95	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	
446	D III f <sub>3</sub> II層	〃	27	16	4.0	1.55	粘板岩	〃	
447	G II - 1 住 煙道部埋土	〃	22	12	3.0	0.6	チャート質粘板岩	〃	
448	D III f <sub>3</sub> I層	〃	31	19	5.0	3.65	輝緑凝灰岩	自然面	
449	D III - 3 住 埋土上部	〃	35	16	3.0	1.75	チャート質粘板岩	〃	

第97図 剥片石器(2)



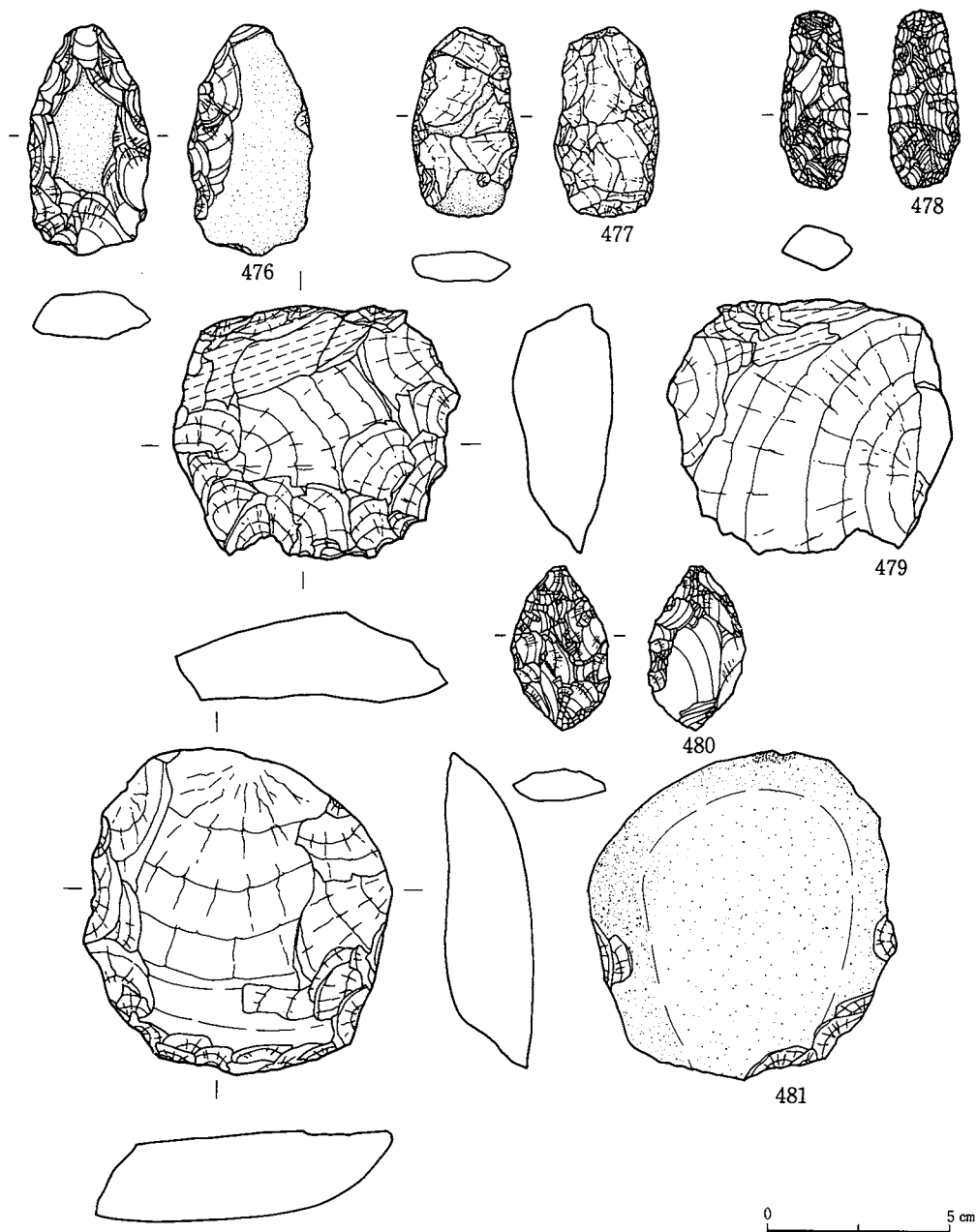
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
450	F III-2 住 カマド	石 鏃	15	14	3.0	0.55	チャート質粘板岩		69
451	D III e <sub>2</sub> I <sub>0</sub> 層	〃	12	11	3.5	0.26	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
452	C III h <sub>3</sub> II層	〃	24	18	4.0	1.25	〃		〃
453	E III e <sub>4</sub> II層	〃	21	32	6.0	3.14	輝緑凝灰岩		〃
454	C III h <sub>3</sub> I層	石 鏃	38	14	6.0	1.93	珪質粘板岩		〃
455	D III d <sub>1</sub> I <sub>0</sub> 層	〃	30	17	3.0	1.5	輝緑凝灰岩		〃
456	D III f <sub>1</sub> II層	〃	26	15	4.0	1.55	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
457	A III 区 I層	〃	33	12	7.0	1.66	珪質粘板岩		〃
458	E III g <sub>4</sub> II層	〃	29	13	4.0	0.9	粘板岩	ピエス・エスキーユ素材	〃
459	D III-4 住 埋土上部	〃	19	10	3.0	0.48	輝緑凝灰岩		〃
460	E III g <sub>4</sub> II層	石 匙	41	21	7.0	5.2	粘板岩		70
461	H I e <sub>1</sub> I <sub>0</sub> 層	〃	48	18	6.0	4.65	玻璃質流紋岩		〃
462	H I c <sub>3</sub> II層	〃	40	21	3.0	3.75	粘板岩		〃
463	F III d <sub>1</sub> II層	〃	60	24	8.0	11.35	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃

第98図 剥片石器(3)



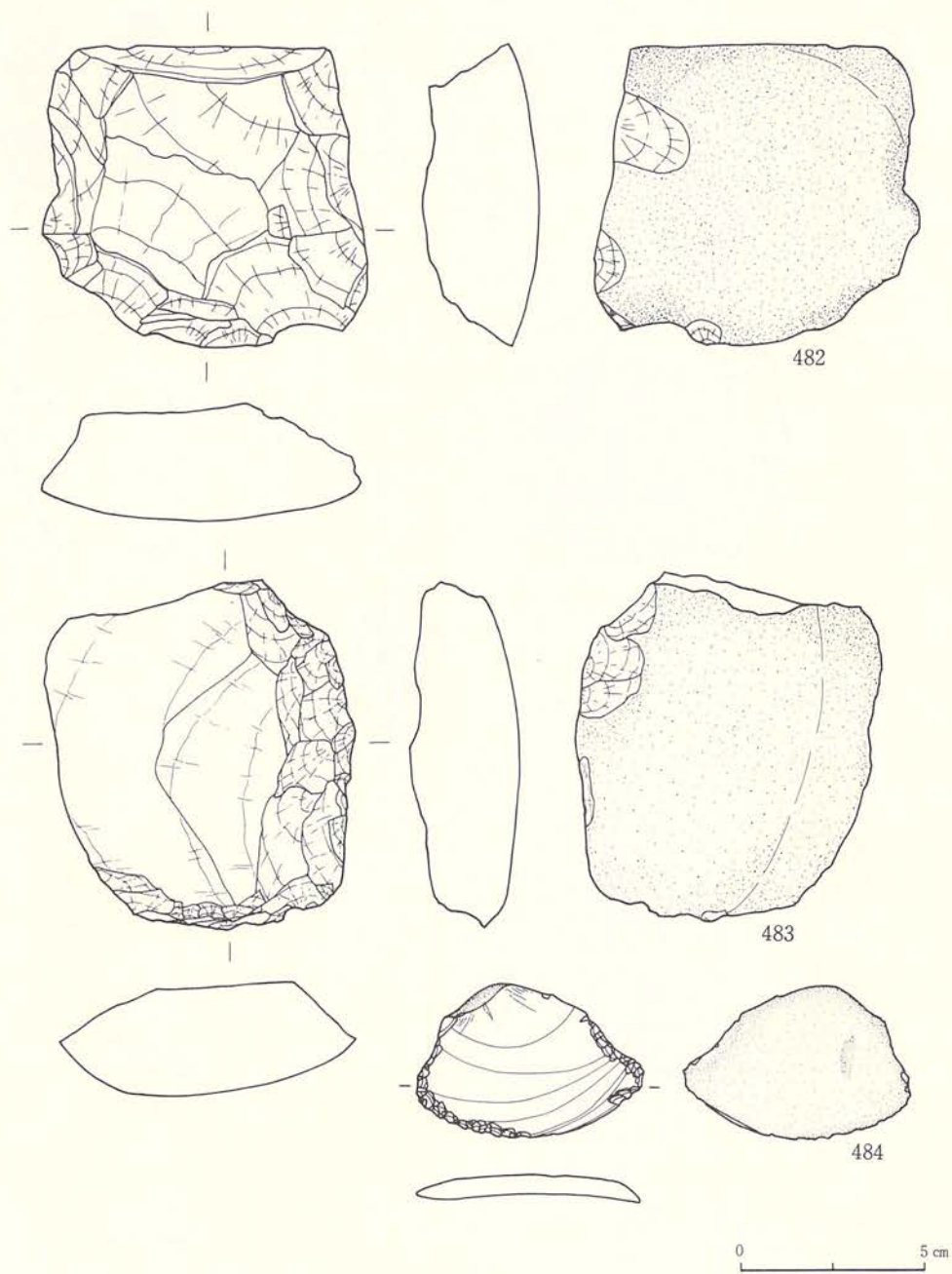
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
464	D III h, I層	石 匙	46	16	6.0	4.3	珪質粘板岩	70	
465	G III e, II層	〃	46	31	6.0	7.0	輝綠凝灰岩	〃	
466	G III e, II層	〃	30	21	3.0	2.25	珪質粘板岩	〃	
467	E III d, I層	〃	29	22	5.0	3.2	チャート	〃	
468	D III a, I層	〃	52	35	8.0	15.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	
469	D III-5 住 掘り方埋土	〃	35	27	6.0	5.0	チャート	〃	
470	D III f, II層	〃	50	37	6.0	12.4	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	
471	F III h, II層下部	〃	43	51	9.0	17.7	粘板岩	〃	
472	E III d, I層	〃	26	13	7.0	2.2	珪質粘板岩	〃	
473	F III f, I層	〃	19	34	5.0	3.67	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	
474	D III j, I層	〃	36	63	7.0	17.43	粘板岩	〃	
475	D III h, II層	〃	26	47	4.0	6.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	

第99図 剥片石器(4)



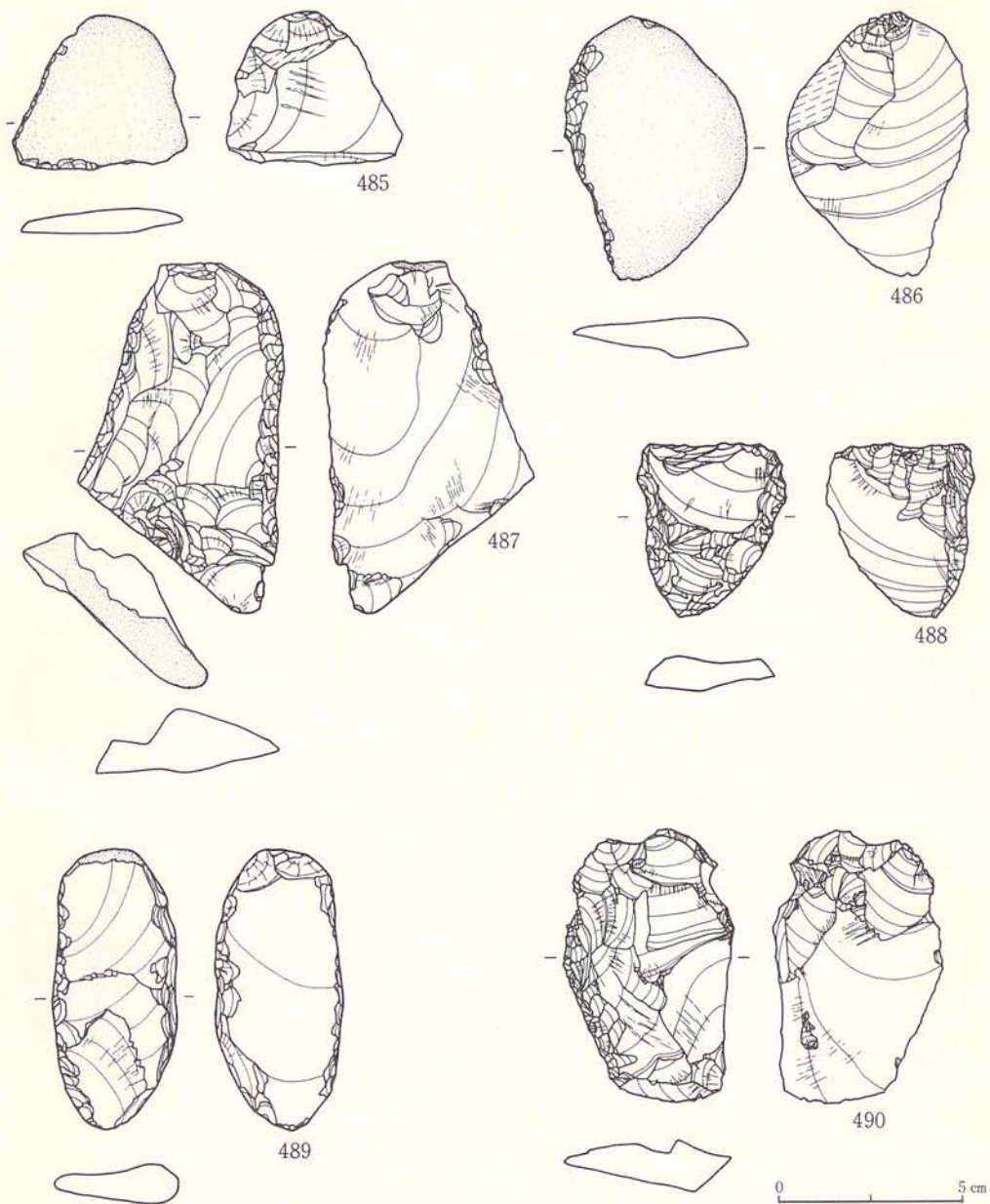
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
476	F III-2 住 埋土上部	石 筥	63	34	12.0	33.42	ホルンフェルス		71
477	D III i <sub>s</sub> II層下部	〃	52	29	8.0	14.05	珪質凝灰岩		〃
478	E III d <sub>e</sub> I層	〃	48	19	11.0	11.73	粘板岩		〃
479	C III h <sub>2</sub> II層	スクレイパー	69	75	22.0	183.0	〃		
480	D III c <sub>1</sub> I層	石 槍	45	26	9.0	10.96	チャート		71
481	G III c <sub>3</sub> II層	スクレイパー	89	82	24.0	230.0	ホルンフェルス		〃

第100図 剥片石器(5)・礫石器(1)



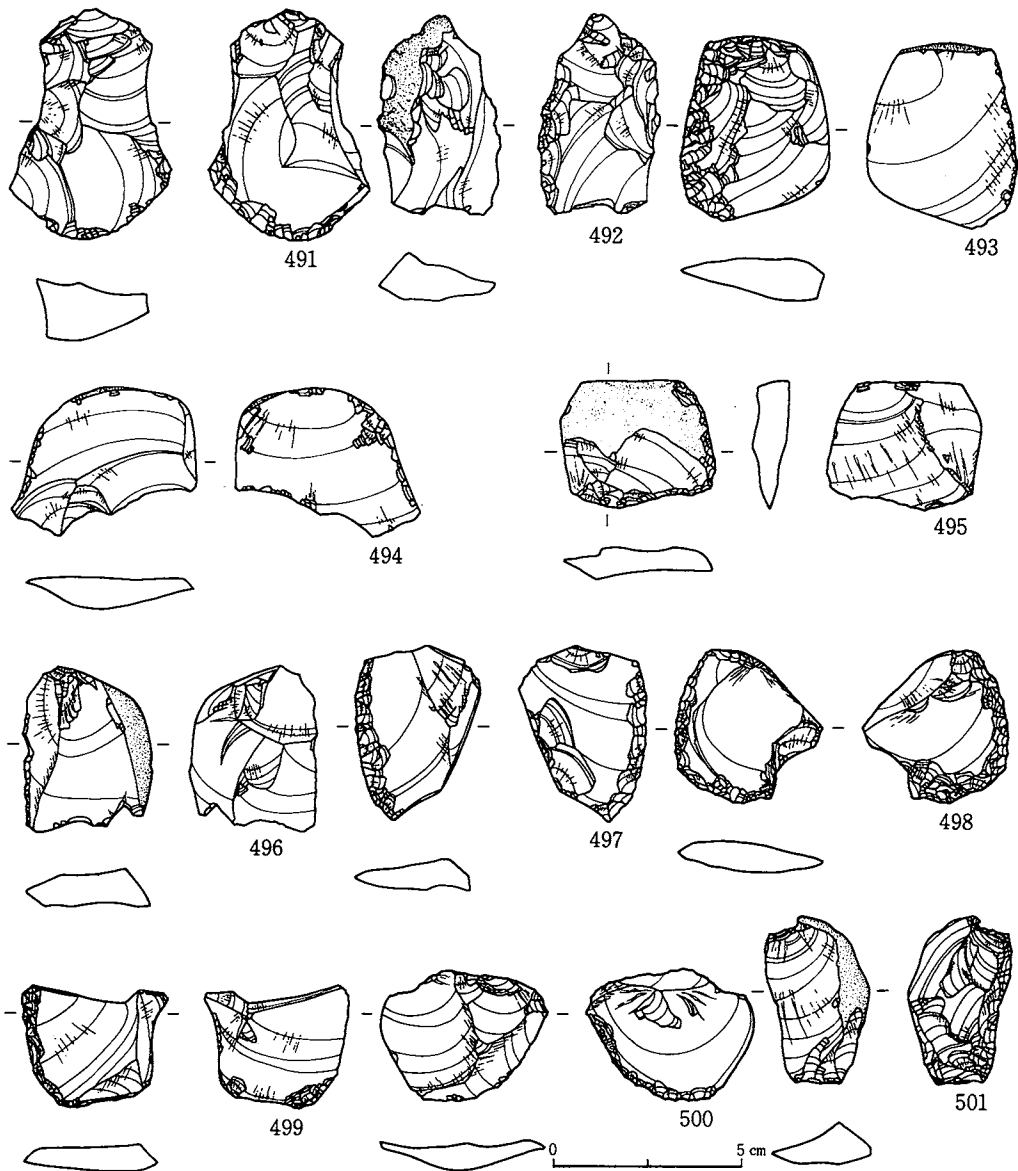
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
482	G III a <sub>1</sub> II層	スクレイパー	82	88	32.0	340.0	流紋岩		71
483	D III h <sub>2</sub> I層	〃	94	81	24.0	300.0	〃		〃
484	D III c <sub>6</sub> II層下部	〃	42	62	9.0	21.83	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃

第101図 剥片石器(6)・礫石器(2)



No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
485	D III g <sub>6</sub> I層	スクレイパー	42	48	8.0	16.85	チャート		71
486	D III j <sub>3,4</sub> I層	//	72	50	12.0	13.15	流紋岩質極細粒凝灰岩		//
487	D III f <sub>6</sub> II層	//	94	55	18.0	80.0	粘板岩		72
488	C III e <sub>3</sub> II層	//	47	40	9.0	16.9	流紋岩質極細粒凝灰岩		71
489	C III f <sub>2</sub> I層	//	77	34	11.0	35.45	珪質凝灰岩		72
490	D III e <sub>6</sub> I層	//	74	46	13.0	46.9	粘板岩		//

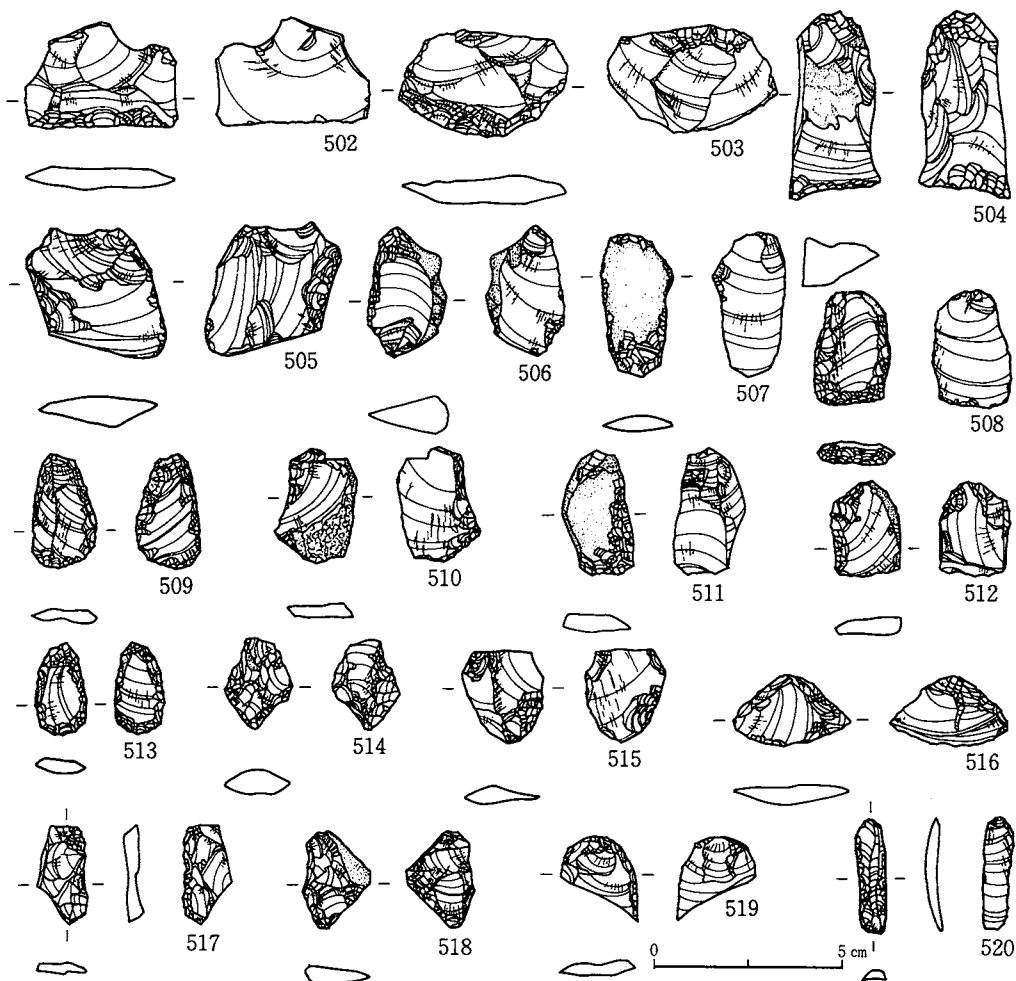
第102図 剥片石器(7)



No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
491	DIII j. I層	スクレイパー	61	42	17.0	36.23	凝灰質珪質泥岩		72
492	DIII-1住 埋土	〃	51	31	14.0	17.26	チャート		
493	DIII-3住 埋土	〃	48	40	11.0	25.88	珪質凝灰岩		72
494	CIII g. II層	〃	34	46	9.0	14.46	珪質粘板岩		
495	CIII f. II層	〃	34	40	9.0	12.45	流紋岩質極細粒凝灰岩		72
496	CIII j. I層	〃	42	34	10.0	15.7	〃		〃
497	CIII h. II層	〃	44	33	8.0	14.8	〃		〃
498	DIII-6住 埋土	〃	40	39	8.0	12.7	チャート		73
499	BIII h. I層	〃	30	39	7.0	9.45	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
500	DIII-4住 埋土へ床面	〃	35	45	7.0	10.05	チャート質粘板岩		〃
501	EIII a. I層	〃	44	26	12.0	11.76	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。ピエス・エスキュー素材	〃

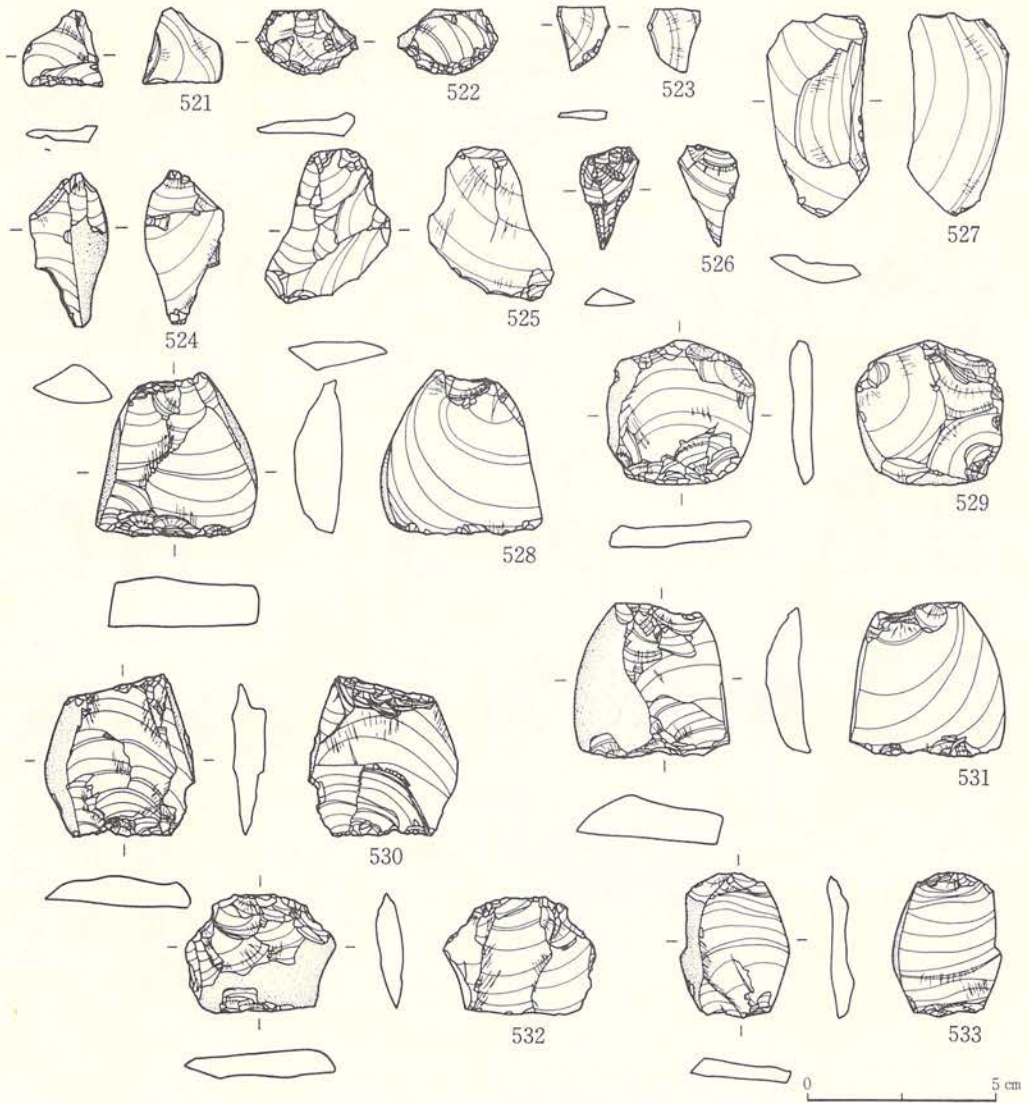
第103図 剥片石器(8)





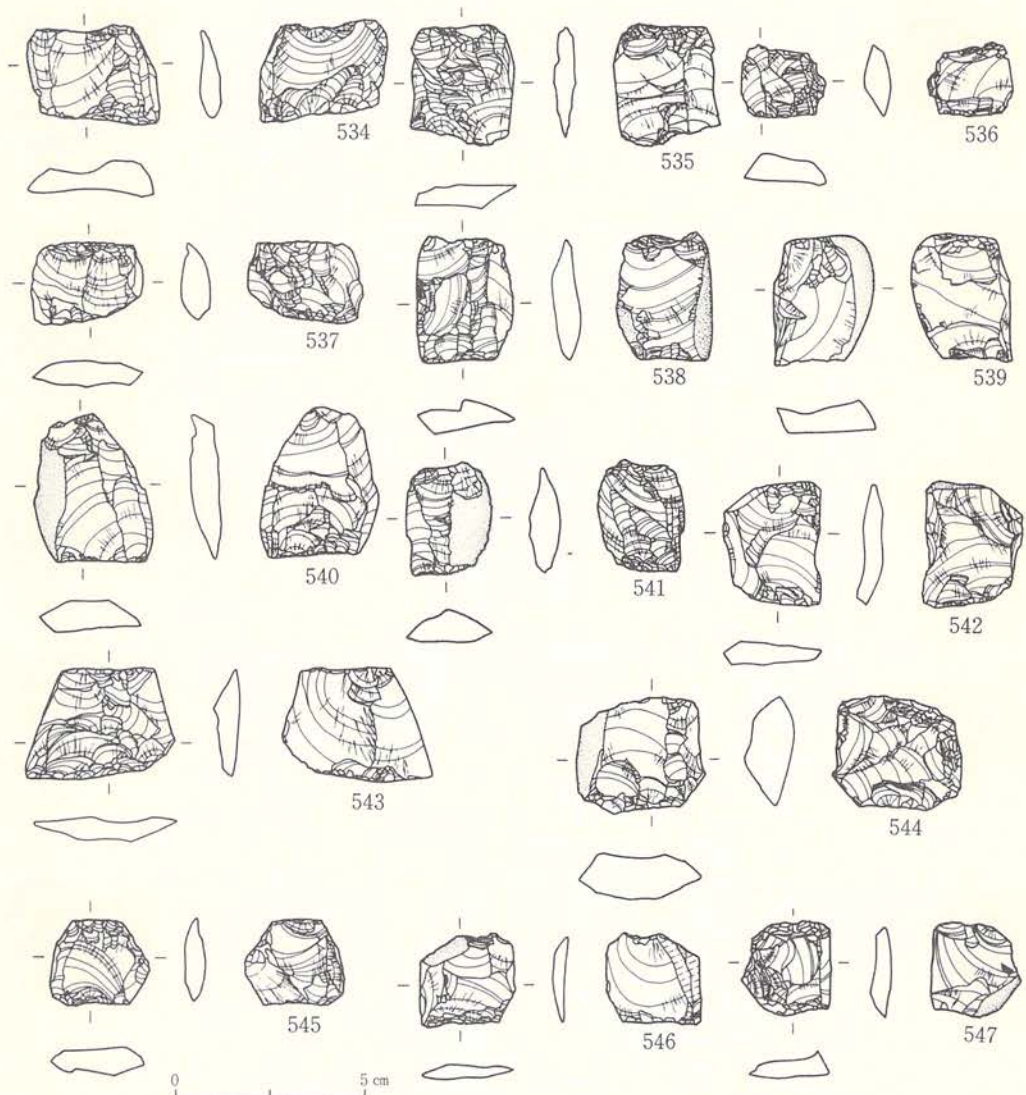
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
502	I III h, II層	スクレイパー	28	40	7.0	7.8	粘板岩		73
503	E III g, II層	〃	28	44	7.0	10.38	〃		〃
504	D III g, II層下部	〃	47	22	13.0	14.55	チャート		〃
505	D III-4住 埋土	〃	33	32	9.0	8.86	珪質凝灰岩		〃
506	D III e, II層	〃	34	21	10.0	5.09	チャート	自然面	〃
507	C III e, I層	〃	38	19	5.0	3.2	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
508	C III g, I層	〃	30	20	4.0	3.28	〃		〃
509	F III e, II層	〃	30	17	5.0	2.35	〃		〃
510	D III f, I層	〃	31	22	4.0	2.1	〃		〃
511	D III f, II層	〃	33	18	5.0	3.8	チャート	自然面	〃
512	E III f, I層	〃	24	18	4.0	2.84	粘板岩	〃。ピエス・エスキュー素材	〃
513	I III f, II層	〃	24	13	4.0	1.64	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
514	D III f, I層	〃	25	18	7.0	2.25	〃		〃
515	C III g, II層下部	〃	25	22	4.0	2.45	〃		〃
516	D III f, II層	〃	19	31	6.0	2.65	〃		〃
517	D III e, II層	〃	26	13	5.0	1.62	輝緑凝灰岩		74
518	G III g, II層	〃	26	17	4.0	1.95	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃
519	D III g, II層	〃	17	20	3.0	1.25	珪質粘板岩		〃
520	G II-1住 埋土上部	〃	30	8.0	3.0	0.8	珪質凝灰岩		〃

第104図 剥片石器 (9)



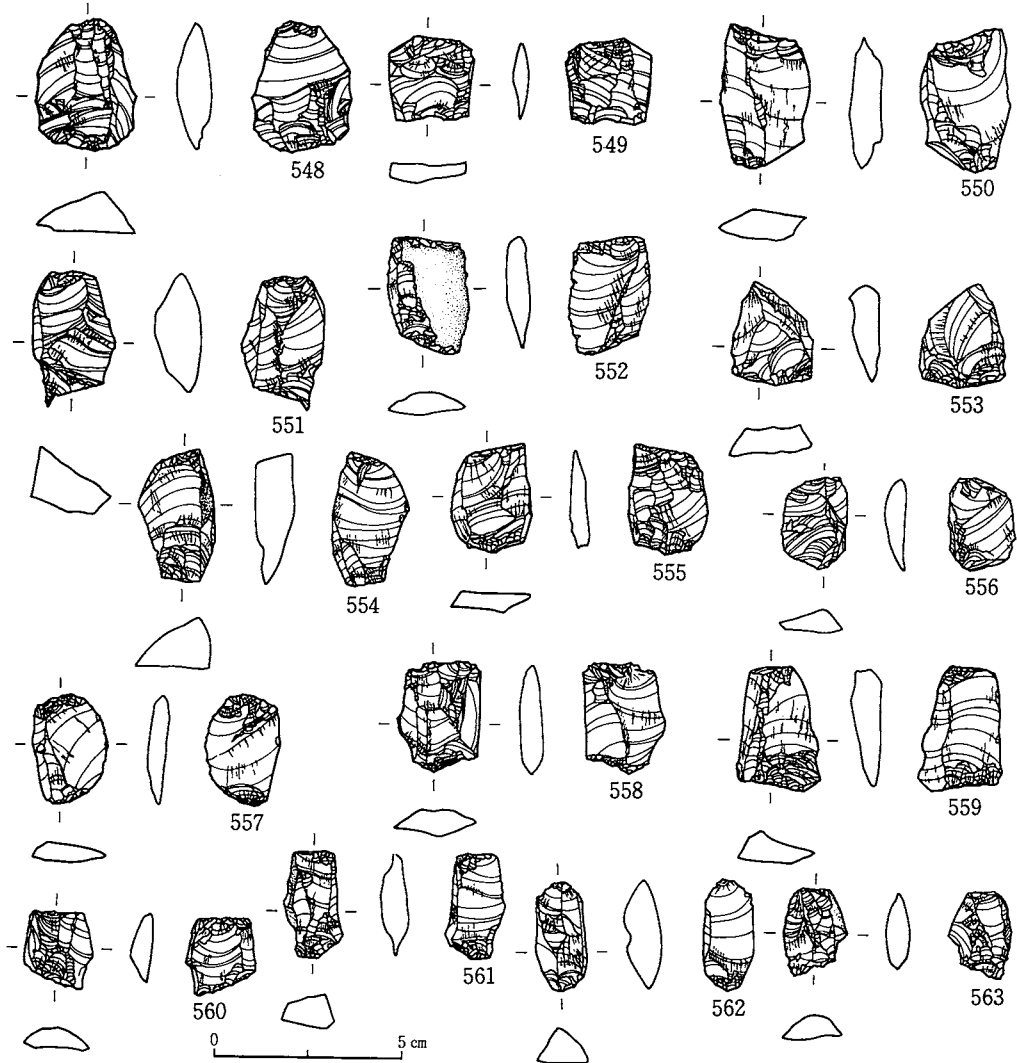
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
521	D III-5 住 埋土	スクレイパー	20	20	5.0	1.2	凝灰質珪質泥岩		74
522	D III c <sub>2</sub> I 層	〃	17	27	6.0	2.6	珪質粘板岩	自然面	〃
523	C III e <sub>3</sub> I 層	使用痕のある 削	17	14	2.0	0.6	〃		
524	G III c <sub>3</sub> II 層	〃	41	21	11.0	5.42	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面	
525	E III c <sub>4</sub> II 層	〃	41	33	8.0	8.3	珪質粘板岩		
526	C III i <sub>6</sub> I 層	〃	25	16	4.0	1.13	輝緑凝灰岩		74
527	D III g <sub>4</sub> I 層	〃	54	26	5.0	8.15	流紋岩質極細粒凝灰岩		
528	D III-4 住 埋土～床面	ピエス・エス キュー	43	42	14.0	32.05	珪質凝灰岩	自然面。P-1	74
529	D III-6 住 埋土	〃	39	39	6.0	14.12	輝緑凝灰岩	〃 〃 〃	〃
530	D III c <sub>6</sub> II 層下部	〃	43	39	10.0	16.94	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃 〃	〃
531	D III-4 住 埋土～床面	〃	41	41	11.0	22.6	珪質凝灰岩	〃 〃 〃	〃
532	E III c <sub>5</sub> I 層	〃	31	40	8.0	10.55	チャート	〃 〃 〃	〃
533	D III i <sub>4</sub> II 層	〃	38	29	8.0	7.9	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃 〃	〃

第105図 剥片石器 (10)



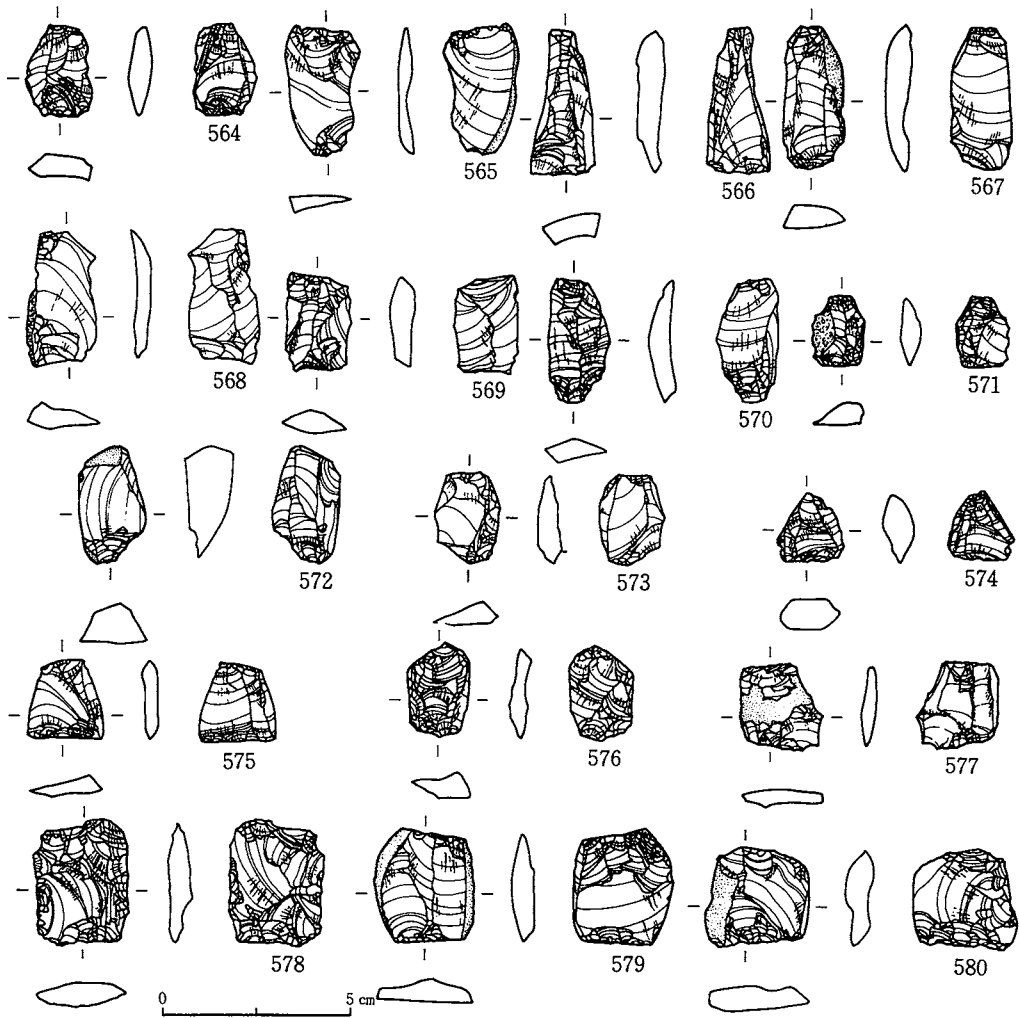
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
534	D III j. 1層	ビエヌ・エスキーユ	26	33	10.0	8.89	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。P-1	74
535	C III d. II層	〃	32	28	6.0	6.0	〃	〃	〃
536	D III i. 1層	〃	19	22	8.0	3.26	〃	〃	〃
537	G III c. II層	〃	21	29	7.0	5.5	〃	〃	〃
538	D III-1 住 埋土	〃	34	25	8.0	7.53	珪質凝灰岩	自然面。〃	〃
539	D III-6 住 埋土下部～床面	〃	33	26	9.0	10.5	輝緑凝灰岩	〃。〃	〃
540	C III g. 1層	〃	39	30	8.0	10.76	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃。〃	75
541	G III c. II層	〃	28	23	8.0	5.7	粘板岩	〃。〃	〃
542	D III-1 住 カマド上	〃	32	26	7.0	6.4	凝灰質珪質泥岩	〃	〃
543	D III g. II層下部	〃	30	37	7.0	8.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
544	F III-4 住 埋土上部	〃	34	29	13.0	16.5	チャート質粘板岩	自然面。〃	〃
545	G II-1 住 埋土上部	〃	23	26	7.0	3.75	珪質凝灰岩	〃	〃
546	C III i. 1層	〃	23	25	4.0	2.95	粘板岩	自然面。〃	〃
547	D III e. II層	〃	25	24	6.0	4.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃

第106図 剥片石器 (II)



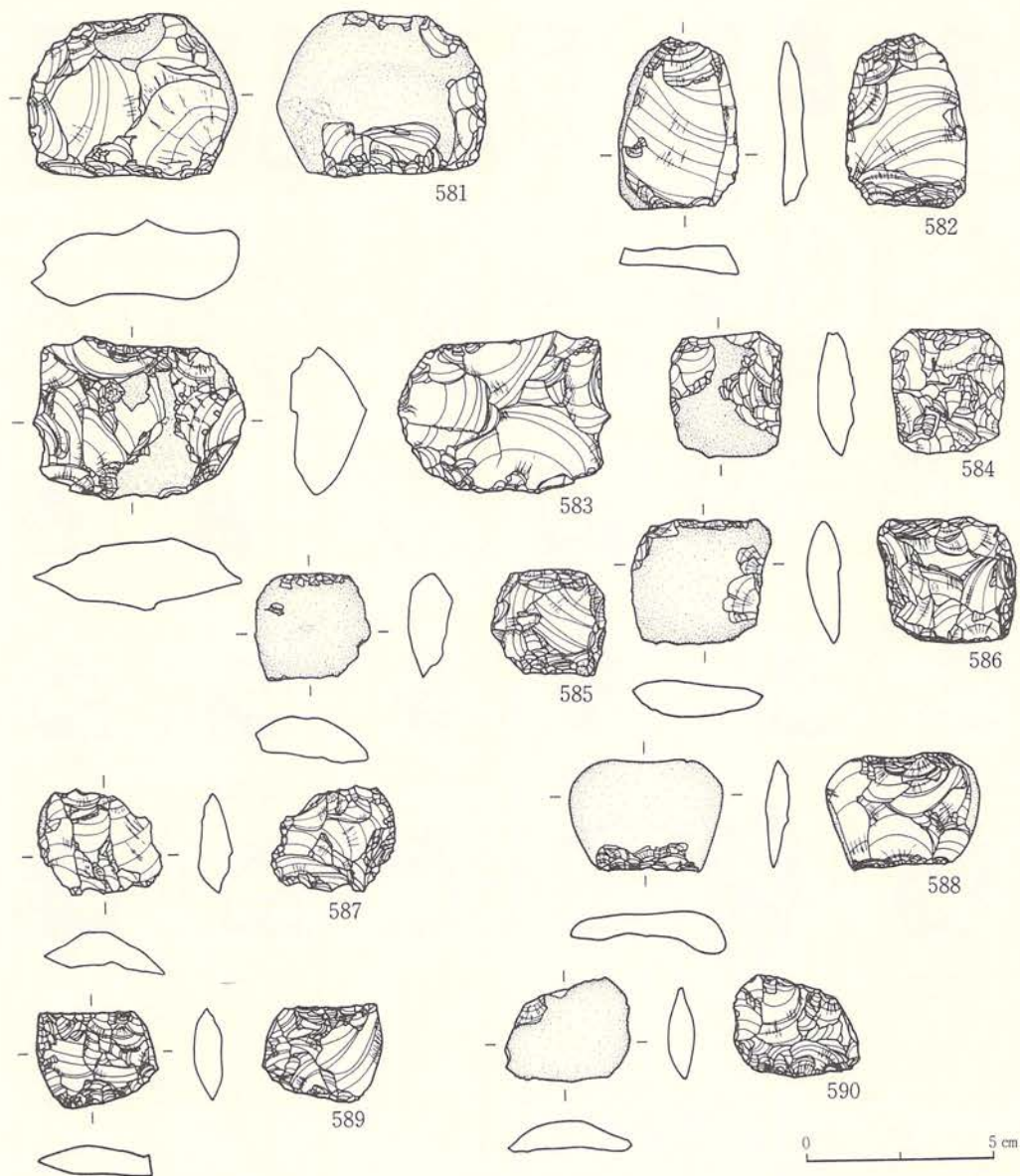
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
548	I III g. II層	ピエスキュー	34	27	11.0	9.1	流紋岩質極細粒凝灰岩	P-1	75
549	D III c. I層	〃	22	23	5.0	2.9	珪質粘板岩	〃	〃
550	D III g. II層下部	〃	38	24	8.0	8.23	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
551	I III i. II層	〃	35	22	14.0	10.04	珪質粘板岩	〃	〃
552	D III j. II層	〃	30	22	7.0	4.66	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
553	G III b. II層	〃	26	21	9.0	4.76	〃	〃	〃
554	I III e. II層	〃	35	20	13.0	9.1	珪質粘板岩	〃	〃
555	F III-4 住 埋土上部	〃	34	29	13.0	16.5	チャート質粘板岩	〃	〃
556	G III g. II層	〃	24	17	6.0	2.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
557	G III-3 住 埋土	〃	29	20	4.0	2.84	凝灰質珪質泥岩	〃	〃
558	D III e. II層	〃	29	21	7.0	4.45	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
559	I III h. II層	〃	33	22	8.0	5.75	珪質粘板岩	〃	〃
560	G II-1 住 埋土上部	〃	21	18	6.0	2.1	チャート質粘板岩	〃	〃
561	E III f. II層下部	〃	29	14	9.0	3.45	珪質粘板岩	自然面。〃	〃
562	D III-4 住 埋土	〃	29	14	9.0	3.46	珪質凝灰岩	〃	〃
563	D III j. I層	〃	23	17	7.0	2.24	珪質粘板岩	自然面。〃	〃

第107図 剥片石器 (12)



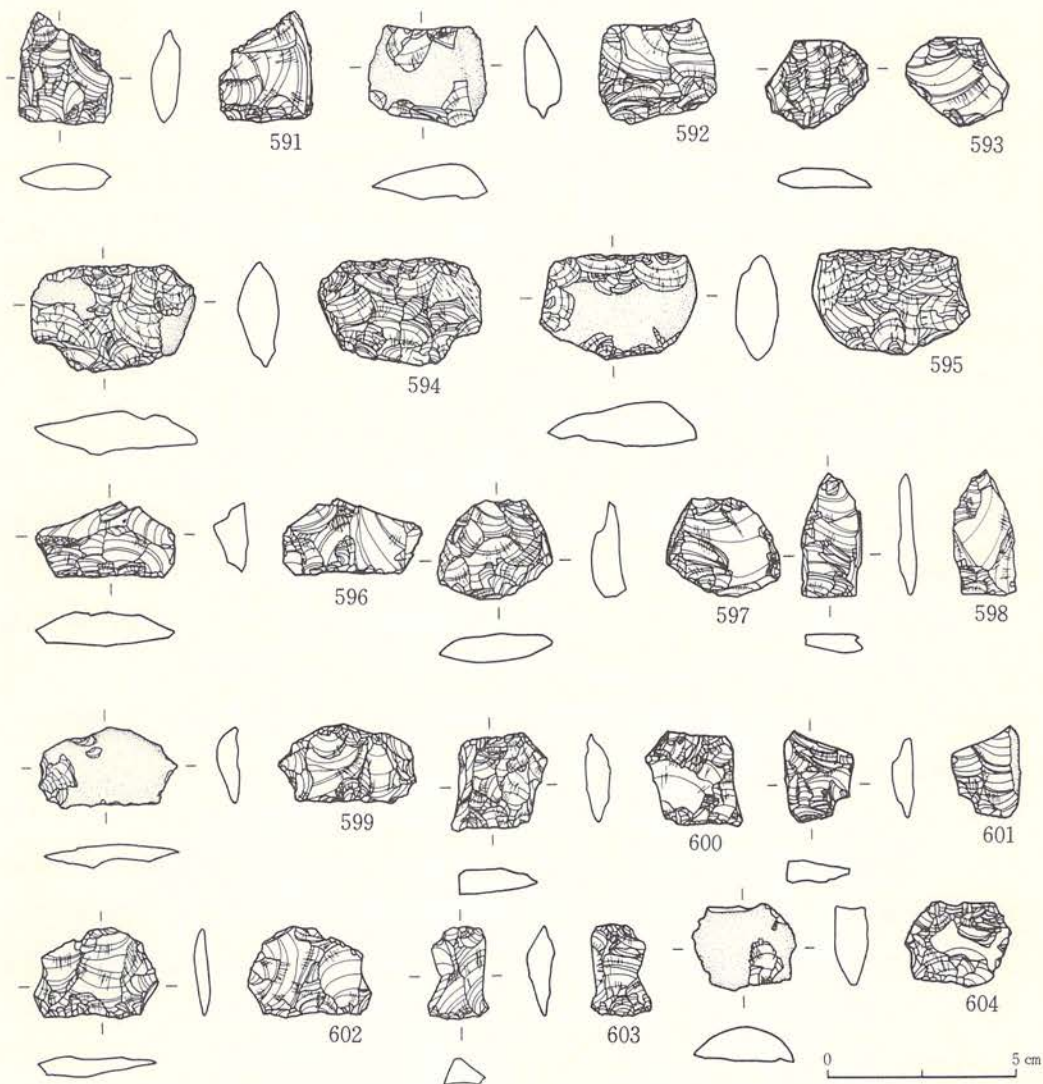
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
564	D III i <sub>1</sub> I層	ピエスキュー	24	17	6.0	2.93	流紋岩質極細粒凝灰岩	P-1	76
565	D III e <sub>2</sub> I層	〃	34	20	4.0	3.25	〃	自然面。〃	〃
566	D III i <sub>5</sub> II層下部	〃	39	16	7.0	5.3	輝緑凝灰岩	〃	〃
567	D III i <sub>4</sub> II層	〃	38	26	7.0	5.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
568	F III-2 住 埋土	〃	35	19	6.0	3.95	チャート質粘板岩	〃	〃
569	D III e <sub>6</sub> II層	〃	26	17	6.0	2.85	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
570	I III e <sub>6</sub> II層	〃	32	17	5.0	2.75	珪質粘板岩	〃	〃
571	D III i <sub>4</sub> I層	〃	18	14	6.0	1.54	〃	〃	〃
572	E III d <sub>4</sub> I層	〃	31	18	13.0	7.55	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
573	D III i <sub>6</sub> II層	〃	24	17	6.0	2.47	珪質粘板岩	〃	〃
574	D III j <sub>2</sub> I層	〃	18	17	9.0	2.78	輝緑凝灰岩	〃	〃
575	D III-4 住 埋土~床面	〃	21	21	5.0	2.1	凝灰質珪質泥岩	〃	〃
576	F III h <sub>6</sub> II層	〃	25	17	6.0	2.2	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
577	D III j <sub>3a</sub> I層	〃	23	22	4.5	2.16	〃	自然面。〃	〃
578	D III-1 住 カマド上	〃	33	25	8.0	5.9	珪質凝灰岩	P-2	〃
579	D III a~c <sub>3</sub> 付近 I層	〃	30	27	6.0	6.87	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
580	D III e <sub>6</sub> II層	〃	25	27	7.0	5.8	〃	自然面。〃	〃

第108図 剝片石器 (13)



No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
581	D III-1 住 埋土	ヒエヌ・ エヌキ・ユ	44	56	24.0	54.75	珪質凝灰岩	自然面。P-2	76
582	E III e <sub>7</sub> 1層	〃	46	32	7.0	14.05	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃。〃	〃
583	I III h <sub>7</sub> II層	〃	42	57	21.0	47.4	〃	〃。〃	〃
584	D III i <sub>5</sub> II層下部	〃	34	29	10.0	11.3	粘板岩	〃。〃	〃
585	E III a <sub>4</sub> II層	〃	28	31	11.0	12.06	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃。〃	〃
586	C III c <sub>3</sub> II層	〃	34	36	10.0	15.2	輝綠凝灰岩	〃。〃	77
587	E III d <sub>6</sub> I層	〃	28	33	8.0	7.5	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
588	D III-4 住 埋土	〃	30	41	11.0	14.9	珪質凝灰岩	自然面。〃	〃
589	D III h <sub>3</sub> I層	〃	25	31	7.0	7.1	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
590	F III h <sub>4</sub> II層下部	〃	26	33	7.0	7.6	珪質粘板岩	自然面。〃	〃

第109図 剥片石器 (14)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
591	C III j <sub>3</sub> I <sub>0</sub> 層	ピエヌ・エスキュー	29	25	8.0	5.62	珪質粘板岩	自然面。P-2	77
592	C III c <sub>3</sub> II層	〃	26	31	10.0	8.26	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	〃
593	F III c <sub>4</sub> II層	〃	22	24	5.0	3.5	珪質粘板岩	〃	〃
594	D III j <sub>5</sub> I層	〃	28	44	10.5	13.84	粘板岩	自然面。〃	〃
595	C III i <sub>3</sub> II層	〃	41	28	11.0	16.35	チャート質淡緑色凝灰岩	〃	〃
596	D III-6 住 埋土~床面	〃	37	19	10.0	6.15	チャート質粘板岩	〃	〃
597	I III f <sub>6</sub> II層	〃	26	30	7.0	6.45	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
598	D III-5 住 埋土	〃	33	16	6.0	2.8	輝緑凝灰岩	〃	〃
599	C III g <sub>3</sub> I層	〃	20	36	7.0	4.68	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
600	D III g <sub>4</sub> I層	〃	24	23	7.0	4.6	珪質粘板岩	〃	〃
601	I III g <sub>6</sub> II層	〃	24	18	6.0	2.54	流紋岩質極細粒凝灰岩	自然面。〃	〃
602	D III h <sub>1</sub> II層	〃	24	31	5.0	3.6	輝緑凝灰岩	〃	〃
603	G II-1 住 埋土下部	〃	24	16	7.0	2.2	珪質凝灰岩	〃	〃
604	F III-4 住 埋土下部	〃	22	27	10.0	6.55	チャート質粘板岩	自然面。〃	〃

第110図 剥片石器 (15)

刃部作出との先後関係が明らかなものでは、刃部形成後の折りとりもしくは折れである。刃角は45度～60度に集中する。

(7) 使用痕のある剥片 (第105図、図版74)

剥片の中で、切截などの使用の際に生じたと考えられる微細剥離を有しているものを一括し、その一部を掲載した。ただし、微細剥離痕の生成要因については使用によるものであるかどうか判別し難いものが多く、また微細剥離痕以外の使用痕については識別が困難であるため、本分類は便宜的なものである。

(8) ピエス・エスキュー (第105図～第110図、図版74～77)

バイポーラーテクニックによって作出されたと考えられる剥片のうち、岡村 (1983) の呈示する特徴を有しているものを一括する。これらのうち、表面もしくは裏面に先行剥離面または主要剥離面以外の剥離が認められるものをP-2とし、先行剥離面と主要剥離面のみ認められるものをP-1と分類する。ただし、これは最終形態の観察にもとづくもので、接合等の技術的な復元を行った結果にもとづいたものではない。

77点出土している。その50%以上がD III区に集中する。C III、E III、F III、G II、III区等でもそれぞれ少量出土している。

これらのうち、50%以上にあたる39点には表面または裏面に自然面を残しており、ピエス・エスキューの剥離された石核が概して小さいものであったことを示している。また、上下両辺にはつぶれ痕を有しているものが多いが、剥片剥離の際のものか使用によるものであるか明らかでない場合がほとんどである。側辺に、微細剥離痕の観察されるものがある。剪断面も必ずしも明瞭でない例が存在する。一部折損している例が少数見られるが、大部分についてはそのような現象は認められない。

## 5. 石斧・礫石器

打製石斧・磨製石斧・礫器 I 類・礫器 II 類・磨石・凹石・敲石・砥石等を本項で扱う。礫器 III 類として特に分類したものと、磨石+凹石というような複合石器も本項で扱うこととする。

(1) 打製石斧 (第111図～第115図、図版78・79)

石斧のうち、(1)研磨による刃部整形を伴わないもの、(2)研磨による調整の後加撃によって刃部の作出がなされるものおよび(3)最終的に刃部付近の一部が研磨されているものの3者を含めた。(2)・(3)の識別は困難である場合も多い。また、後述する磨製石斧のうち、使用によって生じたと考えられる剥離痕を有するものとの識別も容易ではない。

31点出土している。C III区からH I区まで広く分布しているが、特に偏在する傾向はない。

片面に自然面ないし研磨面を有し、刃部が片刃となるものが多い。素材にはやや扁平で細長



い礫が用いられている。第112図617のように剥片素材と考えられるものもあるが、研磨面を有していることと先後関係から磨製石斧の再加工が考えられる。

なお、刃部が弧状となり連続的な剥離が施されるいわゆる円盤状打製石器第111図610、第113図627の存在は注意される必要がある。

(2) 磨製石斧 (第115図・第116図、図版79・80)

18点出土している。CⅢ区7点、DⅢ区2点、EⅢ区5点、FⅢ区1点、GⅢ区1点、HⅡ区2点である。調査2区北地区にやや多く分布する。

基部の欠損するものと刃部の欠損するものがある。後者については打製石斧の項の分類規準に従って、打製石斧に分類されるべきものが含まれている可能性がある。刃部は片刃状のものと両刃のもの両者が存在する。擦り切り等によって作出されたものは存在しない。

(3) 礫器Ⅰ類 (第117図～第123図、図版80～83)

円礫または楕円形状の礫の一端に、片側から連続的な剥離を加えることによって刃部を形成しているものを一括した。特に、チョッパー状の形態のものを礫器Ⅰ-0、凹石と複合されているものを礫器Ⅰ-1、敲石と複合されているものと礫器Ⅰ-2、凹石・敲石の両者と複合されているものを礫器Ⅰ-3として細分する。

30点出土している。FⅢおよびGⅡ・GⅢの各区から約70%が出土している。

礫の一端に刃部を形成しただけのものが多いが、分割した礫を素材としていていると考えられるもの(第117図658・第119図665・第121図673・675)や、周縁部を多少連続的に調整していると考えられるもの(第121図676など)も存在する。刃角は概して大きい。複合した石器の場合、その先後関係は不明である。

(2) 礫器Ⅱ類 (第124図、図版83)

礫の一端に両側から加撃を加え刃部を作出したものである。ただし刃部作出は交互剥離には依っていない。従って、礫器Ⅰ-0と同様刃部断面形は片刃状を呈する。第124図687のみは分割礫を素材としている。凹石等との複合例はない。

4点が出土し、調査2区全域に点在している。

(3) 礫器Ⅲ類 (第124図～第126図、図版83・84)

礫器Ⅰ類に類似するが、刃部の形成がきわめて非連続的な剥離により、しばしばつぶれ痕を有しているものを一括した。従って刃角は80度以上の大きなものとなる。このうち、単独のものを礫器Ⅲ-0、凹石と複合されるものを礫器Ⅲ-1、敲石と複合されるものを礫器Ⅲ-2として分類する。

8点出土している。EⅢ区～GⅢ区からそのほとんどが出土している。

一部分割した礫を使用していると考えられるものがある(第125図690・692)。複合した石器

の場合、その先後関係は明らかではない。

#### (4) 磨石 (第126図～第131図, 図版84～86)

礫の一部もしくは全面を研磨した石器を一括する。その形態から、断面が三角形状を呈しその側面が研磨されているものを磨石Ⅰ類、それ以外のものを磨石Ⅱ類と分類する。さらに、それらと凹石・敲石・凹石+敲石と複合されているものをそれぞれ1、2、3として細分する。

磨石Ⅰ類は26点出土している。DⅢ区からⅠⅢ区まで幅広く分布している。FⅢ区に10点とやや集中する。

これらのうち、ほぼ原形をとどめていると考えられるものはわずか7点であり、他の19点は一部またはその大部分を欠失している。しかも、相互に接合する例はない。複合した石器の場合、その先後関係は明らかでない。

磨石Ⅱ類は4点出土している。調査2区に散在する。

扁平な円礫を素材としている。敲石として使用される場合、作業面が研磨され作出された後に使用痕が認められる。凹石との複合の場合も、研磨が先行していると考えられる。

#### (5) 凹石 (第131図～第136図, 図版86～88)

礫の片面もしくは両面に凹痕を有する石器を一括した。ただし、礫石器Ⅰ～Ⅲ、および磨石Ⅰ～Ⅱ類と複合されているものは除外している。それらの中に最終的に凹痕が残されたものが一部存在していることは既述のとおりである。凹石のうち、単独のものを凹石-0、敲石と複合されるものを凹石-1として分類している。

29点出土している。CⅢ区～ⅠⅢ区にかけて広く分布し、特に扁在する傾向は認められない。

両面に凹痕を有するものが多い。凹痕が一面に複数存在する例もある。(第133図734・735など)。第132図729は、一方に剝離面を有している。一部を欠損するものは12点である。敲痕は縁辺に認められる。

#### (6) 敲石 (第136図～第138図, 図版88・89)

礫の一部に敲痕を有する石器を一括した。ただし、礫器Ⅰ類～Ⅲ類・磨石Ⅰ～Ⅱ類・凹石と複合されているものは除外している。

敲痕はやや扁平な礫の側縁に形成され、多くの場合表面が粗くなりつぶれ痕状を呈するが、凹石のように明瞭に凹状をなすことはない。第138図764は、円礫に対して加撃を加え多少の調整が施されるものであるが、敲痕は側縁に認められる。

#### (7) 砥石 (第138図, 図版89)

1点出土している。礫の一面に2条の溝が認められる。

以上、遺構内外出土の石器について概略を記した。次にいくつかの点を付記する。

①凹石と敲石について：複合石器のそれぞれの形態を単位としてその個数を重複算出した場合、凹石は49点、敲石は18点となる。

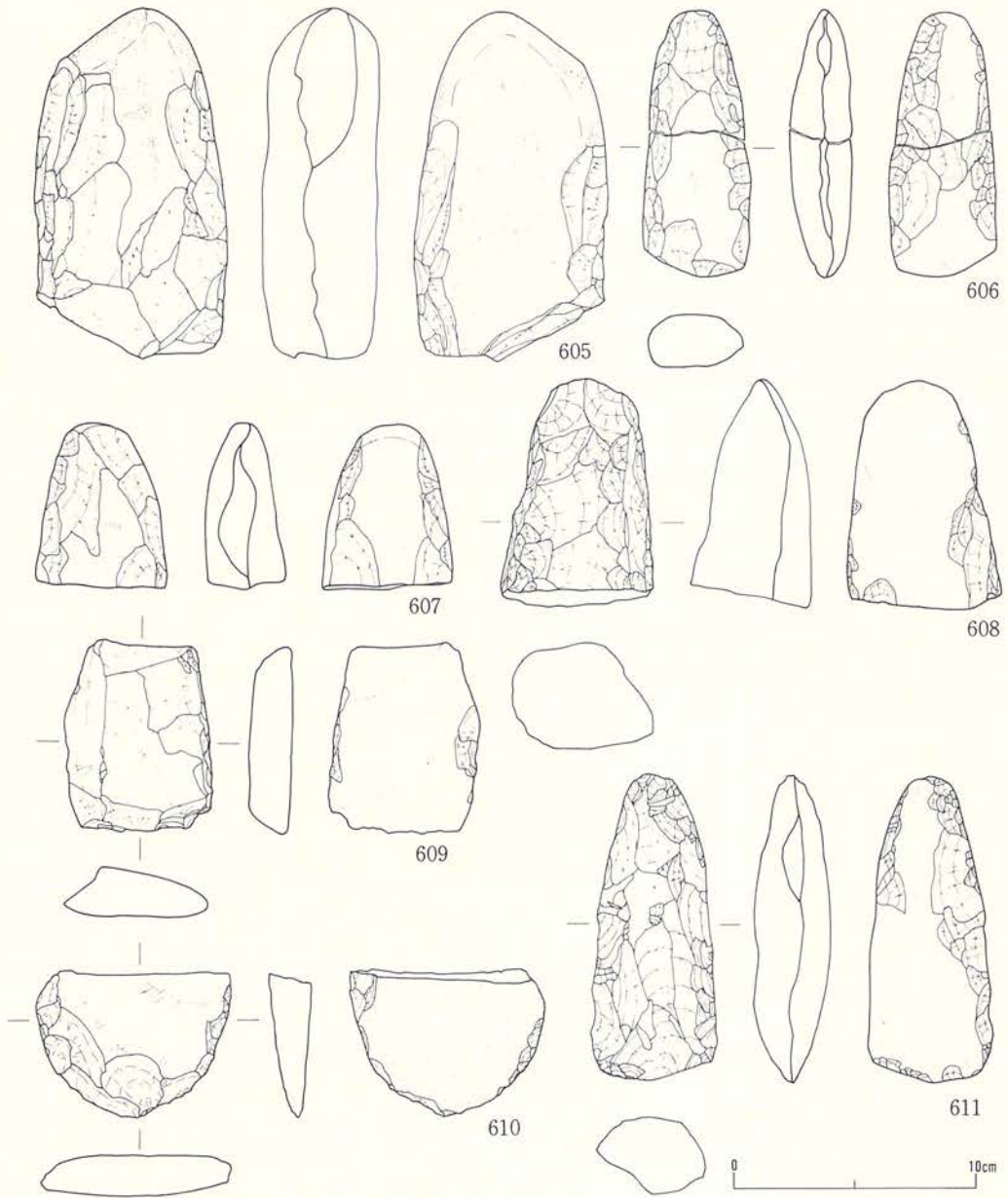
②個々の石器の時期について：個々の石器の時期を時定することは困難である。ただ、礫器Ⅰ類～Ⅲ類として分類した石器は、前期前葉の住居跡からの出土例や分布を考慮に入れると、跡の例器Ⅰ群に共伴することが考えられる。また磨石Ⅰ類としたものも、岩手県飛鳥台地Ⅰ遺跡の例などから、縄文土器Ⅰ群に共伴するものであろう。

③剥片石器の分類について：Ⅳ章とⅤ章では石器の分類を異にしている。Ⅳ章では不定形石器の用語を用い、スクレーパーとはしていない。

④石材と産地は表3に、器種別石材百分比は図2にまとめている。

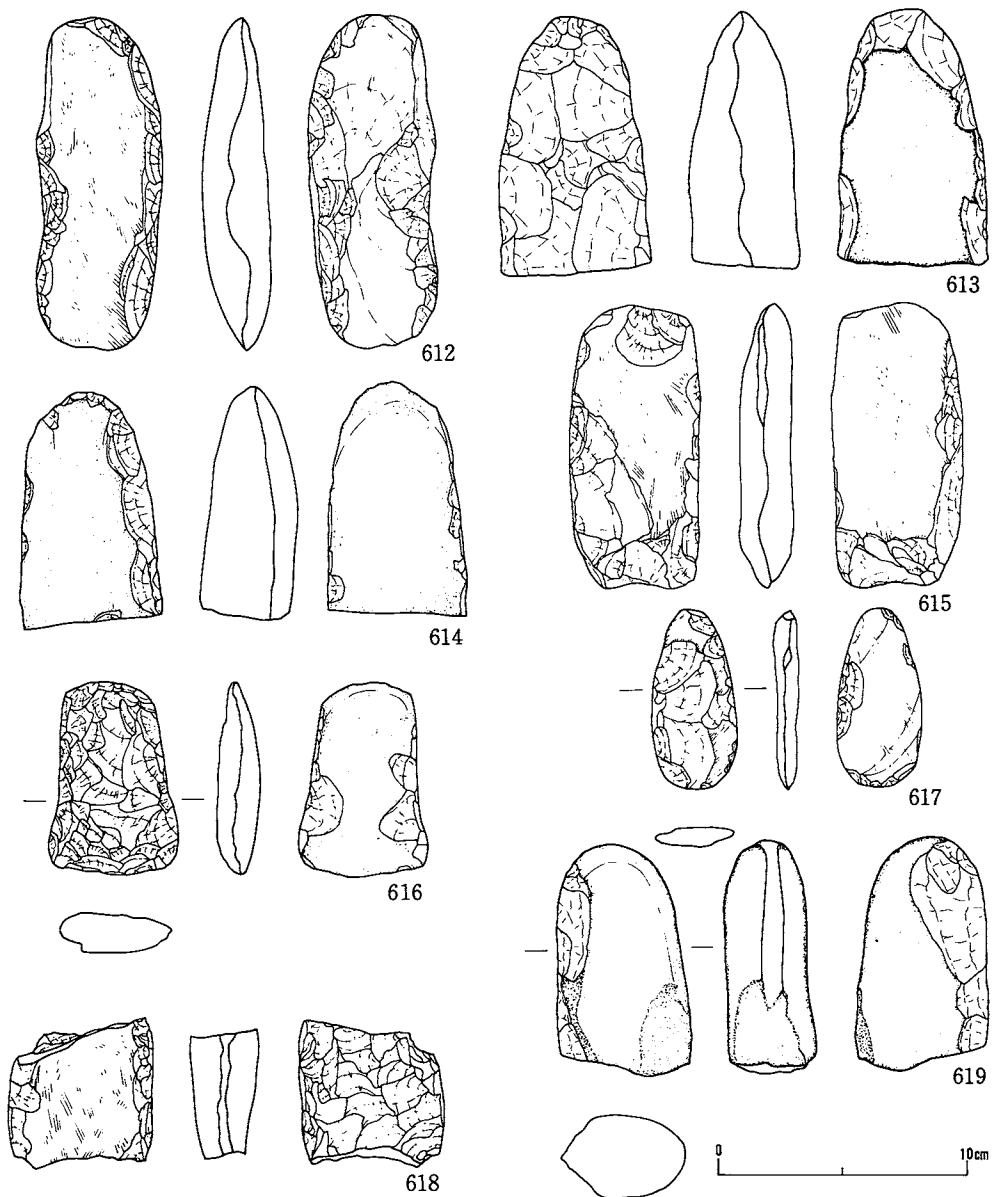
石 材 名		産 地	
凝 灰 岩	凝灰岩	北 上 山 地	中 世 界
	チャート質凝灰岩		
	チャート質淡緑凝灰岩		
	流紋岩質極細粒凝灰岩		
	珪質凝灰岩		
輝緑凝灰岩			
安 山 岩	安山岩	北 上 山 地	中 世 界
	輝石安山岩		
	石英安山岩		
流 紋 岩	流紋岩	北 上 山 地	中 世 界
	玻璃質流紋岩		
泥 岩	凝灰質珪質泥岩	北 上 山 地	中 世 界
	凝灰質珪質泥岩	奥 羽 山 地	新第三系・中新統
砂 岩	硬砂岩	北 上 山 地	中 世 界
	アルコース砂岩		
チャート			
粘 板 岩	粘板岩	北 上 山 地	中 世 界
	チャート質粘板岩		
	珪質粘板岩		
玢 岩	玢岩	北 上 山 地	中 世 界
	長石玢岩		
	輝石玢岩		
ホルンフェルス	粘板岩ホルンフェルス	北 上 山 地	中 世 界
閃 緑 岩	閃緑岩	北 上 山 地	中 世 界
	花崗閃緑岩		
半 花 崗 岩		北 上 山 地	中 世 界
斑 禰 岩		北 上 山 地	中 世 界
石 英 斑 岩		北 上 山 地	中 世 界
水 晶		北 上 山 地	中 世 界

表3 石材・産地一覧表



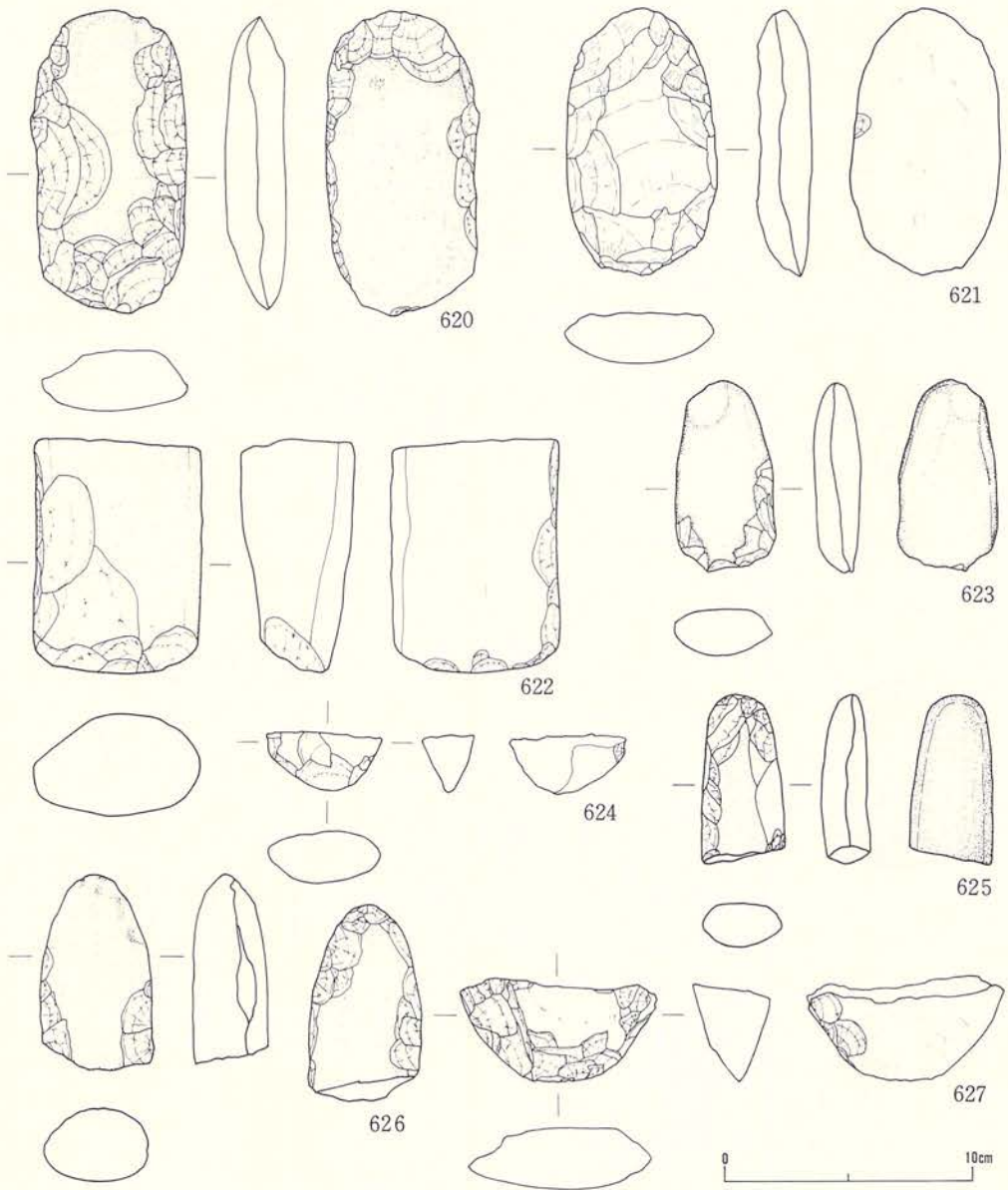
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
605	F III g s, I層	打製石斧	144	79	46	925	輝石安山岩		78
606	C III c, II層	〃	109	44	23	170	輝石珩岩		〃
607	F III i a, I層	〃	68	53	23	150	硬砂岩		
608	G III f i, II層	〃	93	63	49	360	〃		78
609	G II-1住 埋土	〃	78	62	20	130	粘板岩		〃
610	D III i a, I層	〃	78	96	14	110	ホルンフェルス		〃
611	F III-2住 埋土	〃	126	52	31	260	玻璃質流紋岩		〃

第111図 礫石器(3)



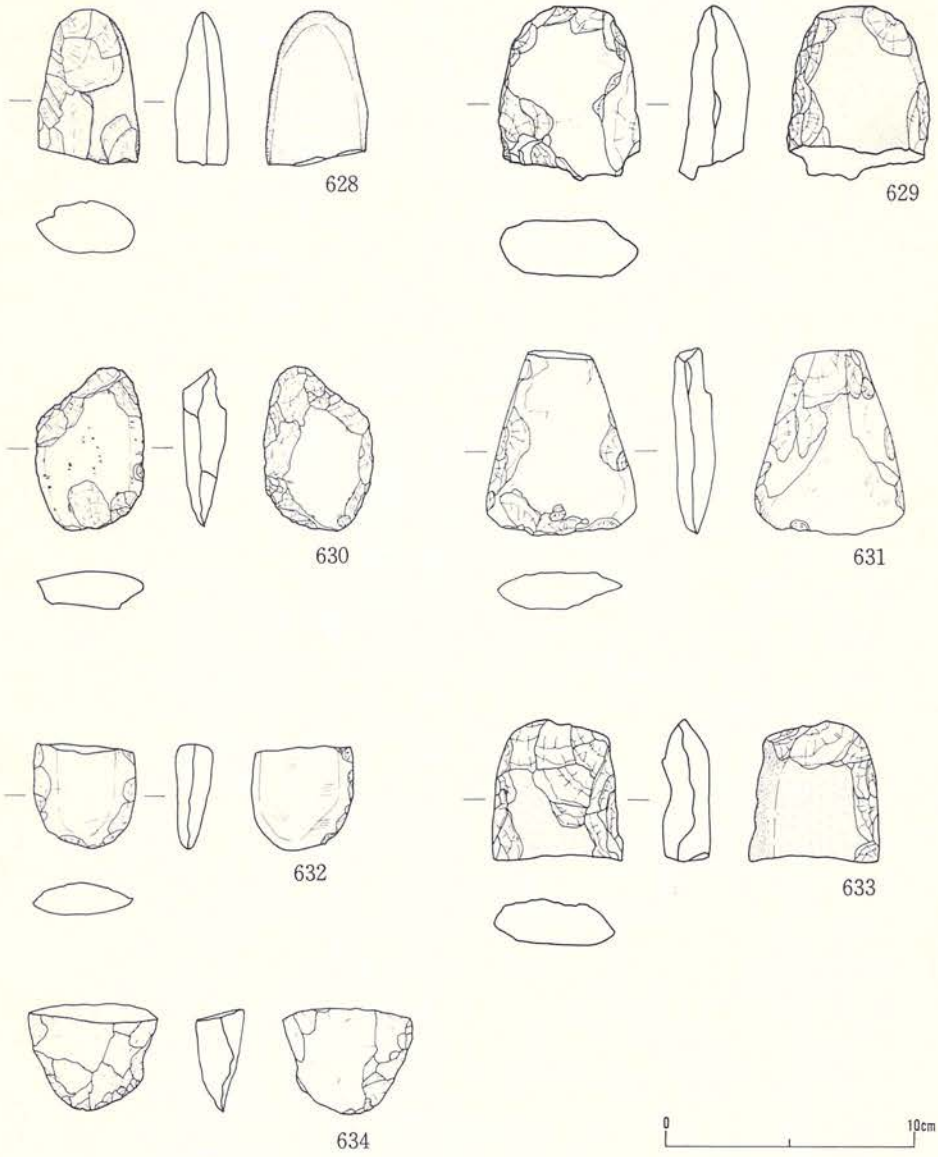
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
612	E III g <sub>1</sub> I層下部	打製石斧	133	51	27	285	輝石安山岩		78
613	C III d <sub>1</sub> I層	〃	103	61	43	365	〃		78
614	C III h <sub>1</sub> II層	〃	92	57	36	300	硬砂岩		
615	F III f <sub>1</sub> II層	〃	111	52	22	220	〃		79
616	I III f <sub>1</sub> I層	〃	77	52	16	90	〃		〃
617	G III a <sub>2</sub> II層	〃	72	34	10	40	不明		78
618	D III a <sub>2</sub> I層	〃	51	58	23	120	斑岩		
619	E III c <sub>1</sub> II層	〃	88	53	35	295	硬砂岩		

第112図 礫石器(4)



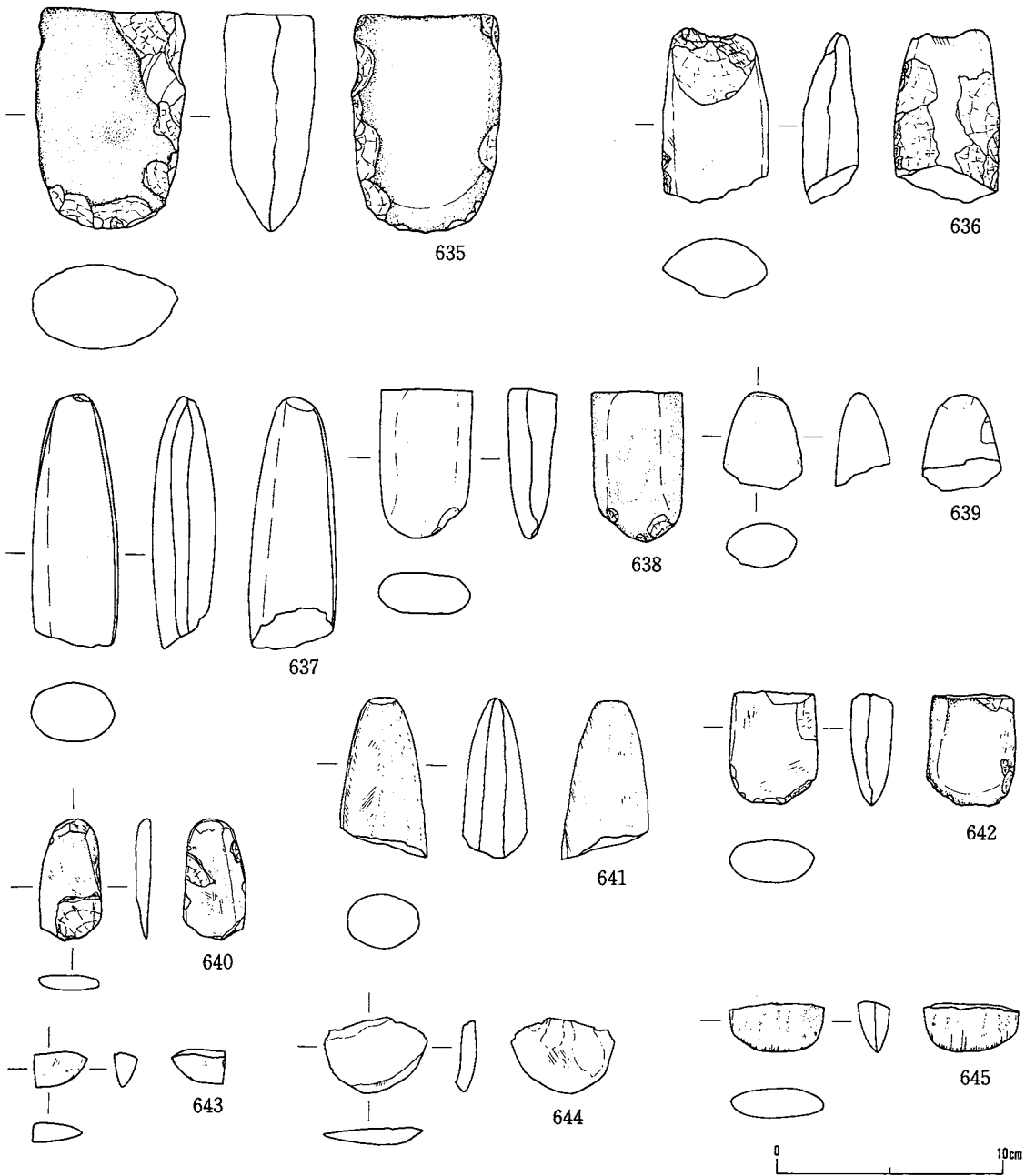
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
620	E III 8 <sub>1</sub> I層下部	打製石斧	90	82	23	280	硬砂岩		79
621	H I d <sub>1</sub> II層	〃	107	51	20	200	チャート質凝灰岩		〃
622	G III 8 <sub>2</sub> II層	〃	93	68	44	500	硬砂岩		〃
623	G III 8 <sub>1</sub> II層	〃	75	40	18	90	〃		〃
624	C III f <sub>3</sub> I層	〃	24	46	21	30	〃		
625	D III 8 <sub>2</sub> I層	〃	67	33	18	70	輝石珸岩		
626	F III c <sub>4</sub> I層	〃	78	45	29	175	チャート質凝灰岩		
627	H I 1-1住 埋土上部	〃	39	79	26	100	安山岩		

第113図 礫石器(5)



No.	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
628	E III d <sub>1</sub> I層	打製石斧	61	40	20	80	硬砂岩		
629	C III b <sub>1</sub> I層	〃	69	57	23	142	珩岩		
630	D III g <sub>1</sub> II層	〃	82	43	14	60	硬砂岩		
631	E III g <sub>1</sub> II層	〃	74	60	15	85	〃	79	
632	E III f <sub>1</sub> I層	〃	41	41	12	40	〃		
633	C III c <sub>1</sub> II層	〃	55	52	16	95	ホルンフェルス		
634	C III e <sub>1</sub> II層	〃	42	36	15	50	輝石珩岩		

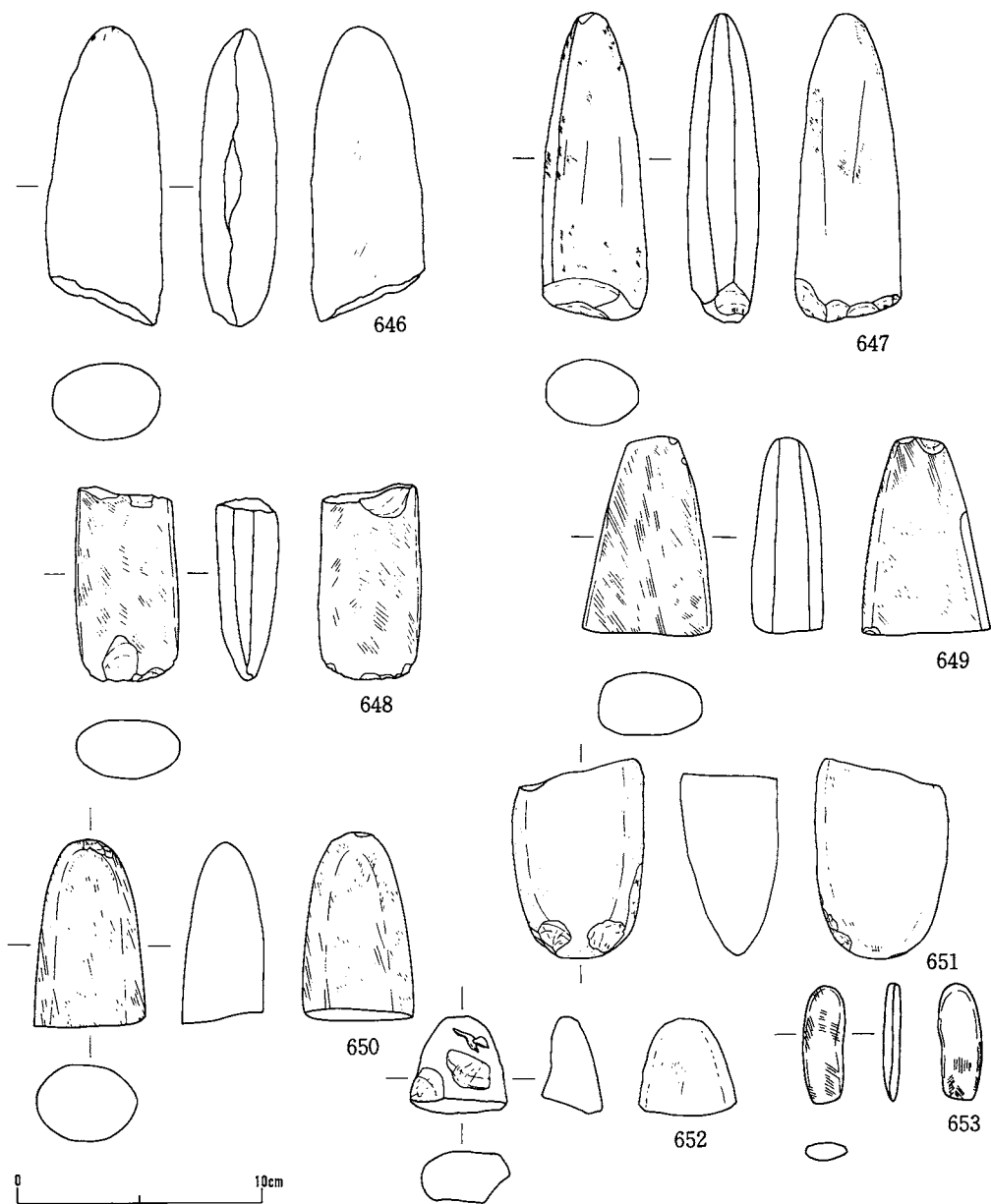
第114図 礫石器(6)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
635	C III h, I層	打製石斧	95	66	40	400	硬砂岩		79
636	C III d, II層	磨製石斧	76	47	25	125	斑岩		//
637	C III h, II層	//	112	38	27	170	輝石安山岩		//
638	F III d, II層	//	65	40	13	110	硬砂岩		
639	H II b, I層	//	42	35	23	45	粉岩		
640	E III a, I層	//	53	28	70	20	粘板岩		
641	C III h, I層	//	66	38	29	100	チャート質凝灰岩		
642	E III d, I層	//	48	49	18	65	硬砂岩		
643	E III d, II層	//	15	23	10	8	チャート質凝灰岩		
644	H II d, I層	//	33	45	7	20	硬砂岩		
645	C III e, II層	//	21	42	12	20	//		

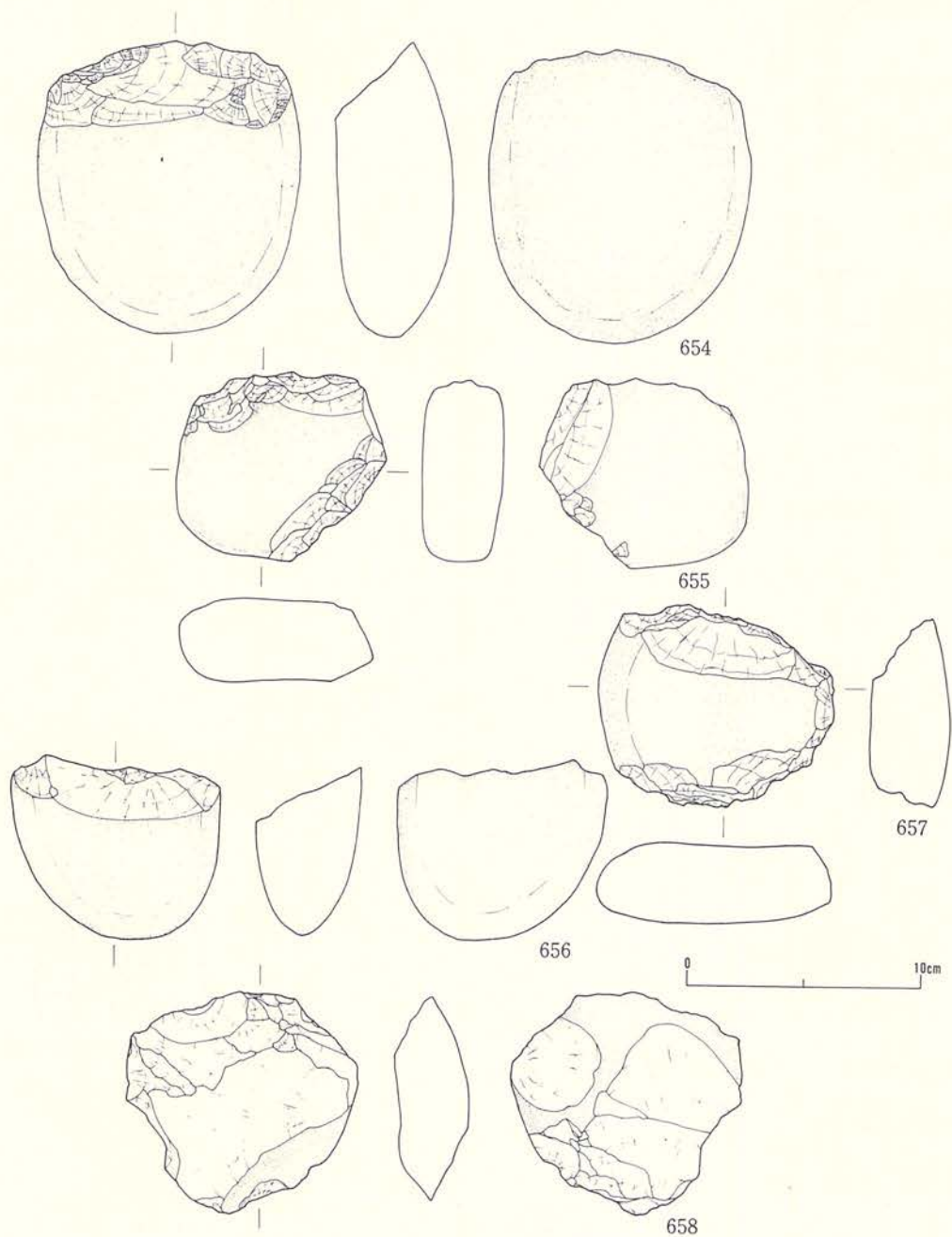
第115図 礫石器(7)





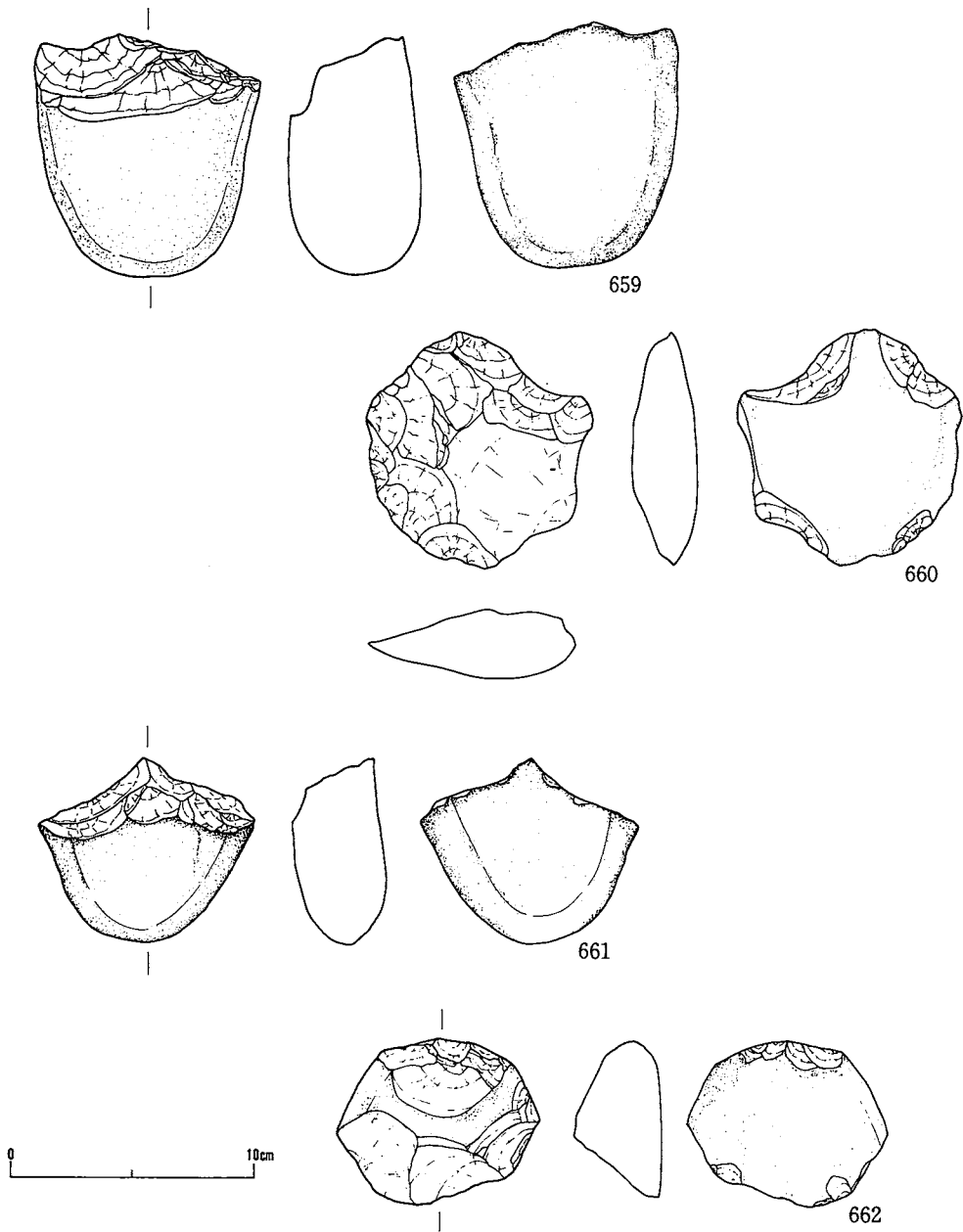
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
646	CIIIe, I層	磨製石斧	115	47	30	270	硬砂岩		80
647	EIII d, I層	〃	123	43	27	250	〃		〃
648	GIII c, II層	〃	79	42	26	150	チャート質凝灰岩		
649	EIII e, II層	〃	81	53	28	205	硬砂岩		
650	DIII-1住 埋土	〃	76	41	31	180	〃		
651	DIII-4住 埋土	〃	76	53	36	260	〃		
652	CIII d, I層	〃	39	40	25	52	チャート質凝灰岩		
653	CIII c, II層	〃	48	17	7	13	粘板岩		80

第116図 礫石器(8)



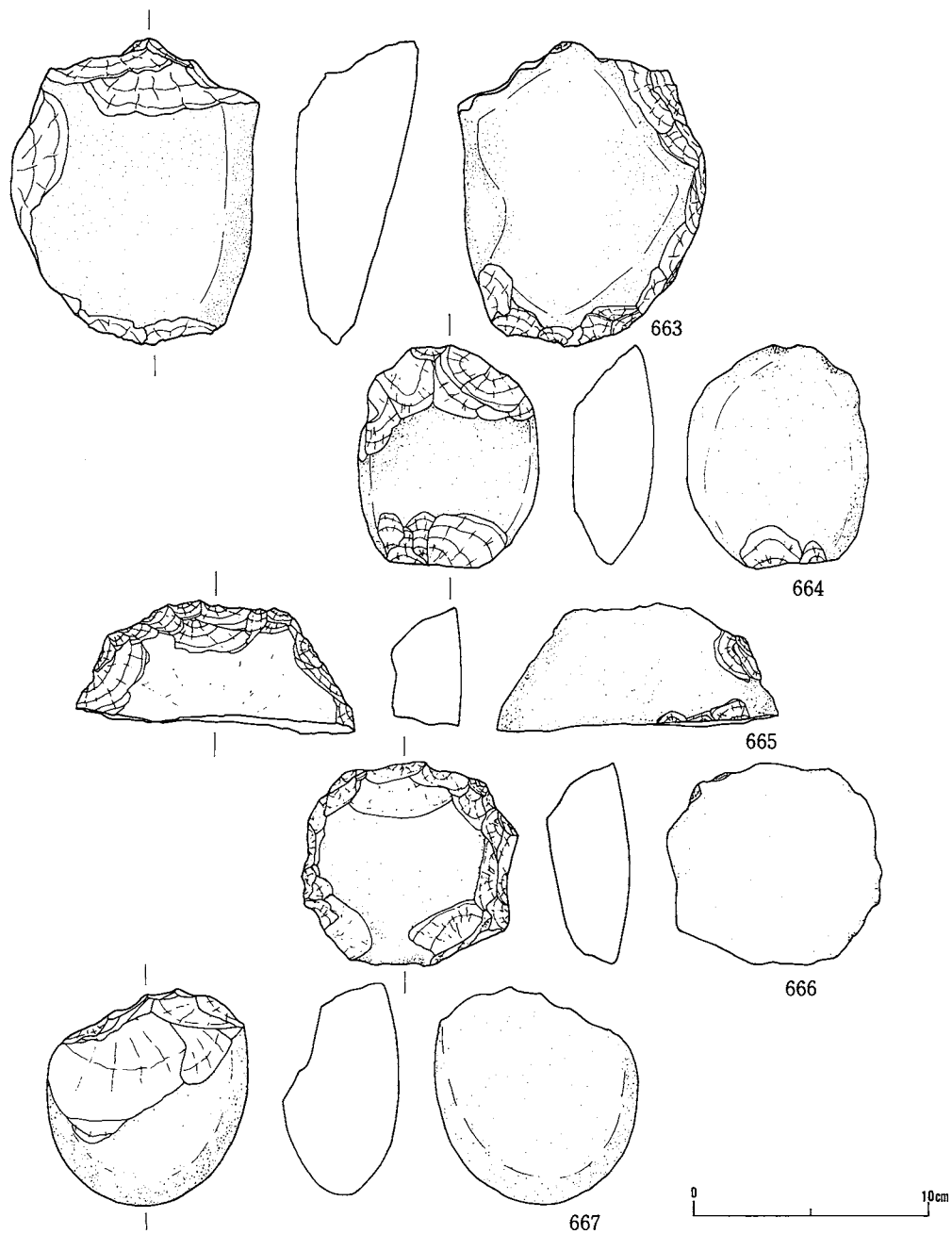
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
654	G III a <sub>1</sub> I層	礫器 I 類	124	112	49	920	硬砂岩	I-0	
655	G II-1 住 埋土	〃	81	88	35	395	長石粉岩	〃	80
656	F III j <sub>2</sub> II層	〃	73	89	44	370	輝石粉岩	〃	
657	F III i <sub>5</sub> II層	〃	81	101	35	450	硬砂岩	〃	80
658	F III g <sub>5</sub> I層	〃	95	89	33	305	輝石★岩	〃	〃

第117図 礫石器(9)



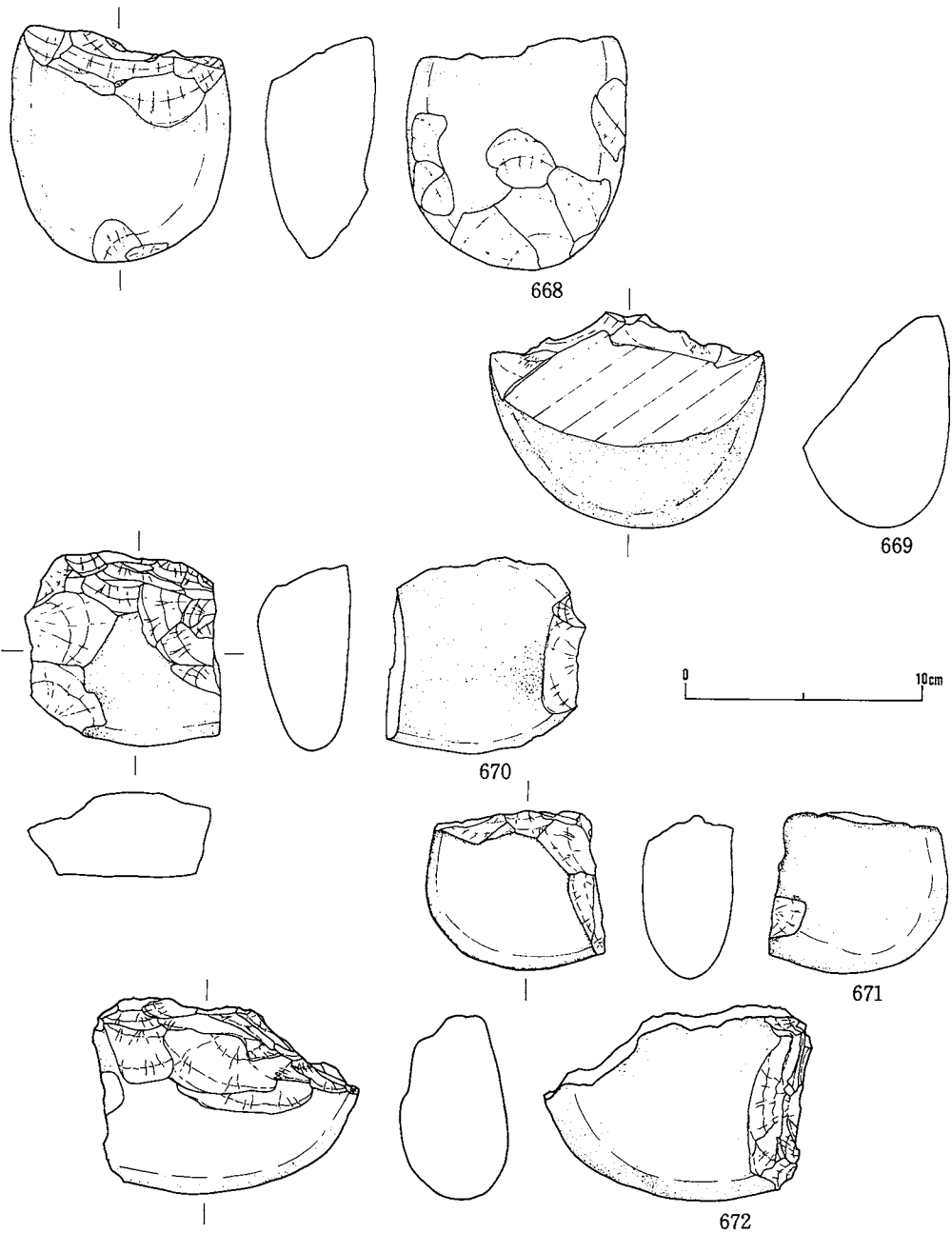
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
659	GIII b, I・II層	礫器 I 類	99	93	54	650	チャート質礫灰岩	I-0	81
660	GIII a, I・II層	〃	95	93	29	260	硬砂岩	〃	80
661	GII j, I層	〃	76	89	36	265	流紋岩	〃	〃
662	FIII e, II層	〃	66	82	34	215	硬砂岩	〃	〃

第118図 礫石器(10)



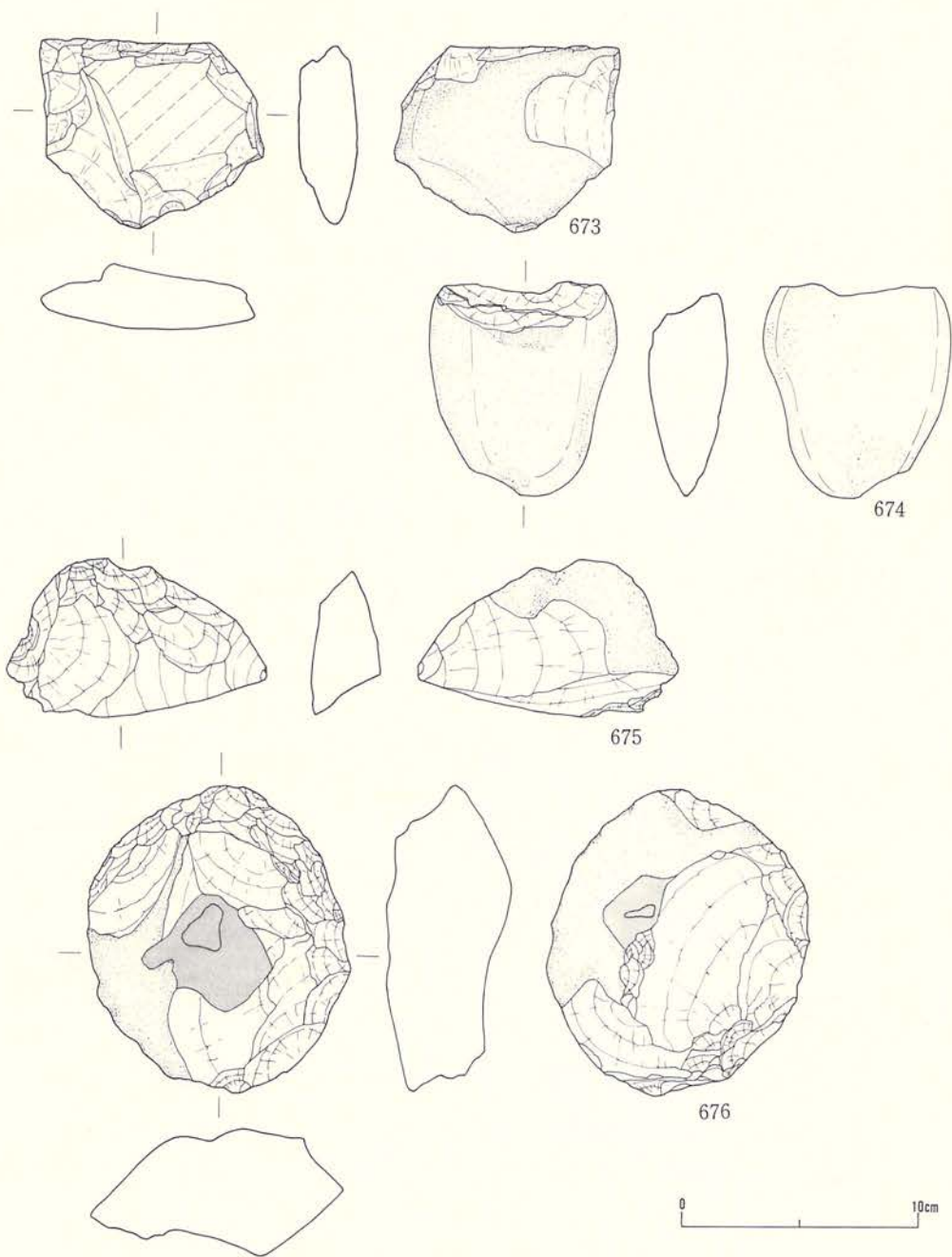
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
663	E III f, II層	礫器 I 類	130	102	46	880	硬砂岩	I-0	81
664	F III e, II層	〃	94	76	33	365	安山岩	〃	80
665	G III b, II層	〃	51	118	28	240	流紋岩	〃	
666	表採	〃	87	89	32	420	不明	〃	81
667	F III-3 住 床面	〃	90	85	49	469	硬砂岩	〃	80

第119図 礫石器 (11)



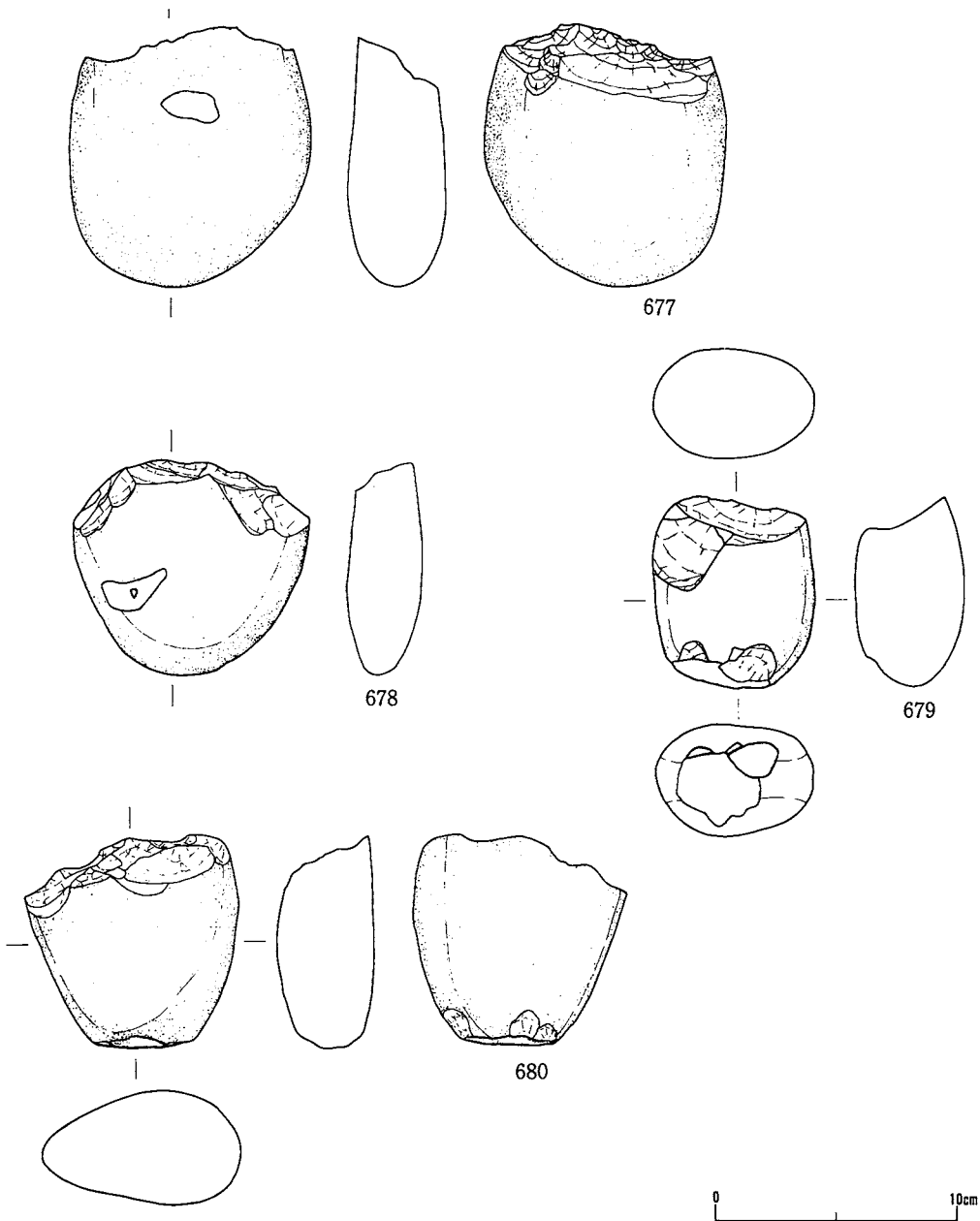
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
668	G II-1 住 床面直上	礫器 I 類	97	93	42	599	流紋岩	I-0	81
669	D III h, II 層	〃	89	116	58	710	閃緑岩	〃	〃
670	C III d, II 層	〃	80	80	39	375	斑礫岩	〃	〃
671	F III b, I 層	〃	72	67	37	340	安山岩	〃	〃
672	E III f, I 層	〃	108	81	45	630	輝石礫岩	〃	82

第120図 礫石器(12)



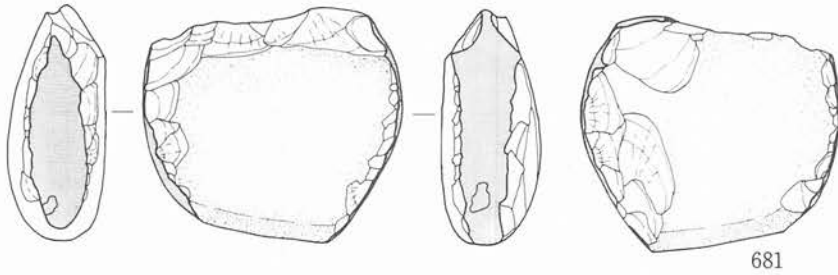
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
673	G II h <sub>2</sub> II層	礫器 I 類	91	78	25	220	ホルンフェルス	I-0	
674	F III h <sub>2</sub> II層	//	85	79	33	310	硬砂岩	//	81
675	G III c <sub>2</sub> I層	//	110	66	34	290	//	//	
676	E III g <sub>6</sub> II層下部	//	129	111	56	930	//	//	82

第121図 礫石器 (13)

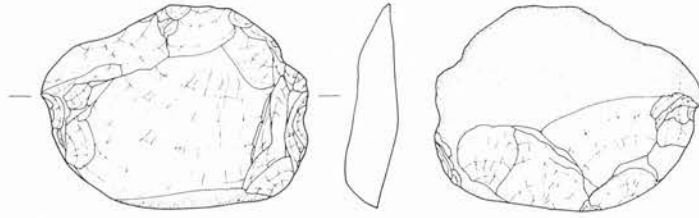


No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
677	F III j. I・II層	礫器 I 類	108	70	40	590	チャート質凝灰岩	I-1	82
678	E III f. II層下部	〃	89	98	32	430	珩岩	〃	〃
679	C III c. II層	〃	77	67	45	335	安山岩	〃	〃
680	H II b. 附近 I a層	〃	88	88	47	500	硬砂岩	I-2	〃

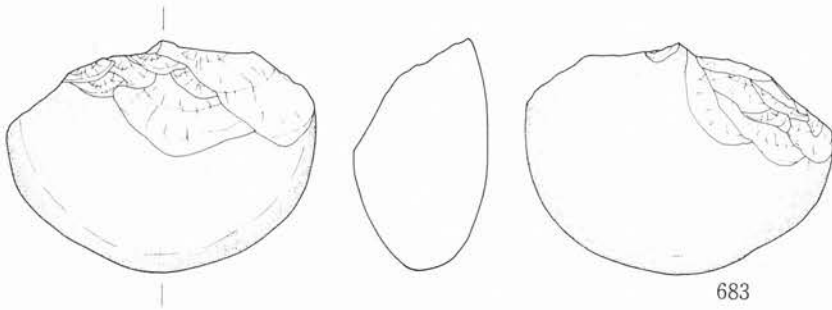
第122図 礫石器(14)



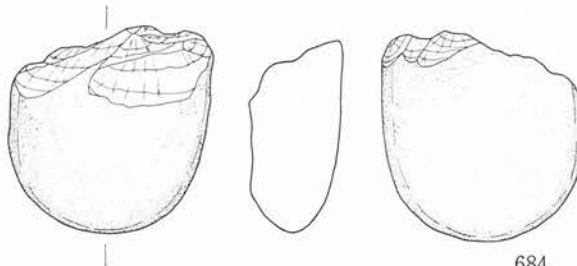
681



682



683

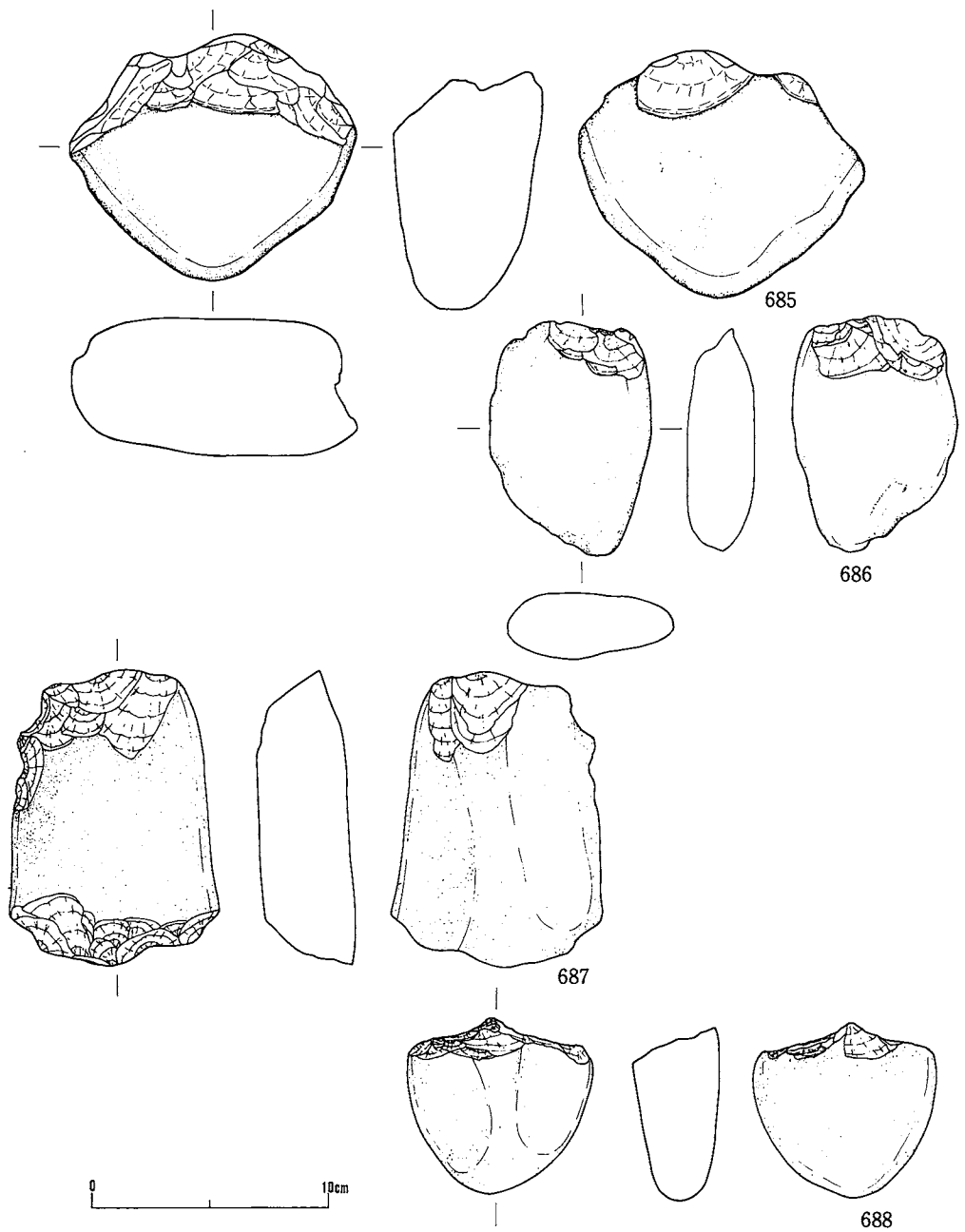


684

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
681	G III C <sub>3</sub> II層	礫器 I 類	104	94	40	680	チャート質淡緑色凝灰岩	I-3	82
682	E III a <sub>4</sub> II層	〃	82	107	16	180	粘板岩	I-0	83
683	I III B <sub>5</sub> II層	〃	93	124	53	730	流紋岩	〃	〃
684	G III B <sub>2</sub> II層	〃	81	80	35	410	輝石粉岩	〃	〃

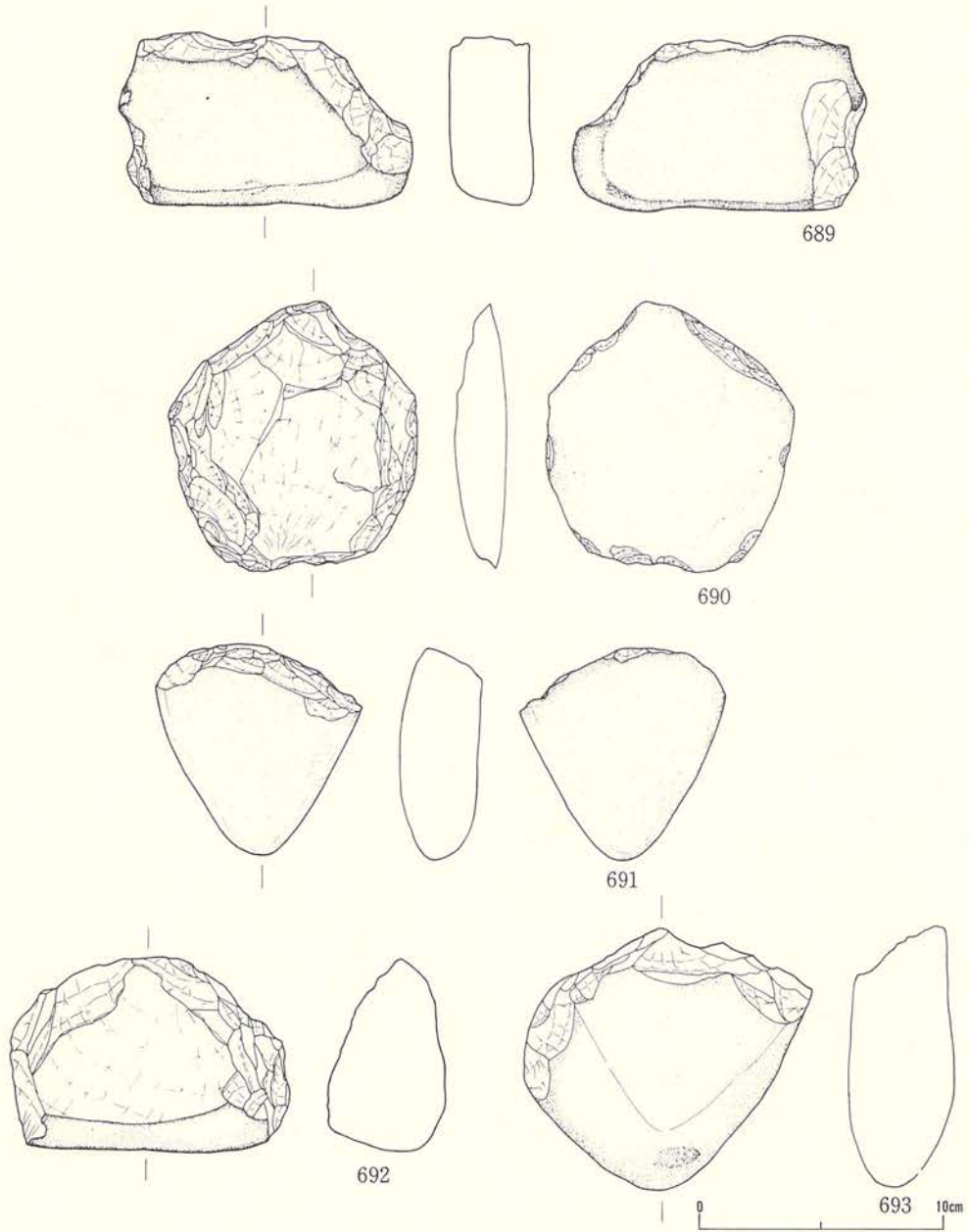
第123図 礫石器 (15)





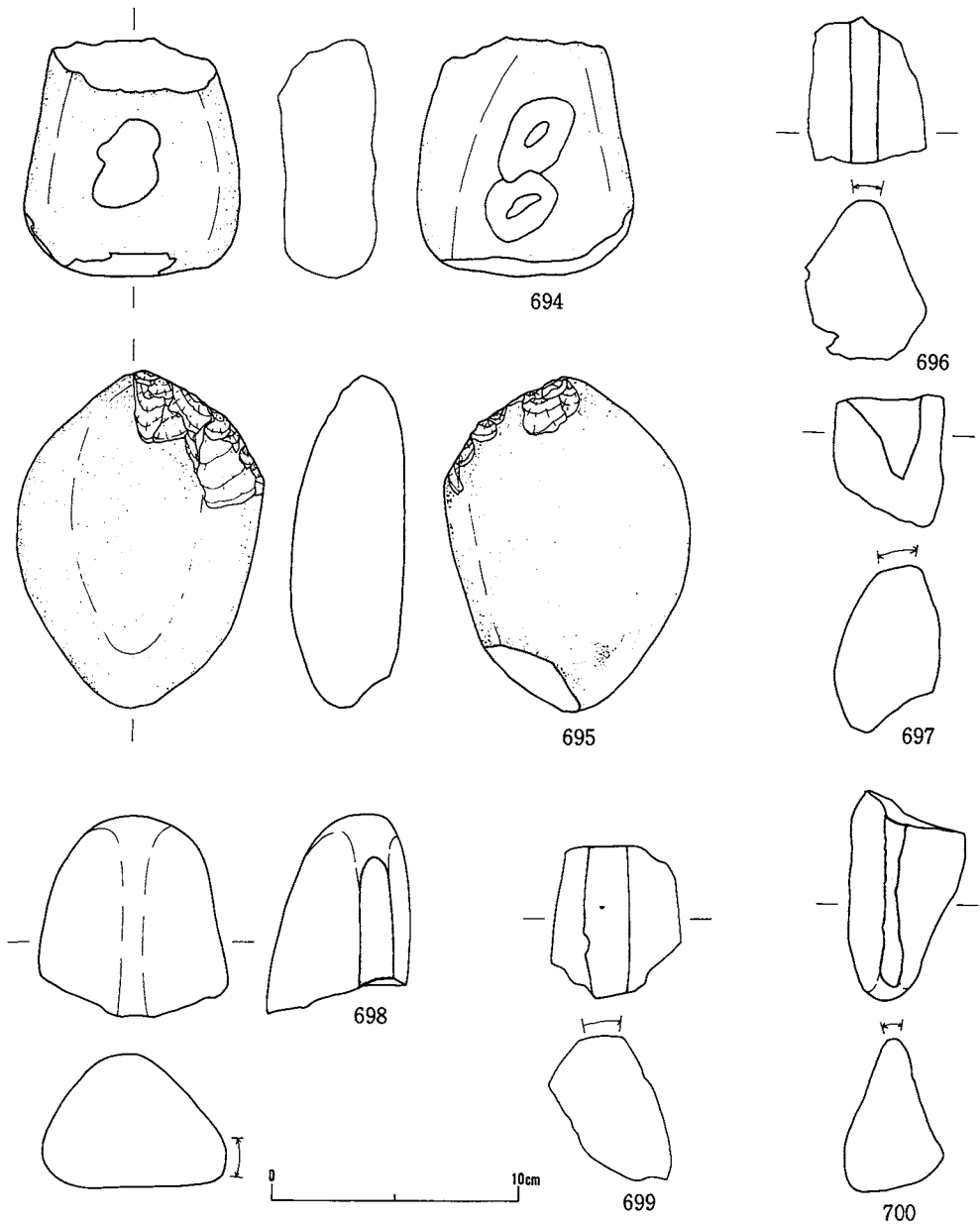
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
685	C III e <sub>3</sub> II層	礫器 II 類	105	100	60	970	ホルンフェルス	II-0	83
686	C III h <sub>a</sub>	//	95	68	28	270	粘板岩	//	//
687	F III g <sub>a</sub> II層	//	124	89	39	700	輝石珸岩	//	//
688	G III e <sub>a</sub> II層	礫器 III 類	73	73	32	255	硬砂岩	III-0	//

第124図 礫石器 (16)



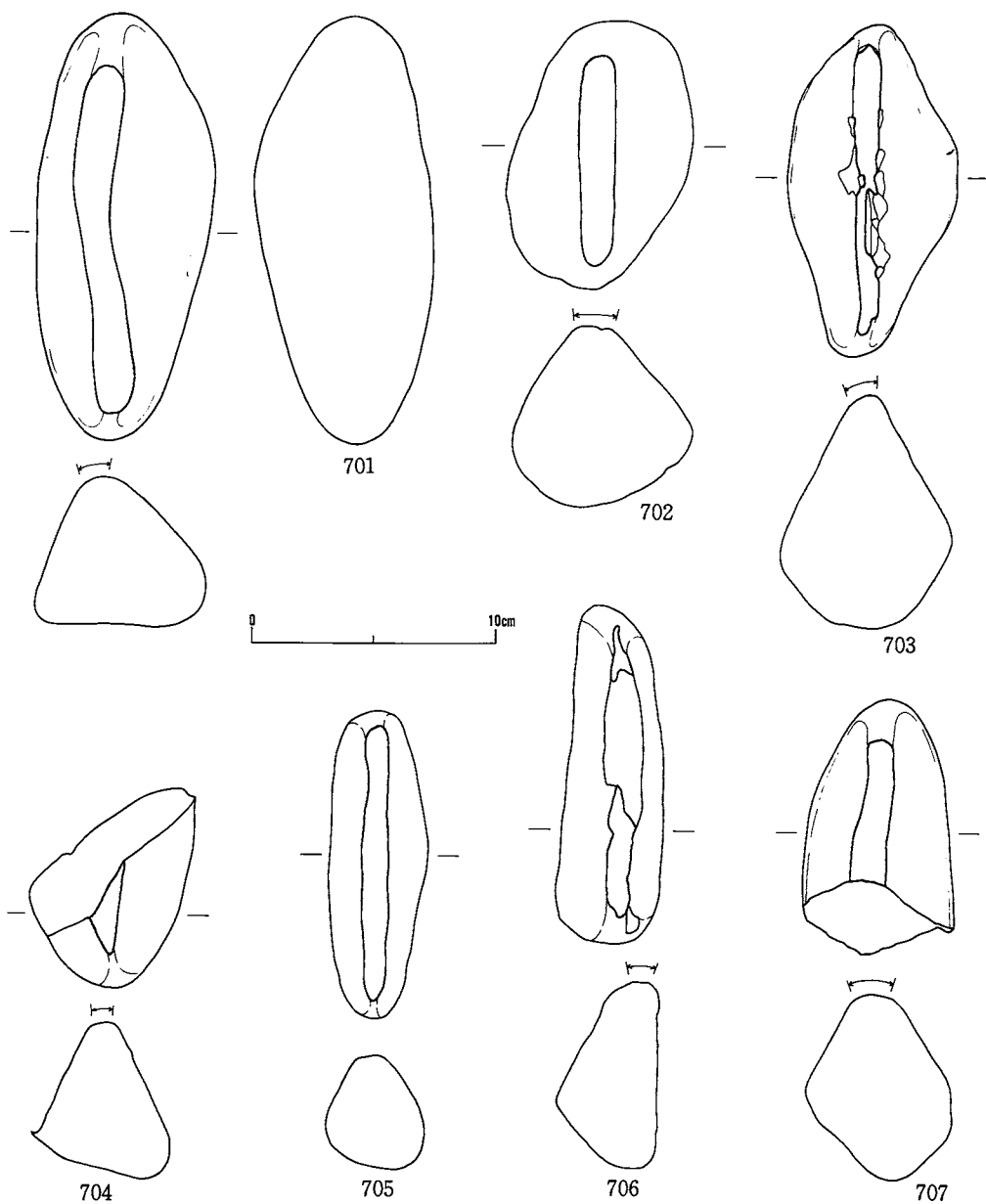
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
689	FIII e <sub>3</sub> I層	礫器 III類	120	70	34	550	輝石玢岩	III-0	84
690	EIII f <sub>3</sub> I層	"	107	102	20	290	粘板岩	"	"
691	FIII f <sub>3</sub> II層	"	86	84	33	310	輝石玢岩	"	"
692	FIII i <sub>3</sub> II層	"	79	112	48	615	硬砂岩	"	"
693	EIII g <sub>7</sub> II層下部	"	107	95	44	770	輝石玢岩	"	"

第125図 礫石器 (17)



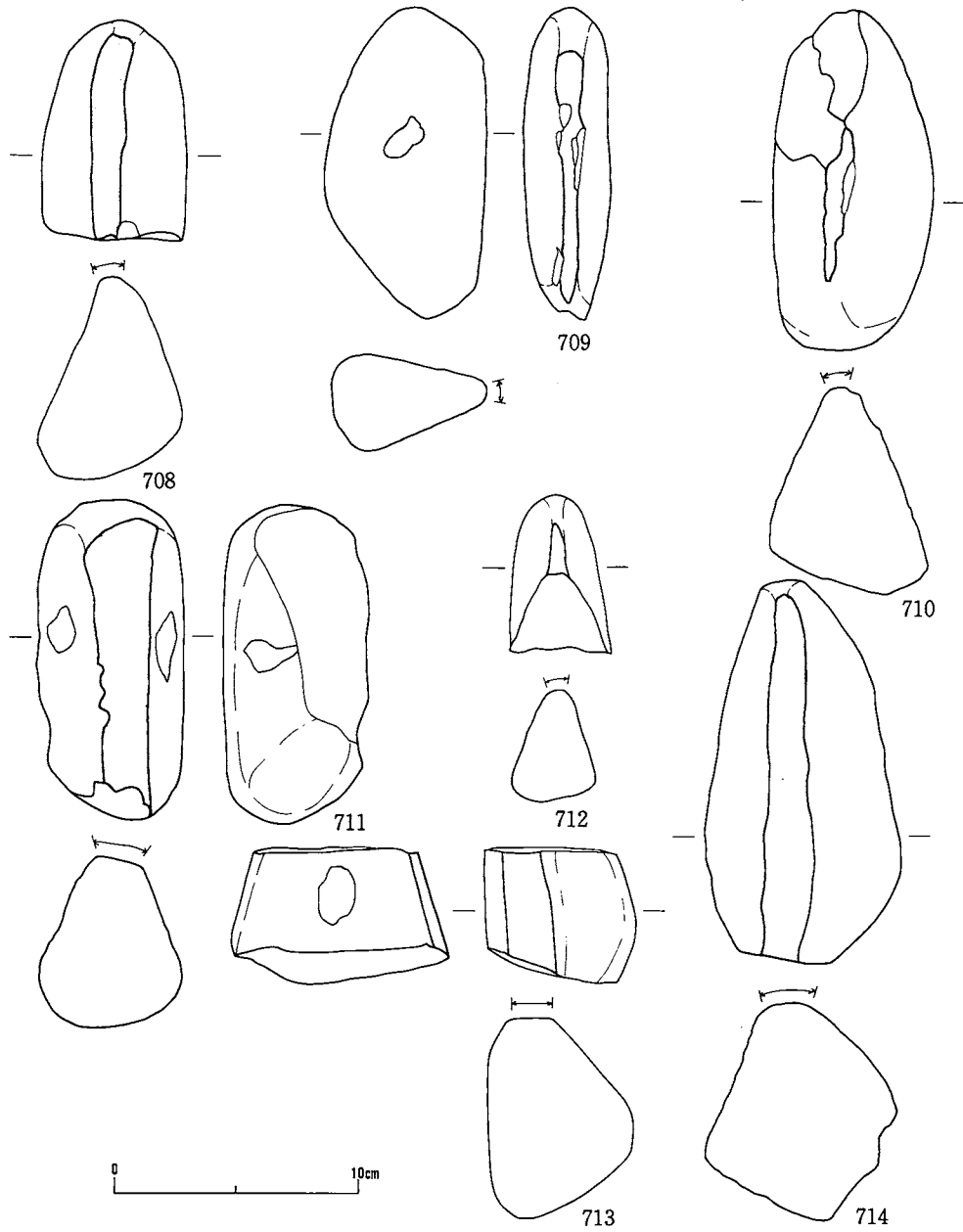
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
694	F III h. I層	礫器 III 類	96	88	38	560	輝石玢岩	III-1	84
695	D III h. II層	〃	136	94	45	850	粘板岩	III-2	〃
696	H I f. I.層	磨石	59	47	63	180	花崗閃綠岩	磨石 I-0	
697	D III i. I層	〃	53	43	60	220	閃綠岩	〃	
698	F III h. I層	〃	80	77	54	445	花崗閃綠岩	〃	
699	I III e. II層	〃	61	51	55	180	流紋岩	〃	
700	D III j. I層	〃	85	46	60	270	硬砂岩	〃	

第126図 礫石器 (18)



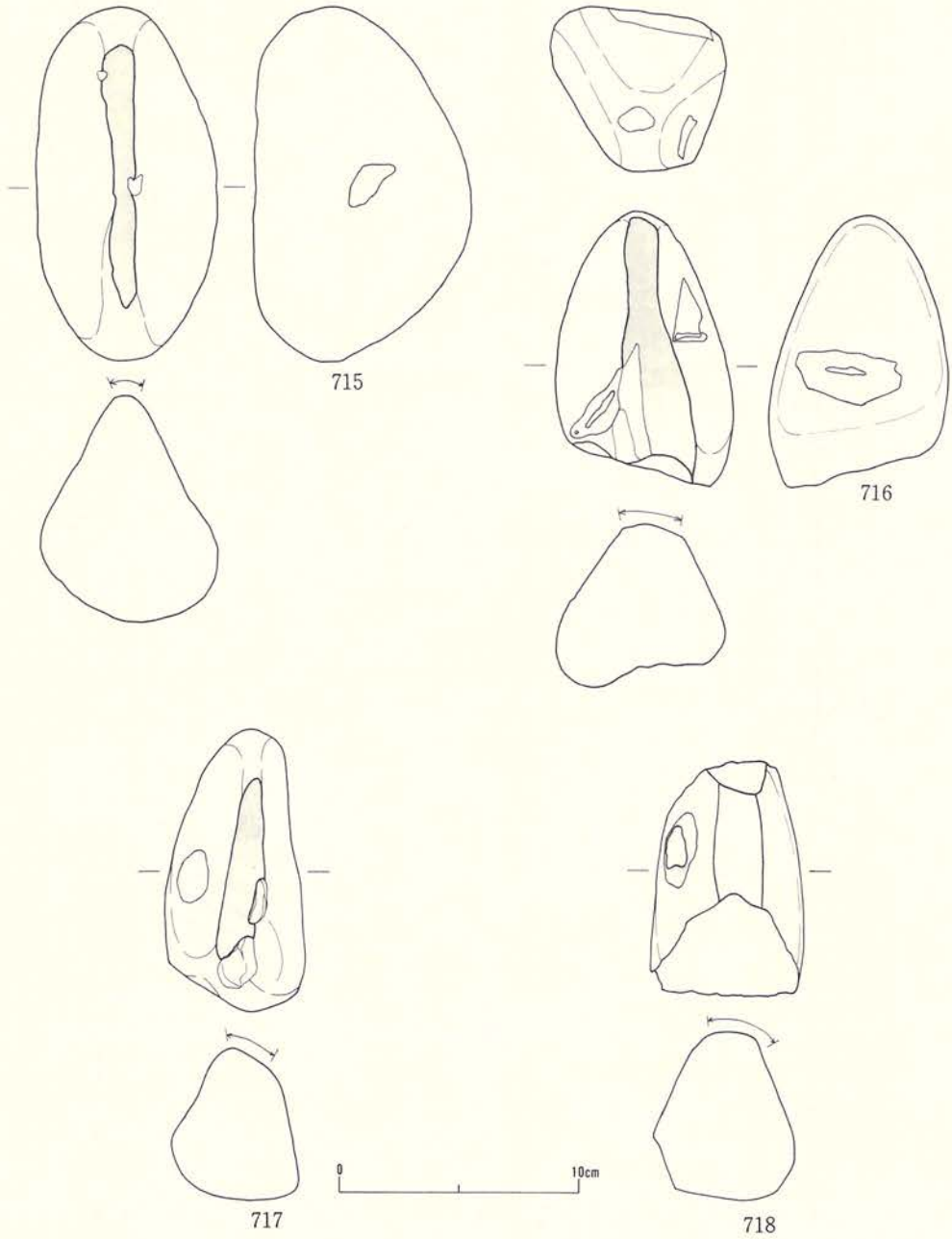
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
701	E III e <sub>3</sub> II層	磨石	174	73	60	1.130	花崗閃緑岩	磨石 I-0	84
702	F III g <sub>3</sub> I層	〃	110	75	80	750	チャート	〃	85
703	F III h <sub>3</sub> II層下部	〃	135	70	96	910	花崗閃緑岩	〃	〃
704	D III h <sub>4</sub> II層下部	〃	82	67	58	360	硬砂岩	〃	〃
705	G III c <sub>2</sub> II層	〃	126	40	44	310	〃	〃	85
706	F III g <sub>3</sub> II層	〃	138	42	76	565	〃	〃	〃
707	H II b <sub>4</sub> II層	〃	102	62	75	150	〃	〃	〃

第127図 礫石器 (19)



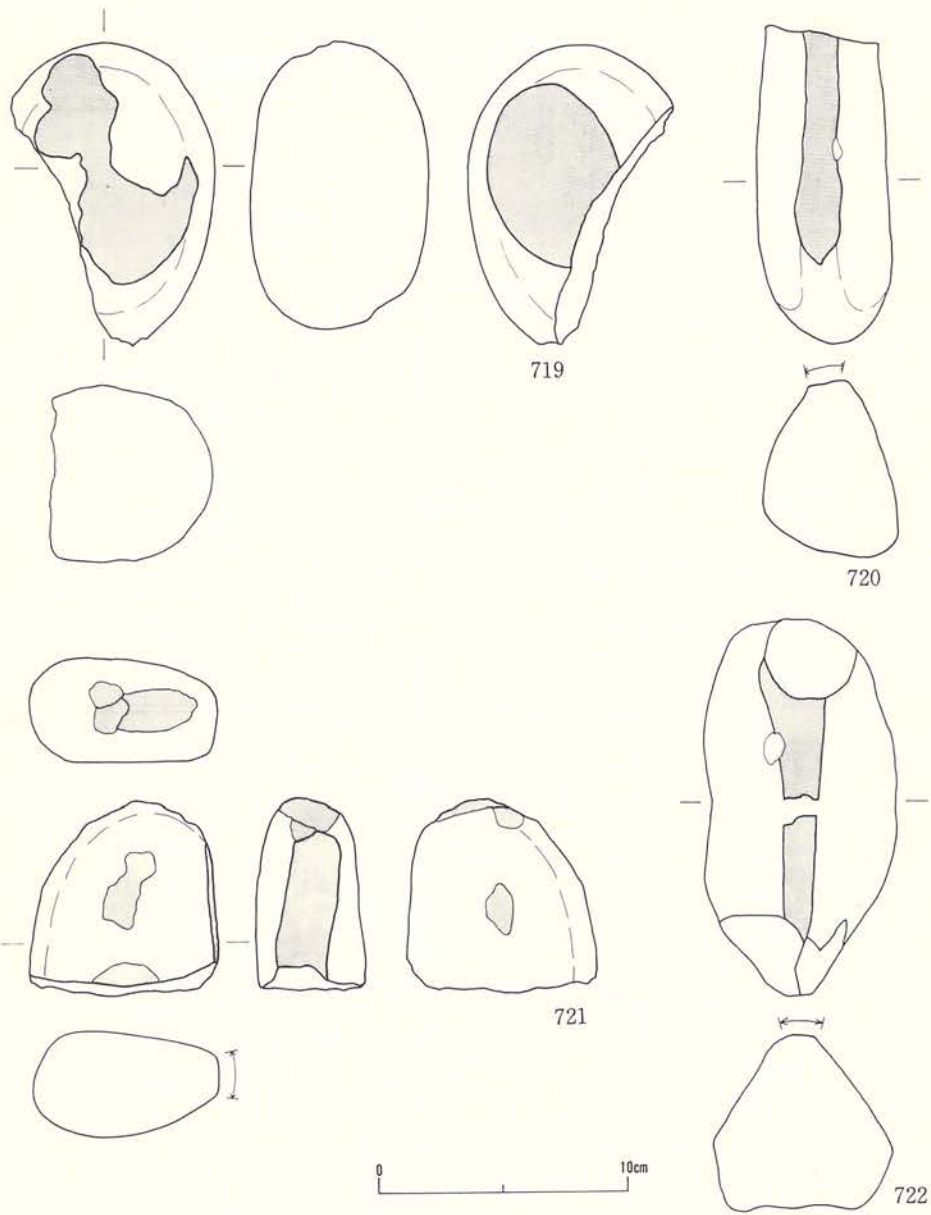
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
708	G II-3 住	磨石	89	59	80	640	花崗閃緑岩	磨石 I-0	
709	F III e, II 層	〃	127	66	39	405	硬砂岩	〃 I-1	85
710	G III c, II 層	〃	139	65	63	935	花崗閃緑岩	〃 I-0	〃
711	F III i, II 層下部	〃	130	71	59	825	アルコース砂岩	〃 I-1	〃
712	F III-4 住	〃	63	39	45	135	硬砂岩	〃 I-0	
713	H II d e, I a 層	〃	52	60	82	420	〃	〃 I-1	
714	D III f, I a 層	〃	155	80	88	1,150	ホルンフェルス	〃 I-0	85

第128図 礫石器(20)



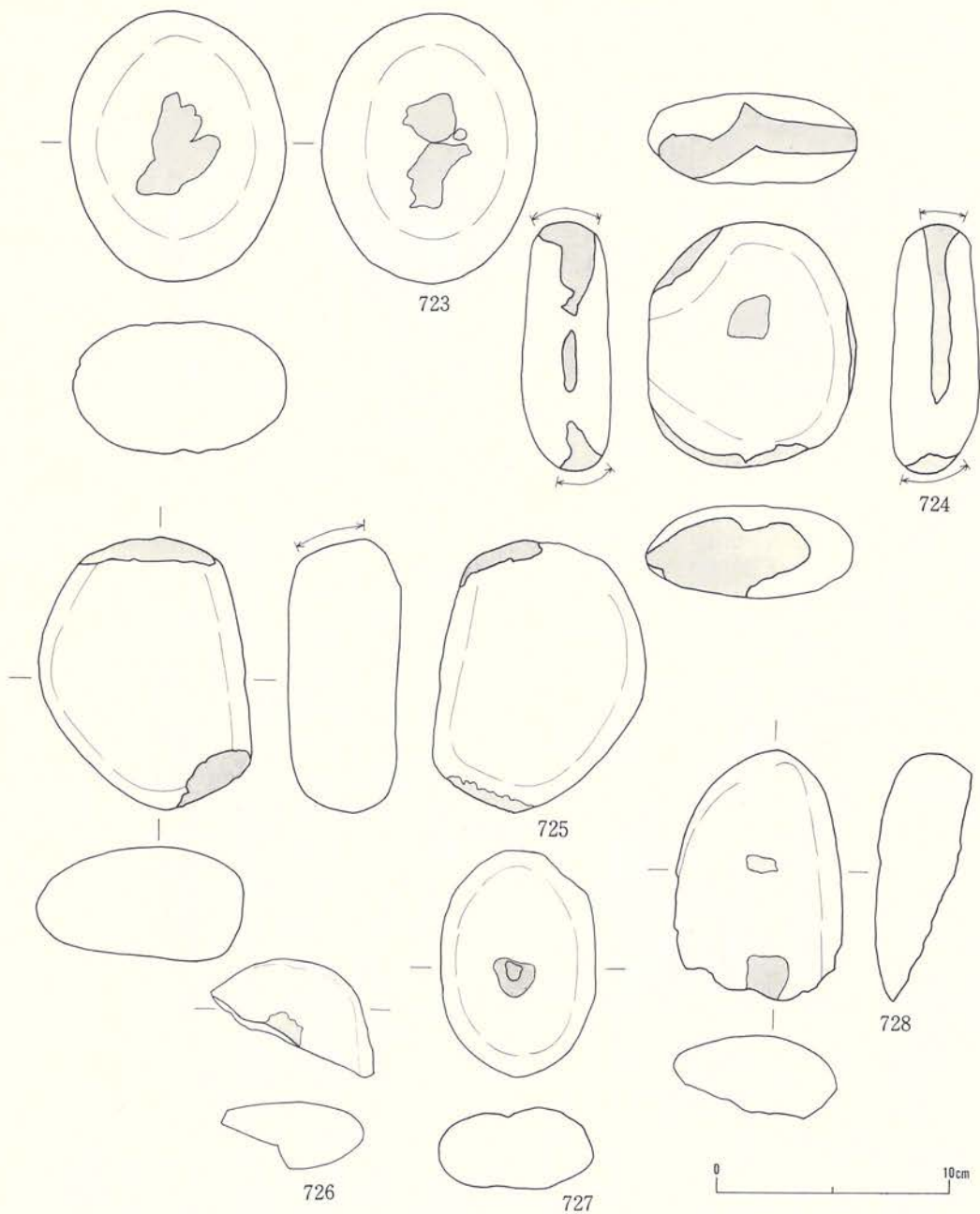
No.	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
715	FIII h <sub>5</sub> II層下部	磨石	147	75	73	1,320	花崗閃緑岩	磨石1-1	85
716	DIII i <sub>3</sub> I層	〃	114	73	60	600	硬砂岩	〃	86
717	FIII e <sub>4</sub> I層	〃	118	57	62	680	安山岩	〃	〃
718	H I g <sub>7</sub> I <sub>o</sub> 層	〃	98	64	68	550	流紋岩	〃	〃

第129図 礫石器(21)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
719	CIIIe <sub>3</sub> II層	磨石	121	82	70	770	花崗閃緑岩	磨石II	
720	HIc <sub>7</sub> II層	//	128	53	70	740	石英斑岩	// I-2	86
721	FIIIa <sub>4</sub> II層	//	76	75	41	355	硬砂岩	// I-3	
722	GIIIc <sub>3</sub> II層	//	150	75	72	1,060	花崗閃緑岩	// I-2	86

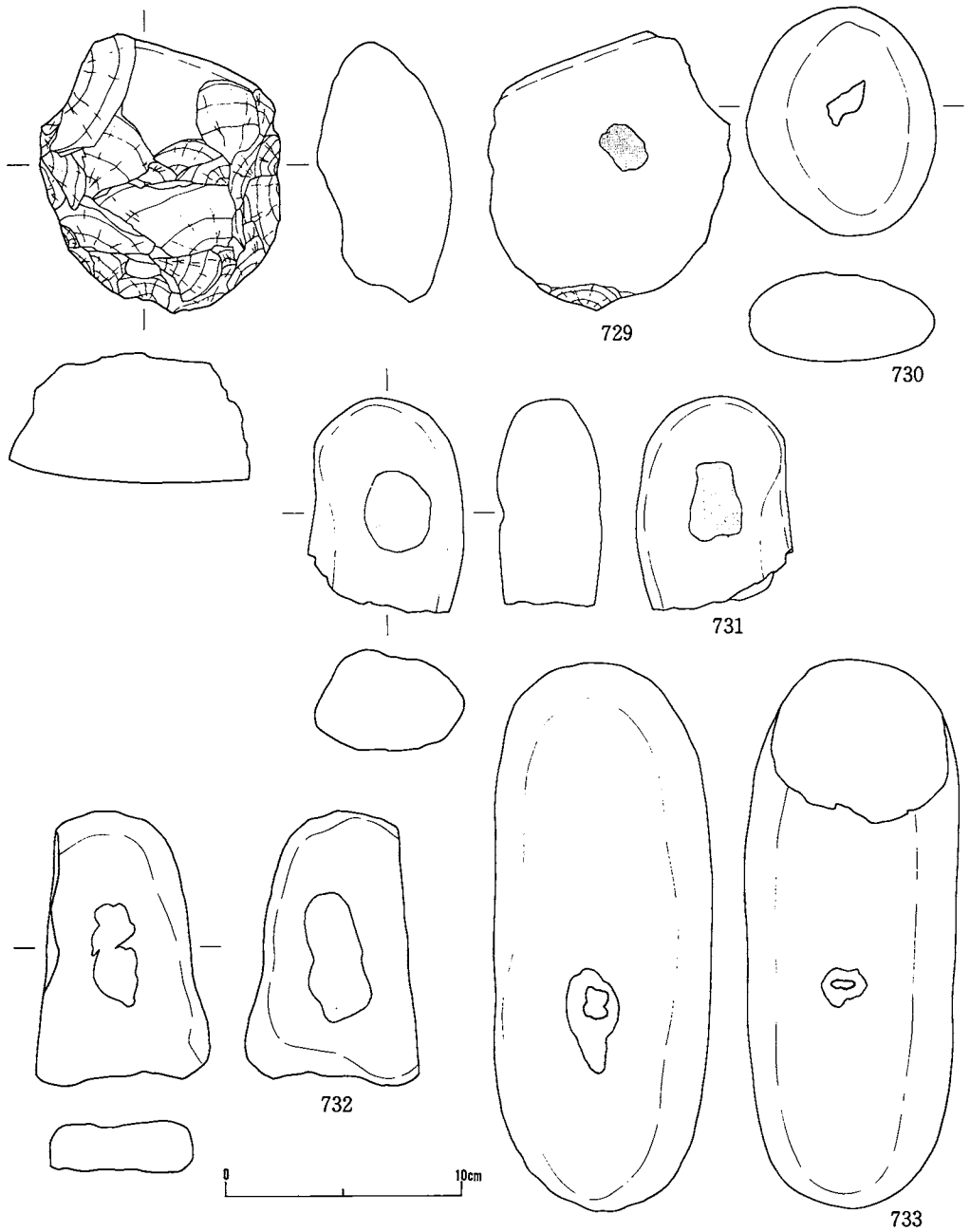
第130図 礫石器(2)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
723	F III h <sub>2</sub> II層下部	磨石	115	93	55	940	花崗閃緑岩	磨石II-1	86
724	D III h <sub>4</sub> I層	"	104	88	36	600	硬砂岩	"	"
725	G III d <sub>4</sub> II層	"	117	88	46	730	"	磨石II-2	"
726	C III e <sub>3</sub> I層	凹石	40	61	29	85	安山岩	凹石-0	"
727	C III f <sub>3</sub> I層	"	97	66	36	360	流紋岩	"	86
728	G II-1住 埋土中部	"	107	70	32	320	硬砂岩	"	"

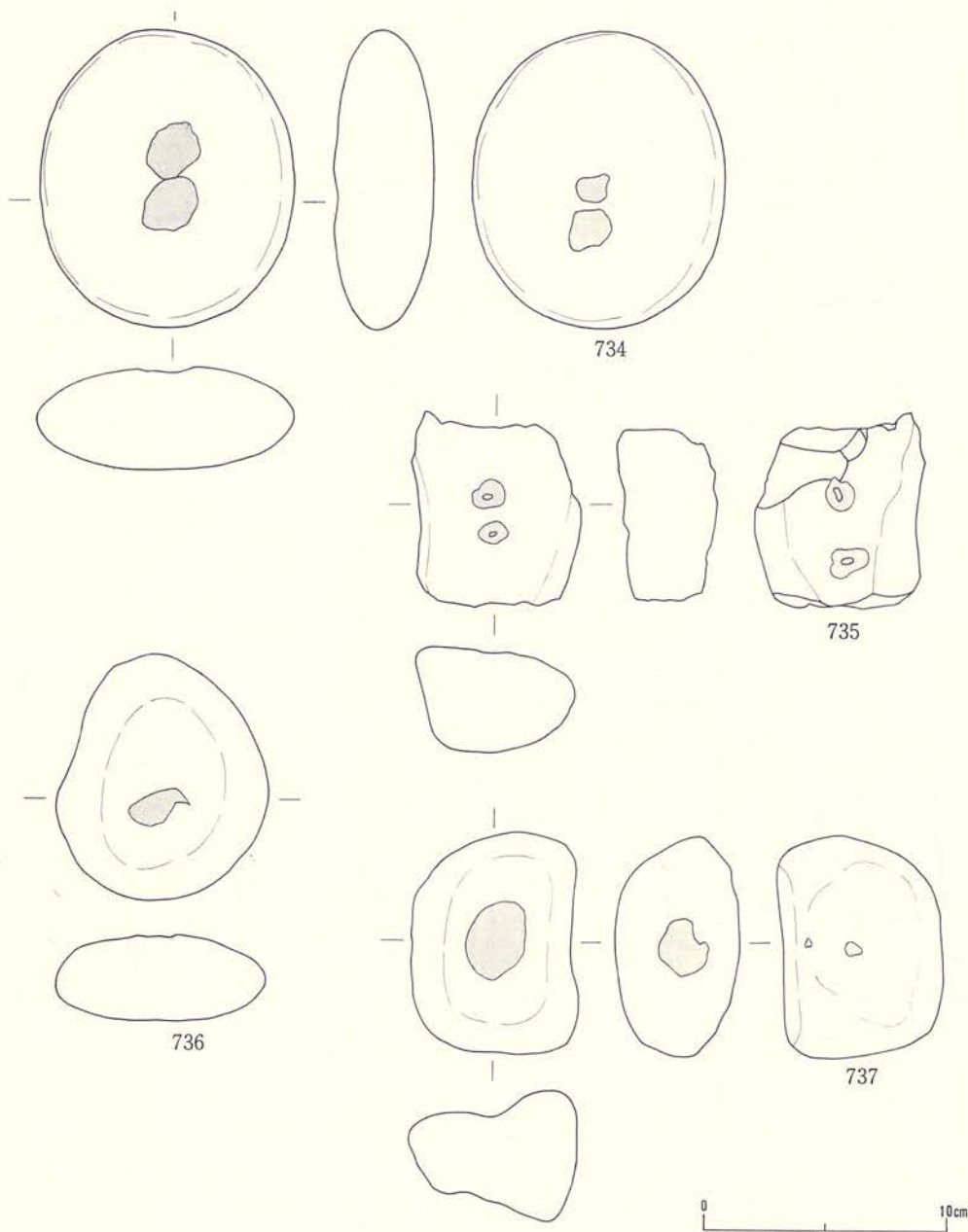
第131図 礫石器(23)





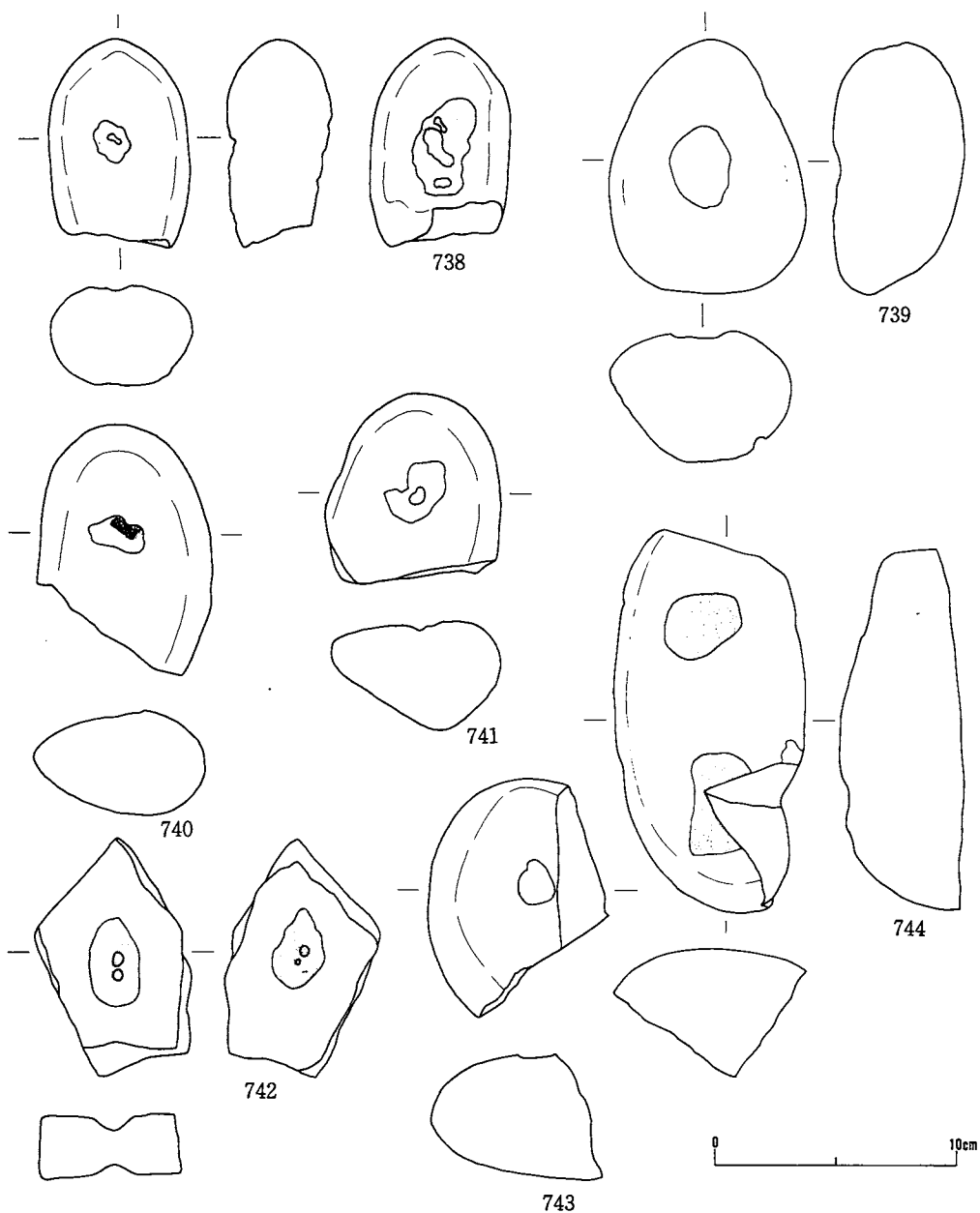
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
729	CIIIc, I層	凹石	111	101	56	770	硬砂岩	凹石--0	87
730	DIIIi3, I層	〃	96	80	38	410	〃	〃	86
731	EIII d, I層	〃	87	66	42	360	流紋岩	〃	
732	EIIIc, I層	〃	112	73	22	435	ホルンフェルス	〃	
733	CIIIe, II層	〃	231	87	94	2,510	硬砂岩	〃	87

第132図 礫石器(24)



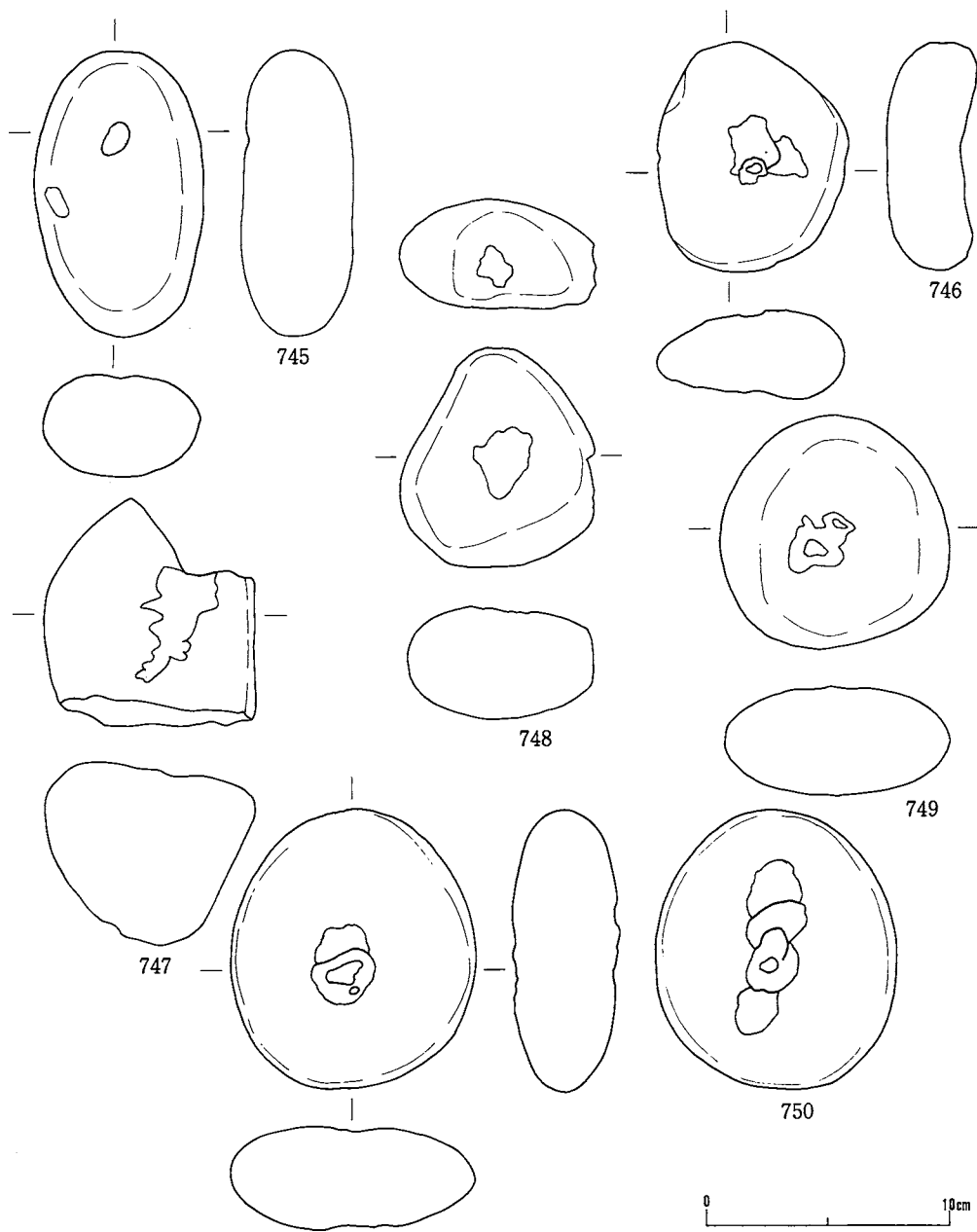
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
734	F III h <sub>3</sub> , II層	凹石	122	105	42	810	アルコース砂岩	凹石-0	87
735	E III b <sub>4</sub> , II層	〃	75	63	41	335	流紋岩	〃	〃
736	D III f <sub>3</sub> , I層	〃	101	87	35	430	硬砂岩	〃	〃
737	C III j, I層	〃	91	68	53	390	〃	〃	〃

第133図 礫石器 (25)



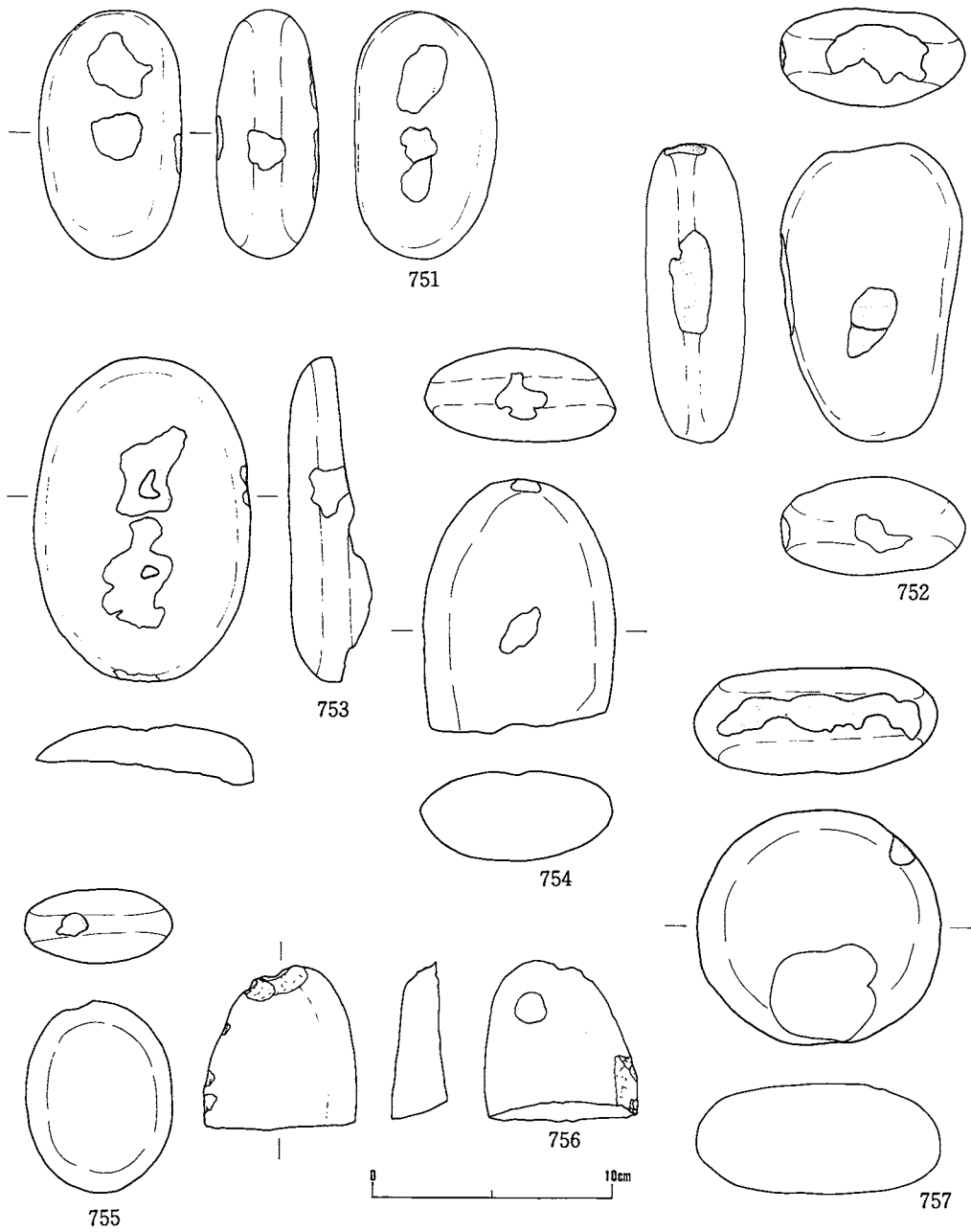
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
738	D III e f <sub>34</sub> , I o層	凹石	82	57	41	305	閃緑岩	凹石-0	
739	C III h <sub>3</sub> , II層	〃	105	80	55	615	花崗閃緑岩	〃	87
740	I III e <sub>3</sub> , II層	〃	90	72	44	450	〃	〃	
741	F III f <sub>4</sub> , I層	〃	76	72	45	360	輝石粉岩	〃	
742	D III g <sub>3</sub> , II層	〃	96	61	26	170	硬砂岩	〃	
743	E III f <sub>4</sub> , I層	〃	93	75	50	435	安山岩	〃	
744	F III e <sub>3</sub> , I層	〃	150	81	51	770	長石粉岩	〃	

第134図 礫石器 (26)



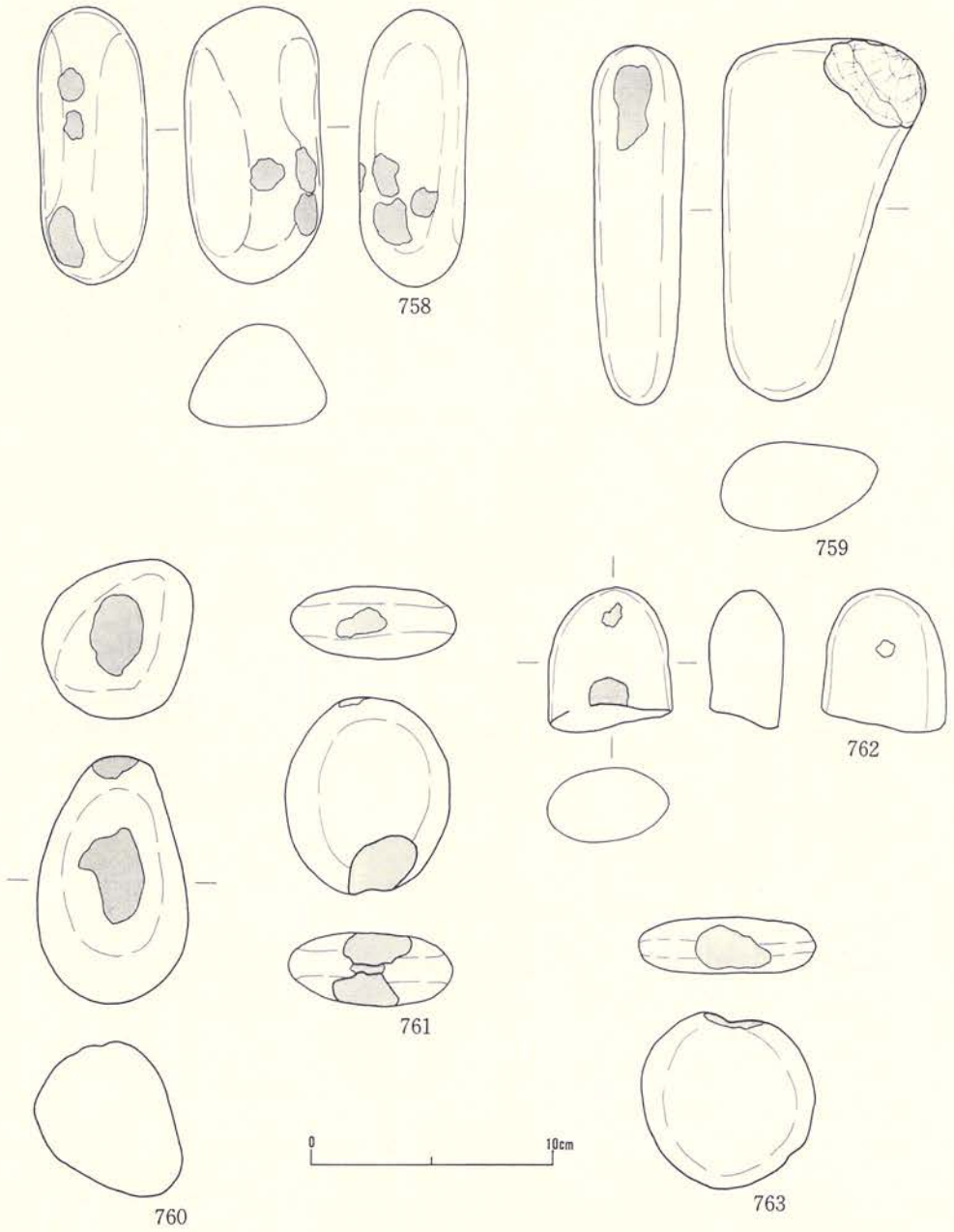
No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
745	C III h, I層	凹石	117	69	46	595	花崗閃緑岩	凹石-0	88
746	D III d, I層	〃	94	79	36	330	硬砂岩	〃	〃
747	G III b, II層	〃	94	87	72	780	閃緑岩	〃	〃
748	E III f, I層	〃	90	80	45	455	流紋岩	〃	88
749	E III e, II層	〃	96	95	34	580	〃	〃	〃
750	F III f, II層下部	〃	115	100	42	730	アルコース砂岩	〃	88

第135図 礫石器 (27)



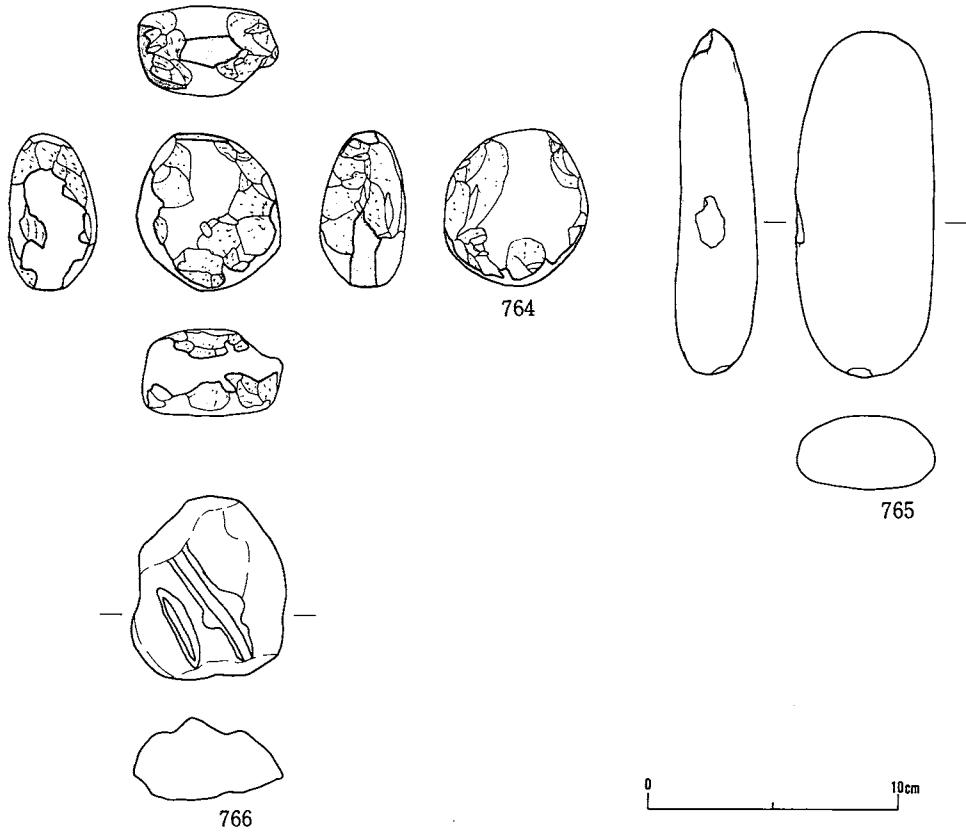
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
751	CIII f. II層	凹石	104	66	42	425	花崗閃緑岩	凹石-1	88
752	EIII d. I層	〃	122	77	41	580	チャート質凝灰岩	〃	〃
753	FIII i. I層	〃	136	91	20	390	半花崗岩	〃	〃
754	DIII i. II層	〃	105	80	37	575	硬砂岩	〃	〃
755	IIII e. II層	敲石	80	61	33	220	〃	たたき	〃
756	DIII b. II層	〃	67	64	18	150	輝石安山岩	〃	〃
757	GIII c. II層	〃	98	102	47	670	半花崗岩	〃	88

第136図 礫石器 (28)



No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
758	C III f <sub>3</sub> II層	敲石	114	57	43	445	硬砂岩	たたき	
759	F III f <sub>6</sub> II層	〃	150	85	37	690	〃	〃	88
760	F III-3 住床面	〃	102	62	64	550	〃	〃	89
761	E III e <sub>3</sub> I層	〃	91	68	31	250	〃	〃	〃
762	D III a <sub>6</sub> I層	〃	58	51	31	140	〃	〃	
763	C III e <sub>4</sub> II層	〃	72	72	23	185	流紋岩	〃	89

第137図 礫石器 (29)

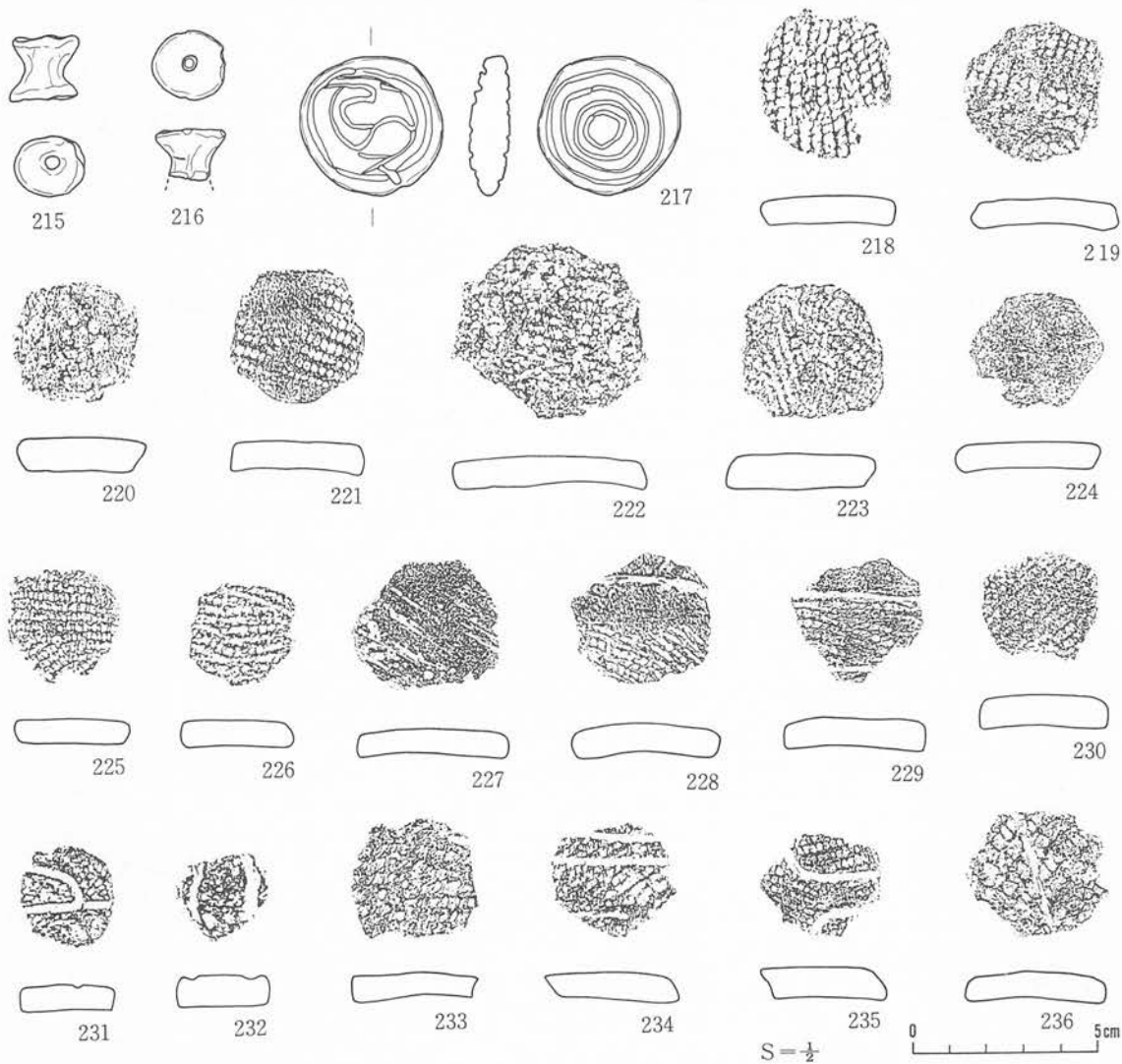


No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
764	F III g. I層	敲石	62	56	35	180	硬砂岩		89
765	F III f. II層	〃	139	55	29	410	輝石玢岩		〃
766	E III b. II層	砥石	73	62	32	180	硬砂岩		〃

第138図 礫石器 (30)







No	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
215	C III j, II層	耳 栓	16	18	—	2.8		53
216	D III-2 埋土	〃	14	19	—	2.2	✳破損	〃
217	D III f, II層	〃	37	39	10	13.6	両面に沈線文	〃
218	E III c, 〃	円盤状土製品	43	37	7	12.4	II群土器素材。周縁を打欠いた後、一部研磨	〃
219	E III区 I <sub>0</sub> 層	〃	40	37	8	14.5	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
220	C III d <sub>1</sub> I層	〃	33	36	10	16.0	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
221	D III-4 煙道部埋土	〃	40	37	8	15.0	II群土器口縁部素材。口唇部を一部残して周縁を打欠く	54
222	D III b, I <sub>0</sub> 層	〃	50	53	7	24.9	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
223	C III d <sub>2</sub> 〃	〃	38	39	10	20.2	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
224	C III e, II層	〃	33	36	8	10.2	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
225	C III i <sub>4</sub> 〃	〃	32	31	6	7.8	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
226	C III e <sub>3</sub> 〃	〃	31	29	8	9.4	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
227	C III c <sub>1</sub> I層	〃	36	41	7	12.2	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
228	C III g <sub>2</sub> II層下部	〃	39	42	8	14.6	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
229	〃	〃	36	39	8	12.0	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
230	D III e f <sub>2</sub> 付近 I <sub>0</sub> 層	〃	31	35	9	12.0	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
231	D III-1 埋土	〃	30	26	7	6.8	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
232	〃 掘り方埋土	〃	24	27	7	6.0	II群土器素材。周縁を打欠く	〃
233	E III e <sub>6</sub> II層	〃	34	35	7	10.2	II群土器素材。周縁を打欠く。方形気味	〃
234	F III f <sub>1</sub> I層	〃	35	36	7	10.2	II群土器素材。周縁を打欠く。方形気味	〃
235	D III i, II層	〃	31	35	8	10.4	II群土器素材。周縁を打欠いた後一部研磨	〃
236	E III b, II層下部	〃	38	38	7	10.9	I群土器口縁部素材。口唇部を一部残して周縁を打欠く	〃

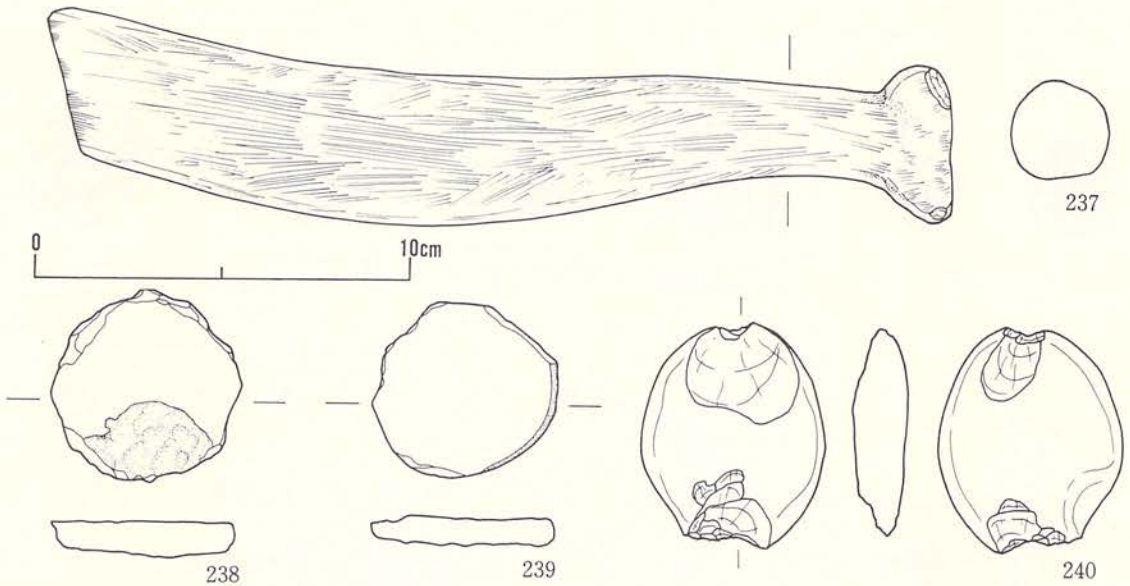
第139図 土製品

片がある。また、小破片のため土製支脚なのかファイゴの羽口なのか識別できない製品がDIII-4・GII-3の2棟の住居跡（ともに平安時代）とGII i 9から1点ずつ出土している。

## 6. 石製品

縄文時代の石製品が遺構内外から出土しているが、器種・点数とも少ない（第140図）。なお琥珀についてはVII-2に記載する。

出土した器種と点数は、石刀1点（237）・円盤状石製品4点（238・239）・石錘1点（240）である。石刀は完形品である。頭部は扁平で、基部へ向って次第に薄くなる。また身部は内反りし、断面形は凸辺ながら楔形になる（刃部は図の上の部分）。円盤状石製品は図示例のほかに2点が出土しているが、すべて周縁を打ち欠くだけの調整である。239は一部に自然面を残す。石錘は遺構外I層から出土している。



No.	地点・層位	器種	計測値：mm			重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
237	CIII d, 地山直上	石 刀	241	40	26	450.0	硬砂岩	完形。全体に擦痕。図天地逆	54
238	DIII-4 埋土	円盤状石製品	51	51	9	25.0	凝灰質砂岩	周縁を打欠く	〃
239	〃 〃	〃	46	49	7	20.0	〃	周縁を打欠くが、一部自然面を残す	〃
240	FIII j, I層	石 錘	59	49	13	58.2	アルコース砂岩	両端に挾入部	60

第140図 出土石製品

## VI まとめ(2)―遺構―

### 1. 住居跡

#### (1) 縄文時代

8棟の住居跡が検出されている(表4)。時期別の内訳は、前期6棟・後期2棟である。

##### a. 前期

**分布** 6棟は調査2区のほぼ中央にある開析谷付近に集中する。EⅢ-1住居跡1棟がその北側にあるほかは南側にある。周辺には同時期と推定できるピット類も多い。

**平面形** 隅丸凸辺長方形2棟、隈丸長方形1棟、不整形1棟、重複して一部を失っているためにはっきりしないが、円形基調と推定されるもの2棟である。

**規模・床面積** 推定の床面積になるGⅢ-1住居跡を含め、4棟の床面積が計測できる(図3)。7㎡台2棟、8㎡1棟、29㎡台1棟である。最小と最大の比は1:4.1となる。最大は29.4㎡のGⅢ-2住居跡である。床面積を計測できない2棟は残存部から推定して、10㎡以下のものであろう。

**柱穴** GⅢ-2住居跡は数多くの柱穴状ピットをもつが、規則的な在り方を示さず、配置等は不明である。GⅢ-4住居跡も一部が柱穴になるものと推定できるが、全体については不明である。他は柱穴を伴わない。

**炉** 全形を把握できる3棟は炉を伴わない。

**付属施設** GⅢ-4住居跡は「出入口」と推定されるゆるやかな傾斜面を西壁中央に伴う。

**重複** 当該時期の住居跡同士の切り合いがあり、GⅢ-2住居跡がGⅢ-1・GⅢ-3の2棟の住居跡を切っている。

No	住居跡名	平面形	規模 m	床面積㎡	壁高cm	壁溝	柱穴	炉		時期	備考
								数	形態		
1	CⅢ-1	円形基調	不明	不明	( 2 )	(なし)	(なし)	(なし)		後期前葉	部分調査。埋埋CⅢ-58ピットに貼り床
2	CⅢ-2	不明	〃	〃	(不明)	(〃)	( 3 )	1	浅くくぼむ	〃	部分調査
3	EⅢ-1	不整形	2.4~2.8× 3.1~3.4	7.4	7~35	なし	なし			前期前葉	II層を切る。
4	GⅡ-2	円形〃	(4.1)×不明	不明	(7~11)	(なし)	(なし)			〃	GⅡ-1住に1/2以上切られている。
5	GⅢ-1	(隅丸凸辺長方形)	(2.8)×4.4	( 8.7 )	(8~19)	(〃)	(〃)			〃	GⅢ-2住に切られている。
6	GⅢ-2	隅丸長方形	4.9×7.2	29.4	24~29	なし	(あり)			〃	GⅢ-1・3住を切る。
7	GⅢ-3	円形基調〃	(2.3)×不明	不明	( 13 )	(なし)	(なし)			〃	GⅢ-2住に切られている。
8	GⅢ-4	隅丸凸辺長方形	2.5×3.6	7.1	7~18	なし	(あり)			〃	「出入口」施設

( )は調査範囲での確認および推定

表4 縄文時代住居跡一覧表

**出土遺物** 出土遺物量はGⅢ-2住居跡をのぞいては少ない。縄文土器Ⅰ群と剝片類は全住居跡から出土している。剝片石器はGⅢ-2・GⅢ-4の2棟の住居跡、打製石斧や礫石器はEⅢ-1・GⅢ-1・GⅢ-2・GⅢ-4の住居跡から出土している。

**所属時期** 上述の出土土器や本遺跡での縄文土器の在り方から推定し、縄文土器Ⅰ群期＝前期前葉に位置づけできる。

b. 後期

**分布** 2棟は調査2区の北端、CⅢ区に検出された。

**検出状況** 2棟は西側が調査区域外へでているため、規模ほかに不明な点が多い。

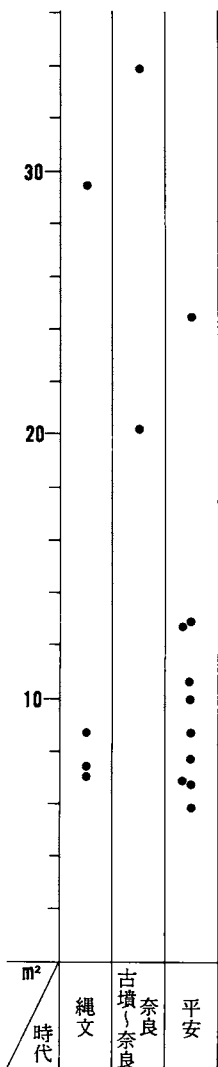


図3 住居跡床面積別分布図

**平面形・規模・床面積** CⅢ-1住居跡は円形基調と推定できる。CⅢ-2住居跡は壁が把握できず、平面形は不明である。規模・床面積は2棟とも不明である。

**柱穴** CⅢ-2住居跡は3個の柱穴を確認できるが、全体の配置は不明である。CⅢ-1住居跡は柱穴が検出されていない。

**炉** CⅢ-2住居跡は調査できた範囲に炉を伴う。細礫混じりの粘土質シルトと細砂礫で作られ、中央が浅くくぼむ形態のものである。

**付属施設** CⅢ-1住居跡は埋甕を伴う。

**出土遺物** 出土量は少ない。縄文土器Ⅱ群と剝片類がある。

**所属時期** 上述の出土土器や本遺跡での縄文土器の在り方から推定し、縄文土器Ⅱ群期＝後期前葉に位置づけできる。

(2) 古代

16棟が検出されている(表5)。時代別の内訳は、古墳～奈良時代1棟・奈良時代1棟・平安時代14棟である。ここでは所属時代別ではなく、属性を優先した記載をし、必要に応じて時代別に触れていく。

**分布** 調査2区の北端をのぞいた全域に14棟、調査3区に1棟が検出された。

**検出状況・重複関係** 全形を調査できたのは13棟、調査区域外へ出ることによって部分調査になるのは3棟である。当該時期の住居跡同士が一部分重複する例はない。ただHⅧ-1住居跡は新旧関係のある複数のカマドの存在から少なくとも2棟が重複していたことが考えられ、HⅧ-1 a・HⅧ-1 bという新旧2棟の住居名を与えている。

**平面形** 隅丸正方形や隅丸凸辺正方形が多い(8棟)。他に隅丸長方形・隅丸方形がある。FⅢ-1住居跡は隅丸長方形の部分に方形の張り

No	住居跡名	平面形	規模m	床面積㎡	主軸方向	壁高cm	壁溝	柱穴	掘り方 有無	カマ		ド	煙道部 掘込み式	ピット 類	火山灰 T <sub>0-a</sub> BT <sub>0-m</sub>	焼失	時代	備考
										数	位							
1	D III-1	隅丸凸辺正方形	4.2×4.4	12.9	N-47°-E	37~51	部分的	なし	○	1	北東壁中央	○	2	○		平安		
2	D III-2	(隅丸方形)	西壁 4.7	不明	N-73°-W	59・69	(○)	(なし)	(○)	(1)	西壁中央	○ 中間形	(なし)	○	(不明)	"	約2/3区域外	
3	D III-3	隅丸正方形	5.3×5.4	20.9	N-41°-W	60~66	一部欠	4	○	1	北西壁中央	○	なし	○	3	奈良		
4	D III-4	隅丸凸辺方形	3.1~3.7 3.8~4.3	10.6	N-41°-W	35~52	断続的	なし	○	1	北西壁中央からわずかに北東壁寄り	○	"	○	2	平安		
5	D III-5	隅丸方形	3.0×不明	不明	N-57°-E	(20~60)	(○)	(なし)	(○)	(1)	北東壁ほぼ中央	○	(1)	○	(不明)	"	部分調査	
6	D III-6	隅丸長方形	5.2×6.3	24.4	N-65°-W	48~57	大部分	なし	○	1	西壁中央からわずかに南壁寄り	○	2	○		"		
7	F III-1	隅丸長方形 張り出し部	2.1×3.1 + 0.8×1.2	5.9	—	6~49	部分的	"	×	なし	—	—	なし	○		"		
8	F III-2	隅丸正方形	3.1× 2.9~3.2	6.7	N-18°-E	45~53	ほぼ一周	"	×	1	北壁中央と北東壁の間	○	1	○		"		
9	F III-3	"	3.2×3.3	8.7	N-39°-W	39~59	"	"	×	1	北西壁中央	○ 中間形	なし	○	3	"		
10	F III-4	"	3.7×4.0	(12.8)	N-37°-W	(46~48)	(○)	(不明)	(○)	(1)	北西壁中央からやや北東壁寄り	○	(不明)	○	(3)	"	部分調査	
11	G II-1	"	6.4×6.4	33.8	N-16°-W	35~53	一周	4	○	1	北壁中央	○	1	○	3	古墳 奈良		
12	G II-3	隅丸方形	6.0×不明 (20.4以上)	不明	S-31°-E	44~49	(なし)	2+	(○)	(1)	南壁中央と南西壁の間	○	(2)	○	2	平安	約1/3区域外	
13	H I-1	隅丸凸辺正方形	3.1×3.6	7.7	N-40°-W	32~46	なし	なし	○	1	北西壁中央からやや北東壁寄り	○	2	○		"		
14	H II-1	隅丸長方形	2.5×3.5	6.8	N-31°-W	12~29	"	"	○	1	北壁中央	○	なし	○		"		
15	H VII-1 a	ややいびつな隅丸方形	3.6×4.0	10.0	1号:N-62°-E 2号:N-31°-W	40~65	"	"	○	2	1号:東壁中央から南壁寄り 2号:北壁中央から東壁寄り	○	2	○		"	新H VII-1 b住	
16	H VII-1 b	不明	不明	不明	3号:S-17°-E	不明	不明	不明	不明	1	3号:南壁中央から西壁寄り	○ 中間形	不明	不明	不明	不明	"	旧H VII-1 a住
参考	H II-2 住居状遺構	隅丸凸辺方形	1.8~2.3 × 2.4	3.6	—	14~24	なし	なし	○	なし	—	—	なし	○		"		

( ) は調査範囲での確認および推定

表5 古代住居跡一覧表

出し部が付属する。

**規模・床面積** 床面積は、住居跡壁面の下端をプラン・メーターで3回計測し、その平均値を採用した。この場合、壁溝やカマド本体は無視しているため、ほぼ掘り方の面積に近い。床面積が計測できたのは12棟である。図3は2m<sup>2</sup>を最小単位とした分布図である。最小は5.9m<sup>2</sup>のF III-1住居跡、最大は33.8m<sup>2</sup>のG II-1住居跡である。F III-1住居跡はカマドを伴わないことや張り出し部があるなど通有の形式のものとはちがっている。通有の形式のもの最小は6.8m<sup>2</sup>のH II-1住居跡である。最小と最大の比は、それぞれ1:5.7、1:5.0となっている。12棟の合計面積は161.2m<sup>2</sup>で、1棟平均は13.4m<sup>2</sup>となる。図4は床面積を正方形に置き換えた概念図である。2つの図からは、33.8m<sup>2</sup>の1棟、24.4m<sup>2</sup>と20.9m<sup>2</sup>の2棟、12.9~5.9m<sup>2</sup>の間に分布する9棟をグルーピングできるであろう。ここではそれぞれを大型・中型・小型とする。大型の1棟は古墳~奈良時代に分類できるG II-1住居跡、中型は奈良時代のD III-3住居跡と平安時代のD III-6住居跡である。小型はすべて平安時代に分類できる。なお平安時代のG II-3住居跡は20.4m<sup>2</sup>を調査しているが、調査区域外の分もいれると30m<sup>2</sup>前後の面積をもつものであろう。

**主軸方向** 主軸方向は、カマドが設置された壁に直交する線が真北と作る角度として計測している。したがってほぼカマド~煙道部方向に近似する。またHVIII-1b住居跡の3号カマドのように壁と煙道部の方向のズレが大きい場合、カマドの方向を主軸方向としている。HVIII-1a住居跡は2基のカマドをもち、それぞれに主軸方向をもとめた。その結果、16の主軸方向

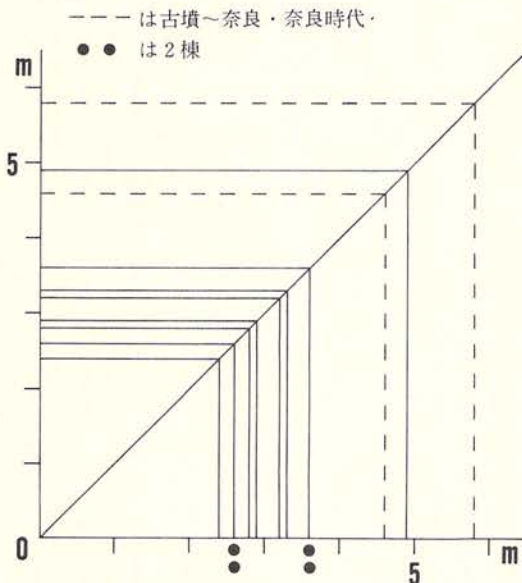


図4 古代住居跡床面積別分布の概念図

があることになる(図5)。図をみると、N-90°-EまたはWの範囲に14、S-90°-Eの範囲に2が分布する。前者では、N-90°-Wに10、N-90°-Eに4が分布する。S-90°-Wの間に主軸をもつ例はない。時代別では、古墳~奈良時代のG II-1住居跡がN-16°-Wともっとも真北に近い主軸になり、奈良時代のD III-3住居跡がN-41°-Wである。それ以外は平安時代に属するが、主軸方向のちがいがどのようなことに起因し、あるいは結果するかについては明らかでない。

埋土 埋土は個別の住居跡の重要な属性の一つであり、詳細な検討が必要であろう。しかし、埋土の層相から自然堆積なのか人間が介入することによって形成された堆積物なのか、あるいはそれらが複合したものなのかを判断することは埋没のメカニズムと過程を個別に復元できないかぎり困難なことといわざるをえない。ここでは古代の住居跡の埋土に一般的に観察される十和田a火山灰（略してT o - a）と白頭山-苦小牧火山灰（略してB - T m）のあり方をみていくことにする。

T o - aを単独で伴う（①）は、古墳～奈良時代のG II - 1、奈良時代のD III - 3、平安時代のD III - 1の3棟の住居跡である。D III - 3住居跡では埋土中部で最大層厚40mmの層として観察できるが、断続的である。G II - 1住居跡は10～40mmの塊を多く含み、一部では集合して層状になる。D III - 1住居跡は小塊を少量含む。T o - aとB - T mの2種類を観察できる（②）のは、D III - 2・D III - 4・D III - 6・F III - 2・F III - 3・H I - 1の6棟の平安時代に属する住居跡である。T o - aが一部層状に観察できるD III - 4住居跡以外は大小の塊として含まれ、層位的にはB - T mがT o - aの上位を占める。B - T mは一般に量が少ない。B - T mが単独で存在する（③）のは、D III - 5・F III - 1・F III - 4・G II - 3・H II - 1・H VIII - 1 aの6棟の平安時代に属する住居跡である。一部が薄層になるH II - 1住居跡のほかは大小の塊としてみられ、H VIII - 1 a住居跡をのぞいては量は少ない。

以上、住居跡における2種類の火山灰の在り方をみてきた。T o - aあるいはB - T mがプライマリィであるか再堆積であるかを識別することは重要である。しかし、上述のように個別の住居跡が埋没する過程に作用する環境や営力を復元できないことや久慈地方における他遺跡の例との比較ができず、それには触れないことにする。したがって、T o - aやB - T mを鍵層にした住居跡の編年はおこなわず、古墳～奈良時代・奈良時代に属する2棟が①に含まれることと最新期のものと推定されるF III - 1住居跡が③に含まれることを指摘するにとどめる。

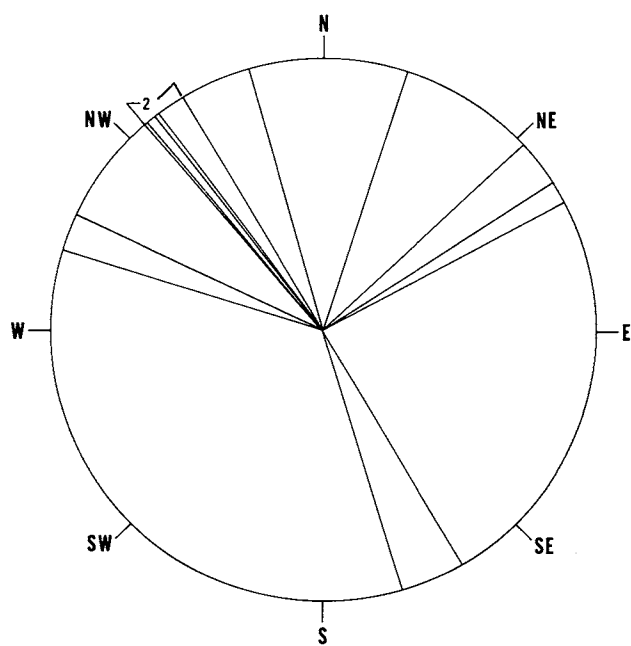


図5 古代住居跡主軸方向分布図

**壁高** 壁高は四方の壁で計測している。15棟の最大値をとると、最小29cm(H II-1 住居跡)から最大69cm(D III-2 住居跡)までの幅がある。平均の深さは54cmであり、規模の大小や上屋構造の違いが壁高に反映されていることは考え難い。

**壁溝** 壁際の床面を細く掘り込んだ溝は「壁溝」あるいは「周溝」とよばれている。15棟のうち、なんらかの形で伴うものは11棟、伴わないものは4棟である。伴うもののうち、全形を精査できた8棟のなかで、一周あるいは大部分に伴うもの4棟、部分的なもの4棟である。

**床面・掘り方** 床面の状態はField Cardの記載をもとにしている。硬い、あるいは軟かいは硬度計をもちいたものではなく、あくまでも主観的で相対的なものである。

掘り方を伴う例は15棟のうち12棟である。全体を調査できた8棟のうち、全体規模の掘り方を伴うのは4棟、1/2程度あるいは中央部をのぞいた壁寄りに伴うのは4棟である。一部が調査区域外へ出るG II-3 住居跡も精査部分では全体に伴う掘り方を伴う。

**柱穴** ごく一部しか精査できなかったD III-5とF III-4の2棟の住居跡をのぞいた13棟のうち、配置的に適切と考えられる柱穴を伴うのはD III-3・G II-1・G II-3の3棟の住居跡である。D III-3とG II-1は4個の柱穴が四隅から内側に入った位置にある。G II-3住居跡は北側が調査区域外へ出るために不明であるが、南側の2個はやはり二つの隅から内側に入った位置にある。掘り方の平面形は楕円形や長方形である。柱痕跡はG II-3住居跡の1個に認められる。

柱穴を伴うG II-1は古墳～奈良時代に属し、大型に分類できる住居跡、D III-3は奈良時代に属する中型の住居跡である。また平安時代のG II-3住居跡は30㎡前後の面積が推定できる。それらのことから、床面積の大小と柱穴の有無は密接に関連することが考えられる。ただ平安時代のD III-6住居跡は中型に分類できるが、柱穴を伴わない。

**カマド** 部分調査の住居跡も含め、16棟のうち明らかにカマドを伴わないのはF III-1住居跡1棟である。同住居は住居形式の点でも他と違いをみせている。全形を調査できた13棟(平面形が確認できるF III-4住居跡を含む)のうち、2基のカマドを伴うH VIII-1 a住居跡以外はすべて1基のカマドをもつ。ただ、H VIII-1 a住居跡は残存状況や貯蔵穴のあり方から推定すると2基の同時存在とは考えられず、1時期1基と考えた方がよいであろう。

〈本体〉 検出されたカマドの数の合計は15棟16基である。ただF III-4住居跡は調査できた範囲に本体は検出されず、H VIII-1 b住居跡3号カマドは本体が削剝を受けて残存していない。本体が原形をよく保っている例は少数で、多くは側壁下部と火床部、あるいはそれらを覆う崩壊構築材から推定することになる。推定も含めると側壁や天井部にシルト・シルト質粘土とともに礫を用いる例は12棟12基と多い。燃焼部に支脚を伴うのはF III-3住居跡1棟で、土製支脚を埋設していた。



〈煙道部〉すべてのカマドが煙道部（煙出し部まで含めたの総称）をもつ。形態別では、①掘り込み式9基、②くりぬき式4基である。DⅢ-2・FⅢ-3・HⅧ-16住居跡3号カマドの3基は煙道部と煙出し部の境がくりぬき式であり、①と②の中間形といえる。

〈住居跡内におけるカマドの設置位置〉図6は、カマドが住居跡内のどこに設置されているのかを示した概念図である。カマドとひとつの壁は、①壁のほぼ中央、②中央からどちらか一方の壁へ寄った位置（その多くはほぼ中間の位置）、と3カ所が設置場所になる関係がある。一辺が北北西による場合にのみ、カマドが南壁に設置される（ただしHⅧ-1b住居跡3号カマドについては不詳部分がある）。古墳～奈良時代のGⅡ-1住居跡はほぼ南北方向を向き、カマドは北壁中央に設置される。奈良時代のDⅢ-3住居跡は一辺が北西へ向き、カマドはその中央に設置される。

〈カマド位置の動き〉HⅧ-1a住居跡はカマドの作り替えがあると推定した。一辺が北北西を向き、古期の2号カマドは北壁中央と北隅との中間に設置されているが、新期の1号カマドは東壁中央と東隅との中間に設置される（図6の矢印）。

焼失住居跡 多量の炭化した材や草本類・焼土が住居跡内に分布する例がある。DⅢ-3・FⅢ-3・GⅡ-1の3棟の住居跡に認められ、焼失住居跡として間違いないであろう。分布や堆積の特徴は、焼土や炭化材が壁寄りの部分では下位に堆積土を伴って高い位置にあり、床面中央部へ向って傾斜して下がっていること、それ以外ではほぼ床面～床面直上の層準に分布することである。焼土は、床面が焼けて赤色に変化している例はほとんどなく、堆積物として検出される。シルト質で、炭化材の上下に認められるが、3棟とも量は少なく、分布も限定される。その起源は「本来竪穴住居の屋上にあった

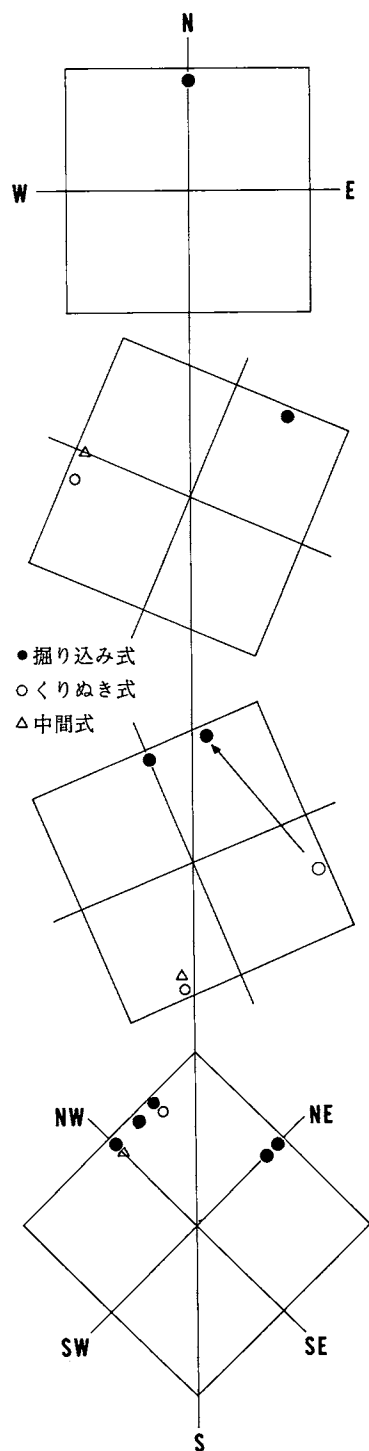


図6 カマド位置概念図

土」が火災に伴う倒壊によって堆積したものとす大川 清の指摘がある(大川, 1952)。大川はさらに、「竪穴住居跡の発掘によって、次の3つの場合に遭遇する」と、次のような例をあげている。

1. 床面の上に焼土を認めない場合。

2. 部分的に焼土のみのある場合又は、極く少量の炭化物と共に、部分的に焼土を認める場合。(この場合、焼土の量に多少の差があることは当然であり、多くは部分的に存在するものである。)

3. 床面の上に接して相当多量の炭化物があり、更にその上や周囲に多量の焼土を認める場合。

先に述べた3棟の例はこの3に相当する。問題になるのは2の場合である。大川は、「2に対しては、火災に遭遇したものであろうと考えられる場合が多いが、時には、如何なる理由によったものであるのか、全然判断を下せない事もある」としている。本遺跡ではDⅢ-4・GⅡ-3の2棟が相当する。炭化した材や焼土の量が3に相当する3棟に比較すると少量で、火災以外の要因も推定でき、焼失住居跡とは簡単に判断は下せないかもしれない。またFⅢ-4住居跡は部分調査のため確実な点は不明であるが、3に分類できる例かもしれない。なお表5の「焼失」の欄にはその状態によって2あるいは3と記載している。

〈焼失住居跡の例〉DⅢ-3・GⅡ-1の2棟の住居跡は垂木と考えられる材が住居中央から放射状に分布し、GⅡ-1住居跡は幅の広い板材を一部に伴う。FⅢ-3住居跡は放射状の分布にはならず、ややランダムである。GⅡ-1とFⅢ-3の2棟の住居跡は壁面のほぼ全体が焼け、赤色に変化していたが、それほど著しいものではない。以上述べた3棟のうち、GⅡ-1住居跡は大型、DⅢ-3住居跡は中型、FⅢ-3住居跡は小型に分類でき、FⅢ-3住居跡をのぞいては4本柱(四支柱式)である。

〈材の樹種〉6棟から採取した炭化材のサンプル89点の樹種別の内訳は、ナラが68点、クリが21点である。

**付属施設** 貯蔵穴あるいはそれに類する機能をもつピット・性格不明のピットを住居内施設として伴う例がある。大型で、深度の大きな貯蔵穴としてよいピットを伴うのはDⅢ-6・HⅧ-1aの2棟である。DⅢ-6住居跡の例は平面形が楕円形あるいは凸辺隅丸方形、HⅧ-1a住居跡では隅丸長方形である。カマドの脇に円形あるいは不整形で深度の小さな小型のピットを伴う例はDⅢ-1・DⅢ-5・DⅢ-6・FⅢ-2・GⅡ-1・GⅡ-3・HⅠ-1・HⅧ-1の8棟にある。GⅡ-3住居跡は床面中央からわずかに東壁に寄った位置に、深度は小さいがロート状になる円形の小ピットを伴うが、壁面は良く焼け、下底部は還元状態を示す青黒色に変化している。なんらかの工作用施設の可能性がある。

## 2. 住居状遺構

平安時代に属するH II-2 住居状遺構 1棟を分類した。平面形は隅丸凸辺台形、床面積は3.6㎡である。全体規模の掘り方を伴うが、カマドは設置されない。他の遺構と比較すると、例えば平面形が隅丸正方形である同時代のF III-55ピットは床面積が2.6㎡であり、わずかに1㎡それを上回るにすぎない。厳密な定義を与えている訳ではなく、あるいは大型のピットとして分類の方が適切かもしれない。

## 3. ピット

40基をピットとして分類した。しかし、備考の補足説明に記載したように、C III-53・C III-58・D III-53・D III-54・F III-52の5基のピットは人工のものとしてよいか疑問が残るまま、ピットに含めている。以下時代別に記載し、遺構名は番号だけで表わすことにする。

### (1) 縄文時代

推定も含め25基を分類した。時期別の内訳は、前期13基・後期10基・不明2基である。

#### a. 前期

13基は前期前葉の住居跡が分布する調査2区中央の開析谷付近に集中する。しかもその北地区にはD III-51とE III-51があるだけで、残る12基はG II区とG III区に集中する。平面形は円形が10基と多く、長方形は2基、不整形は1基である。開口部径は82×106cm～208×208cmとややバラツキがあるが、100×100cm以上が11基である。深度は17～123cmと幅がある。それらのなかで、G II-54はフラスコ形ピットである。D III-51は円筒形の落とし穴の可能性もあるが、確実ではない。遺物は9基から出土しているが少量である。土器片はすべて縄文土器I群の破片

である。剥片石器は石鏃・ピエス・エスキュー・不定形石器などがある。出土土器や本遺跡での縄文土器の在り方から、以上のピットは前期前葉に

縄文時代 (25基)			古 代 (10基)			不明(5基)
前 期	後 期	不 明	奈良時代	平安時代	不 明	
D III-51	C III-51	H VIII-53	G II-56	焼土ピット	G II-55	(D III-53)
E III-51	-52	I IX-51		G III-53		( -54)
G II-51	( -53)			H I-51		F III-51
-52	-54			その他		( -52)
-53	-55			F III-54		-53
-54	-56			-55		
G III-52	-57			H II-51		
-54	( -58)			G VIII-51		
-55	D III-52			H VIII-51		
-56	G III-51			-52		
-57						
-58						
-59						

表6 所属時期別ピット一覧表

位置づけられる。

#### b. 後期

10基（CⅢ-53・CⅢ-58を含む）は調査2区に分布し、GⅢ-51を除いては北地区、しかもCⅢ区にほとんどが集中する。平面形は、円形が4基、楕円形が3基、不整形が2基、隅丸台形が1基である。開口部径は51×94cm～195×154～204cm、深度は19～207cmとバラツキがある。深度の大きいCⅢ-54は壁の半ばがやや膨らむもののピーカー形、CⅢ-55はフラスコ形のピットである。すべてから遺物が出土している。土器片は縄文土器Ⅱ群が主体を占め、ピエス・エスキュー・不定形石器などの剥片石器、磨石Ⅱ類・礫器Ⅰ類の礫石器、磨製石斧、打製石斧がある。そのほかには円盤状土製品があり、CⅢ-51・CⅢ-55からは琥珀が1点ずつ出土している。以上のピットは本遺跡での縄文土器の在り方から、後期前葉に位置づけられる。

#### c. 不明

調査3区に検出されたHⅧ-53・IⅨ-51は出土遺物を欠くが、埋土から縄文時代に属するものと推定した。平面形が隅丸方形と円形で、開口部径・深度とも小さなピットである。

#### (2) 古代

10基を分類した。時代別の内訳は、奈良時代1基、平安時代8基、不明1基である。

##### a. 奈良時代

GⅡ-56である。平面形が楕円形、開口部径が140×232cm、深さが36cmである。出土土器や十和田a火山灰を含むことから奈良時代に分類した。

##### b. 平安時代

8基は、調査2区の南地区に5基、調査3区に3基が分布する。大きくは焼土ピットとその他のピットに大別できる。

〈焼土ピット〉現地性焼土がピットの底面に形成されている例がGⅢ-53とHⅠ-51の2基に認められる。平面形は洋梨形や楕円形、開口部径は110×174cm・105×(106)cm、深度は16cm・5cmとなっている。

〈その他のピット〉FⅢ区に隣接して存在するFⅢ-54・FⅢ-55の2基は大型で、深度も他のピットに比べると大きい。平面形は円形と隅丸正方形、開口部径は232×250cm・200×206cm、深度は70cm・40cmである。その他の4基は開口部径がひとまわりは小さく、深度も小さい。平面形は長方形・円形・不整形である。

以上のピットの埋土に含まれる火山灰についてみると、十和田a火山灰を含むのはGⅢ-53・HⅡ-51、十和田a火山灰と白頭山-苦小牧火山灰を含むのはFⅢ-54、白頭山-苦小牧火山灰を含むのはFⅢ-55である。出土遺物は少ないが、6基から土師器甕が出土し、HⅠ-51とHⅡ-51の2基は琥珀を1点ずつ出土している。所属時期は、出土遺物や埋土から推定し

た。調査3区の3基は、HⅧ-52が土師器甕を出土しており、遺物のないGⅧ-51・HⅧ-51は埋土の類似性から同時代と推定した。

c. その他

GⅡ-55は、平面形が隅丸凸辺正方形、開口部径が152×168cm、深度が33cmである。出土遺物はなく、埋土に含まれる十和田a火山灰から古代に属することが明らかであるが、それ以上の細分はできない。

(3) 時期不明

5基を分類した。調査2区のDⅢ区に2基、FⅢ区に3基が分布する。ただ、人工のものかどうか判断のつかない3基(DⅢ-53・DⅢ-54・FⅢ-52)をこのなかに含めている。

## 4. 落とし穴

38基を検出している。形態はすべて溝状のものである。

(1) 事実記載中の形状

事実記載のなかの形状の項は記号としてあらわしている。図7に示しているように、平面形はI型とII型に分類している。縦断面形はA～D、横断面形は1～3と模式化し、その組み合わせによって「IA1」のように記載した。縦断面形・横断面形はあくまでも概念的なものであり、数多くの変異形を個々には含んでいる。以下、遺構名は番号だけで表わすことにする。

(2) 分類

平面形でI型としたものが単に溝状であるのに対し、II型は溝状の両端が円形に膨らむバベル形になる。I型が35基、II型が3基である。

図8は底部の長軸長の分布を示したものである。I型は32基が計測可能であり、最小が198cm、最大が412cm、平均が336cmである。II型は3基全部が計測でき、最小が374cm、最大が422cm、平均が403cmである。I型はS・M・Lに大別する。最小と最大の差214cmを3等分した71cmを目安にし、分布領域のある程度のまとまりを区切った便宜的な分類にすぎない。

S：長さが198～262cmの3基(9%)である。さらに、S1：198cm(1基)とS2：255・262cmとに細分する。

M：長さが280～342cmの15基(47%)である。

L：長さが355～412cmの14基(44%)である。

II型は、上述のI型の分類でいえば3基ともLに含まれる。

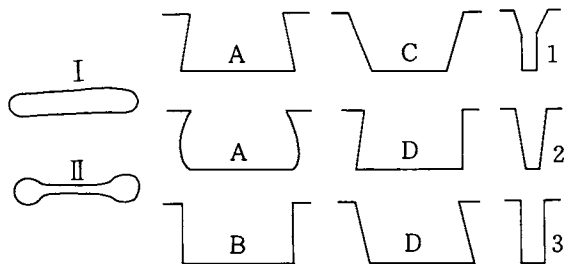
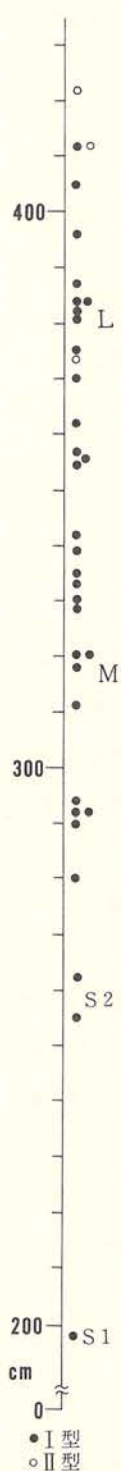


図7 落とし穴概念図



深度は、H I-101をのぞいた34基のI型で計測すると、最小が54cm、最大が164cm、平均が114cmである。10cm単位の深度では131~140cmに7基(21%)と分布密度が濃く、20cm単位のそれは131~150cmに12基(35%)が分布する。

(3) 分布

I型は調査2区・3区に分布する。調査2区では北地区が7基(20%)に対し南地区が19基(54%)と密集度が高い。その南地区でもF III・G II・G IIIの3区に計15基が密集する。調査3区は9基(26%)である。H VIII・H IXの2区に8基が集中する。II型は調査2区の北地区と南地区、調査3区に1基ずつが分散する。

(4) 副穴

底面に小ピット(副穴)を伴う例はない。

(5) 主軸方向

落とし穴のほぼ真中を通る長軸線と真北とが作る角度を主軸方向とし、真北から東西へ何度ズレているかをみてる。N-90°-Wの間は23基(62%)が分布する。N-1°30'-W~N-81°-Wの間に分散する。N-90°-Eの間は14基(38%)で、N-3°-E~N-33°-Eの間に13基が分散し、1基がN-70°30'-Eと離れた分布を示す。主軸方向のちがいによる特定の分布の仕方、あるいは群の構成といったことは認められない。

(6) 配列状況

2基以上が集まり、有意の配列を示していることが考えられる例はない。

(7) 出土遺物

23基が遺物を出土しているが、すべて調査2区に分布する落とし穴であり、調査3区の10基は遺物を出土していない。出土量は一般に少量である。土器片は18基から出土している。調査2区北地区の落とし穴はI群とII群をともに出土するが、南地区ではI群が卓越する。石器は数が少ない。剥片石器は石鏃・ピエス・エスキュー、礫石器は磨石I類や礫器I類など、土製品は円盤状土製品が出土している。

(8) 重複と遺構の時期

落とし穴同士の重複はH II-102(I型)とH II-103(II型)とにあり、前者が後者を切っている。縄文時代前期の住居跡との重複は、G III-1住居跡とG III-102、G III-2住居跡とG III-102・同104・同106、G III-4住居跡とG III-105との間にみられる。いずれの場合も落とし穴が埋土から切っており、新しい。縄文時代のピットとの重複は前期のG III-52とG III-103との間にあり、落とし穴が

図8 落とし穴  
長軸長分布図

新しい。古代の住居跡やピットと重複する例は4基にあるが、すべてそれらよりは古い。

落とし穴の所属時期を決定する資料を欠くが、県内各遺跡での例や本遺跡でみられる重複関係・出土遺物等から縄文時代に属すると考えてよいであろう。

## VII まとめ(3)―遺物―

### 1. 古代の土器

土師器と須恵器があり、数量的には前者がほとんどを占める。器種は、土師器が甕・坏・壺・甑・須恵器は甕がある。もっとも多いのが土師器甕、次いで土師器坏であり、他は少数である。土師器甕と坏について分類をおこない、他は個別に記載するにとどめる。なお、遺物番号は土師器集成図(図10・11・13)に対応する。

#### (1) 土師器甕

成形に際し、すべてロクロを使っていない。法量と器形・調整を識別形質として分類する。古墳～奈良時代・奈良時代・平安時代の甕があるが、ここでは一括して分類している。

復元(図上復元も含む)できたのは14個体と少ないが、それらを用いている。口径と器高の関係を表わしたのが図9である。相関指数が0.9と強い相関関係がある。器高を優先し、小型：S、中型：M、大型：Lに大別する。器高は、最小6.7cm、最大37.3cmで、その比は1：5.6になる。口径は、Sは分布のまとまりが強い。MとLは重なる領域が一部にあるが、器高とともにみていくと、それぞれは独自の分布を示している。

#### 小型：S

3個体は、器高が6.7～11.6cm、口径が9.3～11.2cmである。器高÷口径の値は0.72～1.03で、1.03以外の2点は口径が器高を上回る「ずんぐり」した器形になる。二つに細分する。

1. 1と2は口縁部と胴部が明瞭に区別され、2は段状になる。短い口縁部は外傾する。2点は最大径が胴部にあるが、2は口縁部とほぼ同じ値である。調整は、内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデである。G II-1住居跡の第40図52もこの仲間の可能性があるが、残存状態が悪いため不明の部分があり、除外した。

2. 口縁部と胴部の区別のない円筒形の3を分類した。調整は内外面ともナデである。

#### 中型：M

3個体は、器高が16.1～19.1cm、口径が16.5～17.9cmである。器高÷口径の値は0.98～1.21で、1.0以下は1点である。二つに細分する。

1. 胴部上半がいくぶん膨らむ3と4を分類した。最大径は、3が口縁部、4が胴部にある。3がやや長目の口縁部が外反気味になるのに対し、4は非常に短い口縁部が真直ぐに立ち上

がり、外方へ折れる。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラナデが主であるが、下部の一部がケズリのようなになる。内面はともにヘラナデである。

2. 6を分類した。口縁部と胴部の境が不明瞭で、わずかにへこむだけである。底部はいくぶん張り出し、膨らみをもって立ち上がった胴部はほぼ直線的に外傾しながら口縁部に達する。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラミガキと一部が刷毛目、内面は刷毛目である。

大型：L

8個体は、器高が27.9～37.3cm、口径が17.6～20.7cmである。器高÷口径の値は1.32～1.94である。いわゆる長胴形のものと同張りのものと2種類があり、それぞれは変異形を含んでいる。

1. 長胴形のもの。最大径がある口縁部の形態から二つに細分する。

a. 口縁部から胴部へは漸時移行し、沈線や段を頸部に伴わない(7～11)。すべて古墳～奈良時代のG II—1住居跡からの出土である。器形は、口縁部が外傾し、胴部はやや直線的であるが

下部から急激にすぼまって底部に収斂する。7～9は口縁部に比べた底部が非常に小さく、強く張り出す特徴をもつ。7～9は、器高が33.0～37.3cm、器高÷口径の指数が1.68～1.94と大きい。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデあるいはヘラミガキ、胴部外面がヘラミガキや刷毛目+ヘラミガキ、内面は刷毛目とヘラミガキに近いヘラナデ(10)である。胎土・焼成とも良好である。

b. 頸部に段を伴うが、段はそれほど明瞭ではない(12～16)。器形の全体を知ることができる例は16だけである。器形は、やや長目の口縁部が外傾し、胴部は上部あるいは半ばがいくぶん膨らむ。底部が残る16は胴部半ばからやや急激にすぼまり、張り出した底部へ移行する。調整は、口縁部は内外面がヨコナデ・ヘラミガキ、胴部は外面がヘラミガキ・刷毛目、内面がヘラナデ・ヘラミガキに近いヘラナデ・刷毛目である。

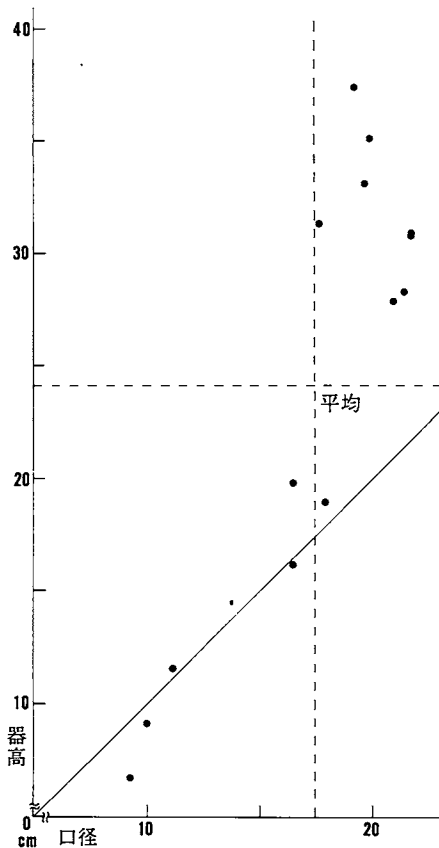
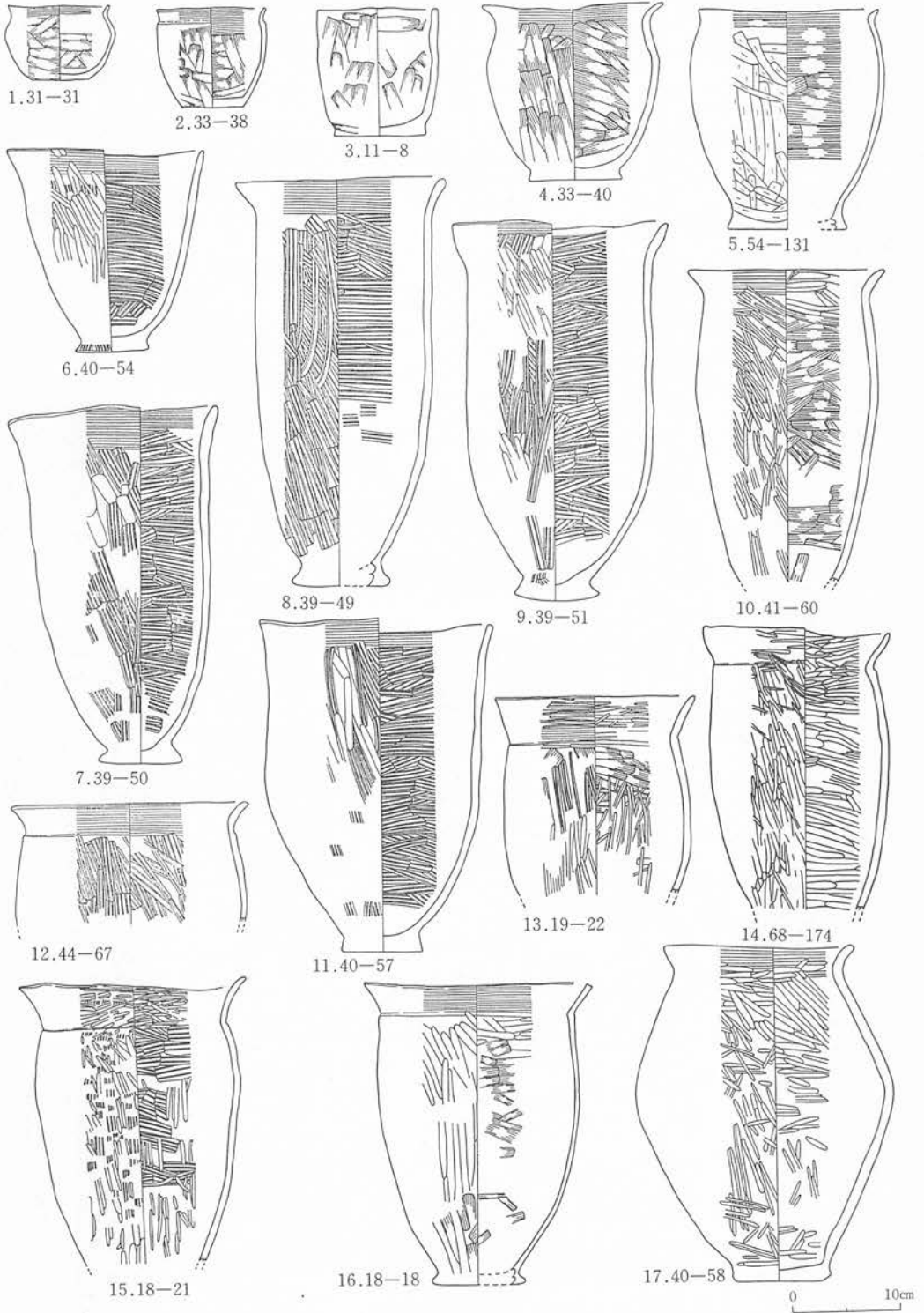


図9 土師器甕口径・器高分布図

2. 胴張りするもの。最大径は胴部上部～半ば





※土器番号，挿図番号—遺物番号の順

図10 土師器集成図(1)

最小が12.0cm、最大が18.4cmである。G II-1 住居跡出土の3点は18.2~18.4cm、平均18.3cm、D III-3 住居跡の6点は12.0~17.0cm、平均14.6cmで、分布領域の重なりはない。

#### 4. 器高

器高は計測できたのは6点である。最小が3.9cm、最大が7.4cmである。G II-1 住居跡の3点は5.9~7.4cmと最小と最大の幅が小さいのに対し、D III-3 住居跡の3点は3.9~7.3cmとその幅が大きい。

#### 5. 調整

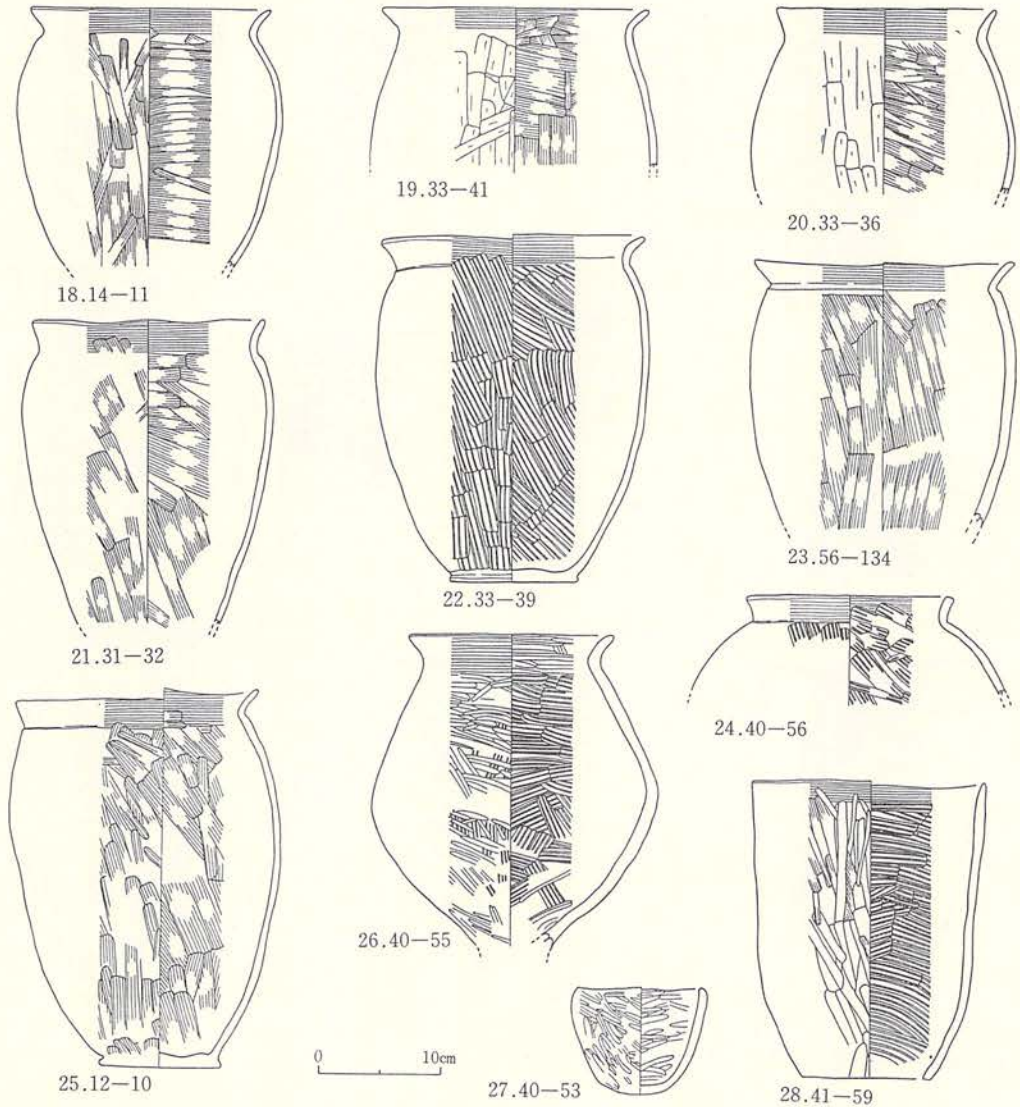


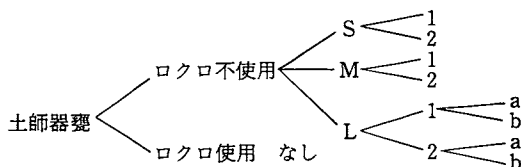
図11 土師器集成図(2)

にある。二つに細分する。

a. 頸部に段を伴わないもの(17~21)。器形の全体を知ることができるのは17だけである。口縁部はやや長く、外傾あるいは外反気味になる。胴部の膨らみは一般に丸味をおびるが、17は菱形のような膨らみを示す。21は膨らみが弱い、いちおうここに含めておく。底部が残る17の例はわずかに張り出している。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ・ヘラミガキ・ヘラナデ、内面がヘラナデ・ヘラミガキである。なお、同じ住居跡から出土し、17に器形がよく似た26があるが、下半が急激にすぼまって小さいことから壺に分類した。

b. 頸部に段を伴うもの(22~25)。器形の全体を知ることができるのは22と25である。段は明瞭で、25は一部が沈線状になる。22・24以外は、やや長い口縁部が外傾し、胴部は丸味を帯びて膨らむ。最大径は胴部上部~半ばにある。底部が残る22・25の例はやや弱い張り出しになっている。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部が内外面ともヘラナデと刷毛目である。

以上のことをまとめると、次のようになる。



## (2) 土師器坏

ロクロ使用の有無によって大別し、ロクロ不 사용을I群、ロクロ使用をII群とする。

### I群

復元(図上復元を含む)できたのは9点である。内訳はG II-1住居跡が3点、D III-3住居跡が6点を出土している。識別形質のいくつかについて記載する。

#### a. 器形

器形全体を知ることができる資料は6点である。明瞭な稜が形成され、体部と底部が区別される8以外は丸底であり、8もまた丸底の範疇でとらえることができる。底部を欠く例もすべて丸底と推定できる。器形は、胴部が直線的である8以外は内湾気味に立ち上がって口縁部に達する。

#### 2. 段あるいは沈線

胴部外面に段が形成されるのは3だけである。1は外面半ばがへこむが、段を意図したものではない。上述のように、8は外面に稜を伴い、胴部と底部の区別が明瞭である。

#### 3. 口径

ていねいなヘラミガキが内外面に施されている。ヘラケズリが外面の下部から底部に施される例は5にあり、底部が一部しか残っていない3も同様のものと推定できる。

## 6. 黒色処理

内面を黒色処理していないのは1と7・8の3点である。

以上、識別形質について記載してきたが、分類は出土遺構を単位として行うことができる。したがって、G II-1住居跡から出土した7~9 (A類) とD III-3住居跡から出土した1~6 (B類) は時期的に異なる一群を形成し、それぞれのなかでの器形や技法のちがいは用途や機能に応じた変異形と考えることができる。

## II群

復元 (図上復元も含む) できたのはF III-1・F III-3・G II-3の3棟の住居跡から出土した4点にすぎない。法量以外はすべて共通の形質をもつ。すなわち、回転糸切り無調整、外面はロクロ痕、内面はヘラミガキのあと黒色処理を施す点である。器高÷口径×100の指数は、38.6 (10)・42.0 (11)・43.1 (12)・43.8 (13) で、それほど大きな隔りはない。

### (3) その他の土師器

#### a. 壺

G II-1住居跡から出土した26を分類した。胴部半ばに最大径があり、いくぶん丸味をおびた菱形状の胴部下半は急激にすぼまる。底部を欠くが、残存部や共伴する甕の例から推定すると、小さく、強く張り出す底部になるであろう。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、胴部が一部に刷毛目を残したヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、胴部が刷毛目である。

#### b. 甕

G II-1住居跡から出土した28がある。無底式である。口唇部は幅6mm±の幅で浅くくぼんでいる。調整は、外面がヘラナデとヘラミガキ、内面が刷毛目である。

#### c. 鉢

G II-1住居跡から出土した27がある。小型で、内外面はていねいなヘラミガキが施されている。底部は丸底風平底である。

### (4) 須恵器

G II-1住居跡の埋土から、甕の小破片数点が出土しているだけである。

### (5) 分類群の帰属と時期

(1)~(4)まで記載してきた土師器と須恵器の特徴と出土遺構から、時間的な序列をもつ三つの土器群が設定できる。

I群：G II-1住居跡の出土土器が指標になる。出土層位と共伴

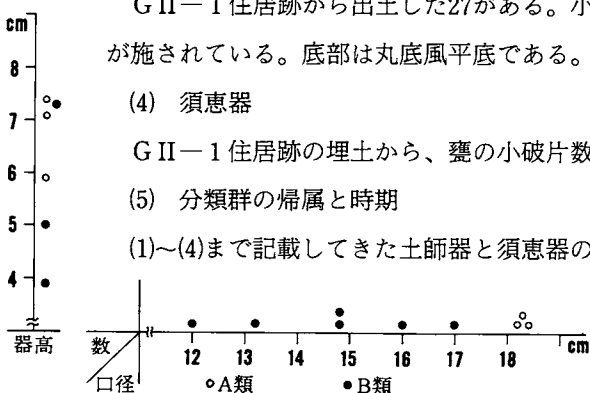


図12 土師器群I群口径・器高分布図

関係を考慮に入れると、土師器は甕がM2・L1a・L2a、坏がI群A類、壺・無底式の甑、小型の鉢の組成になる。甕Sも共伴するが、一部不詳な点があり、除外しておく。須恵器甕も共伴するが、小破片のため詳細は不明である。土師器は胎土・焼成とも非常に良好で、次のII群やIII群とは大きく異なる。

II群：DIII-3住居跡の出土土器が指標になる。出土層位と共伴関係を考慮に入れると、土師器甕L1bと坏I群B類の組成になる。GII-56ピットから出土した14もこの群に入る。

III群：FIII-3住居跡の出土土器が指標になる。土師器甕S1・M1・L2a・L2b、坏II群の組成である。FIII-1・GII-3の各住居跡の坏II群、DIII-1・DIII-2・FIII-2・HII-1・HII-1の各住居跡からの甕S1・S2・M1・L2a・L2bもこの群に含まれる。

以上のI群～III群の時期は、高橋（1982）の岩手県の土師器の編年に対比させるとおおよそ次のようになる。

I群は高橋のII-1群に近いものと考えられる。高橋は東北地方南部の栗田式に相当し、7世紀後半～8世紀はじめに位置づけられるとしている。II群はII-2群に近いものである。高橋は東北南部の国分寺下層式に相当し、8世紀中～後半に位置づけられるとしている。III群は

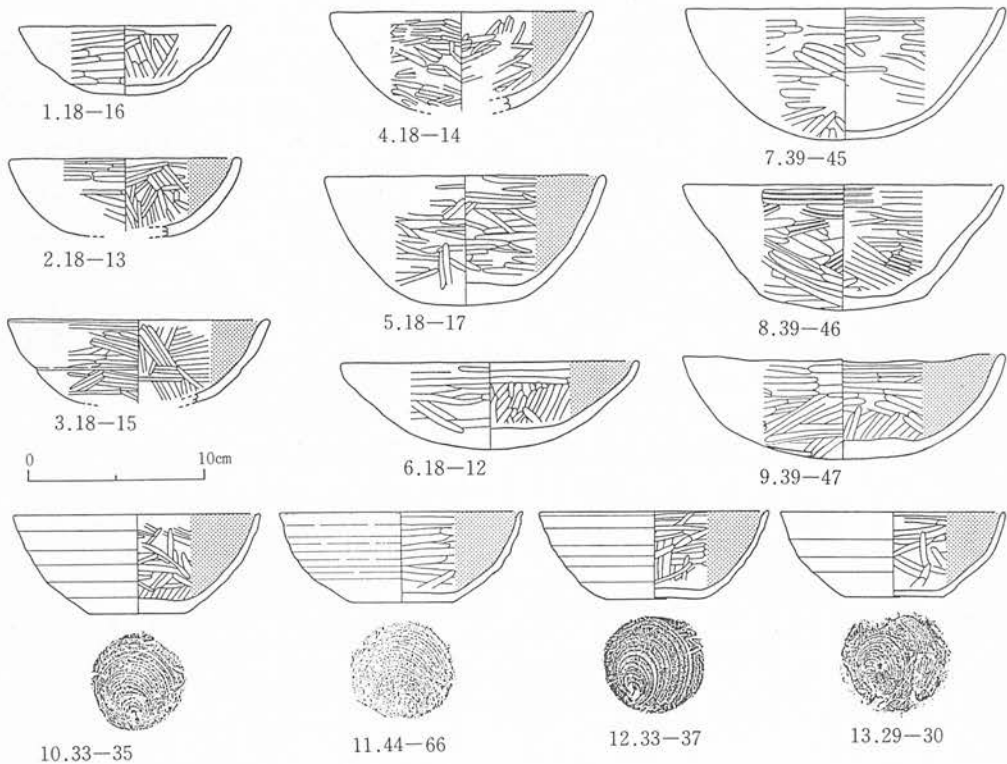


図13 土師器集成図(3)

III-2群に相当する。高橋はおおよそ9世紀末から10世紀に位置づけられるとしている。ただHI-1住居跡出土の短かい口縁部を特徴とする土師器甕5(M1)のように新しい時期の様相をもつものはIII-2群でも新しい方に含まれるであろうし、あるいはIV群に含めることもできるかもしれない。しかし、III群を細分できるほどの資料の裏づけはなく、ここでは一括しておきたい。

## 2. 琥珀

琥珀は遺構内外から出土し、数量も多い。出土する遺構は主体である住居跡のほか、ピット・落とし穴がある(表7)。住居跡の時期別出土棟数は、古墳～奈良時代と奈良時代が1棟ずつ、平安時代が10棟で、古代の住居跡16棟の75%からの出土になる。出土地点と層位は、住居跡埋土を中心に、床面・床面直上・カマド・煙道部、付属ピットである。出土点数は1～62点、重量は0.05～38.98gとバラツキがあり、10点を越える例は3棟しかない(DIII-6・GII-1・HI-1の3棟)。合計は118点99.36gである。最大の62点38.98gが出土しているHI-1住居跡は最小0.01gから最大3.48gと幅があり、その73%は1g以下である。次いで多いGII-1住居跡は18点24.48gで、最小0.02gから最大13.5gである。最大の塊は直径約32mmである。出土の際の形状は、穿孔や粗削りが認められる8点(7%)をのぞいた110点は破片と塊であり、取り上げ時あるいはその後に破砕することが多い。したがって点数はすべて取り上げ時の1点としている。加工痕が認められるもののうち、4点は粗削りがほどこされている。両面に観察できる1点は20×20×8mm、2.1g、現状の形状は多角形に近い。穿孔されているのは4点である。1点は両面から穿孔されているが、貫通はしていない。粗削りの有無は不明で、22×12×12mm、孔の直径は2mm±である。残る3点は片面から穿孔されているが、貫通はしていない。うち1点は2個の孔をもつ。

ピットは4基から1点ずつ、合計4点、1.36gが出土している。2基は縄文時代後期、2基は平安時代に属する。

落とし穴は埋土最上部から1点0.3gが出土したCIII-101があるだけである。

遺構外ではCII区・DIII区・HII区から合計4点0.39gの破片があるにすぎない。

## 3. 金属製品

鉄製品と鉄滓が古代の住居跡と住居状遺構・遺構外から出土しているが、器種・量とも少ない。

### (1) 鉄製品

鉄製品は8棟の住居跡から11点が出土している。器種別の内訳は刀子1点、鏃形鉄製品3点、

刺突具1点、釘1点、器種不明5点である。奈良時代のDⅢ-3住居跡をのぞいては平安時代に属する。刀子はDⅢ-4住居跡から1点出土している。焼けた柄を残していたが、残存状態が悪く、図示していない。鍬形鉄製品とした器種はDⅢ-6・FⅢ-2・HⅠ-1住居跡から出土している(第27図27・第31図34・第54図131)。鉄鍬に似るが、大型であることや131のように中央部に目釘を伴うことの原因から鋸に類するものと推定した。有茎と無茎があるが、27は

種類	No.	遺構名	時代	出土地点・層位	点数	重量g	備考
住居跡	1	GⅡ-1	古墳～奈良	埋土・床面直上	18	24.48	穿孔1点、22×12×12mm 0.02g～13.5g
	2	DⅢ-3	奈良	埋土	4	1.71	穿孔1点。14×7×9mm
	3	DⅢ-1	平安	床面・煙道部	3	2.22	粗削り1点
	4	DⅢ-2	〃	床面	1	0.05	
	5	DⅢ-4	〃	埋土	3	2.85	
	6	DⅢ-5	〃	床面・床面直上 埋土・ピット	8	17.76	粗削り2点 穿孔1点。12×10×8mm
	7	DⅢ-6	〃	床面・埋土・カマド 煙道部ほか	10	5.92	
	8	FⅢ-2	〃	埋土	1	0.29	
	9	FⅢ-3	〃	〃	1	0.1	
	10	FⅢ-4	〃	床面	1	0.12	
	11	HⅠ-1	〃	埋土中・下部中心 埋土上部・ピット・床面	62	38.98	両面粗削り1点。20×20×8mm 0.01～3.48g
	12	HⅡ-1	〃	埋土	6	4.88	穿孔1点。16×8×8mm
	小計			118	99.36		
ピット	13	CⅢ-51	縄文	埋土	1	0.6	
	14	CⅢ-55	〃	〃	1	0.21	
	15	HⅠ-51	平安	〃	1	0.5	
	16	HⅡ-51	〃	〃	1	0.05	
		小計			4	1.36	
落穴とし	17	CⅢ-101	縄文	埋土最上部	1	0.3	
		小計			1	0.3	
遺構外	18	CⅡa4	—	Ⅱ層	1	0.07	
	19	CⅡc1	—	〃	1	0.02	
	20	DⅢe4	—	不明	1	0.05	
	21	HⅡc1	—	Ⅱ層	1	0.25	
		小計			4	0.39	
	合計			127	101.41		

表7 琥珀出土遺構一覧表

基部を失い、不明である。一側縁あるいは両側縁が銹のためにいちじるしく肥厚する点も共通する。刺突具と推定した製品はFⅢ-4住居跡にある(第31図35)断面が正方形の棒状の5本がたがいにくっつき合った状態で出土し、1本の太さは3×3mm、長さは61~80mmである。一端が細くなるように見受けられる。一端を失なうが釘と推定した製品はHⅠ-1住居跡にある(第54図132)。そのほか小破片あるいは銹・破損等の理由で器種が不明のものがDⅢ-3・DⅢ-6・FⅢ-3・FⅢ-4・HⅡ-1の5棟から1点ずつ出土している。FⅢ-4住居跡の第35図44は両刃で半ばから折れ曲っている。鉈の可能性もあるが、はっきりしない。

## (2) 鉄滓

遺構からの出土例は5棟の住居跡・1棟の住居状遺構・1基のピットにある。

住居跡からの出土は、FⅢ-2住居跡が10点235.52g、FⅢ-3住居跡が1点360g、GⅡ-1住居跡が6点99.55g、GⅡ-3住居跡が11点133.24g、HⅧ-1住居跡が1点740g、合計29点1,568.31gである。古墳~奈良時代のGⅡ-1住居跡を除いては平安時代に属する。出土層位は埋土を中心に床面がある。個々の大きさや重量にはバラツキが著しい。HⅧ-1住居跡の1点は95×125×35mmの椀形滓である。

HⅡ-2住居状遺構からは76点3,547gが埋土上部から一括して出土した。個別には1.15~420gと重量にバラツキがある。一括廃棄されたものであることが出土層位や状況から推測できる。この遺構は平安時代に属する。

ピットでは、奈良時代に属するGⅡ-56ピットの埋土から1点1.95gが出土している。

遺構外ではI層を中心に、一部がII層から出土している。GⅡ区3点108.05g、GⅢ区6点99.8g、HⅠ区1点170g、HⅡ区19点263.03g、合計29点640.88gである。調査2区の南地区に集中する分布上の特徴がある。HⅡ区に多いのはHⅡ-2住居跡状遺構があるHⅡa3から18点230.38gが出土しているためであり、本来は同遺構のものと考えることができる。

以上、遺構内外の鉄滓を合計すると、遺構内が106点5,117.26g、遺構外が29点640.88g、あわせて135点5,758.14gである。なお韃の羽口はGⅡ-1住居跡とGⅢe0から小破片が1点ずつ出土しているにすぎない。

## 4. 自然遺物

### (1) 貝類

平安時代に属するDⅢ-5・DⅢ-6の2棟の住居跡から貝類が出土している。DⅢ-5住居跡は最大層厚10cm±の貝層が南半の埋土下部~床面直上の層準に形成されており、種類・数量とも多い。また、部分調査のため、種類・数量とも実際はさらに多いものになる。DⅢ-6住居跡は埋土下部とP1埋土の2カ所から出土しているがブロックの状態での出土であり、



種類・数量とも多いものではない。

以上の貝類の種名・数量・計測値等は付篇に掲載している。

## (2) 植物遺体

クルミが3点出土しているだけである。縄文時代前期のG III—53ピット、古墳～奈良時代のG II—1住居跡、平安時代のD III—6住居跡の埋土から1点ずつである。

# VIII まとめ(4)—遺跡—

## 1. 周辺の遺跡

周辺の遺跡を概観し、本遺跡との若干の比較を行いたい。発掘調査された遺跡に限定し、第1図に位置を示すとともにおおよその内容を一覧表にした(表8)。番号は図と表が照合する。1～13は久慈市、14～17は南側で隣接する九戸郡野田村に所在する。もとにした資料には報告書以外のものもあり、一部に遺漏があるだろうことをお断りしておく。また上野山と上野山II遺跡は本来は同一遺跡であるが、調査主体と報告が別々であることから、便宜的に2遺跡としてあつかうことにする。

### (1) 縄文時代

**早期** 貝殻文系土器片2点が源道遺跡から出土している。本遺跡では早稲田4類と推定される破片1点を表採している。

**前期** 土器は7遺跡から出土している。繊維を含むと報告されている上野山II遺跡の破片はいちおうここに含めた。包含層を調査した大尻遺跡に土器が多く、円筒下層b式～同d式がある。同遺跡ではそれらに伴う琥珀が出土している。円筒下層d式は広内・上明内の各遺跡にもある。上明内遺跡からは円筒下層a式が出土している。

本遺跡では前葉の住居跡6棟とピット13基が検出されている。

**中期** 土器を出土するのは2遺跡だけであり、分布が希薄である。大尻遺跡は円筒上層a式と同b式、三崎I遺跡は円筒上層b式～同e式、大木7式・同8式を出土している。

本遺跡では遺構・遺物ともみつかっていない。

**後期** 土器は7遺跡から出土している。初頭～前葉の土器は中長内・小屋畑・上野山・上野山II・三崎IIIの各遺跡、中葉の土器は中長内・三崎IIIの各遺跡、末葉の土器は大芦遺跡から出土している。上野山遺跡で検出された3棟の住居跡は前葉に分類されている。

本遺跡では前葉の住居跡2棟とピット10基が検出されている。

**晚期** 土器は6遺跡から出土している。量のやや多い大芦遺跡は大洞B—C式と同C<sub>1</sub>式が主体を占める。小屋畑遺跡は大洞C<sub>1</sub>式、上野山II遺跡は大洞C式と同A式、源道遺跡は大洞

No	遺跡名	縄文時代							ビツ 落し穴	弥生 住居	古墳 住居	奈良		平安		中・近世		周溝	備考
		住居跡					住居	住居				ビツ	住居	ビツ	掘立	住居	掘立		
		早期	前期	中期	後期	晩期													
1	大 芦	遺構																三崎段丘? 標高160m	
2	田中Ⅳ	遺構						14										山麓地及び他の緩斜 標高35~50m	
3	顔 道	遺構						17			22	○	21	○			1	種市段丘 標高21~40m	
4	中長内	遺構					8	29	37		奈良・平安 57   33						2	種市段丘 標高31~42m	
5	平沢Ⅱ	遺構							10礎基									平沢Ⅰに隣接	
6	小屋畑	遺構						○		2		6 (礎9)						種市段丘 標高30~38m	
7	上野山	遺構			3		1	5		4								種市段丘 標高21~28m	
7	上野山 (Ⅱ)	遺構							1		2							尾根 標高15~40m	
8	兼田農場	遺構						7	51				8	5土				種市(二子)段丘及び有家 段丘 標高50~70m前後か	
9	大 尻	遺構																有家段丘及び妻生段丘 標高60~110m	
10	小 袖Ⅱ	遺構						6	6									三崎段丘 標高175~163m	
11	三 崎Ⅲ	遺構						4	7									三崎段丘 標高175~182m	
12	山 屋 敷	遺構									1							河岸段丘 標高42m	
13	上 新 山	遺構						1			2							河岸段丘 標高42m	
14	広 内	遺構																	
15	上明内	遺構						2			1		1						
16	中 平	遺構									1?		14					海岸段丘 標高40~70m	
17	古館山	遺構									8							種市段丘 標高26~38m	
遺 構 計					3	1	9	53	133 +α	古代の住居跡として一括 153棟							3		
平 沢Ⅰ	遺構		6		2			25	38	古墳~奈良 2		1	14	8				妻生段丘	
	遺物	○	○		○					○	琥珀							標高98~108m	

1・2・6・7・9~17:報告書ほか 3:略報 8:現説資料 4・5:教示 16:「岩手の遺跡」

表8 周辺の遺跡一覧表

A式、上野山遺跡は大洞A'式が出土している。住居跡は中葉～後葉に位置づけられる1棟が上野山II遺跡に検出されている。

本遺跡では遺構・遺物ともみつかっていない。

その他 中長内遺跡では前期あるいは後期と推定される住居跡8棟、上野山遺跡では時期不明の住居跡1棟が検出されている。

以上のほかに縄文時代に属することが考えられる遺構に落とし穴がある。7遺跡から133基+ $\alpha$ （平沢II遺跡の10数基）が検出されている。形態は、本遺跡と同様の溝状のものが112基と優占するが、円筒形のものが兼田農場遺跡に16基、中長内遺跡に4基、田中IV遺跡に1基がある。

## (2) 弥生時代

土器は7遺跡から出土している。不明な兼田農場遺跡を除いては末葉の天王山式（系土器）や赤穴式とされている。中長内遺跡からは前半期の土器が少量出土している。また北海道系の土器である後北式土器が2遺跡から出土している。中長内遺跡の例は後北C式、古館山遺跡では後北C2式と同D式である。

本遺跡では赤穴式に近似する土器片が少量出土している。

## (3) 古代

遺構が所属する時代に不明な点が一部の遺跡にあるため、ここでは古墳時代～平安時代を一括して古代とし、必要に応じて時代別に取り上げる。

古代の遺物や遺構が発見されているのは13遺跡である。田中IV・小袖IIの2遺跡は土師器の破片若干が出土しているだけである。住居跡は11遺跡から153棟が検出されている。そのうち、奈良時代に属するのは、源道遺跡が22棟、古館山遺跡が8棟、小屋畑・上野山II・上新山の3遺跡が2棟ずつ、山屋敷・中平・上明内の3遺跡が1棟ずつであり、合計8遺跡49棟である。7世紀末から8世紀前半にかけての時期に位置づけられるとしている上野山遺跡の4棟のうちの何棟かと中長内遺跡のうちの比較的多い棟数がさらに加わる。平安時代に属するのは、源道遺跡が21棟、中平遺跡が14棟、小屋畑遺跡が推定も含めた9棟、兼田農場遺跡が8棟、上明内遺跡が1棟、合計5遺跡53棟である。中長内遺跡の57棟のうちの比較的多くの棟数がこれに加わる。

本遺跡では古墳～奈良時代1棟、奈良時代1棟、平安時代14棟の住居跡が検出されている。

本遺跡も含め、住居跡が検出された12遺跡は所属時期のちがいがら三つに分類できる。①平安時代以前の住居跡しか検出されない遺跡である。上野山・上野山II・山屋敷・上新山・古館山の5遺跡が含まれる。②平安時代にも引き続き集落として利用される遺跡である。

源道・中長内・平沢I・小屋畑・中平・上明内の6遺跡が含まれる。③平安時代に新たに集落が営まれる遺跡である。兼田農場遺跡が含まれる。

しかし、上述の傾向は発掘調査の限られた結果にもとづくもので、確実な点は今後明らかに

なるであろう。例えば、表土から住居跡の存在を確認できる遺跡があり、山屋敷遺跡は24棟、上新山遺跡は「100基を越えるであろう」とされているし、一部が県の指定史跡である中平遺跡は7haの範囲に200棟弱の住居跡の存在が予想されている。また、本遺跡の場合も試掘調査で確認された80棟近い古代の住居跡の一部を発掘したにすぎない。

この時代の特徴的な遺物に琥珀がある。住居跡からの出土例に限れば、中長内遺跡は57棟のうち29棟、兼田農場遺跡は8棟すべて、上野山・中平の各遺跡は1棟ずつから出土している。そのうち、中長内・兼田農場・上野山の3遺跡では未製品（半加工品・半製品）が出土し、中長内遺跡では住居跡内で加工作業がおこなわれたものと推定されている。

## 2. 遺跡のまとめ

平沢I遺跡はおおよそ30万㎡の面積を有する台地上にあり、今回は7,472㎡を調査した。

この調査に先立つ昭和57年、久慈市教育委員会は遺跡全域に及ぶ試掘調査を実施し、80棟近い数の古代の住居跡をはじめ、縄文時代の住居跡やピット・落とし穴など多くの遺構の存在を確認している。したがって今回の調査区域が遺構分布密度の濃い部分に相当することを予め想定して調査に入ったわけである。最後に、今回の調査範囲で知りえた時代別の遺跡の様相を簡単に描いてみたい。

縄文時代は居住域と狩猟の場として主に機能していた。活動の痕跡は前期前葉に認められる。住居跡6棟とピット13基の遺構があり、伴う縄文土器はI群に分類した。住居跡は調査2区の中央部にある浅い開析谷を挟んだ南北に分布するが、北地区に1棟、南地区に5棟と密集度が異なる。南地区の住居跡の周辺には同時期のピットの大部分が集中する。住居跡同士の重複があり、同時期のなかでも反復して遺跡が利用されていることを知ることができる。また6棟のなかでは29.4㎡の相対的に大型の1棟があることが注目される。共伴するI群土器は大木I式以前ではあるものの相当する型式名は与えることができず、単に前葉の土器群として位置づけた。この時期の住居跡の調査例は岩手県では数が非常に少なく、良好な資料を提供することになろう。その後、長い空白期がある。次に活動の痕跡が認められるのは後期前葉に入ってからである。

後期前葉の遺構は住居跡2棟が調査2区北地区北端に作られ、その周辺に同時代のピット10基の内のほとんどが分布する。住居跡2棟は部分的な調査であり、住居形式や規模ほかに不明の点が多い。共伴する土器はII群土器として分類した。大部分が前葉の十腰内I式に相当する。このあと、弥生時代末葉まで再び長い空白期を挟む。

縄文時代の前期あるいは後期のどちらの時期に所属するかが明らかではないが、38基が検出された落とし穴は狩猟の場としても活発に利用されていたことを示している。粗密はあるもの

の調査区のほぼ全域に分布し、調査2区は分散、調査3区は北半の一部に集中して存在する。形態は、大きくは溝状のものといえ、単に溝状であるもの35基と溝状の両端が円形に膨らむ「バーベル状」のもの3基とに細分でき、前者をI型、後者をII型として分類するとともに、底部の長軸長に応じて便宜的にS、M、Lとした。しかし、落とし穴相互あるいは前期・後期あわせて8棟の住居跡との有意な関係は、調査区域の狭いこととあいまって、読み取ることができなかつた。

この時代の遺物の特徴の一つに、礫石器の多いことがあげられる。特に打製石斧とともに礫器I類～III類としたチョッパーあるいはチョッピングツールに類似した資料が多い。GIII-1住居跡や同一2住居跡の出土例から、前期前葉の遠構・土器に共伴するものと推定した。時期的に合致し、さらに出土量のうえでも比較できる岩手県内の遺跡は調べた範囲では知ることができなかつた。もうひとつ特徴的なことは、石器の剥片あるいは碎片が縄文時代の各種遺構に限らず、II層や古代の遺構から数多く出土していることである。特に今回の調査区だけでなく、試掘調査のトレンチでも多く採集することができる。また剥片石器だけではなく礫石器のそれらも多い。沿岸部という原材料の入手しやすい条件を考慮に入れると、石器の製作がかなり高密度の作業として行われていたことも推測できる。

後期前葉のあと、数は少ないが、弥生時代末葉の赤穴式に類似した資料が出土している。共伴する遺構はない。この時期の遺物は久慈地方の他の遺跡にも数量は少ないが、よく発見されるもので、出現度は高いものといえる。

次いで、GII-1住居跡の時代に入る。出土遺物の特徴と高橋編年（高橋，1982）から、古墳～奈良時代という過渡的な所属時期を推定したが、より前者に近いものと考えておく。調査2区南地区にあり、床面積は古代住居跡16棟のうち最大で（33.8㎡）、四本柱である。長胴形で、極端に張り出す小さな底部をもつ大型土師器甕を共伴する。他に土師器の坏・壺・甑・鉢が構成器種になる。土器は胎土・焼成が良好で、調整とともに次の時代以降の土器とは大きく異なる。

奈良時代の住居跡も1棟である。調査2区北地区にある。床面積では中型に分類でき、四本柱である。土器はGII-1住居跡に比べると小型の丸底の坏が特徴的である。

平安時代に入ると、棟数が増え、14棟が検出された。調査2区全域に分布するほか、離れた調査3区に2棟が存在する。床面積が計測できた10棟は、中型に分類した1棟を除いては小型であり、柱穴を伴わない。ただ、調査区域外にでるGII-3住居跡は30㎡前後とこの時代の住居跡では最大の床面積が推定でき、柱穴2個が確認されている。共伴する土師器はロクロ使用の坏とロクロを使わない甕とがあるが、数は多くない。甕の中にはより新しい時期に位置づけられる形態をもつものがHI-1住居跡にあり、平安時代として一括したものの、当然時間差

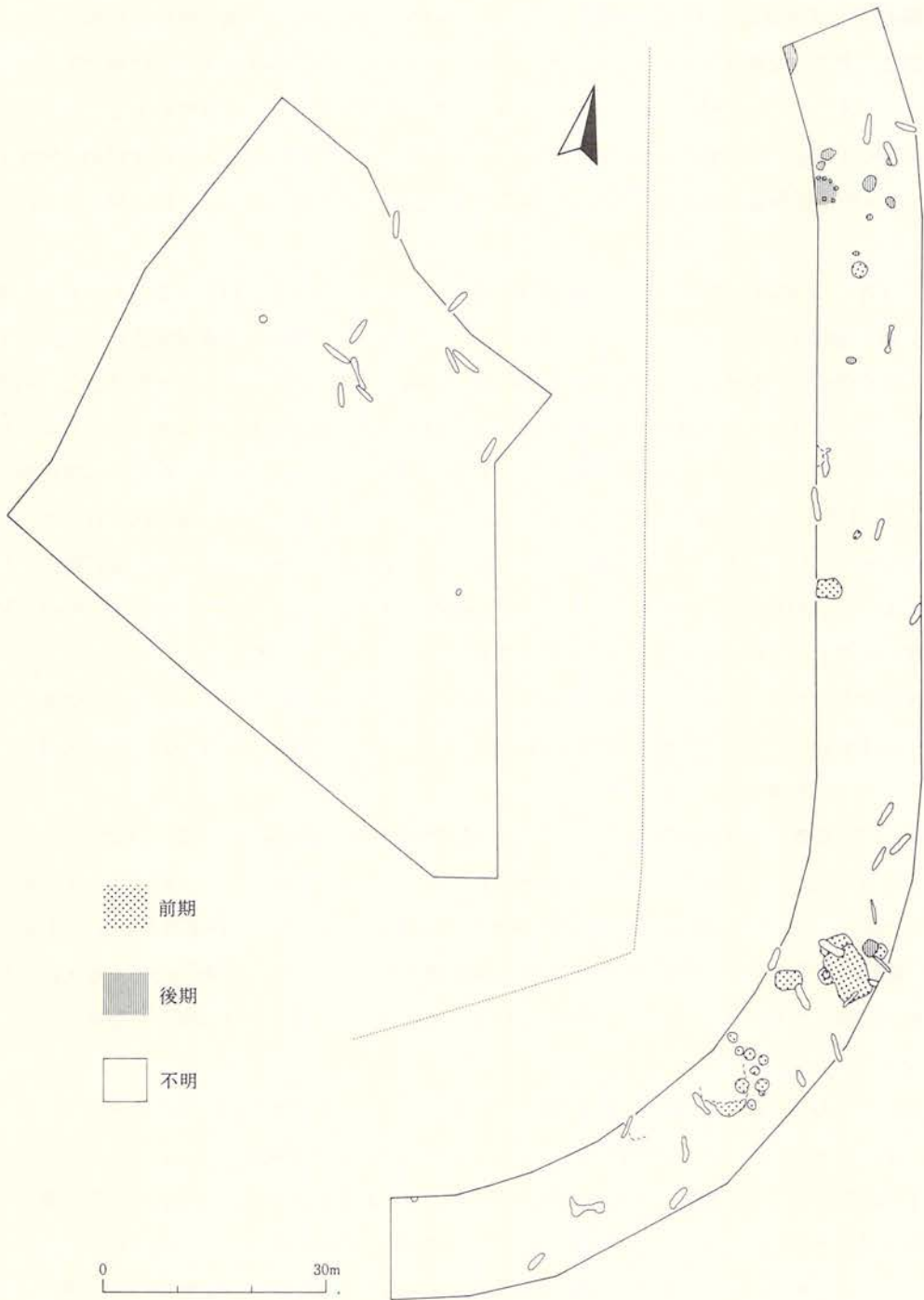


図14 縄文時代遺構分布図

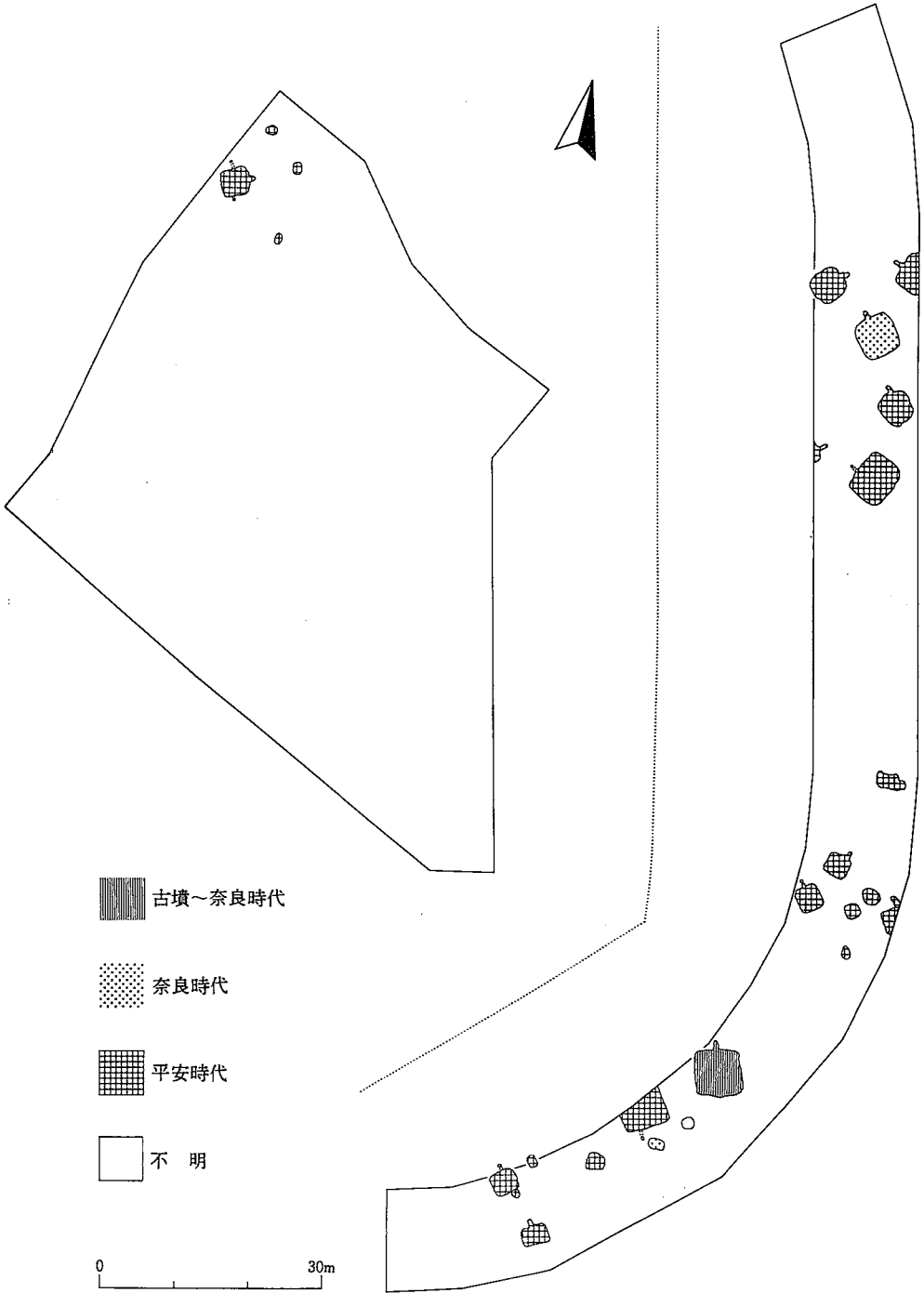


図15 古代遺構分布図

を考慮しなければならないであろうが、細分はできなかつた。またカマドがなく、張り出し部をもつFⅢ-1住居跡は住居形式からもっとも新しい時期に属することが推定できる。

平安時代になると集落が山間地へ拡大して行く現象は岩手県北部でも顕著であり、とくに安比川流域によく見られる。久慈市付近では、平安時代以前と以降を比較した場合、以前の集落跡が数のうえでは多く、先の山間地への拡大の現象とはやや異なった原理が働いていたことが考えられる。しかし、1でも述べたように、限られた数の発掘調査の結果であり、確実な点は今後明らかになっていくであろう。久慈市付近は海岸段丘の発達がよく、9段の段丘面が認められる(照井, 1982)。集落が成立するための要件の一つである生業形態の違いといったことは、当然古代の遺跡の立地に現われてきているはずである。本遺跡はこれまで調査された遺跡よりはやや高い面に立地していることが特徴であるが(表8)、本報告では他遺跡との比較・検討を行うことはできなかつた。

久慈地方は日本最大の琥珀産地であり、久慈市夏井町から野田村玉川付近まで続く上部白亜系の久慈層群中の主に玉川層から産出する。本遺跡では縄文時代後期のピット2基と古代の住居跡12棟(16棟に対して75%)などから出土し、一部に加工痕を残すものがある。近い位置にある中長内遺跡では、古代において通常の住居跡で琥珀の加工作業を行ったことが想定されている。本遺跡の場合、遺構に痕跡を認めることはできないが、なんらかの作業が行われていたことは当然予想され、複合していたであろう生業形態の一部であったことも推測できるかもしれない。

## 引用文献

- 岩手県埋蔵文化財センター (1985) : 中平遺跡. 『岩手の遺跡』, 338-339.
- 石田琢二・大池正二・小野寺信吾・竹内貞子・中川久夫・七崎 修・松山 力 (1969) : 東北地方における第四紀海水準変化. 『日本の第四系』, 37-82.
- 大池正二 (1964) : 八戸浮石の絶対年代-日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代Ⅲ. 地球科学No.70, 38-39.
- 大川 清 (1952) : 住居址に於ける焼土について. 古代, 第7・8合併号, 52-58.
- 岡村道雄 (1983) : ピエス・エスキュー. 『縄文文化の研究7』, 106-116, 雄山閣.
- 貝塚爽平 (1985) : 平野と海岸の生いたち. 『日本の平野と海岸』, 105-109, 岩波書店.
- 高橋信雄 (1982) : 古代. 『岩手の土器』, 27-34, 岩手県立博物館.
- 照井一明 (1982) : 陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系. 岩手県高等学校教育研究会地理部会誌, 1-34.
- 成田滋彦 (1981) : 青森県の土器. 『縄文文化の研究4』, 123-132, 雄山閣.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) : テフラと日本考古学. 『古文化財の自然科学的研究』, 865-928, 同朋舎出版.



## 報告書

〈岩手県〉

岩手県埋蔵文化財調査報告書(第7集～第80集)と岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(第117集～第126集)は「岩埋文報告書」と略している。

岩手県埋蔵文化財センター(1979):『二戸市沢内B遺跡』。岩埋文報告書第7集。

〃 (1983):『上野山遺跡発掘調査報告書』。岩埋文報告書第67集。

〃 (1984):『小屋畑遺跡発掘調査報告書』。岩埋文報告書第80集。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1987):『田中IV遺跡発掘調査報告書』。岩埋文報告書第117集。

〃 (1988):『飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書』。岩埋文報告書第120集。

〃 (1988):『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和62年度分)』。岩埋文報告書第126集。

草間俊一(1967):野田村中平遺跡。Artes Liberales(岩手大学教養部報告)No.2, 36-48。

〃 (1970):『中平・上明内調査概報』。野田村教育委員会。

〃 (1971):岩手県野田村広内遺跡。日本考古学年報19, 85-86。

〃 (1972):岩手県野田村中平遺跡第二次調査概要。岩手史学研究No.58, 30-38。

久慈市教育委員会(1976):『山屋敷遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第1集。

〃 (1978):『三崎(III)遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第2集。

〃 (1979):『上新山遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第3集。

〃 (1984):『上野山(II)遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第4集。

〃 (1985):『大芦遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第5集。

〃 (1985):『兼田農場遺跡』。現地説明会資料

〃 (1987):『小袖II遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第6集。

〃 (1987):『大矢遺跡発掘調査報告書』。久慈市文化財調査報告書第7集。

野田村教育委員会(1987):『古館山』。野田村文化財調査報告書。

# 平沢 I 遺跡出土の動物遺存体

陸前高田市立博物館 佐藤 正彦  
東北学院大学学生 熊谷 賢

出土した動物遺存体と遺構との関係は一覧表に掲載した(表1)。ここでは個別の住居跡からの遺存体の特徴を記載したあと、まとめをおこなう。

## 1. DIII-5 住居跡

### I. 軟体動物

#### i. 腹足綱

エゾアワビ：4点出土している。破碎が著しく、その形状からエゾアワビと同定するのは困難である。エゾアワビはクロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus* Reeve の北方種である。現在の分布域は福島県以南がクロアワビで、以北がエゾアワビとされている。ここでは一応エゾアワビとして扱っておく。

マツバガイ：3点出土している。最大殻は、殻高2.7mm、長径6.2mm、短径4.4mmと小型である。岩礫性の二枚貝を採集した際に付着してきたものであろうか。

ウキノカサガイ科の一種：3点出土している。幼貝である。

ウキノカサガイ：1点出土している。殻高2.1mm、長径5.4mm、短径4.6mmと小型である。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

シボリガイ：1点出土している。殻高3.9mm、長径7.5mm、短径5.8mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

カモガイ：2点出土している。最大殻は、殻高3.5mm、長径6.9mm、短径5.5mmと小型である。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

アオガイ：4点出土している。最大殻は殻高2.4mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

コウダカアオガイ：17点出土している。最大殻は殻高2.5mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

シロガイ：31点出土している。最大殻は、殻高3.1mm、長径7.7mm、短径6.0mmである。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

クボガイ：6点出土している。3点は破碎が著しい。最大殻は、殻高18.0mm、殻径20.4mmである。

表 1. 出土地点別種名一覧表

種 名	DIII-5 住	DIII-6 住 P <sub>1</sub> 埋土	DIII-6 住 Q <sub>2</sub> 埋土下部
I 軟体動物 MOLLUSCA			
i. 腹足綱 GASTROPODA			
1. エゾアワビ <i>Haliotis (Nardotis) discus hannai</i> Ino	○	○	
2. マツバガイ <i>Cellana nigrolineata</i> (REEVE)	○		
3. コキノカサガイ科の一種 <i>Acmaeidae</i> gen. et sp. indet.	○		
4. ヌキノカサガイ <i>Acmaea (Niveotectura) pallida</i> (GOULD)	○		
5. シボリガイ <i>Patelloida (Collisellina) pygmaea signata</i> (PILSBRY)	○		
6. カモガイ <i>Collisella dorsuosa</i> (GOULD)	○		
7. アオガイ <i>Notoacmea schrenckii</i> (LISCHKE)	○	○	
8. コウダカアオガイ <i>Notoacmea concinna</i> (LISCHKE)	○		
9. シロガイ <i>Collisella pelta shirogai</i> Habe et Ito	○	○	
10. ニシキウズガイの一種 <i>Trochidae</i> gen. et sp. indet.		○	
11. イシダタミガイ <i>Monodonta labio</i> (LINNÉ)			○
12. クボガイ <i>Chlorostoma argyrostoma lischkei</i> (TAPPARONE-CANEF)	○		○
13. サンショウスガイ? <i>Neocollonia pilula</i> (DUNKER)		○	
14. チャイロタマキビ <i>Temanela turrita</i> (A.ADAMS)	○		
15. タマギビガイ <i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI)	○		
16. タマキビガイ? <i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI)		○	
17. チヂミボラ <i>Nucella heyseana</i> (DUNKER)	○	○	
18. レイシガイ <i>Thais bronni</i> (DUNKER)		○	○
19. イボニシ <i>Thais clavigera</i> (KÜSTER)		○	
20. クロスジムシロガイ <i>Reticunassa fratercula</i> (DUNKER)	○		
21. パツラマイマイ <i>Discus pauper</i> (GOULD)	○		
22. オオコハクガイ <i>Zonitoides nitidella</i> (MÜLLER)	○		
23. コハクガイの一種 <i>Zonitidae</i> gen. et sp. indet.		○	
24. ベッコウマイマイの一種 <i>Helicarionidae</i> gen. et sp. indet.	○		
ii. 二枚貝綱 BIVALVIA			
1. フネガイ科の一種 <i>Arcidae</i> gen. et sp. indet.	○		
2. ムラサキインコガイ <i>Septifer (Mytilisepta) virgatus</i> (WIEGMAN)	○	○	○
3. イガイ <i>Mytilus edulis</i> LINNÉ	○		
4. エゾイガイ <i>Crenomytilus grayanus</i> (DUNKER)	○		
5. マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)	○		
6. チリハギガイ <i>Lasaea undulata</i> (GOULD)	○		
7. マンジミ <i>Corbiculina leana</i> (PRIME)		○	○
iii. ひざらがい綱 POLYPLACOPHORA			
1. ウスヒザラガイ科の一種 <i>Ischnochitonidae</i> gen. et sp. indet.	○		
II. 節足動物 ARTHROPODA			
i. 蔓脚亜綱 CIRRIPEdia			
1. イワフジツボ <i>Chthamalus challengerii</i> HOEK	○		
2. アカフジツボ <i>Balanus tintinnabulum rosa</i> PILSBRY	○		
3. チシマフジツボ <i>Balanus cariosus</i> (PALLAS)	○	○	
ii. 甲殻綱 CRUSTACEA			
1. 十脚目の一種 <i>Decapoda</i> fam. indet.			
III. 棘皮動物 ECHINODERMATA			
i. 海胆綱 ECHINOIDEA			
1. ムラサキウニ <i>Anthocardis crassispina</i> (A.AGASSIZ)	○	○	

チャイロタマキビガイ：6点出土している。最大殻は、殻高5.4mm、殻径3.9mmである。海藻上に生息する貝で、海藻採集時に付着してきたものと思われる。

タマキビガイ：26点出土している。最大殻は、殻高11.6mm、殻径10.7mmである。ほとんどが完存貝である。

チヂミボラ：15点出土している。最大殻は、殻高27.0mm、殻径17.4mmである。殻高6.85～27.0mm、殻径4.6～17.4mmの範囲でばらつきがみられ、均一性はない。

クロスジムシロガイ：2点出土している。最大殻は、殻高4.9mm、殻径3.0mmと小型である。

パツラマイマイ：3点出土している。最大殻は殻高2.8mmである。

オオコハクガイ：11点出土している。

ベッコウマイマイ科の一種：4点出土している。

## ii. 二枚貝綱

フネガイ科の一種：右殻1点が出土している。幼貝である。

ムラサキインコガイ：右殻2,171点（うち完存貝387点、完存率17.83%）、左殻2,102点（うち完存貝403点、完存率19.17%）が出土している。本遺構で最も多く出土している貝で、全体の86.56%を占め、近似種のイガイ・エゾイガイを含めると全体の92.92%に達する（左右それぞれの個体数で多いものを最少個体数として扱っている）。ムラサキインコガイ・イガイ・エゾイガイは岩礁に生息する二枚貝である。同じような環境に生息する食用種のクボガイ・レイシガイ等の巻貝がほとんど出土していない点などからみて、積極的に上記の岩礁性の二枚貝を採集し、特にムラサキインコガイに高い依存を示していたものと思われる。計測値は大小ばらつきがみられ、均一性はない（表参照のこと）。

イガイ：右殻86点、左殻94点が出土している。破碎が著しく、完存貝は左殻4点（完存率4.25%）である。最大殻は、殻高61.0mm、殻長35.2mm。出土量は全体の3.75%を占める。

エゾイガイ：右殻62点、左殻67点が出土している。破碎が著しく、完存貝はない。出土量は全体の2.61%を占める。

マガキ：左殻の殻頂部1点が出土している。破碎が著しい。

チリハギガイ：右殻22点、左殻20点が出土している。成員が殻高2mm、殻長3mm程の小型の貝である。ムラサキインコガイの足糸の間に足糸で付着している貝で、ムラサキインコガイに付着して搬入されたものである。

## iii. ひざらがい綱

ウスヒザラガイ科の一種：頭板1点、中間板3点が出土している。中間板の形状からウスヒザラガイ科のものと思われるが、種不明である。

## II. 節足動物

i. 蔓脚亜網

イワフジツボ：30点出土している。岩礫性の二枚貝等に付着してきたものと思われる。

アカフジツボ：完存のもの4点、殻板4点が出土しており、最少個体数は5点である。小型のものが多く、食用とは思われない。

チシマフジツボ：殻板1,067点が出土している。最少個体数178個。チシマフジツボの殻板は、1個の個体が峰板1、峰側板2、側板2、嘴側板1の計6個に分離するが、それらを分けることは困難をきわめる。ここでは、単純に殻板1,067点を6で割り、最少個体数178個を示した。出土したものは小型のものが多く、食用とは思われない。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

ii. 甲殻網

十脚目の一種：カニ類の不動指2点が出土している。種不明。

III. 棘皮動物

i. 海胆網

ムラサキウニ：少量の棘及び殻片、歯1点、上生骨2点、顎骨2点が出土している。最少個体数は1～2個程度と思われる。

2. DIII-6 住居跡

(1)P1 埋土

I. 軟体動物

i. 腹足網

エゾアワビ：1個体分の破片が出土している。破碎が著しい。

アオガイ：1点出土している。長径が4mm以下の幼貝である。岩礫性の二枚貝に付着してきたものであろう。

シロガイ：9点出土している。すべて長径が5mm以下の幼貝である。岩礫性の二枚貝に付着してきたものであろう。

ニシキウズガイ科の一種：殻頂部1点が出土している。クボガイのように思われるが、殻口の形状が不明であるので、ニシキウズガイ科の一種とした。

サンショウスガイ？：1点出土している。磨滅が著しい。

タマキビガイ？：1点出土している。幼貝である。

チヂミボラ：1点出土している。殻高7.9mm、殻径5.5mmと小型である。

レイシガイ：殻頂部が1点出土している。破碎が著しい。

イボニシ：殻口部の破片1点が出土している。破碎が著しい。

コハクガイ科の一種：2点出土している。微小陸産貝である。

## ii. 二枚貝網

ムラサキインコガイ：右殻314点（うち完存貝125点、完存率39.81%）、左殻299点（うち完存貝126点、完存率42.14%）が出土している。本遺構において最も多く出土している貝で、全体の90.23%を占める（左右それぞれの個体数で多いものを最少個体数として扱っている）。最大殻は殻高42.1mm、殻長15.7mm。完存貝右殻125点のうち、116点が殻高20～42.1mm、殻長10～15.7mmの範囲に分布し、幼貝の出土はほとんどない（表参照のこと）。出土した貝の大きさは均一性がみられ、DⅢ-5住居跡のものとは性格を異にしている。

マシジミ：右殻11点、左殻10点、左右不明殻2点が出土している。破碎が著しく、完存貝はない。出土量は全体の3.45%である。

## II. 節足動物

### i. 蔓脚亜網

チシマフジツボ：殻板1点が出土している。

## III. 棘皮動物

### i. 海胆類

ムラサキウニ：少量の棘・殻片・中間骨11点等が出土している。最少個体数は3～4個と思われる。

## (2)Q<sub>2</sub>埋土下部

### I. 軟体動物

#### i. 腹足網

イシダタミガイ：破片1点が出土している。

クボガイ：6点が出土している。破碎が著しく完存貝は無い。

レイシガイ：破片1点が出土している。

#### ii. 二枚貝網

ムラサキインコガイ：右殻13点、左殻10点が出土している。破碎が著しく、完存貝はない。

マシジミ：右殻7点、左殻11点、左右不明殻9点が出土している。完存貝は無い。

## 3. まとめ

(1)DⅢ-5住居跡埋土、DⅢ-6住居跡P1埋土・Q<sub>2</sub>埋土下部より出土している。

(2)軟体動物腹足網が23種166点、二枚貝網が7種2,709点、ひざらがい網が1種1点、節足動物蔓脚亜網が3種、甲殻網が1種、棘皮動物海胆網が1種出土している。

(3)魚類・哺乳類等の脊椎動物は皆無であった。本遺跡の特色であろう。

(4)出土した動物遺存体のほとんどが岩礁性のものであり、若干ではあるが、淡水種・陸産種が混入する。

(5)出土した貝類で主体となるものはムラサキインコガイであり、DⅢ-5住居跡・DⅢ-6住居跡P1より多く出土している。DⅢ-5住居跡のものは大きさに均一性が認められず、採集及び調理の段階であまり大きさには配慮されなかったものと思われる。また、チリハギガイが多く出土する点などからみて、ムラサキインコガイをブロックで採集あるいは調理していたものと思われる。DⅢ-6住居跡P1のものは、大きさに均一性が認められ、チリハギガイが全く出土していない点から、採集・調理の段階で足糸を取り外し、大きさを揃える作業を行っていたものと思われる。

(両氏からは、ムラサキインコ・クボガイ・チヂミボラ・タマキビ・イガイ・エゾイガイ・コウダカアオガイ・シロガイ・マツバガイ・ユキノカサガイ・カモガイ・アオガイ・コウダカアオガイ・チャイロタマキビ・クロスジムシロガイの殻高と殻長の計測表をいただいたが、ページ数の都合から割愛せざるをえなかった。記してお詫びいたします。一編集者)

表2. 貝集計表

DIII-5 住居跡

種 名	個 数	貝構成率
腹 足 綱		
エゾアワビ	4	0.16
マツバガイ	3	0.12
シボリガイ	1	0.04
ユキノカサガイ	1	0.04
ユキノカサガイ科の一種	3	0.12
カモガイ	2	0.08
アオガイ	4	0.16
コウダカアオガイ	17	0.68
シロガイ	31	1.24
クボガイ	6	0.24
チャイロタマキビ	6	0.24
タマキビガイ	26	1.04
チヂミボラ	15	0.60
クロスジムシロガイ	2	0.08
(陸 産 貝)		
パツラマイマイ	3	0.12
オオコハクガイ	11	0.44
ベッコウマイマイ科の一種	4	0.16
不 明 巻 貝	12	0.49
二 枚 貝 綱		
フネガイ科の一種 右	1	0.04
ムラサキインコ 右	2,171	86.56
〃 左	2,102	
イ ガ イ 右	86	
〃 左	94	3.75
エゾイガイ 右	62	
〃 左	67	2.61
マ ガ キ 左	1	0.04
チリハギガイ 右	22	0.88
〃 左	20	
多板綱ウスヒザラガイ科の一種	1	0.04
計	2,508	100%

DIII-6 住居跡P1埋土

種 名	個 数	貝構成率
ムラサキインコ		
計 測 可 右	193	90.23
〃 左	200	
殻 頂 右	121	
〃 左	99	
レ イ シ ガ イ	1	0.29
イ ボ ニ シ	1	0.29
コハクガイ科の一種	2	0.57
タマキビ?(幼貝)	1	0.29
チヂミボラ	1	0.29
不 明 巻 貝	3	0.86
ニシキウズガイ科の一種	1	0.29
サンショウスガイ(?)	1	0.29
エゾアワビ	1	0.29
シロガイ	9	2.59
マシジミ 右	11	3.45
〃 左	10	
マシジミ 左右不明	2	
アオガイ	1	0.29
チシマクジツボ		
ムラサキウニ	最少個体 3	
計	348	100.02%



表3. ムラサキインコ右殻 殻高・殻長相関表

## D III - 5 住居跡

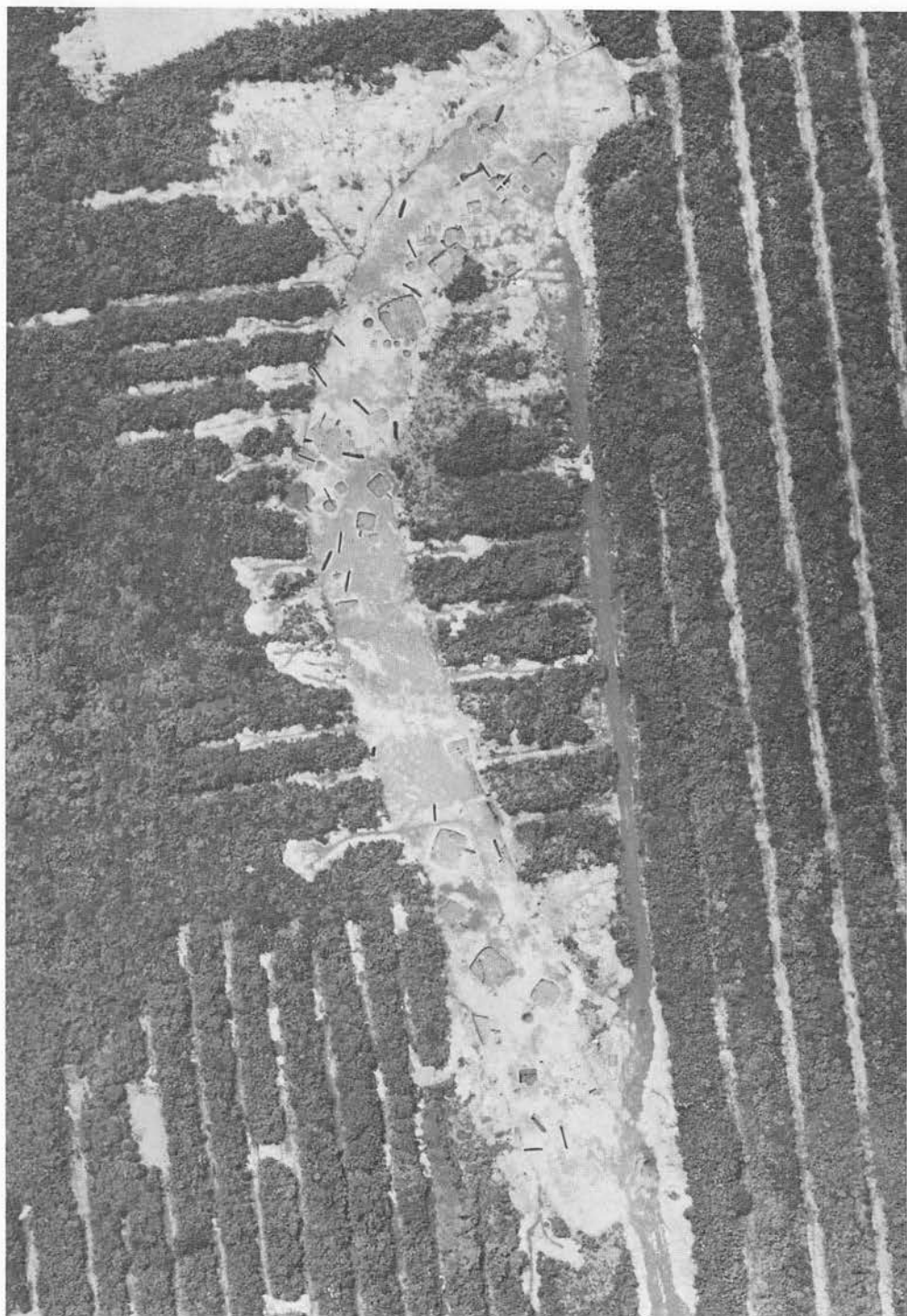
殻長(x) 殻高(y)	5mm未満	5mm以上 10mm未満	10mm以上 15mm未満	15mm以上 20mm未満	20mm以上 25mm未満	計
50mm以上					1 (0.26%)	1 (0.26%)
45mm以上 50mm未満				1 (0.26%)		1 (0.26%)
40mm以上 45mm未満			2 (0.52%)	13 (3.36%)	1 (0.26%)	16 (4.14%)
35mm以上 40mm未満			21 (5.43%)	24 (6.20%)		45 (11.63%)
30mm以上 35mm未満			42 (10.85%)	7 (1.81%)		49 (12.66%)
25mm以上 30mm未満			47 (12.14%)	1 (0.26%)		48 (12.4%)
20mm以上 25mm未満		6 (1.55%)	36 (9.30%)			42 (10.85%)
15mm以上 20mm未満		33 (8.53%)	5 (1.29%)			38 (9.82%)
10mm以上 15mm未満		47 (12.14%)				47 (12.14%)
5mm以上 10mm未満	65 (16.8%)	25 (6.46%)				90 (23.26%)
5mm未満	10 (2.58%)					10 (2.58%)
計	75 (19.38%)	111 (28.68%)	153 (39.53%)	46 (11.89%)	2 (0.52%)	387 (100%)

上. 点数 下. %

## D III - 6 住居跡

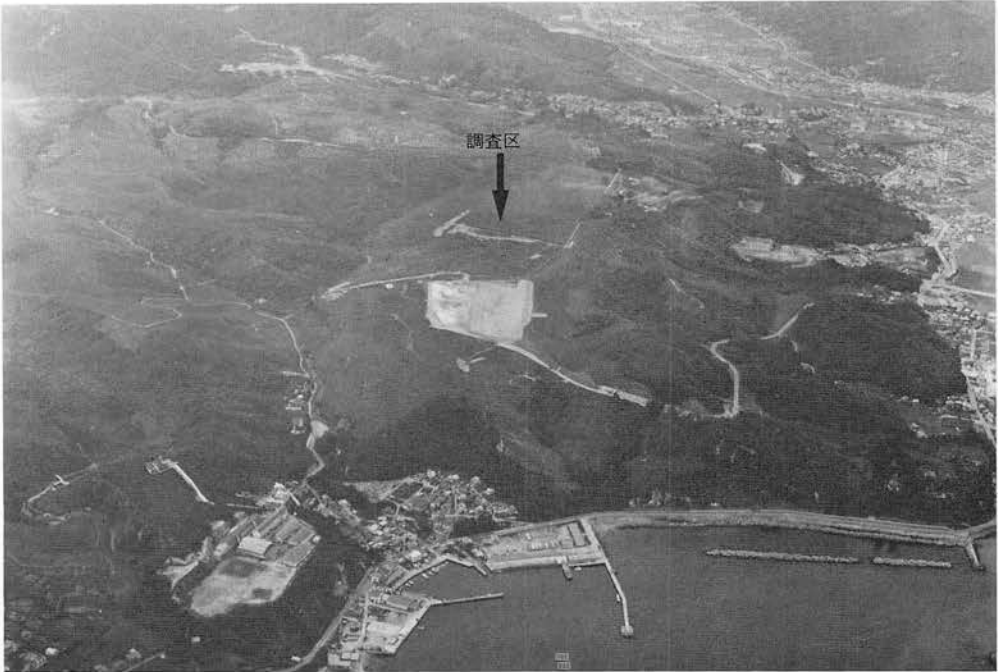
殻長(x) 殻高(y)	5mm未満	5mm以上 10mm未満	10mm以上 15mm未満	15mm以上 20mm未満	20mm以上 25mm未満	計
50mm以上						
45mm以上 50mm未満						
40mm以上 45mm未満			1 (0.8%)	1 (0.8%)		2 (1.6%)
35mm以上 40mm未満			17 (13.6%)	7 (5.6%)		24 (19.2%)
30mm以上 35mm未満			60 (48%)			60 (48%)
25mm以上 30mm未満			26 (20.8%)			26 (20.8%)
20mm以上 25mm未満		2 (1.6%)	4 (3.2%)			6 (4.8%)
15mm以上 20mm未満		1 (0.8%)				1 (0.8%)
10mm以上 15mm未満		3 (2.4%)				3 (2.4%)
5mm以上 10mm未満	1 (0.8%)	1 (0.8%)				2 (1.6%)
5mm未満	1 (0.8%)					1 (0.8%)
計	2 (1.6%)	7 (5.6%)	108 (86.4%)	8 (6.4%)		125 (100%)

上. 点数 下. %



真上から（下が北）

図版1 空中写真(1)



a. 東から



b. 南東から

図版 2 空中写真(2)



a. C III-1 住居跡 全景



b. C III-2 住居跡 全景



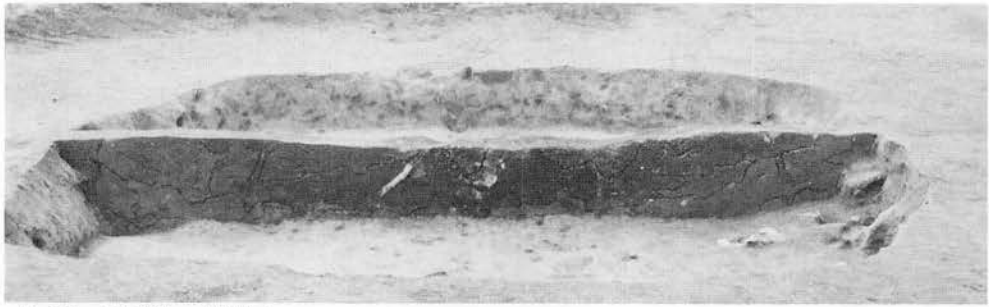
a. C III-1 住居跡 埋壙



b. C III-2 住居跡 炉



c. C III-2 住居跡 炉断面



d. D III-1 住居跡 土層断面

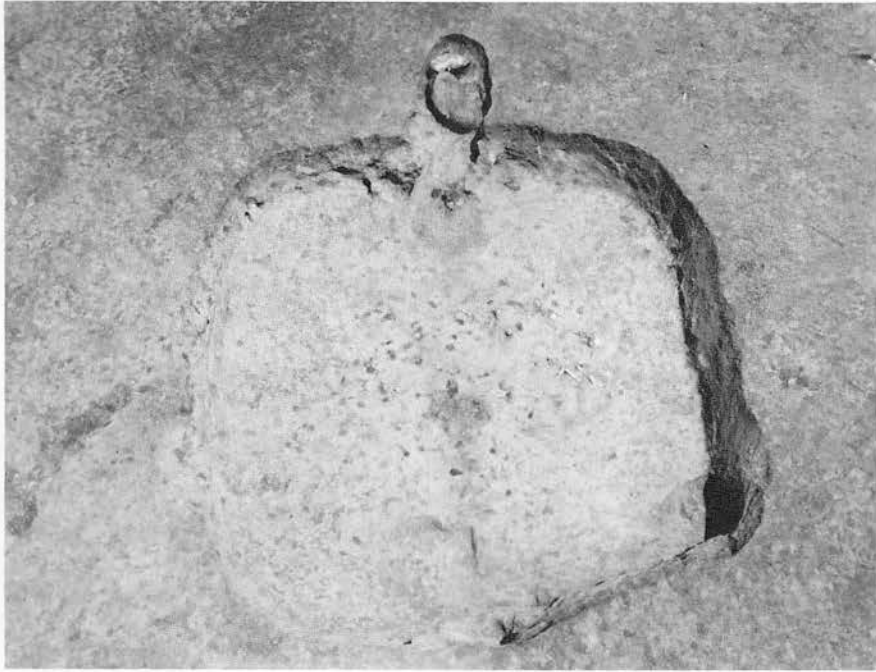


e. D III-1 住居跡 カマド



f. D III-1 住居跡 煙道部土層断面

図版4 C III-1・C III-2・D III-1 住居跡



a. D III-1 住居跡 全景



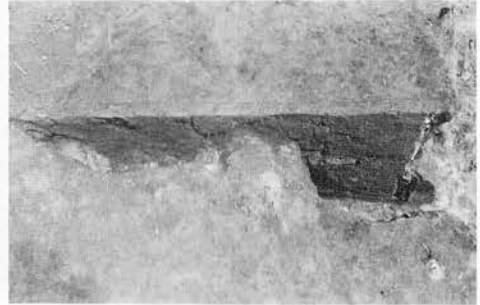
b. D III-2 住居跡 全景



a. D III-2 住居跡 土層断面



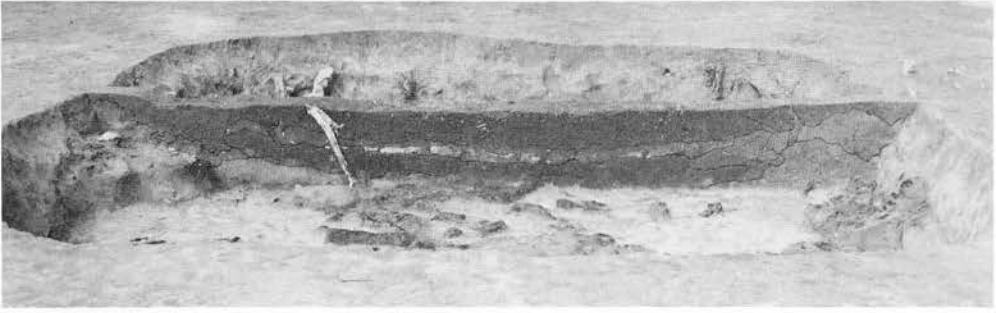
b. D III-2 住居跡 カマド



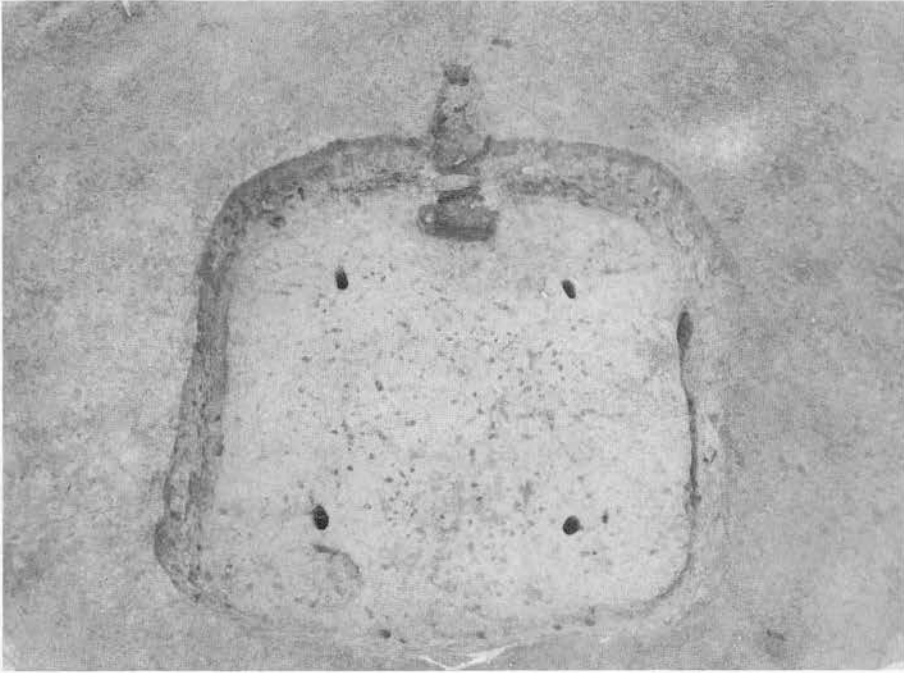
c. D III-2 住居跡 煙道部土層断面



d. D III-3 住居跡 炭化材検出状況



a. 土層断面



b. 全景

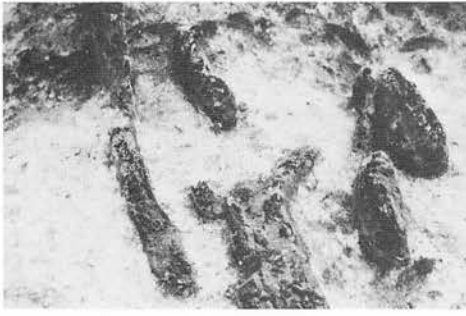


c. 十和田 a 火山灰堆積状況

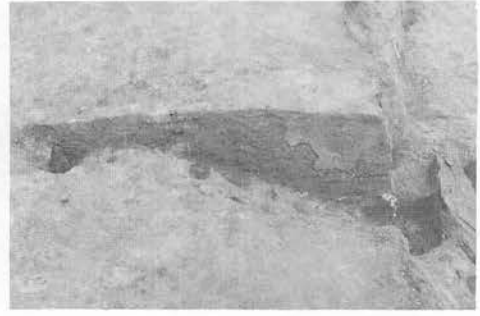


d. 炭化材検出状況





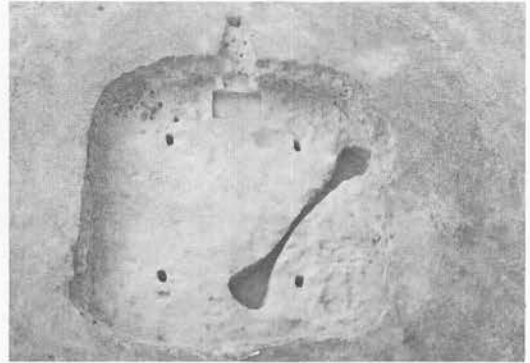
a. D III-3 住居跡 炭化材検出状況



b. D III-3 住居跡 煙道部土層断面



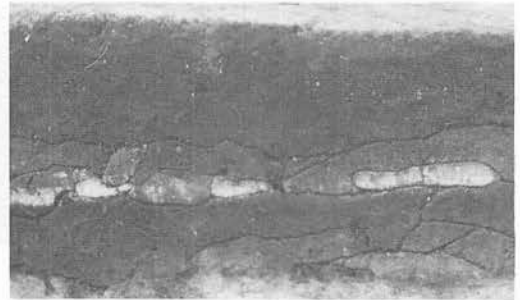
c. D III-3 住居跡 カマド



d. D III-3 住居跡 掘り方全景



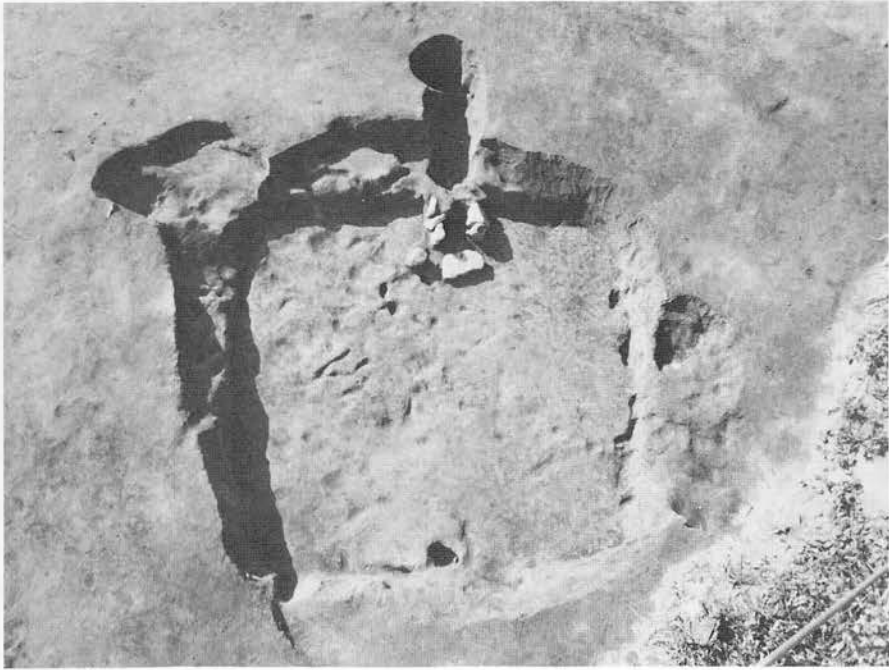
e. D III-3 住居跡 柱穴



f. D III-4 住居跡 十和田 a 火山灰堆状況



g. D III-4 住居跡 土層断面



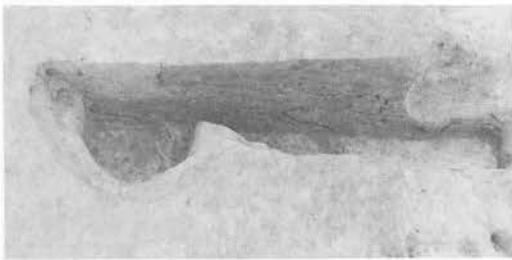
a. 全景



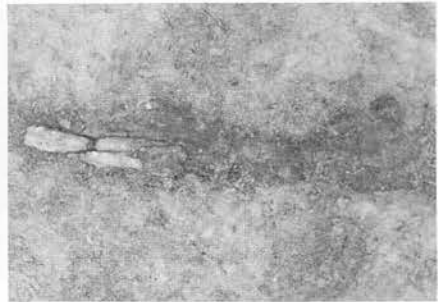
b. カマド



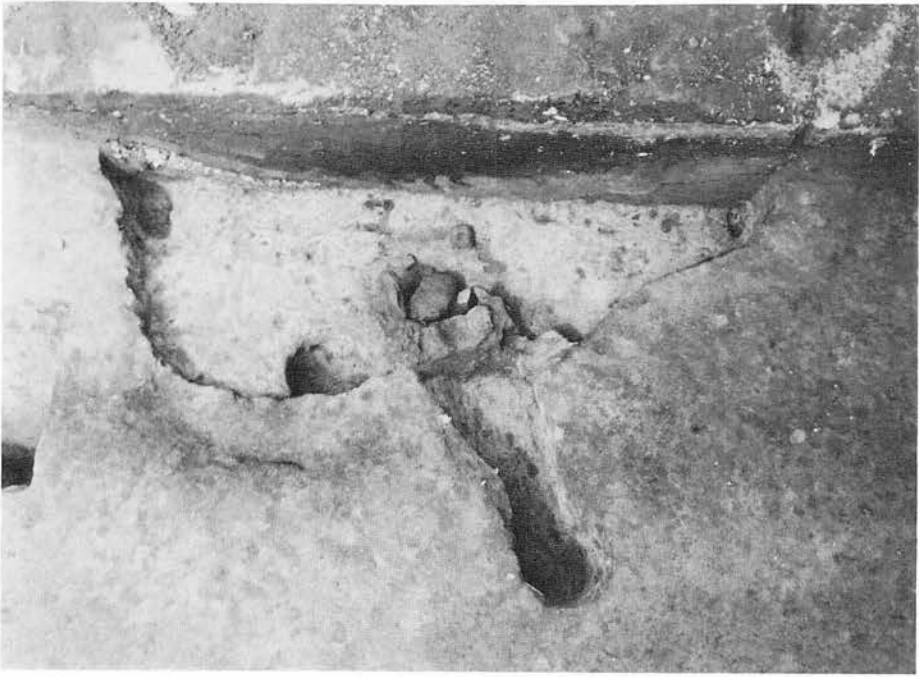
c. 炭化材検出状況



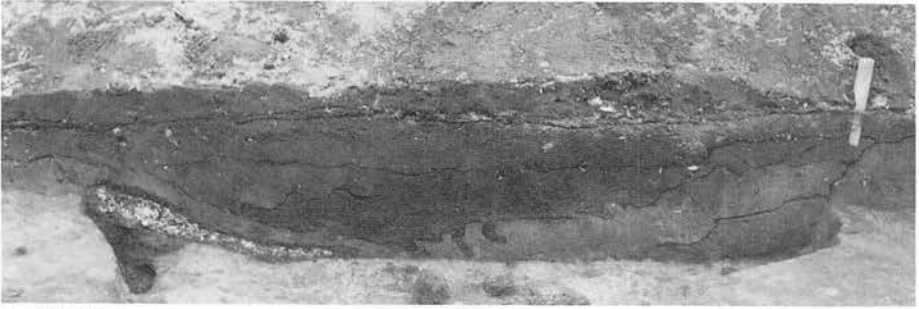
d. 煙道部土層断面



e. 刀子出土状況



a. 全景



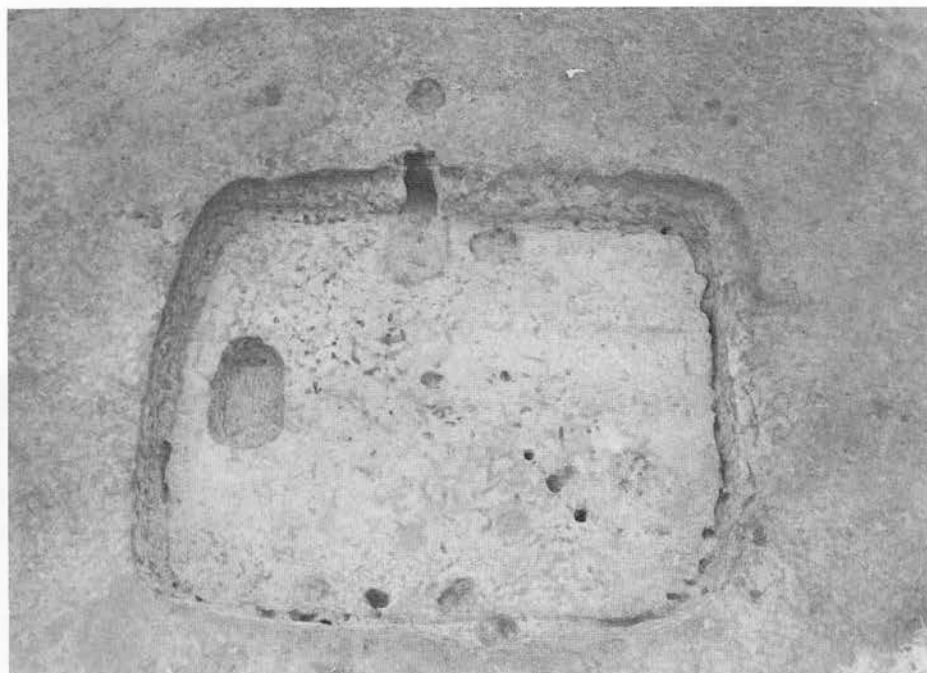
b. 土層断面



c. 貝層



d. カマド



a. 全景



b. 土層断面



c. PI 土層断面



d. PI



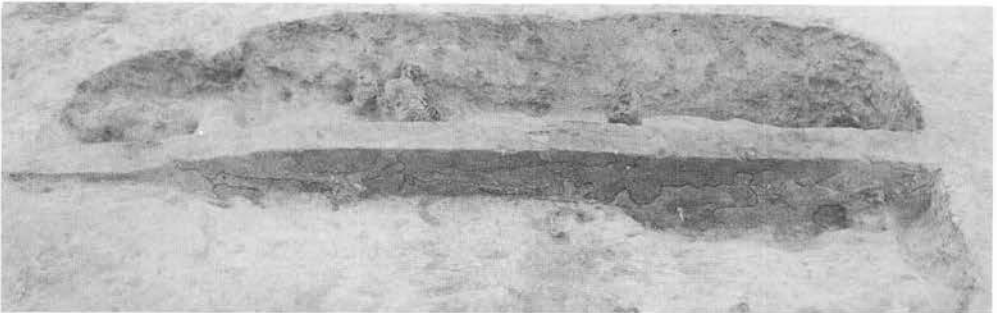
a. D III-6 住居跡 煙道部土層断面



b. D III-6 住居跡 カマド



c. E III-1 住居跡 全景



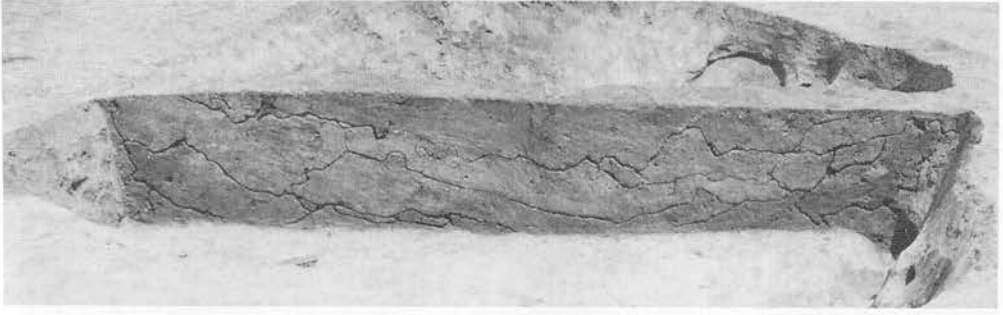
d. F III-1 住居跡 土層断面



a. F III-1 住居跡 全景



b. F III-2 住居跡 全景



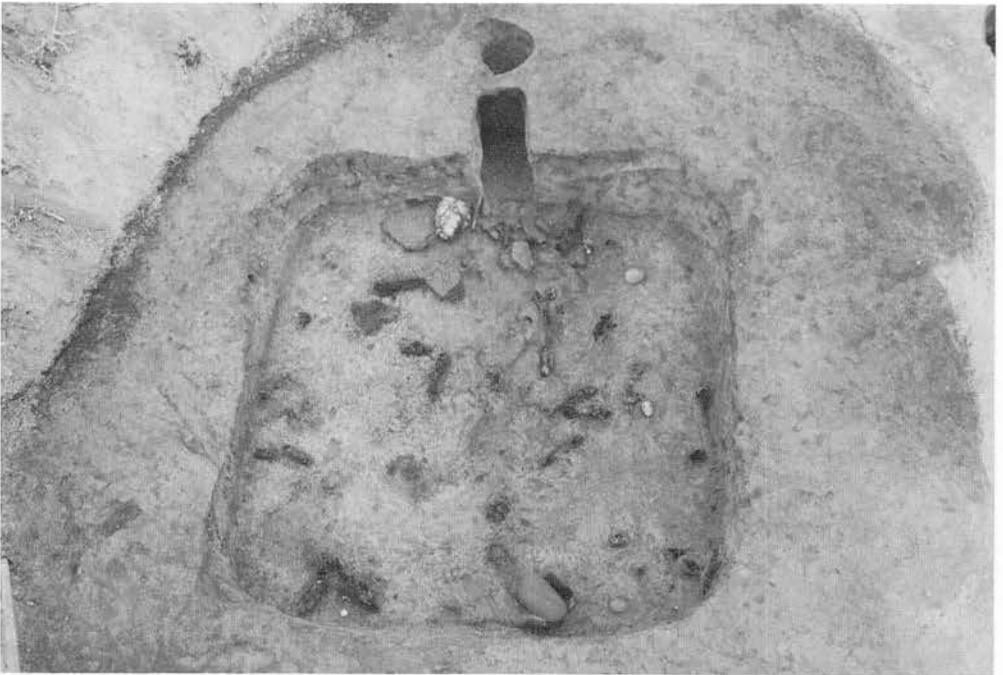
a. F III-2 住居跡 土層断面



b. F III-2 住居跡 煙道部土層断面



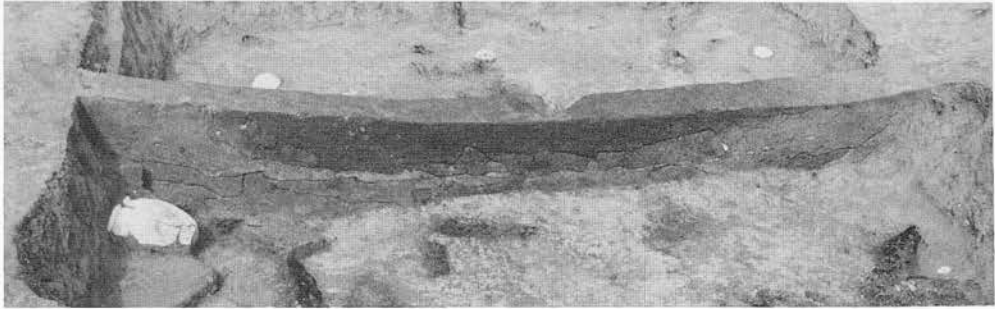
c. F III-2 住居跡 カマド



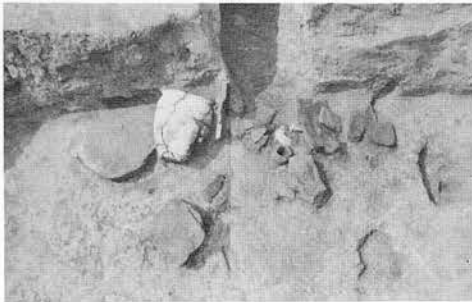
d. F III-3 住居跡 炭化材検出状況



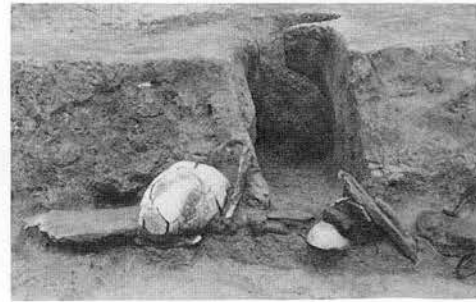
a. 全景



b. 土層断面

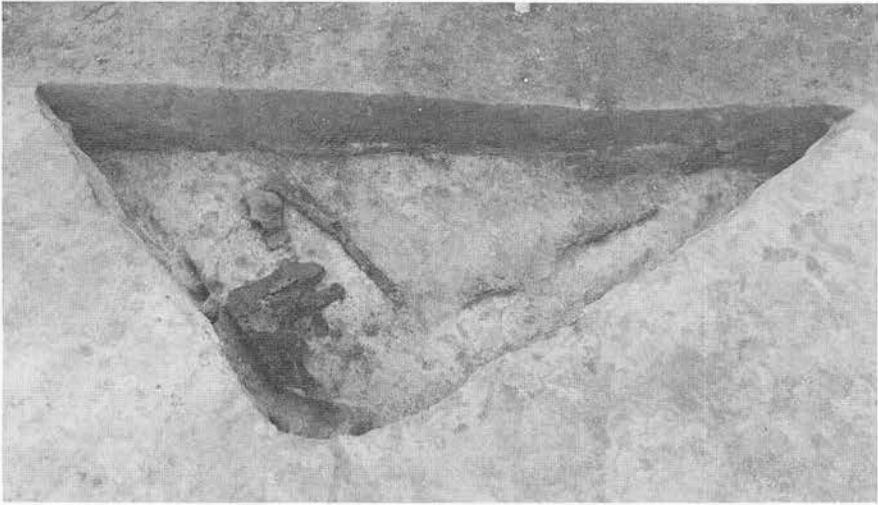


c. カマド

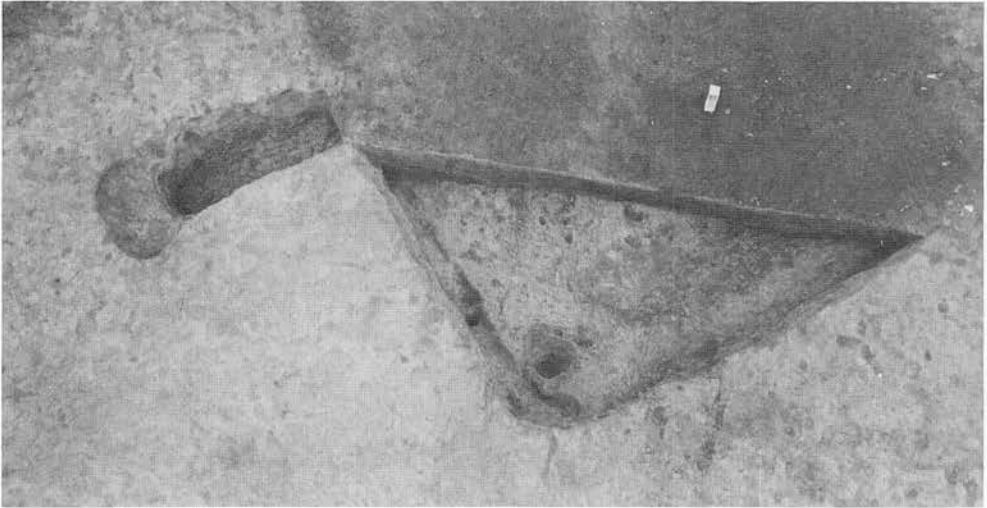


d. カマド 断ち割り





a. F III—4 住居跡 炭化材・焼土検出状況



b. F III—4 住居跡 全景



c. G II—1 住居跡 土層断面



a. 炭化材検出状況



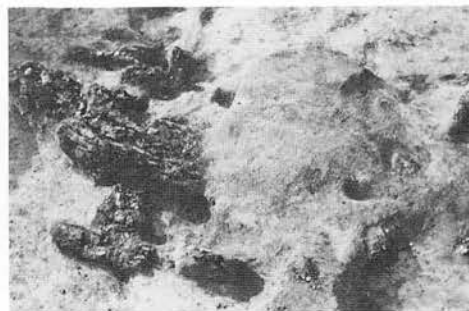
b. 炭化材検出状況



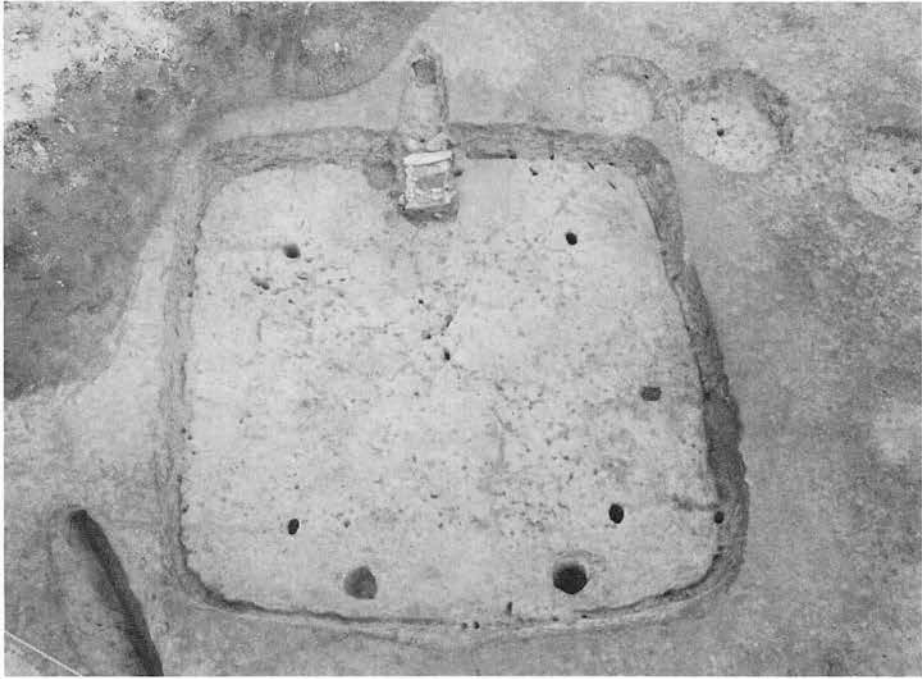
c. 炭化材検出状況



d. 炭化材検出状況



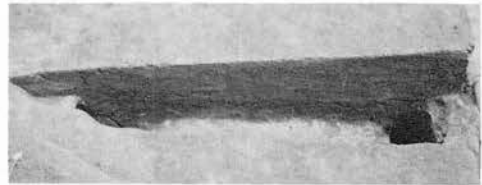
e. 炭化材検出状況



a. 全景



b. 土器出土状況



c. 煙道部土層断面



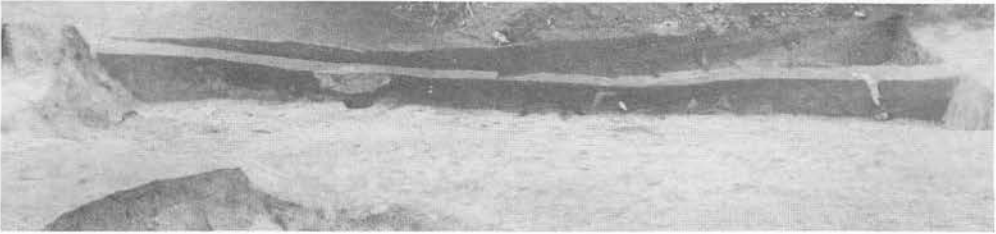
d. 土器出土状況



e. カマド



a. G II-2 住居跡 全景



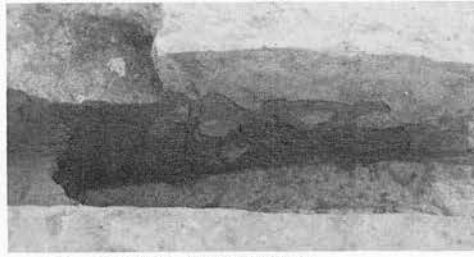
b. G II-3 住居跡 土層断面



c. G II-3 住居跡 炭化材検出状況



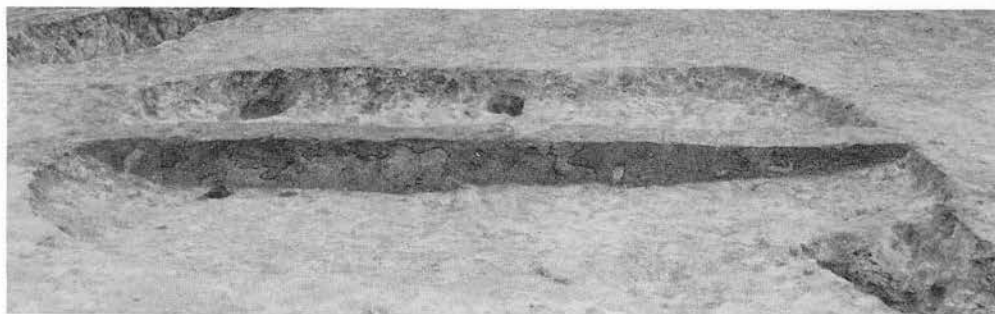
d. G II-3 住居跡 カマド



a. G II-3 住居跡 煙道部土層断面



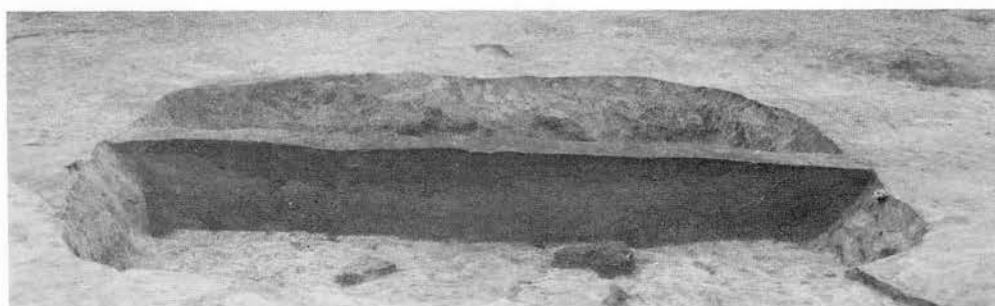
b. G III-1・G III-2・G III-3 住居跡 全景



a. G III-4 住居跡 土層断面

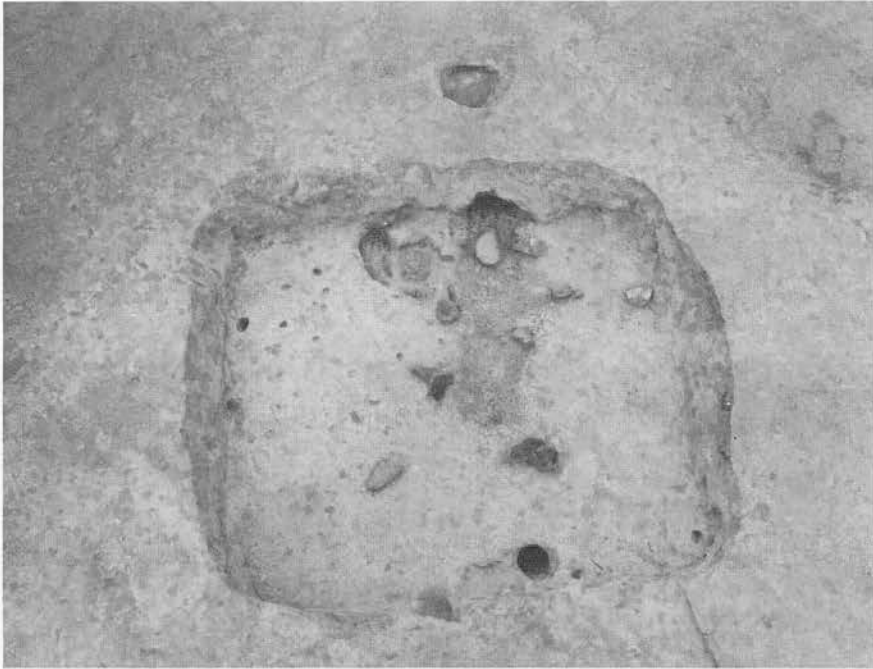


b. G III-4 住居跡 全景



c. H I-1 住居跡 土層断面

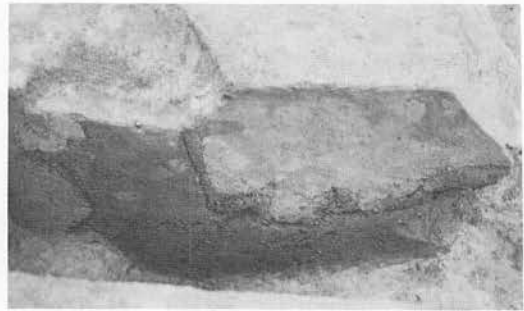
図版21 G III-4・H I-1 住居跡



a. H I - I 住居跡 全景



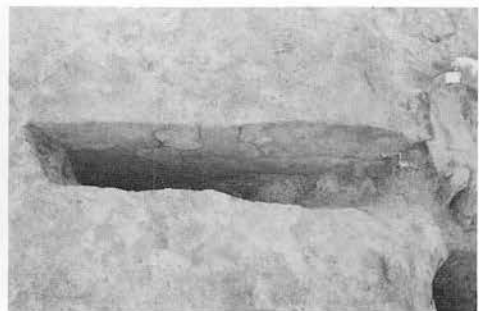
b. H I - I 住居跡 カマド



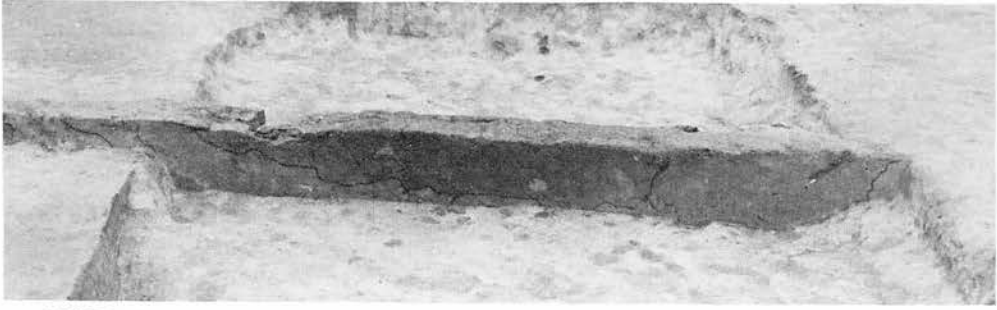
c. H I - I 住居跡 煙道部土層断面



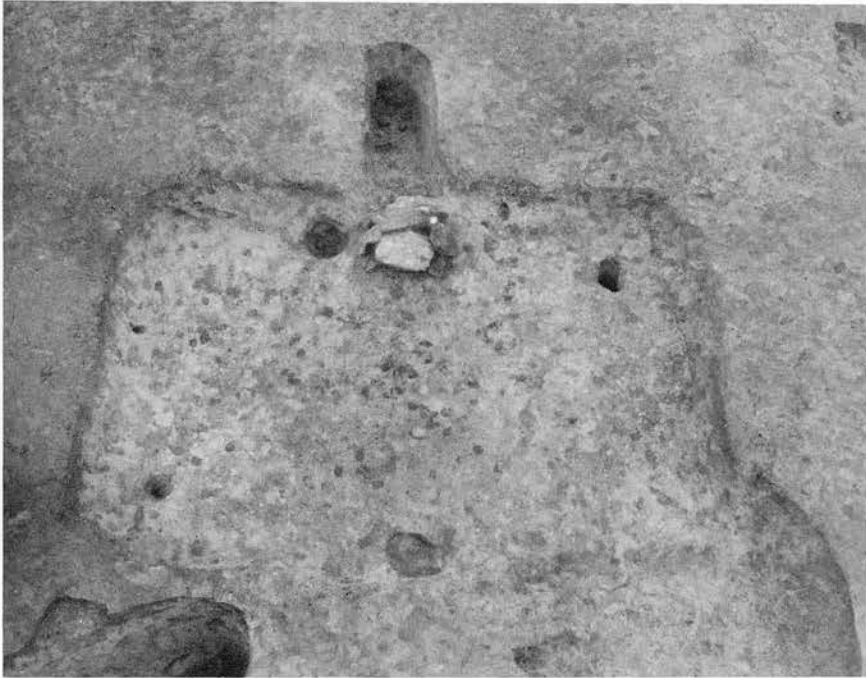
d. H I - I 住居跡 カマド断ち割り



e. H II - I 住居跡 煙道部土層断面



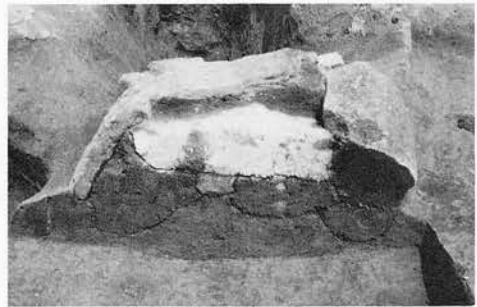
a. 土層断面



b. 全景

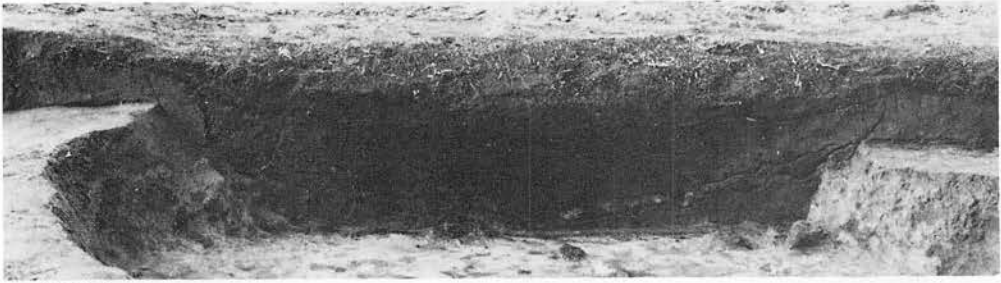


c. カマド 断ち割り①



d. カマド 断ち割り②

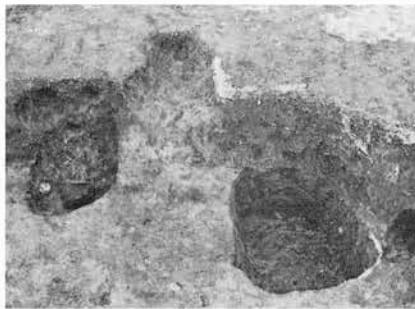




a. 土層断面



b. 全景



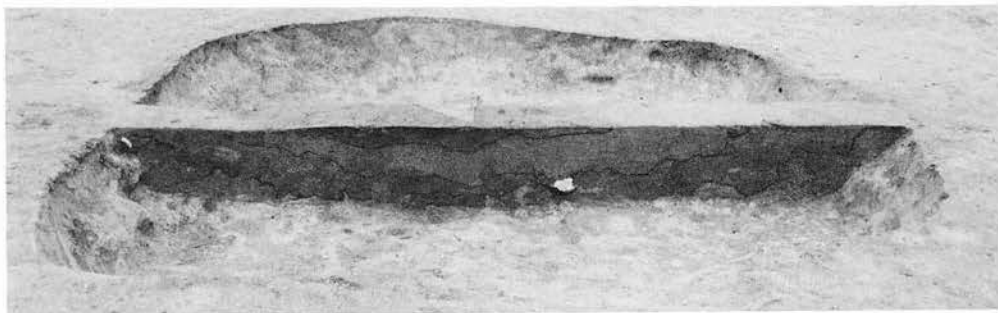
c. 1号カマド



d. 2号カマド



e. 3号カマド



a. H II-2 住居状遺構 土層断面



b. H II-2 住居状遺構 全景

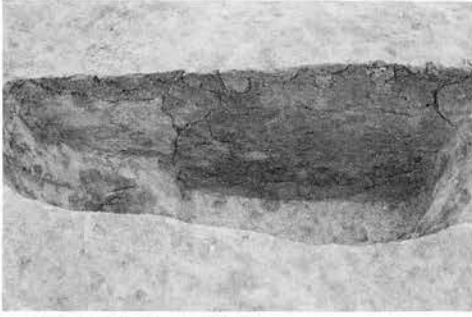


c. C III-51ピット 土層断面



d. C III-51ピット 全景

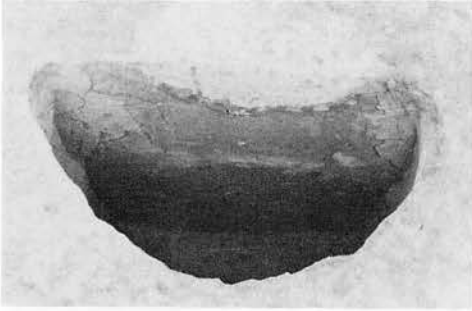
図版25 住居状遺構・ピット(1)



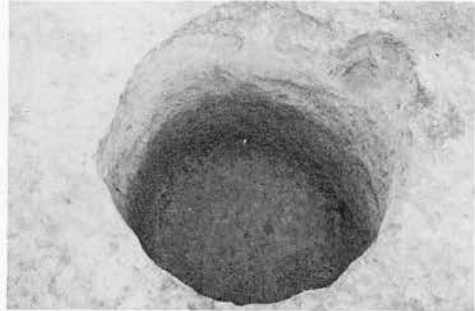
a. C III-52ピット 土層断面



b. C III-52ピット 全景



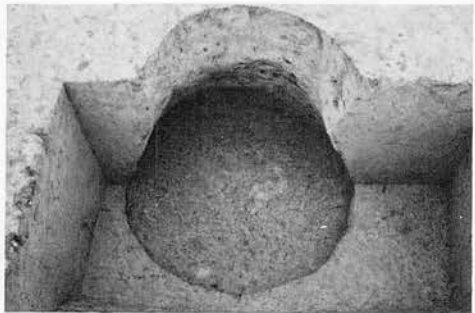
c. C III-54ピット 土層断面



d. C III-54ピット 全景



e. C III-55ピット 土層断面



f. C III-55ピット 全景



g. C III-56ピット 土層断面



h. C III-56ピット 全景



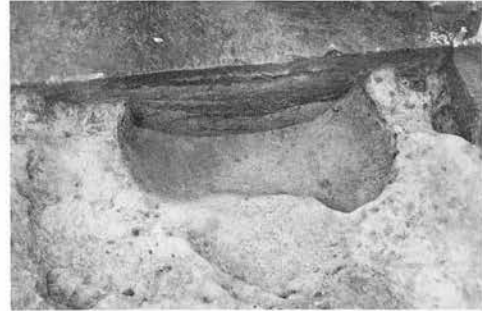
a. C III-57ピット 土層断面



b. C III-57ピット 全景



c. C III-58ピット 土層断面



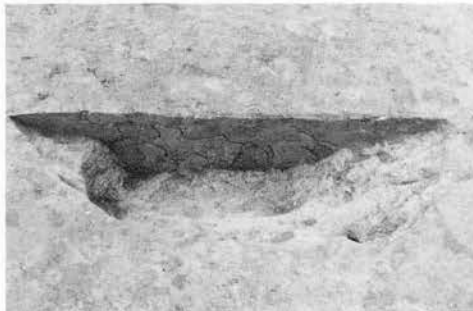
d. C III-58ピット 全景



e. D III-51ピット 土層断面



f. D III-51ピット 全景



g. D III-52ピット 土層断面



h. D III-52ピット 全景

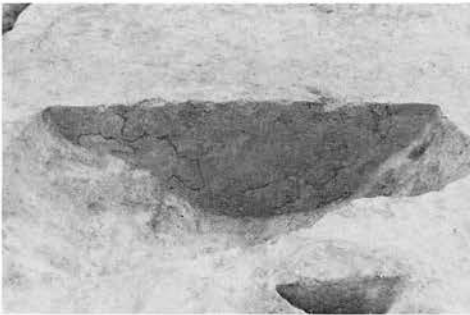
図版27 ピット(3)



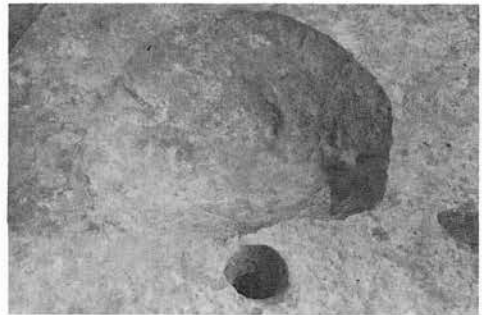
a. D III-53ピット 全景



b. E III-51ピット 全景



c. F III-51ピット 土層断面



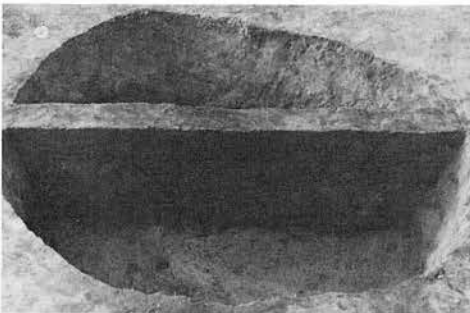
d. F III-51ピット 全景



e. F III-52ピット 全景



f. F III-53ピット 全景

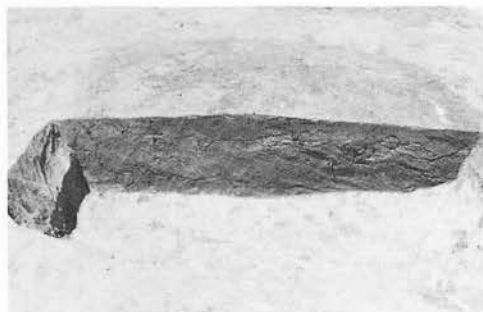


g. F III-54ピット 土層断面

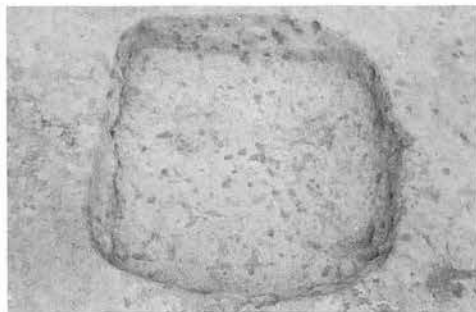


h. F III-54ピット 全景

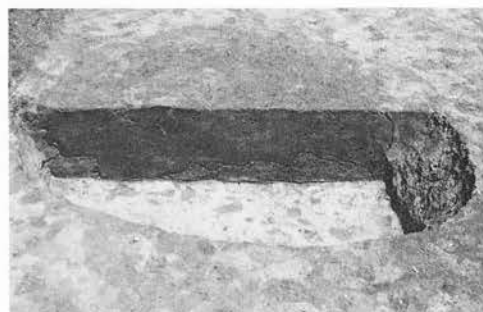
図版28 ピット(4)



a. F III-55ピット 土層断面



b. F III-55ピット 全景



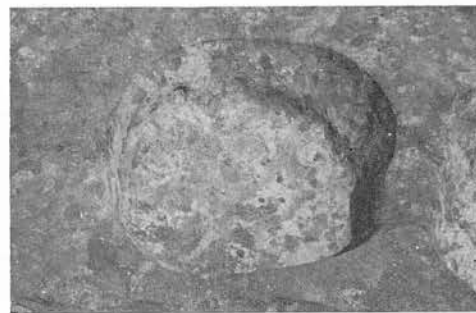
c. G II-51ピット 土層断面



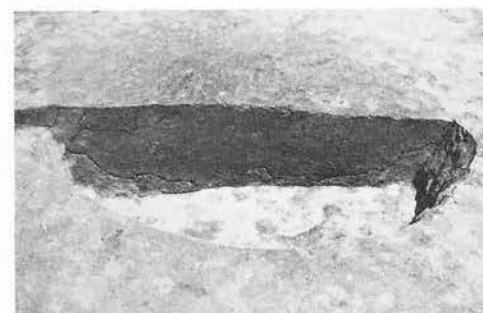
d. G II-51ピット 全景



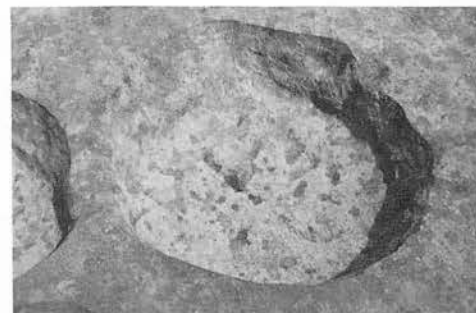
e. G II-52ピット 土層断面



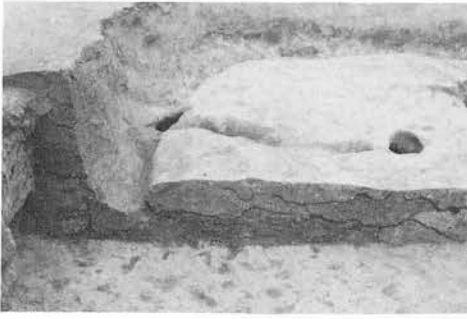
f. G II-52ピット 全景



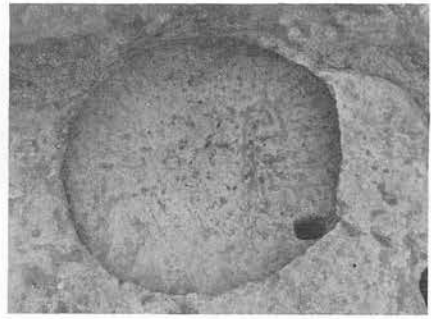
g. G II-53ピット 土層断面



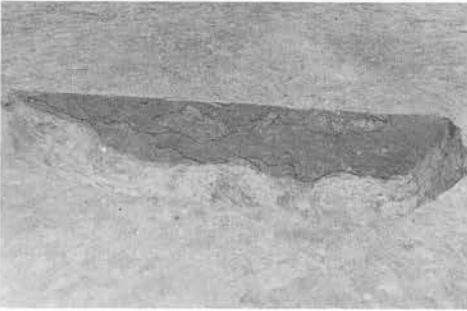
h. G II-53ピット 全景



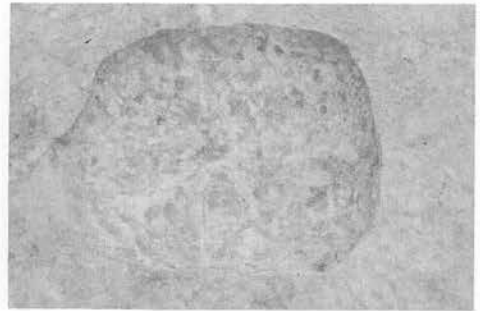
a. G II-54ピット 土層断面



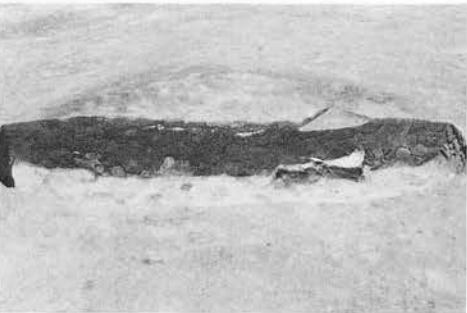
b. G II-54ピット 全景



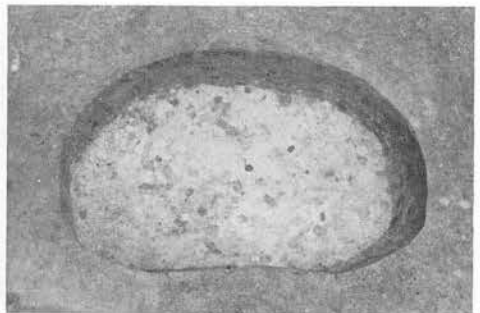
c. G II-55ピット 土層断面



d. G II-55ピット 全景



e. G II-56ピット 土層断面



f. G II-56ピット 全景

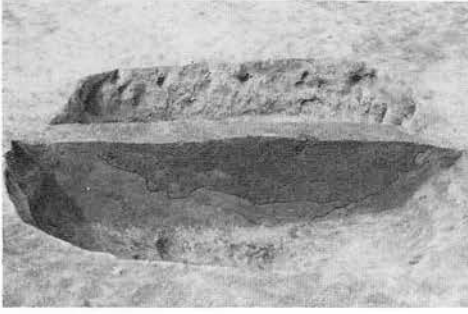


g. G II-56ピット 土器出土状況

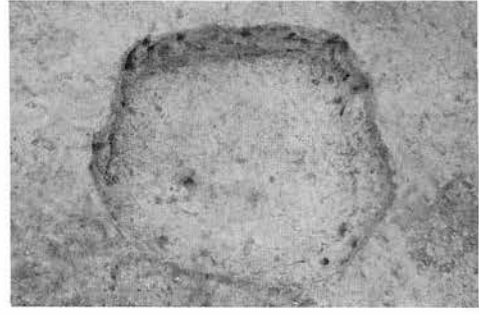


h. G III-52ピット 全景

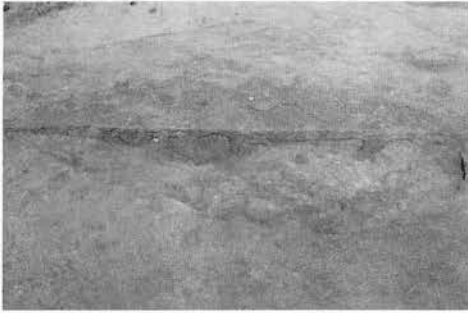
図版30 ピット(6)



a. G III-51ピット 土層断面



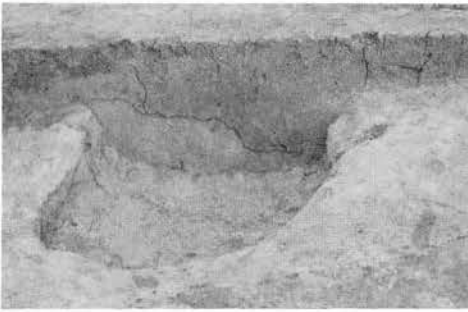
b. G III-51ピット 全景



c. G III-53ピット 土層断面



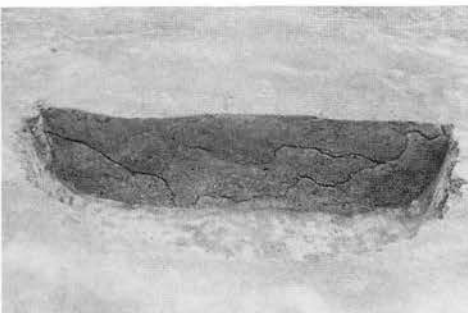
d. G III-53ピット 全景



e. G III-54ピット 土層断面



f. G III-54ピット 全景



g. G III-55ピット 土層断面

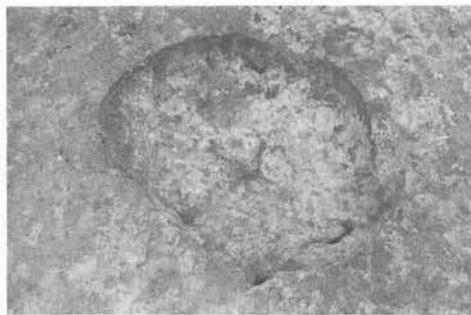


h. G III-55ピット 全景

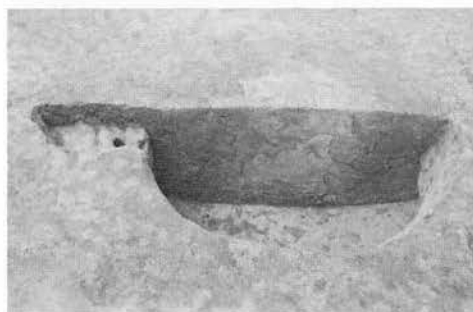




a. G III-56ピット 土層断面



b. G III-56ピット 全景



b. G III-57・58ピット 土層断面



c. G III-57・58ピット 全景



d. G III-59ピット 土層断面



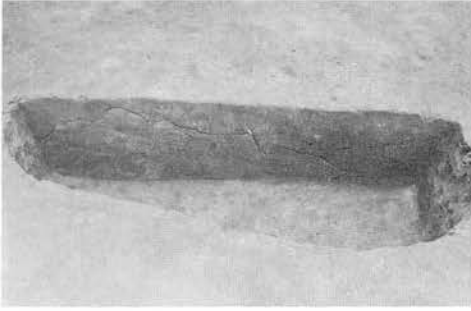
e. G III-59ピット 全景



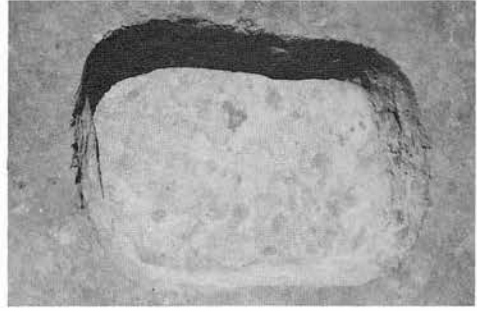
f. H I-51ピット 全景



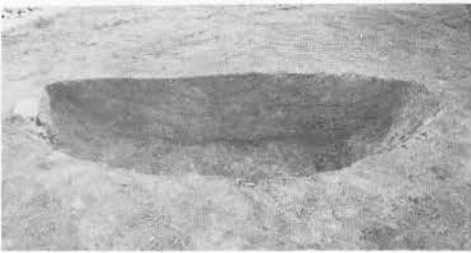
g. H I-51ピット 断ち割り



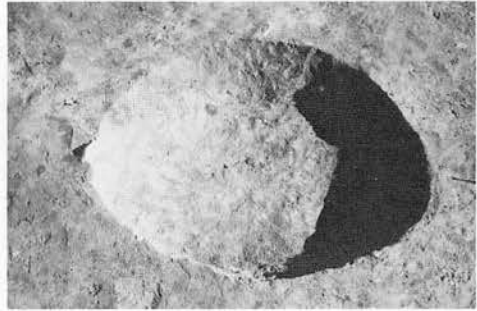
a. H II-51ピット 土層断面



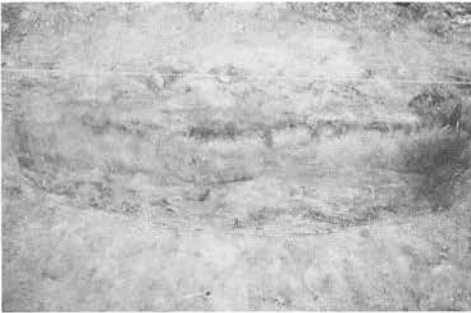
b. H II-51ピット 全景



c. H VIII-51ピット 土層断面



d. H VIII-51ピット 全景



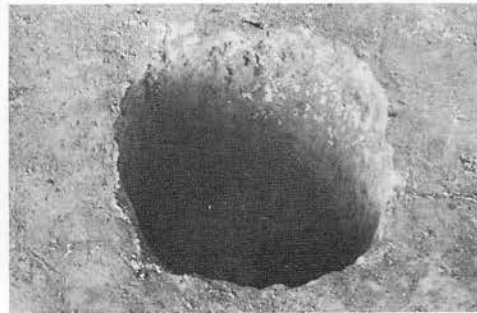
e. H VIII-52ピット 土層断面



f. H VIII-52ピット 全景



g. H VIII-53ピット 土層断面



h. H VIII-53ピット全景

図版33 ピット(9)



a. GⅧ-51ピット 全景



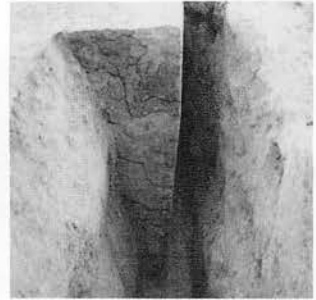
b. IⅨ-51ピット 全景



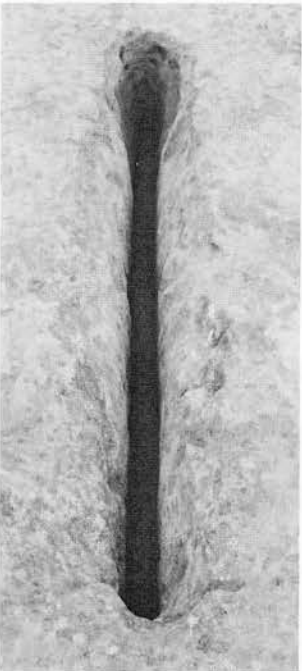
c. CⅢ-101 土層断面



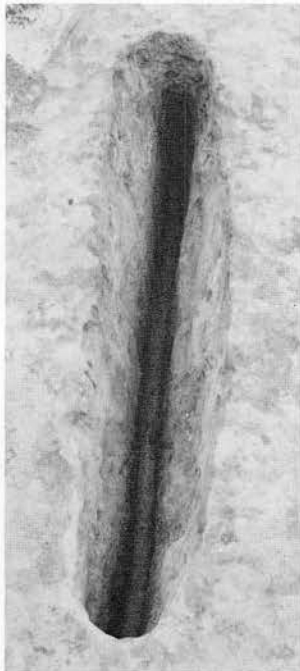
d. CⅢ-102 土層断面



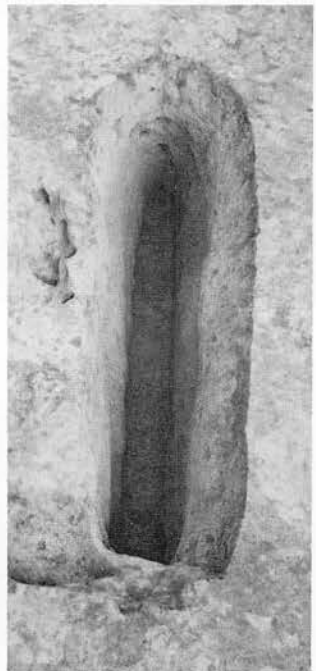
e. CⅢ-103 土層断面



f. CⅢ-101 全景



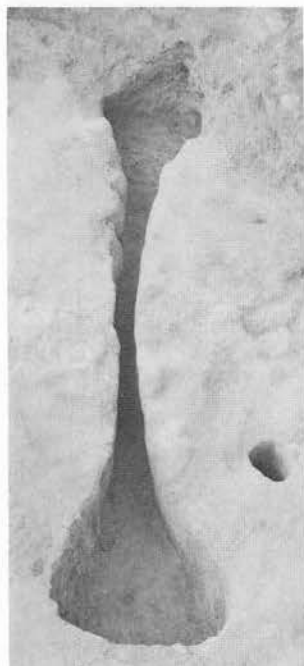
g. CⅢ-102 全景



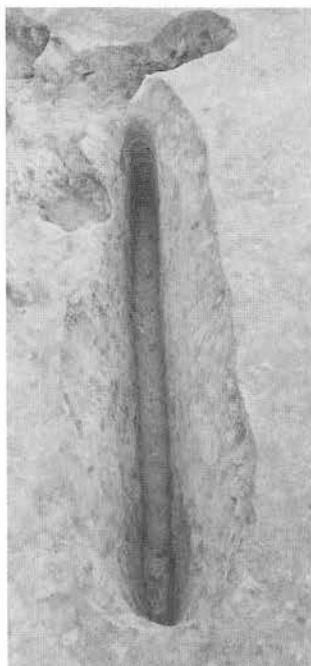
h. CⅢ-103 全景

※落とし穴は番号だけで表示

図版34 ピット(10)・落とし穴(1)



a. D III-101 全景



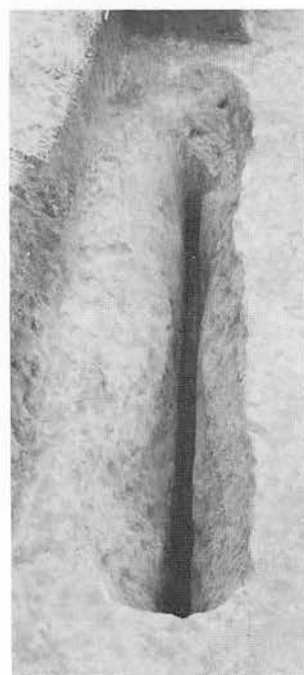
b. D III-102 全景



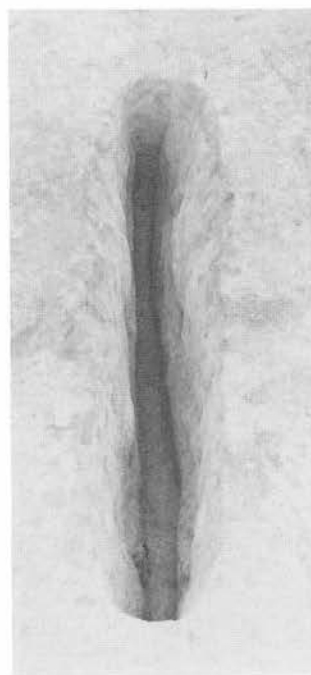
c. D III-102 土層断面



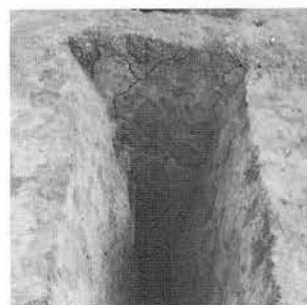
d. E III-101 土層断面



e. E III-101 全景



f. E III-102 全景



g. E III-102 土層断面

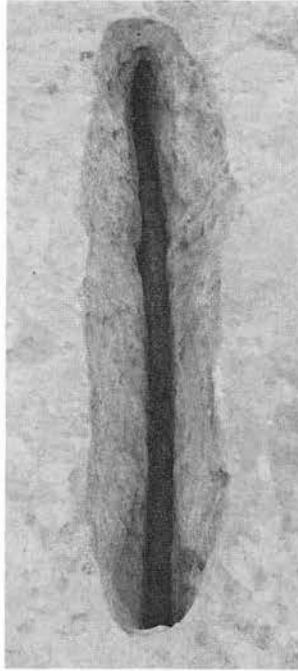


h. E III-103 土層断面

図版35 落とし穴(2)



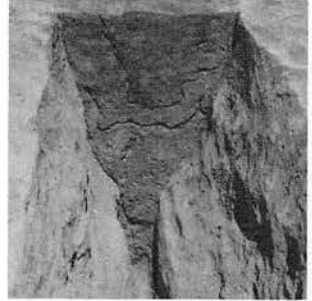
a. E III-103 全景



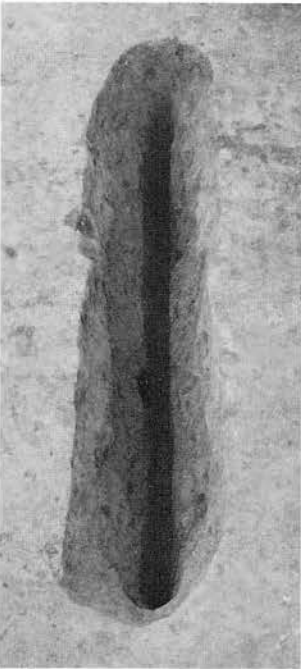
b. F III-101 全景



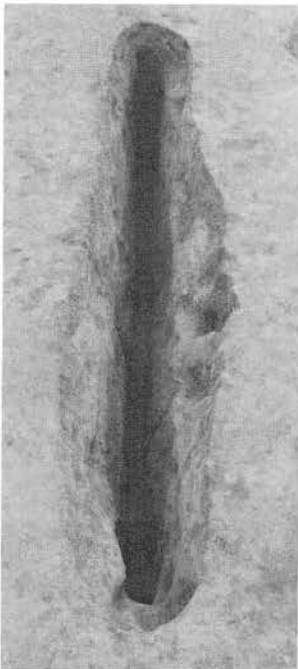
c. F III-101 土層断面



d. F III-102 土層断面



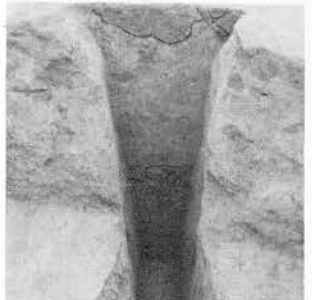
e. F III-102 全景



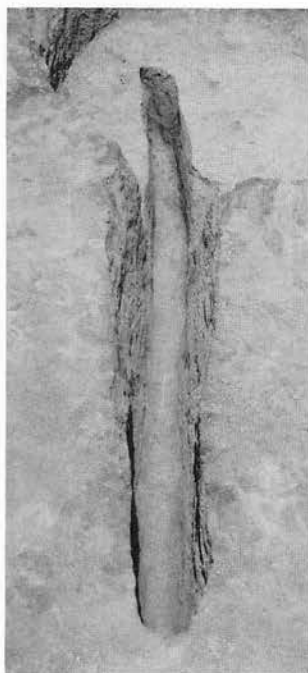
f. F III-103 全景



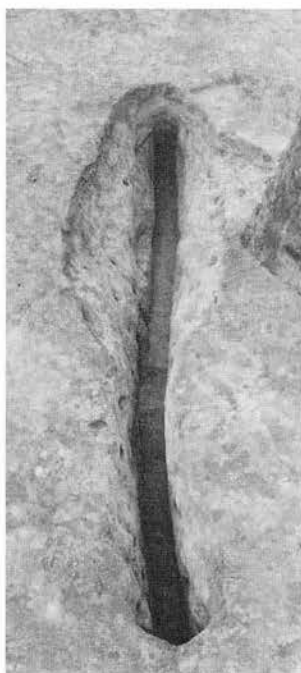
g. F III-103 土層断面



h. F III-104 土層断面



a. F III-104 全景



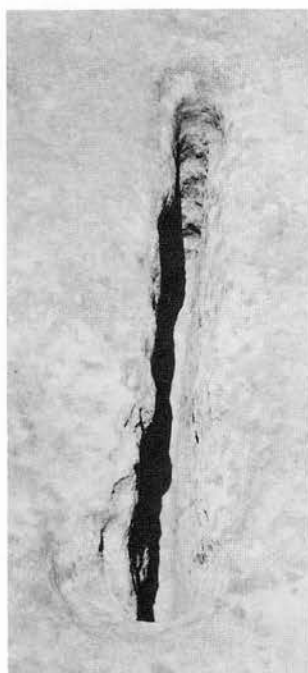
b. G II-101 全景



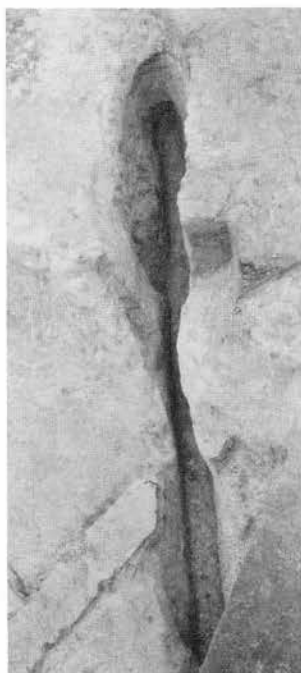
c. G II-102 土層断面



d. G III-101 土層断面



e. G II-102 全景

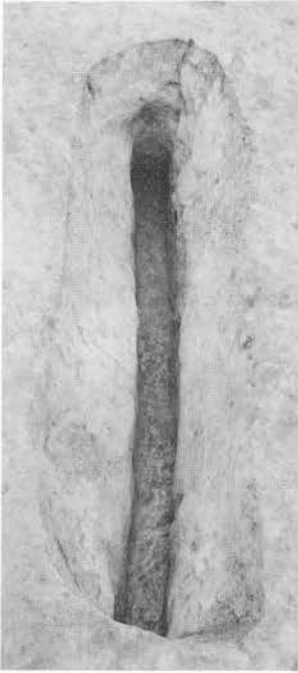


f. G II-103 全景

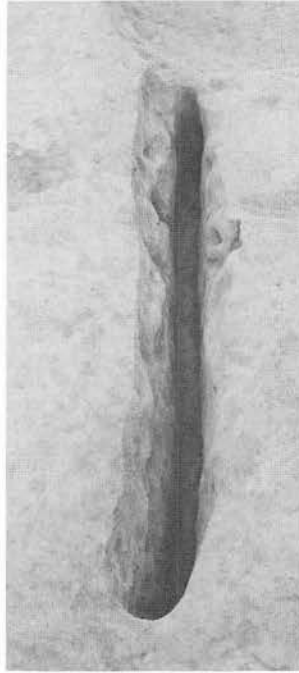


g. G III-101 全景

図版37 落とし穴(4)



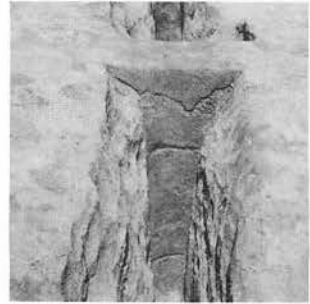
a . G III-102 全景



b . G III-103 全景



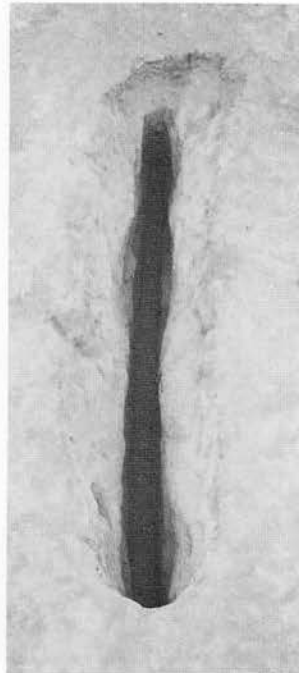
c . G III-102 土層断面



d . G III-103 土層断面



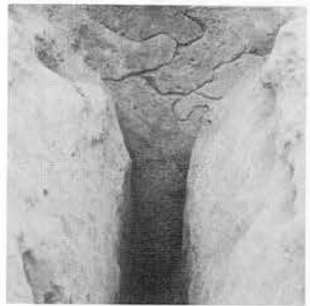
e . G III-104 全景



f . G III-105 全景

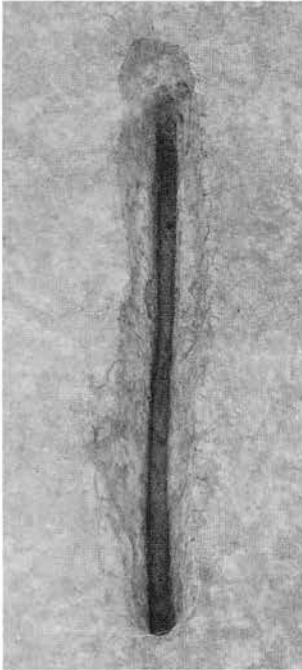


g . G III-104 土層断面

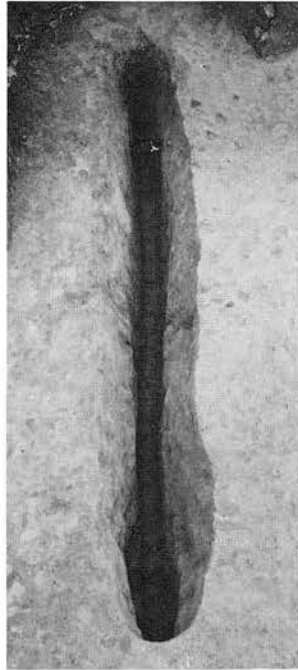


h . G III-105 土層断面

図版38 落とし穴(5)



a. G III-106 全景



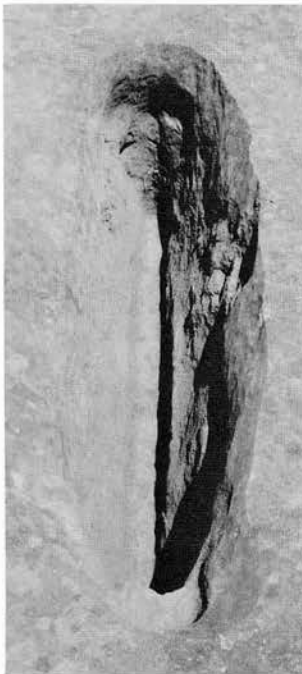
b. G III-107 全景



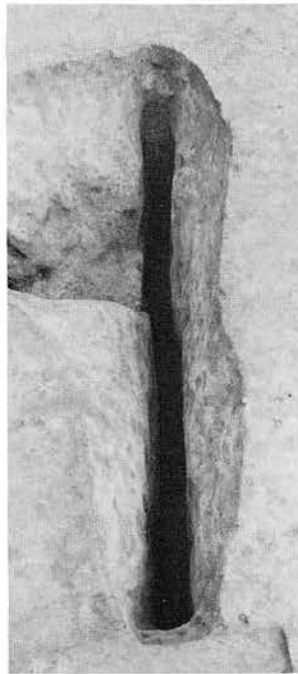
c. G III-106 土層断面



d. G III-107 土層断面



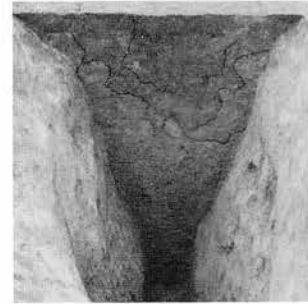
e. H II-101 全景



f. H II-102 全景



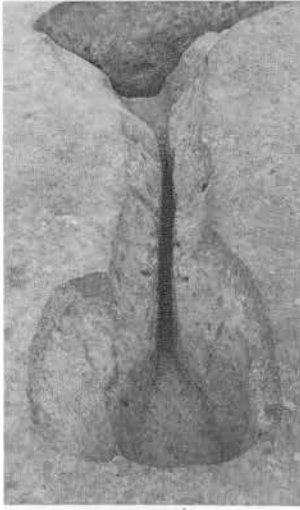
g. H I-101 土層断面・全景



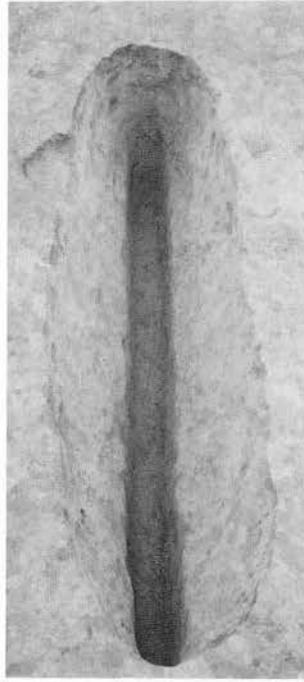
h. H II-101 土層断面

図版39 落とし穴(6)

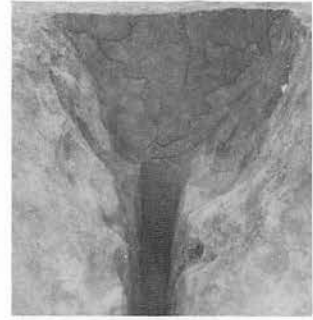




a. H II-103 全景



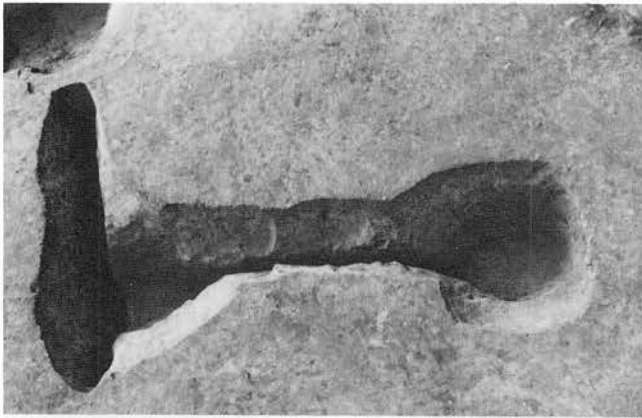
b. H II-104 全景



d. H II-102 土層断面



e. H II-103 土層断面



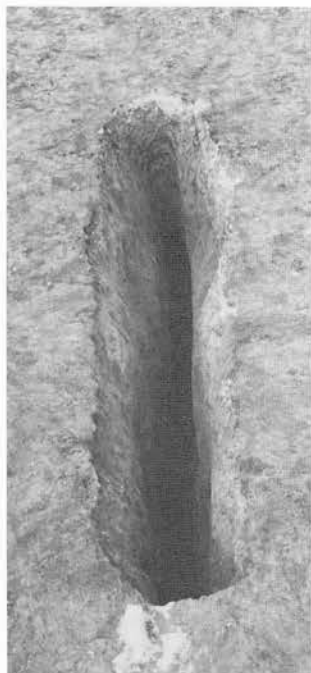
c. H II-102・103 重複全景



f. H II-104 土層断面



g. H VIII-101 土層断面



a. H VIII-101 全景



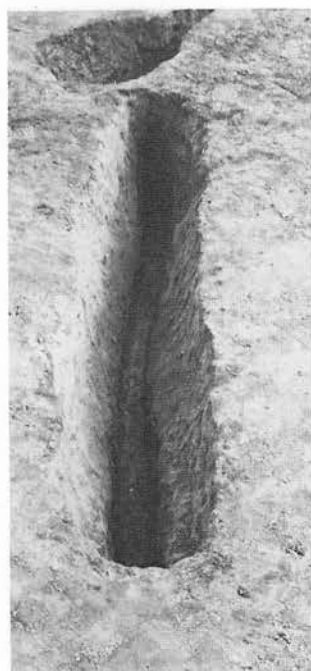
b. H VIII-102 全景



c. H VIII-102 土層断面



d. H VIII-103 土層断面



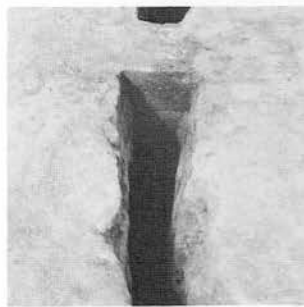
e. H VIII-103 全景



f. H VIII-104 全景



g. H VIII-104 土層断面(1)

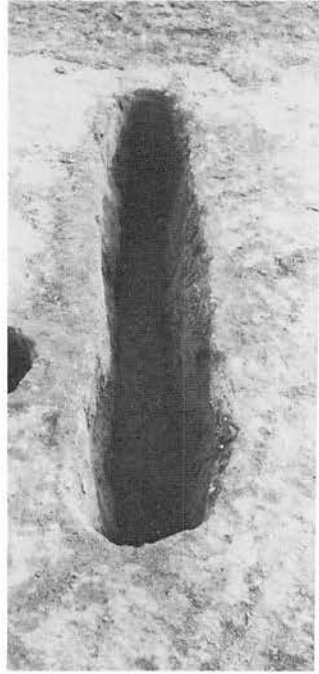


h. H VIII-104 土層断面(2)

図版41 落とし穴(8)



a. H VIII-105 全景



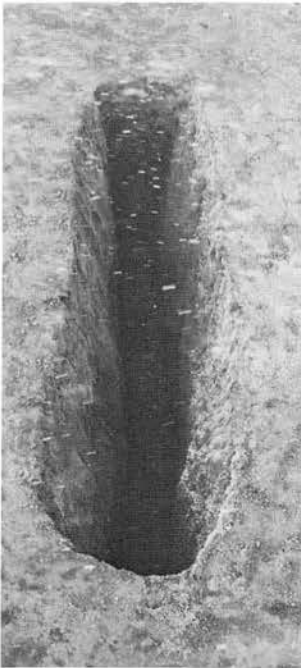
b. H VIII-106 全景



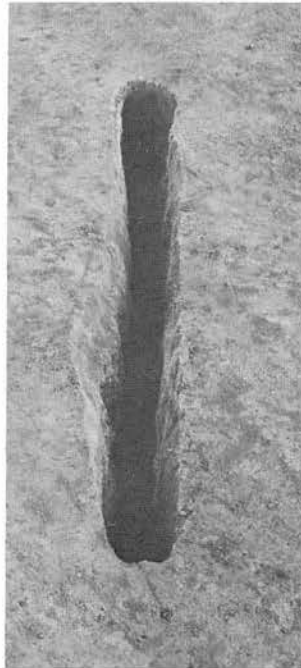
c. H VIII-105 土層断面



d. H VIII-106 土層断面



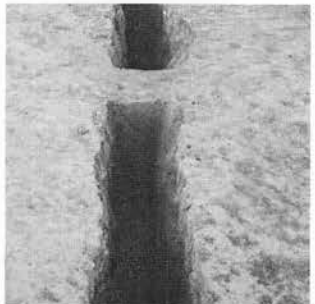
e. H IX-101 全景



f. H IX-102 全景

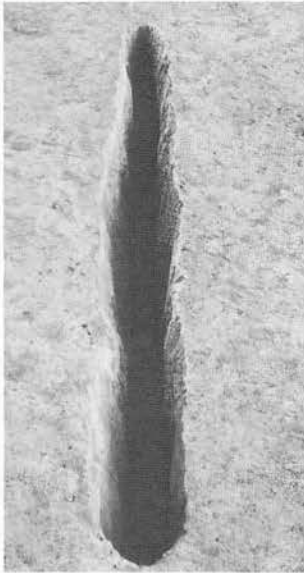


g. H IX-101 土層断面

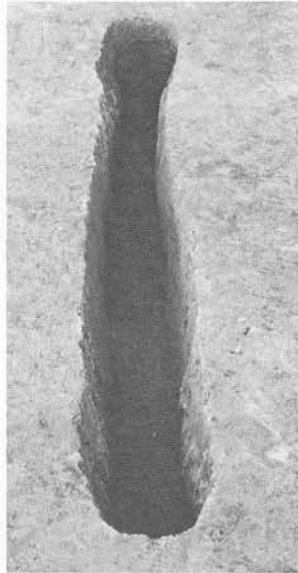


h. H IX-102 土層断面

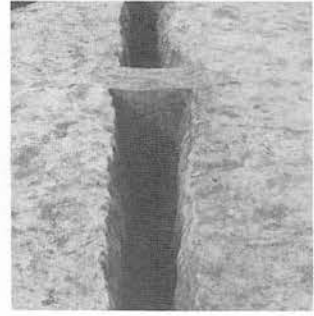
図版42 落とし穴(9)



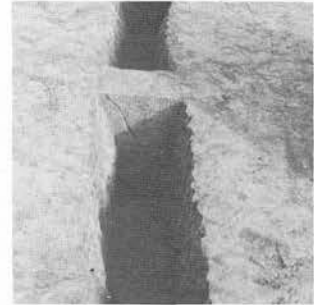
a. H IX-103 全景



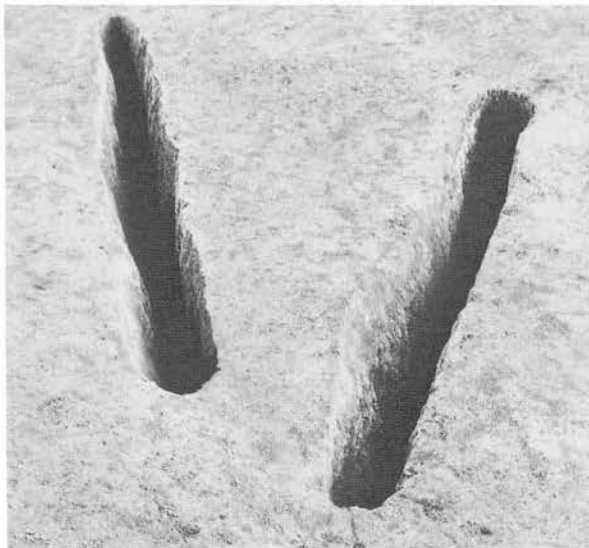
b. I IX-101 全景



d. H IX-103 土層断面



e. I IX-101 土層断面



c. H IX-102, 103 全景

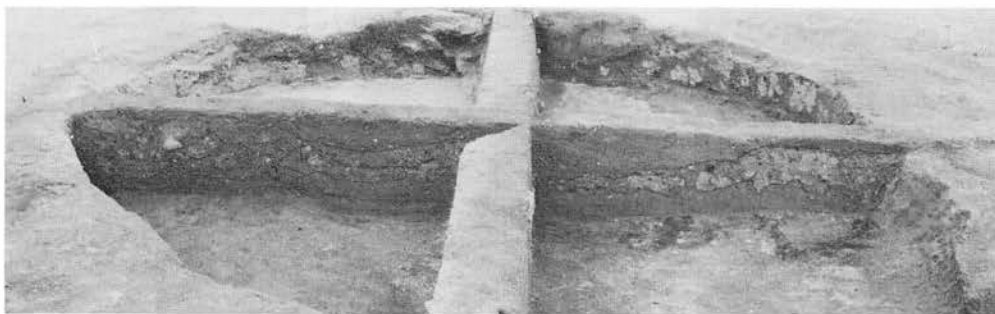


f. D III-203 焼土遺構 断ち割り



g. D III-203 焼土遺構 全景

図版43 落とし穴(10)・焼土遺構



a. 土層断面



b. 全景



c. 煙道部土層断面

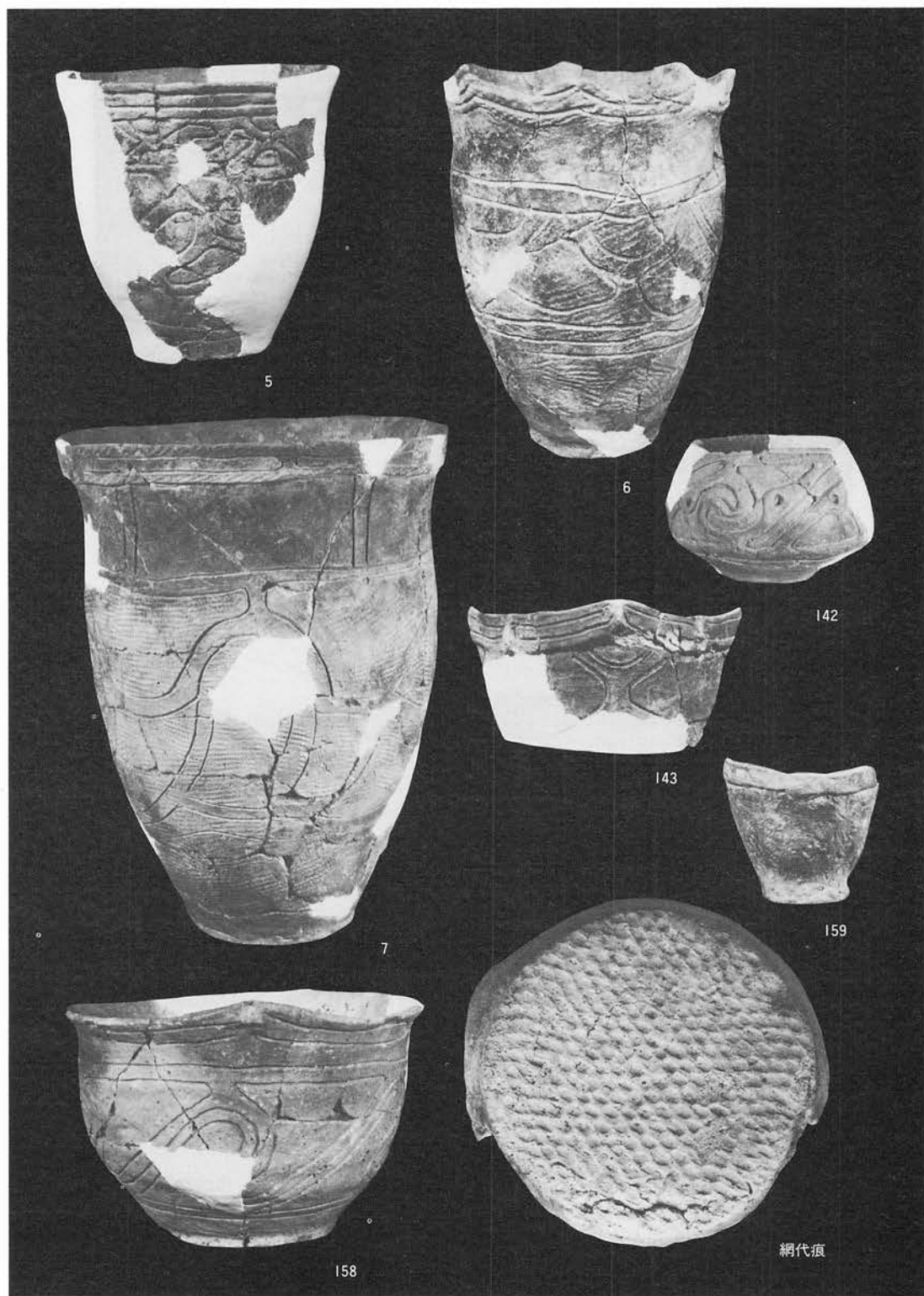


a. F III区・G III区



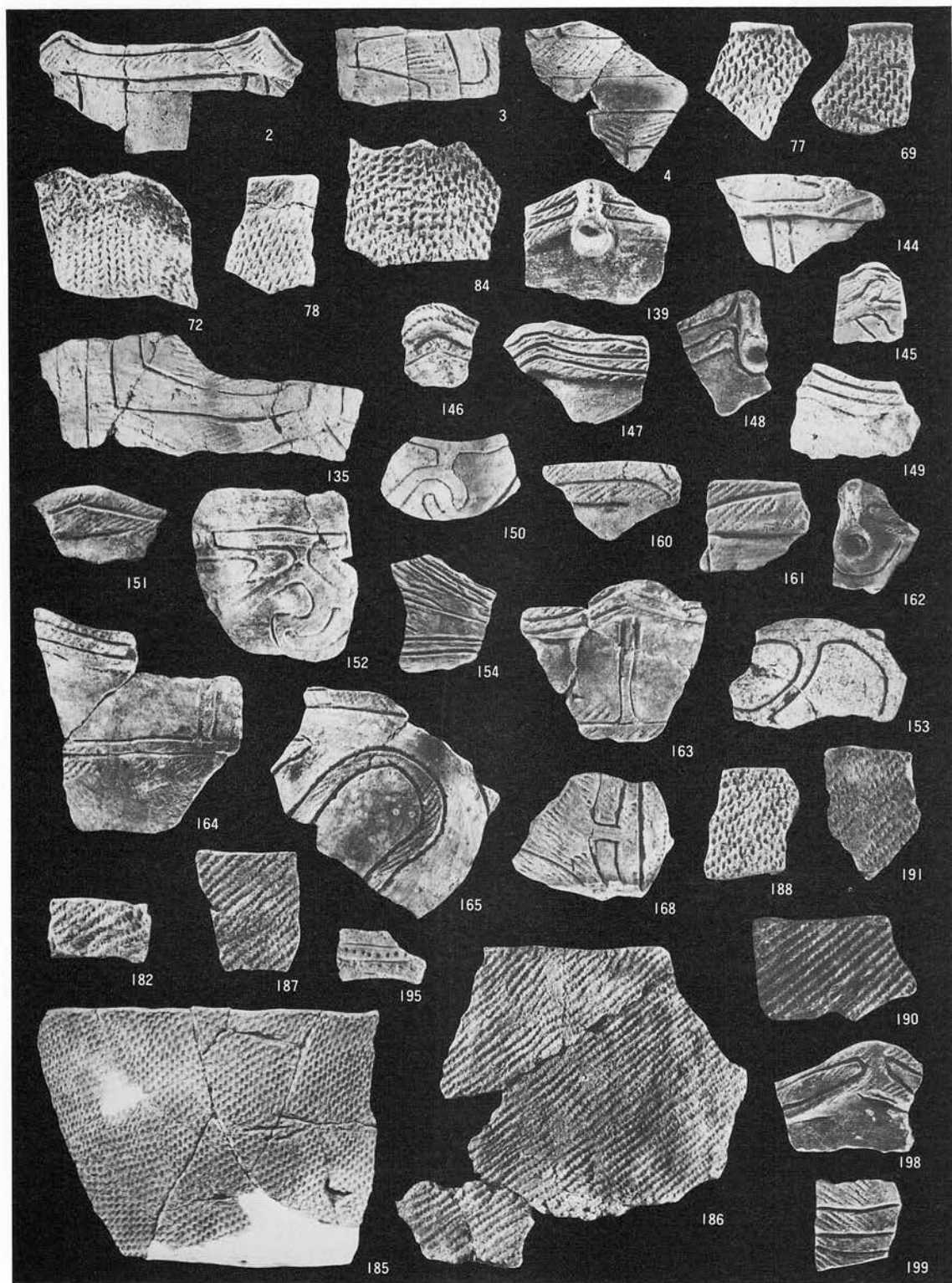
b. G II区・H II区・H I区

図版45 遺構分布状況



図版46 遺構内出土縄文土器(1)

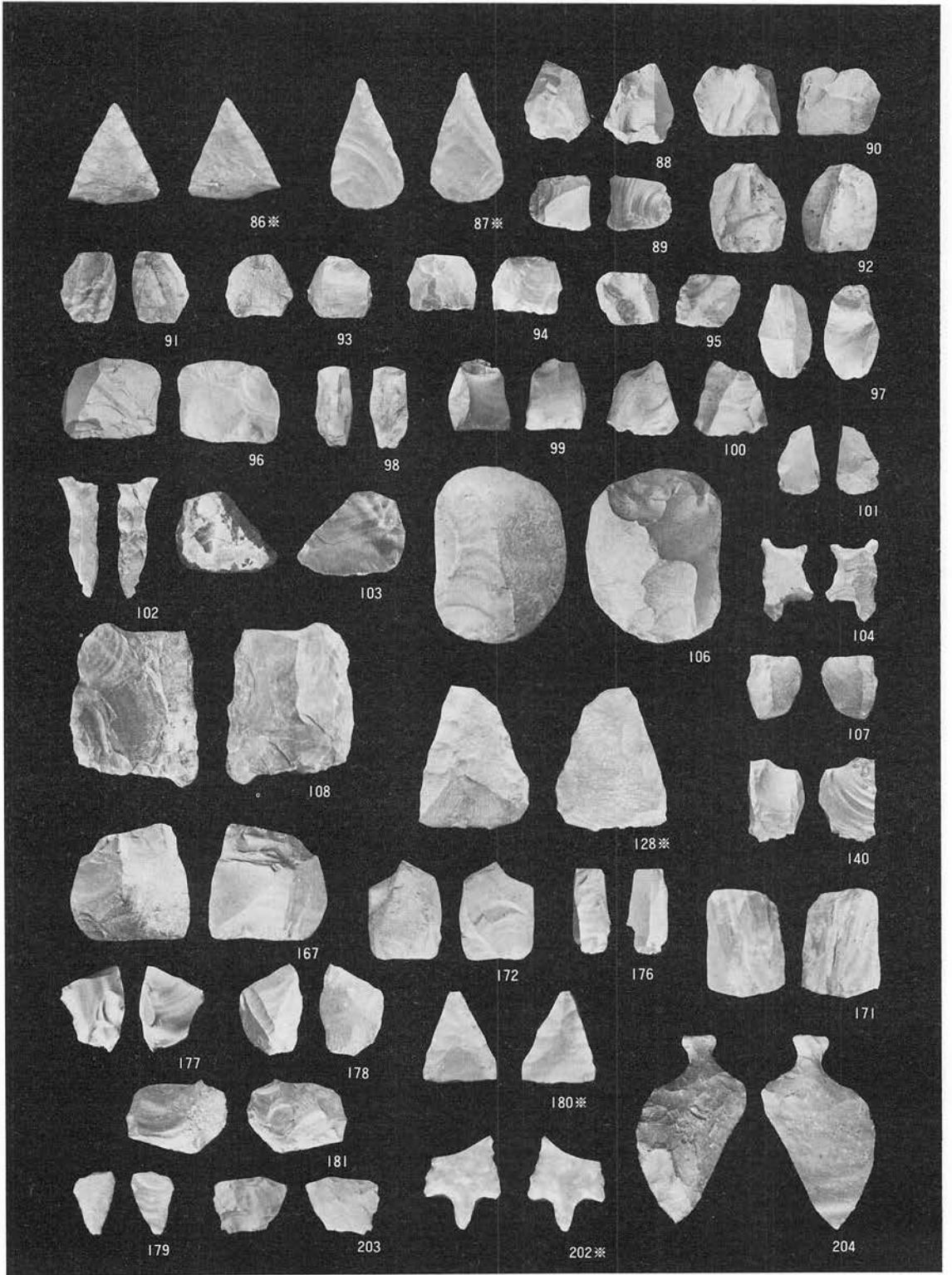
S : 1/3



図版47 遺構内出土縄文土器(2)

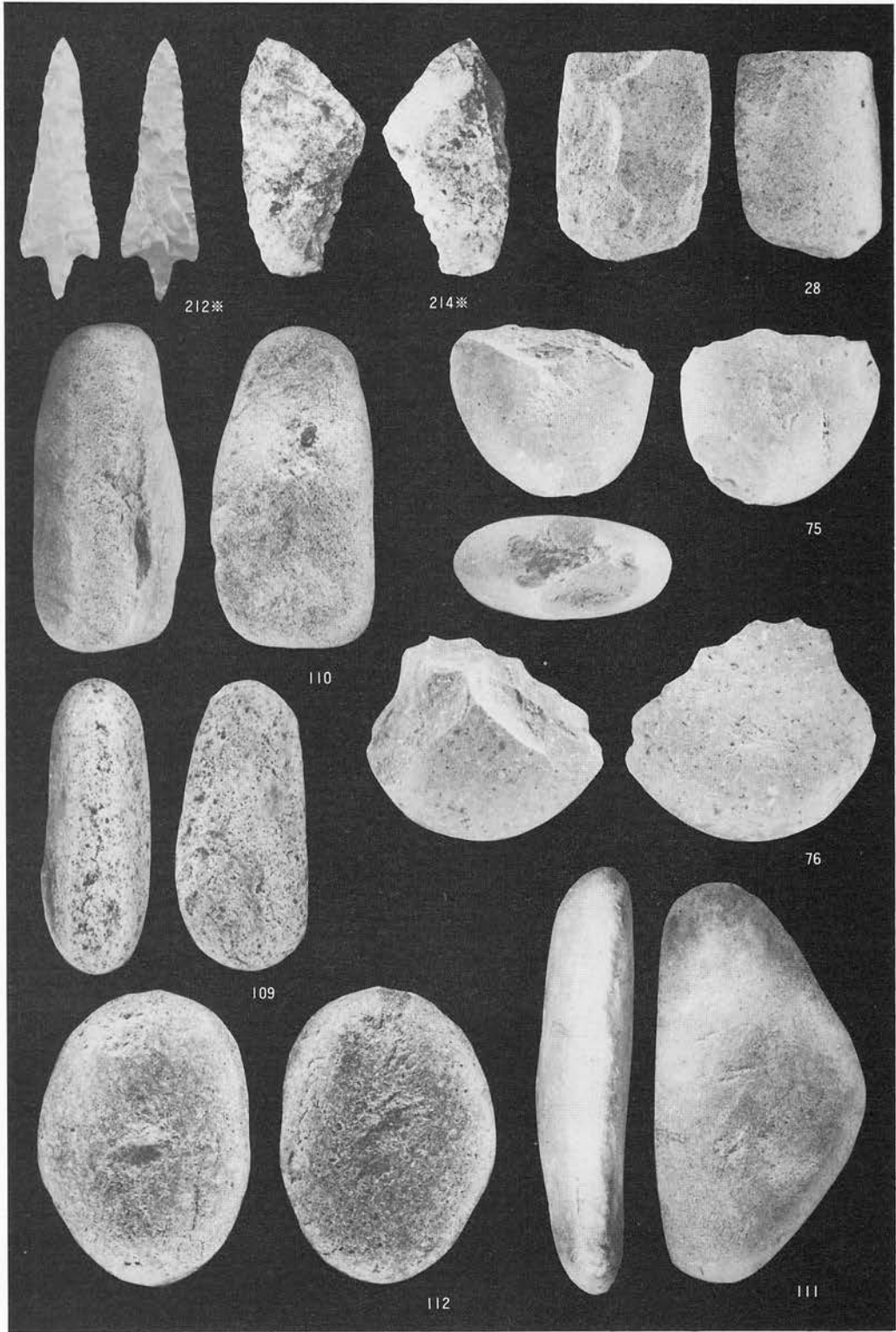
S : 1/3





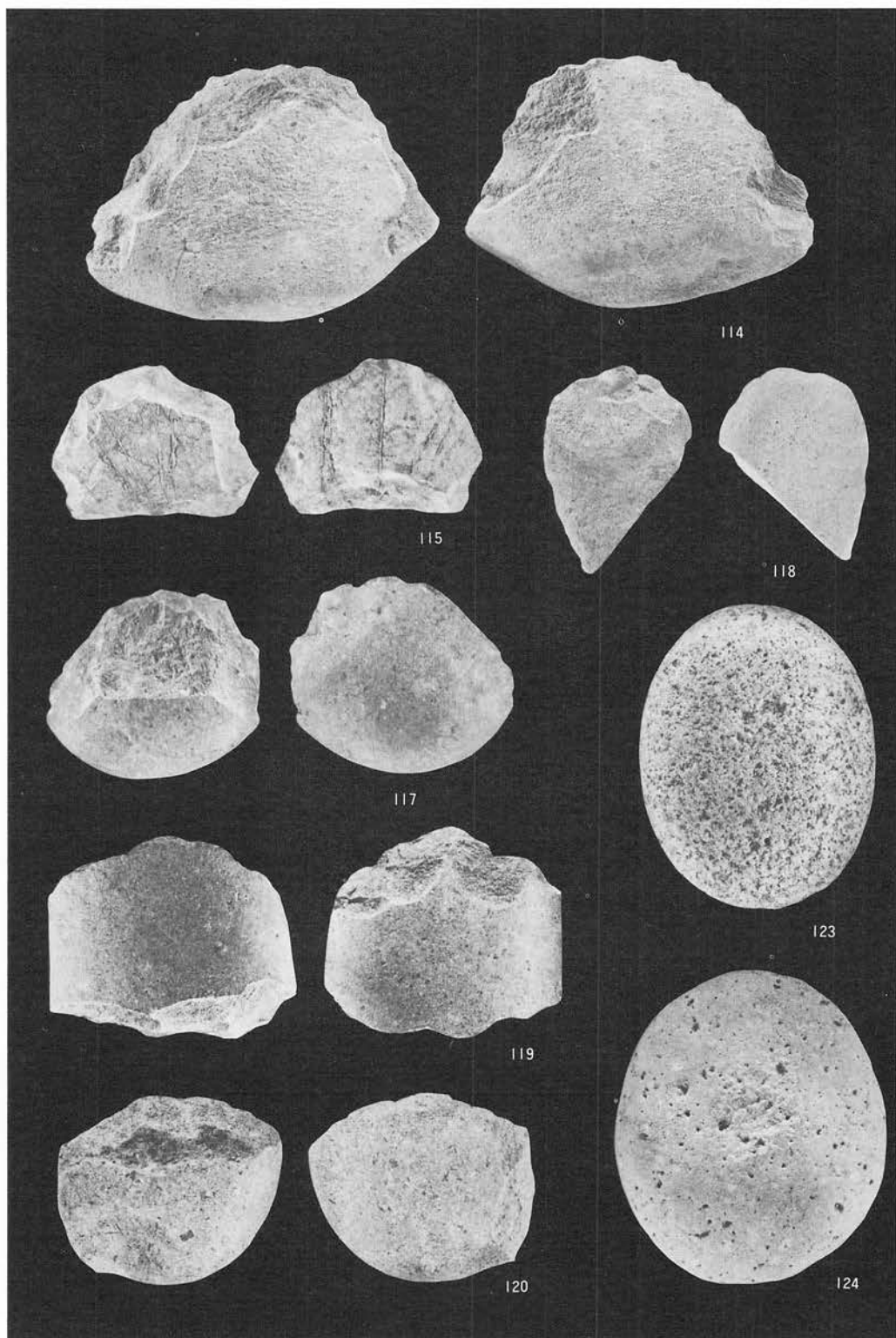
図版48 遺構内出土剥片石器(1)

S : 十(※)・ $\frac{1}{2}$



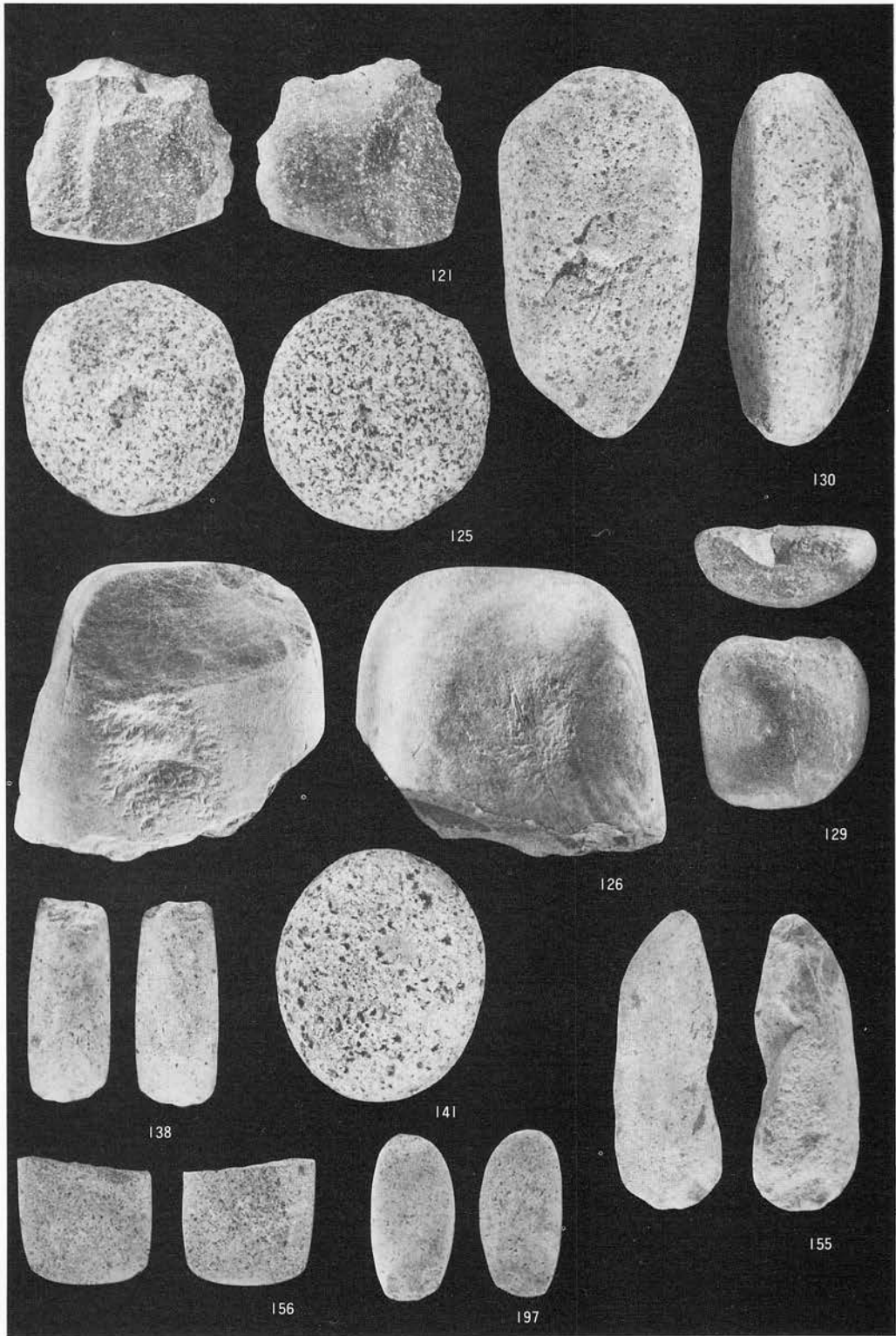
図版49 遺構内出土剥片石器(2)・礫石器(1)

S : 1/3 (\*\*) 1/3



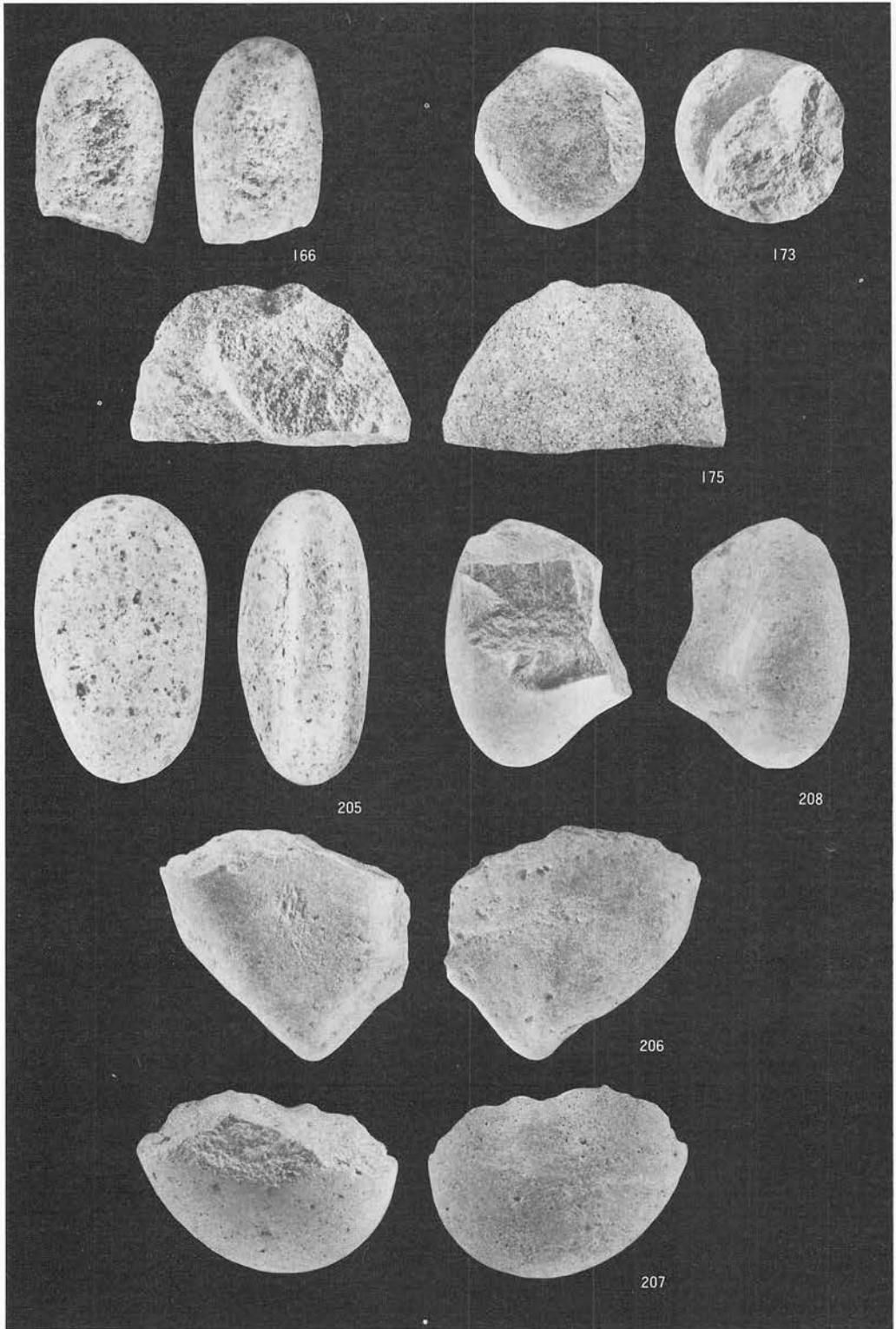
図版50 遺構内出土礫石器(2)遺構内出

S : 1/3



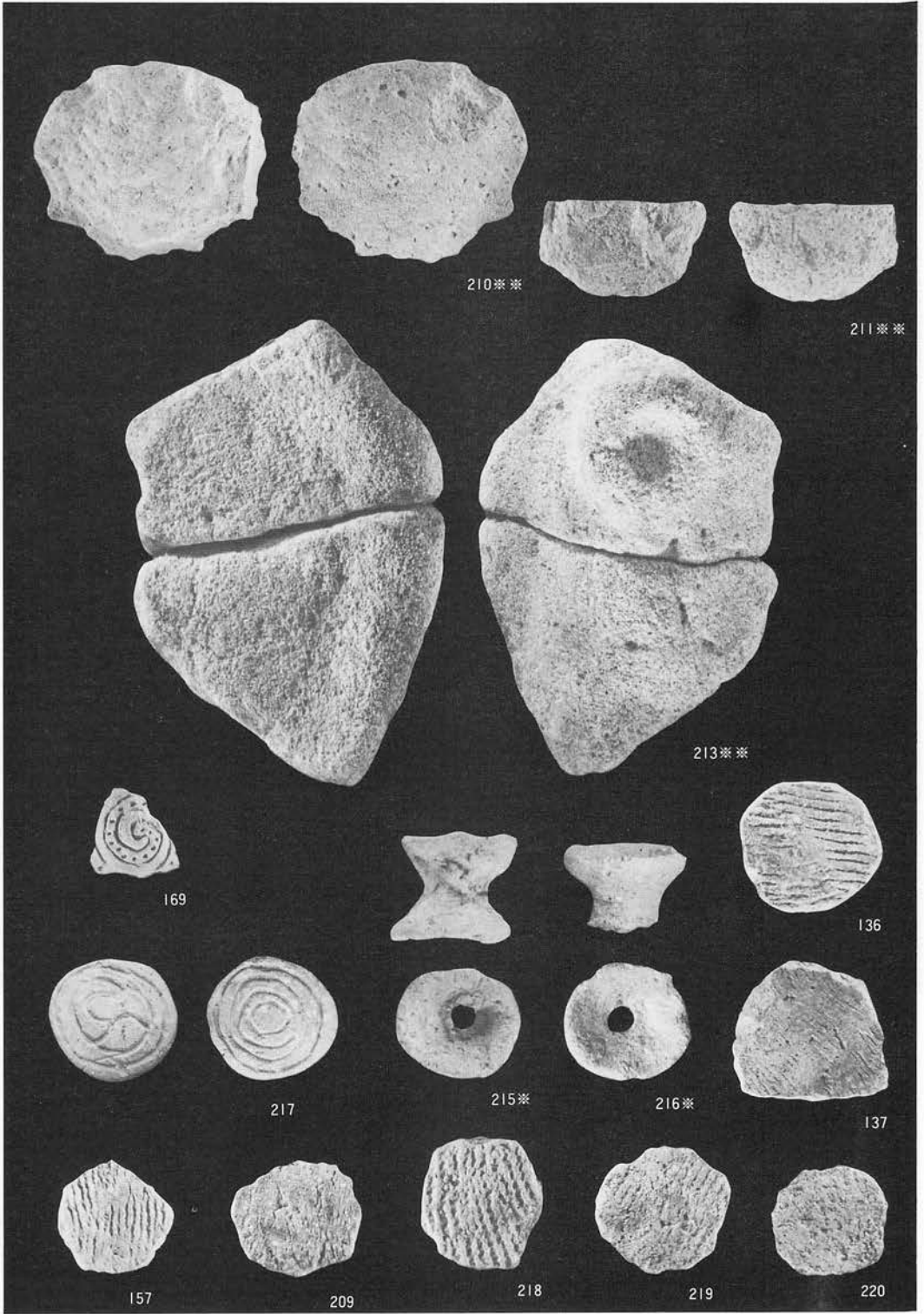
図版51 遺構内出土礫石器(3)

S : 1/3

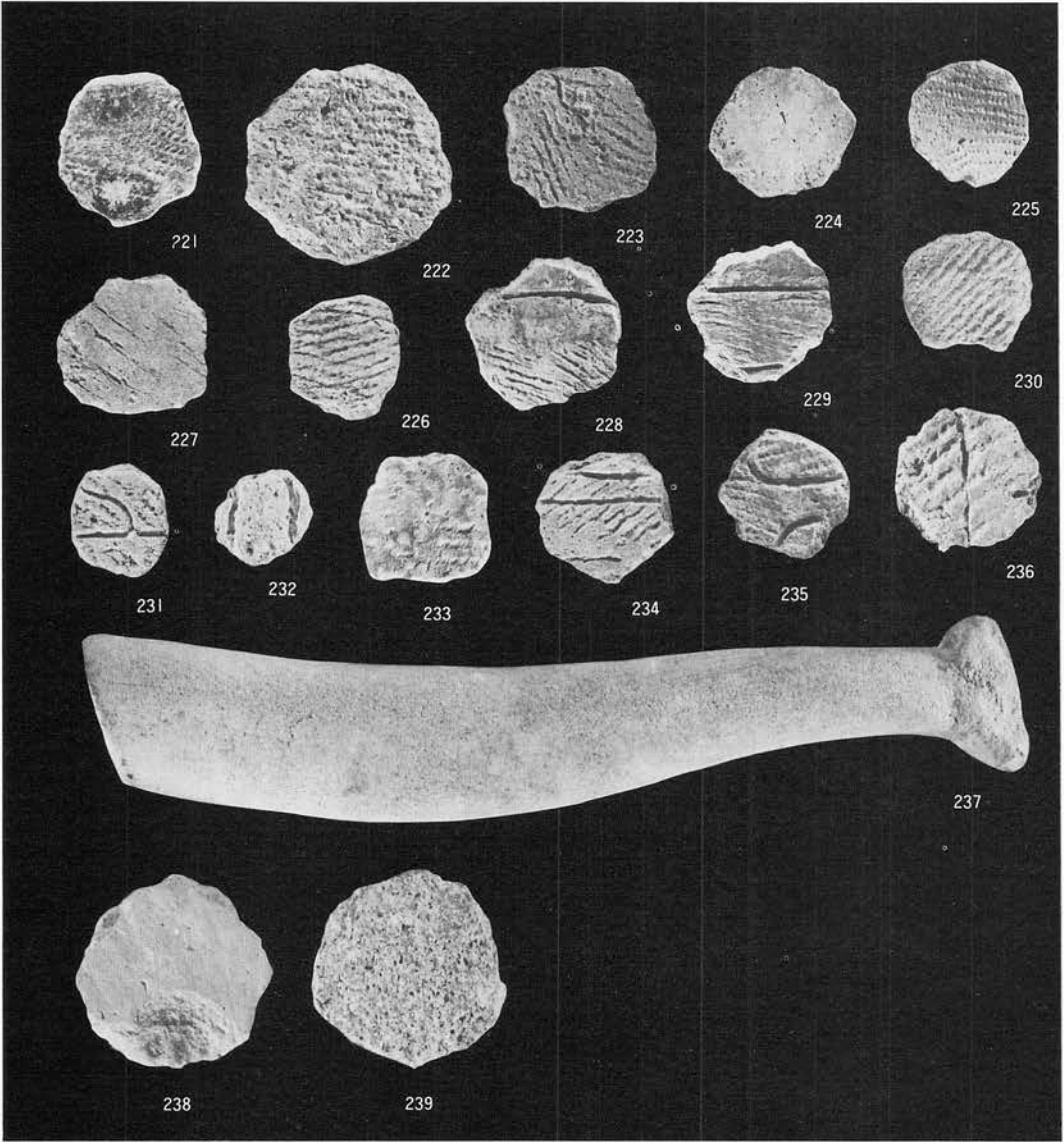


図版52 遺構内出土礫石器(4)

S : 1/3

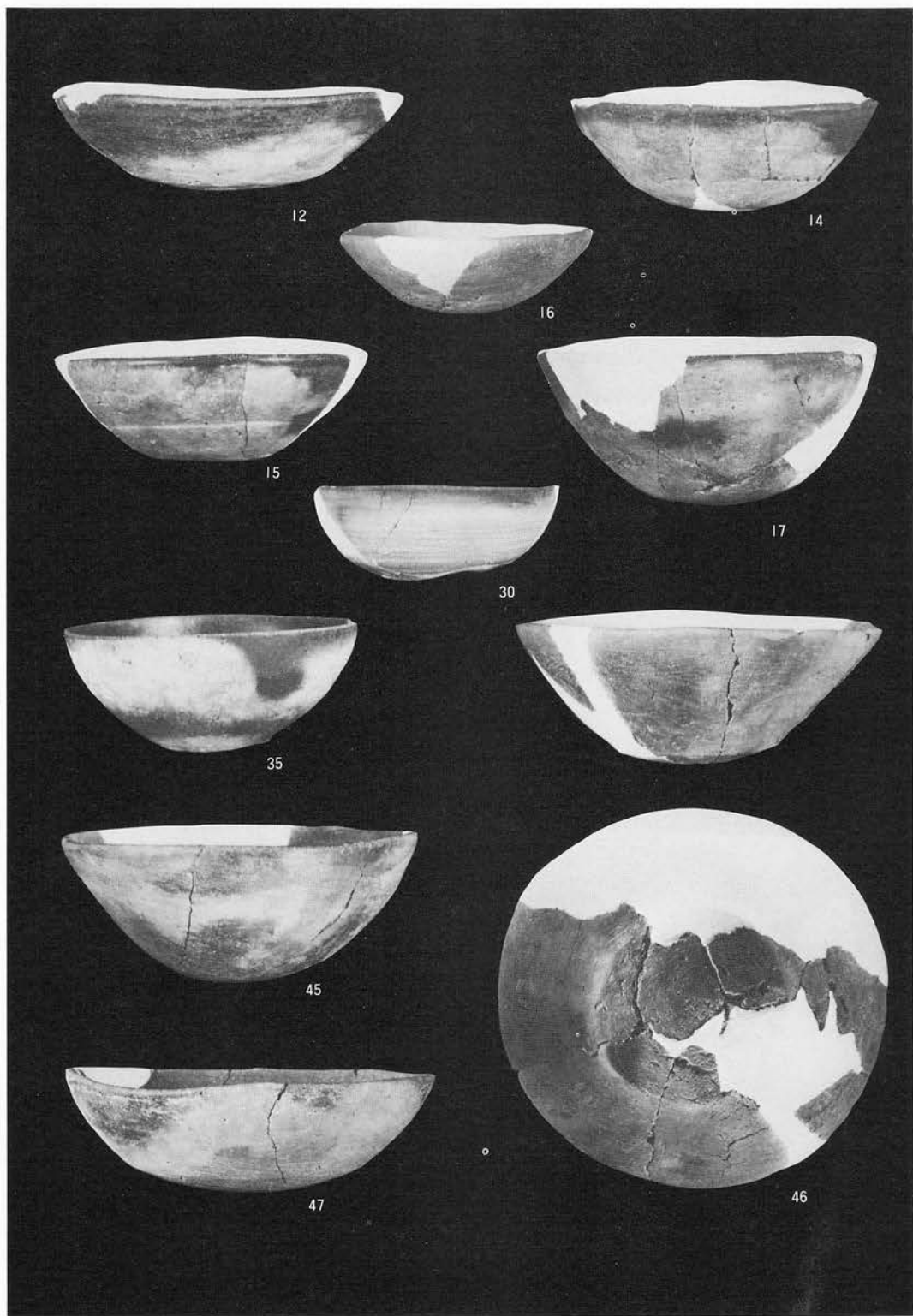


図版53 遺構内出土礫石器(5)・遺構内外出土土製品(1)



S : 1/2

図版54 遺構内外出土土製品(2)・石製品



図版55 遺構内出土土師器(1)

S : 1/3





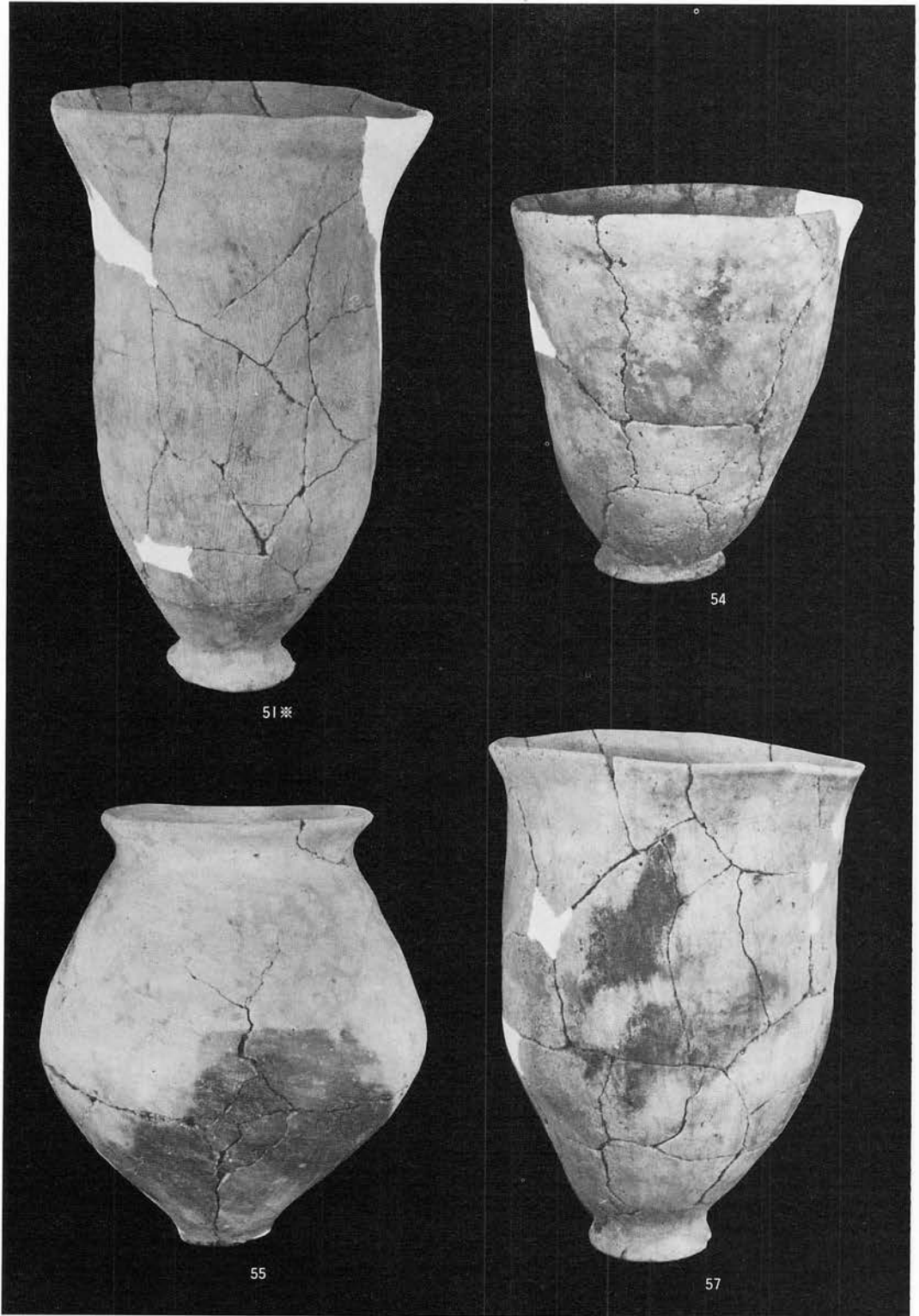
図版56 遺構内出土土師器(2)

S :  $\frac{1}{3}$



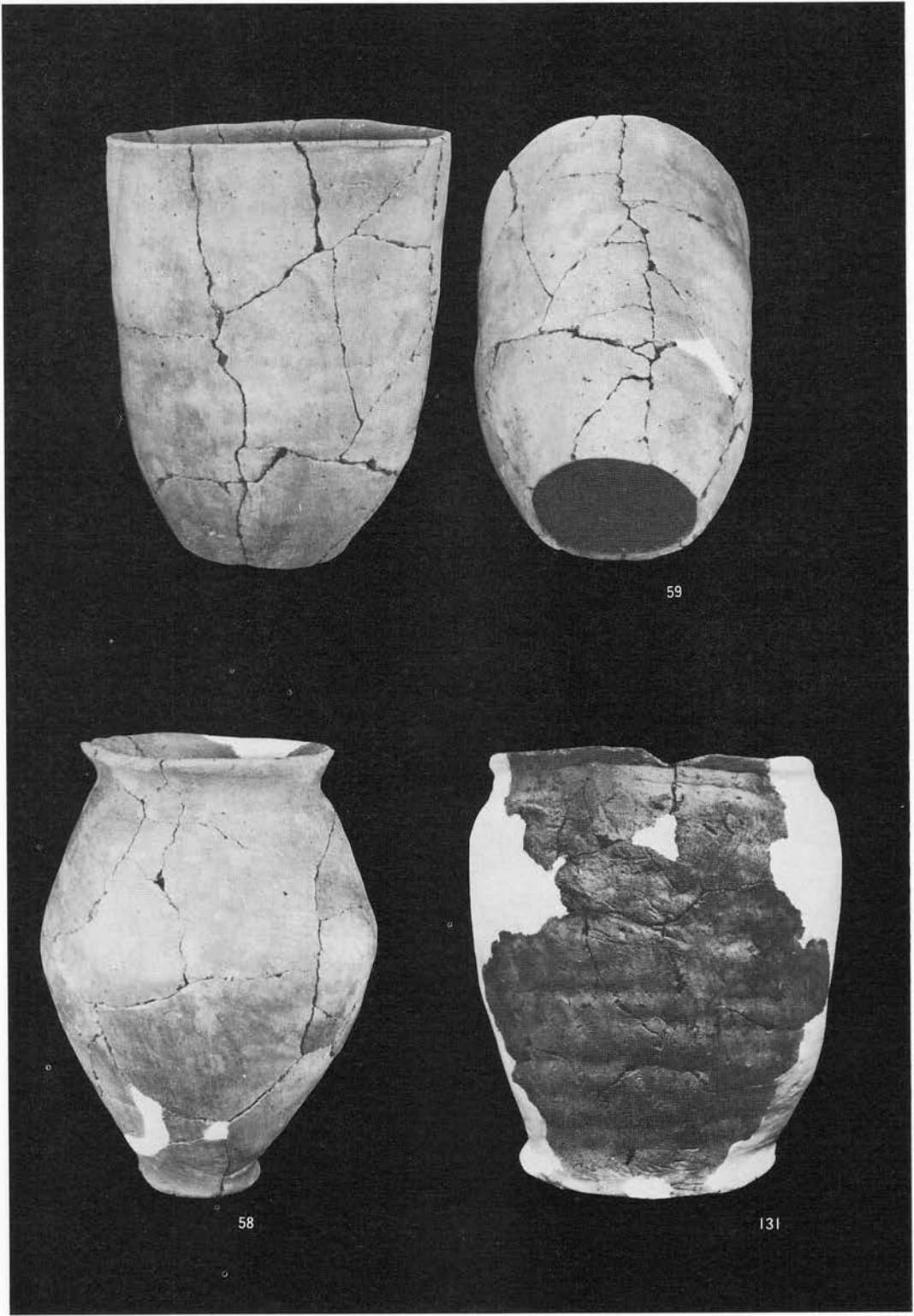
図版57 遺構内出土土師器(3)

S :  $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$  (※)



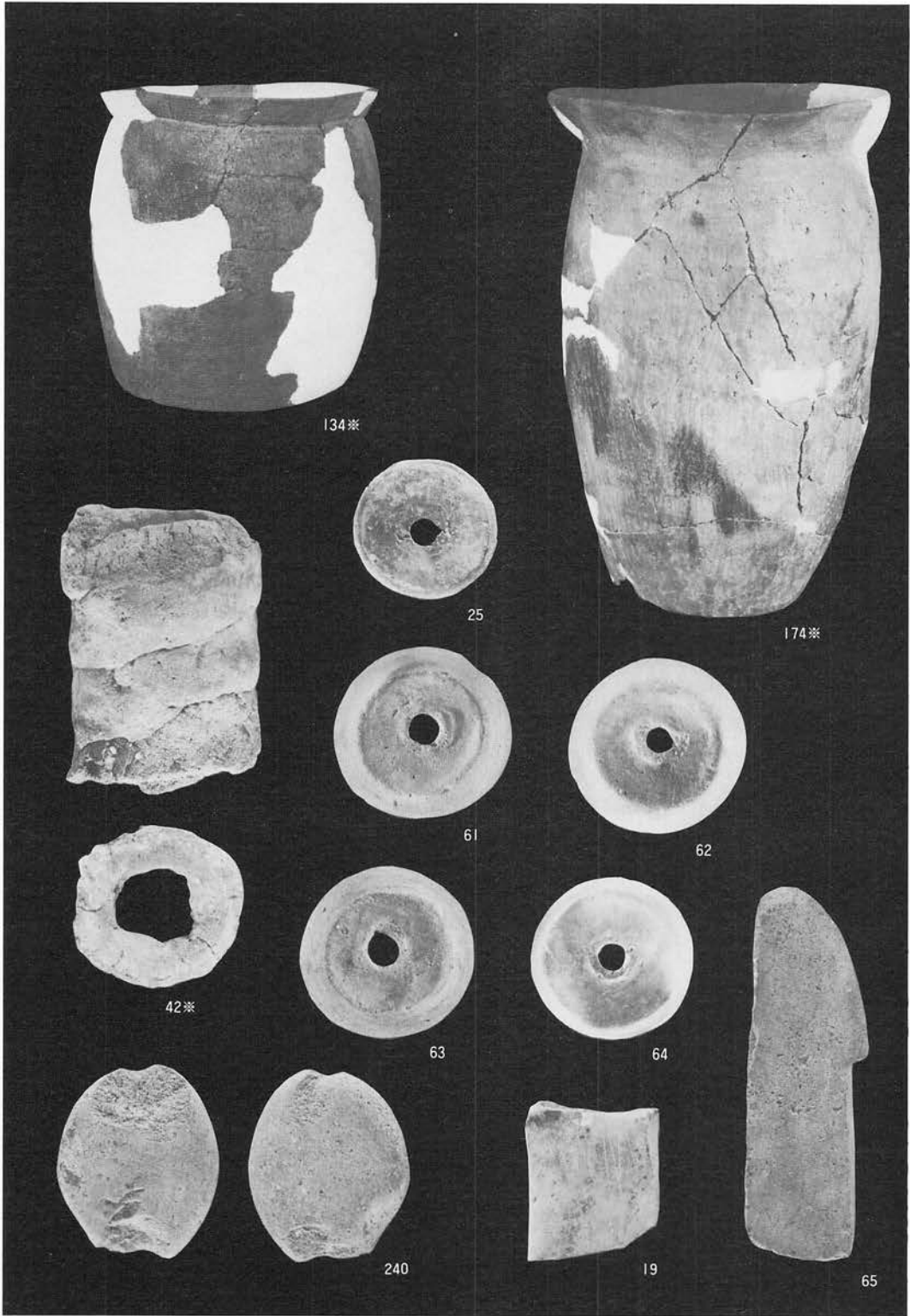
図版58 遺構内出土土師器(4)

S :  $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4}$  (※)



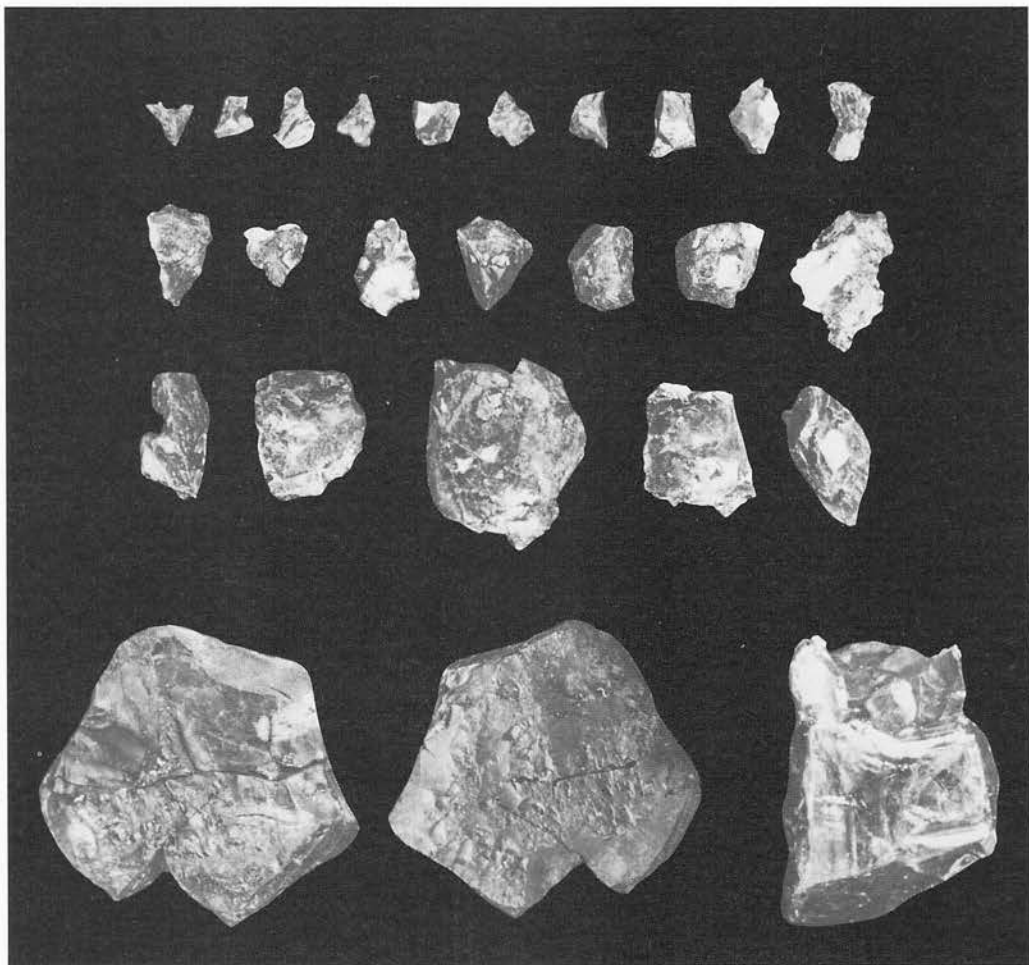
図版59 遺構内出土土師器(5)

S : 1/3



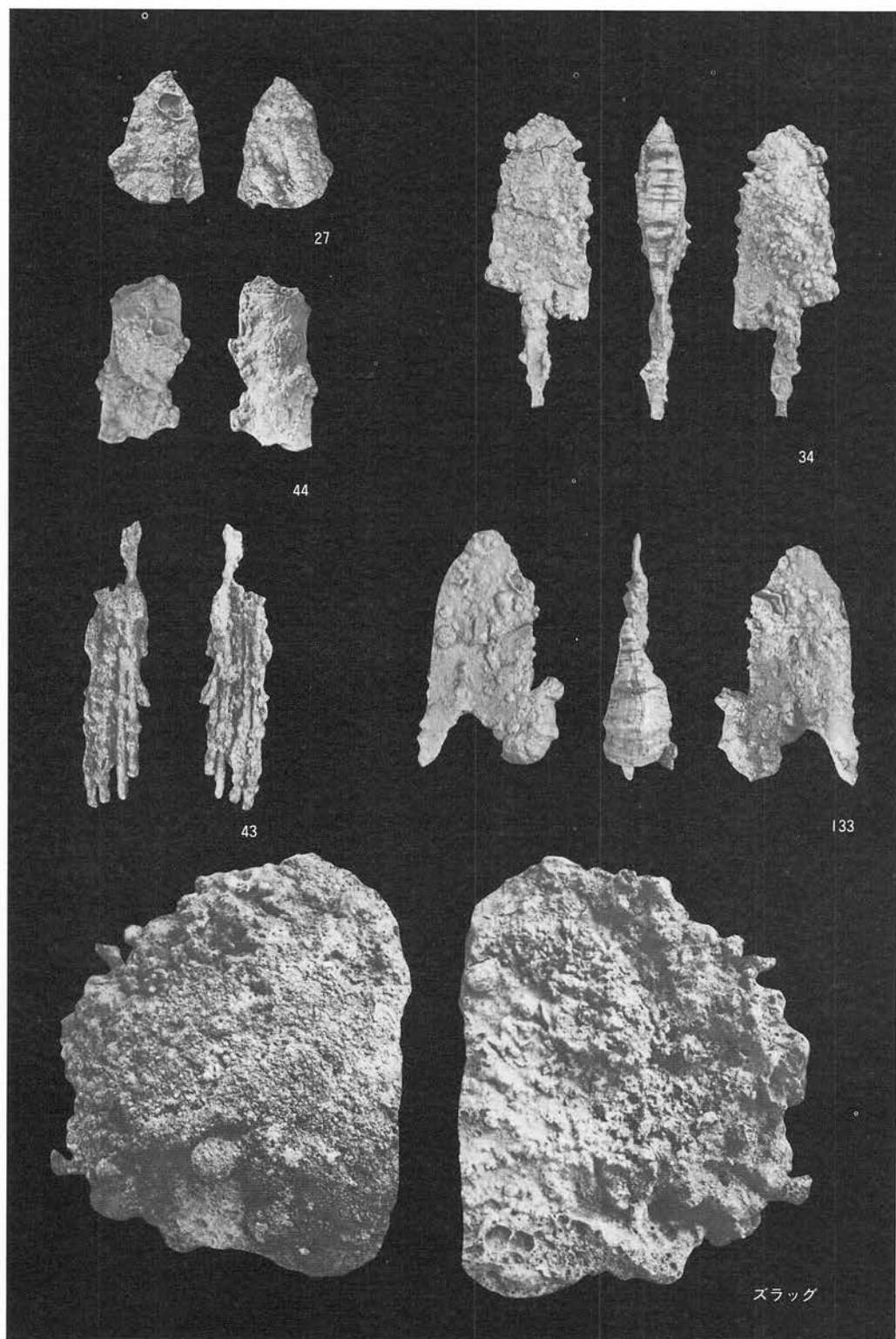
S : 1/2 · 1/3 (※)

図版60 遺構内出土土師器(6)・遺構内外出土土製品(3)・石製品(2)



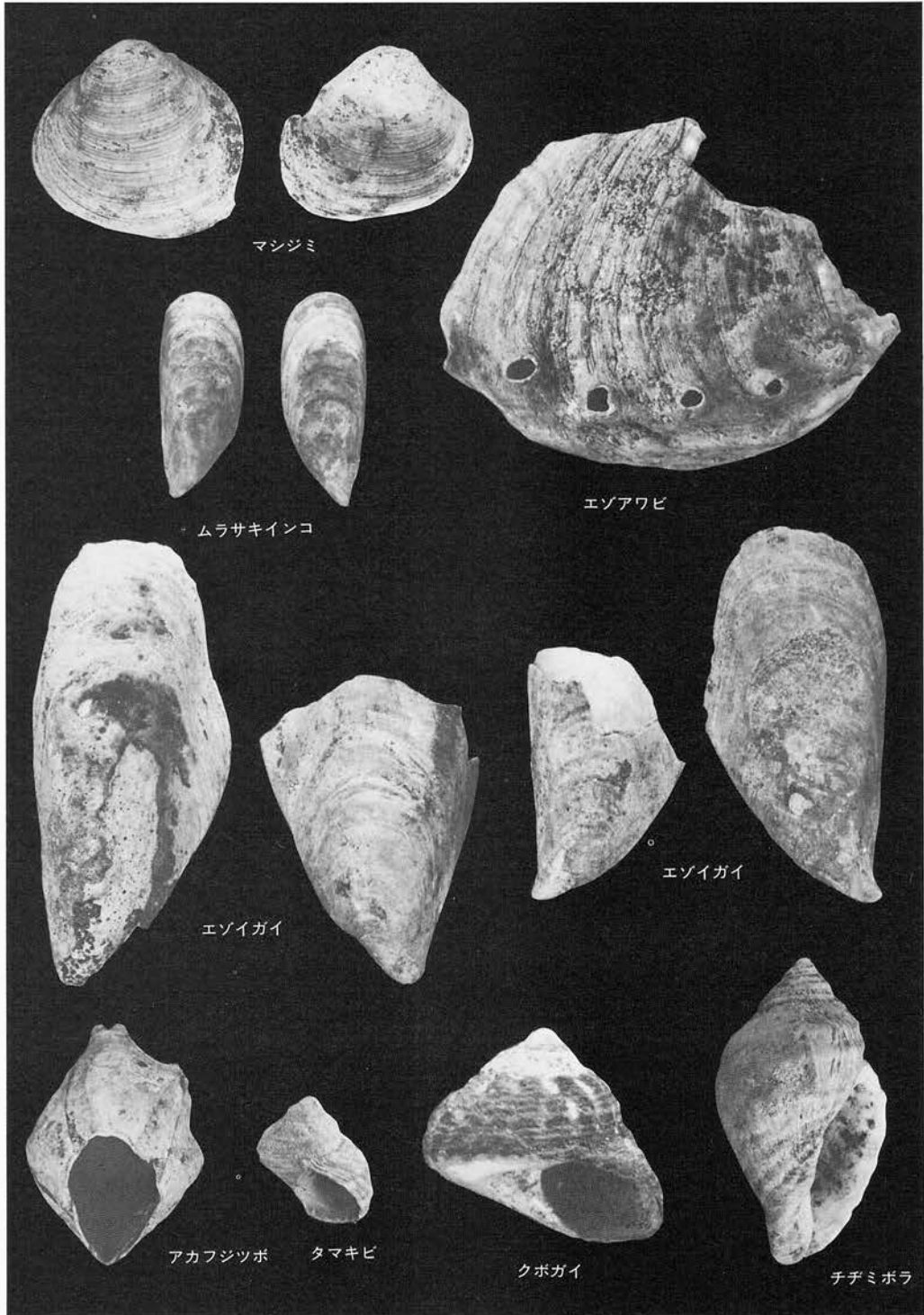
S: 十・号

図版61 遺構内出土琥珀



図版62 遺構内出土鉄製品

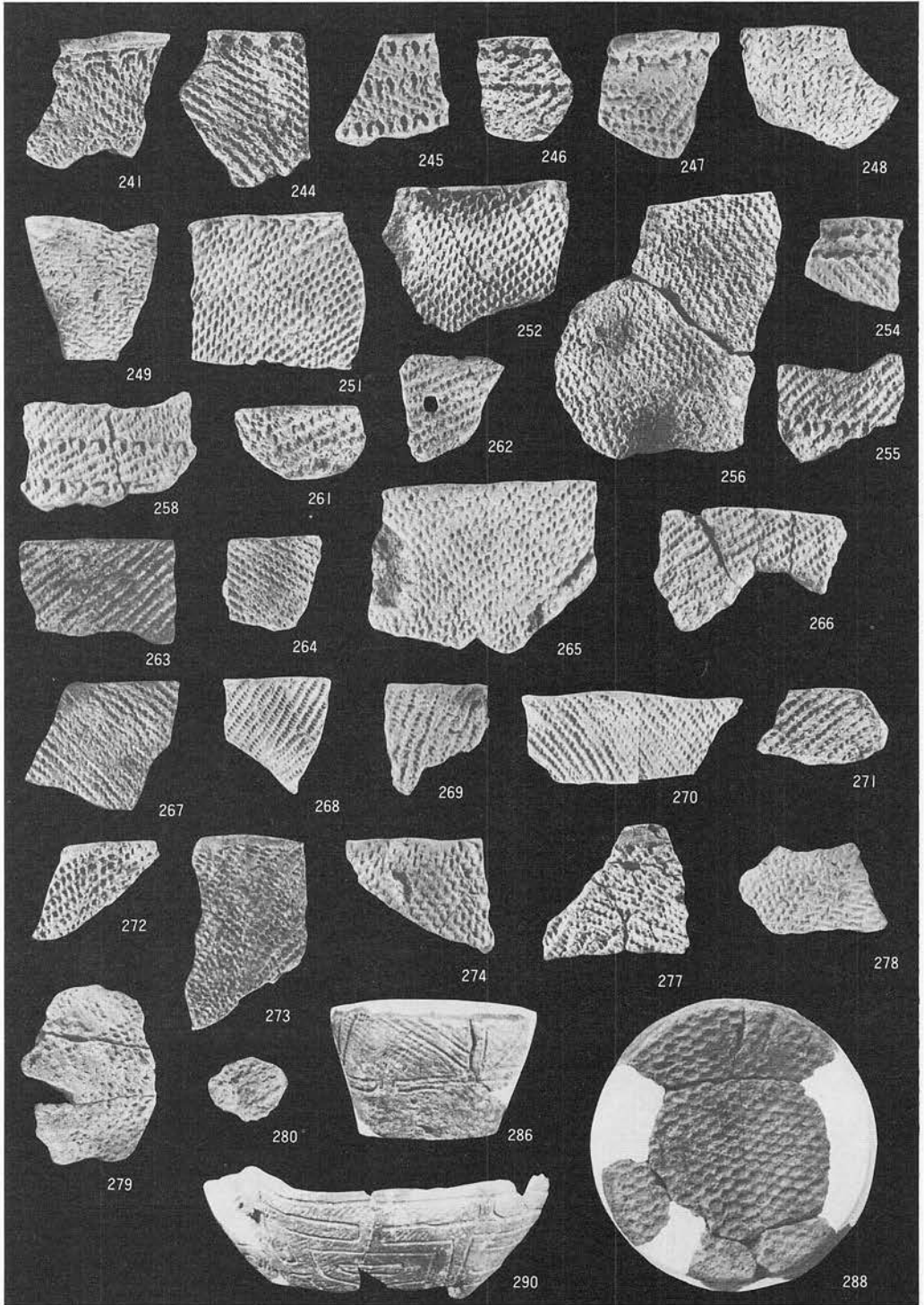
S : 1/2



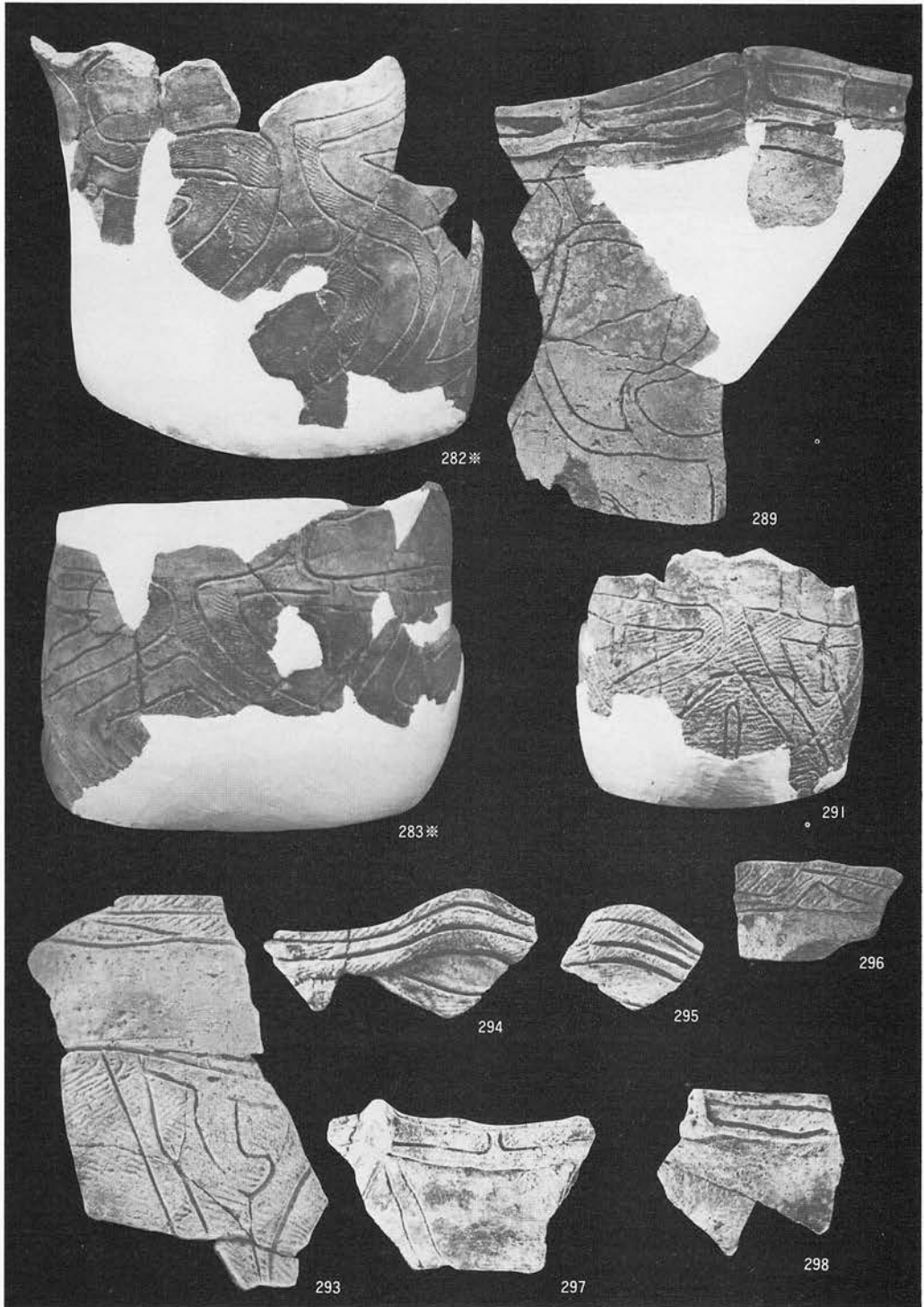
S : 不定

図版63 遺構内出土貝類



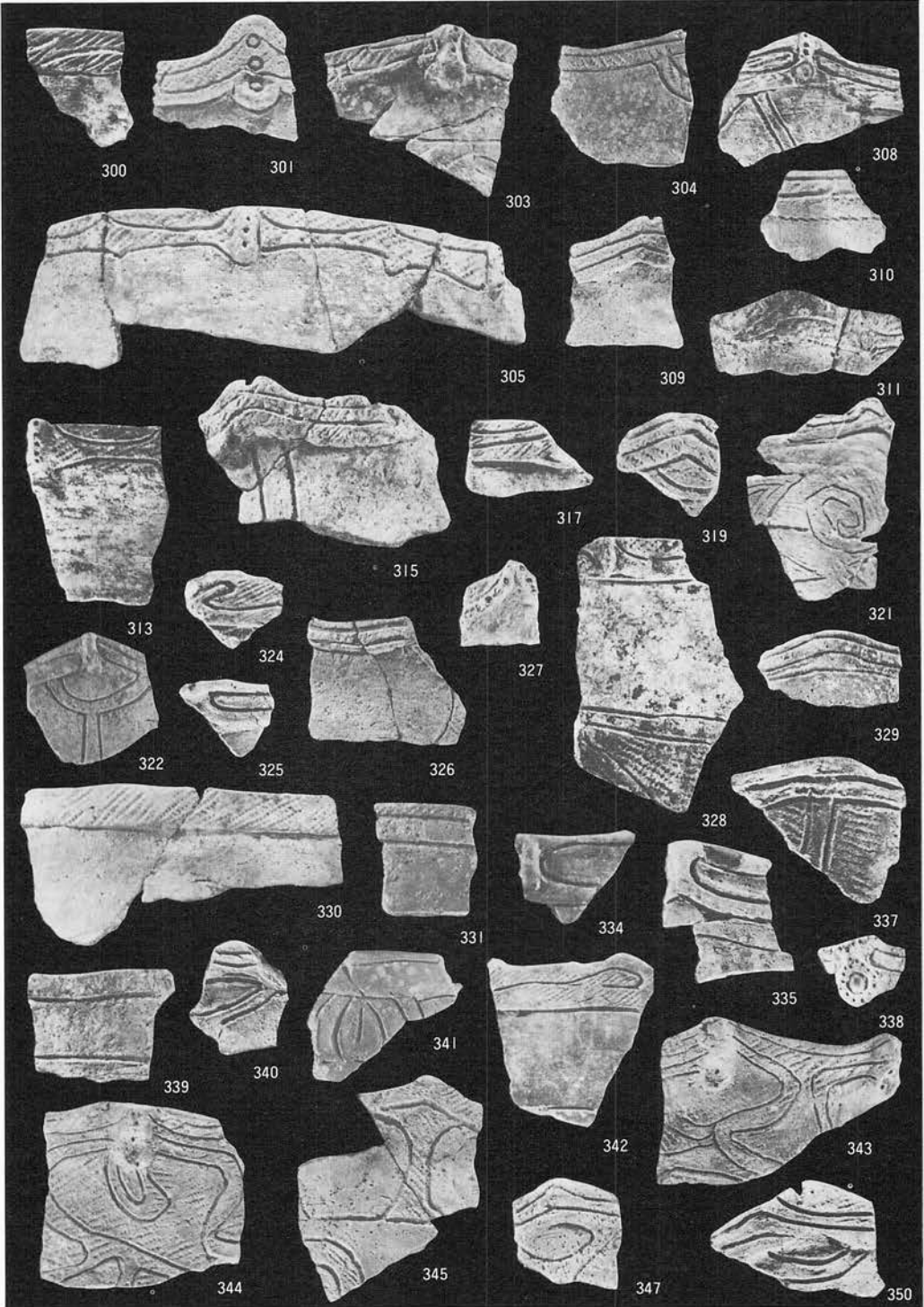


図版64 遺構外出土縄文土器(1)



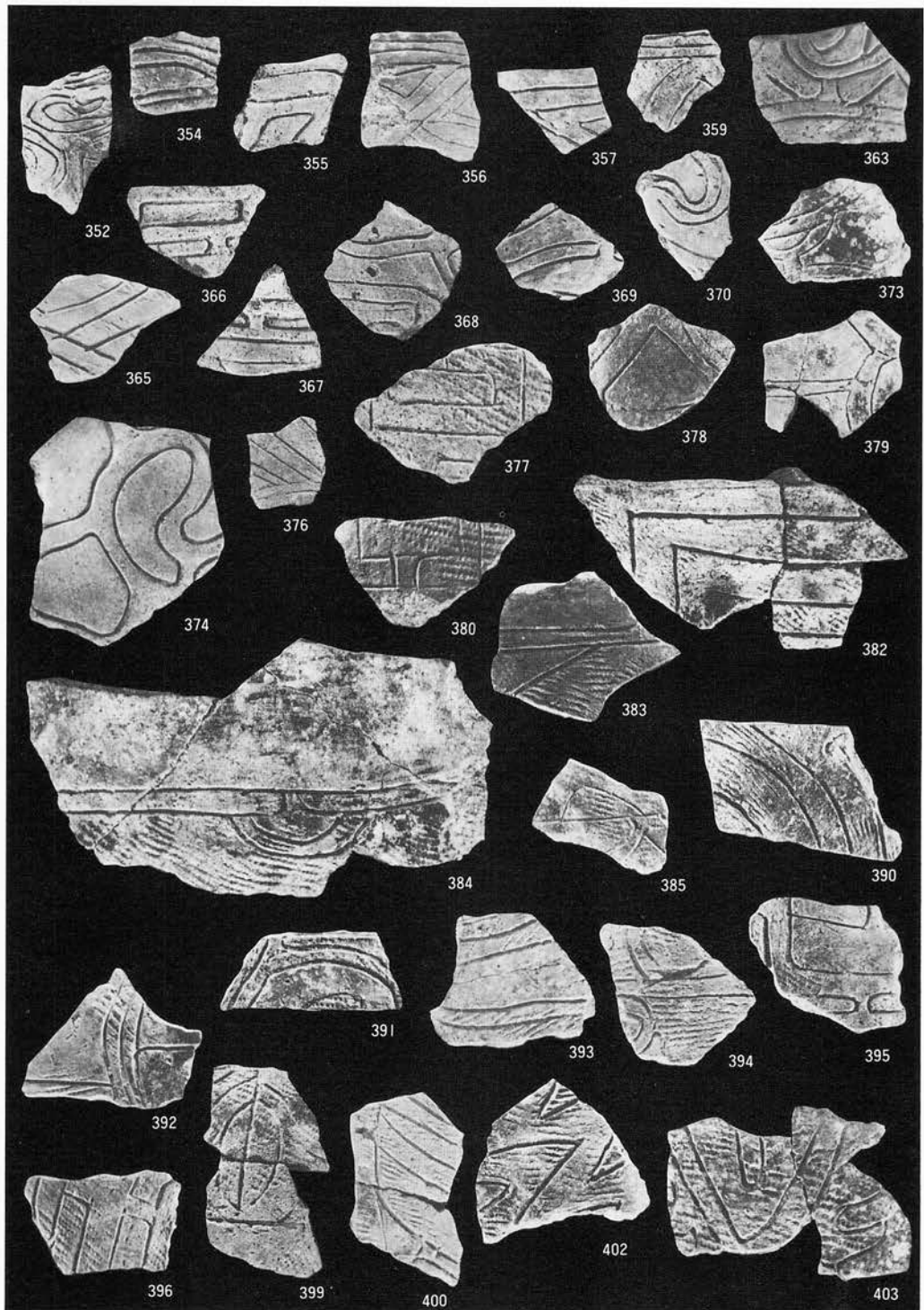
S :  $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$  (※)

図版65 遺構外出土縄文土器(2)



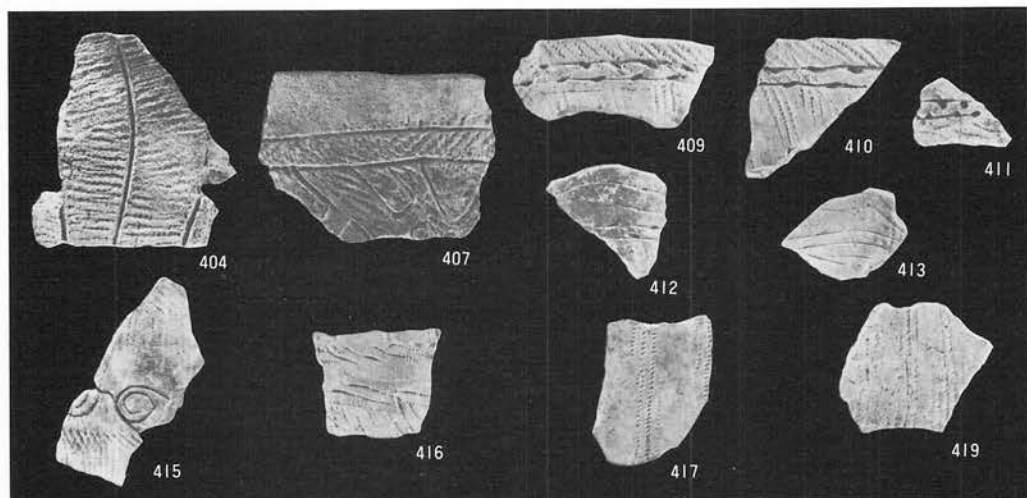
S : 1/3

図版66 遺構外出土縄文土器(3)



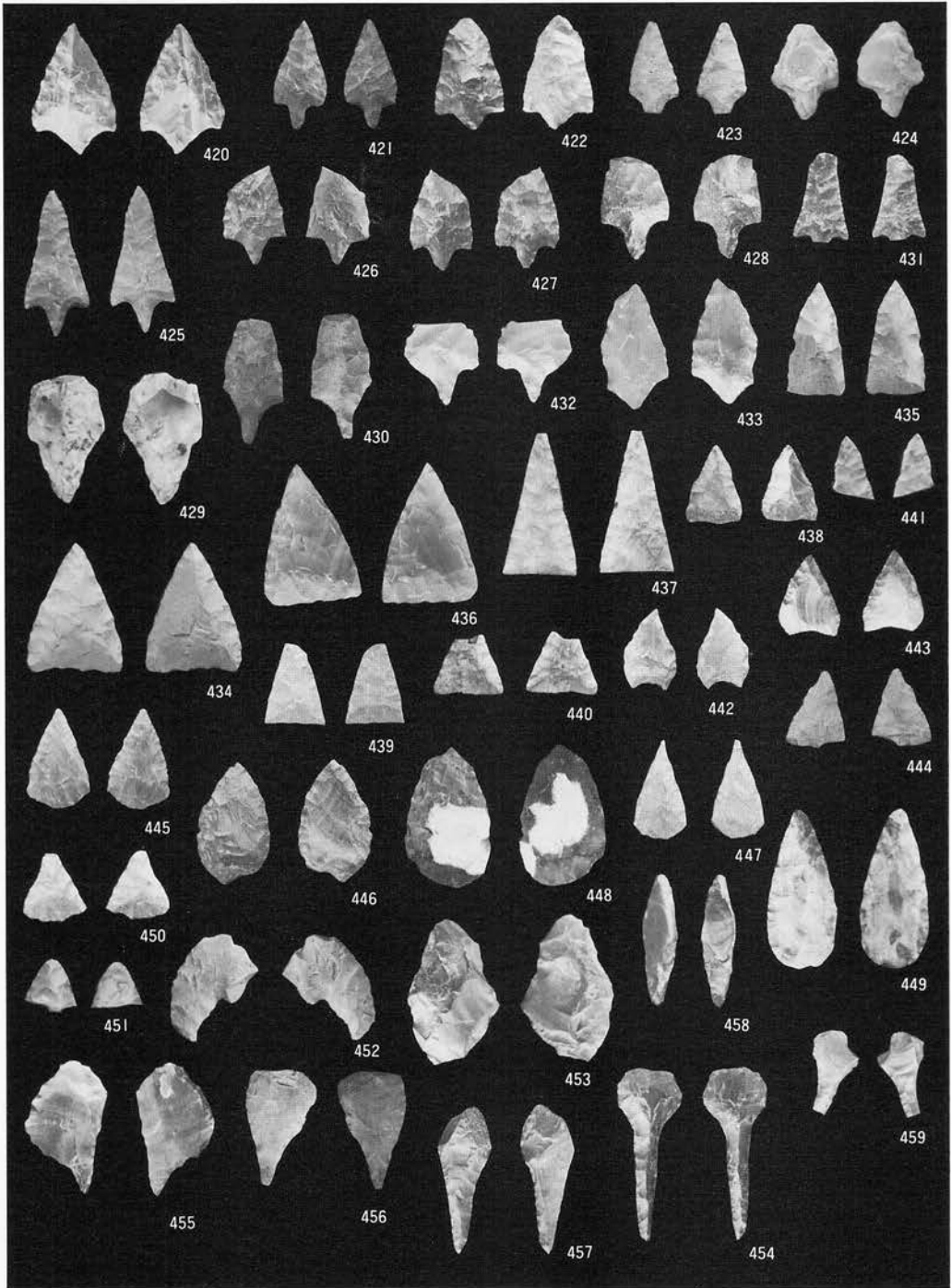
S : 1/3

図版67 遺構外出土縄文土器(4)



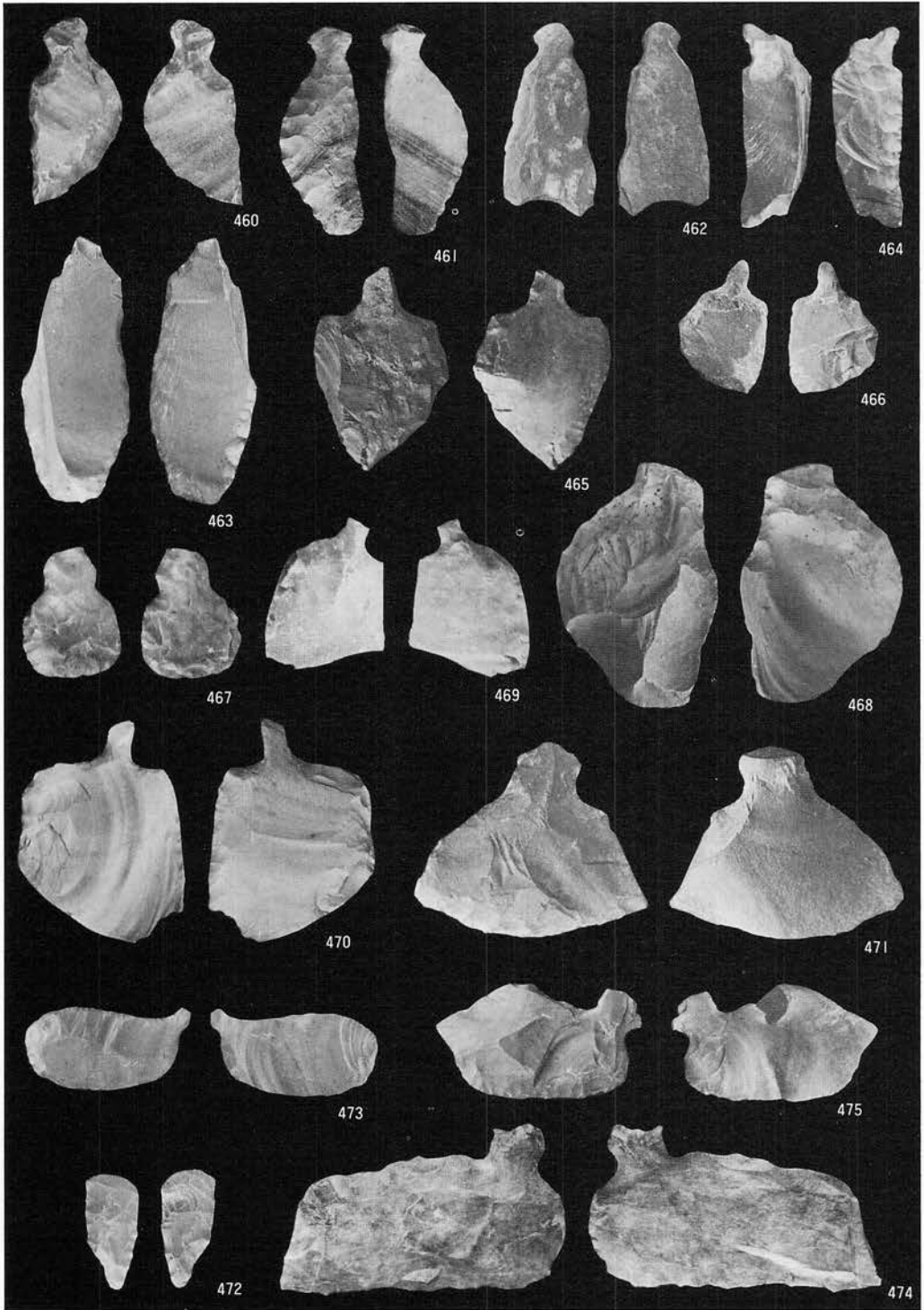
図版68 遺構外出土縄文土器(5)・弥生土器

S :  $\frac{1}{3}$



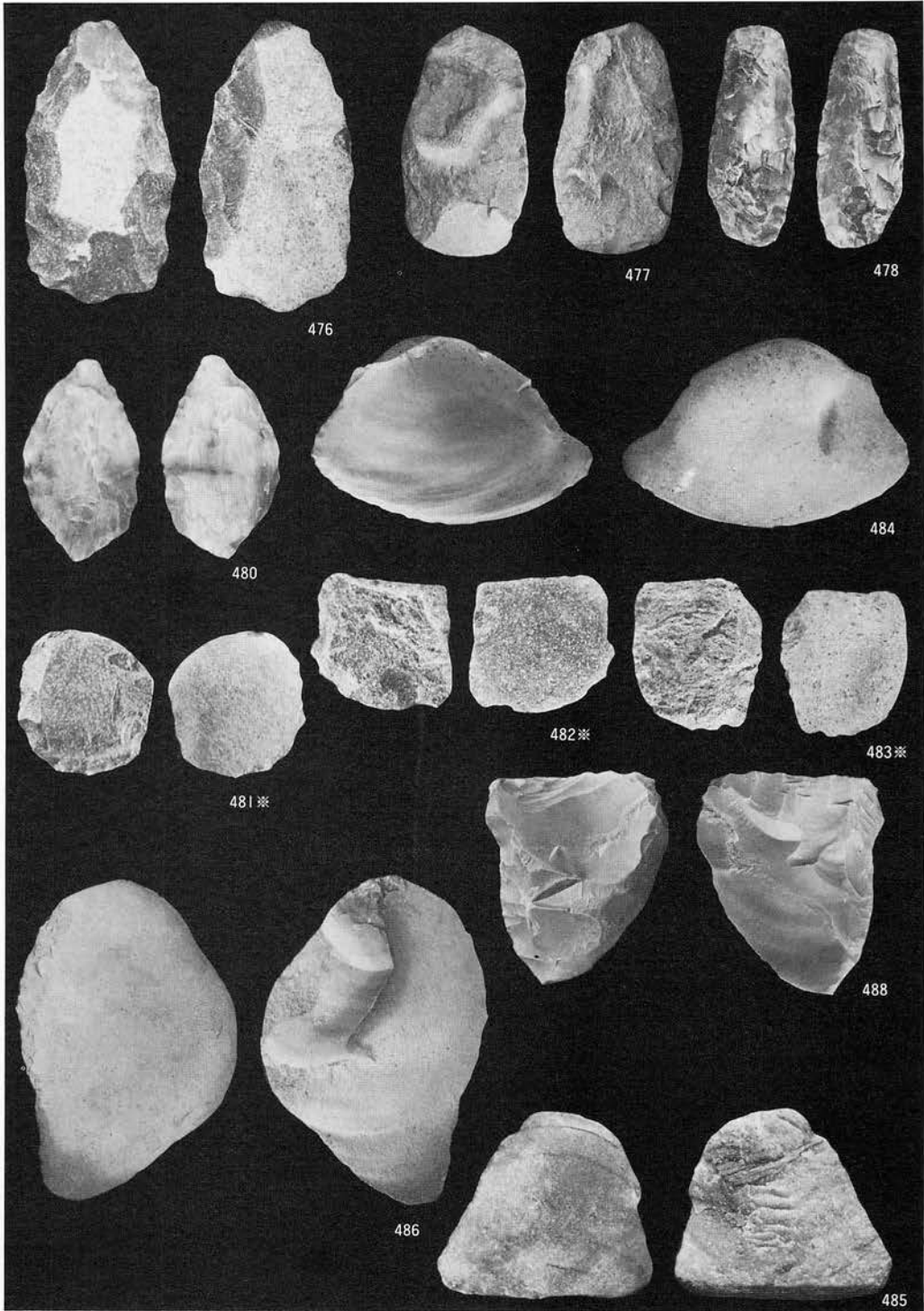
S : 3

図版69 遺構外出土剥片石器(1)



S : 3

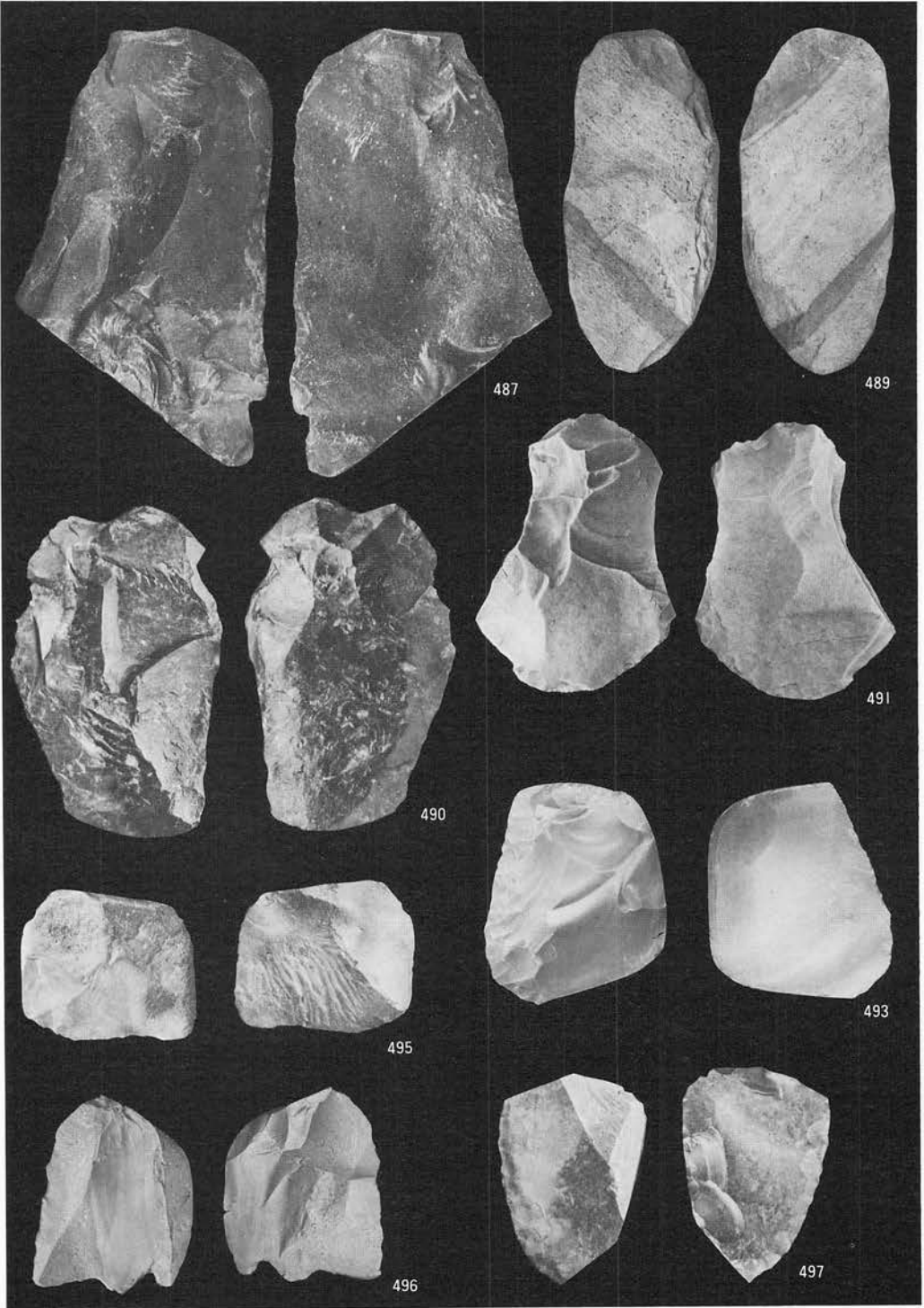
図版70 遺構外出土剥片石器(2)



S :  $\frac{2}{3}$  · 不定(※)

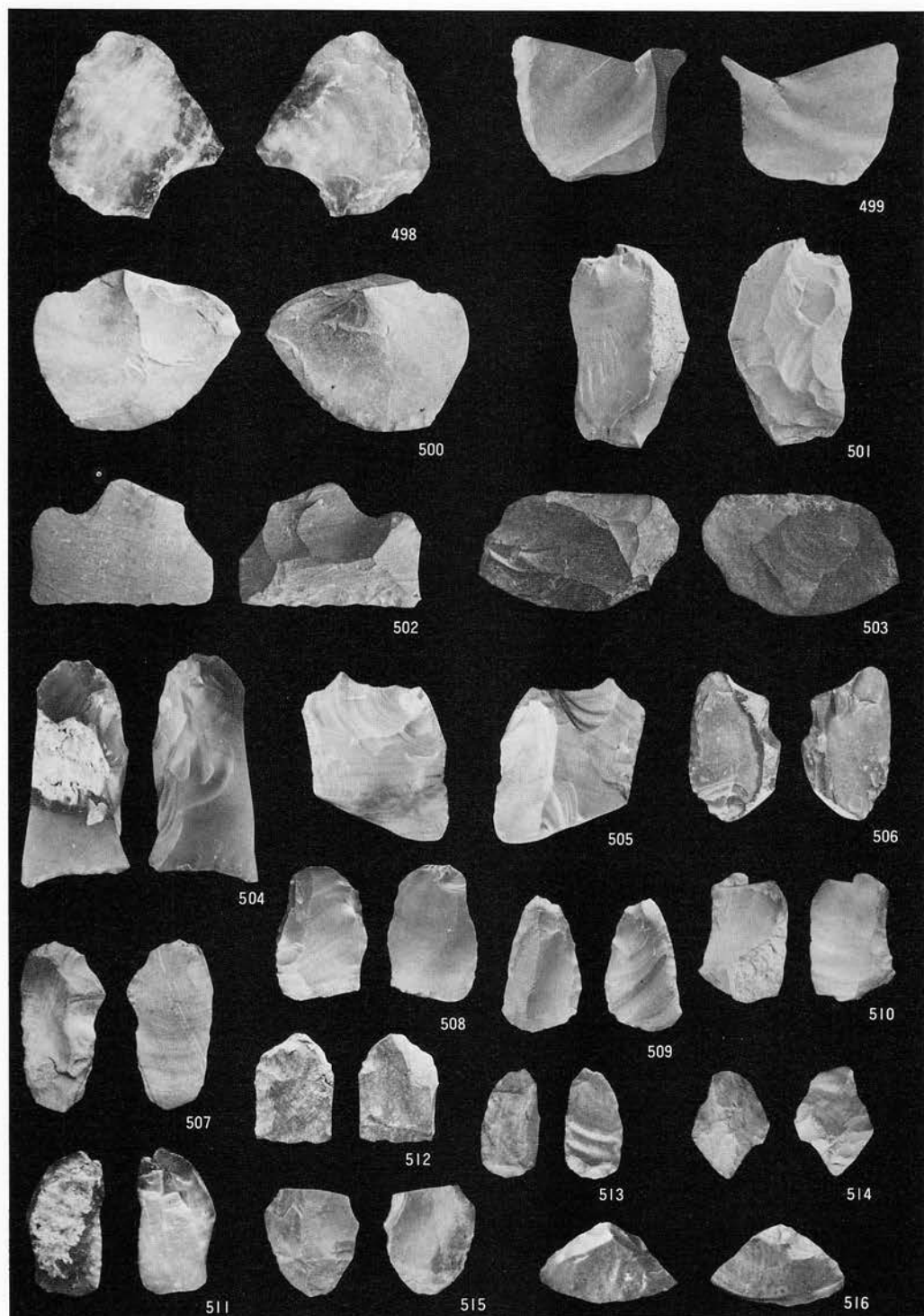
図版71 遺構外出土剥片石器(3)・礫石器(1)





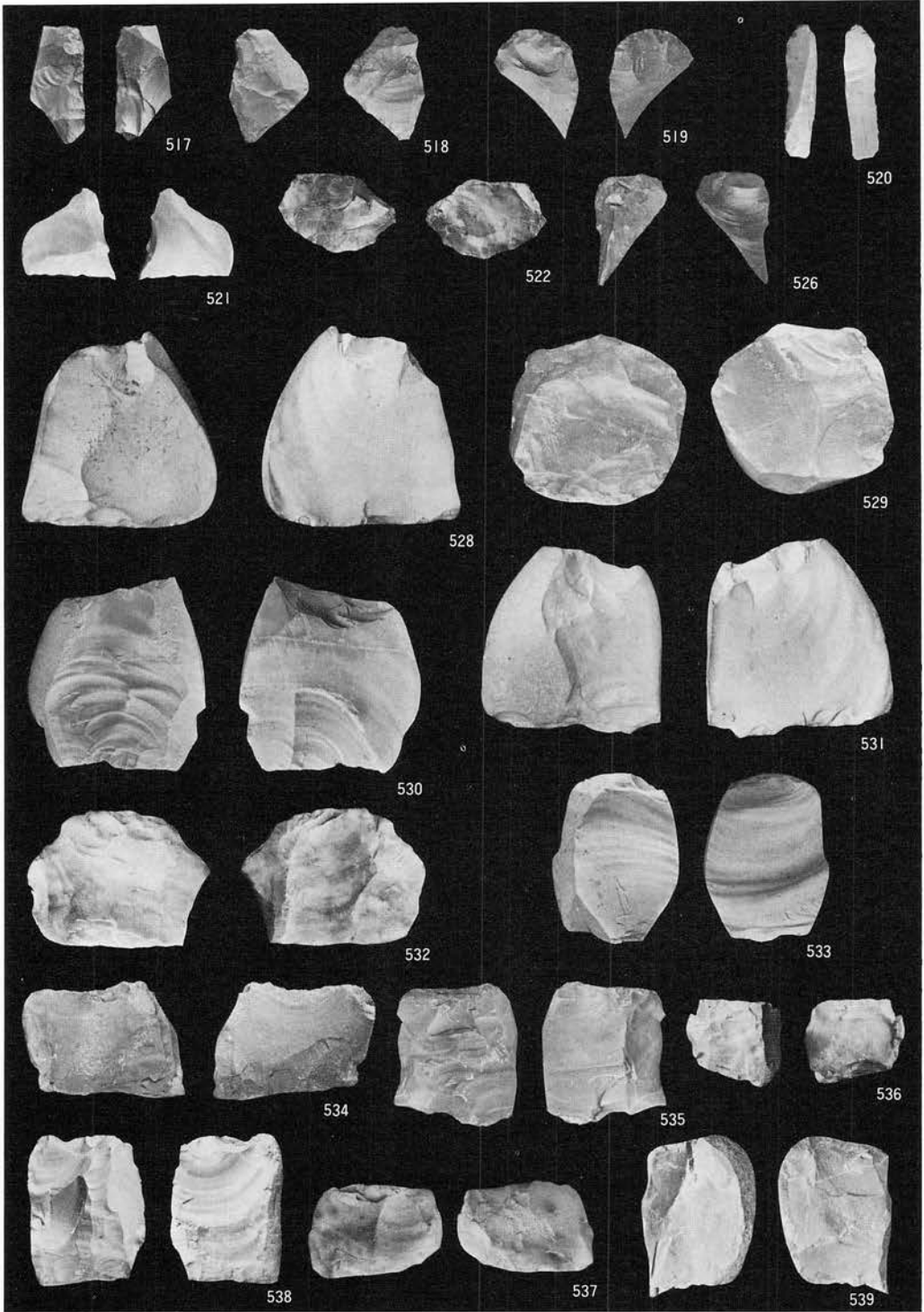
S : 3

图版72 遺構外出土剝片石器(4)



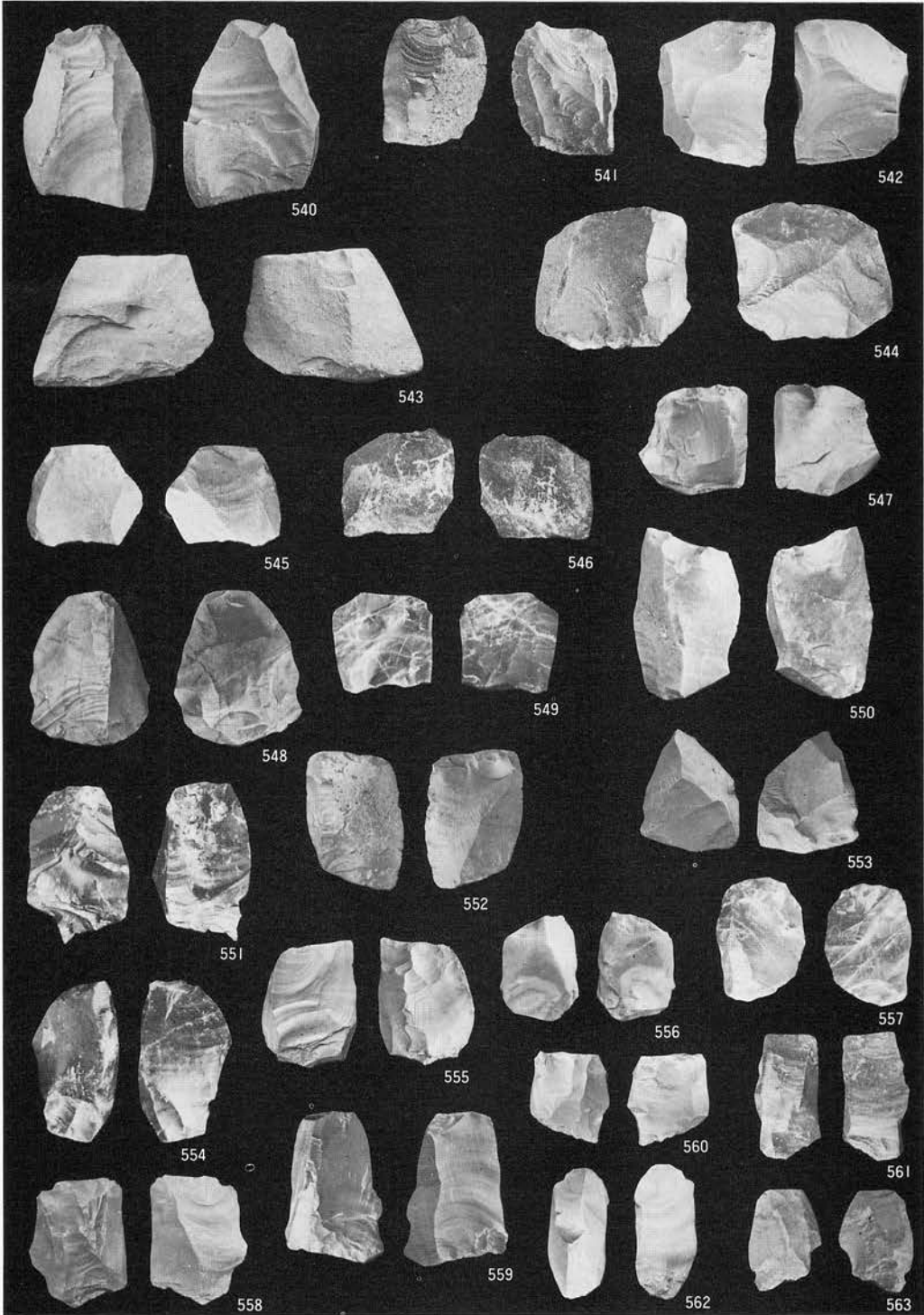
S : 3

图版73 遺構外出土剥片石器(5)



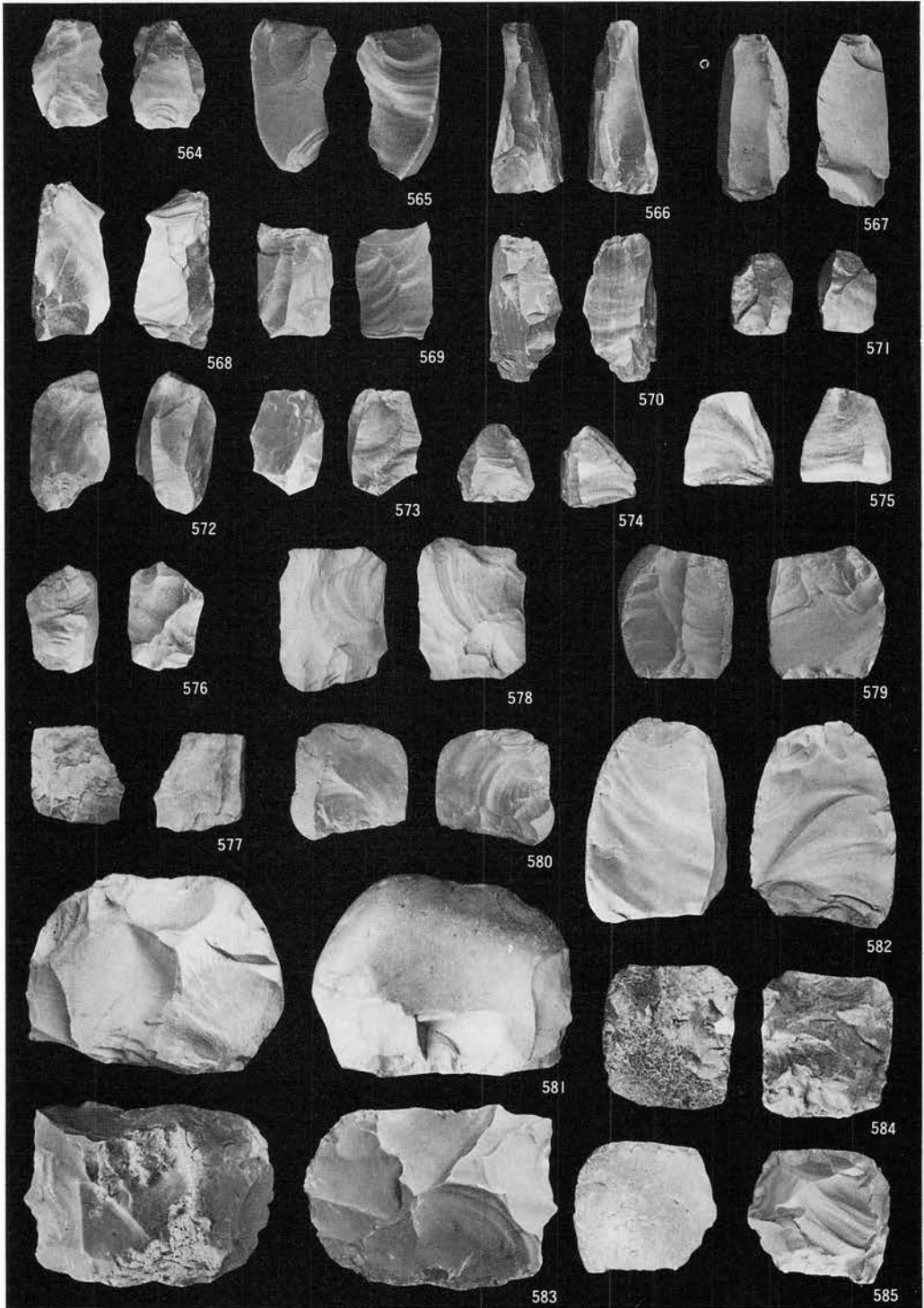
S : 3

图版74 遺構外出土剥片石器(6)



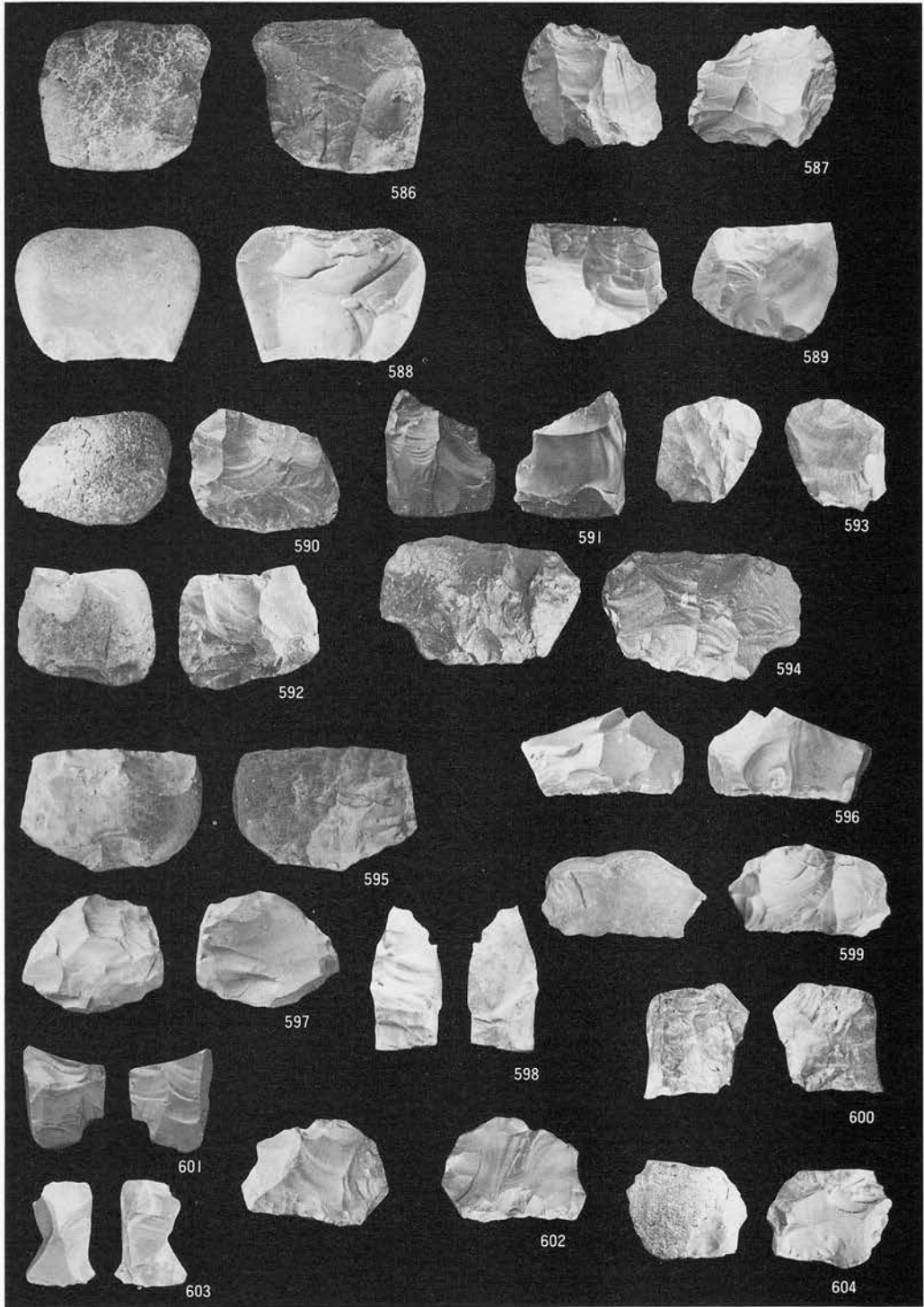
S : 2/3

图版75 遺構外出土剥片石器(7)



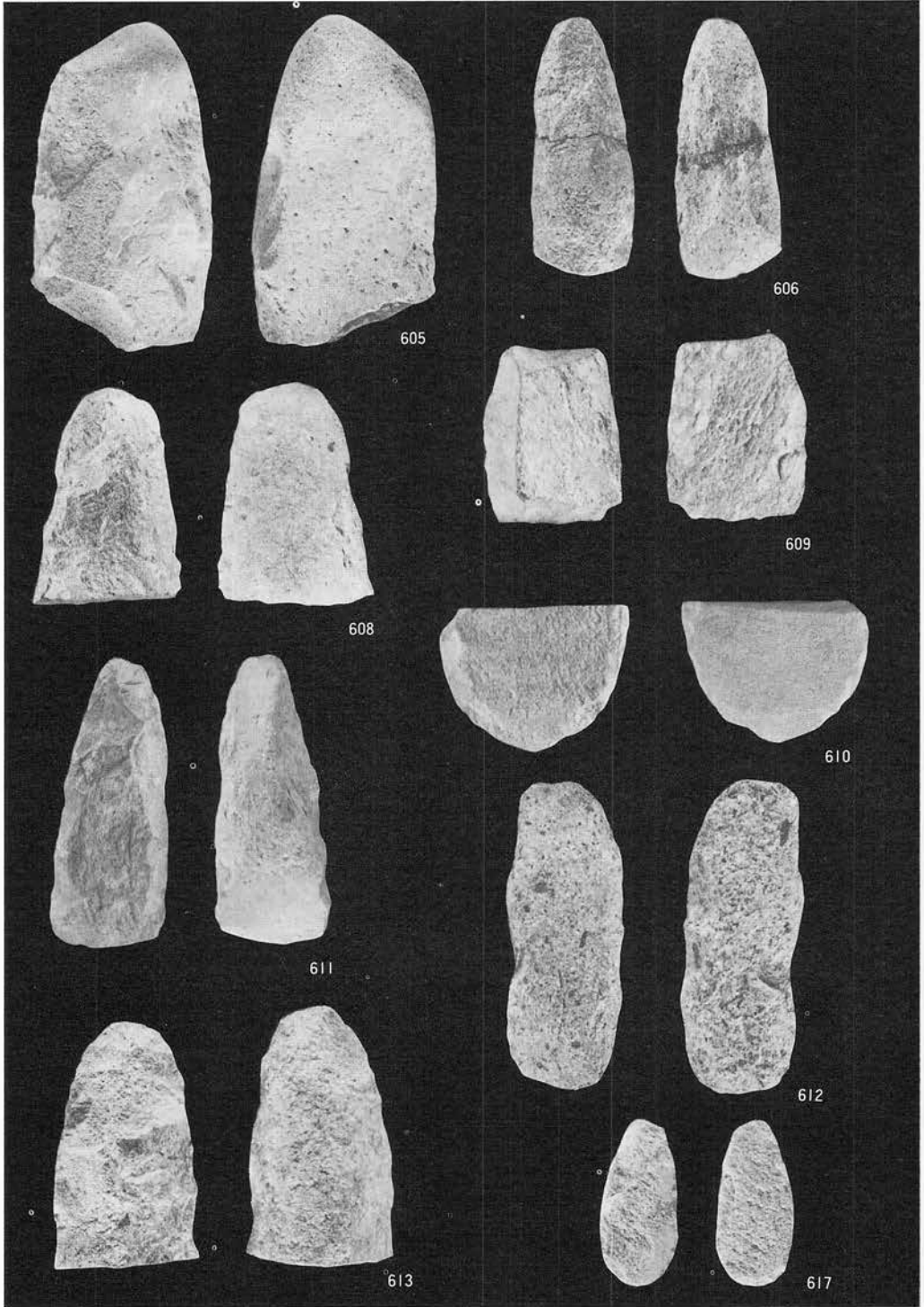
S : 2/3

图版76 · 遺構外出土剥片石器(8)



S :  $\frac{2}{3}$

图版77 遺構外出土剥片石器(9)



S : 1/3

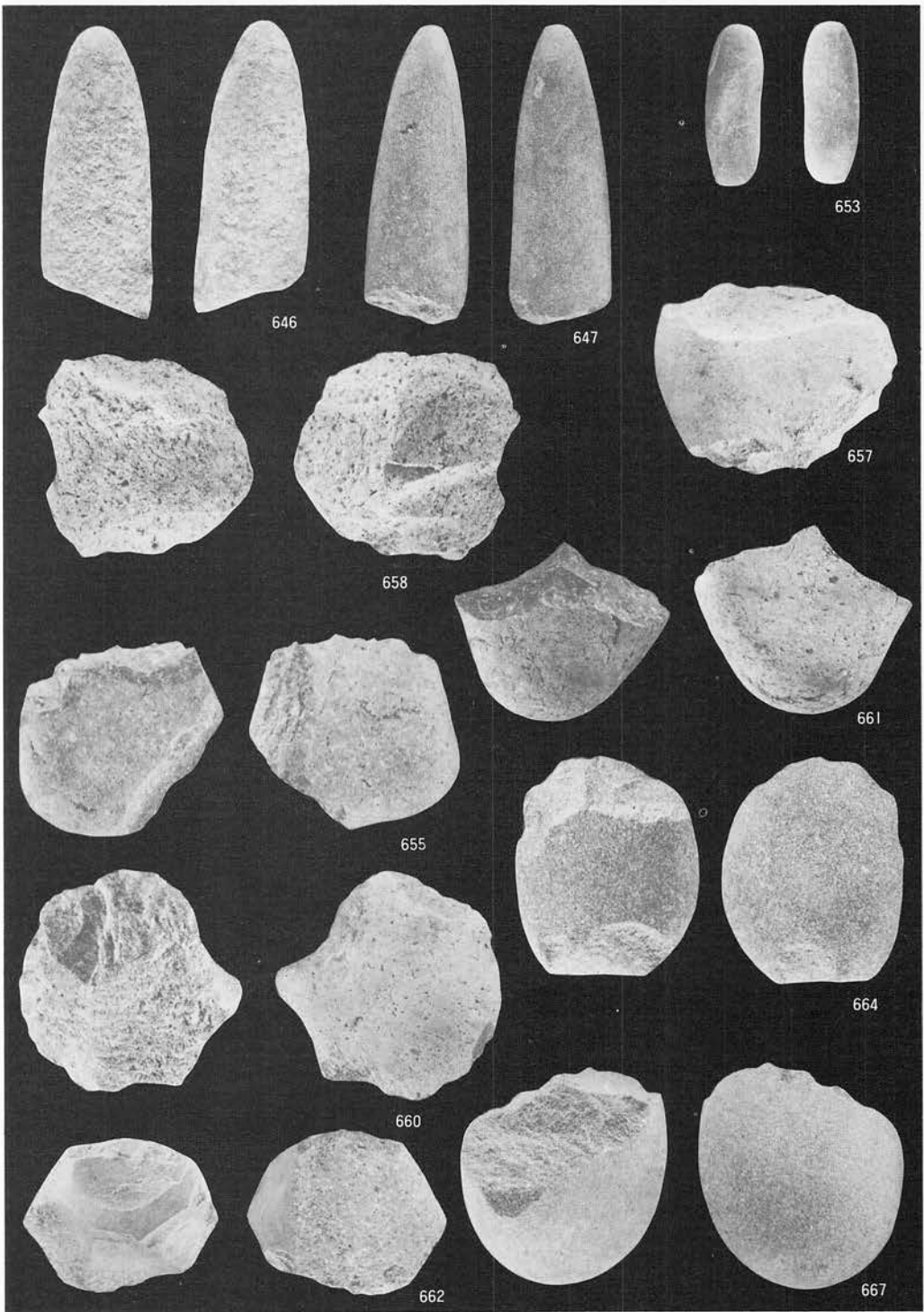
図版78 遺構外出土礫石器(2)



S : 1/3

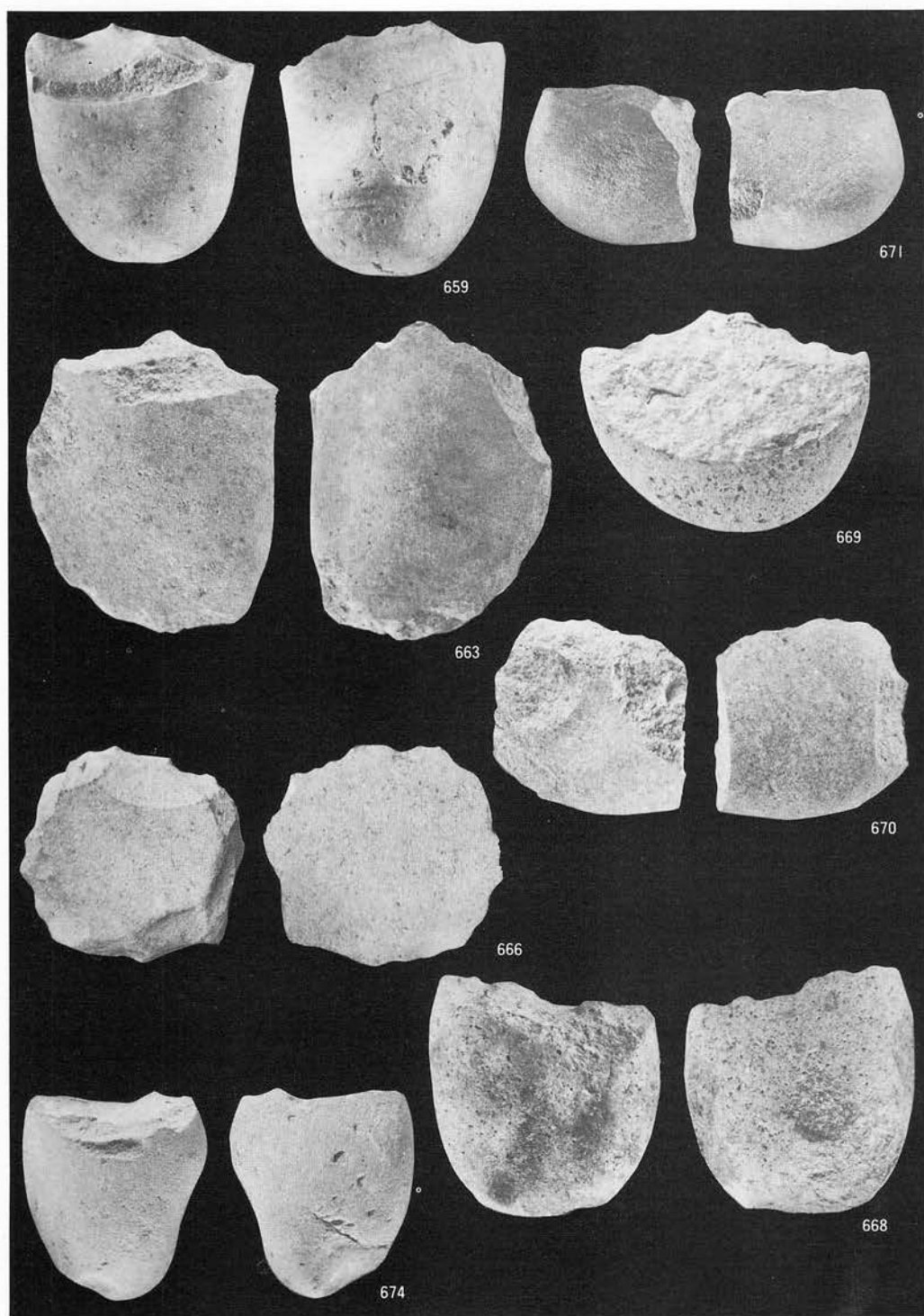
図版79 遺構外出土礫石器(3)





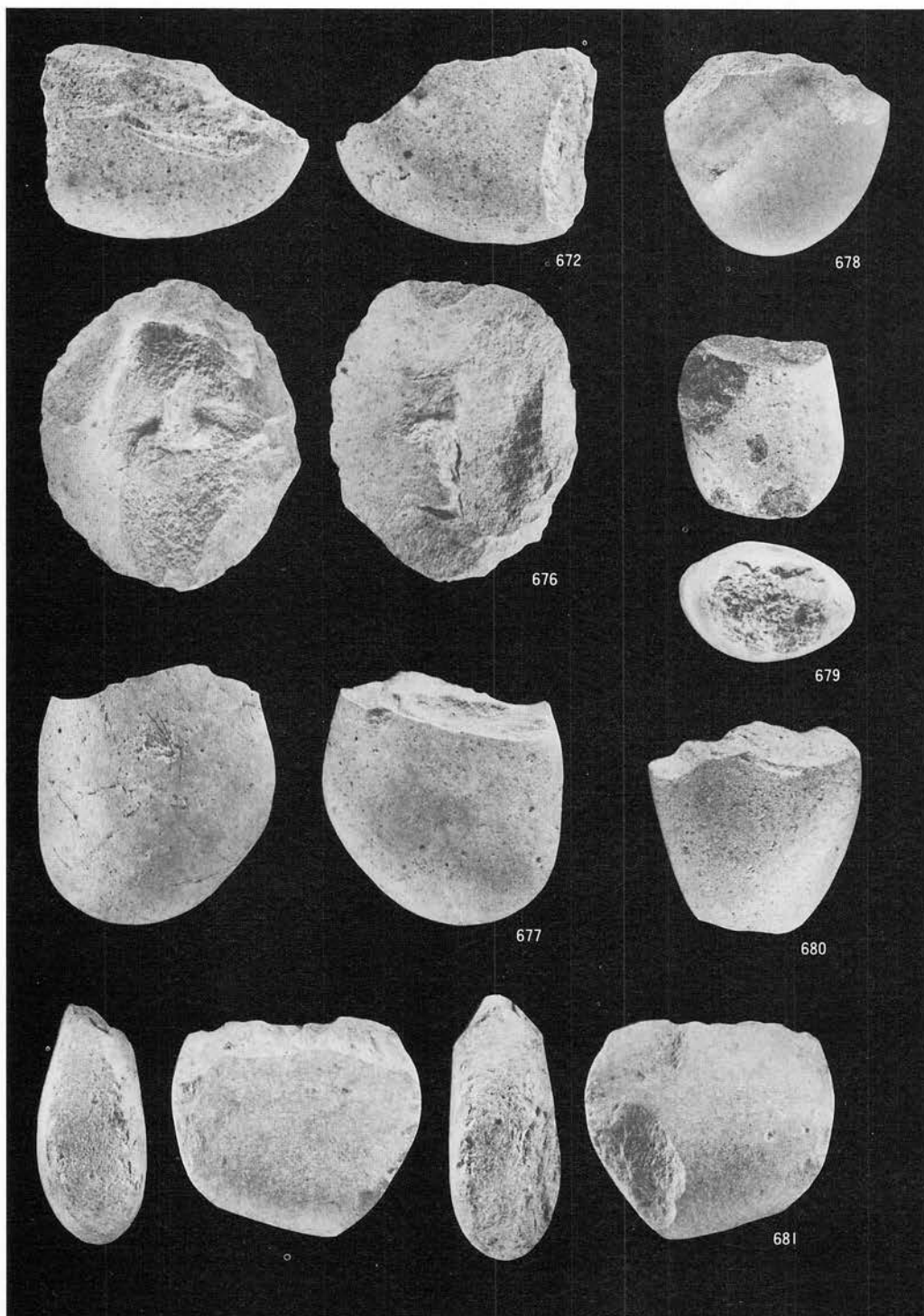
S : 1/3

図版80 遺構外出土礫石器(4)



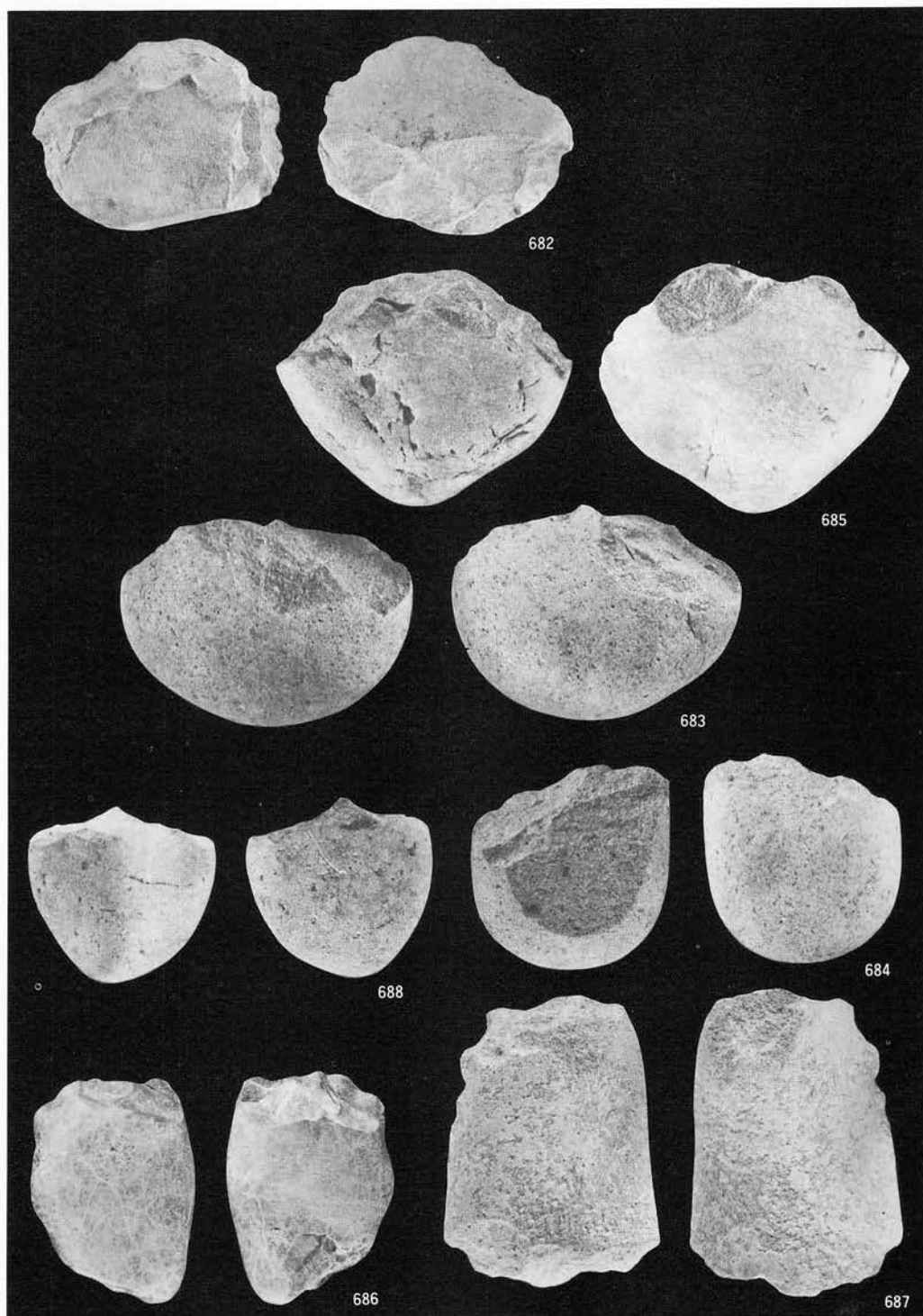
S :  $\frac{1}{3}$

図版81 遺構外出土礫石器(5)



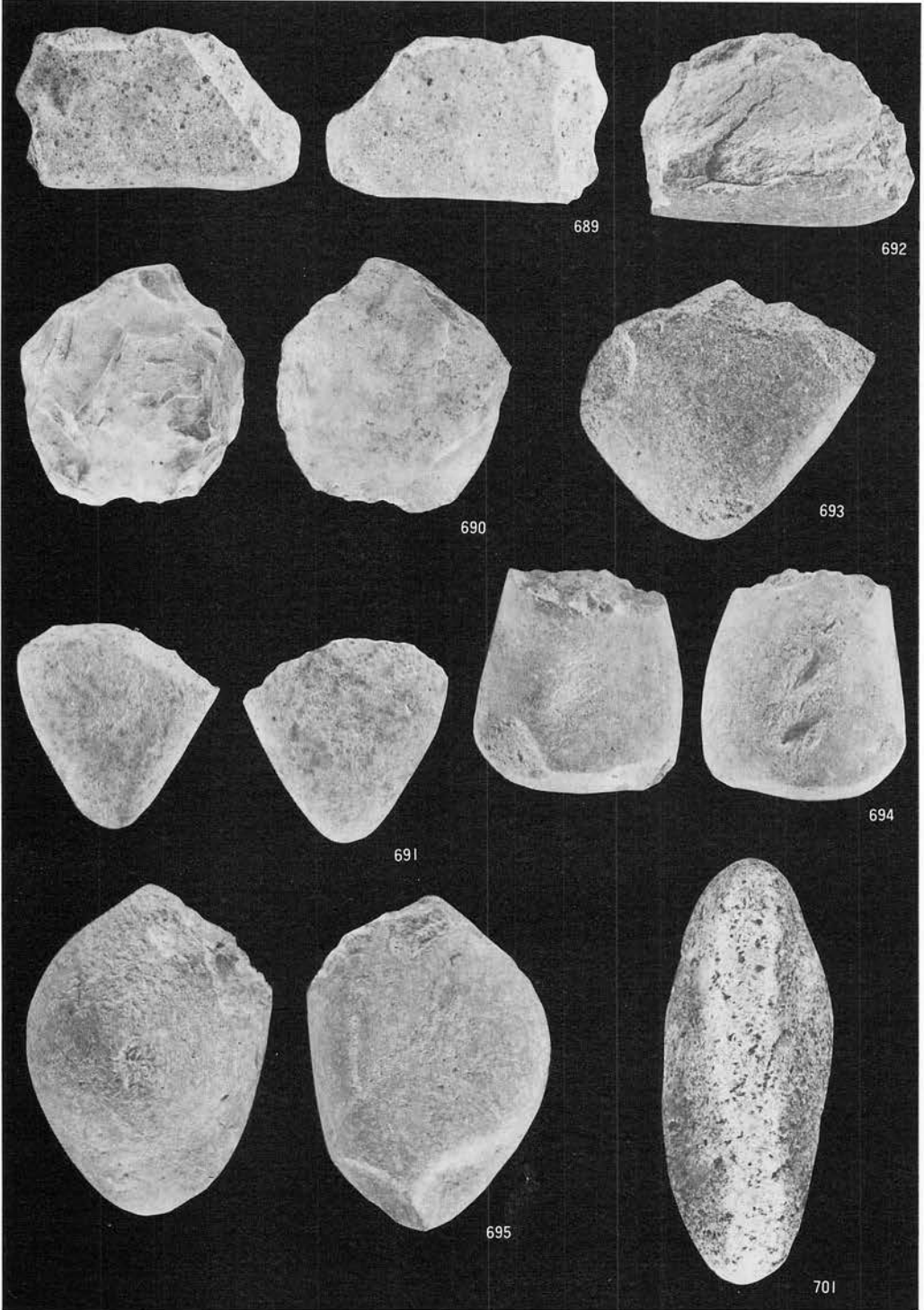
S : 1/3

図版82 遺構外出土礫石器(6)



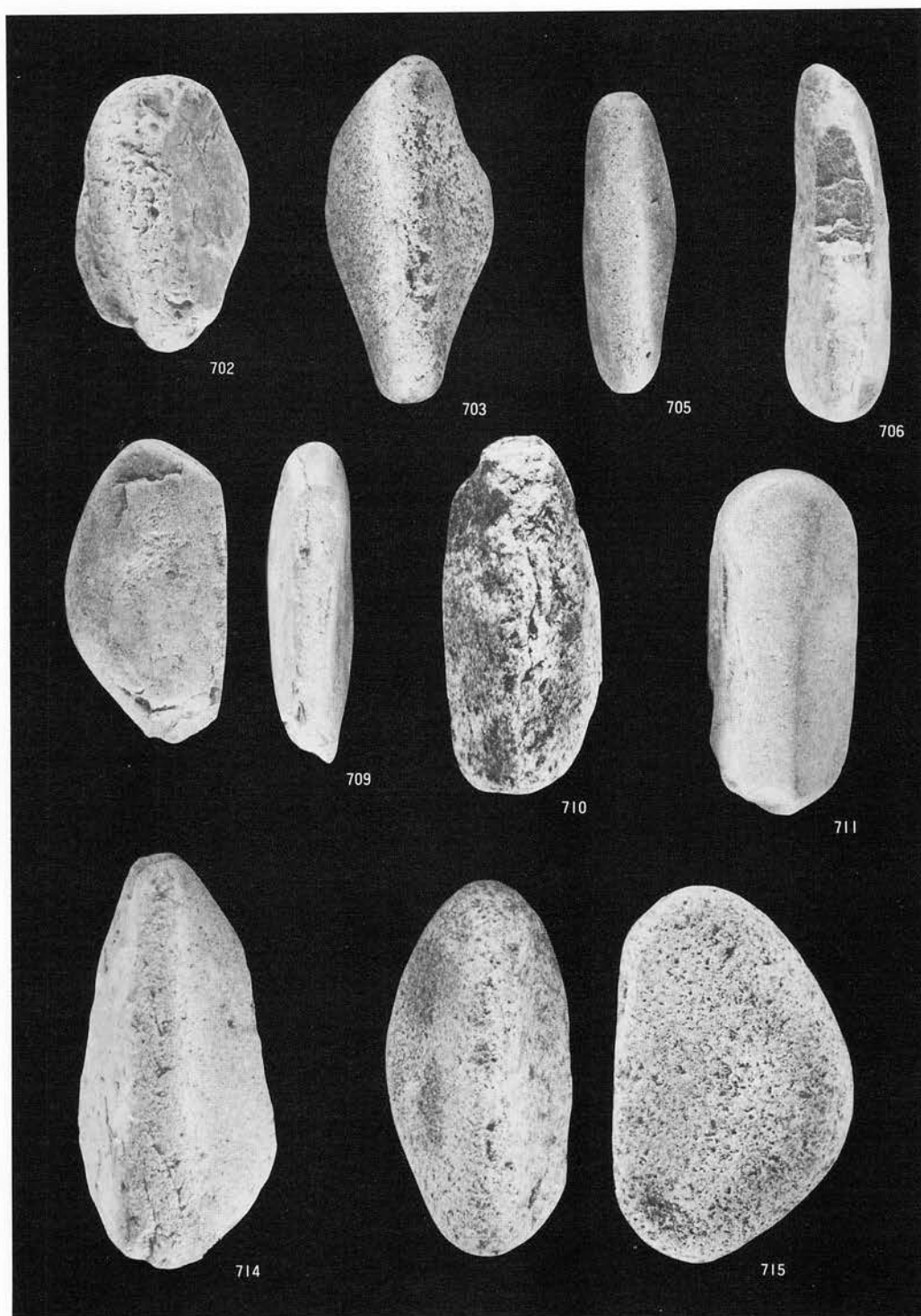
S : 1/3

图版83 遺構外出土礫石器(7)



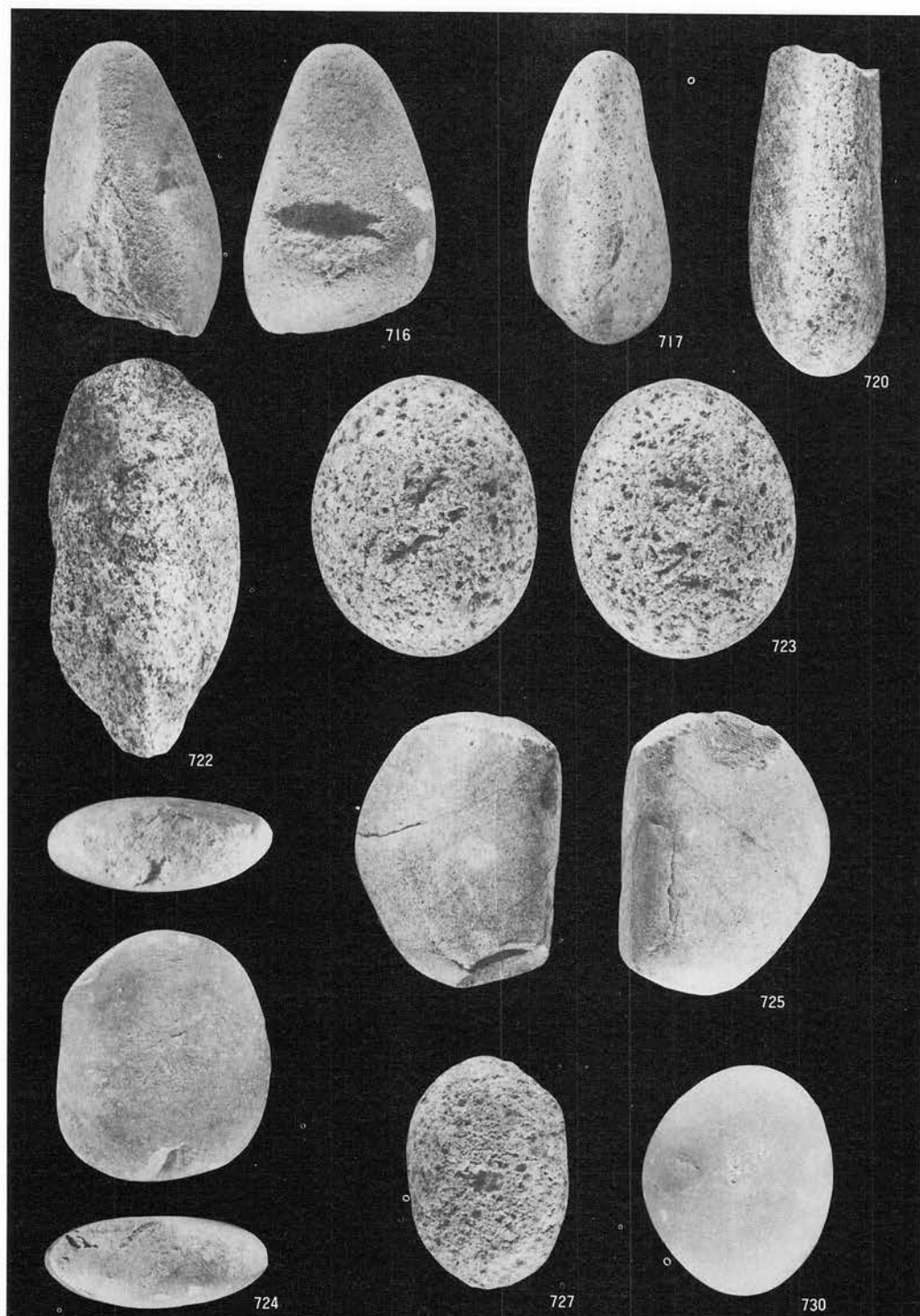
S : 1/3

図版84 遺構外出土礫石器(8)



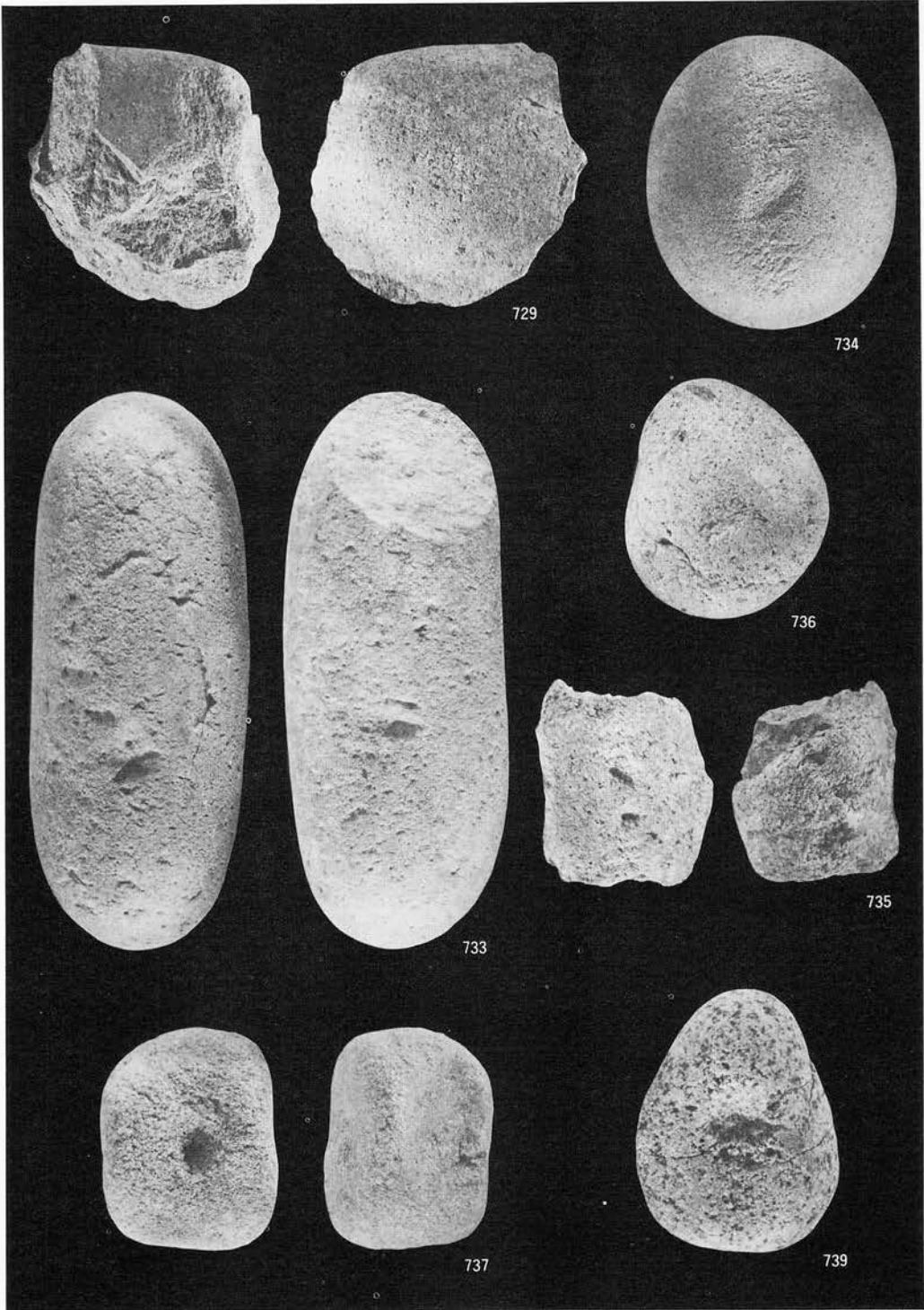
S :  $\frac{1}{3}$

図版85 遺構外出土礫石器(9)



S :  $\frac{1}{3}$

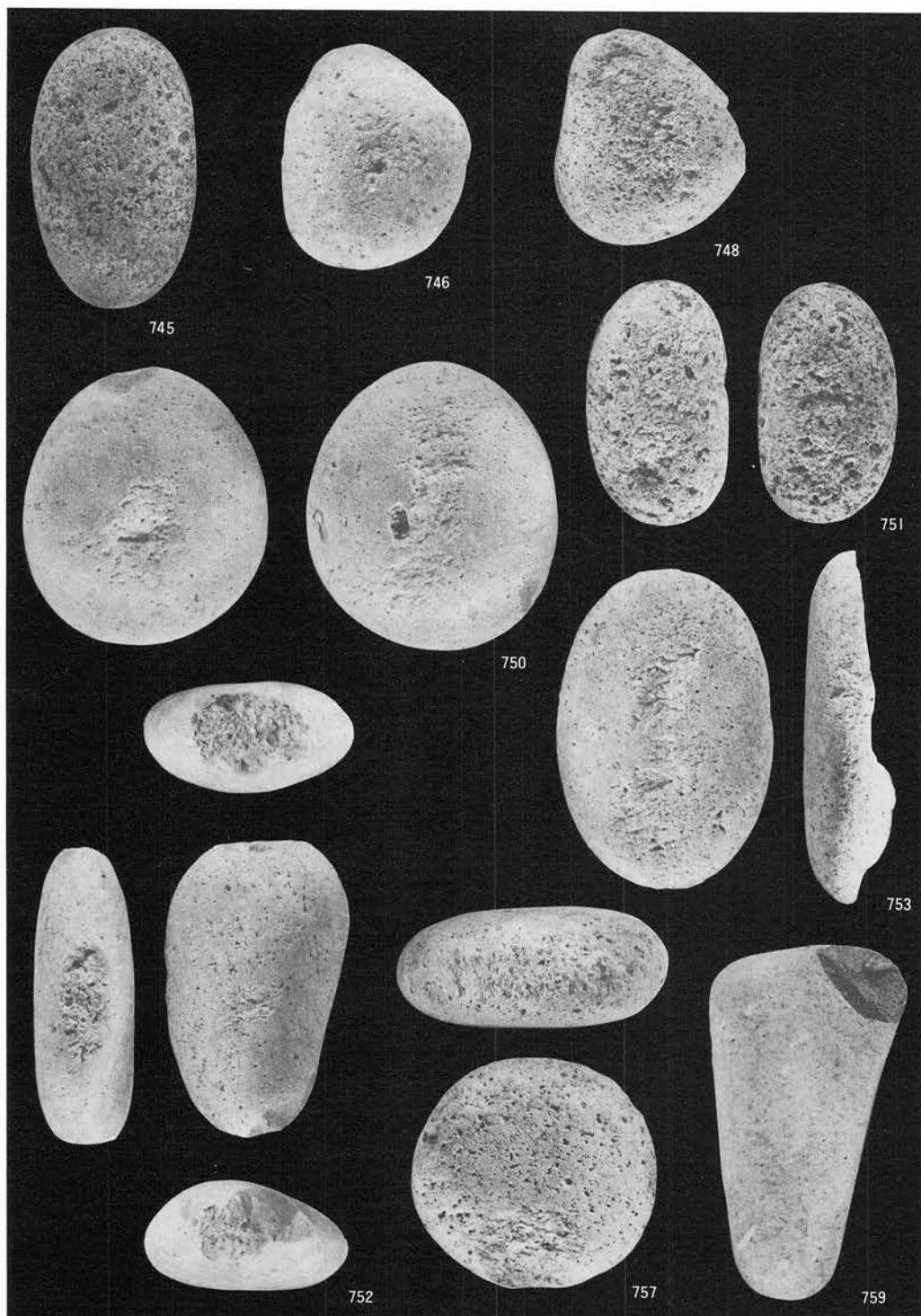
図版86 遺構外出土礫石器(10)



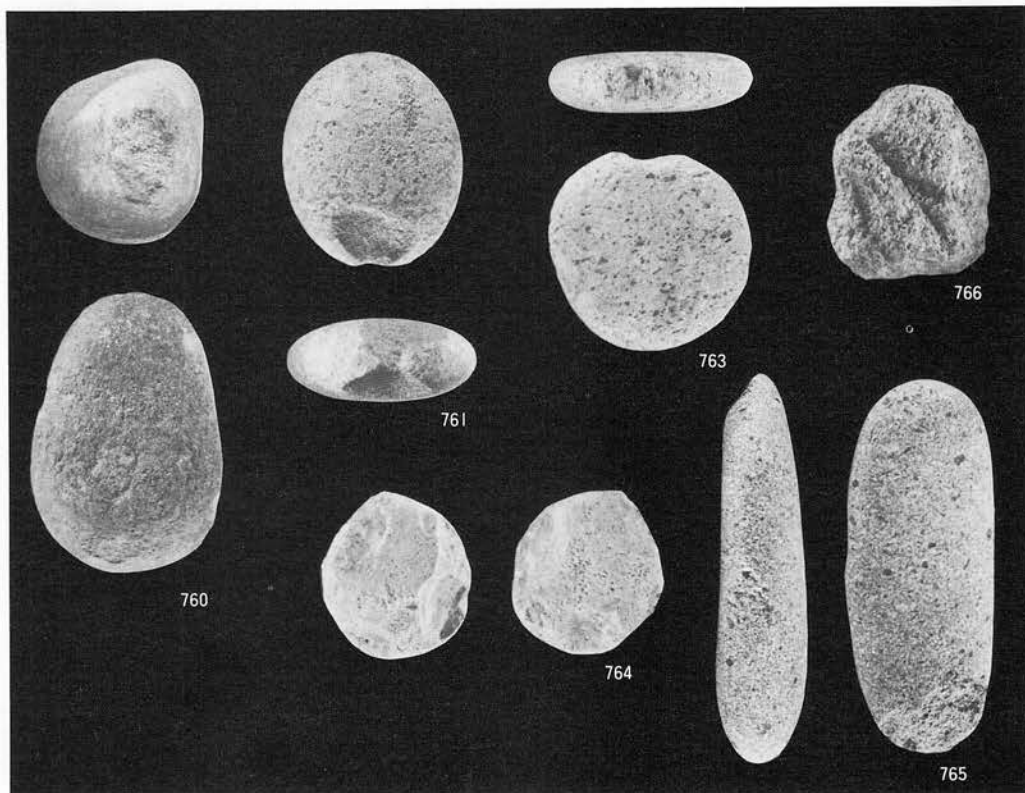
S : 1/3

図版87 遺構外出土礫石器(11)





図版88 遺構外出土礫石器(12)



図版89 遺構外出土礫石器(13)

S :  $\frac{1}{3}$

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二  
副 所 長 宮 英 一

## 〔管 理 課〕

課 長(兼) 宮 英 一  
課 長 補 佐 伊 藤 吉 郎  
主 事 立 花 多加志  
嘱 託 似 内 喜 兵  
運転技士兼技能員 佐 藤 春 男

## 〔調 査 課〕

課 長 昆 野 靖  
主任文化財専門調査員 小 田 野 哲 憲  
〃 三 浦 謙 一  
〃 工 藤 利 幸  
文化財専門調査員 佐 々 木 嘉 直  
〃 平 井 進  
〃 中 村 良 一  
〃 田 村 壮 一  
〃 光 井 文 行  
〃 玉 川 英 喜  
〃 佐 藤 嘉 広  
〃 中 川 重 紀  
〃 高 橋 義 介  
〃 酒 井 宗 孝

## 〔資 料 課〕

課 長 新 田 和 雄  
主任文化財専門調査員 高 橋 与 右 工 門  
文化財専門調査員 田 鎖 寿 夫

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

平 沢 I 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

昭和63年 3月20日 印刷

昭和63年 3月26日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社社陵印刷

〒020 盛岡市厨川四丁目2番6号

電話 (0196) 41-8000(代)

---

---

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1988